鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　15

平成10年度発掘調査報告
（第1分冊）

平成11年3月

鎌倉市教育委員会

北条時房・顕時邸跡

若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目５番８地点）

序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　　米　倉　雄二郎

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施につとめてまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成9年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として16ヶ所の調査成果を掲載しています。特に若宮大路周辺遺跡群では中世の建物遺構が良好な状態で発見されました。また台山遺跡では弥生時代から奈良・平安時代にいたる集落遺跡が発見され、中世以前の鎌倉に住んだ人々の暮らしの一端が明らかになるなど大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

例　　言

1　本書は平成10年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。

2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

（第１分冊）

序　文 …… Ⅲ
例　言 …… Ⅳ
平成10年度調査の概観 …… Ⅸ

1　若宮大路周辺遺跡群（No.242）御成町123番５外地点
第１章　環境と立地 …… 5
第１節　地理的・歴史的環境 …… 5
第２節　調査地点の立地 …… 9
第２章　調査の概要 …… 11
第１節　調査の経緯と経過 …… 11
第２節　調査結果の概要 …… 11
第３節　国土座標上の位置とグリッド配置 …… 12
第４節　基本層序 …… 13
第３章　遺構と遺物 …… 14
第１節　中世１面 …… 14
第２節　中世２面 …… 23
第４章　調査成果 …… 34
第１節　中世３面以下の遺構 …… 34
第２節　自然科学分析 …… 34
第３節　まとめに代えて …… 45
第４節　出土遺物一覧 …… 46
2　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目273番イ地点
第１章　遺跡の位置と概観 …… 71
第２章　調査の経過と堆積土層 …… 75
第１節　調査の経過 …… 75
第２節　堆積土層 …… 76
第３章　検出された遺構と遺物 …… 78
第１節　第１面 …… 78
第２節　第２面 …… 86
第２節　第３面 …… 112
第４章　まとめ …… 150
3　宝蓮寺跡（No.374）佐助二丁目897番11地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 171
第２章　調査の経過と概要 …… 174

第１節　調査の経過 …… 174
第２節　遺跡の層序と調査成果の概要 …… 174
第３章　検出した遺構と出土遺物 …… 175
第１節　第３面の遺構と遺物 …… 176
第２節　第２面の遺構と遺物 …… 176
第３節　第１面の遺構と遺物 …… 184
第４章　調査成果とまとめ …… 198
第１節　遺構の変遷 …… 198
第２節　出土遺物の概要 …… 198
第３節　まとめ …… 199
附　編　宝蓮寺跡の花粉化石 …… 200
4　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目５番８地点
第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 217
第２章　調査の経過と層序 …… 218
第３章　検出した遺構と遺物 …… 220
第１節　１面・２面・３面の遺構 …… 220
第２節　１面・２面・３面の遺物 …… 224
第３節　４面の遺構 …… 243
第４章　まとめ …… 251
附　編　土壌分析・樹種同定 …… 254
5　積善遺跡（No.440）十二所字積善952番８地点
第１章　遺跡位置と歴史的環境 …… 297
第２章　調査の経過 …… 298
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 300
第１節　Ⅰ面 …… 300
第２節　Ⅱ面 …… 302
第３節　Ⅲ面 …… 306
第４節　Ⅳ面 …… 308
第４章　まとめ …… 318

（第２分冊）

6　浄妙寺旧境内遺跡（No.408）浄明寺三丁目115番２地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
第２章　調査の経緯 …… 8
第３章　検出した遺構と遺物 …… 9
第１節　遺跡の基本層序 …… 9
第２節　第４面 …… 10
第３節　第３面 …… 10
第４節　第２面 …… 19

第５節　第１面 …… 23
第４章　まとめ …… 31
7　長勝寺遺跡（No.313）材木座二丁目2168番３地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 44
第２章　調査の経緯 …… 47
第１節　調査に至る経緯 …… 47
第２節　調査経過 …… 47
第３節　堆積土層 …… 49
第３章　発見した遺構と遺物 …… 51
第１節　Ⅰ面 …… 51
第２節　Ⅱ面 …… 52
第３節　Ⅲ面 …… 55
第４章　まとめ …… 57
8　大倉幕府北遺跡（No.193）西御門二丁目803番17地点
第１章　遺跡の位置と環境 …… 69
第２章　調査の経緯と方法 …… 70
第３章　調査の概要 …… 71
第４章　まとめ …… 71
9　政所跡（No.247）雪ノ下三丁目970番２外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 82
第２章　調査の経緯 …… 84
第３章　発見された遺構と遺物 …… 86
第１節　１面発見の遺構と遺物 …… 86
第２節　２面発見の遺構と遺物 …… 87
第３節　２面下発見の遺構と遺物 …… 87
第４節　トレンチ …… 90
第４章　まとめ …… 91
10　台山遺跡（No.29）台字西ノ台1733番３外
第１章　遺跡の諸環境 …… 106
第１節　調査地点の地理的環境 …… 106
第２節　過去の調査事例 …… 107
第２章　調査の概要 …… 109
第１節　調査の方法 …… 109
第２節　基本層序 …… 111
第３章　検出された遺構・遺物 …… 112
第１節　竪穴住居址 …… 112
第２節　土坑 …… 118
第４章　まとめ …… 120

11　玉縄城跡（No.63）城廻字清水小路673番10地点
第１章　玉縄城と調査地点 …… 132
第２章　調査について …… 134
第３章　検出遺構と堆積土層 …… 135
第４章　まとめ …… 136
12　長谷小路周辺遺跡（No.236）長谷一丁目33番３外地点
第１章　遺跡概要 …… 148
Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 148
Ⅱ　調査の経過 …… 150
Ⅲ　堆積土層 …… 151
第２章　発見された遺構と遺物 …… 153
Ⅰ　１面の遺構と遺物 …… 153
第３章　まとめ …… 162
法量表 …… 165
13　大倉幕府跡（No.253）雪ノ下三丁目651番８外地点
第１章　環境と立地 …… 178
第２章　調査の概要 …… 179
第３章　検出した遺構 …… 180
第４章　出土した遺物 …… 182
第５章　まとめ …… 186
14　倉久保遺跡（No.226）山崎字富士塚868番82地点
第１章　調査の経緯と経過 …… 199
第２章　遺跡の位置と環境 …… 200
第３章　発見された遺構と遺物 …… 202
第４章　まとめ …… 204
15　横小路周辺遺跡（No.259）二階堂字横小路93番11の一部地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 215
第２章　調査の経緯と経過 …… 219
第３章　発見された遺構と遺物 …… 220
第１節　Ⅰ区 …… 220
第２節　Ⅱ区 …… 250
第４章　まとめ …… 253
16　瑞泉寺周辺遺跡（No.338）二階堂字紅葉ヶ谷653番３地点
第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 272
第２章　調査の経過と層序 …… 277
第３章　検出した遺構と遺物 …… 277
第１節　遺構 …… 277
第２節　遺物 …… 278
第４章　まとめ …… 282

平成10年度調査の概観

平成10年度の緊急調査実施件数は前年度からの継続２件を含め12件であり、調査対象面積では1,241.69m²であった。これを前年度の18件、1,189.31m²と比較すると件数は減少しているものの、面積が若干ながら増加している。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設に関するものが８件、店舗及び診療所併用住宅の建設に関するものが４件となっている。４件の店舗及び診療所併用住宅はいずれも自己用の店舗及び診療所であり、いわゆる個人・零細事業に該当するものである。史上最悪と言われる景気の低迷が続くなかで、大規模事業の展開が大幅に減少していることが、発掘調査の調査原因からも顕著に読みとれるところである。こうした社会情勢のもとで実施される住宅等の建設にあっては、本年度も耐震性を考慮した鋼管杭打設工法等を採るものが７件みられた。少なくとも本市においては、ここ数年こうした杭打ち工法等が確実に発掘調査実施の主体的要因となった感があり、こうした傾向は今後もさらに増加していくものと予測される。

本年度は若宮大路周辺遺跡群（地点４）において若宮大路にほぼ平行する方向性を有する木組みの溝跡が良好な状況で発見されたことや勝長寿院跡から釈迦堂跡にいたる地域に位置する田楽辻子周辺遺跡（地点６）で寺院あるいは武家屋敷の庭園遺構の一部ではないかと推定される玉砂利敷きの遺構が確認されたことが特記事項としてあげられる。

以下、各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

1　西方寺跡（No.219）

中世都市鎌倉を取り巻く、いわゆる鎌倉七口と呼ばれる切通しの一つ、極楽寺坂の途中、東側に位置する。紫陽花の花でよく知られる成就院とは斜め向かいの位置関係になる。また敷地の東側には鎌倉市指定文化財の西方寺址石塔群が所在している。平成９年２月に現況道路面から４m程高い地盤を切り下げて車庫及び擁壁を建設する工事について事前相談があり、試掘調査を実施したところ、地表下50cm以下に中世遺物包含層及び遺構面が確認され、現計画どおりの建設工事による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成10年３月９日から５月15日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、現在の極楽寺坂よりもおよそ１m程高い位置で建物遺構の一部が確認されたことから、当初の極楽寺坂切通しが中世以降のある時期に大きく開削されて今日の姿になったことが窺われるところとなった。

2　海蔵寺旧境内遺跡（No.299）

史跡仮粧坂の北側に隣接する地点に位置する。平成９年２月に個人専用住宅建築の事前相談があり、建築計画のなかに地下室の建築が含まれるものであったため試掘調査を実施したところ、地表下260cm以下に埋蔵文化財の存在が確認された。このため設計変更を含め事業者と協議を行ったが、限られた敷地内に建築する住宅であり、住宅内部の空間利用にあってもできる限り間取りを多く確

保したいという事業主の意向が強く、現計画どおりの建築工事による遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため文化財保護法の手続きを行い発掘調査の実施を前提とした協議を数回にわたって行った。その後、建築主側に若干の計画変更等が生じ建築確認申請の再申請がなされ、また発掘調査実施に際し必要となる土留め工事の工法検討等に多くの時間を要し、平成10年３月12日から５月２日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査地一帯の谷戸が中世以降今日までの間に大きく埋め立てられている様子がまず明らかになった。第１面とされる14世紀中頃から後半にかけての時期の遺構面では砂質凝灰岩の切石列や柱穴等の遺構が確認され、また第２面とされる13世紀後半から14世紀前半にかけての時期の遺構面では木材が比較的良好に遺存する板壁掘立柱建物跡や多量のかわらけ、木製品、漆製品等が発見されており、切通し近くの谷戸内における生活の様子が明らかになった。

3　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

鎌倉駅の東口、若宮大路からＪＲ鎌倉駅東口の駅前広場に連絡する道路の西側に位置する。平成10年２月に鉄骨造４階建の自己用店舗併用住宅建設の事前相談がなされた。計画地西側における発掘調査や神奈川県による若宮大路修景計画に伴う埋蔵文化財調査の成果から勘案し、工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法に基づく手続きを経て、調査の実施方法等についての協議が整った後、平成10年５月11日から６月２日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、狭小な調査区にもかかわらず土壙や溝跡等が発見され、二ノ鳥居以南における若宮大路西側の状況を明らかにする成果が得られるところとなった。

4　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

若宮大路の西側、商店街として知られる小町通りの中程から西側に抜ける四ツ角の西側に所在する。平成10年２月に個人専用住宅の事前相談があり、建物の基礎が杭構造とする計画であり、事前に実施した試掘調査の結果から工事の実施により埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、平成10年６月８日から９月16日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、おおむね14世紀代を中心とする遺構群が検出され、特に若宮大路に並行する数条の溝跡や数棟の掘立柱建物跡は当時の若宮大路西側一帯の状況を明らかするものとなった。溝跡では護岸施設となる木組みの構造材が良好に遺存している状況が確認されている。調査は住宅の基礎工事が及ぶ現地表下300cmまで実施したが、遺跡はさらに下層にも存在していることが判明した。また出土遺物では漆器の椀・皿類をはじめとする多量の木製品が注目された。

5　北条時房・顕時邸跡（No.278）

若宮大路の西側に面した商店街の一角に位置する。平成10年１月に自己用店舗併用住宅建設の事前相談があり、近隣における発掘調査の成果から埋蔵文化財への影響が予想された。当該地の敷地

は西側が高く、若宮大路に面する東側が低くなった緩やかな斜面地となっている。事業者の埋蔵文化財に対する配慮により予定建築物の基礎は比較的浅いものとして設計されたが、基礎工事によって敷地全体が均一に掘削されるため、特に敷地の西側部分に限っては工事の実施による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成10年５月11日から６月２日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区が狭小であったこともあり、遺跡の全貌を明らかにするには至らなかったが具体的な遺構としては土壙や柱穴等が確認された。後述する本遺跡の南隣で実施された調査の成果や近隣における過去の調査成果を総体的に検討しながら北条時房・顕時邸跡の全体的な様相を明らかにする際に必要な遺跡の情報が本地点の調査によって、また新たに蓄積された意義は大きいと言えよう。

6　田楽辻子周辺遺跡（No.33）

市域の東部、六浦道の南側を流れる滑川の南側、勝長寿院跡から釈迦堂跡へ至る通称、田楽辻子といわれる道筋の南側に位置する。平成10年３月に個人専用住宅の建築を含む宅地造成の事前相談があり、特に敷地内中央に道路の築造が計画されていたため、平成元年に発掘調査の実施された東側隣接の調査成果から工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、発掘調査の実施方法等の協議が整った後、平成10年７月30日から10月12日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から15世紀に至る時期の合計４面にわたる中世遺構群が確認された。調査区北側で発見された東西方向の道路遺構は現在の田楽辻子の道路にほぼ平行するものであるが、13世紀代から14世紀代、そして15世紀代と時代がくだるにつれてその軸線を徐々に南の方向に変化させていることが明らかになった。この他、調査区内の８ヶ所で発見された玉砂利敷きの遺構は通常、寺院や屋敷等の庭園に関するものと想定されるやや特殊な遺構であるが、こうした遺構が多く確認されたことはこの遺跡の性格を明らかにするうえで重要な手がかりになると考えられよう。

7　北条時房・顕時邸跡（No.278）

若宮大路の西側に面した商店街の一角に位置する。上記５の調査地点の南隣にあたる。平成９年12月に自己用店舗併用住宅に建設の事前相談があり、建築物の基礎を杭構造とする計画であったため近隣における発掘調査の成果から工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため文化財保護法に基づく手続きを行い、調査の実施に向けた協議を重ね、当初、平成10年３月から調査を開始する予定であったが、事業者の諸般の事情により着手が遅れ、同年８月３日から10月９日まで発掘調査を実施した。

調査区は東西に長く南北に幅の狭い設定となったが、調査区のほぼ中央に近世の井戸跡が発見され、この井戸跡に分断されるようなかたちで13世紀初頭から14世紀後半にかけての中世遺構が確認された。これらの遺構はほとんどが掘立柱建物を構成する多数の柱穴で、短期間のあいだに頻繁な建て替えが行われていた様子が窺われる。また調査区の東側では近隣の発掘調査実施地点と同様に若宮大路の側溝跡が確認されている。

8　材木座町屋遺跡（No.261）

市内中心部から若宮大路と滑川を越えた東側に位置し、調査地の北側すぐ近くには鶴岡八幡宮の前身とされる元八幡がある。平成10年７月に個人専用住宅（２世帯住宅）建設の事前相談があり、基礎工事の工法が杭打ちによる設計であるため、試掘調査を実施したところ、現地表下60cm以下に中世の遺構面が確認された。このため、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議を重ね、文化財保護法の手続きを行い、平成10年９月21日から10月26日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査対象地が狭小であったこともあり、数基の土壙や礎板を有する柱穴、竪穴状遺構の一部等を発見するにとどまったが、13世紀後半から近世にいたるおおむね３時期に及ぶ遺構が確認された。調査の最終段階では現地表下220cmで黒色粘質土によって形成される地山を確認するにいたったが中世初期にまで遡る可能性のある遺構は発見できなかった。

9　大慶寺旧境内遺跡（No.361）

寺分一丁目に所在する臨済宗寺院大慶寺の北東側に位置する。平成10年６月に個人専用住宅建設の事前相談があり、敷地が斜面地の縁辺部にあたるため、住宅の基礎を杭構造とする計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下30cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、平成10年10月８日から11月26日まで発掘調査を実施した。

調査地が近世段階において大慶寺の境内地であったことから、当初は寺院に関連する遺構の発見をも念頭におきながら調査を進めたが、近世の遺構としては数条の溝跡を確認するにとどまり、出土遺物を見る限り中近世の土器・陶磁器類よりもむしろ弥生時代から古墳時代あるいは平安時代の時期に属する土器類が多く出土する状況となった。それぞれの土器類はほとんどが明確な遺構に伴うものではなく、当該期の遺構が今回の調査によって明らかにできなかったことが惜しまれるが、今回の調査が将来的に寺分一帯の地域の歴史的様相を明らかにする端緒となることに期待が寄せられる調査であったといえよう。

10　横小路周辺遺跡（No.259）

市域の東側、二階堂字荏柄に所在し荏柄天神社の参道が県道金沢鎌倉線に行き着く地点のすぐ東側の場所に位置する。当該地において平成10年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、敷地の南側部分を切り下げて車庫を築造し、また住宅の基礎を杭構造とする計画が事業者から示された。このため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成10年11月２日から発掘調査に着手し途中、既存建物の解体工事に伴う中断を含めて、平成11年１月23日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀代に属するものと見られる掘立柱建物跡、井戸跡そして古代末から中世初頭に掘られた東西方向の溝跡等の遺構が発見された。この溝は調査地点の少し西側から北東方向に伸

びる二階堂大路とその軸線をほぼ同一にする溝であった。出土遺物では青磁の天目茶碗や鳥居と見られる絵を線刻で描いた滑石製温石など注目すべき遺物もみられる。

11　由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）

市域の南部、若宮大路の一ノ鳥居からさらに海岸方向に向かったところで若宮大路の西側に位置する。当該地一帯は砂丘地帯であり、調査地点付近を境に若宮大路のある東側は滑川に向かって砂丘が大きく傾斜している。調査地の西側は現在でもこの砂丘が和田塚あたりに向かって高まる状況をみせている。

平成10年10月に自己用診療所併用住宅建設について事前相談があり、住宅の基礎をいわゆる深基礎の構造とする計画が事業者から示されため、試掘調査を実施したところ、現地表下60cm以下に遺構面が確認された。このため事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成10年11月26日から平成10年12月11日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、当該地は近世の風成砂層が厚く堆積していたものの、中世においては北から南に向かって約30cm程の高低差をもつ地形であったことが明らかになるとともに、若干の遺構・遺物を発見することができた。

12　名越ヶ谷遺跡（No.231）

市域の南東部、日蓮宗寺院妙法寺の西側に位置する。いわゆる松葉ヶ谷といわれる当該地は

平成10年９月に個人専用住宅建設について事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画が事業者から示されため、試掘調査を実施したところ、現地表下70cm以下に遺構面が確認された。

こうした試掘調査の結果から事業者と埋蔵文化財の保護措置について協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成10年12月10日から発掘調査を実施した。

平成10年度発掘調査地点一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査原因	種別	面　積	調査期間
1 ※	西方寺跡 (No.219)	極楽寺二丁目18番外	個人専用住宅 (車庫造成)	社　寺	118.48m²	H10.3.9 ∫ H10.5.15
2 ※	海蔵寺旧境内遺跡 (No.299)	扇ガ谷四丁目632番2外	個人専用住宅 (地下室)	社　寺	67.28m²	H10.3.12 ∫ H10.5.2
3	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目81番18	自己用店舗 併用住宅	都　市	39.14m²	H10.5.11 ∫ H10.6.2
4	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目198番6 の一部	個人専用住宅	都　市	119.68m²	H10.6.8 ∫ H10.9.16
5	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目271番3	自己用店舗 併用住宅	都　市	25.00m²	H10.6.18 ∫ H10.7.4
6	田楽辻子周辺遺跡 (No.33)	浄明寺一丁目661番外	宅地造成及び 個人専用住宅	都　市	254.30m²	H10.7.30 ∫ H10.10.12
7	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目271番4	自己用店舗 併用住宅	都　市	76.32m²	H10.8.3 ∫ H10.10.9
8	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目890番7	個人専用住宅 (2世帯住宅)	都　市	40.00m²	H10.9.21 ∫ H10.10.26
9	大慶寺旧境内遺跡 (No.361)	寺分一丁目819番1	個人専用住宅	社　寺	140.75m²	H10.10.8 ∫ H10.11.26
10	横小路周辺遺跡 (No.259)	二階堂字荏柄10番9外	個人専用住宅	都　市	172.15m²	H10.11.2 ∫ H11.1.23
11	由比ガ浜中世集団 墓地遺跡 (No.372)	由比ガ浜二丁目1203番20	自己用診療所 併用住宅	墓　地	111.58m²	H10.11.26 ∫ H10.12.11

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査原因	種別	面　積	調査期間
12	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1888番	個人専用住宅	都　市	77.01m²	H10.12.10 ～ H11.3.10

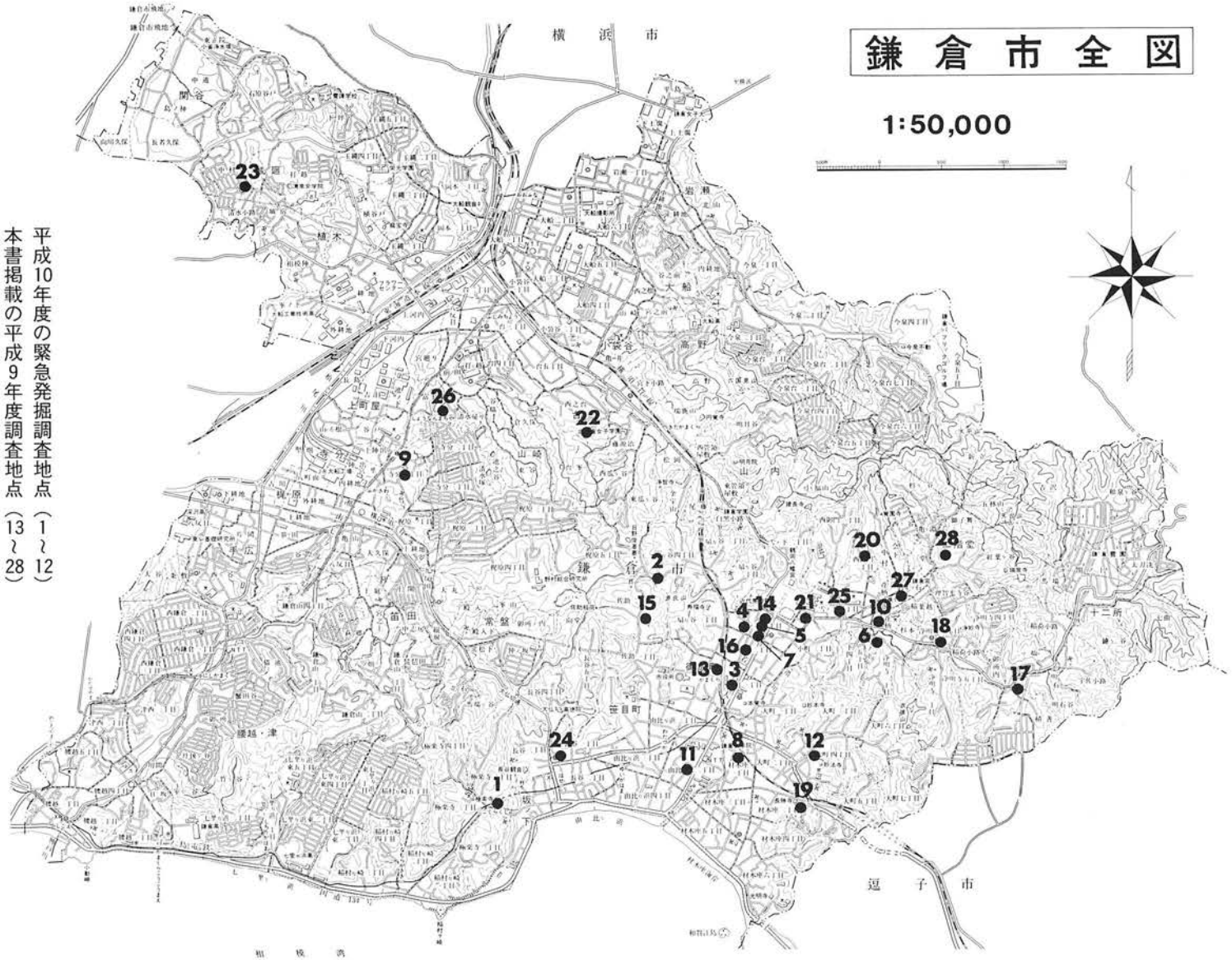
※は平成９年度から10年度に調査が継続したものを示す。
（平成11年１月11日現在）

本誌所収の平成９年度発掘調査地点一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査原因	種別	面　積	調査期間
13 ＊	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町123番５	店舗併用住宅	都　市	46.40m²	H9.03.10 ～05.20
14 ＊	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目273番イ	店舗併用住宅	城　館	94.82m²	H9.03.12 ～06.19
15 ＊	宝蓮寺跡 (No.374)	佐助二丁目897番11	個人専用住宅	社　寺	63.20m²	H9.03.17 ～05.21
16	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目５番８	店舗併用住宅	都　市	182.00m²	H9.04.24 ～07.15
17	積善遺跡 (No.440)	十二所字積善952番８	個人専用住宅 (車庫造成)	社　寺	29.28m²	H9.05.08 ～06.12
18	浄妙寺旧境内遺跡 (No.408)	浄明寺三丁目115番２	個人専用住宅 (車庫造成)	社　寺	31.08m²	H9.05.12 ～06.13
19	長勝寺遺跡 (No.313)	材木座二丁目2168番３	個人専用住宅	社　寺	26.25m²	H9.06.16 ～07.01
20	大倉幕府北遺跡 (No.193)	西御門二丁目803番17	個人専用住宅 (車庫造成)	都　市	35.58m²	H9.07.01 ～07.04
21	政所跡 (No.247)	雪ノ下三丁目970番２外	個人専用住宅	官　衙	80.06m²	H9.07.14 ～08.06
22	台山遺跡 (No.29)	台字西ノ台1733番３外	個人専用住宅	集　落	94.00m²	H9.07.14 ～08.12
23	玉縄城跡 (No.63)	城廻字清水小路673番10	個人専用住宅 (車庫造成)	城　跡	38.50m²	H9.08.18 ～08.28

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査原因	種別	面　積	調査期間
24	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	長谷一丁目33番3外	店舗併用住宅	都　市	51.30m²	H9.09.08 ～10.01
25	大倉幕府跡 (No.253)	雪ノ下三丁目651番8外	個人専用住宅	官　衙	14.94m²	H9.12.15 ～12.26
26	倉久保遺跡 (No.226)	山崎字富士塚868番82	個人専用住宅	横穴墓	10.00m²	H10.1.07 ～1.10
27	横小路周辺遺跡 (No.259)	二階堂字横小路93番11の一部	個人専用住宅（車庫造成）	都　市	142.38m²	H10.1.14 ～3.07
28	瑞泉寺周辺遺跡 (No.338)	二階堂字紅葉谷653番3	個人専用住宅	社　寺	63.76m²	H10.3.09 ～3.26

＊は平成8年度から9年度に調査が継続したものを示す。



平成10年度の緊急発掘調査地点（1～12）
本書掲載の平成9年度調査地点（13～28）
※遺跡名は一覧表参照

わかみやおおじしゅうへんいせきぐん
若宮大路周辺遺跡群（No.242）

御成町123番５地点

例　　言

1．本報文は、神奈川県遺跡台帳No.242若宮大路周辺遺跡群内・鎌倉市御成町123番5地点における店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、国庫補助事業分の報告である。

2．調査は平成９年３月10日から同年５月20日まで行われた。全発掘調査対象面積は105m²であり、このうち約46m²を国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本報文では、国庫補助事業分面積比に概ね相当する上層の中世第２面までの遺構と遺物を掲載した。下層は、遺構全測図のみを参考の為本報文中に提示し、検出した個別の遺構と出土遺物については、若宮大路周辺遺跡群発掘調査団の刊行する報告書に譲った。

4．出土遺物等発掘調査に関する諸資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

5．本報文に関わる整理作業等は、汐見一夫・杉山智恵子・松原康子・山上玉恵が分担して行った。
執筆は第１章の第１節 地理的・歴史的環境を秋山哲雄氏（東京大学大学院）に依頼、第４章の第２節 自然科学分析を(株)パレオ・ラボ鈴木茂氏に委託し、他を汐見・山上が分担の上稿末にその名を明記した。編集は渡邊美佐子・山上の協力を受け汐見が行った。

6．本報文に使用した写真は、図版２・４はリモコン式高所撮影装置に依り木村美代治に委託したものを合成し、他は汐見が撮影した。

7．本報文での、挿図中の縮尺及び使用した記号は基本的に以下の通り。
遺構面全測図・・・1/120　遺構個別図・・・1/60
遺物実測図・・・1/3・1/6（但；銅銭拓影は原寸）
挿図中の水糸レヴェルは海抜高を示し、スクリーントーン等は必要に応じてその都度注釈を加えた。
遺物実測図中の、←→は使用痕の範囲、←　→は加工痕、－・－・－は施釉の限界を示す。

8．現地調査から本報作成過程において、次の各氏・機関から御指導・御教示・御協力を賜った。
㈱パレオ・ラボ　㈳シルバー人材センター　市内遺跡各発掘調査団　東国歴史考古学研究所
鎌倉考古学研究所　松中一級建築事務所　吉原建設　加藤慶元　加藤リウ

9．調査体制は以下の通り。
調査担当　斎木秀雄
調　査　員　汐見一夫　石丸運人　岩野裕巳　丹行正　野本賢二　山上玉恵
調査補助員　真中泰行　鍛冶屋勝二　諸星真澄　杉山智恵子　渡邊美佐子
調査参加者　奥山利平　吉本脩三　渡辺久夫　高井真一郎　本瀬正道　藤枝正義

本　文　目　次

第１章　環境と立地 …… 5
　第１節　地理的・歴史的環境 …… 5
　第２節　調査地点の立地と周辺の様相 …… 9
第２章　調査の概要 …… 11
　第１節　調査の経緯と経過 …… 11
　第２節　調査結果の概要 …… 11
　第３節　国土座標上の位置とグリッド配置 …… 12
　第４節　基本層序 …… 13
第３章　遺構と遺物 …… 14
　第１節　中世１面 …… 14
　第２節　中世２面 …… 23
第４章　調査成果 …… 34
　第１節　中世３面以下の遺構 …… 34
　第２節　自然科学分析 …… 34
　第３節　まとめに代えて …… 45
　第４節　出土遺物一覧 …… 46

挿　図　目　次

図１　鎌倉市全図と若宮大路周辺遺跡群 … 4
図２　若宮大路周辺遺跡群の範囲と調査地点 …… 7
図３　調査地点周辺図 …… 9
図４　国土座標上の位置とグリッド配置 … 12
図５　基本堆積土層模式図 …… 13
図６　中世遺物包含層出土遺物 …… 14
図７　１面上出土遺物 …… 15
図８　中世１面全測図 …… 16
図９　１面検出の遺構 …… 17
図10　１面遺構内出土遺物 …… 17
図11　１面下出土遺物（１） …… 18
図12　１面下出土遺物（２） …… 19
図13　動物遺骸 …… 19
図14　１面下土丹層出土遺物（１） …… 20
図15　１面下土丹層出土遺物（２） …… 21
図16　２面上出土遺物 …… 23
図17　中世２面全測図 …… 25
図18　２面検出の遺構（１）・溝１ …… 26
図19　溝１正面図（部分） …… 26
図20　溝１出土遺物 …… 27
図21　２面検出の遺構（２）・方形土壙 …… 28
図22　方形土壙内出土遺物 …… 29
図23　２面検出の遺構（３）・土壙及び出土遺物（１） …… 31
図24　２面遺構内出土遺物（２） …… 32
図25　２面検出の遺構（４）・土間状遺構・出土遺物 …… 33
図26　中世３面以下の全測図 …… 35
図27　試料採取地点付近の土層断面図と試料採取層準 … 36
図28　試料採取地点の模式地質柱状図 …… 37
図29　地点１の花粉化石分布図 …… 39
図30　地点２の花粉化石分布図 …… 40
図31　地点３の花粉化石分布図 …… 41
図32　古代土坑の花粉化石分布図 …… 42

図33　出土銅銭拓影 …… 46
図34　出土常滑窯甕押印文拓影（1） …… 47
図35　出土常滑窯甕押印文拓影（2） …… 48
図36　出土常滑窯甕他押印文拓影（3） … 49

表　目　次

表1　若宮大路周辺遺跡群の
産出花粉化石一覧表 …… 38
表2　出土銅銭一覧 …… 46
表3　常滑窯甕押印文一覧（1） …… 47
表4　常滑窯甕押印文一覧（2） …… 48
表5　常滑窯甕他押印文一覧（3） …… 49
表6　出土遺物法量表（1） …… 50
表7　出土遺物法量表（2） …… 51
表8　出土遺物法量表（3） …… 52
表9　出土遺物法量表（4） …… 53
表10　出土遺物法量表（5） …… 54
表11　出土遺物破片数計数表 …… 55

図　版　目　次

図版1　調査地点遠景 …… 59
図版2　1面全景 …… 60
図版3　1．1面西半土壙 …… 61
2．降雨後調査区水没状況 …… 61
3．1面下獣骨検出状況 …… 61
図版4　2面全景 …… 62
図版5　1．2面溝1 …… 63
2．2面溝1横板・杭 …… 63
図版5　3．2面土壙37 …… 63
4．2面土壙37南北土層断面 …… 63
図版6　1．2面方形土壙群完掘状況 …… 64
2．調査区西壁土層断面 …… 64
3．2面土壙108～110 …… 64
図版7　若宮大路周辺遺跡群の花粉化石 … 65
図版8　若宮大路周辺遺跡群の
花粉・寄生虫卵化石 … 66

図1　鎌倉市全図と若宮大路周辺遺跡群

第１章　環境と立地

第１節　地理的・歴史的環境（図１・図２）

・甘縄と安達氏

本調査地点は、西の今小路と東の「若宮大路」という南北に走る二つの道にはさまれた地域にある。周辺の調査では、中世以前の遺物も確認されており[1]、図２の御成小学校内で検出された古代群衙との関係も考慮せねばならないが、史料が断片的にしか表れないので、ここではとりあえず保留とする。

若宮大路の西側といえば、『吾妻鏡』建仁元年（1201）三月十日条[2]に見える「懐嶋平権守旧跡、土屋二郎、和田左衛門尉等宅」が有名だが、建保元年（1213）五月二日のいわゆる和田合戦の際に登場する和田義盛の館は、若宮大路西側のこの宅ではない[3]。

本調査地点周辺に関して、建長三年（1251）二月十日条には以下のように記されている。

① 甘縄辺焼亡、（中略）東若宮大路、南由比浜、北中下馬橋、西佐々目谷、相模右近將監時定、相模八郎時隆等第以下、数箇所災云々

このように、調査地点周辺は「甘縄辺」に含みこまれる一帯であり、高橋慎一朗氏は、甘縄という地名の中心が、史料①にあるように若宮大路、由比浜、中下馬橋、佐々目谷で区切られるような地域であり、現在の甘縄神明杜は甘縄の中でも中心から外れた場所にあることを指摘している[4]。地名辞典の類では、甘縄神明社の東となりの谷が佐々目に含まれていた可能性が指摘されており、①の史料から佐々目が甘縄内にあったことを合わせて考えると、氏の指摘は的を射たものと言えよう。

甘縄といえば、かの安達泰盛が邸宅を持っていたことで知られており、それを今小路西遺跡で検出された武家屋敷に宛てる説も提出されたが[5]、高橋氏によって、安達邸の位置は無量寺谷の入り口付近に比定された[6]。その主要な根拠は、宝治元年（1247）六月五日の宝治合戦における以下の記事である。

② 城九郎泰盛、大曽祢左右衛門尉長泰（中略）、馳出甘縄之館、同門前小路東行、到若宮大路中下馬橋北、

戦場に向う安達泰盛は、門前の道を東に進み、若宮大路の中下馬橋北にたどり着いている。この道は明らかに本調査地点に近接するものであり、これを現存する道に比定すると、本調査地の北を線路を超えて走る道が想定できるが、これが鎌倉時代にまでさかのぼるかどうかは確証を得ない。

安達亭のあった無量寺谷には、安達氏の氏寺ともいうべき無量寿院があったが、弘安八年（1285）の霜月騒動で安達泰盛が滅びると、ここも廃絶した可能性が指摘されている[7]。その無量寿院が、後に万寿寺となったことを示すのが『鎌倉鷲峰法流伝来記』にある

③ 甘縄無量寿院〈今ノ万寿寺是也〉

という記述であるが、『鎌倉廃寺事典』が指摘する、正和三年（1314）の「無量寺賢信」という僧や、『鎌倉大草紙』応永二十三年（1416）十月四日の「無量寺口」の存在を考慮すると、無量寺そのものが存続していたか、あるいは無量寿院と無量寺が別のものであった可能性もある。以下では、無量寿院、無量寺、万寿寺の関係について私見を述べたい。

鎌倉において源頼朝は、大蔵幕府の後背に持仏堂を持っており、死後にはそこが墓所となり法華堂が建てられた。北条義時や泰時の場合も、邸宅の裏山にある持仏堂が死後に墓所となり、寺が設けられている[8]。つまり、有力な武士たちは邸宅の裏に持仏堂を設け、死後にはそこが墓所を持つ寺となってい

るのである。無量寿院と安達亭の関係もこれに類似する例であり、おそらく無量寿院には安達氏の墓があったのであろう。安達亭推定地の背後に無量寺谷という地名が現存することを考えれば、無量寿院が無量寺となった可能性は極めて高い。泰盛の死後も安達氏は断絶したわけではなく、傍流の安達時顕は幕府滅亡まで幕政に参加しており、彼が無量寿院を無量寺と改めて維持していたと考えられる。問題となるのは史料③に登場する万寿寺である。

万寿寺は、『鎌倉廃寺事典』によれば長谷郷にあり、弘安九年（1286）北条貞時が亡父時宗のために創建したという。この由緒は動かし難いものだが、あえて無量寺との整合性をもたせるために憶測を加えるならば、この寺は、貞時の父である時宗だけでなく、母である安達義景女もともに供養するための寺院であり、安達氏一族の墓の一部も安達義景女のものと一緒に移されたのではないだろうか。だからこそ、甘縄無量寿院が万寿寺と呼ばれるようになるのではないだろうか。これは憶測にすぎないが、万寿寺の開基である貞時が安達義景女を母に持っていたことが、無量寿院と万寿寺をつなぐ唯一の手がかりであることから以上のように考えた。

・甘縄と北条氏

甘縄には、北条氏の邸宅もいくつか確認できる。史料①にあるように、北条時房の子である時定と、時定からは甥に当たる時隆も邸宅を構えていた[9]。なお、時定の姉妹（＝時隆の伯母）には安達義景の室となり、後に千葉時衡へと改嫁した女性がいる。

そのほかの史料としては『見聞私記』[10]があり、そこには

④　永仁五年（1297）閏十月七日未時、自佐々目谷口火出来、甘縄等焼亡、千葉（胤宗カ）屋形巳下兵部大輔（甘縄顕実）、駿河守（北条政長）、近江守（？）等屋形悉焼了、

とあり、千葉胤宗、金沢氏の一族である甘縄顕実、北条政村の子である政長の屋形があったことでわかる。千葉胤宗の妻は甘縄顕実の妹であり、両者は義理の兄弟の関係にある。甘縄顕実の地位は、永井晋氏によれば「北条氏実泰流の中においても、また幕府内の地位においても、金沢貞顕と比較できるくらいに高」かった。顕実の邸宅は、金沢氏の甘縄の邸宅が伝領されたものであったことも永井氏が考察している。なお、顕実の父である金沢顕時は安達泰盛の女を正室としており、金沢氏が甘縄に邸宅を持つようになったのが顕時の頃であったならば、顕時が安達泰盛女子を室として迎え、安達邸内の一部に屋地を得たとも考えられる。北条政長も、安達顕盛の妻を妹に持っており、安達氏との血縁が確認できる。

金沢文庫古文書には以下のような金沢貞顕の書状[11]が残されている。

⑤　（元徳元年（1329））去月十九日夜、甘縄の城入道（安達時顕）の地の南頻いなかき左右衛門入道宿所の侯より炎上出来侯て、その辺やけ侯ぬ、南者越後大夫将監時益北まてと承侯、彼家人糟屋孫三郎入道以下、数輩焼失侯、北者城入道宿所を立られ侯ハむとて、人を悉く被立候程ニ、そのあきにてととまり侯ぬ（後略）

ここからは、安達時顕の宿所の南に空き地があり、さらにその南に「いなかき左右衛門人道」の宿所があり、火事の南限が北条時益家の北で、その北に家人の糟屋孫三郎が住んでいたことがわかる。安達時顕の屋敷は、代々安達氏が継承していた甘縄の屋敷であり、このことは無量寺が彼によって維持されていたという先の考察を傍証していよう。安達時顕は甘縄顕実の姪を妻としている。また、北条時益は史料④に登場する北条政長の孫に当たり、甘縄にある屋敷が、政長からおそらく時敦を経て時益へと親子間で継承されたことが推測できる。時敦と時益はともに六波羅探題にもなっているほどの人物であった。

この他にも、北条持氏の妻で北条経時・時頼という二人の執権を産んだ松下禅尼も甘縄に住んでいた[12]。松下禅尼は安達景盛の女であり、おそらく父の邸宅に近接する場所に住んでいたのであろう。北条

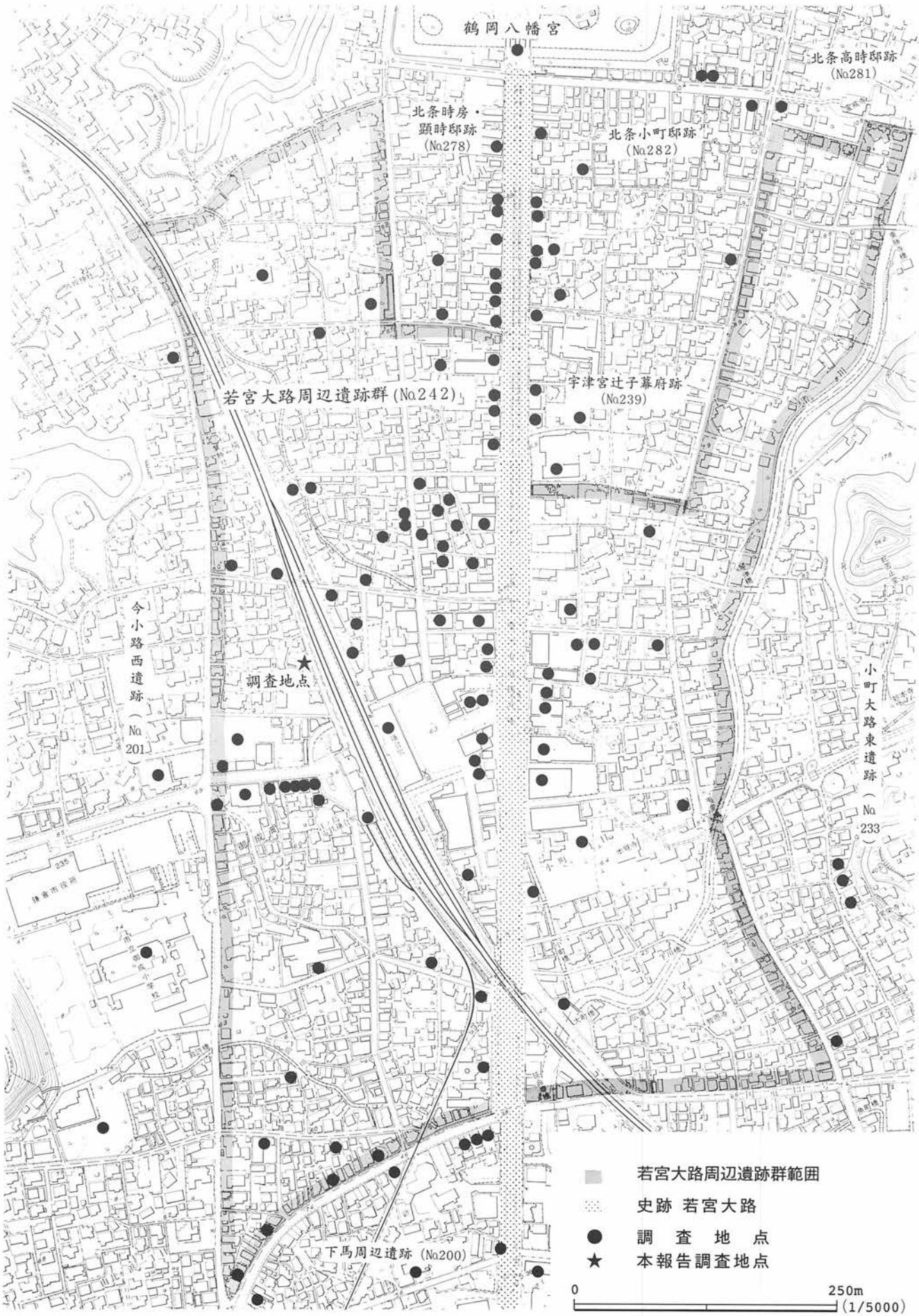


図2　若宮大路周辺遺跡群の範囲と調査地点

経時が甘縄に含まれる佐々目に葬られた[13]のも、母親の持つ甘縄の邸宅との関係が想定されよう。

このように、甘縄には北条氏の邸宅が多く確認されており、鎌倉時代中期には時房流の時定と時隆が、後期には甘縄顕実や政長→時敦→時益という三代が邸宅を持っていたのである。何かと安達氏の印象が強い甘縄であるが、六波羅探題に就任した時敦や時益をはじめ、顕実などの有力な北条氏も住んでいた地域であった。さらに、時定の姉妹（＝時隆の伯母）が安達義景の室、後に千葉時衡の室となっていること、千葉胤宗の妻が甘縄顕実の妹であること、甘縄顕実の父である金沢時顕が安達泰盛女子を正室としていること、安達顕盛の妻が北条政長の妹であること、安達時顕の妻が甘縄顕実の姪であることなど、甘縄に住む北条氏が、同じく甘縄に住む安達、千葉氏[14]と何らかの血縁関係を結んでいるのも、興深い事実として指摘できる[15]。特に金沢顕時は、安達泰盛女子を正室とし、千葉泰胤女子との間に女子をもうけ、その彼女を再び千葉胤宗の室として送り出しているだけでなく、孫に当たる時雄女子を安達時顕妻としている。甘縄顕実が甘縄に邸宅を確保できたのも、父である金沢時顕のこうした努力によるものであろう。

甘縄という限られた地域で屋地を獲得するには、相互の姻戚関係が必要だったのであり、金沢氏の本流である金沢貞顕が結びついた得宗は、若宮大路の東側である小町を中心にしていた[16]のとは対照的に、金沢氏の傍流である甘縄氏や、北条氏の中でも傍流の政村流などが、安達氏や千葉氏と結びついて甘縄に住む北条氏は安達氏、千葉氏とともに、いわばそこで完結した空間を形成していたのである。そして、この甘縄と小町とを結び付けていたのも、安達氏と得宗との姻戚関係だったのではないだろうか。

このように本調査地点は、いわば完結した空間ともいうべき「甘縄」に含まれている。都市鎌倉を考えるとき、幕府や北条氏・得宗家の邸宅がおかれた小町などの若宮大路東側に注目してしまいがちだが、以上のような性格を持つ甘縄も注目すべき地域といえるであろう。

(1) 図3・地点１、菊川英政「若宮大路周辺遺跡群扇ヶ谷1－74－9地点」（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』1994）、同地点３、手塚直樹・菊川英政「小町一丁目120番1地点遺跡」（風門社ビル発掘調査団・1989）など。
(2) 以後、年月日のみの記述はすべて『吾妻鏡』による。
(3) 細かい実証は省略するが、和田義盛が攻撃を加えたのは大蔵幕府→義時の小町邸（現在の宝戒寺）→政所という順序であり、これは明らかに大蔵の東からの攻撃である。おそらく和田義盛は自らの本貫の地から出発したと考えられる。
(4) 高橋慎一朝『中世の都市と武士』（吉川弘文館、1996）
(5) 馬淵和雄「今小路西遺跡（御成小学校内）の再検討」（『鎌倉』77・1995）。
(6) 前掲注（4）参照。
(7) 斉木明美「遺跡の位置と歴史的環境」（千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』1982）。
(8) 拙稿「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」（『史学雑誌』106－9. 1997）
(9) 北条氏の血縁関係については、北条氏研究会「北条氏系図考証」（安田元久編『吾妻鏡人名総覧』吉川弘文館・1998に所収）を参考にした。
(10) 『続群書類従』雑部に所収。
(11) 『鎌倉遺文』30775号、元徳元年十一月十一日。
(12) 延長三年（1251）五月一日条。
(13) 寛元四年（1247）閏四月二日条。
(14) 千葉氏が甘縄に邸宅を持っていることは、建保元年（1213）二月十五日条参照。
(15) 北条氏と安達氏との血縁関係は、貞時の母や、経時・時頼の母といった得宗家の室以外は、北条重時女子が安達泰盛の妻となっているくらいしか認められない。
(16) 得宗家の邸宅の位置については前掲注(8)拙稿参照。

第２節　調査地点の立地と周辺の様相（図２・図３）

本調査地点は、史跡若宮大路を中心として、南北約１km×東西約0.6kmに渡る広い範囲が呼称されている若宮大路周辺遺跡群の東寄り中央付近に位置し、寧ろ今小路に近い。若宮大路まで東へ約200m、今小路へは西へ約90m弱という距離で、ＪＲ鎌倉駅の西側線路沿に位置する。

現況の等高線及び付近の調査事例から併せ観た地形は、現況で北側鶴岡八幡宮に近い地域で海抜約10m、下馬周辺遺跡との境付近で海抜約４m、南北約１kmの間に比高差約６m測る。調査例から観た中世期の生活面或は中世基盤層もほぼ同等の傾斜が考えられ、当該遺跡地は中世期から全体的に南北に傾斜した地域であることが分る。さらに若宮大路西側では、東側に較べ複雑に入組んだ様子が窺える。

調査地点を中心に概観すると、北西側に扇ヶ谷川が滑川に向って南下し東側には源氏山の山裾が今小路際まで迫り、この付近の海抜は現況で８m強を測る。南側一帯は、一部由比ヶ浜砂丘の北東縁端付近でやや高まるが、現況海抜６m前後を測る。本調査地点は、現状ではほぼ平坦現況海抜７m前後を測る、地形的要因を併せ観ると北から南・西から東への僅かな傾斜も考えられよう。

図３に示したＪＲ鎌倉駅及び本調査地点周辺では、これまでに半径150m内外に20ヶ所以上調査が為されているが、隣接した地点はない。地点１～９を含めて、全ての地点で中世期の遺構と遺物は密に検出されており、古代は殆どの地点で遺物は出土するが顕著な確認されているのは地点４～６である。

図３　調査地点周辺図

周辺の中世期の様相を概観すると、概ね13世紀中頃から生活の痕跡が顕著になり、地点に選り道路や溝等の区画も成立すると共に、河川に因り規制も受けている状況が明らかになっている。地点１・２・６・９では道路状遺構が、地点３・５・６では旧河川流路が確認され、建物址を始めとする各遺構群は道路状遺構や派生する溝或は流路を意識した軸方向を示す。建物形態は掘立柱建物か方形竪穴建築址が多い様であるが、内、方形竪穴建築址と報告されているもののいくつかは、その後の鎌倉での調査事例から観ると所謂板壁掘立柱建物であろう。溝は巧拙はあるが殆どが木組が為され、検出事例から観ると数回に亘り改悛しその度に杭や横板を組直していることが窺える。

古代は、地点４で奈良・平安時代の住居址、地点５では性格不明の溝状の遺構、地点６では奈良・平安時代の竪穴状遺構が検出されている。又、遺構を伴わないものの縄文期から平安末期に亘り、殆どの地点で遺物は採集されてはいる。

【引用・参考文献】

菊川英政　「９．若宮大路周辺遺跡群（No.242）　扇ヶ谷一丁目74番地９外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10　平成５年度発掘調査報告（第２分冊）』平成６年３月　鎌倉市教育委員会

菊川英政　「６．若宮大路周辺遺跡群（No.242）　扇ヶ谷一丁目74番地８外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　6　平成元年度発掘調査報告』　平成２年３月鎌倉市教育委員会

手塚直樹　菊川英政　『小町一丁目120番－１地点遺跡　風門社ビル建設に伴う発掘調査報告』1989年　８月風門社ビル発掘調査団

馬淵和雄　「１．若宮大路周辺遺跡群　小町一丁目116番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2　昭和60年度発掘調査報告』　昭和61年３月　鎌倉市教育委員会

小川裕久　服部実喜　他　『蔵屋敷遺跡　日本国有鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査』1984. ２鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会

中田英　服部実喜　他　『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 10　千葉地東遺跡　鎌倉県税事務所建設工事にともなう鎌倉市御成町所在遺跡の調査』1986. ２神奈川県立埋蔵文化財センター

斉木秀雄　『御成町228番－２他地点遺跡　―片岡ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』1987年12月　千葉地東遺跡発掘調査団

斉木秀雄　他　『諏訪東遺跡』　1985年３月　諏訪東遺跡調査会

手塚直樹　他　『千葉地遺跡　鎌倉市御成町15－5番地所在中世市街地遺跡の発掘調査』1982年３月　千葉地遺跡発掘調査団

第２章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

本地点は、平成８年11月に店舗併用住宅建設の事前相談を受けた鎌倉市教育委員会文化財課が、試掘調査を実施し、発掘調査による記録保存が必要と判断された。事業者と協議の上、自己用区域を対象として鎌倉市教育委員会が、店舗用区域を対象として若宮大路周辺遺跡群発掘調査団(団長　斉木秀雄)が発掘調査を実施することとした。調査時には残土処理の問題から調査区を東西に２分し、西半から自己用区域対象分を国庫補助事業として調査を進めた。しかしながら整理作業においては、連続する整地層や遺構等を分断すると煩雑な誤解を招く恐れがあり、事業者及び鎌倉市教育委員会文化財課の了解を得た上で、本報文では調査面積比を元に中世第２面までの遺構と遺物を国庫補助事業分相当として報告する。

尚、下層の中世第３・４面及び古代に関しては、参考の為各期の調査区全測図のみは提示し、個別の遺構と出土遺物実測図は上層と併せて調査団刊行分の報告書に譲った。

調査は試掘調査の結果を基に平成８年３月10日より、現地表直下に堆積する近現代以降の造成土を重機に依り掘削し搬出することから開始した。３月12日には調査に入れる様に諸体制を整えたものの、表土掘削時の残土搬出に手間取り、実質的な調査開始は３月17日であった。３月21日に調査区西半の中世第１面検出後は、降雨と湧水に難渋しながらも順次掘下げと遺構検出・記録保存・全景写真撮影を行い、４月30日に西半の調査を終了した。引き続き５月１日より東半の調査に入り、時に休日返上で期間内に終らせるべく作業を進め、５月19日には最終段階古代の写真撮影と記録保存を終了した。翌５月20日に出土遺物及び諸器材の搬出等の撤収作業を行い、関係各方面に連絡の上調査終了とした。

第２節　調査結果の概要

調査の結果中世期の生活面４期と古代は溝状の遺構等を検出し、自然遺物を含めた出土遺物の総量はテンバコ約30箱強を数えた。以下には、Ⅰ区・Ⅱ区には拘らずに各生活面で検出された遺構を羅列し、出土遺物についての概略を記す。

検出遺構

中世１面　　土壙17基　柱穴15口

中世２面　　方形土壙11基　土壙21基　柱穴13口（遺構内柱穴含む）　溝１条

中世３面　　方形竪穴状遺構１基　土壙17基　柱穴35口

中世４面　　土壙４基　柱穴約60口（杭穴含む）　溝３条

古　　代　　溝状遺構１条　土壙状遺構１基

各生活面共、人為的な広範な地業・整地層は顕著には認められない。中世期の変遷を下層から辿ると、第４面は東西方向の溝が主たる遺構となり、その後に盛土・整地更新された第３面へと部分的には踏襲される。第３面及び第２面は、遺構の密度は比較的高く重複して営まれたものも珍しくないことから、近接した時期が考えられる。第２面更新時には大量の土丹が投込まれた後に第１面が盛土・整地され、出土遺物から観ても若干の時期差が窺える。各遺構群の性格や方向性は概ね踏襲され、大規模な掘立柱建物や礎石建物は検出されなかった。古代は、調査区の中央付近で南北に走行するであろう溝状の掘込みと、その上層を削平する様な土壙状の遺構が検出されている。付近の調査で検出されている竪穴住居

址或は竈址は確認されていない。

出土遺物

舶載陶磁器	龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・高麗青磁・白磁・青白磁・褐釉陶器・泉州窯陶器・他
国内産陶器	瀬戸・瀬戸美濃・常滑・渥美・備前・魚住・亀山・山茶碗窯系・他
土器土製品	かわらけ・白かわらけ・吉備系土師器・瓦器・火鉢類・伊勢系土鍋・土鍋類・瓦・土錘
木製品類	漆器椀・漆器皿・箸(状)木製品・他用途不明木製品
石製品類	砥石・硯・滑石鍋・火打石
金属製品	刀子・鑿・鉄釘・火打金・掛け金・銅銭・他用途不明金属製品
骨角製品	笄・裁断骨・他製品残欠等加工品
自然遺物	人骨・獣骨・貝殻・(貝製品)
古　代	土師器甕　土師器坏　土師器皿(盤)　須恵器フラスコ型瓶　須恵器坏蓋・身　他

上記の如く羅列すると、質量共に豊富の様に感じられようが、中世遺物の実状はかわらけと常滑片で全出土量の85%を占め、瀬戸窯諸製品・骨角製品は同遺跡内の他の調査地点と比べても極端に少ない。層位的に観ると、遺構密度の高い中世第2面更新時埋土から中世第2面構成土に掛けての出土量が最も多く、第4面や第1面からの出土遺物は質・量共に貧弱であった。古代の遺物は、総じて土師器よりも須恵器の出土量が多い。特に土師器坏類が非常に少なく、須恵器坏蓋が多いのが特徴であろう。

第3節　国土座標上の位置とグリッド配置（図4）

調査にあたり、調査地点の敷地範囲を網羅するグリッドを設定した。本来ならば、国土座標より距離・角度を測定しグリッドを設定するべきであろうが、調査地点付近の基準点は殆どが道路面の工事に伴い失われていた為、調査区内で任意に方眼を設定し、基本軸延長線上の点を付近2箇所の4級基準点から読み取る方法を採らざるを得なかった。グリッド配置と4級基準点との位置関係を図4に示した。

各グリッドには北西を起点として東西方向にはアルファベットを、南北方向には算用数字を付した。

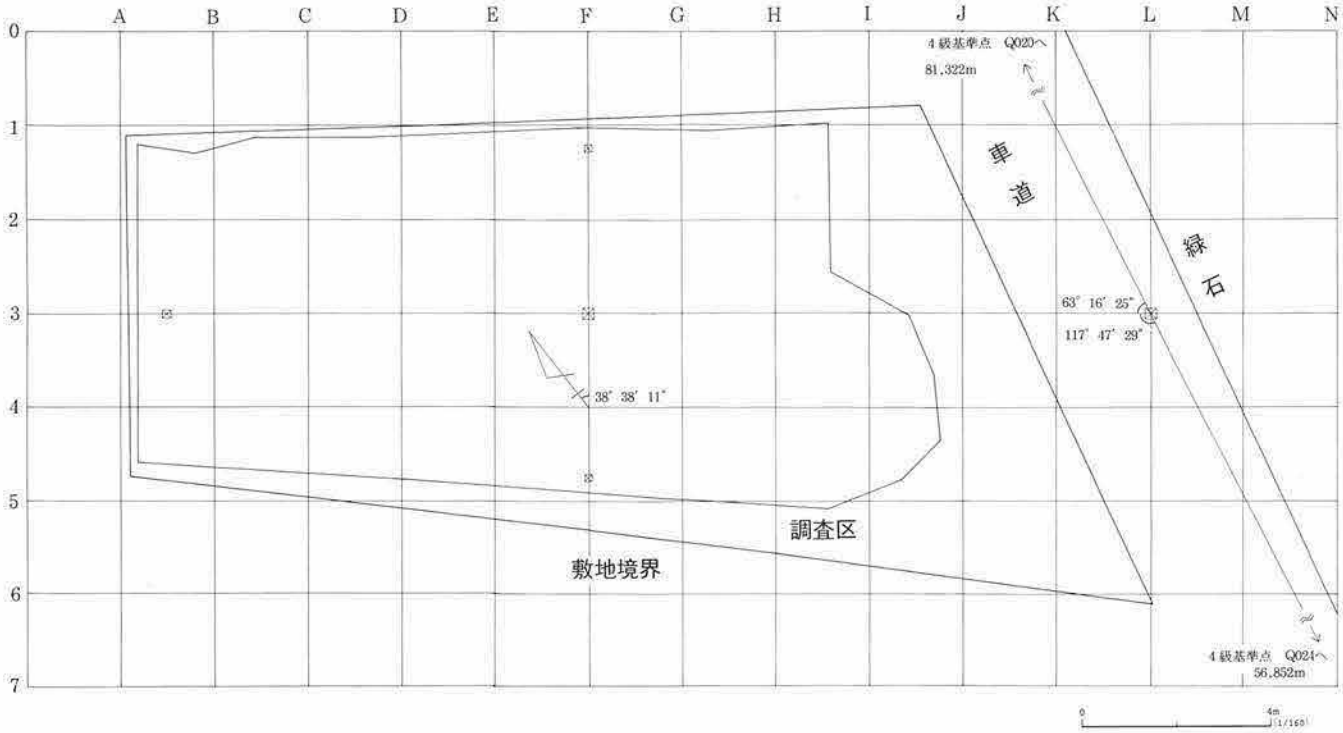
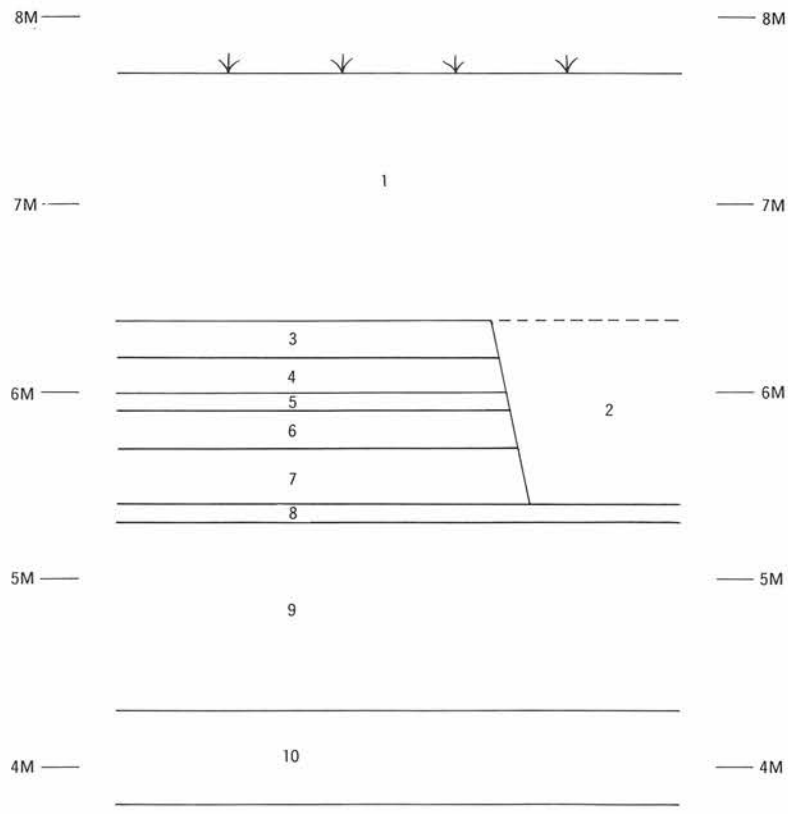


図4　国土座標上の位置とグリッド配置



基本土層：

1. 暗黄褐色土丹層
2. 灰黒色砂礫層
3. 灰茶褐色粘質土
4. 黒褐色土
5. 灰褐色土
6. 暗茶褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 暗黄灰色砂質土
9. 灰黄褐色砂質土
10. 暗灰色乃至灰黄色砂層

中世１面　・・・　４層上面
中世２面　・・・　６層上面
中世３面　・・・　７層上面
中世４面　・・・　８層上面
古代確認　・・・　９層上面

図５　基本堆積土層模式図

第４節　基本層序（図５）

表記遺跡内では数多くの発掘調査が為されているが、各調査地点毎に層序は多少の差違が観られる。図５には本調査地点の基本土層を模式概念図で示した。

１層は暗黄褐色土丹層。拳大乃至人頭大の土丹塊に拠る近代の埋土。最大厚1.4mを測る。

２層は灰黒色砂礫層。調査区の東端一帯に堆積する水気を帯びた粗砂と水磨した礫・土丹の層。最大厚2.4mを測り、中世４面の上面にまで達する。付近の調査で検出された河川の可能性も考えられたが、内包する遺物も近世以降のものにほぼ限られていた為、攪乱と見なし表土掘削の際に除去している。

３層は灰茶褐色粘質土。調査区のほぼ全域に堆積する中世遺物包含層で、調査開始層位。粘性は低く、土丹粒・貝粒子等を若干混入する。近世以降の削平を受けている為か、上面レベルは一定しない。

４層は黒褐色土。粘性の低い粘質土で、上面には粗砂・貝粒子・土丹粒が混在する。上面が中世１面。

５層は灰褐色土。下層２面から１面への更新時に盛られており、大小土丹塊・粘質土・粗砂の混合層。

６層は暗茶褐色粘質土。粘質土に砂質を混入し、全体に炭化物・貝粒子を含む。上面が中世２面。

７層は暗褐色粘質土。粘性は高く、全体に貝粒子を含む。２面遺構に因り削平を受けているが、この層位で確認した遺構群を中世３面とした。

８層は暗黄灰色砂質土。かなり土壌化しており、若干粘性を帯びる。中世地山９層に至る漸移層かと観られたが、本層位上面で溝状の遺構・多数のピットを検出し上面を４面とした。

９層は灰黄褐色砂質土。斑に黒色土を含むが層中からは遺物は出土せず、自然堆積層と考えられる。上面で古代遺構を確認している。

10層は暗灰色乃至灰黄色砂層。疎らに貝粒子を混入し、粗砂と細砂が不規則に互層を成す無遺物層。

第３章　遺構と遺物

第１節　中世１面（図６～10）

重機に依り近世以降の堆積土を除去した後の灰茶褐色土上面では、明瞭な遺構プランは確認できなかっ

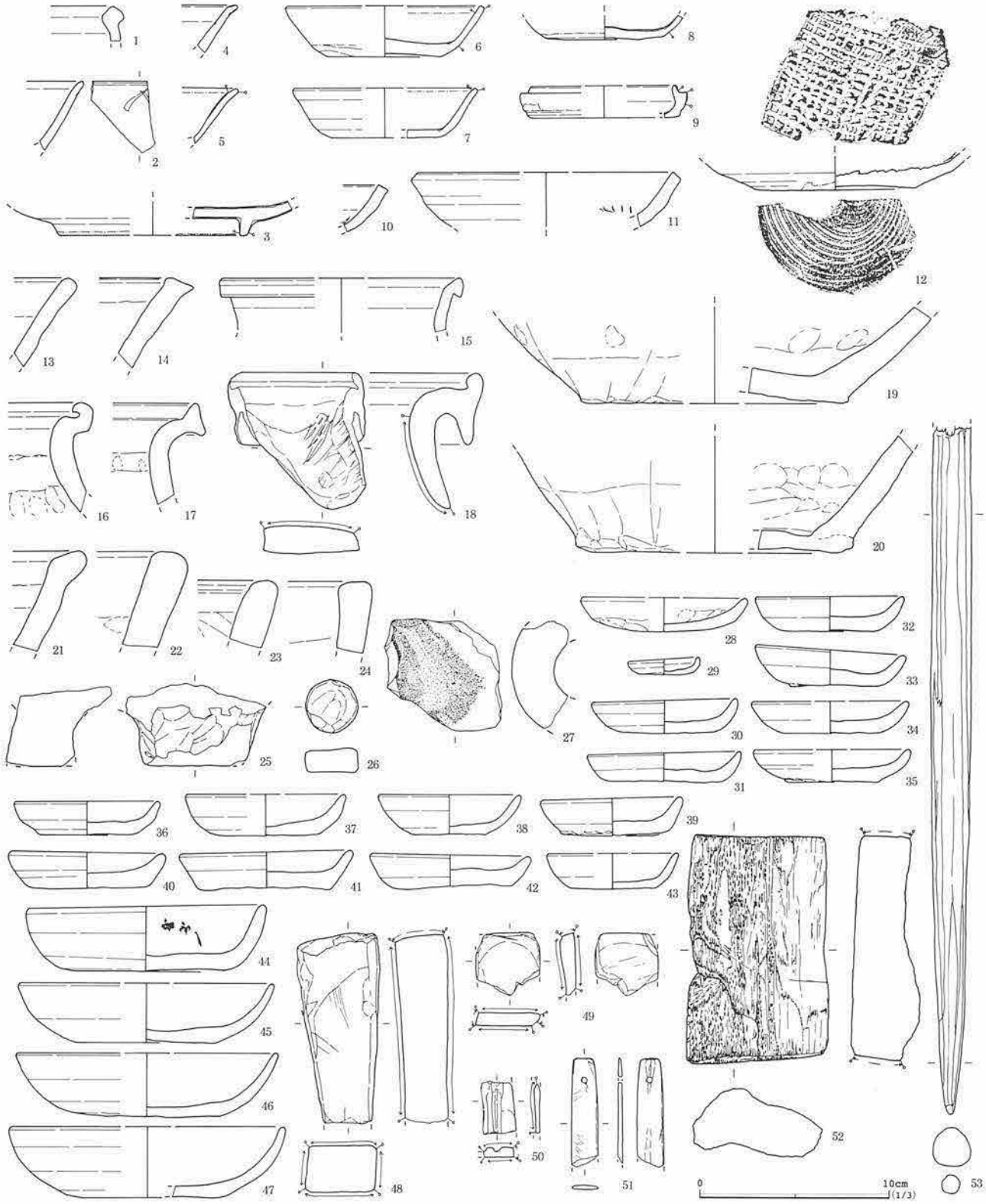


図６　中世遺物包含層出土遺物

た為中世遺物包含層と判断し、この層は遺物の採集を目的として人力にて掘下げた。

図６は、中世包含層出土遺物。

１～９は舶載陶磁器。１は黄釉陶器の盤。釉調は灰黄色。２は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、３は龍泉窯系青磁鉢。釉調は何れも淡緑色でやや失透する。４は白磁碗。５～８は白磁口兀皿。６・８は外底部付近は露胎、７は外底面も施釉される。９は青白磁で合子の身。文様はなく、外面体部下半は施釉されない。

10～12は瀬戸窯製品で、何れも灰釉の卸皿。10は釉調灰緑色で浸け掛け、11は釉調淡緑色で刷毛塗り、12は釉調灰緑色で浸け掛けされ、外底面は糸切り。13は南部山茶碗窯系捏鉢。

14～20は常滑窯の諸製品。14は捏鉢。図示し得なかった他の破片で観ると、内外には引かれずに素直に角張るタイプの方が多い。15は壺類。16～20は甕。所謂Ｎ字状口縁も数点は出土しているが、縁帯部が頸部につく様なタイプは出土していない。18は破損した口縁部片を擦り常滑に転用している。

21～25は火鉢類。21はかわらけ質。22・23は土器質浅鉢型。24・25は瓦器質輪花形。火鉢類は胴部破片を併せ観ると、瓦器質乃至瓦質の製品よりも、土器質の製品の方が多く出土している。

26はかわらけ質の円盤状土製品。27は鞴羽口。溶解した鉄分が付着する。

28～47はかわらけ。28は手捏ね成形、他は全て糸切り底。新旧混在するが、後述する１面上或は１面遺構内の出土遺物と併せ観ると、年代の指標に成り得るのは32～37・45～47であろうか。44の内面には墨痕らしきものが付着するが意味不明。

48～50は石製品で砥石。48は上野産の中砥。小口は成形時加工痕が遺存し、他の４面は総面使用。49・50は鳴滝産の仕上げ砥。50は破損後に玉研ぎに使用。

51・52は骨角製品。51は鹿角加工品で、笄の未製品或は再加工品か。52の裁断骨は、イルカ類の上（下）顎骨。先端に対し直行に切断するが、刃物種痕跡は明瞭ではない。表面にも加工痕が観られる。53は用途不明木製品。表面は丁寧に削られている。（汐見）

中性包含層掘下げ後、現地表下約150cmの海抜約6.2m前後で確認した土丹粒・砂混じりの黒褐色土上面を１面とした。

図７は、１面上を精査した際の出土遺物。調査区の東半で上層をやや掘り過ぎ、その際の出土遺物は調査時の採り上げを重視し図６に図示した為、本層位に帰属し図化した点数は少ない。又、整理作業中に接合した破片は、概ね下層或は遺構内の遺物に帰属させている。

１は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。素地は淡灰色で、釉は灰緑色で不透明。高台畳付に部分的に釉が流れる

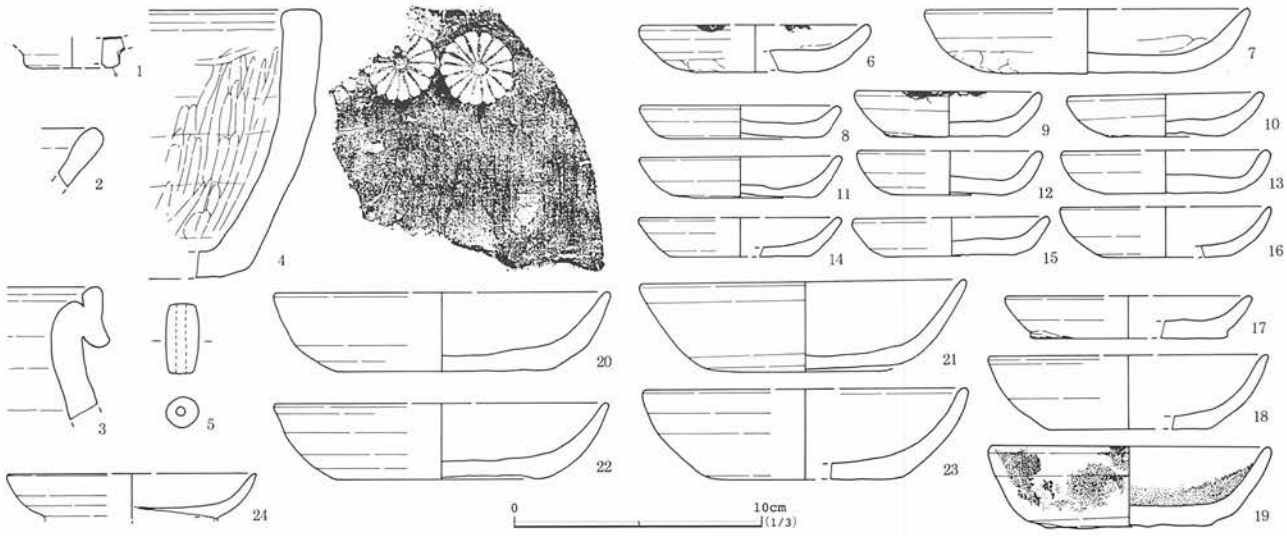


図７　１面上出土遺物

が外底部は露胎。2は山茶碗窯系捏鉢。小石・貝粒を多く含む粗胎土で、暗灰色を呈する。

3は常滑窯甕。N字状に折返される口縁である。灰褐色を呈し夾雑物を多く含む胎土。外面に降灰がみられる。4は瓦器質輪花形火鉢。外面口縁下に16弁菊花が3連陰刻される。内外面体部に縦方向の丁寧な磨きが施されている。5は土錘。かわらけよりしまりの良い胎土である。

6・7は手捏ねかわらけ。6は淡灰褐色を呈し、口縁部に油煤が付着し、灯明皿として使用される。7は灰褐色を呈し、外底面にスノコ痕を遺す。共に焼成は良好である。8～23は糸切り底のかわらけ。器表は概ね灰燈色乃至灰褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。9は灯明皿として使用される。6・7に、下層からの掘り上がり混入が観られるが、他は概ね大差ない年代であろうか。

24は無文の黒漆漆器皿。高台内部は剝離しているが黒漆地である。図示はしていないが、別の薄い漆の様なものが内面から外面口縁下に付着している。（山上）

図8は中世1面全測図。前章でも触れた様に、実際には東西に二分割した調査区を合成して提示し、調査時に通しで付した土壙番号をそのまま使用している。参考までに、検出された遺構は基本的に全て土壙番号としⅠ区1面検出順に1から付し、Ⅱ区に入ってからは101から付している。

1面を構成する黒褐色土は特に強固な地業面ではないこともあり、主に調査区西側では上層の包含層を掘り過ぎてしまった為、妙に浅い遺構群となってしまった。図上遺構が希薄な部分は、本来何らかの遺構があったものを飛ばしてしまった可能性がないとはいえない。全体的に遺構配置は北側或は西側に偏る傾向にあるが、この面の性格等を示唆するような遺構やピット配置は認められなかった。

32基の遺構を検出したが、土壙1～3・8～15・18・31・33・34と番号を付したものはピットであろう。覆土は暗茶褐色系の粘質土。土壙31・33・34は1面で確認し損ったものを掘下げ中に礎板を検出し、覆土から1面の遺構と判断した。これらピットは概ね上場径20cm～40cm内外、確認面からの深さ10～25cm前後で、土壙15としたピットの底面に礎石足る伊豆石が据えられている(図9)が、柱痕は確認できなかった。

図9に主な土壙を抽出した。概ね覆土は暗茶褐色乃至茶褐色粘質土で炭化物粒を含む。殆どの土壙が特徴的な様相はなく性格不明のゴミ捨て穴と想われるが、土壙19・21は若干個別に触れておく。

土壙19は110cm×70cmの不正方形、土壙21は120cm以上×最大90cm程の不正形を呈し、面からの深さは共に15cm程で底面はほぼ平坦。覆土は暗茶褐色粘質土で、疎らではあるが木片・種子を含む暗赤

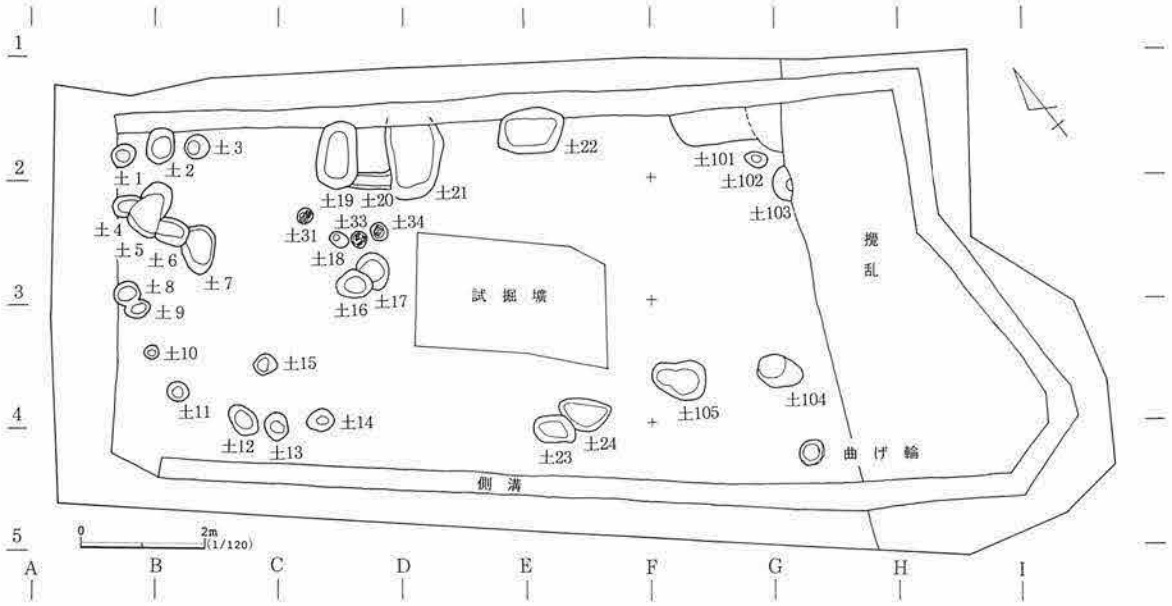


図8　中世1面全測図

褐色腐植粘土を共通して混入している。粘土中の木片は、大きさは揃わないが板棒状を呈する。

後述する２面土壙27と考え併せ、南接する礎板を伴うピットをこじつけて性格付けを考えたい部分ではあるが、後章で問題提起の形で触れる。惜しむらくは、土壌分析用のサンプルを採取しなかったことであろうか。

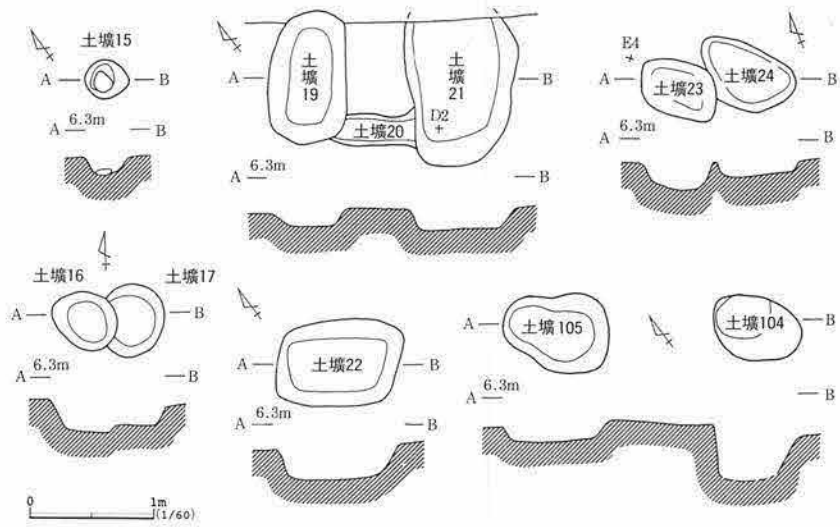


図９　１面検出の遺構

図10は１面検出遺構内からの出土遺物。検出遺構が希薄な上に、全ての遺構内から図化し得る遺物が出土している分けではなく、24点を図化したに留まる。図10のかわらけは全て糸切り底で、器表は燈色乃至赤燈色系を呈し、胎土・焼成共に良好。

１は土壙２出土の鉄釘。２・３は土壙５出土。２は龍泉窯系青磁鉢。灰緑色の釉がやや厚く掛る。３は山茶碗窯系捏鉢。４～６は土壙７出土。４は青白磁梅瓶胴部で、渦巻文をあしらう。５は南部山茶碗窯系捏鉢。小礫をあまり含まないしまった胎土。６は土器質浅鉢型火鉢。遺存片下方には煤が付着する。７は土壙19出土のかわらけ、８は土壙20出土のかわらけ。９・10は土壙８出土の山茶碗窯系捏鉢。11・12は土壙21出土のかわらけ。土壙19・21の腐植土混じりの粘質土中で出土した多くの木片は、表面や一端部の削り等加工痕が顕著ではなかった為、廃棄されたものと判断した。13は土壙17出土のかわらけ。14・15は土壙22出土。14は常滑窯の甕。15はかわらけ。16～18は土壙103出土のかわらけ。19は土壙23出土のかわらけ。口径は15cm近くある。20～24は土壙24出土。20は常滑窯の捏鉢。21～24は土錘。21が微かながら縦寸法が大きいが、図７－５・図12－61と共に極めて近似した法量であり、同一集団の手に依る生産品であろうか。これまでに大量の土錘が出土している市内の各調査地点資料で観ても、法量等がこれほどに類近似している例はなく、帰属年代に疑問の余地はある。

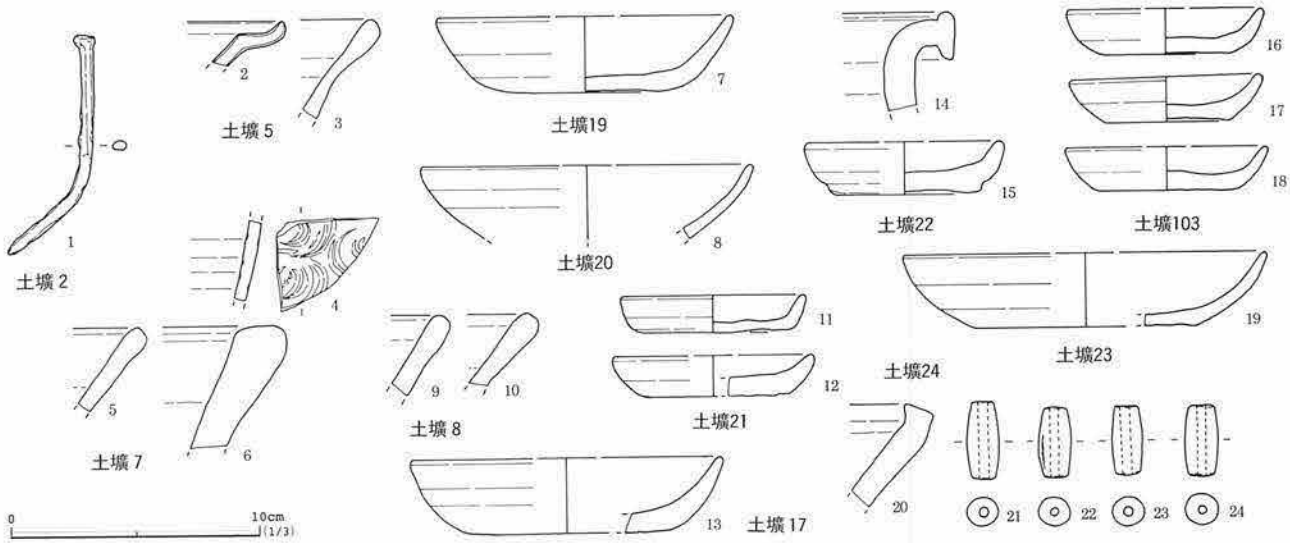


図10　１面遺構内出土遺物

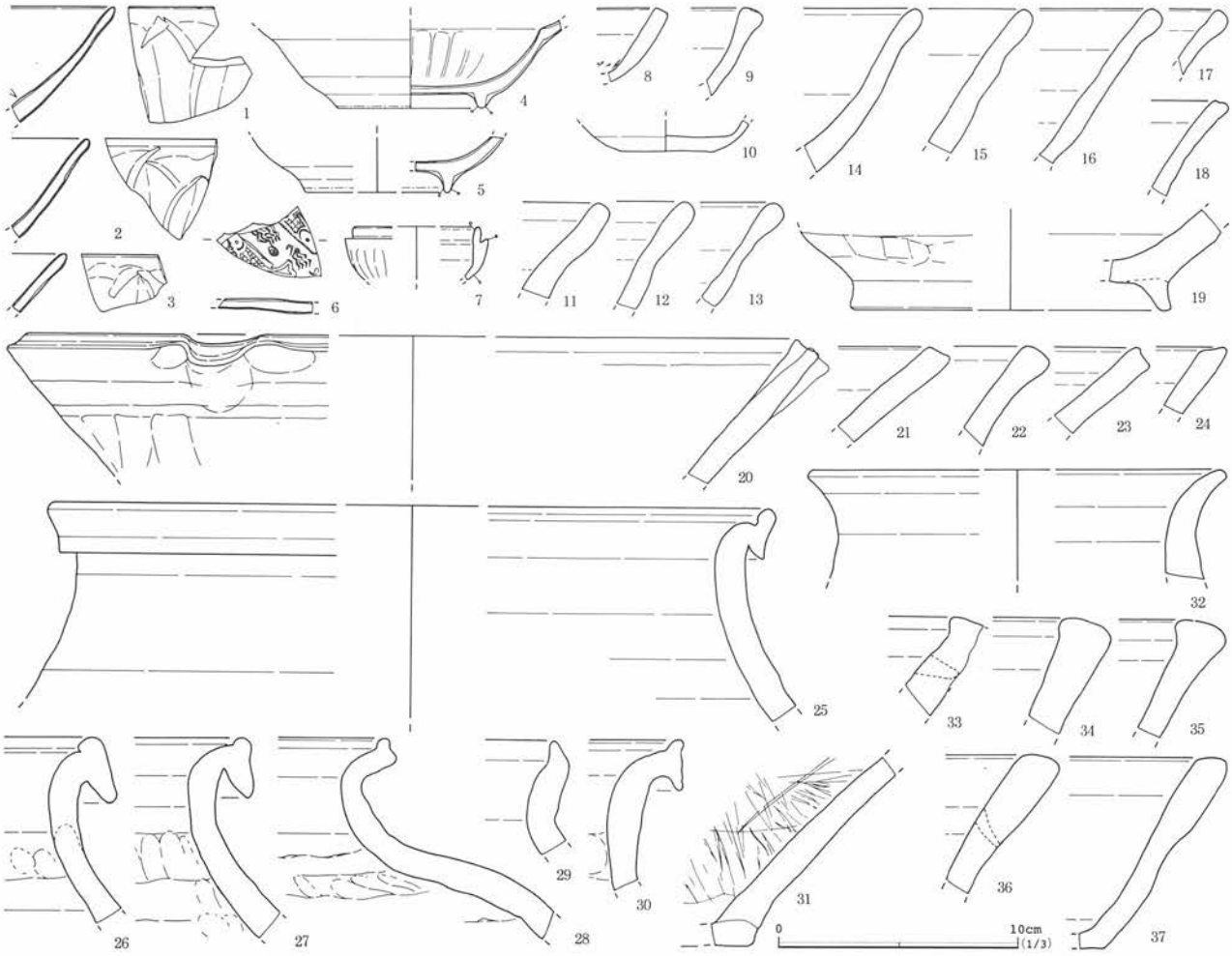


図11　1面下出土遺物（1）

1面の記録保存終了後、降雨の為調査区全体が水没する災難に見舞われたが、試掘壙の壁面選り自然科学分析（後章参照）を経て試掘壙断面を参考に2面へ向け掘り下げた。基本堆積土層の5層は、後述する2面の遺構群の埋立てと、軟弱な地盤を固めるべく他所から多量の土砂を持込んだ盛土・整地層であった。為に、図11～14に図示した遺物は、必ずしも付近の状況を示唆するものとは言切れない。

図11・12は1面を構成する黒褐色土層中からの出土遺物。概ね後掲する土丹層上面迄の出土遺物をここに含めたが、土丹層が明瞭密でない箇所もあり掘り過ぎて下層のものが採り上げられている可能性をなしとはしない。

図11の1～7は舶載陶磁器類。1～3は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。釉調は1が濃緑色、2が淡灰緑色、3が淡緑色。4は龍泉窯系青磁蓮弁文鉢。透明感のある緑色の釉が、畳付けを除き全面にやや厚く施釉される。5は龍泉窯系青磁で無文鉢。6は龍泉窯系青磁鉢類。内底部に双魚文が片切彫りで表現される。5・6は釉調灰緑色。7は青白磁合子の身。型捺し造りで乳白色の釉は極薄く掛けられる。

8～10は瀬戸窯諸製品。本層位から瀬戸窯の製品は、出土点数がかなり減少している。8は灰釉の卸皿。暗灰緑色の釉は刷毛塗り。9は灰釉の鉢類。灰緑色の釉は浸け掛け。10は入子。黒色微砂を含むが精緻な胎土で、外底面は糸切り。他に瀬戸窯の製品は、瓶子類・折縁深皿・碗類が出土している。

11～19は山茶碗窯系捏鉢。本層位から出土する捏鉢は、徐々に常滑窯のものを凌いで出土している。図示した口縁形態は概ね出土傾向を反映しており、口縁はやや肥厚するか自然に丸味を帯びるタイプが多く、高台部は19の様にやや「ハ」の字に開く形態が主流を占める。

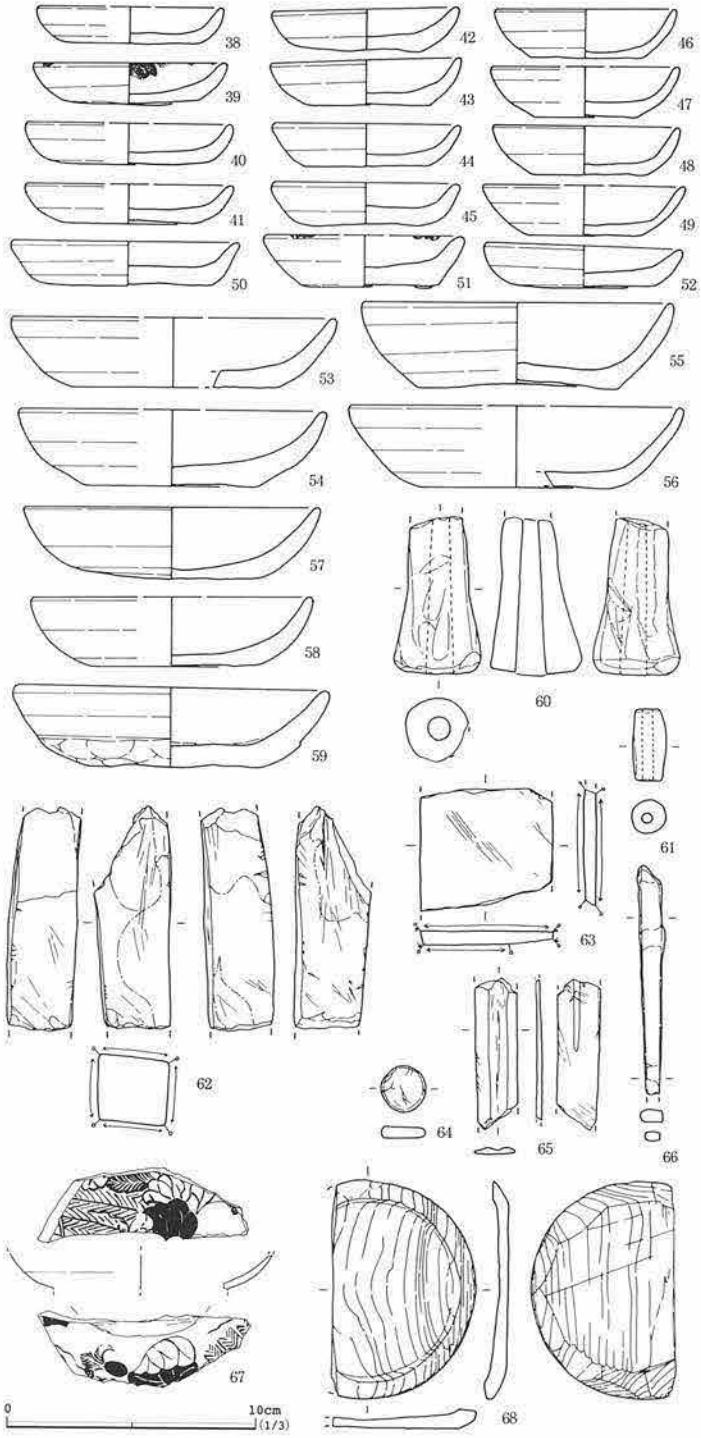


図12　1面下出土遺物（2）

20～24は常滑窯捏鉢。20は遺存個体で片口が2箇所あり、本来は三ッ口であろう。図示した口縁形態は素直に角張るものに偏ったが、内外に引かれるタイプも一定の割合で出土している。25～31は常滑窯の甕。口縁部の形態は、生産地編年で観てもかなり幅があるが、縁帯部が幅広のタイプは出土していない。32は渥美。小片の為、復元口径には不安がある。

33～37は火鉢で、何れも土器質浅鉢型。33・36は体部に内面から孔が空けられる。1面下とまとめた本層位中及び下層土炭層中からは多くの火鉢片が出土しているが、上層に比べて土器質のものが急激に増え、瓦器質輪花形のものはまだ出土するものの瓦質胎土で偏球状の側面観をもつタイプは姿を消している。

図12の38～59はかわらけ。59のみは手捏ね成形、他は全て糸切り底。間層ということもありやや器形に混在が観られるが、小型品の数点と53・55・59を除けば前掲1面の年代及び下層土丹層とは大きな時期差は感じられない。

61は土錘。前掲図10土壙24出土の一群と近似した法量。62・63は石製品で砥石。62は上野産中砥。63は鳴滝産の仕上げ砥。両側端面は成形時の鋸切断痕が明瞭に遺る。鳴滝砥は、特にその幅寸法には生産地側の規格性が高いことが知られているが、63の幅を当て填めると中世末以降に大量生産・消費される寸法であり、帰属相違或は鳴滝砥の幅寸法について一考の余地があろうか。

64・65は骨角製品。64は玩具の駒か。65は笄。67・68は木製品。67は漆器。黒漆地に朱漆で植物文と幾何学文の組み合わせか。68は皿状を呈するが用途不明。削り痕・木目が余りにも遺りが良く、東端攪乱の出土遺物が混在した不安がある。

図13は1面を構成する黒褐色土層除去後の、概ね後述土丹層上面で検出された獣骨。イヌの頭部と体幹骨がやや散乱した状態で出土した。墓壙足る掘込みは検出されず、骨格は必ずしも揃わず配置もずれており、2面更新時に他所より運び込まれた土砂に混入した可能性が高い。

図13　動物遺骸

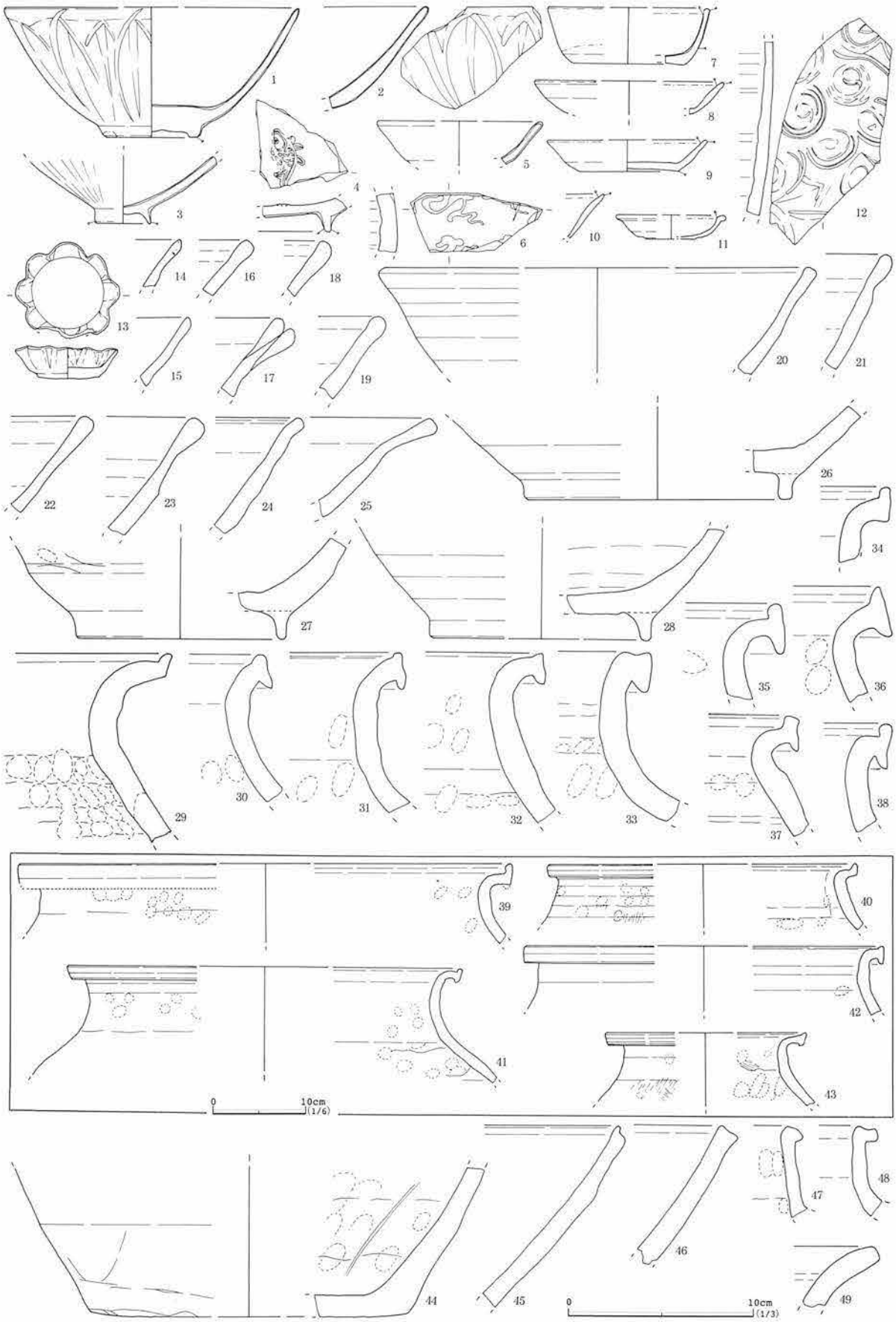


図14　1面下土丹層出土遺物（1）

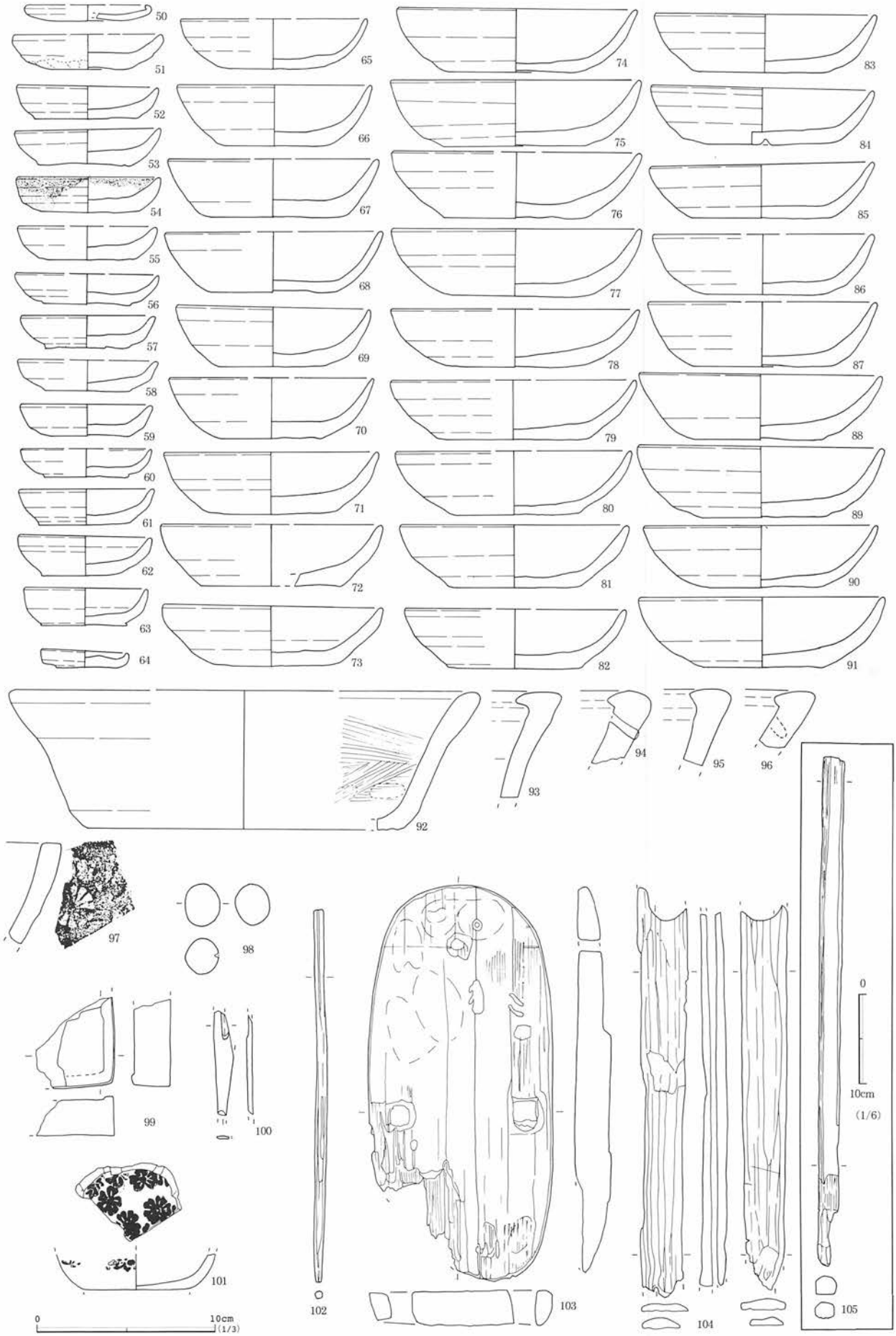


図15　1面下土丹層出土遺物（2）

図14の１～12は舶載陶磁器類。本層位辺りから出土数・器種共に増加する。１・２は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。釉調は共に濃緑色。３は龍泉窯系青磁蓮弁文鉢。釉調は透明感のある青緑色。４は龍泉窯系青磁双魚文鉢。双魚は型作りで貼付け、釉調は淡灰緑色。５は龍泉窯系青磁蓮弁文腰折鉢。灰青緑色の釉は失透する。６は高麗青磁。壺類の胴部片。淡濃緑色に表裏施釉され、文様部（雲形か？）は乳白色。７～10は白磁口兀皿。釉調は何れも灰白色系で、７・９は僅かに水色味を帯び、７の体部下方、９の外底面は露胎。11・12は青白磁。11の皿は、遺存片に歪みがある為、復元口径にはやや不安がある。内外面の釉は剝離・失透する。12は梅瓶の胴部片。渦巻文。

13は瀬戸窯の入子。８弁の輪花は、指頭或は木口状の工具にて押し出す。外底面に脚部は造られず、箆切り後調整。先にも触れたが、瀬戸窯製品の出土量は舶載陶磁器類と反比例する様に減少している。

14～28は南部山茶碗窯系捏鉢。14・15は小振りの器形になろうか。何れも内面は摩耗しよく使い込まれている。図示し得ない破片を併せ観ると、口縁形態は上層１面下のものと大差はないが、高台の形状が27・28の様にやや直立気味のタイプが多い。

29～44は常滑窯甕。39～43は縮尺１/６。同層位内で接合し、口径を復元し得た39・41～43の様な口縁形態が主流を占め、29の様なタイプも目に付く様になる。45・46は常滑窯の捏鉢。捏鉢類は山茶碗窯系の製品に圧されて出土量は少ない。47・48は常滑窯の壺類。胎土に小礫の夾雑が少ない。49は渥美窯の甕。胴部片は多数出土している。

図15の50～91はかわらけ。50・51は手捏ね成形、他は全て糸切り底。灰褐色若しくは灰燈色系を呈し、胎土・焼成は良好。前述常滑窯甕の口縁形態で観ると、手捏ね成形のものがもっと出土して良さそうなのだが、図化したものを含めて単純破片数で11点に過ぎない。小型では57～62の器形、口径12cm以下とした中型品も一定の出土割合を占め、75～82のタイプが大勢を占める等、かわらけだけを観れば上層の出土傾向及び年代観とそう差はない。図示した中で、52・53・63・64・69～78・84はかわらけ溜りとは把えなかったが、何れもグリッドＥ～Ｆ－３～４付近の同一層位出土であり一括性が高いとは言える。

93～98は火鉢。93～97は土器質浅鉢型。口縁形態は93～96の図示したタイプに偏るが、92の様な自然に丸味を帯びるものも小片ではあるが一定量出土している。94・96は内面から穿孔されるが、96は貫通しない。98は本層位中唯一図示できた瓦器質輪花型。やや小型の12弁菊花が陰刻される。

99の石製品は碁石であろうか、黒色を呈し花崗岩質の堅緻な石材。100の石製品は、丹波・鳴滝山系の硯。右前・ヨコフチ部が遺存し、裏面・側面の成形痕から観ても、硯箱に入れる大量生産品であろう。101は骨角製品で笄。102～106は木製品。102は黒漆地に赤漆で、桜のスタンプ文様。103は箸状の木製品。104は下駄。裏面に製作時の歯挽き痕が遺り、一木作りと思われる。歯は木目から破損したのであろう。105は用途不明木製品。本来同一物が木目から表裏剝離したのであろう。図上上方に径２cm弱のやや角張る孔、下方にも径２mm程の小孔。表面及び孔の内側も丁寧に削り成形されている。106も用途不明棒状木製品。縮尺１/６。断面丸味を帯びさせた不正方形に削り成形されている。径２cm程を測り、104と組合わせて糸紡ぎの部材とも考えられる。

図11・12の１面下の出土遺物を含めて、これらは他所から運び込まれた土砂中の遺物、則ち本調査地点の性格付や年代観には直接的には影響を及すとは言えないとも考えられるが、両層位中で出土しているかわらけと、常滑・山茶碗窯系を始めとする他遺物との間には年代的なずれがあり、遺構面の変遷及び下層出土遺物を併せ観て検討せねばならない。（汐見）

第２節　中世２面（図16～図25）

１面構成土黒褐色土層除去後の現地表下約１．７ｍ海抜約６．０ｍの基本土層６層暗茶褐色土上面を２面とした。先に述べた如く人為的な埋立て・盛り土整地の為か、密なる遺構群が良好に遺存し、出土遺物量・種類共に多い。

図16は、土丹層除去後の黒褐色土上で遺構精査を行った際の出土遺物。整理作業中に接合した破片は基本的に遺構内若しくはより下層に帰属させた。上層の１面上或は本層位に至る迄の出土遺物とは、若干の時代差が感じられ、又、各個体で観るとその年代幅が拡がりすぎる嫌いがある。採り上げの状況と共に１面下の間層２層の堆積状況を考慮する必要があろうか。

１～６は舶載陶磁器類。１は泉州窯系黄釉陶器の盤。口縁部は欠損しているが器高は５cm位と思わ

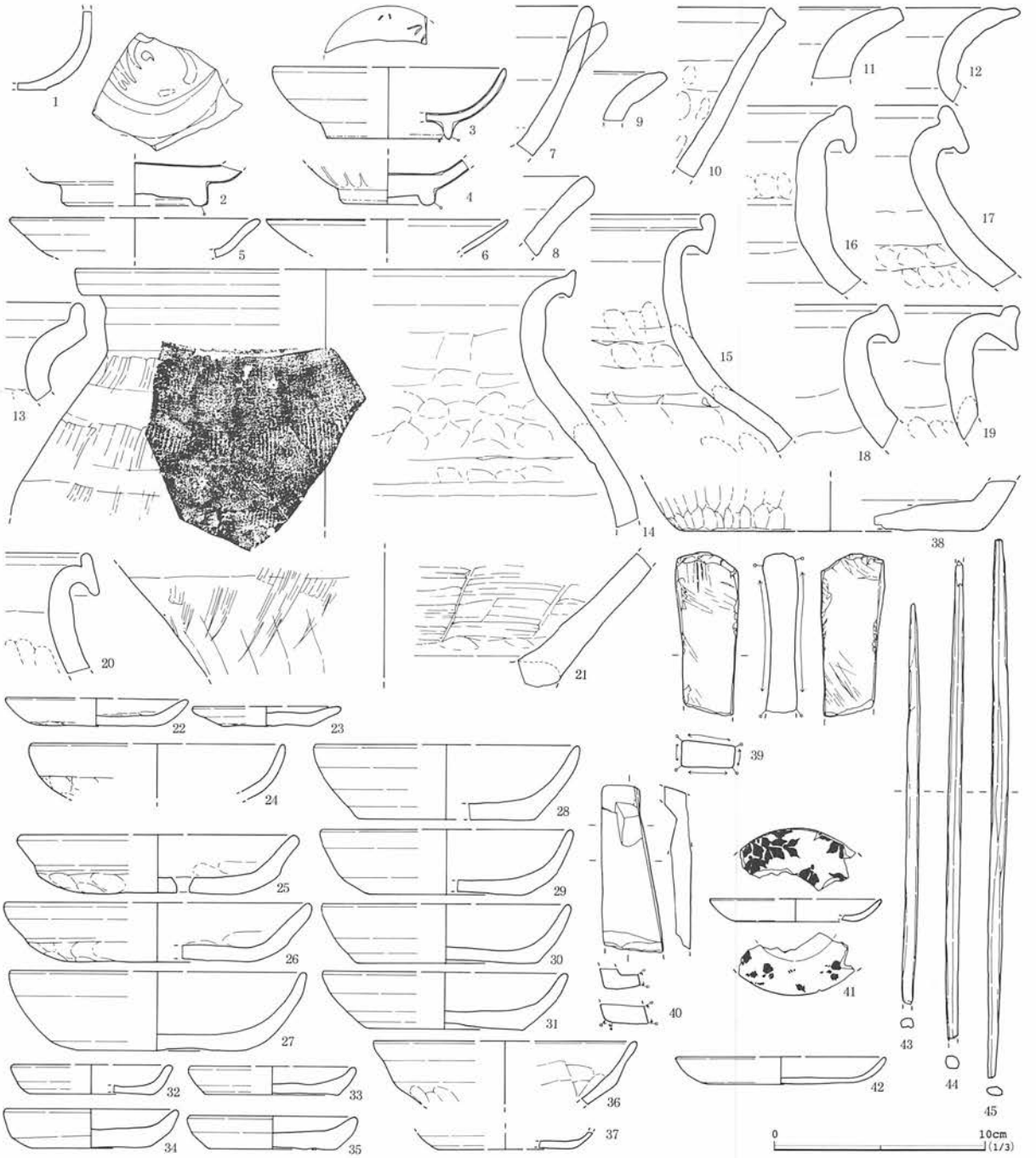


図16　２面上出土遺物

れる。胎土は灰黄色を呈し、夾雑物を含む。外面は露胎で黄褐色を呈し、内面は化粧掛け後釉が施され、灰黄色を呈する。2は龍泉窯系青磁劃花文碗。内底面に文様を有する。素地は灰白色を呈し、釉は灰緑色半透明である。高台畳付に部分的に釉が流れるが、外底部は露胎。3は龍泉窯系青磁無文皿。内底面に型捺しの文様を有する。素地は灰色を呈し、釉は灰緑色半透明。高台畳付は露胎。4は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。素地は灰白色を呈し、緻密である。釉は淡緑色透明で、高台脇まで掛けられる。5は白磁皿。素地は灰白色で、釉は淡灰色を呈する。6は青白磁皿。素地は灰白色で釉は淡灰青色を呈する。

7・8は山茶碗窯系捏鉢。共に胎土は灰色を呈し、7は硬質で口縁部に少量の降灰がみられる。8は夾雑物を含み粗胎である。

9は渥美窯甕口縁部片。上部に沈線状の凹みをもつ。胎土は灰白色を呈し、精良で粘性に富む。器表は黄緑色の釉が施されている。

10は常滑窯捏鉢口縁部。夾雑物を多く含む硬質な胎土で、器表共に黒灰色を呈する。

11～20は常滑窯甕口縁部。11・12は外反して上面に浅い沈線状の凹みをもつ。11は夾雑物を多く含むがしまりの良い胎土で灰色を呈する。器表は茶褐色で、口縁部に降灰がみられる。12は夾雑物少なく硬質な胎土で褐色を呈し、器表は暗赤褐色を呈する。13は小さく上方に折り返される口端部である。胎土は灰褐色を呈し、夾雑物少なくしまりが良い。器表は茶褐色を呈し、内面に降灰がみられる。14～20はN字状に折り返される口縁部である。14は内外面とも工具によるナデがみられる。胎土は灰褐色を呈し、夾雑物少なくしまりが良い。器表は暗褐色を呈する。15は小礫を含む粗胎土で灰黒色を呈する。器表は褐色を呈し、口縁部、肩部に降灰がみられる。16は小礫が多く若干の気孔も含むが硬質な胎土で灰黒色を呈する。器表は褐色を呈し、口縁部、肩部に降灰がみられる。17は夾雑物を多く含むがしまりが良い胎土で暗灰褐色を呈する。器表は褐色を呈し、内外面に降灰がみられる。18は焼成不良の胎土で淡茶褐色を呈し、器表は茶褐色を呈する。19は胎土・器表とも灰褐色を呈する。20は小礫を多く含む粗胎土で黒褐色を呈する。器表は暗茶褐色を呈し、口縁部に降灰がみられる。21は常滑窯甕下位部。内外面に工具によるナデがみられる。胎土は灰褐色を呈し、夾雑物を多く含むがしまりは良い。器表は暗褐色を呈する。

24は手捏ね白かわらけ。胎土は不純物を含んでいないが粗く、器表は灰白色を呈する。

22・23・25・26は手捏ねかわらけ。器表は概ね橙色乃至灰褐色を呈し、胎土・焼成共良好である。25は底部に中心よりずれた位置に穿孔を持つ。

27～35は糸切り底のかわらけ。概ね灰橙色乃至灰褐色を呈し、胎土、焼成共良好である。かわらけは多量に出土しているが、遺存状態が悪く、ほとんどが小片からの復元である。

36は吉備系土師質土器。貼り付け高台の付く碗であろう。内面はナデによる調整がされ、外面には指頭痕を残す。胎土は灰白色を呈し粗雑で焼成不良である。外面に煤のようなものが付着している。

37は産地不明小皿。内外底面にナデ調整が見られる。胎土は灰白色を呈し、粗雑である。白かわらけに似ているが滑らかさがない。

38は滑石鍋の底部。長崎県西彼杵半島産で、石質は器表灰銀灰色ながら黒色の鉱質を併せ持つ類。外面は工具による削痕がみられる。小片からの復元の為底径には不安がある。39は上野産の中砥。緑色味が強く、砥沢系の石質であろう。鎌類研ぎに総面使用される。40は丹波・鳴滝山系の硯。裏面・側面の調整は丁寧だが、断面形から硯箱に入れる量産品である。

41・42は漆器の皿。41は内外面黒漆地である。41は内外面に赤漆による楓の文様が手描きされている。42は内外面黒漆無文である。

43・44・45は箸状木製品。　（山上）

図17は、本調査に於て最も生活臭の強い密なる遺構群が検出された中世２面の全測図。概観すると、調査区南端に検出された溝は通路状の地業面を伴い、その縁辺部では他の遺構は希薄になることから、区画・地割を暗示すると考えられよう。他遺構群は調査区の北或は西寄りと南東隅に偏る傾向にあり、軸方向は溝の方向を意識或は規制される様に概ね直行・平行関係にある。土壙群の中には、平面方形を呈し内部構造を伴う事が想定し得る遺構が、同範囲内に重複して検出され方形土壙として扱った。

以下、溝から順に各遺構について触れていく。

溝１（図18・19、出土遺物図20）

調査区の南端で東西方向に横断する様に検出された。確認レベル海抜5.8～5.7m程、深さ40cm前後を測り、溝幅は南側肩が調査区外の為不明であるが最大1.45mを測る。覆土最下層に腐食土混じりの粗砂層が僅かに検出されたが、それ以外は土丹瓦礫層で占められていた。２面更新時の土丹層が一気に投込まれた様相を観せ、その為か検出された杭は殆どが折れていたり倒れ込んだ状態であった。

構造は、遺存状況が悪い為部分的な観察に頼るが、打込んだ杭や柱に依り横板を支える簡易なもので、網代状に組んでいたかもしれない。杭や柱は全て再利用品と想われ長さ・幅に一定の企画は認められず、横板も手斧痕が遺るものの井戸の立板等の部材を再利用し２～３段積んでいる様である。杭の並びから、短期間に数回の改悛が考えられるが明確に把握し得なかった。確認レベル及び底面のレベルから、僅かながら東から西への傾斜が認められる。

溝の北側は、杭・横板を組んだ後に裏込めされその上面を破砕土丹で地業している様に観受けられ、通路状の遺構ではないかと考えている。２面更新時の土丹層と異なり、土丹塊が形を留めず突き潰され上面には炭化物と腐食有機物を含む粘土層が薄く堆積していた為、別時期の堆積と判断した。グリッドＣ～Ｅ間で顕著で、Ｃより西では後述する方形土壙群の中では最も新しい土壙27に因り失われたのか、又、Ｅより東では前述土丹層掘下げの際に掘り過ぎた為か、明確ではない。

図20は溝１に係わる出土遺物。溝１出土遺物には、遺構範囲確認後の部材と思われる杭や板材内側からの出土遺物を含めた。溝１裏込め出土遺物には、通路状遺構破砕土丹層除去から下層の３面構成土確認までの出土遺物をここに含めた。

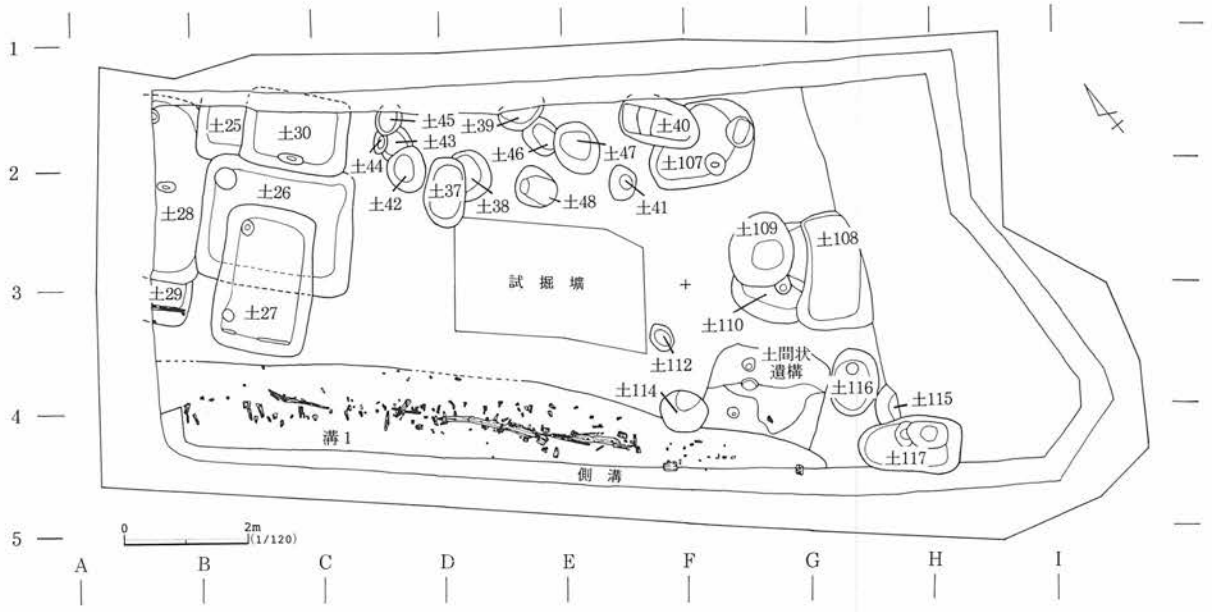


図17　中世２面全測図

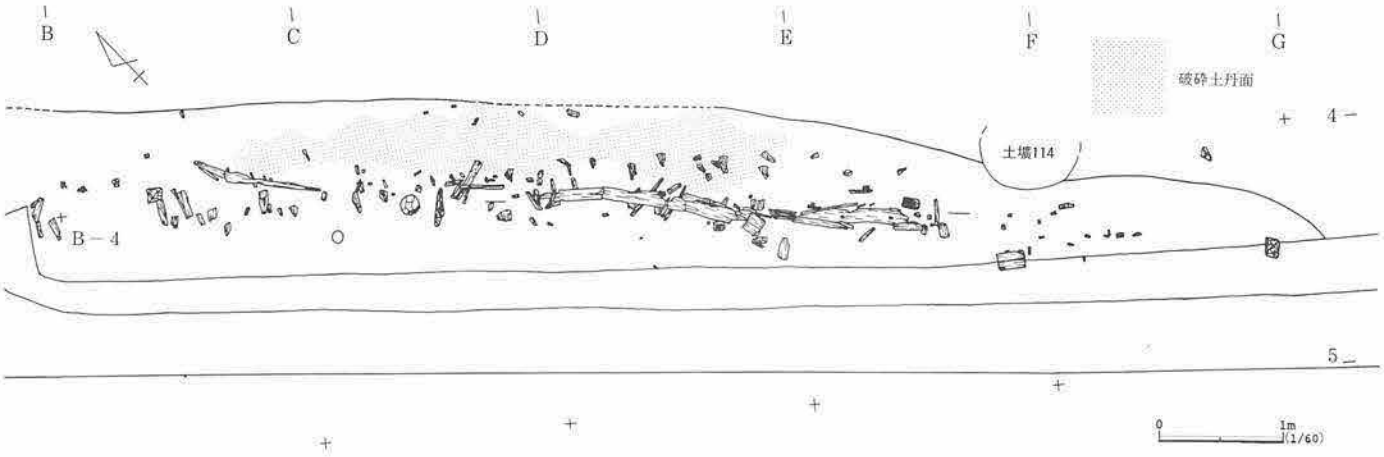


図18　２面検出の遺構（１）・溝１

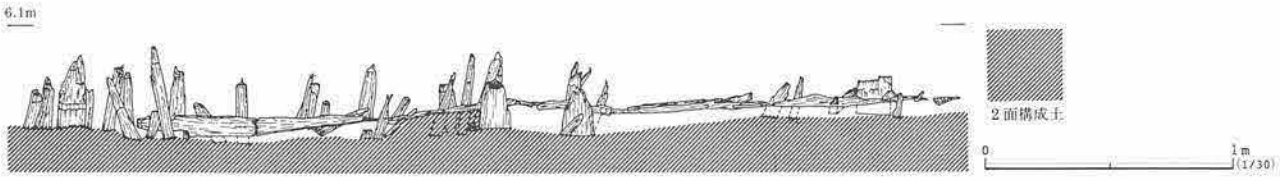


図19　溝１正面図（部分）

１は泉州窯系黄釉陶器の盤になろうか。釉調は黄色味灰白色で、外底面は砂底で露胎。２は龍泉窯系蓮弁文の碗。外面が図示されていないが蓮弁は片切り彫りの複弁で、釉調は透明感のある濃緑色。

３は胎土暗灰色・器表灰白色を呈する碗。内面ナデ調整、外面はナデ調整後箆削りで仕上げられる。産地は東海付近であろうか。４は山茶碗としたが小型の捏鉢かもしれない。内面口唇付近には調整痕が観られるが、以下は滑らかに摩耗する。５～12は山茶碗窯系捏鉢。溝内から多量に出土し、形状から観た量的な出土傾向を反映させて図示している。13～17は常滑窯諸製品。13は捏鉢。溝内から出土した捏鉢片で図化し得たのはほぼこの１点のみである。14・15は甕。２点しか図示し得えず、出土傾向はこの２点及び図16－14～20と器表・口縁形態・胎土共にそう大差はない。16・17は鳶口壷。

18は土器質の火鉢。口唇部を外側に引出す。内面には煤が付着する。19はかわらけ質円盤状の製品。中央に焼成後に穿孔される。20～31はかわらけ。器表灰褐色乃至灰燈色を呈し、胎土・焼成は良好。20・21は手捏ね、他は糸切り底。20・31は白かわらけ。

32の木製品は、同形状の凹凸部を十文字に組合わせて使用すると想われ、糸紡ぎの部材であろうか。表裏面は工具はつり痕から観て造りは丁寧で、角は面取りされ中央に径2.5cm前後の孔が空けられる。上下両端には向合う配置で「二」「三」と読める刻みが入り墨色される。33は箸状木製品。

図22は、溝１の北側を平行して地業され通路状遺構と考えられる、破砕土丹層中の出土遺物。

34は白磁の壺。釉調は水青色味を帯びる白色系。35は図21の３と同質の碗。36は南部系山茶碗。滑らかに摩滅した内面と破損断面には煤が付着し、破損後に燈明皿にでも転用されたのであろう、外底高台部は籾殻痕が観察されるものの摩耗が著しい。

37は亀山窯の甕。27破片が接合し、頸部から肩部やや上まで径の約3/4程まで復元し得たが、調査時出土全破片を探したが口縁部は出土していない。38は渥美窯甕。39は渥美窯捏鉢。40は常滑窯の甕。

41～47はかわらけ。41は手捏ね成形の白かわらけ。42は手捏ねで器表灰褐色。43～47は糸切り底で、概ね器表灰褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。内、13は内外面に墨書があるが判読不能。

16は漆器の椀。黒漆地に、赤漆で亀甲文と菊花文を組合わせ３個一組のスタンプを内外面に配する。

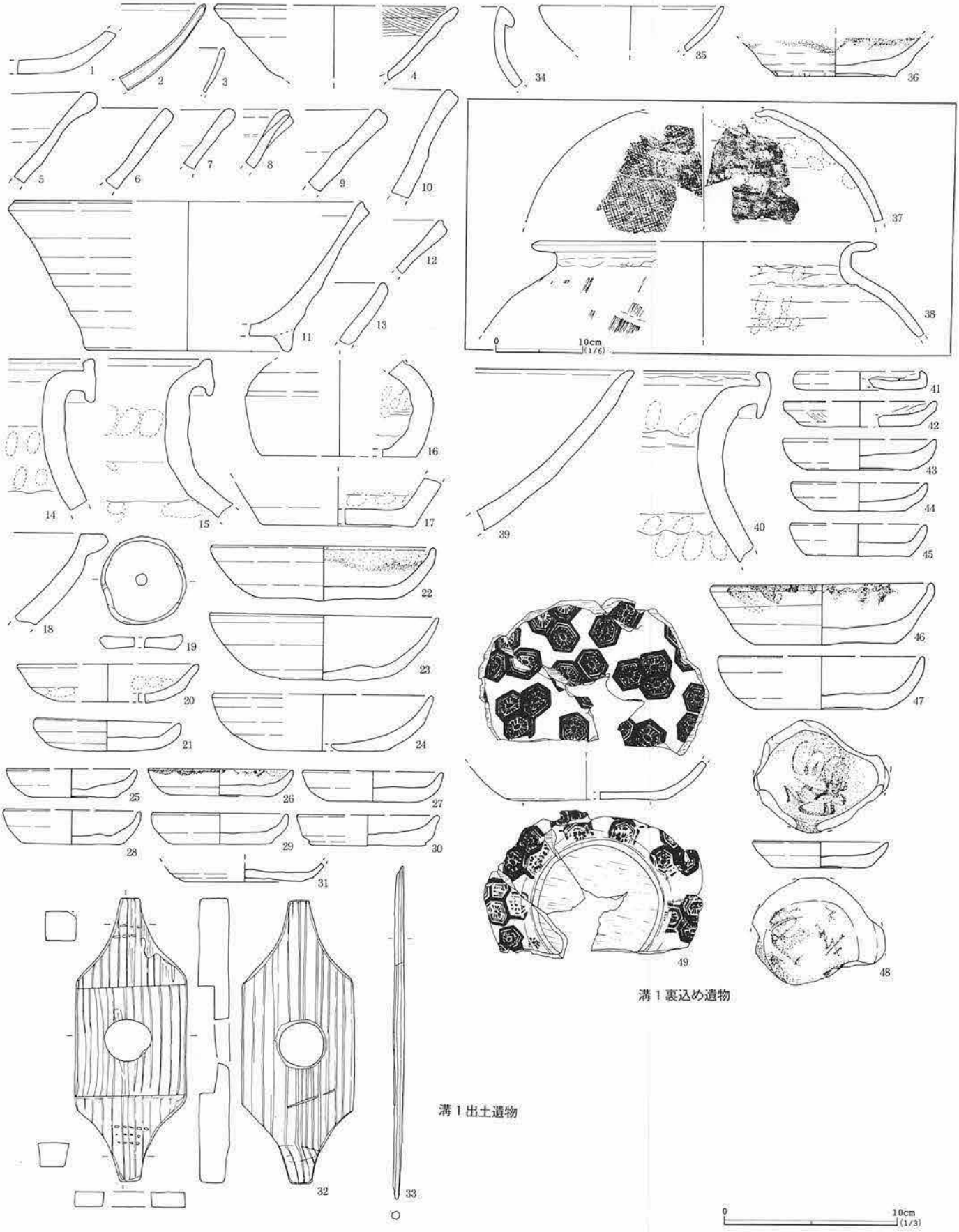


図20　溝１出土遺物

方形土壙（図21・出土遺物図22）

図21は、調査区北西端で重複して検出された方形土壙群。本調査で検出された土壙群には、平面形不整形で単にゴミ捨て穴若しくは用途・性格不明とされる土壙とは異なり、平面形は概ね方形を呈し、底面や壁面に内部構造を考え得る一群を検出した。これまでに鎌倉市内では、平面方形を呈し内部構造を考え得る建物としての名称として「方形竪穴建築址」「板壁掘立柱建物」等があるが、本調査で検出された遺構は各々の定義や検出例には馴染まないと考え、用途を含めて曖昧に方形土壙とした。

２面遺構精査の時に北西端一体は一見全面覆土の如く観察され、堆積覆土の微妙な違いから掘り分けねばならない状況であった。この為に、本来遺構内に帰属するべき遺物が前掲２面上として採り上げた一群に混在した可能性はある。土壙25～30の６基の重複関係を観ると、古い順に土壙29→土壙28→土壙25→土壙30→土壙26であり、土壙27は土壙30よりは古いが他とは重複関係にない為に不明。最大限に考えてもこの範囲内では３基以上同時期には存在し得ず、類似した覆土の様相等から近接した時期の一連の建替えと考えられようか。以下古い順に個々に触れていく。

土壙29は確認範囲南北70cm×東西64cm、掘込みレベルは5.8m。調査区西壁土層断面の観察から、掘り窪めた後に壁（？）構造を施し裏込めをした様な痕跡も窺える。掘り方南壁際に杭、遺構主体部際に横板２枚とその支えであろうか杭を確認している。

土壙28は南北295cm×東西確認範囲で70cm、掘込みレベルは5.8m。長軸が南北方向と考えられる長方形を呈し、長軸中央付近に深さ20cm程の長楕円形のピット、その北延長線上北壁下場際には深さ10cm程のピット若しくは板材圧痕を確認している。底面は強化の為かしまりの良い褐色土で敷き固められ、土層断面からは板材痕とも考えられる腐食土層が２箇所観られる。

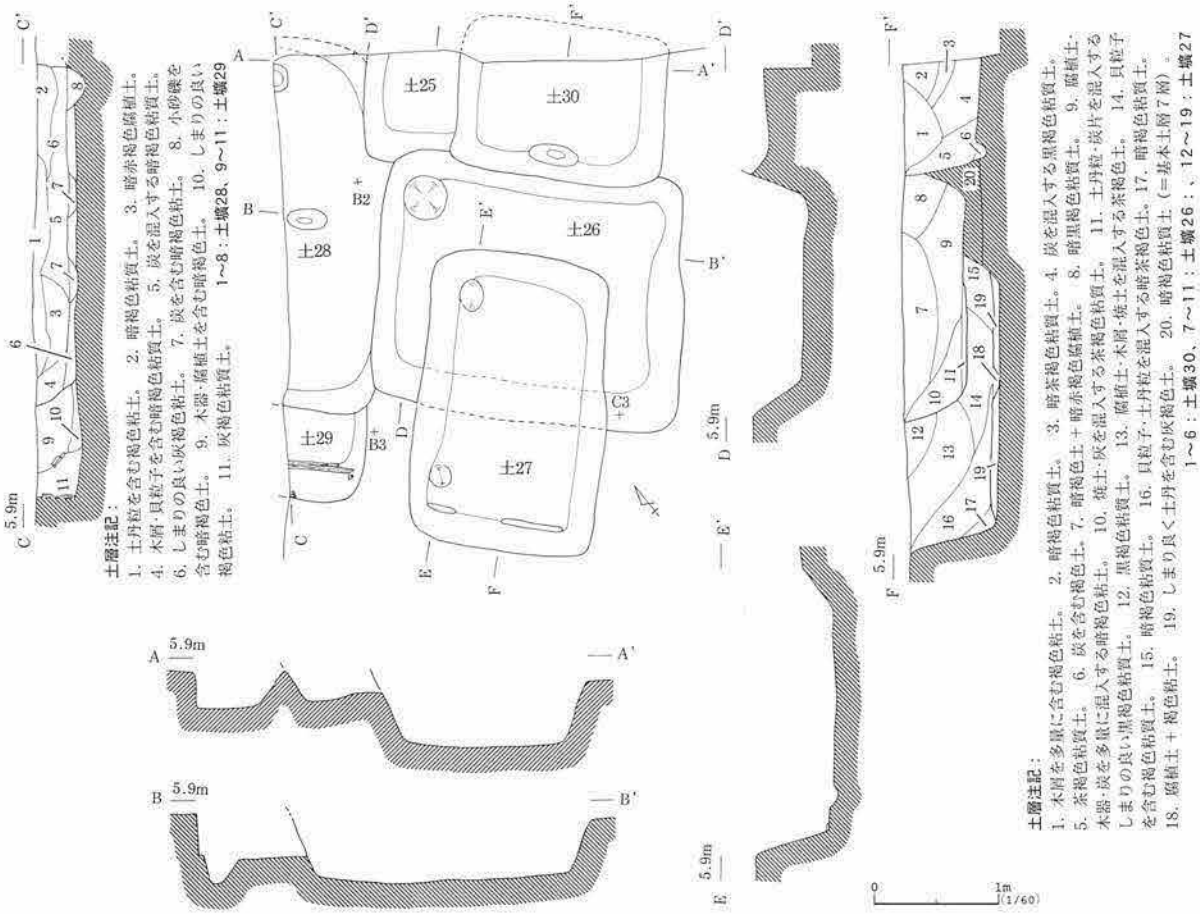


図21　２面検出の遺構（２）・方形土壙

土壙25は確認範囲で南北87cm×東西74cm、掘込みレベルは5.78m。底面の様相や確認規模、或は構造を類推する遺構が共に確認されていない為、本来方形土壙の名称を付さない方が良いかもしれない。

土壙30は南北124cm×東西170cm、掘込みレベルは5.78m。南北範囲は側溝を挟んだ調査区北壁土層断面に東壁・西壁の掘込みが確認されなかった為、調査区内で周り込むものと判断した。南壁直下中央下場際に、深さ10cm程のピット若しくは板材圧痕を確認している。

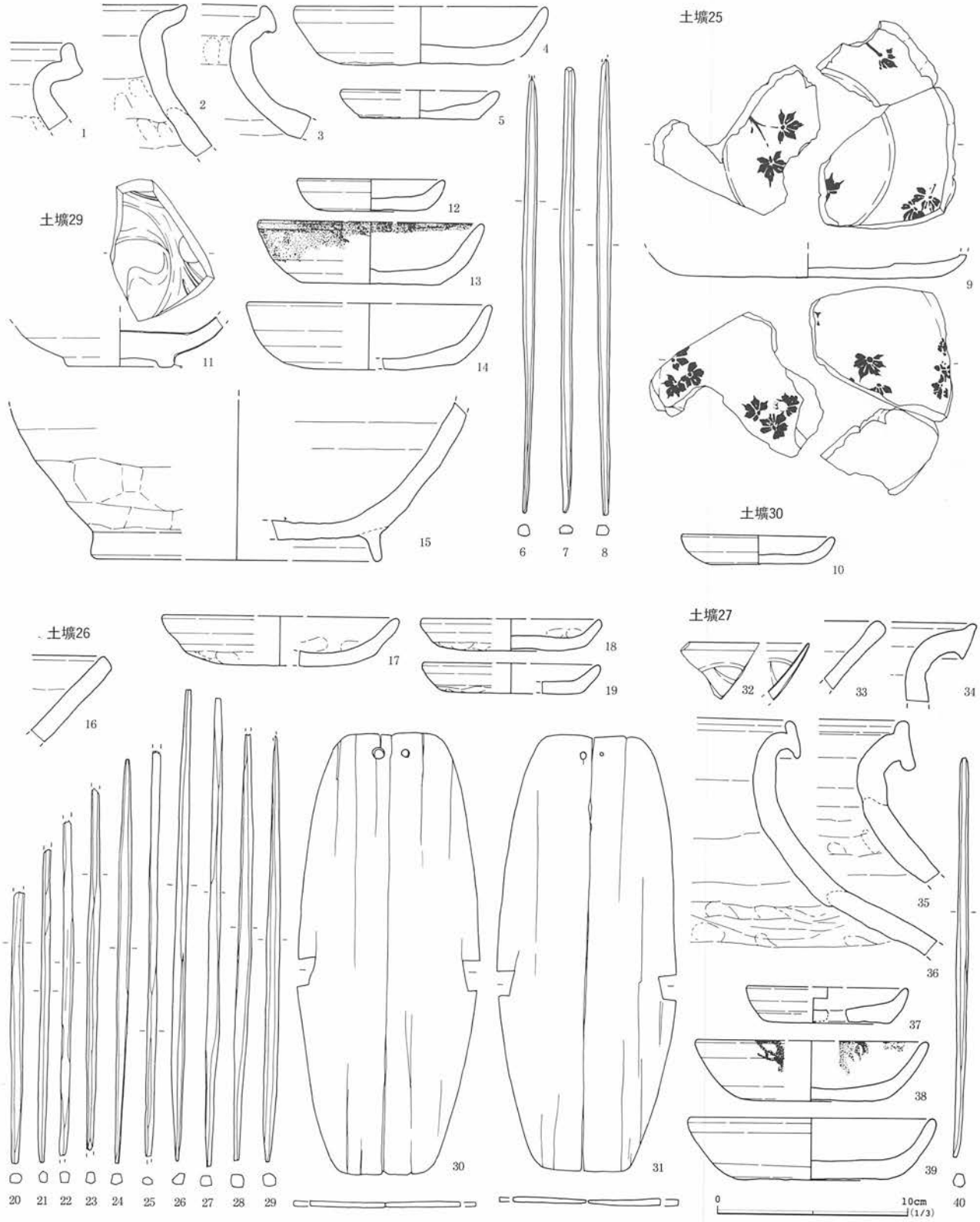


図22　方形土壙内出土遺物

土壙26は上場で南北203cm×東西240cm、下場で南北150cm×東西200cmを測り。掘込ベルは5.77m。調査時のプラン確認の甘さ故、下層に重複する土壙27を先に掘り上げてしまい、平面図・規模は土層断面から復元した。北西隅壁直下に板材圧痕と考えられる深さ10cmにも満たない擂鉢状の遺構を確認している。下層土壙27と重複する範囲の底面には、強化を図る或は平坦面の確保の為にか土丹粒を混交し、敷き固められている。

土壙27は南北238cm×東西156cm、掘込みレベルは5.8m。南壁直下に角材状の圧痕、壁沿いに板材圧痕と考えられる深さ10cmにも満たない擂鉢状の遺構を確認している。又、底面は土丹粒を混交した粘質土で固められている。

図22は方形土壙内の出土遺物。前述した様に検出時の様相から、各遺構の上層部の出土遺物は前掲2面上として採り上げたものに混在した為か、各遺構毎に図示できた遺物点数は少ない。生活の痕跡を感じさせる遺構群ではあるが、土壙26から箸状木製品が多量に出土していることを除けば出土傾向に際だった特徴はなく、遺物から各土壙の機能を言及するのは困難な状況である。

1～8は土壙28出土。1～3は常滑窯の甕。下層2面下の出土傾向がやや窺える傾向であろうか。4・5は糸切り底のかわらけ。器表は灰褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。6～8は箸状木製品。他に図示し得なかった出土遺物は、龍泉窯系劃花文碗、渥美窯甕、捏鉢には常滑窯のものは含まれず殆どが南部山茶碗窯系、かわらけには手捏ね成形のものが含まれる。

9は土壙25出土の漆器椀。遺存状態が悪く、出土状況から復元図化した。黒漆地に手書であろうか楓文が配される。他に糸切り底のかわらけ片、常滑窯の甕胴部片が出土している。

10は土壙30出土のかわらけ。糸切り底で器表灰燈色を呈し、胎土・焼成共に良好。本遺構からは、図化し得るものは少なかったが木屑が多量に出土している。

11～15は土壙29出土。11は龍泉窯系青磁劃花文碗。12～14は糸切り底のかわらけ。15は南部山茶碗窯系捏鉢。

16～31は土壙26出土。16は常滑窯の捏鉢。胎土は小礫を含まずしまり良い。17～19はかわらけ。17・18は手捏ね成形、19は糸切り底。器表灰褐色系で、胎土・焼成共に良好。かわらけは出土破片数で観れば、糸切り底の方が多く出土している。20～29は箸状木製品。特にまとまって出土したわけではないが本遺構内からは多量に出土し、表面の削り痕が明瞭なものを図示した。30・31は板草履の芯。並べて図示しているが特に出土状況や形状から左右一組という様には考えていない。他に渥美窯捏鉢、赤間産硯片等が出土している。

32～40は土壙27出土。32は龍泉窯系青磁劃花文碗。淡濃緑色系の釉。33は南部山茶碗窯系捏鉢。胎土に小礫を含まず、口唇部には降灰が遺る。34～36は常滑窯甕。37～39は糸切り底のかわらけ。37は中心からややずれた位置に穿孔される。手捏ね成形のかわらけも出土している。40は箸状木製品。他に渥美窯製品は捏鉢・甕は何れも胴部片が、土器質浅鉢型火鉢も出土はしている。

図23は2面検出の土壙とその出土遺物、図24は土壙内出土遺物。

土壙38・42～45は、何れも用途・性格不明。38・42は上場径70cm内外、43～45は30～50cm内外の何れも不整円形を呈し、覆土は暗茶褐色粘質土。1は土壙45出土のかわらけ。糸切り底で器表灰燈色を呈し、胎土・焼成共に良好。2・3は土壙44出土。2は手捏ね成形のかわらけ。器表灰褐色を呈し、胎土は良好だが焼成はやや甘い。3の瓦は女瓦。凹面は布目痕を遺し、凸面叩き痕をナデ消し。被熱に因り著しく歪む。4は土壙44出土の常滑窯の甕。土壙43からは手捏ね成形のかわらけ、土壙38からは渥美窯捏鉢片が出土しているが、小片の為図示し得なかった。

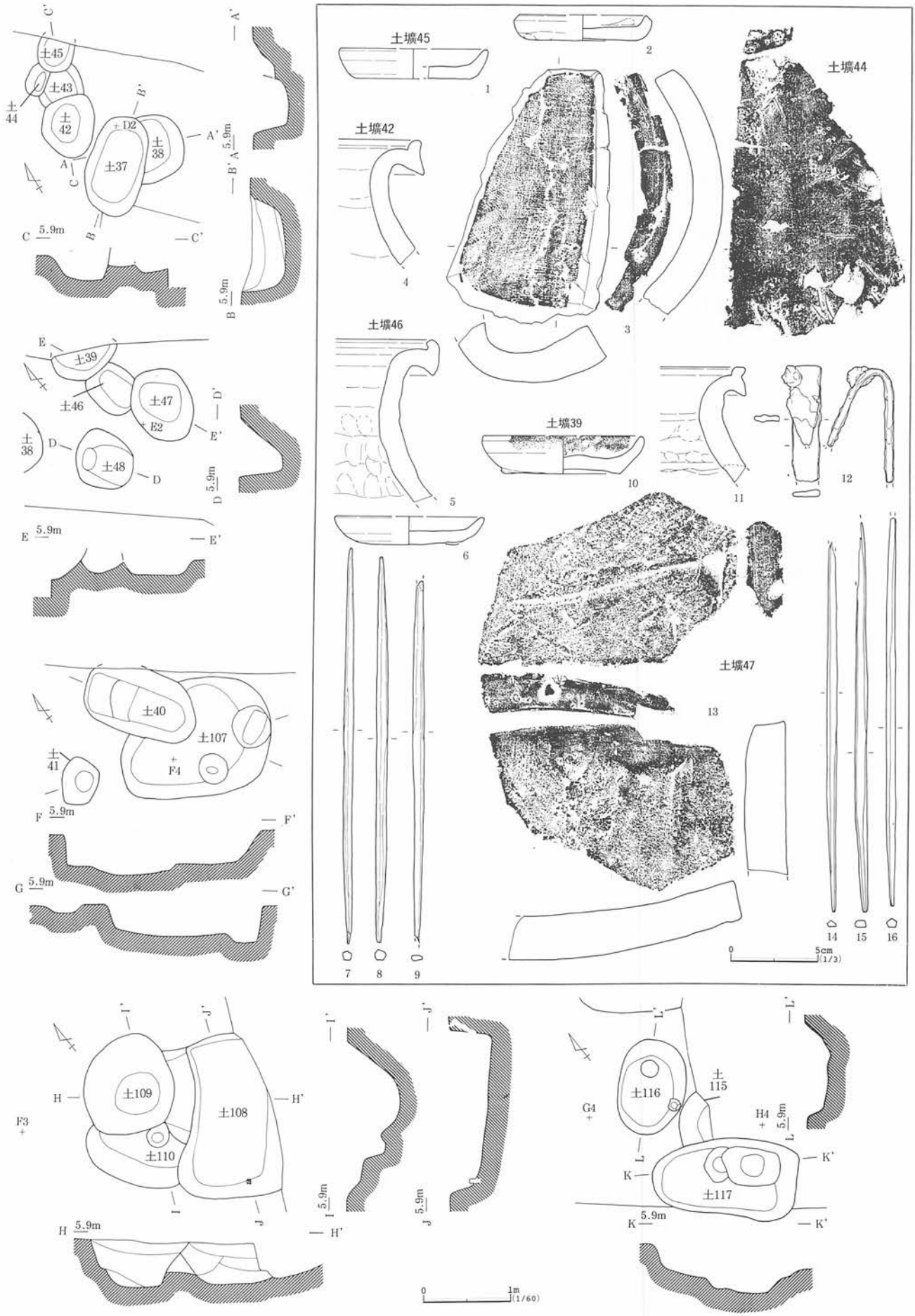


図23　2面検出の遺構（3）・土壙及び出土遺物（1）

土壙37は上場径南北115cm×東西65cmを測る不整長方形を呈し、深さは確認レベルから40cm程。覆土は3層に分れ、上層から木屑・腐植土を含む褐色粘土、木片・種子・貝粒子を含む暗赤褐色乃至暗黄褐色腐食粘土、砂粒・炭化物を含む暗褐色粘質土である。遺物は形状を留めない木片と貝粒子以外は殆ど出土せず、平面の形状・覆土・占地する場所等を考え併せると、やや特徴的と言える。自然科学分析の結果、周囲の土壌サンプル中からは寄生虫卵・鞭虫卵が多く検出されており、本土壙に関しては後章で若干触れたい。

土壙39・46～47は、平面形不整円形で上場径70cm内外を測り深さは50cm程、覆土は暗茶色粘質土で性格・用途は不明。5～9は土壙46出土。5は常滑窯の甕。6は糸切り底のかわらけ。器表灰燈色を呈し胎土・焼成共に良好だが、全体に歪んでいる。7～9は箸状木製品。10は土壙39出土糸切り底のかわらけ。器表は灰燈色を呈し、胎土・焼成共に良好、内外面口唇下位には煤が付着。11～16は土壙47出土。11は常滑窯甕。12は用途不明鉄製品。13の瓦は女瓦で、凹面には布目痕、凸面には斜格子の叩き目が遺る。14～16は箸状木製品。土壙48からは常滑窯甕片・手捏ね成形のかわらけが出土しているが、図示し得なかった。

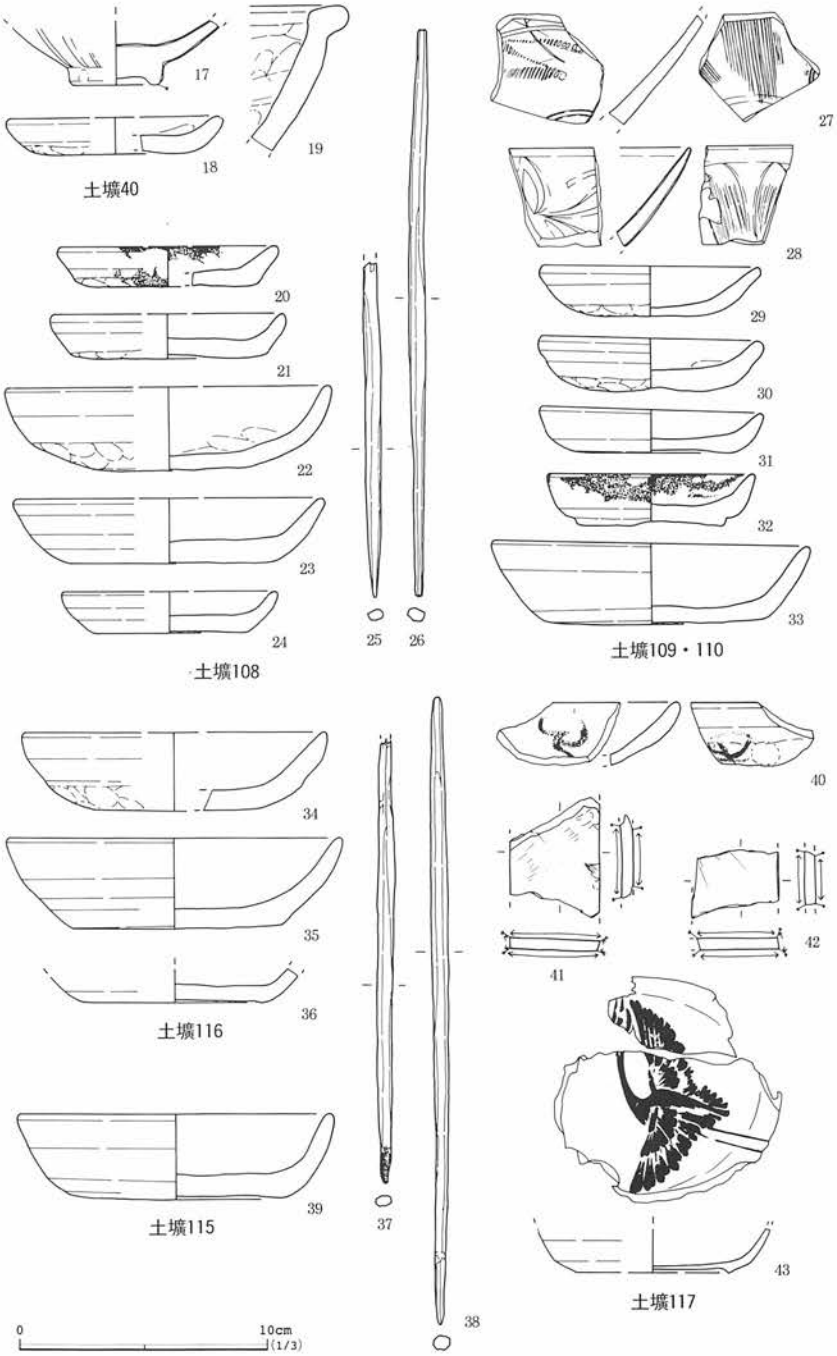


図24　2面遺構内出土遺物（2）

土壙40・107は、共通して覆土中に暗赤褐色粘土を混入する。土壙40は東西135cm×南北80cmの不整長方形を呈し、深さは西側は40cm程で途中段が付き東側では50cm程。土壙10は東西185cm×南北最大135cmの不正形を呈し、深さは40cm程で径50cm内外のピットを2口伴う。内、北側のピットは礎板が抜取られたが如く、底面は方形を呈する。図24の17～19は土壙40出土。17は龍泉窯系青磁蓮弁文鉢。釉調は透明感のある明緑色。18は手捏ね成形のかわらけ。19は土器質の火鉢。土壙107からは糸切り底のかわらけ・常滑窯甕・木片等が出土しているが、図示し得なかった。

土壙108～110は当初重複する３基の土壙と観られたが、土層断面から観ると土壙108と土壙109に因り失われた別の土壙が１基在る事が分った。この土壙からの出土遺物は土壙108に混在している。土壙108は東西185cm×南北最大で120cmの不整長方形を呈し深さ50cm程、南東隅付近には杭が１本打込まれている。この杭以外には構造を推定するものは観られなかった為、方形土壙には含めなかった。覆土は砂質土混じりの褐色粘質土。土壙109は、東西最大100cm×南北115cmの不整円形を呈し深さ50cm程。土壙110は全体形は不明だが、底面には小ピットを１口伴う。覆土は何れも暗茶褐色粘質土。図24の20～26は土壙108出土。20～24はかわらけで20～22は手捏ね成形、23・24は糸切り底。何れも器表灰褐色系で、胎土・焼成共に概ね良好。20は内外面に煤が付着する。25・26は箸状木製品。27～33は土壙109・110出土。27・28は同安窯系青磁碗。釉調は灰緑色系。29～33はかわらけで、29・30は手捏ね成形、31～33は糸切り底。32は内外面に煤が付着する。

土壙116～117は覆土中に暗赤褐色粘土と木屑を共通して含む。土壙116は南北110cm×東西80cmの不整円形を呈し、深さ20cm程で底面北側には擂鉢状のピットを伴う。土壙117は東西180cm×南北80cmの不整長方形を呈し深さ50cm程。図中のピット状の掘込みは、１面遺構の掘り残しかもしれない。34～38は土壙116出土。34は手捏ね成形、35は糸切り底のかわらけ。共に器表灰褐色系で、胎土・焼成は共に良好。36は糸切り底の白かわらけ。精緻な胎土で焼成も良好。37・38は箸状木製品。39は土壙115出土の糸切り底のかわらけ。40～43は土壙117出土。40は手捏ね成形のかわらけ片。器壁内外面によく似た墨書が観られる。41・42の石製品は何れも砥石で、鳴滝産の仕上げ砥。側端面には成形時の鋸痕を遺す。43は漆器碗。黒漆地に朱漆で鶴丸文が手書される。

土間状遺構（図25）

グリッドG－４北西一帯で検出した、部分的な土丹事業の範囲を土間状遺構とした。下層３面の土壙直上に中り緩い地盤を固める為とも考えられたが、軸方向が溝や通路状遺構と同じであり、この土丹地業から掘り込んだピットが２口検出された為単独の遺構として扱った。２面全体の遺構配置から観ると、この土間状遺構を境に東西方向で２分される様にも観える。土丹地業が密に且つ良好に遺存した範囲をスクリーントーンで図示した。２面構成土の窪みに炭化物・砂粒混じりの褐色粘質土を盛り、その上に斜面状に破砕土丹を敷き固めて人為的に貼っている。この土丹層中からは遺物は全く出土しなかった。図25―１は、土間状遺構土丹面直上の出土遺物。夾雑物の少ない砂質に富む土器質の胎土で、比較的良く焼き締る。内面下位は指頭痕を遺すが、内面上位及び外面は横方向の丁寧なナデ調整、径３mm程の小孔が不規則な配置で４カ所認められる。また、２箇所の小孔間は破損断面ではないものの、成形時の調整なのか、破損後の二次的な調整なのかは不明。口唇部は受け口状を呈し、全体に被熱痕が顕著でもあり鋳型とも考えられようか。或は図示したのは天地逆で蓋物かもしれない。（汐見）

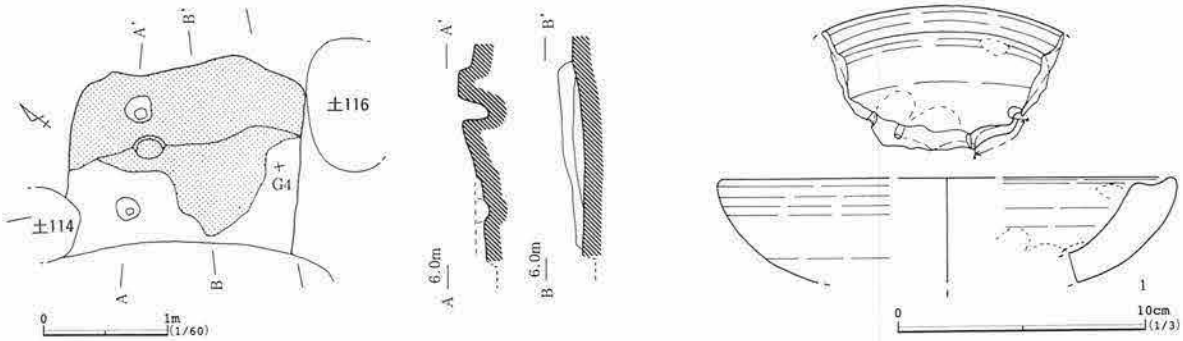


図25　２面検出の遺構（４）・土間状遺構・出土遺物

第４章　調査成果

第１節　中世３面以下の遺構（図26－1～3）

第２章でも触れた様に本調査は本来、西半分を国庫補助事業分、東半分を事業者負担分と分割されていた。然し乍同一平面上に拡がる生活面や遺構を分割することは、後に煩雑な誤解を招く恐れがあり、鎌倉市教育委員会及び事業者の了解を得て、本報文では中世２面までの遺構と遺物を対象とした。２面以下の遺構と遺物については、若宮大路周辺遺跡群発掘調査団刊行の報告書に譲るが、後項の自然科学分析にも拘る事もあり各面の全測図はここに提示する。

図26－１は、中世３面の遺構全測図。現地表下約２ｍ・海抜約5.7ｍ前後を測る。遺構群が希薄に観える範囲は、２面の遺構により削平された部分である。南西端には、全体形・規模は不明ではあるが、杭穴を伴う方形竪穴状の遺構が検出されている。溝や区画を暗示する遺構は検出されていないが、方形竪穴状遺構と他の遺構群の方向性を観ると、２面の遺構軸方向は概ねこの時期に成立している様である。尚、後掲の花粉分析の結果、３面更新時に盛土・整地された土層から寄生虫卵が多量に検出されていることが分った。これについては遺構の性格と併せ、後項で若干述べる。

出土遺物は、３面上・同遺構内を併せ観ると、かわらけが轆轤成形のものより手捏ね成形ものが多く出土している。瀬戸窯諸製品は殆ど姿を消し、常滑は相変らず多量に出土するがＮ字状口縁のタイプは殆ど出土せず、渥美の出土量が増える。年代的には13世紀中頃～後半であろうか。

図26－２は、中世４面の遺構全測図。現地表下約2.3ｍ・海抜約5.4ｍ前後を測る。試掘壙断面の観察からは、中世地山層に至る漸移層とも想われていたが、上面で精査したところ緩やかな円弧状を描く概ね東西方向の浅い溝を３状と、ピットを数十口検出した。溝底部には、いずれも不規則な配置で杭穴状の小穴を伴い、竹矢来或は芝垣の根元掘り方かとも考えている。ピット群は、現段階では規則的な配置は把握できておらず、掘立柱建物或は柵列等があるか否かは不明。

出土遺物は小破片ばかり十数点しかなく、年代的には漠然と13世紀中頃かと考えている。

図26－３は、古代の遺構。現地表下約2.4ｍ・海抜約5.3ｍ前後を測る。試掘壙北側の様相には検討を要するものの、上幅2.6ｍ程で断面Ｕ字形を呈し深さ１.5ｍ程の溝状構と考えている。南北に走行し、僅かに弧を描くように観受けられようか。

出土遺物は土師器よりも須恵器が多く出土し、年代的には７世紀後半頃であろうか。

尚、本稿は検出した遺構・出土した遺物に対して共に細かい検討や考察を加えておらず、今後の整理作業や執筆段階に於て、遺構の解釈や年代観等に変更が加えられる可能性があることを、書添える。

第２節　自然科学分析

―　若宮大路周辺遺跡群No.242　遺跡の花粉化石　―

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

鎌倉市御成町123番5地点に所在する若宮大路周辺遺跡群No.242遺跡において行われた発掘調査で、中世および古代の遺構・遺物が検出されている。そのうち中世においては第１面（14世紀中～後半）から第４面（13世紀中頃か）の４つの生活面が認められている。また、古代においては７世紀後半頃の遺構・遺物が検出されている。こうした各時期における遺跡周辺の植生を検討する目的で、検出された土

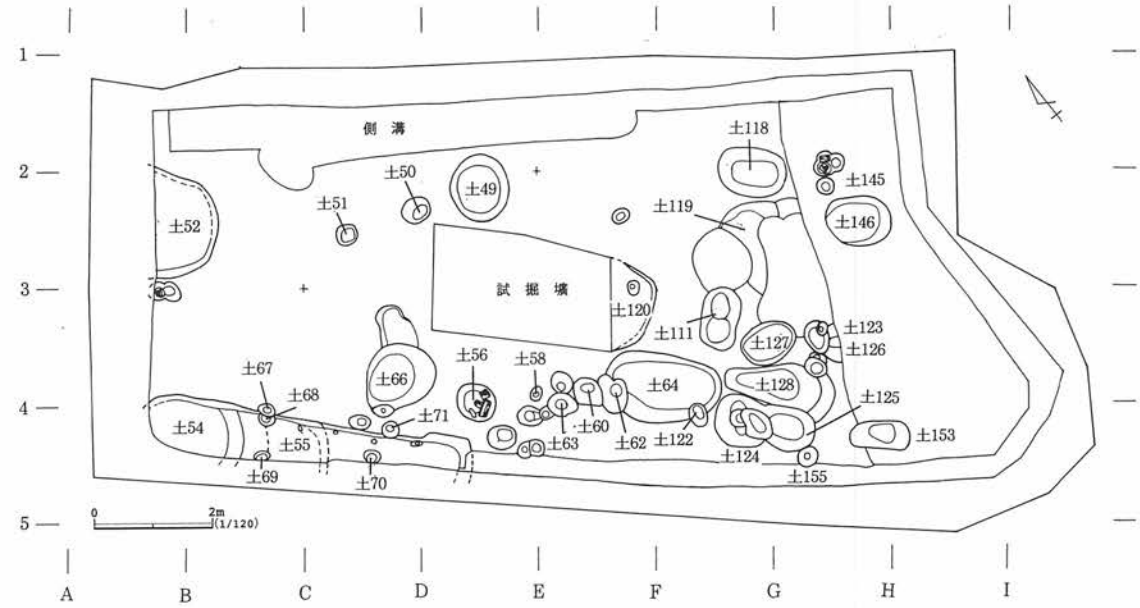


図26－1　中世3面全測図

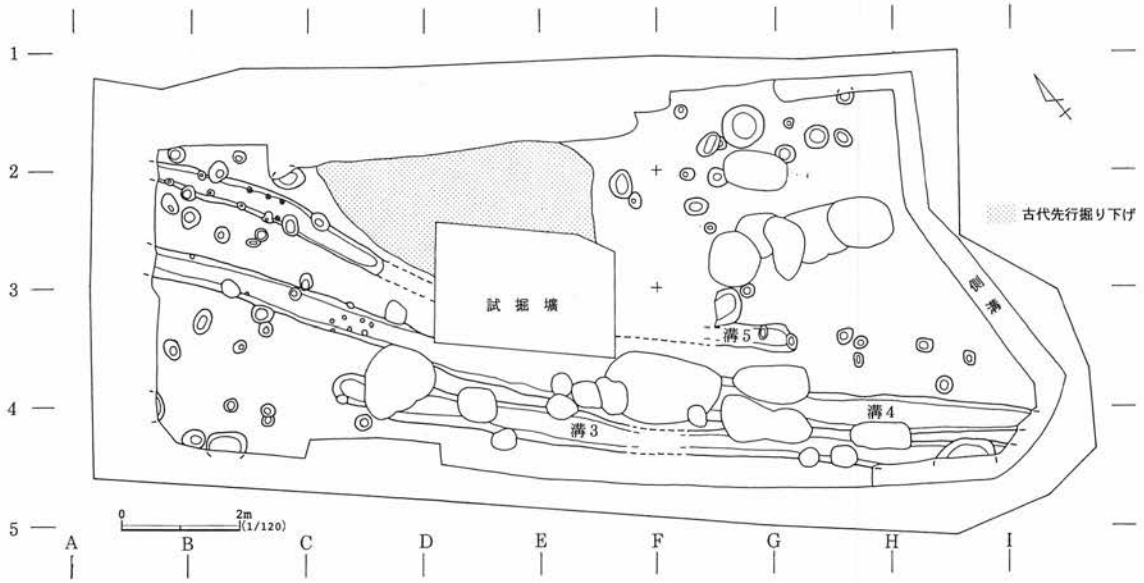


図26－2　中世4面全測図

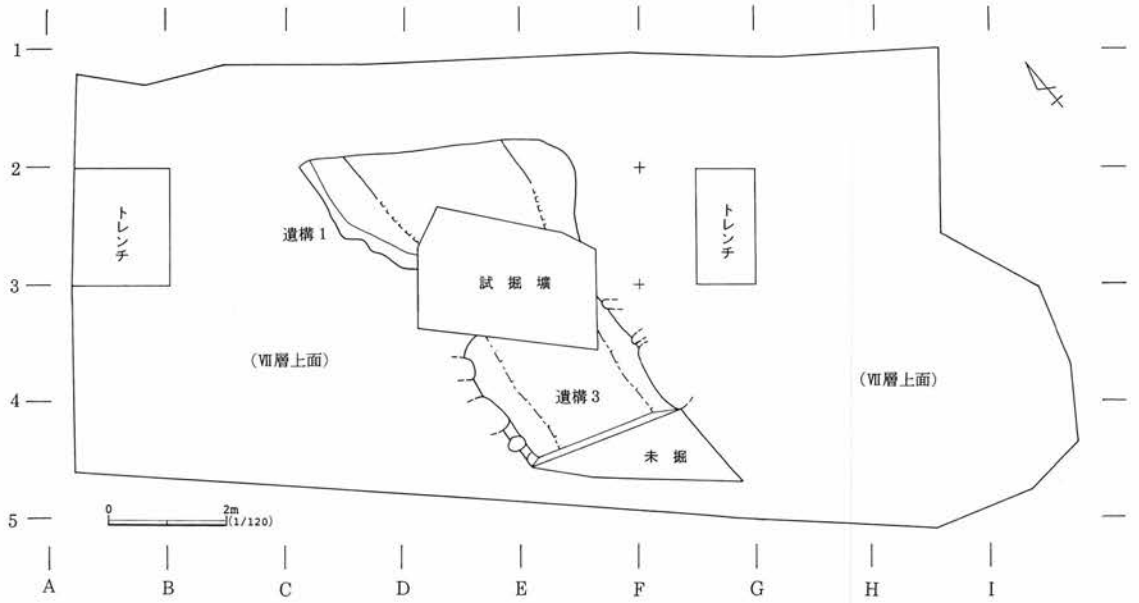


図26－3　古代全測図

壙・溝・溝状遺構の覆土および２～４面構成土を採取し、花粉分析を行った。

１．試料

試料は調査区のほぼ中央において掘られた試掘壙より、仮に設定した地点１～３から採取した。図27に試料を採取した各地点付近の土層断面と試料採取層準を、図２に試料を採取した各地点の模式柱状図を示した。また、古代の溝上遺構（図27）からも試料を採取した。各土層の詳しい記載については別章を参照して頂き、ここでは試料を採取した土層を主体に簡単に示した。

地点１（試料１～７）：試掘壙西壁にあたり、最上部は風化した土丹（泥岩）を主体とした層である。その下位の試料１は褐色を帯びた黒灰色砂質粘土、試料２（中世第２面構成土）は黒色の砂質粘土で、炭片や貝殻片が散在している。試料３（中世第３面構成土）は黒色のシルト質粘土で、貝殻片が認められ、かたくしまっている。試料４（中世第４面構成土）は青色を帯びた黒灰色の砂質粘土、試料５（自然堆積土）は黒色粘土が斑状にはいる青灰色粘土質砂である。試料６（中世第２面土壙覆土）は褐色の有機質粘土で、植物遺体が多量に混入しており、箸片（スギ）や杭なども認められる。試料７（中世第３面土壙覆土）は褐色を帯びた黒色粘土で、下部には青灰色の土丹が散在しており、板材（スギ）も認められる。

地点２（試料８～10）：試掘壙南壁西側にあたる。試料８（中世第３面土壙覆土）は黒褐色砂質粘土で、材片など植物遺体が多く混入している。その上位は褐色を帯びた黒色砂質粘土で、ボソボソとし、レキが点在している（試料２層同等層）。試料９（中世第４面溝覆土）はボソボソ観のある黒～黒灰色砂質粘土で、貝殻片やオニグルミの核が認められる。試料10（古代溝状遺構覆土）もボソボソ観のある黒灰色砂質粘土で、砂が多く、土丹やレキが点在している。

地点３（試料11～14）：試掘壙南壁東側にあたる。試料11（中世第３面土壙覆土）は褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、しまりよく、貝殻片が散在している。また、最下部には貝殻片を含む砂の薄層が認められる。試料11層の上位も褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、青灰色土丹が散在し、一部は層状に認められる（試料２層同等層）。試料12（中世第３面土壙覆土），13（中世第４面溝覆土）は黒褐色の有機質粘土

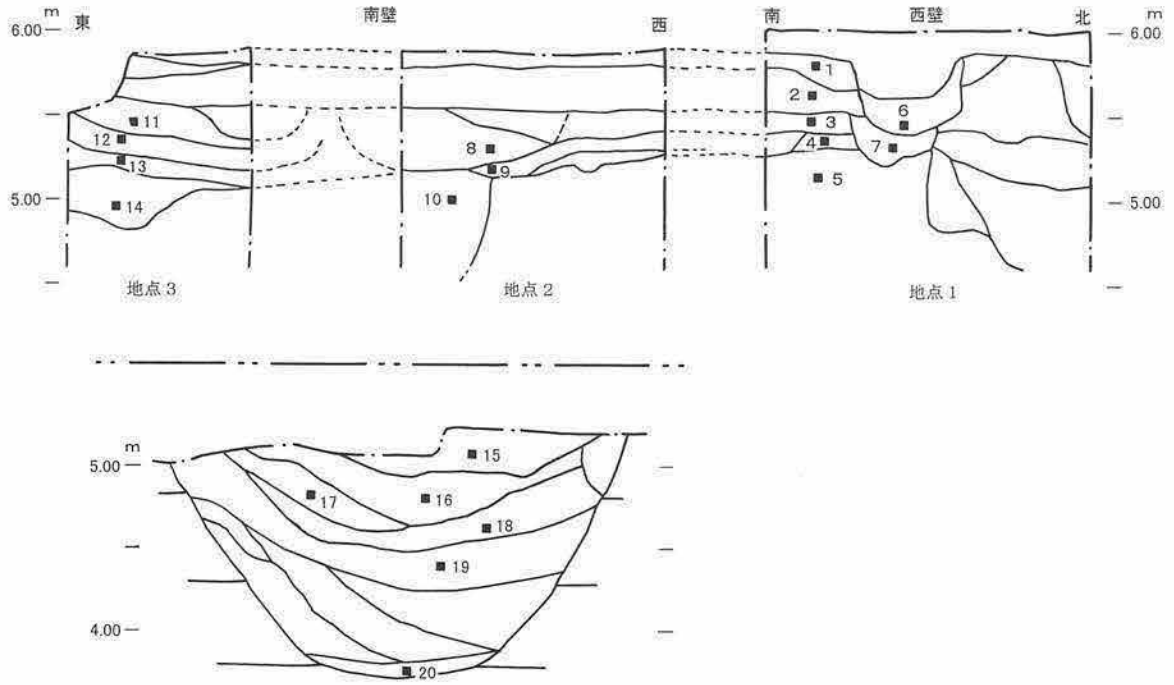
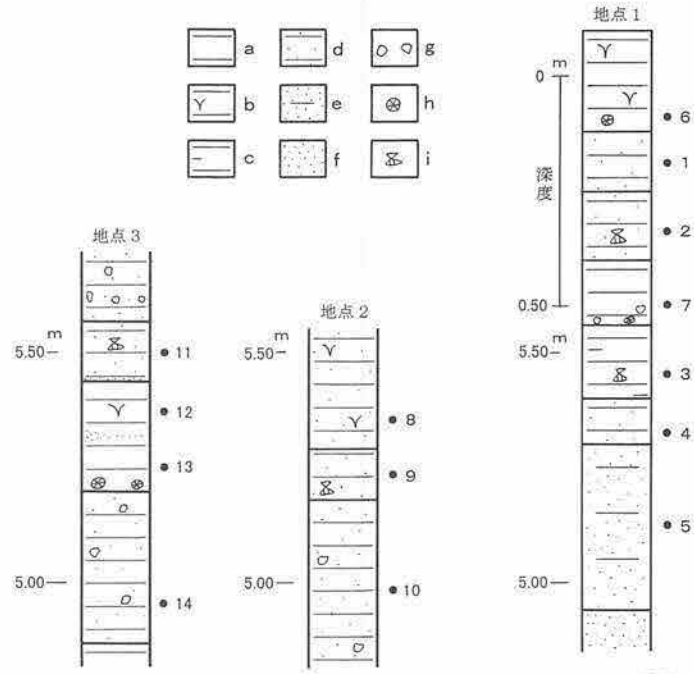


図27　試料採取地点付近の土層断面図と試料採取層準

で、下位境界部に材片が多く認められる。また、中央部に貝殻片を含む砂が層状に観察される。試料14は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土で、ボソボソ感があり、風化した土丹が散在している。試料14の下位はボソボソ観のある黒～黒灰色の粘土で、粘性が高くなっている。

古代溝状遺構（試料15～20）：試料は遺構の土層断面より採取された。試料15は青灰色の粘土質砂で、団粒状を呈する黒色粘土が斑状に混入している。試料16は団粒状を示す黒色砂質粘土で、土丹小塊が多く混入している。試料17は黒色砂質粘土で、土丹小塊が少し認められる。試料18は黒色の砂質粘土で、砂は塊状にも認められる。試料19は黒色の砂質粘土で、黄灰色砂が塊状に多く認められる。最下部試料20は黒色の砂混じり泥炭質シルトで、貝殻片が少し認められる。



a：粘土　b：有機質粘土　c：シルト質粘土　d：砂質粘土
e：粘土質砂　f：砂　g：レキ　h：木材遺体　i：貝殻片

図28　試料採取地点の模式地質柱状図

2．分析方法

上記した各地点より採取した20試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～4ｇ）を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．分析結果

検出された花粉・胞子・寄生虫卵の分類群数は、樹木花粉28、草本花粉35、形態分類を含むシダ植物胞子3、寄生虫卵4の総計70である。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表１に、それらの分布を図29（地点１）・図30（地点２）・図31（地点３）・図32（古代溝状遺構）に示したが、試料９・10・14～18の７試料は得られた花粉化石数が少なく分布図としては示すことができなかった。なお、分布図は全花粉・胞子・寄生虫卵総数を基数とした百分率で示した。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、草本花粉の占める割合が高く、多くは50％以上を占めている。以下に各地点ごとについて示す。

表1　若宮大路周辺遺跡群の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
樹木																					
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
モミ属	*Abies*	2	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
ツガ属	*Tsuga*	3	3	3	1	1	-	1	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	1	3
トウヒ属	*Picea*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	9	9	1	-	3	-	3	-	-	-	4	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	3	5	-	1	2	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	1	-	1	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	6	9	13	8	12	-	15	9	2	-	11	-	1	-	1	-	-	2	4	4
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	3	-	-	1	2	-	4	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	2	3
クルミ属	*Juglans*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	1	1	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	5
カバノキ属	*Betula*	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	-	-	1	6	-	1	-	2	-	-	1	3	-	-	-	-	-	2	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3	4	6	3	8	-	4	8	4	-	6	-	13	-	-	1	1	1	7	12
クリ属	*Castanea*	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	-	3	2	1	-	4	1	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	6	4
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	1	-	1	-	-	2	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	1	4
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	1	-	-	1	-	-	3	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
草本																					
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
イネ科	Gramineae	234	103	53	37	52	997	211	166	32	1	202	318	141	6	10	7	6	7	37	10
カヤツリグサ科	Cyperaceae	25	19	11	7	13	1	29	12	3	-	10	4	1	-	-	-	-	-	27	76
ツユクサ属	*Commelina*	1	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	3	1	1	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	7	-	-	1	4	1	12	16	-	-	7	2	2	-	1	-	-	-	4	-
ギシギシ属	*Rumex*	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. Bistorta	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	1	2	-	1	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	2	-
ソバ属	*Fagopyrum*	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	93	107	118	75	15	6	139	139	14	1	78	49	11	-	2	1	2	2	38	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	3	2	1	3	-	1	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	1	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	26	49	176	47	14	-	53	13	1	-	53	1	-	-	5	4	1	4	53	-
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ノアズキ属	*Dunbaria*	-	-	-	-	-	-	-	9	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のマメ科	other Leguminosae	-	-	-	-	1	1	-	10	-	-	-	1	5	-	-	-	-	-	-	-
エノキグサ属近似種	cf. *Acalypha*	-	-	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のトウダイグサ科	other Euphorbiaceae	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	6	2	-	-	-	-	-	-	-
カラスノゴマ属近似種	cf. *Corchoropsis*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	2	1	-	1	1	2	6	2	-	-	2	-	-	-	-	-	1	2	-
シソ科	Labiatae	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	1	-	3	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キツネノマゴ属	*Justicia*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	7	-	-	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	13	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	42	32	32	15	16	34	66	76	16	-	44	31	99	1	2	12	1	6	17	13
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	2	-	-	-	2	4	4	1	-	2	7	1	-	-	-	-	1	4	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	13	10	9	3	1	1	6	4	1	-	8	-	1	-	1	-	-	1	6	-
シダ植物・その他																					
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	1	1	3	1	8	-	3	-	-	-	1	-	-	2	-	-	1	-	1	-
単条型胞子	Monolete spore	4	6	7	7	21	1	7	7	3	-	11	4	3	5	12	22	10	2	16	9
三条型胞子	Trilete spore	4	4	-	1	1	-	4	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	2	572
種虫卵	*Trichuris trichiura*	133	213	140	64	3	-	156	17	2	-	82	29	5	-	-	-	-	-	-	-
回虫卵	*Ascaris Lumbricoides*	11	13	16	18	1	-	6	3	2	-	1	18	-	-	-	-	-	-	-	-
肝吸虫卵	*Clonorchis sinensis*	2	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
横川吸虫卵	*Metagonimus yokogawai*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	33	33	32	21	41	1	37	27	11	0	30	5	32	0	2	2	2	3	30	46
草本花粉	Nonarboreal pollen	457	332	406	188	126	1062	529	497	71	2	408	438	278	7	21	24	10	22	198	102
シダ植物胞子・その他	Spores & Others	155	237	167	96	34	1	176	27	8	0	95	51	8	7	13	22	11	3	19	581
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	645	602	605	305	201	1064	742	551	90	2	533	494	318	14	36	48	23	28	247	729
不明花粉	Unknown pollen	6	3	7	7	13	1	5	11	5	0	9	7	7	3	2	6	1	2	19	15

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

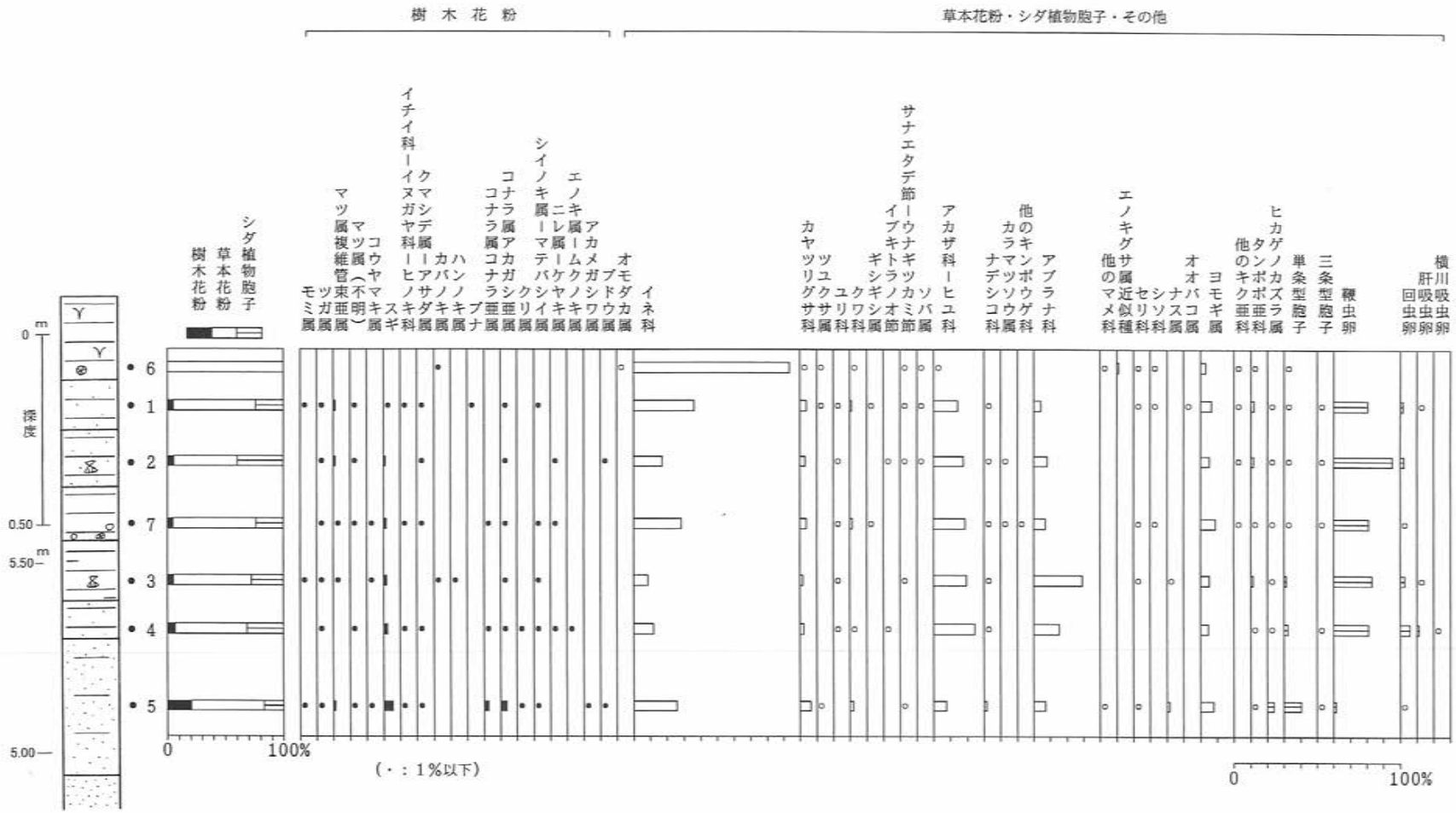


図29　地点１の花粉化石分布図

地点1：草本類ではイネ科が試料１で90％以上と非常に高い出現率を示しており、他は10～30％を示している。アカザ科－ヒユ科は最上部・最下部で少なく、他は20％前後検出され、上部に向かい減少する傾向がみられる。アブラナ科は試料４で10％を越え、試料３では30％弱に達しているなど下部でやや多く検出されている。その他、カヤツリグサ科・ヨモギ属が5％前後の出現率を示し、ソバ属が上部で連続して検出されている。樹木類ではスギが多くの試料で１％以上を示し、最下部では10％弱を示している。その他、マツ属複維管束亜属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が最下部で１％を越えて得られている。また、マツ属複維管束亜属は上部においても連続して１％を越え、ツガ属・アカガシ亜属は少ないながら最上部を除き連続して検出されている。本地点では寄生虫卵が多く検出され、そのなかで鞭虫卵は最上部・最下部を除き20％を越える出現率を示し、試料２では40％近くに達している。また、最下部の試料５においても若干の鞭虫卵・回虫卵が検出されている。

地点２の試料８では草本花粉が約90％を占め、そのうちイネ科が約34％、アカザ科－ヒユ科が約25％、ヨモギ属が約14％の出現率を示している。その他、カヤツリグサ科・クワ科・アブラナ科・ノアズキ属・セリ科などが１％を越えて得られている。樹木類ではスギとアカガシ亜属が１％を越えて得られ、寄生虫卵の鞭虫卵・回虫卵も若干検出されている。試料９・10では得られた花粉化石数が少なく分布図として示すことができず、そのうち試料10ではイネ科とアカザ科－ヒユ科各1個体しか検出されなかった。また、試料9ではイネ科，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科の順で多く、試料8と同様の産出傾向を示している。

地点３でも試料14においては検出できた花粉数が非常に少なく分布図として示すことができなかった。他の３試料ではイネ科が最も多く、変動が大きいもののほぼ50％前後を示している。アカザ科－ヒユ科は上部に向かい増加しており、最上部試料11では約15％に達し、アブラナ科も試料11で約10％の出現率を示している。ヨモギ属は試料13で多く30％を越え、他の上位試料は10％弱を示している。その他、カヤツリグサ科・クワ科・ソバ属・オオバコ属・キク亜科などが若干検出されている。樹木類はいずれも

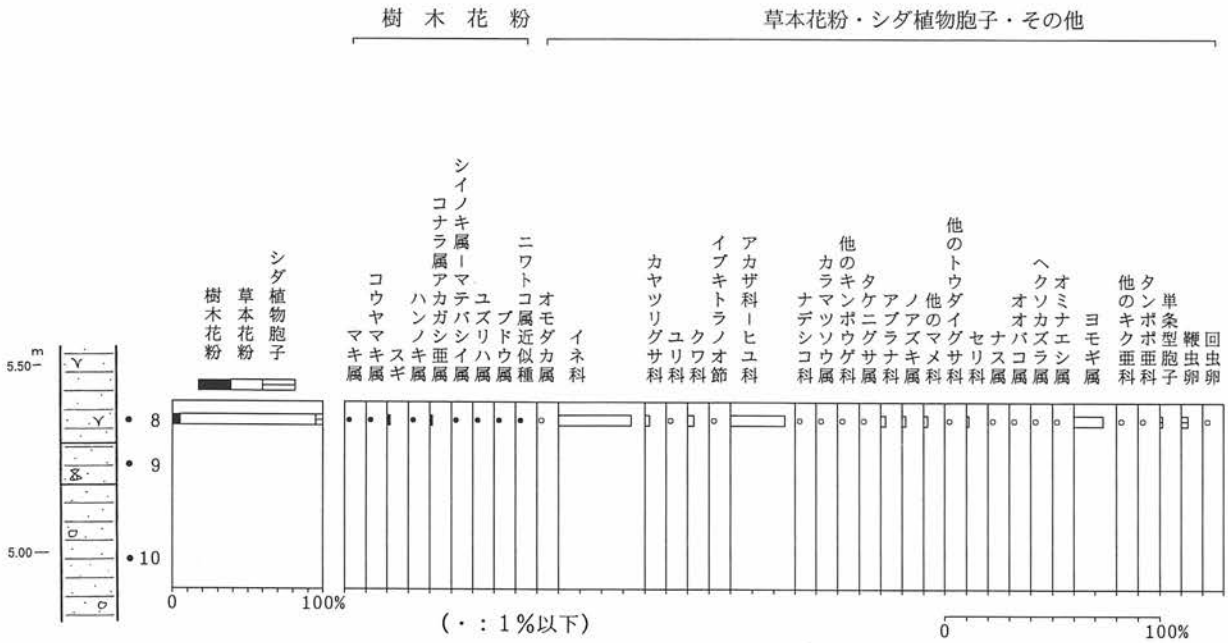


図30　地点２の花粉化石分布図

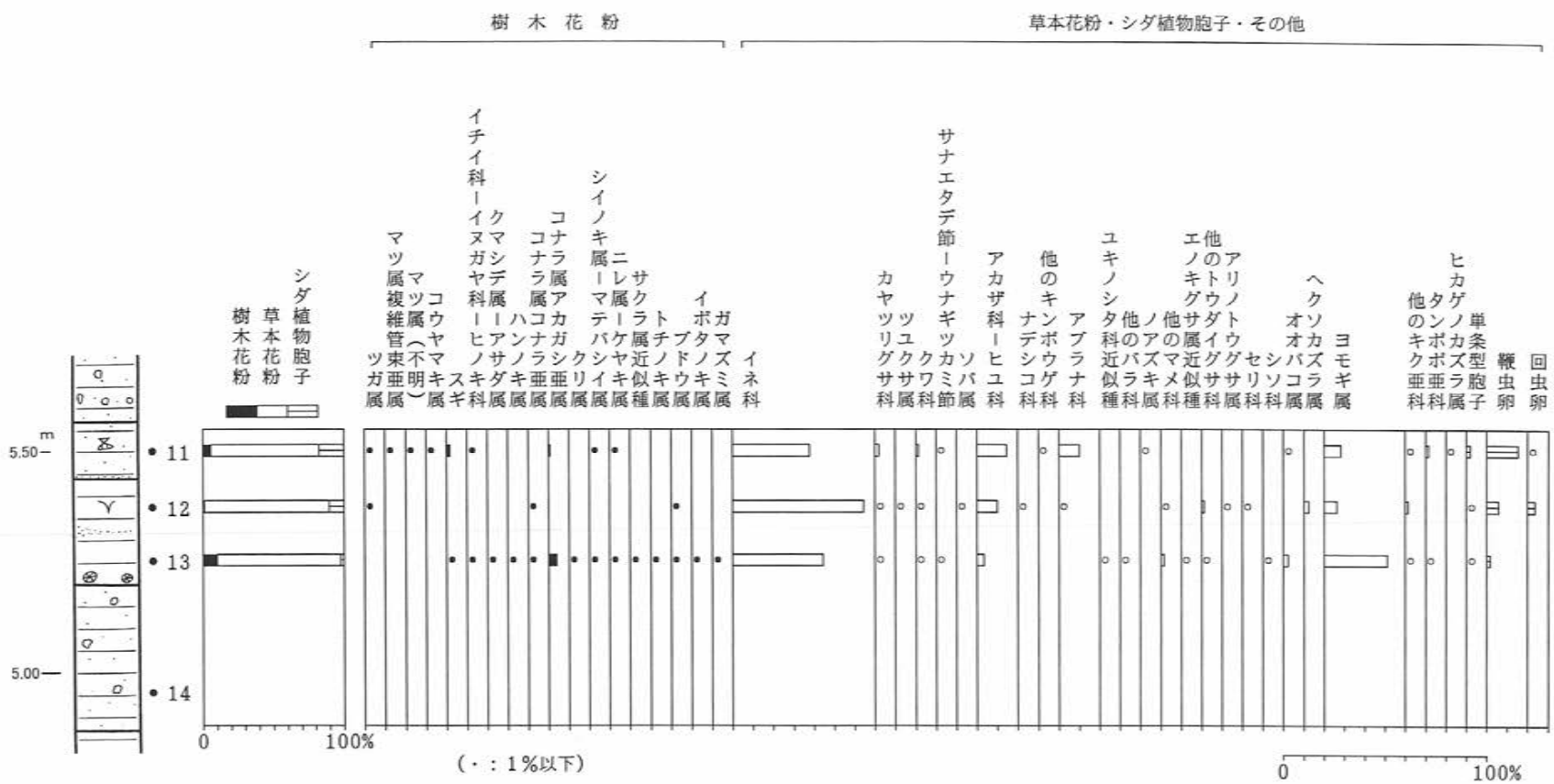


図31　地点３の花粉化石分布図

検出数は少なく、その中ではスギやアカガシ亜属がやや目立って検出されている。寄生虫卵も多く検出されており、そのなかで鞭虫卵は上部に向かい急増し、試料11では約15%に達している。

古代溝上遺構の上部試料15～18においても検出できた花粉数が非常に少なく分布図として示すことができなかった。試料19ではアブラナ科が20%を越え最も多く、次いでアカザ科－ヒユ科・イネ科・カヤツリグサ科・キク科が10～20%を示している。樹木類ではスギ・アカガシ亜属・シイノキ属－マテバシイ属が１%を越えて検出されている。試料20では三条型胞子が80%弱と非常に多く検出されている。花粉化石では草本類のカヤツリグサ科が最も多く10%の出現率を示し、イネ科・ヨモギ属がわずかに１%を越えて検出されている。また、樹木類ではアカガシ亜属のみが1%を越える出現率を示している。

４．遺跡周辺の古植生

１）各試料の年代について

「試料」で記したように試料２・６が中世第２面構成土および第２面土壙覆土、試料３が第３面構成土、試料７・８・11・12が第３面土壙覆土、試料４が第４面構成土、試料９・13が第４面溝覆土、試料10・14～20が古代の溝状遺構覆土、試料５が自然堆積層である。これら各面について、第２面は14世紀前半頃、第３面は13世紀中頃～後半頃、第４面は13世紀中頃、古代は７世紀後半頃と現段階では考えられている。

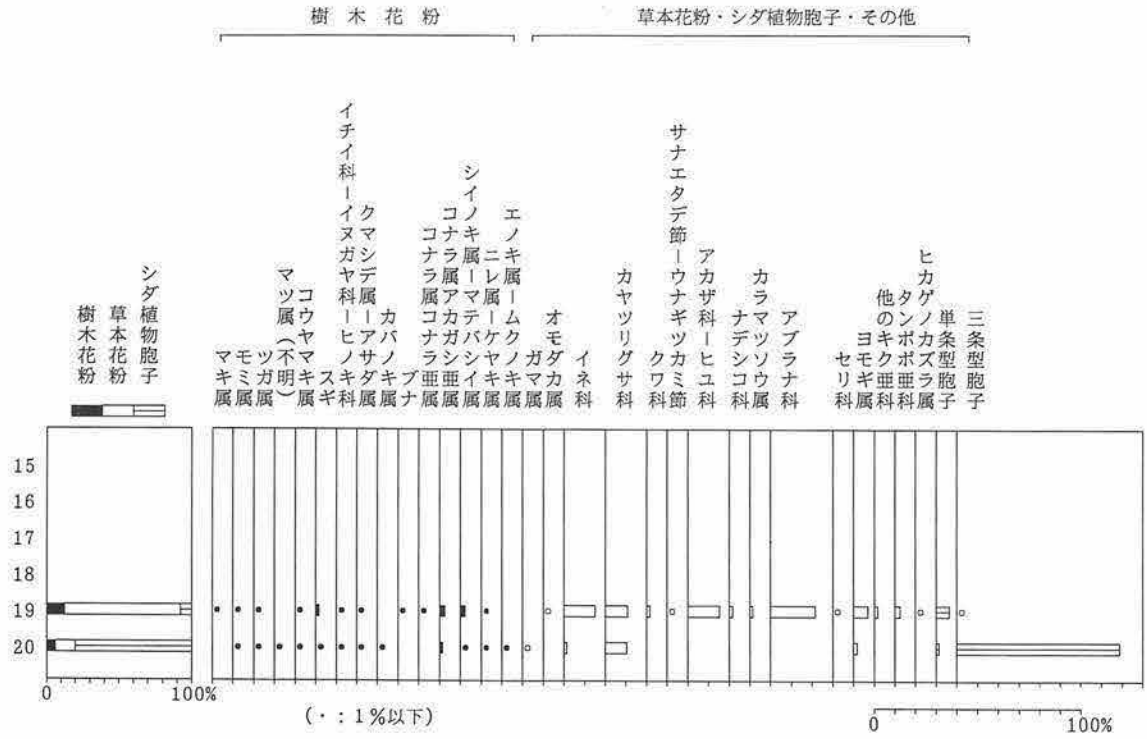


図32　古代土坑の花粉化石分布図

2）遺跡周辺の古植生

上記した各面の年代から若宮大路周辺遺跡群No.242遺跡周辺の古植生について述べる。

古代：試料10・14～20にあたり、多くの試料は得られた花粉化石数が少なく、大半は分解・消失されてしまったと推測される。試料19においては少ない樹木花粉の中でスギ・アカガシ亜属・シイノキ属－マテバシイ属がやや目立って検出されており、これらを主体としたスギ林や照葉樹林の存在が推測される。しかしながら、草本花粉が多数を占めていることから、古代（7世紀後半頃？）における遺跡周辺の植生はイネ科・カヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属などのキク科といった草本類が優勢であり、樹木類は少なかったことが推測される。この頃の鎌倉について、御成小学校の校庭から郡衙跡とみられる建物の遺構が検出され、この一帯が奈良時代における鎌倉の中心部であったことが考えられている(石井　1989)。中世の鎌倉は鎌倉幕府開府以来の発展にともないスギ林や照葉樹林の破壊が行われたことが明らかとなって来ており(鈴木　1994など)、奈良時代においても同様のことが推測される。すなわち、郡衙跡？などから奈良時代に古代人の活動が活発となり、鎌倉周辺の森林もその影響をうけたことが推測される。本遺跡における花粉分析結果もこうしたことを反映していると思われ、遺跡周辺はイネ科・カヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属などの草本類で占められていたのであろう。

また、北条政村屋敷跡（常盤字殿入下）では水田らしき遺構が検出され、花粉およびプラント・オパール分析結果をあわせ古墳時代から古代にかけての時期に水田稲作が行われていたことが推測されている(鎌倉市教育委員会　1994)。本遺跡では試料19より水田雑草（オモダカ）を含む分類群であるオモダカ属が1点検出されているが、イネ型？を含むイネ科花粉はそれほど多くないことから、遺跡周辺において水田稲作が行われていたとしても規模的には小さかったと推測される。また、アブラナ科が多く検出されており、いわゆるアブラナやカブなどの栽培種によることも考えられるが、現時点においてはさらに詳しい分類ができず不明である。これについてはナス属についても同様である。

このように、古代における遺跡周辺丘陵部の森林植生はスギ林や照葉樹林が成立していたとみられるが、古代人による森林への干渉により一部森林は破壊され、しっかりとした森林は少なかったと推測される。また、低地部では一部水田稲作地の存在も予想され、こうした稲作地や溝周辺にはカヤツリグサ科・クワ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属・キク亜科・タンポポ亜科・シダ植物などが生育していた。

13世紀中頃～後半頃：中世第3面・第4面（試料3・4・7～9・11～13）にあたる。少ない樹木花粉の中でスギやアカガシ亜属の花粉化石がやや目立って検出されており、この頃も遺跡周辺丘陵部はスギ林やアカガシ亜属主体の照葉樹林が成立していたとみられるが、これらの花粉化石数が少ないことからしっかりとした森林は少なかった可能性が高い。先にも記したが、鎌倉においては鎌倉幕府開府以来急速に開発が進み、周辺丘陵部の森林は大きな影響をうけたことがこれまでの花粉分析結果から推察されており（鈴木　1994など)、今回の分析結果もこうした傾向を示していると思われる。

各試料においてイネ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属などの草本類が多く検出されており、土壙や溝周辺にこれらが生育していたことが考えられる。さらに、当時の溝はゴミ捨て場として使われ、また、用途不明の土壙のいくつかもゴミ穴ではないかと考えられており(馬渕　1989)、分析を行った土壙や溝に上記植物が捨てられた結果、花粉が多量に供給されたことも推測される。

14世紀前半頃：中世第２面（試料１・２・６）にあたり、少ない樹木花粉の中でマツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）がやや目立って検出されており、周辺丘陵部でニヨウマツ類が増加したことがうかがえる。これまで市内の多くの遺跡で花粉分析を行ってきた結果、先に記したように鎌倉幕府開府以来急速に開発が進み、周辺丘陵部の森林は大きな影響をうけ、13世紀中頃以降スギ林・照葉樹林に代わりニヨウマツ林が優勢になったことが明らかとなってきている。今回の結果も少ない検出数ながら同様の傾向を示しているのであろう。

草本類については先の１３世紀中頃～後半頃と同様で、イネ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・ヨモギ属などが遺跡周辺に生育していたと推測される。また、植物遺体が多量に認められる試料６においてイネ科が90％以上を占めている。これについては稲藁などのイネ科植物が大量に捨てられたことにより、それに付着していたイネ科花粉が供給され、このような結果になったと思われる。

５．寄生虫卵

中世の試料から鞭虫卵を主体とした多くの寄生虫卵が検出され、試料２では40％弱に達している。北条時房・顕時邸跡より検出された土壙34において行った寄生虫卵分析で、試料１ccあたり約3,000～約8,000個の寄生虫卵が検出されている。この検出個数と土壙の形状から土壙34はトイレ遺構の可能性が高いと考えられている。本遺跡では単位体積当たりの寄生虫卵個数は検討していないが、少なくとも上記個数には達していると思われる。地点1試料は生活面構成土であり、トイレ遺構とは考えにくい。これについて先の土壙34は低湿地部に造られており、状況から洪水により容易に溢れることが考えられる。こうしたことから、当時の生活面も洪水時にトイレなどの汚物に汚染されることが予想され、各土壙や溝覆土についても同様のことが推察される。そのなかで試料７の土壙は形状や寄生虫卵の検出数からトイレ遺構の可能性も考えられるものの、土相は土丹混じりの粘土であまり有機質ではないことからトイレ遺構についてはさらに検討が必要と考える。

また、自然堆積層と考えられている試料５からも若干の鞭虫卵や回虫卵が検出されている。これについて、古代の溝状遺構からは一個体の寄生虫卵も検出されていないことから、地点1については自然堆積層の少なくとも試料５層準までは何らかの作用（土壌生物など）で中世の土壌が混入しているのではないかと思われる。

以上のように中世の各試料より多くの寄生虫卵が検出されており、当時の遺跡周辺はあまりきれいな環境ではなかったと推測される。

【引用文献】

石井　進（1989）都市としての鎌倉．　よみがえる中世【３】武士の都鎌倉，　石井　進・大三輪龍彦編，　平凡社，　ｐ.28～43.

鎌倉市教育委員会（1993）北条政村屋敷跡（No.131）．　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 平成年５度発掘調査報告（第２分冊），　ｐ.1～36.

馬淵和雄（1989）ゴミ捨て場としての溝．　よみがえる中世【３】武士の都鎌倉，　石井　進・大三輪龍彦編，平凡社，　ｐ.96～98.

鈴木　茂（1993）北条政村屋敷跡の花粉化石．　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 平成年５度発掘調査報告（第２分冊），　鎌倉市教育委員会，　ｐ.38～48.

鈴木　茂（1998）寄生虫卵からみた土壙34．　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成９年度発掘調査報告（第１分冊），　鎌倉市教育委員会，　ｐ.233.

鈴木　茂・吉川昌伸（1994）鎌倉市永福寺跡における鎌倉時代の植生変遷．　植生史研究，2，　ｐ.45～51.

第3節　まとめに代えて

本調査は古代を1時期・中世を4時期として捉えたが、先にも述べた様に本報文中では面積比に相当する中世2面までの遺構と遺物を掲載した。各遺構の変遷や場の使われ方から観た本調査地点の性格や年代観については、中世3面・4面の遺構と遺物を併せ観る事が不可欠であり、本報文中では割愛して若宮大路周辺遺跡群発掘調査団刊行の報告書に譲ることとする。本項では本報文中で触れた事項から、現段階で考え得ることを書き留めまとめに代える。

中世4面から中世1面の全測図を併せ通して観ると、一定規模の礎石建物や掘立柱建物の存在は考え難く、小ピット群や後に触れる方形土壙を含めた土壙群から遺構が構成されている。井戸も検出されず、中心的な建物の周囲に付随する遺構群と考えられようか。一方で、2面の調査区南端には区画や地割を暗示する溝が検出されており、各遺構はその溝に規制される様に配置されていることも看取されよう。遺物から観ると、鎌倉市内の調査で観られる一通りのものは出土しているものの、舶載陶磁器や瀬戸窯壷・瓶子類等所謂嗜好品の類は決して多いとは言えず、対して諸道具類や加工痕の遺る骨角・石製品もあまり出土していない。第一章で触れている事から現段階で想像するに、さほど有力ではないとはいえ武士階級の敷地の一角に中り、衣食住をその武士階級に依存する階層の生活・活動の場と考えている。

検出された遺構群の中で目を引くのが繰返し構廃している方形土壙群であろうか。先にも触れた様に、類似する遺構として鎌倉市内では「方形竪穴建築址」があり、規模や構造に選り倉庫や作業場といった用途が考えられている。所謂浜地に群集して検出されるが、市街地に於いては武家屋敷を取巻く一帯に集中して構廃されたり敷地の一角に散見される。本調査で検出した方形土壙群は、何れも規模は「方形竪穴建築址」に比べ狭小ではあるが類似する内部構造が施されている。類例が少なく直ちにこれら方形土壙群の性格付を行うべくもないが、今後の課題として「物置小屋」程度の遺構と考えたい。

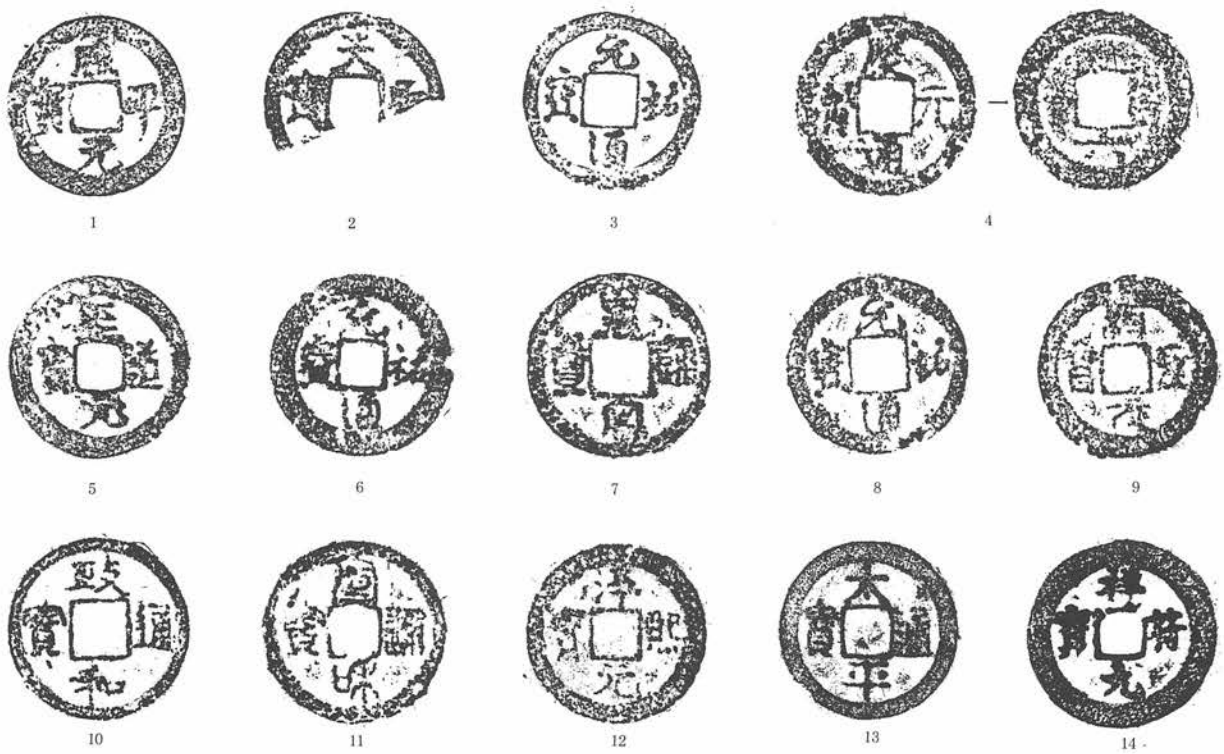
自然科学分析の結果からは、所謂トイレ遺構について重要な示唆が為されている。これまでにも鎌倉市内の調査に際し堆積土の分析が行われ、寄生虫卵や鞭虫卵の検出結果からトイレ遺構との指摘が数例為されている。これらの殆どは遺構覆土の分析であり、本調査地点の分析結果試料2の様に遺構外生活面構成土中からの資料は少ない。遺構覆土中に寄生虫卵等が溜る要因としては、雨水等に因り流されて偶発的に溜ることも有ろうし、ゴミ捨て穴の様に汚物をまとめて捨てた言わば糞尿処理壙も有ろうし、何れにしても厳密にはその場で用を足すという意味でのトイレ遺構とは異なると想われる。トイレ遺構を考えるに当っては、上屋・目隠し塀等周囲の遺構や踏板等施設的な要素、敷地・区画内のどこに位置するかという場的な要素、チュウ木や消化されない食物残滓といった内包物的な要素他を総合的に考慮する必要もあろう。又、鎌倉旧市街地或はその周辺域で、中世期にどの程度農村地的な環境が拡がっていたのかも、トイレ遺構が鎌倉で成立し普及していたか否かの参考にもなろう。本調査地点では、中世1面土壙19・土壙21・中世2面土壙27にトイレ遺構の可能性を垣間見ることもできようが積極的な根拠には欠ける。逆に生活面構成土からの寄生虫卵等の検出は、『餓鬼草紙』に描かれている塀の前と思しき路上で高下駄を履き糞尿を垂流している光景を思い出させる。トイレ遺構はこれまでにもあまり注目されていないこともあろうが、他の遺構の検出数に比べ類例が余りにも少ない様に思われる。都市造りの相違からくる地割にも依るが、仮に屋敷地内に一ヶ所或は一区画内に複数ヶ所あったとすれば、当時の人口を考えると農村域との連携無しにはとても賄いきれないと想われる。中世都市鎌倉とはいえトイレはさほど普及はしておらず、溝や河川で用を足したり『餓鬼草紙』の描写が特異な光景ではないのかもしれない。トイレ遺構を含め、日常的な遺構群にさらに目を向けていく必要もあろう。　　（汐見）

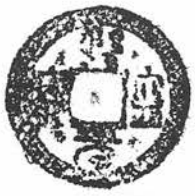
第４節　出土遺物一覧

【出土銅銭について】（図33・表２）

本調査で出土した銅銭は、全層位・遺構内を併せても15枚に過ぎない。遺構内に埋置されていたり或は生活面上に撒かれた様な出土状況は確認されずに、いわば覆土中に単品で無秩序に出土している。

本報告に於いては、これら銅銭のみを各層位・遺構から単独で分離・抜出しても、本調査の理解及び解釈に影響はないと判断し、出土した全ての銅銭を図33に拓影を実寸にて図示し、出土遺構や各銅銭についての事項は表２にまとめた。尚、表２中の１面構成土は報文中の１面下と同義である。





0　2cm
(1/1)

表２　出土銅銭一覧

遺物No.	遺構・層位	銭　種	時代	初鋳年	字体	備　　考
1	中世包含層	咸平元宝	北 宋	998年	楷 書	
2	中世包含層	天聖元宝	北 宋	1023年	楷 書	
3	中世包含層	元祐通宝	北 宋	1086年	行 書	
4	中世包含層	慶元通宝	南 宋	1195年	楷 書	背文あり「六」
5	1面上	至道元宝	北 宋	995年	楷 書	
6	1面上	元祐通宝	北 宋	1086年	行 書	
7	1面構成土	皇宋通宝	北 宋	1039年	篆 書	
8	1面構成土	元祐通宝	北 宋	1086年	行 書	
9	1面構成土	紹聖元宝	北 宋	1094年	篆 書	
10	1面構成土	政和通宝	北 宋	1111年	楷 書	
11	1面構成土	宣和通宝	北 宋	1119年	篆 書	
12	2面上	淳熙元宝	南 宋	1174年	楷 書	
13	2面遺構　溝1	太平通宝	北 宋	976年	楷 書	
14	4面土壙153	祥符元宝	北 宋	1009年	楷 書	
15	試掘壙内	熙寧元宝	北 宋	1068年	篆 書	

（表作成　山上玉恵）

図33　出土銅銭拓影

【常滑窯甕押印文拓影】（図34～図36・表３～５）

本調査で出土した常滑窯甕片に、押印文が観察された破片は46点に上る。図34～36にはその内で、文様がほぼ明確に観察されるものの口縁部等まで個体が遺存しておらず、図示はし得ない破片の拓影をまとめ、基本的には上層の層位・遺構順に図示した。提示した拓影図の押印箇所は、図34－９は胴部下方、他は全て肩部付近と観察された。提示し得なかった他の破片を併せ観ても、肩部付近の破片数が数量的には圧倒的に多く、胴部付近と観察されたものがこれに次ぐ。

尚、出土した常滑窯片全てについての接合関係は把握できなかった為、文様種或は押印部位についての細かな数量は今後の課題とせざるを得ない。

これまでに常滑窯甕押印文拓影については、鎌倉市内の報告書では各調査地点単位で数例に過ぎない。僅か100m²余の調査からの出土点数で、何か結論めいたことを導きだそうとは毛頭思わないが、今後の資料の蓄積の一端でも担えればと縮尺1/2で図示した。

〈参考文献〉
中野晴久「中世知多古窯址群の押印文　―ミクロ流通史のための予備的研究―」『知多半島の歴史と現在№４』
1992　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房

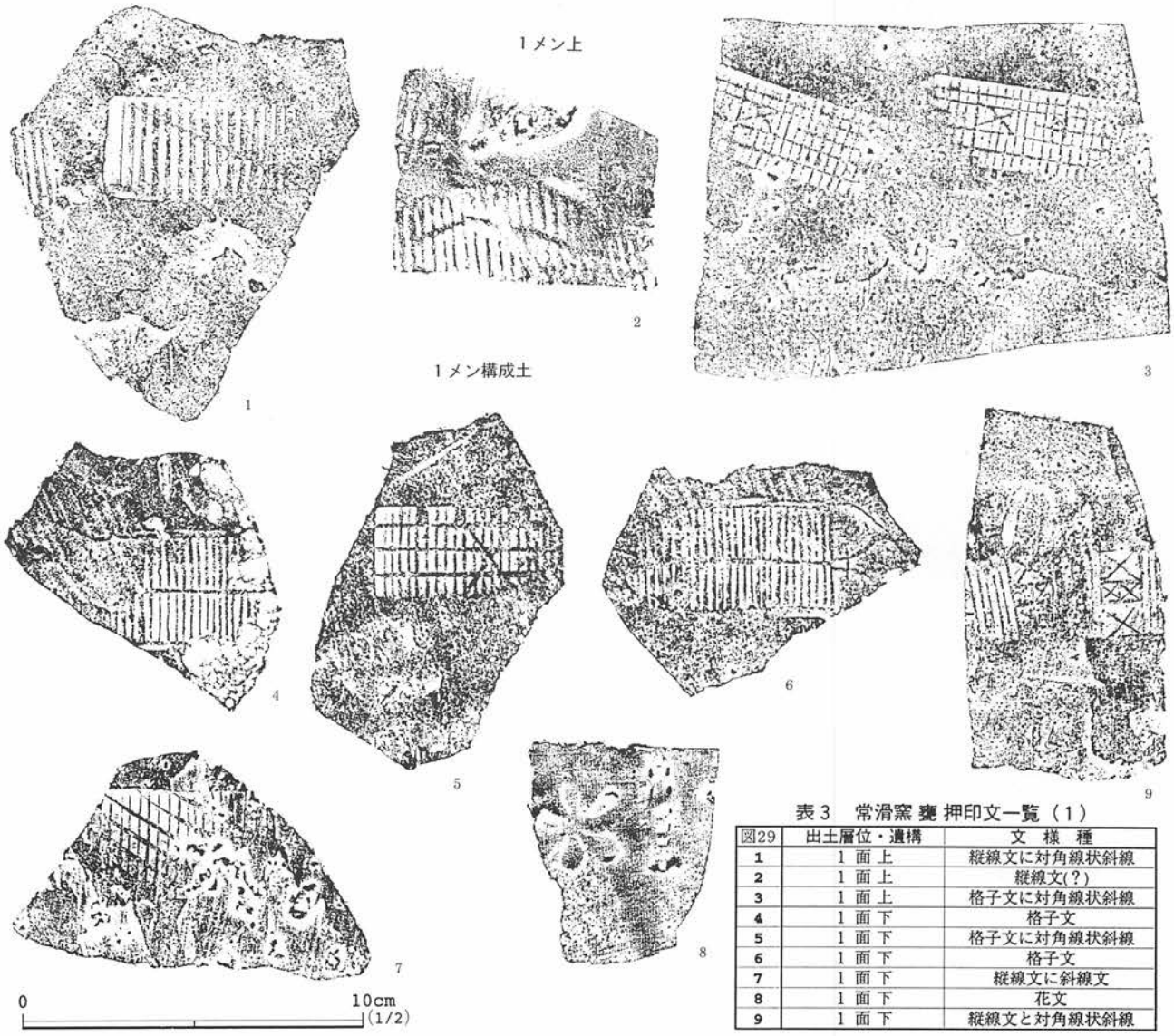


表３　常滑窯甕押印文一覧（１）

図29	出土層位・遺構	文　様　種
1	１面上	縦線文に対角線状斜線
2	１面上	縦線文(?)
3	１面上	格子文に対角線状斜線
4	１面下	格子文
5	１面下	格子文に対角線状斜線
6	１面下	格子文
7	１面下	縦線文に斜線文
8	１面下	花文
9	１面下	縦線文と対角線状斜線

図34　出土常滑窯甕押印文拓影（１）

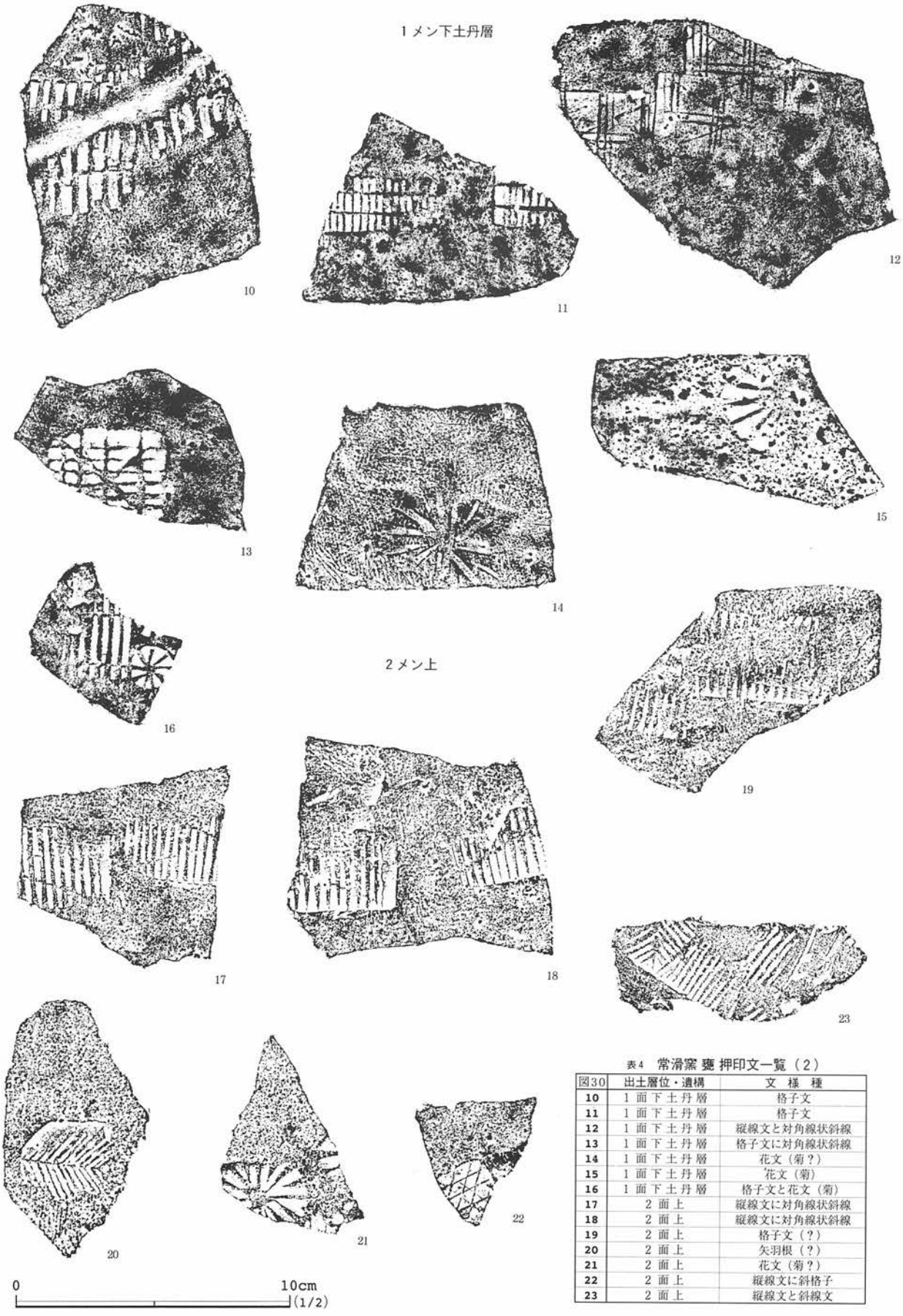


表4　常滑窯 甕 押印文一覧（2）

図30	出土層位・遺構	文　様　種
10	1 面下土丹層	格子文
11	1 面下土丹層	格子文
12	1 面下土丹層	縦線文と対角線状斜線
13	1 面下土丹層	格子文に対角線状斜線
14	1 面下土丹層	花文（菊？）
15	1 面下土丹層	花文（菊）
16	1 面下土丹層	格子文と花文（菊）
17	2 面上	縦線文に対角線状斜線
18	2 面上	縦線文に対角線状斜線
19	2 面上	格子文（？）
20	2 面上	矢羽根（？）
21	2 面上	花文（菊？）
22	2 面上	縦線文に斜格子
23	2 面上	縦線文と斜線文

図35　出土常滑窯甕押印文拓影（2）

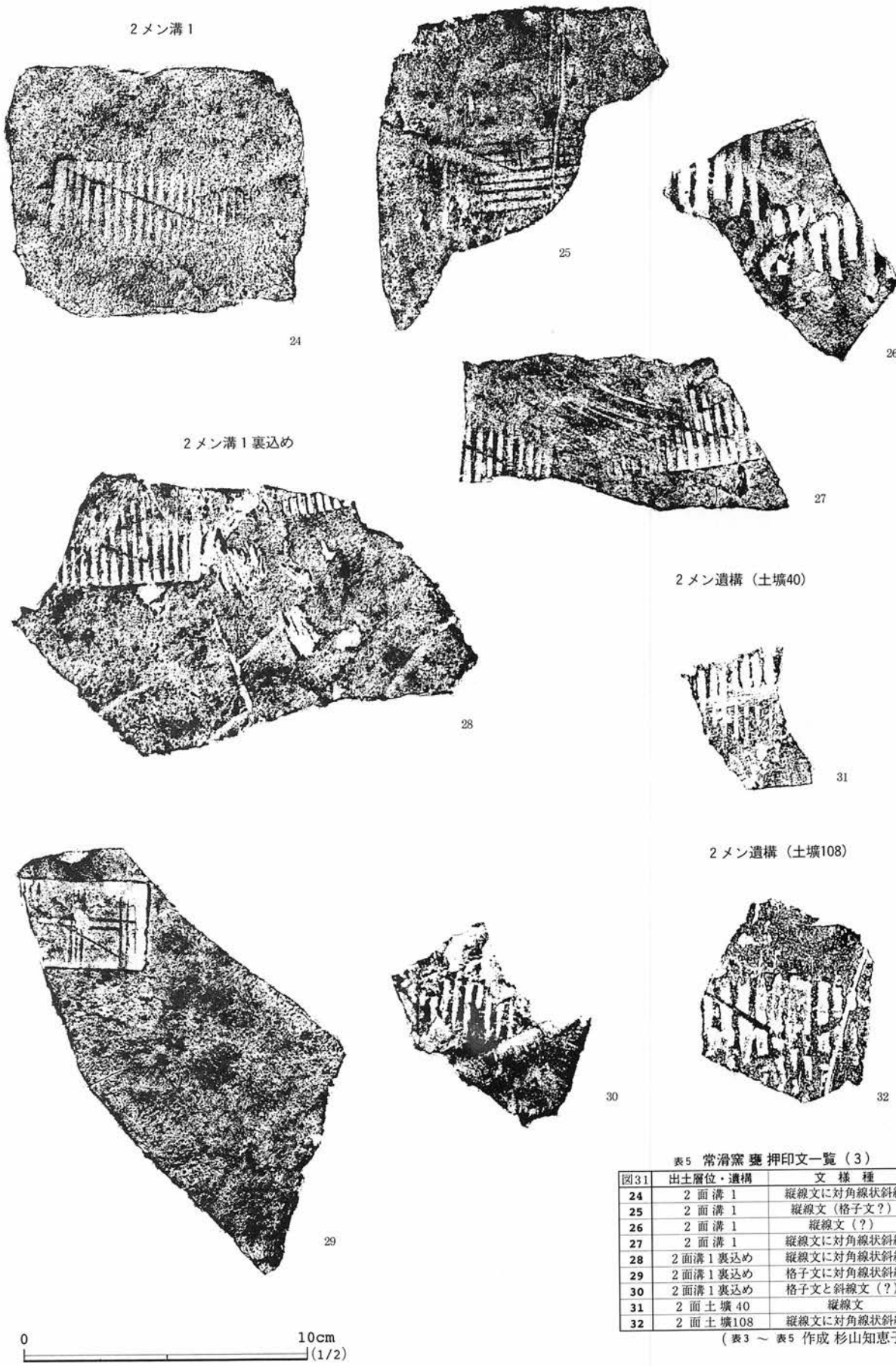


表5　常滑窯甕 押印文一覧（3）

図31	出土層位・遺構	文　様　種
24	2 面 溝 1	縦線文に対角線状斜線
25	2 面 溝 1	縦線文（格子文？）
26	2 面 溝 1	縦線文（？）
27	2 面 溝 1	縦線文に対角線状斜線
28	2 面溝 1 裏込め	縦線文に対角線状斜線
29	2 面溝 1 裏込め	格子文に対角線状斜線
30	2 面溝 1 裏込め	格子文と斜線文（？）
31	2 面 土 壙 40	縦線文
32	2 面 土 壙108	縦線文に対角線状斜線

（表3 ～ 表5 作成 杉山知恵子）

図36　出土常滑窯甕他押印文拓影（3）

【出土遺物法量表】（表６～10）

・表は、報文中掲載出土遺物を各遺構・層位毎に示し、挿図順に作成した。

・製品名（産地）・遺物名（器種）は、鎌倉市内各調査及び同報告書内で使用されている名称に拠った。

・器（ウツワ）ものの口径と底径は、基本的には正･伏位で接地面(点)を測り、器高は正位にて安定した状態での、底部接地面の垂直高を測った。また、（　）付の数値は、1/2以下の遺存から復元したものを顕す。

・上記以外の遺物の最大幅は図上左右の、最大長は天地の目視遺存最大値で示し、（　）付の数値は破損・磨滅等に因る遺存最大(高)値を顕す。

・備考欄のかわらけの項で、手は手捏ね成形、白は白かわらけ、燈は燈明皿、穿は穿孔かわらけを顕す。又、備考欄に※印のあるものは、該当する遺構・層位の最下段に主に以下の内容を記した。

陶磁器・漆器・火鉢に施された文様　　石製品の石質・産地　　骨角製品の動物種別・部位

【出土遺物破片数計数表】（表11）

・表は、出土した全遺物を各遺構・層位毎に破片数を数え、遺物種毎に作成した。

・表中の数値は、全て整理時接合前の出土単純破片数である。

・中世以前とは概ね11世紀以前、近世以降とは概ね17世紀以降とした。

表６　出土遺物法量表（１）

（単位：cm）

遺構層位	図No.	遺物No.	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No.	備考
					長さ×幅×厚さ				
中世遺物包含層	6	1	黄釉陶器	盤	—	—	—		
		2	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	—	—		
		3	龍泉窯 青磁	鉢	—	(10.0)	(1.9)		
		4	白磁	碗	—	—	—		
		5	白磁	口兀皿	—	—	—		
		6	白磁	口兀皿	(10.3)	6.0	2.7		
		7	白磁	口兀皿	(9.6)	(5.8)	2.6		
		8	白磁	口兀皿	—	6.2	1.3		
		9	青白磁	合子 身	(8.8)	(8.0)	1.7		
		10	瀬戸 灰釉	卸皿	—	—	—		
		11	瀬戸 灰釉	卸皿	(13.5)	—	—		
		12	瀬戸 灰釉	卸皿	—	8.6	(1.8)		
		13	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		14	常滑	捏鉢	—	—	—		
		15	常滑	壺	(12.5)	—	—		
		16	常滑	甕	—	—	—		
		17	常滑	甕	—	—	—		
		18	常滑	甕転用	—	—	—		※
		19	常滑	甕	—	(14.2)	(5.10)		
		20	常滑	甕	—	(14.8)	(6.20)		
		21	かわらけ質	火鉢	—	—	—		
		22	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		23	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		24	瓦器質 輪花型	火鉢	—	—	—		
		25	瓦器質 輪花型	火鉢	—	—	—		
		26	土製品	円盤状	径 2.8 × 1.3				※
		27	土製品	鞴羽口	—	—	—		

遺構層位	図No.	遺物No.	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No.	備考
					長さ×幅×厚さ				
中世遺物包含層	6	28	土器類	かわらけ	(8.6)	4.9	1.8		手
		29	土器類	かわらけ	3.7	2.9	0.9		
		30	土器類	かわらけ	7.5	5.2	1.8		
		31	土器類	かわらけ	8.0	5.8	1.6		
		32	土器類	かわらけ	7.7	5.0	2.9		
		33	土器類	かわらけ	8.0	4.7	2.0		
		34	土器類	かわらけ	(8.4)	5.3	1.7		
		35	土器類	かわらけ	(8.1)	4.9	1.7		
		36	土器類	かわらけ	7.5	5.1	1.8		
		37	土器類	かわらけ	(8.3)	(5.8)	2.2		
		38	土器類	かわらけ	7.3	3.9	2.1		
		39	土器類	かわらけ	7.2	5.7	2.0		
		40	土器類	かわらけ	7.9	6.5	1.9		
		41	土器類	かわらけ	8.9	6.6	2.1		
		42	土器類	かわらけ	8.2	6.1	1.8		
		43	土器類	かわらけ	(6.8)	4.5	1.9		
		44	土器類	かわらけ	12.4	8.7	3.5		
		45	土器類	かわらけ	(13.3)	7.5	3.2		
		46	土器類	かわらけ	(13.7)	7.8	3.4		
		47	土器類	かわらけ	(14.4)	(8.5)	3.8		
		48	石製品	砥石	(10.1) × 4.3 × 2.7				※
		49	石製品	砥石	(3.4) × 3.3 × 0.8				※
		50	石製品	砥石	(2.9) ×(1.7)× 0.6				※
		51	骨角製品	笄？	(5.8) × 1.4 × 0.3				※
		52	骨角製品	裁断骨	12.1 × 7.5 × 3.4				※
		53	木製品	(用途不明)	(36.2) × 2.2 × 2.1				

※　18：頚部内面擦り常滑転用　26：かわらけ質　48：上野砥　49･50：鳴滝砥　51：鹿中手骨か。　52：イルカ上(下)顎骨

表7　出土遺物法量表（2）

（単位：cm）

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面上	7	1	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	(3.8)	(1.2)		
		2	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		3	常滑	甕	—	—	—		
		4	瓦器質 輪花型	火鉢	—	—	—		※
		5	土製品	土錘	2.8×1.3 内径：0.4				
		6	土器類	かわらけ	(9.0)	(4.6)	(1.9)		手・燈
		7	土器類	かわらけ	(12.9)	6.0	2.6		手
		8	土器類	かわらけ	7.9	6.8	1.4		
		9	土器類	かわらけ	7.4	5.0	1.9		燈
		10	土器類	かわらけ	7.6	4.7	1.6		
		11	土器類	かわらけ	8.0	5.9	1.7		
		12	土器類	かわらけ	(7.2)	4.4	1.8		
	※ 4：16弁菊花陰刻三連　24：黒漆無文								

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面上	7	13	土器類	かわらけ	(8.2)	4.5	1.8		
		14	土器類	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.6		
		15	土器類	かわらけ	(7.7)	5.2	1.6		
		16	土器類	かわらけ	(8.4)	(5.6)	2.1		
		17	土器類	かわらけ	(9.8)	(8.0)	1.7		
		18	土器類	かわらけ	(11.1)	(6.5)	3.0		
		19	土器類	かわらけ	11.1	6.7	3.4		煤
		20	土器類	かわらけ	(13.4)	8.4	3.2		
		21	土器類	かわらけ	13.0	8.0	3.7		
		22	土器類	かわらけ	(13.4)	(8.4)	3.1		
		23	土器類	かわらけ	(12.9)	(7.6)	3.7		
		24	木製品	漆器皿	(10.0)	(7.0)	(1.8)		※

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面遺構内	10	1	鉄製品	釘	(10.7)	径：0.6			
		2	龍泉窯 青磁	鉢	—	—	—		
		3	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		4	青白磁	梅瓶	—	—	—		※
		5	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		6	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		7	土器類	かわらけ	(11.8)	7.0	3.1		
		8	土器類	かわらけ	(13.3)	—	—		
		9	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		10	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		11	土器類	かわらけ	7.3	6.2	1.6		
		12	土器類	かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.7		
	※ 4：渦巻文								

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面遺構内	10	13	土器類	かわらけ	(12.5)	(8.4)	3.1		
		14	常滑	甕	—	—	—		
		15	土器類	かわらけ	(7.7)	6.0	2.2		
		16	土器類	かわらけ	(7.7)	5.2	1.9		
		17	土器類	かわらけ	7.5	5.2	1.9		
		18	土器類	かわらけ	(8.0)	5.9	1.8		
		19	土器類	かわらけ	(14.5)	(8.9)	3.0		
		20	常滑	捏鉢	—	—	—		
		21	土製品	土錘	3.2×1.3 内径：0.4				
		22	土製品	土錘	2.9×1.4 内径：0.3				
		23	土製品	土錘	2.9×1.3 内径：0.4				
		24	土製品	土錘	2.9×1.3 内径：0.3				

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面下	11	1	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	—	—		
		2	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	—	—		
		3	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	—	—		
		4	龍泉窯 青磁	蓮弁文鉢	—	(6.0)	(3.7)		
		5	龍泉窯 青磁	無文鉢	—	(6.0)	(2.3)		
		6	龍泉窯 青磁	鉢	—	—	—		
		7	青白磁	合子身	(5.2)	—	—		
		8	瀬戸 灰釉	卸皿	—	—	—		
		9	瀬戸 灰釉	鉢	—	—	—		
		10	瀬戸	入子	—	4.0	(1.3)		
		11	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		12	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		13	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		14	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		15	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		16	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		17	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		18	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		19	山茶碗窯系	捏鉢	—	(13.0)	(4.3)		
		20	常滑	捏鉢	(32.4)	—	—		
		21	常滑	捏鉢	—	—	—		
		22	常滑	捏鉢	—	—	—		
		23	常滑	捏鉢	—	—	—		
		24	常滑	捏鉢	—	—	—		
		25	常滑	甕	(30.0)	—	—		
		26	常滑	甕	—	—	—		
		27	常滑	甕	—	—	—		
		28	常滑	甕	—	—	—		
		29	常滑	甕	—	—	—		
		30	常滑	甕	—	—	—		
		31	常滑	甕	—	—	—		
		32	渥美	甕	17.0	—	—		
		33	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		34	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
	※ 62：天草産中砥　63：鳴滝産仕上げ砥　67：植物文（蕪 他）								

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面下	11	35	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		36	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		37	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
	12	38	土器類	かわらけ	(7.4)	(5.7)	1.5		
		39	土器類	かわらけ	7.6	5.4	1.7		燈
		40	土器類	かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.7		
		41	土器類	かわらけ	(8.2)	7.6	1.6		
		42	土器類	かわらけ	7.4	4.9	1.7		
		43	土器類	かわらけ	7.6	5.0	1.8		
		44	土器類	かわらけ	7.5	5.3	1.7		
		45	土器類	かわらけ	7.4	1.7	4.9		
		46	土器類	かわらけ	7.2	2.0	4.5		
		47	土器類	かわらけ	(7.5)	4.0	2.1		
		48	土器類	かわらけ	7.5	4.6	2.0		
		49	土器類	かわらけ	(8.1)	4.6	2.1		
		50	土器類	かわらけ	9.3	6.8	1.8		
		51	土器類	かわらけ	(13.0)	(8.4)	2.8		燈
		52	土器類	かわらけ	(12.2)	(7.0)	3.1		
		53	土器類	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.3		
		54	土器類	かわらけ	(12.2)	(7.0)	3.1		
		55	土器類	かわらけ	12.7	8.1	3.5		
		56	土器類	かわらけ	(13.4)	(7.6)	3.3		
		57	土器類	かわらけ	11.9	6.8	2.9		
		58	土器類	かわらけ	(11.1)	(7.0)	2.8		
		59	土器類	かわらけ	12.8	6.9	3.2		手
		60	土製品	（器台？）	径3.5～2.1 内径:1.3				
		61	土製品	土錘	2.9×1.4 内径；0.4				
		62	石製品	砥石	(9.0)×2.9×2.7				※
		63	石製品	砥石	(4.7)×5.4×0.6				※
		64	貝製品	駒	径；1.8		0.5		
		65	骨角製品	笄	(5.9)×1.7×0.3				
		66	鉄製品	釘	(9.5)	径；0.9			
		67	木製品	漆器	—	(7.0)	(1.4)		※
		68	木製品	(用途不明)	(8.8)	(6.8)	0.9		

表8　出土遺物法量表（3）

（単位：cm）

遺構層位	図No	遺物No	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No	備考
					長さ×幅×厚さ				
1面下土丹層	14	1	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	(16.1)	4.8	7.1		
		2	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	—	—		
		3	龍泉窯 青磁	蓮弁文鉢	—	5.0	(4.2)		
		4	龍泉窯 青磁	双魚文鉢	—	—	—		
		5	龍泉窯 青磁	腰折鉢	(8.8)	—	—		
		6	高麗青磁	壺	—	—	—		
		7	白磁	口兀皿	(4.3)	(6.2)	3.1		
		8	白磁	口兀皿	(10.2)	—	—		
		9	白磁	口兀皿	(8.6)	5.6	1.7		
		10	白磁	口兀皿	—	—	—		
		11	青白磁	皿	(5.8)	(2.6)	1.3		
		12	青白磁	梅瓶	—	—	—		※
		13	瀬戸	入子	5.4	3.4	1.7		
		14	南部系	山茶碗	—	—	—		
		15	南部系	山茶碗	—	—	—		
		16	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		17	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		18	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		19	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		20	山茶碗窯系	捏鉢	23.0	—	—		
		21	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		22	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		23	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		24	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		25	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		26	山茶碗窯系	捏鉢	—	(14.6)	(5.8)		
		27	山茶碗窯系	捏鉢	—	(11.4)	(5.5)		
		28	山茶碗窯系	捏鉢	—	(12.0)	(6.1)		
		29	常滑	甕	—	—	—		
		30	常滑	甕	—	—	—		
		31	常滑	甕	—	—	—		
		32	常滑	甕	—	—	—		
		33	常滑	甕	—	—	—		
		34	常滑	甕	—	—	—		
		35	常滑	甕	—	—	—		
		36	常滑	甕	—	—	—		
		37	常滑	甕	—	—	—		
		38	常滑	甕	—	—	—		
		39	常滑	甕	(53.6)	—	—		
		40	常滑	甕	(33.6)	—	—		
		41	常滑	甕	(42.6)	—	—		
		42	常滑	甕	(38.6)	—	—		
		43	常滑	甕	(21.6)	—	—		
		44	常滑	甕	—	(17.4)	(8.2)		
		45	常滑	捏鉢	—	—	—		
		46	常滑	捏鉢	—	—	—		
		47	常滑	壺	—	—	—		
		48	常滑	壺	—	—	—		
		49	渥美	甕	—	—	—		
	15	50	土器類	かわらけ	(6.6)	(4.0)	0.9		手・白
		51	土器類	かわらけ	(8.3)	4.3	2.0		
		52	土器類	かわらけ	7.9	5.9	1.9		
		53	土器類	かわらけ	(8.1)	(5.4)	2.1		
	15	54	土器類	かわらけ	8.0	6.0	2.0		燈
		55	土器類	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.9		
		56	土器類	かわらけ	(8.0)	5.0	1.7		
		57	土器類	かわらけ	7.4	4.7	1.9		
		58	土器類	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.8		
		59	土器類	かわらけ	7.4	5.0	1.8		
		60	土器類	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.6		
		61	土器類	かわらけ	7.5	5.3	2.0		
		62	土器類	かわらけ	7.3	4.4	2.3		
		63	土器類	かわらけ	6.9	4.9	2.1		
		64	土器類	かわらけ	4.8	3.0	1.0		折
		65	土器類	かわらけ	(10.4)	6.1	2.8		
		66	土器類	かわらけ	10.8	6.2	3.5		
		67	土器類	かわらけ	(11.8)	8.4	3.3		
		68	土器類	かわらけ	(12.1)	(6.9)	3.4		
		69	土器類	かわらけ	10.8	6.2	3.4		
		70	土器類	かわらけ	(11.3)	6.2	3.4		
		71	土器類	かわらけ	(12.0)	7.6	3.5		
		72	土器類	かわらけ	(12.4)	(7.8)	3.5		
		73	土器類	かわらけ	12.2	7.1	3.5		
		74	土器類	かわらけ	13.4	7.9	3.6		
		75	土器類	かわらけ	14.0	8.2	3.8		
		76	土器類	かわらけ	(13.3)	7.9	3.7		
		77	土器類	かわらけ	14.0	8.4	3.8		
		78	土器類	かわらけ	(14.0)	7.6	3.3		
		79	土器類	かわらけ	(13.7)	8.6	3.9		
		80	土器類	かわらけ	(13.1)	7.1	3.6		
		81	土器類	かわらけ	13.0	7.5	3.6		
		82	土器類	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.4		
		83	土器類	かわらけ	12.4	7.6	3.3		
		84	土器類	かわらけ	12.4	9.0	3.2		
		85	土器類	かわらけ	12.4	7.6	3.1		
		86	土器類	かわらけ	(12.3)	7.8	3.5		
		87	土器類	かわらけ	(12.8)	8.2	3.7		
		88	土器類	かわらけ	13.6	7.4	3.7		
		89	土器類	かわらけ	13.8	7.6	4.0		
		90	土器類	かわらけ	12.8	7.5	3.6		
		91	土器類	かわらけ	(13.7)	7.0	4.0		
		92	土器質 浅鉢型	火鉢	(26.0)	(18.0)	7.8		
		93	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		94	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		95	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		96	土器質 浅鉢型	火鉢	—	—	—		
		97	瓦器質 輪花型	火鉢	—	—	—		※
		98	石製品	碁石？	径；2.3		0.5		
		99	石製品	硯	(3.9) × (4.5) × 2.8				※
		100	骨角製品	笄	(5.9) × 1.5 × 0.2				
		101	木製品	漆器椀	—	—	—		※
		102	木製品	箸状製品	21.0	径；0.7			
		103	木製品	下駄	22.1 × 10.3 × 2.0				
		104	木製品	(用途不明)	(22.3) × 2.6 × 0.6				※
		105	木製品	(用途不明)	57.8 × 2.5 × 1.8				※

※ 12：渦巻文　97：12弁菊花陰刻　99：凝灰岩製　101：黒漆に桜文スタンプ　104：紡織機　105：紡織機部材

表9　出土遺物法量表（4）

（単位：cm）

遺構層位	図No.	遺物No.	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No.	備考
					長さ×幅×厚さ				
2面上	16	1	泉州窯 黄釉陶器	盤	—	—	—		
		2	龍泉窯 青磁	劃花文碗	—	(6.4)	2.1		
		3	龍泉窯 青磁	皿	(11.0)	(5.8)	3.4		※
		4	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	4.0	(2.2)		
		5	白磁	皿	(11.6)	—	—		
		6	青白磁	皿	(11.4)	—	—		
		7	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		8	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		9	渥美	甕	—	—	—		
		10	常滑	捏鉢	—	—	—		
		11	常滑	甕	—	—	—		
		12	常滑	甕	—	—	—		
		13	常滑	甕	—	—	—		
		14	常滑	甕	(23.8)	—	—		
		15	常滑	甕	—	—	—		
		16	常滑	甕	—	—	—		
		17	常滑	甕	—	—	—		
		18	常滑	甕	—	—	—		
		19	常滑	甕	—	—	—		
		20	常滑	甕	—	—	—		
		21	常滑	甕	—	—	—		
		22	土器類	かわらけ	(8.8)	(4.8)	1.3		手
		23	土器類	かわらけ	(6.9)	(3.7)	1.0		手
2面上	16	24	土器類	かわらけ	(12.0)	—	—		手・白
		25	土器類	かわらけ	(13.0)	(7.8)	2.9		手・穿
		26	土器類	かわらけ	(14.4)	(8.6)	2.9		手
		27	土器類	かわらけ	(13.9)	8.0	3.8		
		28	土器類	かわらけ	(12.5)	(8.2)	3.6		
		29	土器類	かわらけ	(11.9)	(7.8)	3.1		
		30	土器類	かわらけ	(11.7)	8.7	2.9		
		31	土器類	かわらけ	(11.5)	7.4	2.8		
		32	土器類	かわらけ	(7.4)	5.8	1.4		
		33	土器類	かわらけ	(7.8)	(6.2)	1.4		
		34	土器類	かわらけ	(8.1)	(4.8)	1.9		
		35	土器類	かわらけ	7.8	6.2	1.6		
		36	土器類	吉備系 碗	(12.4)	—	—		
		37	土器類	(産地不明)	—	(6.8)	(1.8)		
		38	石製品	滑石鍋	—	(14.8)	(2.4)		
		39	石製品	砥石	(7.6) × (3.0) × 1.6				※
		40	石製品	硯	(7.8) × (2.8) × 1.6				※
		41	木製品	漆器皿	(8.1)	(4.8)	1.1		※
		42	木製品	漆器皿	(9.8)	7.2	1.3		※
		43	木製品	箸状	(19.9)	径；0.6			
		44	木製品	箸状	(22.8)	径；0.6			
		45	木製品	箸状	25.7	径；0.7			

※　3：文様内面に型押し　39：上野砥　40：粘板岩系　41：黒漆花文　42：黒漆無文

遺構層位	図No.	遺物No.	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No.	備考
					長さ×幅×厚さ				
2面溝1	20	1	泉州窯 黄釉陶器	盤	—	—	—		
		2	龍泉窯 青磁	蓮弁文碗	—	—	—		
		3	東海系土器	碗	—	—	—		
		4	南部系	山茶碗	(14.2)	—	—		
		5	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		6	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		7	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		8	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		9	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		10	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		11	山茶碗窯系	捏鉢	(20.2)	(11.6)	8.7		
		12	山茶碗窯系	捏鉢	—	—	—		
		13	常滑	捏鉢	—	—	—		
		14	常滑	甕	—	—	—		
		15	常滑	甕	—	—	—		
		16	常滑	鳶口壺	—	(9.0)	(5.6)		
		17	常滑	鳶口壺	—	(9.0)	(2.9)		
2面溝1	20	18	土器質	火鉢	—	—	—		
		19	土製品	円盤状	5.2 × 5.0 × 0.9				※
		20	土器類	かわらけ	(10.4)	(9.0)	2.2		手・白
		21	土器類	かわらけ	8.1	7.2	1.8		手
		22	土器類	かわらけ	12.8	8.5	3.1		燈
		23	土器類	かわらけ	13.1	5.2	3.8		
		24	土器類	かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.3		
		25	土器類	かわらけ	(7.4)	5.4	1.6		
		26	土器類	かわらけ	8.2	6.4	1.6		燈
		27	土器類	かわらけ	(8.0)	5.6	1.8		
		28	土器類	かわらけ	(8.1)	6.8	1.8		
		29	土器類	かわらけ	7.7	6.0	1.8		
		30	土器類	かわらけ	(8.1)	6.8	1.8		
		31	土器類	かわらけ	—	6.8	1.1		白
		32	木製品		16.5 × 6.5 × 1.4				
		33	木製品	箸状	(19.1)	径；0.7			
溝1裏込め	20	34	白磁	壺	—	—	—		
		35	東海系土器	碗	(10.8)	—	—		
		36	南部系	山茶碗	—	7.0	(2.3)		燈？
		37	亀山	甕	—	—	—		
		38	渥美	甕	(40.0)	—	—		
		39	渥美	捏鉢	—	—	—		
		40	常滑	甕	—	—	—		
		41	土器類	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.1		手・白
溝1裏込め	20	42	土器類	かわらけ	(8.8)	(5.8)	1.5		手
		43	土器類	かわらけ	(8.7)	6.0	1.8		
		44	土器類	かわらけ	(6.8)	6.0	1.9		
		45	土器類	かわらけ	(7.8)	5.4	1.7		
		46	土器類	かわらけ	13.0	8.5	3.5		燈
		47	土器類	かわらけ	(11.7)	8.1	3.1		
		48	土器類	かわらけ	(7.8)	5.2	1.6		※
		49	木製品	漆器椀	—	(7.4)	(2.3)		※

※　19：かわらけ質　48：内外面墨書・判読不能　49：黒漆にスタンプ（亀甲文内に菊花組合わせ）

表10　出土遺物法量表（5）

（単位：cm）

遺構層位	図No.	遺物No.	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No.	備考
					長さ×幅×厚さ				
2面方形土壙内	22	1	常　滑	甕	—	—	—		
		2	常　滑	甕	—	—	—		
		3	常　滑	甕	—	—	—		
		4	土器類	かわらけ	(13.1)	8.8	3.1		
		5	土器類	かわらけ	(8.0)	6.4	1.5		
		6	木製品	箸状	22.3	径；0.7			
		7	木製品	箸状	23.4	径；0.7			
		8	木製品	箸状	24.0	径；0.7			
		9	木製品	漆器皿？	—	(11.0)	(1.3)		※
	22	10	土器類	かわらけ	7.8	5.7	1.6		
	22	11	龍泉窯 青磁 蓮弁文碗		—	(5.4)	(2.6)		
		12	土器類	かわらけ	7.5	6.0	1.7		
		13	土器類	かわらけ	(11.7)	7.5	3.3		燈
		14	土器類	かわらけ	(12.6)	9.0	3.5		
		15	山茶碗窯系	捏　鉢	—	(14.8)	(9.0)		
	22	16	常　滑	捏　鉢	—	—	—		
		17	土器類	かわらけ	(12.2)	(7.0)	2.6		手
		18	土器類	かわらけ	(9.3)	5.4	1.7		手
		19	土器類	かわらけ	(9.2)	(7.2)	1.6		手
		20	木製品	箸状	(14.4)	径；0.7			
2面方形土壙内	22	21	木製品	箸状	(16.6)	径；0.5			
		22	木製品	箸状	(17.8)	径；0.6			
		23	木製品	箸状	(19.3)	径；0.7			
		24	木製品	箸状	21.4	径；0.6			
		25	木製品	箸状	(21.4)	径；0.5			
		26	木製品	箸状	24.9	径；0.6			
		27	木製品	箸状	24.7	径；0.7			
		28	木製品	箸状	(24.5)	径；0.7			
		29	木製品	箸状	(22.5)	径；0.7			
		30	木製品	板草履	23.3 × 9.6 × 0.3				
		31	木製品	板草履	23.0 × 9.5 × 0.4				
	22	32	龍泉窯 青磁 劃花文碗		—	—	—		
		33	山茶碗窯系	捏　鉢	—	—	—		
		34	常　滑	甕	—	—	—		
		35	常　滑	甕	—	—	—		
		36	常　滑	甕	—	—	—		
		37	土器類	かわらけ	(8.3)	6.6	2.0		穿
		38	土器類	かわらけ	(12.0)	7.6	3.2		燈
		39	土器類	かわらけ	12.8	8.4	3.3		
		40	木製品	箸状	(21.1)	径；0.7			

※　1～9：土壙28　10：土壙30　11～15：土壙29　16～31：土壙26　32～40：土壙27

※　9：土壙25 黒漆に楓文

遺構層位	図No.	遺物No.	製品名（産地）	遺物名（器種）	口径	底径	器高	図版No.	備考
					長さ×幅×厚さ				
2面土壙内	23	1	土器類	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.8		
	23	2	土器類	かわらけ	(7.2)	(6.0)	1.5		手
		3	瓦	女　瓦	(14.5)×(9.0)× 1.8				
	23	4	常　滑	甕	—	—	—		
	23	5	常　滑	甕	—	—	—		
		6	土器類	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.7		
		7	木製品	箸状	22.8	径；0.5			
		8	木製品	箸状	22.1	径；0.5			
		9	木製品	箸状	(20.7)	径；0.7			
	23	10	土器類	かわらけ	(9.0)	6.7	2.2		燈
	23	11	常　滑	甕	—	—	—		
		12	鉄製品	(用途不明)	(12.9) × (1.6) × 0.2				
		13	瓦	女　瓦	(8.8)×(13.5)× 2.3				
		14	木製品	箸状	(21.4)	径；0.6			
		15	木製品	箸状	(22.4)	径；0.7			
		16	木製品	箸状	(22.4)	径；0.5			
	24	17	龍泉窯 青磁 蓮弁文碗		—	—	—		
		18	土器類	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.6		手
		19	土器質	火　鉢	—	—	—		
	24	20	土器類	かわらけ	(8.7)	(6.6)	1.6		手・燈
		21	土器類	かわらけ	(9.3)	(6.2)	1.8		手
		22	土器類	かわらけ	(12.9)	(8.0)	3.4		手
2面土壙内	24	23	土器類	かわらけ	(12.3)	8.5	2.7		
		24	土器類	かわらけ	(8.5)	(6.5)	1.7		
		25	木製品	箸状	(13.5)	径；0.6			
		26	木製品	箸状	22.8	径；0.7			
	24	27	同安窯 青磁 櫛掻文皿		—	—	—		
		28	龍泉窯 青磁 劃花文碗		—	—	—		
		29	土器類	かわらけ	8.7	5.7	2.1		手
		30	土器類	かわらけ	8.7	5.3	2.2		手
		31	土器類	かわらけ	8.8	6.6	1.8		
		32	土器類	かわらけ	8.2	6.0	2.1		燈
		33	土器類	かわらけ	12.6	8.8	3.3		
	24	34	土器類	かわらけ	(14.1)	(7.6)	3.2		
		35	土器類	かわらけ	13.3	8.5	3.7		
		36	土器類	かわらけ	—	(7.4)	(1.4)		白
		37	木製品	箸状	(17.8)	径；0.6			
		38	木製品	箸状	25.3	径；0.7			
		39	土器類	かわらけ	(12.5)	8.7	3.5		
	24	40	土器類	かわらけ	—	—	—		※
		41	石製品	砥　石	(4.3)× 3.6 × 0.5				※
		42	石製品	砥　石	(2.3)× 3.5 × 0.5				※
		43	木製品	漆器椀	—	(6.2)	(1.8)		※
	25	1	(産地不明)	(器種不明)	(18.3)	—	—		※

※　1：土壙45　2・3：土壙44　4：土壙46　5～9：土壙46　10：土壙39　11～16：土壙47　17～19：土壙

※　20～26：土壙108　27～33：土壙109・110　34～38：土壙116　39：土壙115　40～43：土壙117

※　26－1：土間状遺構

※　40：墨書　41・42：鳴滝砥　43：飛鶴文　26－1：穿孔(複数)

層位・面		中世包含層	1　面	1面下	2　面	2面下	3　面	3面下	4　面	古　代	採　集			
備　考			(遺構内含む)		(遺構内含む)		(遺構内含む)		(遺構内含む)	(遺構内含む)		破片数計	項目計	百分率
掲載点数		53	48	173	178	42	68	25	5	23	16	**631**		
挿図Ｎｏ.														
かわらけ	糸切り	663	1,058	2,027	1,557	163	230	81	17		129	**5,925**		
	手捏ね	5	35	11	636	75	317	150	24		144	**1,397**	7,322	63.1%
舶載陶磁器	青磁	9	6	50	11	7	3	2	2		7	**97**		
	白磁	8	1	22	6	0	4				6	**47**		
	青白磁	5	4	5	3	1	2					**20**		
	その他	1	1	2	1						1	**6**	170	1.5%
国内産	瀬戸窯	14	6	13		1					1	**35**		
陶土器類	常滑窯	216	149	1,173	654	111	121	73	3		95	**2,595**		
	渥美窯	8	1	22	18	3	17	9			4	**82**		
	山茶窯	18	18	132	81	13	16	6			12	**296**		
	他土器類	1		3	105	2	1	2				**114**		
	火鉢	20	15	36	6	2		1			4	**84**		
	瓦	6	1	1	5	1	3	1				**18**	3,224	27.8%
土　製　品		3	5	2	2		1				1	**14**	14	0.1%
石　製　品		5	1	6	11	1	1	1				**26**	26	0.2%
銅銭含 金属製品		11	9	9	2		1	6	1		6	**45**	45	0.4%
漆器含　木製品		1	2	15	36	17	60				9	**140**	140	1.2%
骨角製品		3		3								**6**	6	0.1%
自然遺物　等		56	13	172	82	6	23	25	2		7	**386**	386	3.3%
中世以前			4	6	12		6	46	8	115	12	**209**	209	1.8%
近世以降		13	2	6	1		1				42	**65**	65	0.6%
その他・不明				1								**1**	1	0.0%
破片数計		**1,066**	**1,331**	**3,717**	**3,229**	**403**	**807**	**403**	**57**	**115**	**480**	**11,608**	11,608	100%

※かわらけには、白かわらけ(糸切り・14、手捏ね９)含む。

国内産陶土器類・他土器類は、亀山窯甕・瓦器碗・東遠系山茶碗・湖西窯山茶碗 各１、吉備系土師質土器７、土鍋３ 含む。

金属製品の内、銅銭は14枚含む。　木製品の内、漆器は40破片含む。

表11　出土遺物破片数計数表

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	汐見一夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

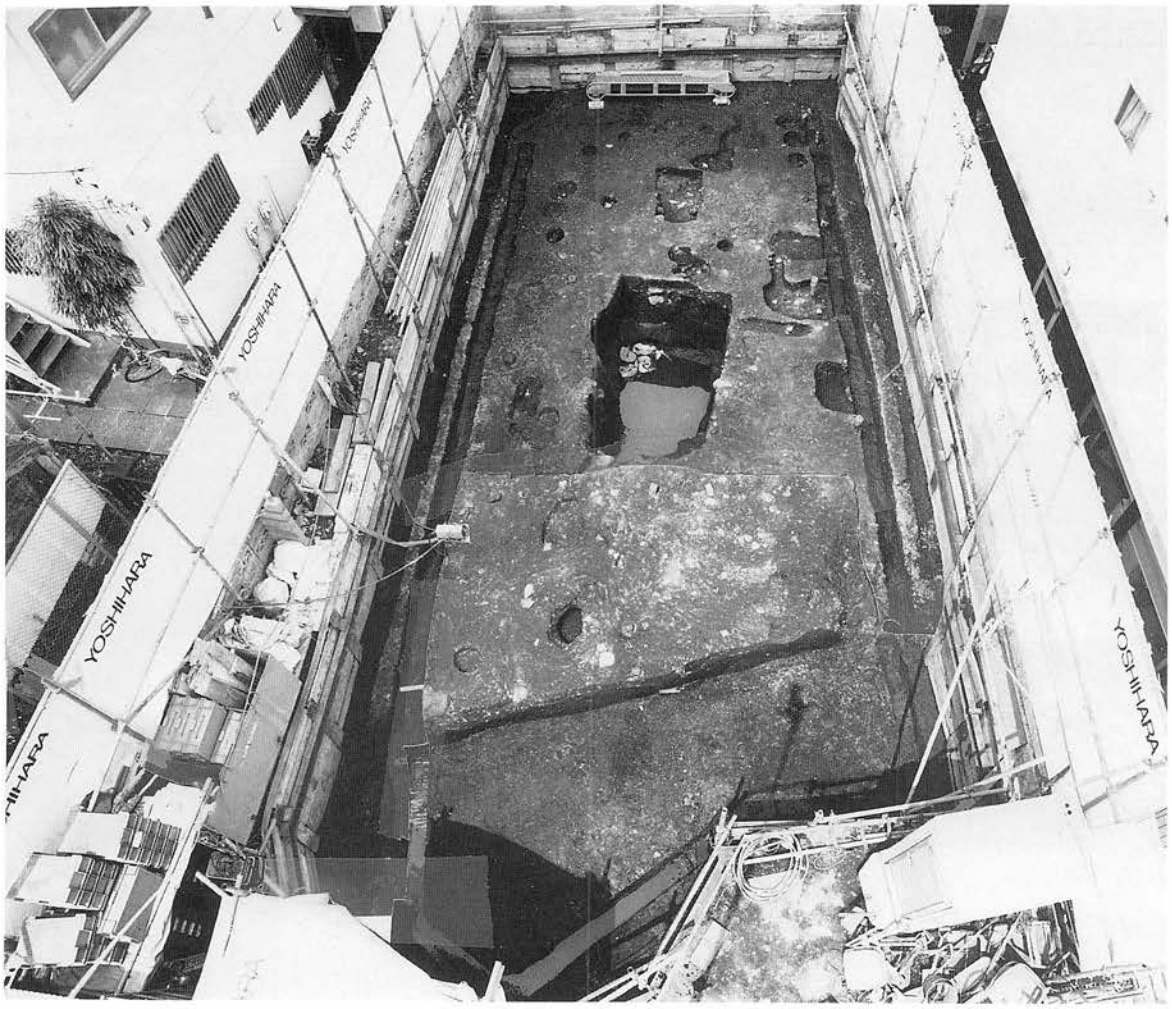
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	かながわけんかまくらしおなりまち 神奈川県鎌倉市御成町123番5地点	204	№242	35° 19 00″	139° 33′ 10″	19980310 ～ 19980520	46m²	店舗併用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路周辺遺跡群	都市遺跡	鎌倉時代 古墳時代後期	溝 土壙 方形土壙 柱穴 他	船載陶磁器 国内産陶磁器 石・鉄・骨・角製品 漆器等木製品 自然遺物類	

写　真　図　版

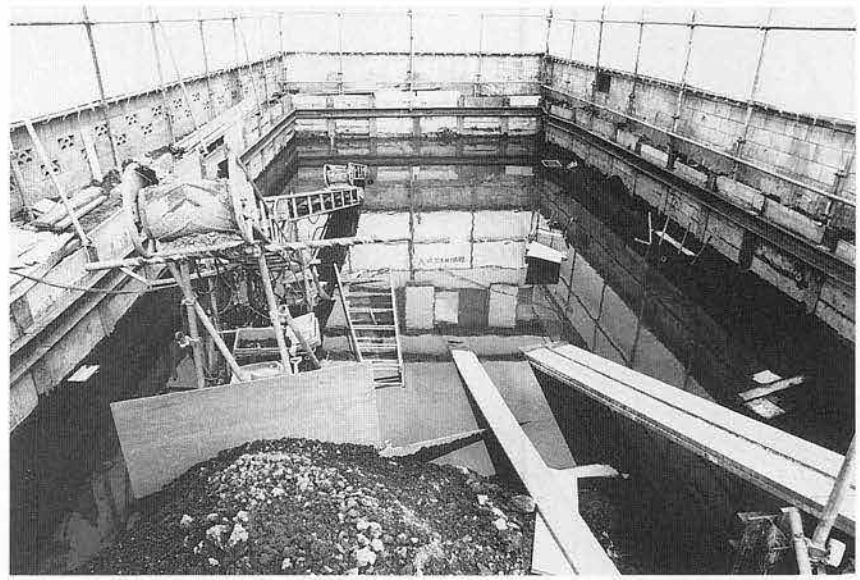
▲　調査地点遠景（南から・↓が調査地点）

図版 2

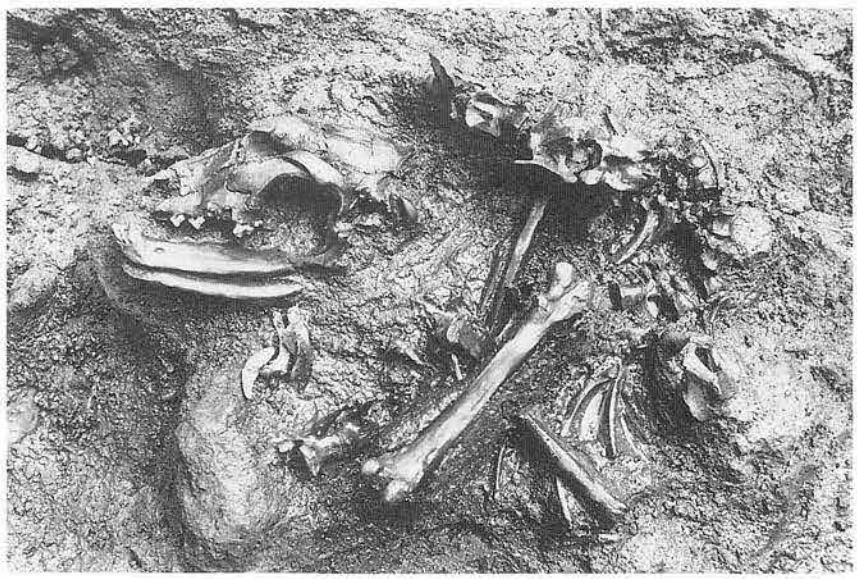


▲　1面全景（東から・合成写真）

◀1．1面西半土壙（西から）

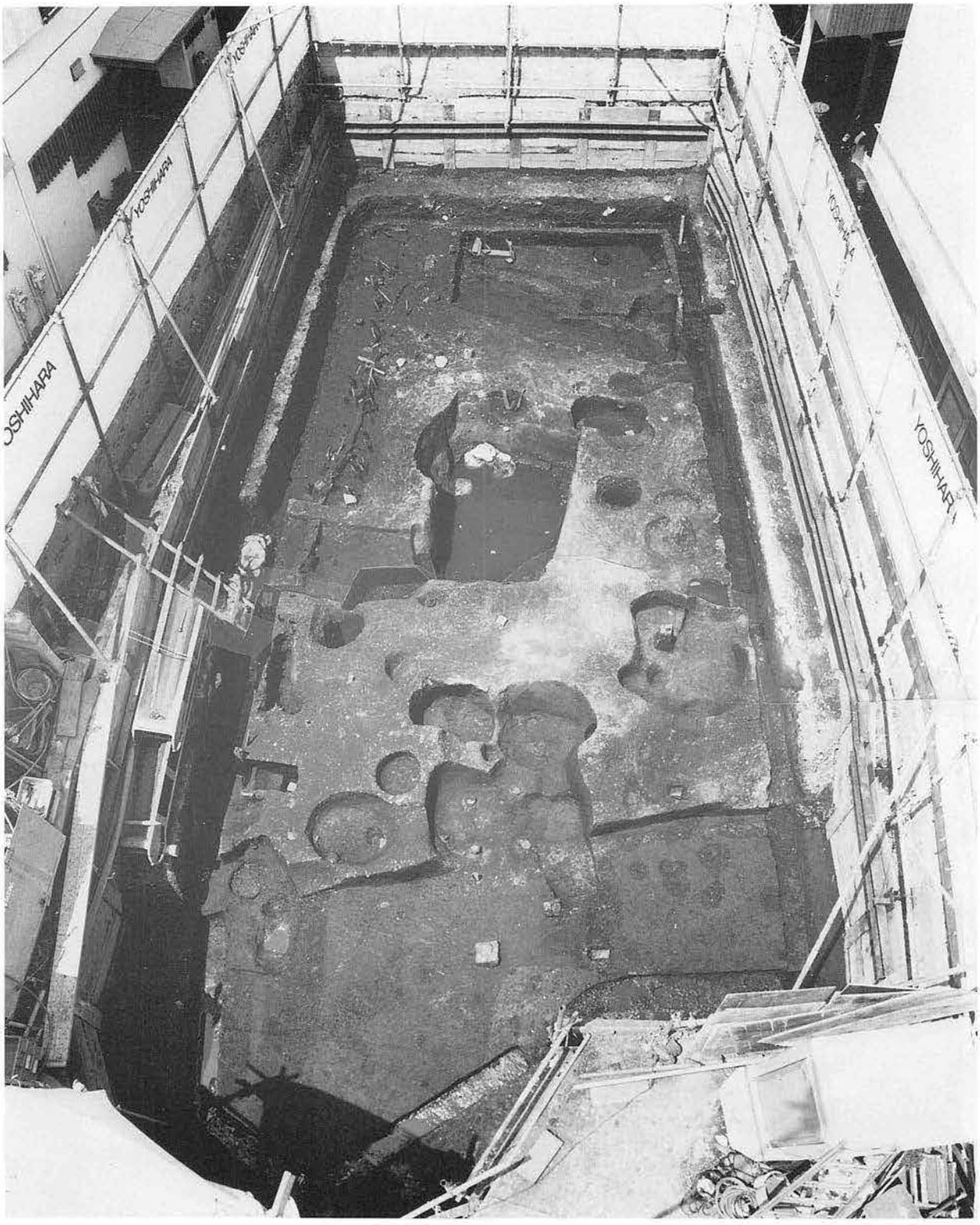


2．降雨後調査区水没状況
（Ⅰ区Ⅰ面終了後）▶



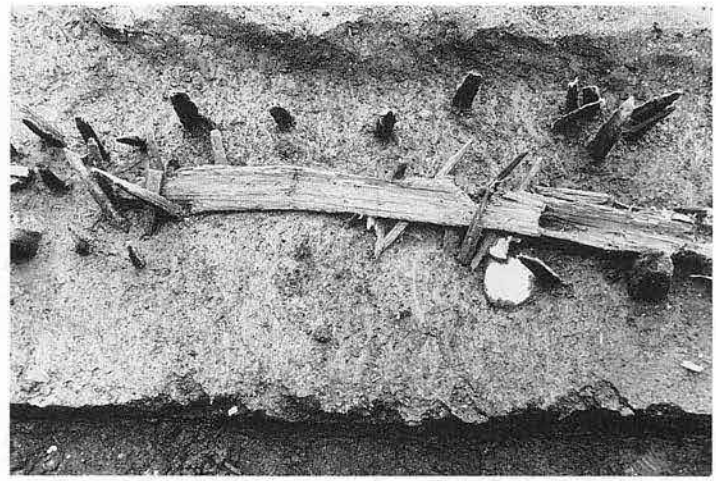
◀3．1面下獣骨検出状況

図版 4



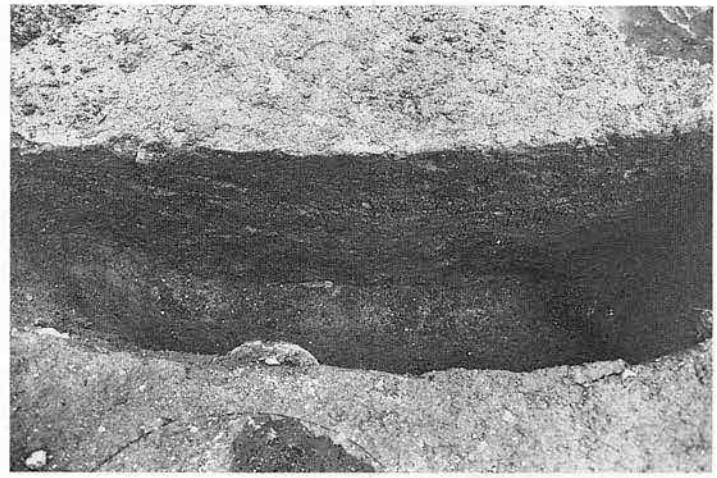
▲　2 面全景（東から・合成写真）

▲1．２面溝１（西から）



▲2．２面溝１横板・杭（部分）

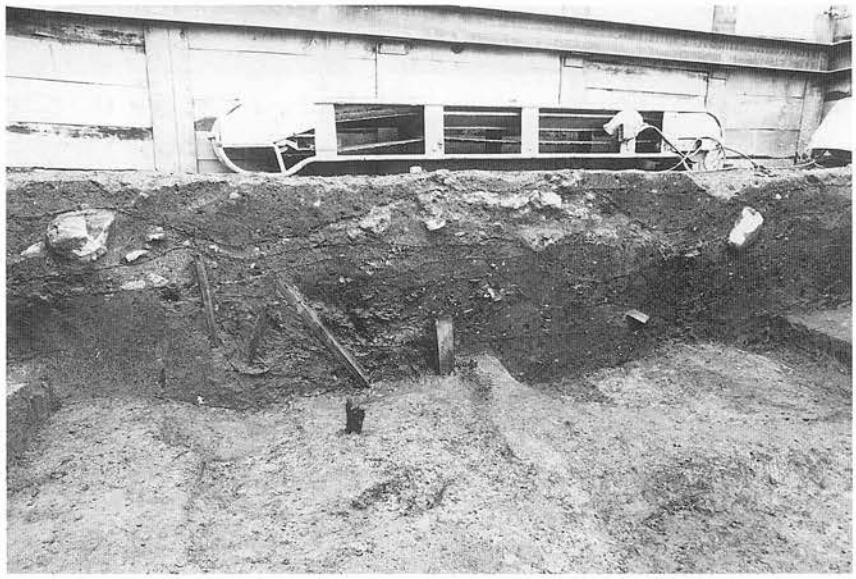
▲3．２面土壙37（北から）



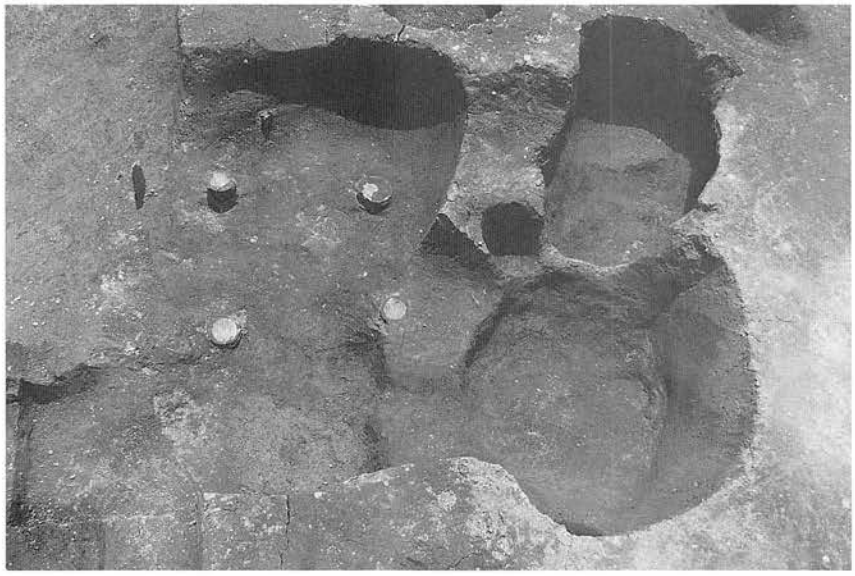
▲4．２面土壙37南北土層断面（西から）

図版 6

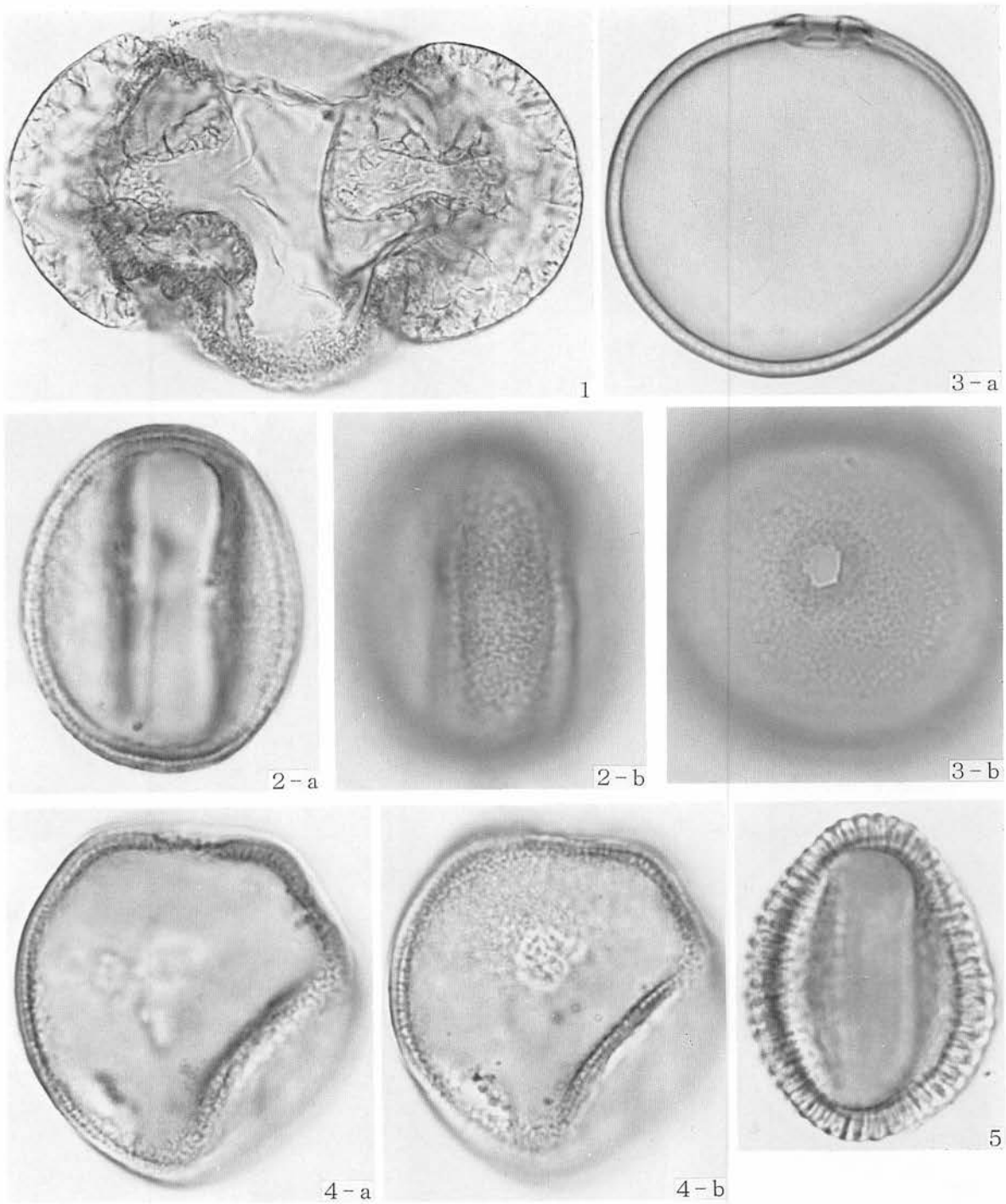
1．２面方形土壙群完掘状況
（西から）▶



2．調査区西壁土層断面▶



◀3．２面土壙108～110
（北から）

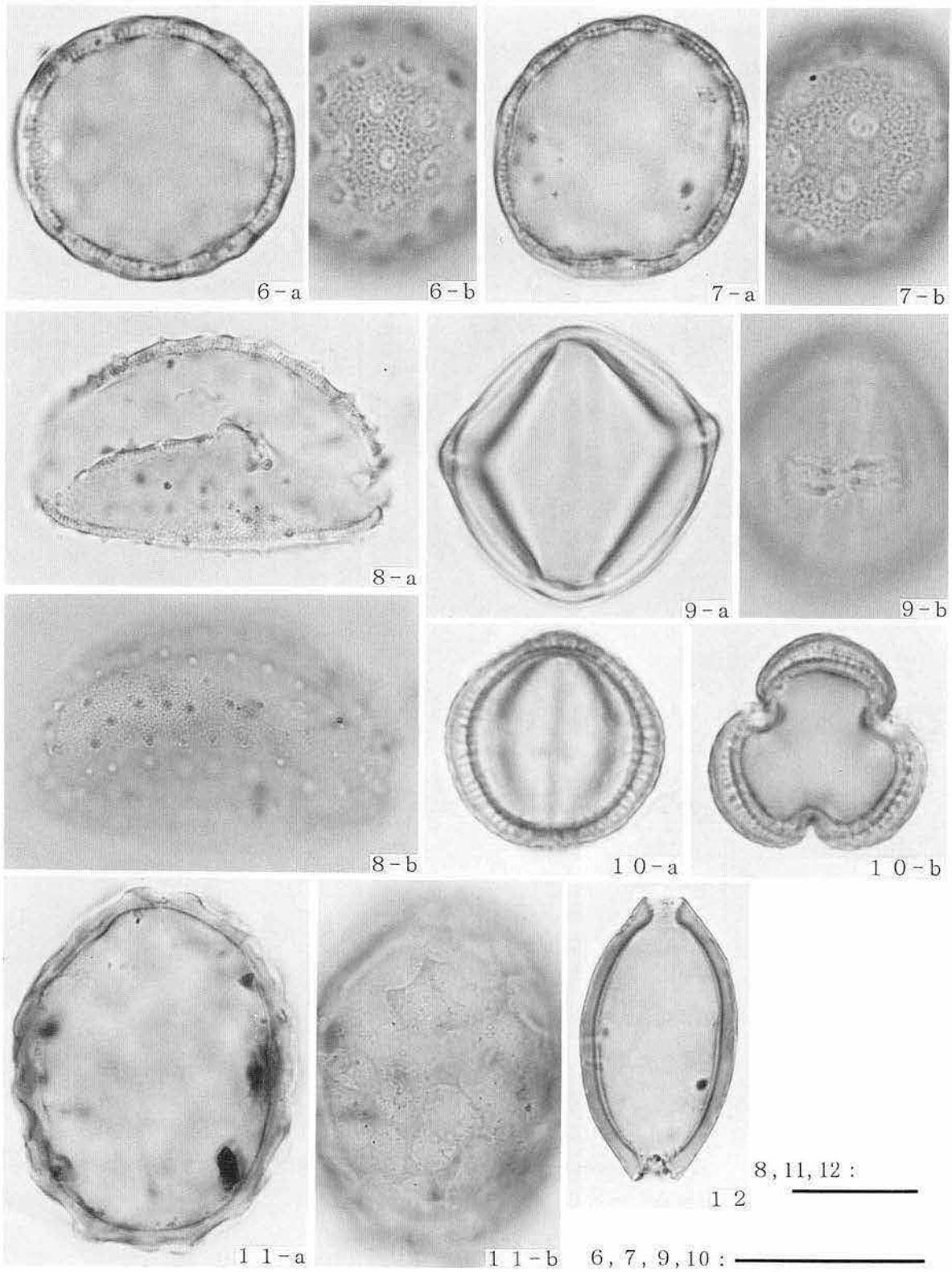


1 : ———　　2～5 : ———

1 ：マツ属複維管束亜属　PLC. SS 2430　No.1
2 ：コナラ属アカガシ亜属　PLC. SS 2433　No.4
3 ：イネ科　PLC. SS 2439　No.6
4 ：カヤツリグサ科　PLC. SS 2436　No.5
5 ：アブラナ科　PLC. SS 2438　No.5

若宮大路周辺遺跡群の花粉化石（scale bar:20 μm）

図版 8



6 ：アカザ科－ヒユ科　PLC. SS 2432　No.1
7 ：アカザ科－ヒユ科　PLC. SS 2434　No.4
8 ：ツユクサ属　PLC. SS 2437　No.5
9 ：ナス科　PLC. SS 2440　No.6
10 ：ヨモギ属　PLC. SS 2441　No.6
11 ：回虫卵　PLC. SS 2435　No.4
12 ：鞭虫卵　PLC. SS 2431　No.1

若宮大路周辺遺跡群の花粉・寄生虫卵化石（scale bar:20 μm）

北条時房（ほうじょうときふさ）・顕時邸跡（あきときていあと）（No.278）

雪ノ下一丁目273番イ地点

例　　言

1．本報は北条時房・顕時邸跡の神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目273番イ地点における店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査報告書であり、個人住宅の国庫補助事業相当分の報告である。本報告では第１面・第２面・第３面の調査成果を報告し、第４面・第５面・第６面の成果は原因者負担事業相当分として別に報告する予定である。

2．発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成９年３月12日より同年６月19日にかけて実施した。発掘調査対象面積は国庫補助事業相当分94.82m²、原因者負担事業相当分105.73m²の合計200.55m²である。

3．調査は以下の体制で行なった。

調査担当者　斉木秀雄

主任調査員　瀬田哲夫

調　査　員　伊丹まどか、熊谷満、粂健一、熊谷洋一

調査補助員　辻きよ子、八杉陽子、田村葉子、山口朋子、松原康子

調査協力者　石渡辰男、香川尚美、川村四志男、福本寿夫、松崎靖弘、簑田孝善、多田徳蔵、関卯之松、荻野勲（以上、鎌倉市シルバー人材センター）

4．遺物実測・トレース、及び図版作成は瀬田哲夫、熊谷満、石元道子、山上玉恵、渡邊美佐子、吉田桂子、汐見一夫、八杉陽子、田村葉子、山口朋子、土屋晴美、熊谷洋一が行なった。

5．本報は第１章を熊谷満が執筆し、他の執筆と全体の編集は瀬田が担当した。

6．本報に使用した遺構写真は瀬田、熊谷満、伊丹が、遺物写真は瀬田が撮影したものである。

7．本報の遺構・遺物図版の指示は以下の通りである。

図版縮尺　遺構全体図　１／１００

個別遺構　　１／３０、１／６０

出土遺物　　１／３

遺構図版　水糸高は海抜を示す。

遺物図版　←→は使用痕の範囲、←・→は加工痕の範囲、－・－は釉薬の範囲を示す。

油煙・焼け焦げの範囲は黒塗り表示である。

計測表　　（　）は復元数値、［　］は現存数値である。

8．本文中で「鎌倉石」、「土丹」と呼称しているものは、ともに鎌倉周辺で産する岩石で、前者は粗粒凝灰岩、後者は凝灰質シルト岩のことである。

9．出土遺物については次の諸氏に御教示を賜った。

藤沢良祐……瀬戸窯製品

手塚直樹……貿易陶磁

宗臺秀明……動物骨

汐見一夫……硯・砥石

10．発掘調査、及び報告書作成にあたり次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

藤沢良祐、手塚直樹、宗臺秀明、福田誠、原広志、安藤建設

11．本報に関わる出土品等の記録は一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 71
第２章　調査の経過と堆積土層 …… 75
　第１節　調査の経過 …… 75
　第２節　堆積土層 …… 76
第３章　検出された遺構と出土した遺物 …… 78
　第１節　第１面 …… 78
　第２節　第２面 …… 86
　第３節　第３面 …… 112
第４章　まとめ …… 150

挿　図　目　次

図１　鎌倉市全図と調査位置 …… 72
図２　調査地点位置図 …… 73
図３　グリット割付図 …… 75
図４　堆積土層模式図 …… 76
図５　第１面全体図 …… 79～80
図６　第１面検出遺構 …… 81
図７　第１面出土遺物（１）遺構出土遺物 …… 82
図８　第１面出土遺物（２）面出土遺物 …… 84
図９　第１面出土遺物（３）面出土遺物 …… 85
図10　第２面全体図 …… 87～88
図11　第２面検出遺構（１）〈140・141〉 …… 89
図12　第２面出土遺物（１）〈140〉 …… 91
図13　第２面出土遺物（２）〈140下層〉 …… 92
図14　第２面出土遺物（３）〈141A・B〉 …… 93
図15　第２面出土遺物（４）〈141C〉 …… 95
図16　第２面出土遺物（５）〈141C〉 …… 96
図17　第２面出土遺物（６）〈141C〉 …… 97
図18　第２面出土遺物（７）〈141D・E〉 …… 99
図19　第２面出土遺物（８）〈141A～E〉 …… 100
図20　第２面出土遺物（９）〈141A～E〉 …… 101
図21　第２面検出遺構（２）〈126〉etc. …… 102
図22　第２面出土遺物(10)遺構出土遺物 …… 103
図23　第２面出土遺物(11)面出土遺物 …… 106
図24　第２面出土遺物(12)面出土遺物 …… 107
図25　第２面出土遺物(13)面出土遺物 …… 108
図26　第２面出土遺物(14)面出土遺物 …… 109
図27　第２面出土遺物(15)面出土遺物 …… 111
図28　第３面全体図 …… 113～114
図29　第３面検出遺構（１）〈102〉 …… 115
図30　第３面検出遺構（２）〈229〉 …… 115
図31　第３面出土遺物（１）〈229〉 …… 116
図32　第３面検出遺構（３）〈275〉 …… 117
図33　第３面出土遺物（２）〈275〉 …… 118
図34　第３面出土遺物（３）〈275〉 …… 119
図35　第３面検出遺構（４）〈276〉 …… 119
図36　第３面出土遺物（４）〈276〉 …… 120
図37　第３面出土遺物（５）〈276〉 …… 121
図38　第３面検出遺構（５）〈162〉 …… 121
図39　第３面出土遺物（６）〈162〉 …… 122
図40　第３面検出遺構（６）〈222〉etc. …… 124
図41　第３面検出遺構（７）〈213〉etc. …… 125
図42　第３面出土遺物（７）遺構出土遺物 …… 126
図43　第３面出土遺物（８）面出土遺物 …… 129
図44　第３面出土遺物（９）面出土遺物 …… 130
図45　第３面出土遺物(10)面出土遺物 …… 131
図46　第３面出土遺物(11)面出土遺物 …… 132
図47　第３面出土遺物(12)面出土遺物 …… 133
図48　第３面出土遺物(13)面出土遺物 …… 134
図49　第３面出土遺物(14)面出土遺物 …… 135
図50　第３面出土遺物(15)面出土遺物 …… 136
図51　第３面出土遺物(16)面出土遺物 …… 138
図52　遺構変遷概念図 …… 150

図　版　目　次

PL. 1　1. 調査地点近景(東から) …… 155
　　2. 第1面(西から) …… 155
　　3. 第1面(東から) …… 155
PL. 2　1. 第1面イコウ93 (南から) … 156
　　2. 第2面(西から) …… 156
　　3. C−7グリット土層堆積(北から) …… 156
　　4. C−6グリット土層堆積(西から) …… 156
PL. 3　1. 第2面(西から) …… 157
　　2. イコウ140・141(北から) …… 157
　　3. 土丹版築(東から) …… 157
PL. 4　1. 第3面(西から) …… 158
　　2. 掘立柱建物(西から) …… 158
　　3. 調査区西部(東から) …… 158
PL. 5　1. イコウ162(北から) …… 159
　　2. イコウ162(北から) …… 159
　　3. イコウ162木組み状況(南から) …… 159
PL. 6　1. 調査区西部(北から) …… 160
　　2. イコウ222−B　柱検出状況(東から) …… 160
　　3. イコウ229(西から) …… 160
PL. 7　1. イコウ275(北から) …… 161
　　2. イコウ275(北から) …… 161
　　3. イコウ276(北から) …… 161
PL. 8　出土遺物(1) …… 162
PL. 9　出土遺物(2) …… 163
PL. 10　出土遺物(3) …… 164
PL. 11　出土遺物(4) …… 165
PL. 12　出土遺物(5) …… 166

表　目　次

表1　出土遺物計測表(1) …… 140
表2　出土遺物計測表(2) …… 141
表3　出土遺物計測表(3) …… 142
表4　出土遺物計測表(4) …… 143
表5　出土遺物計測表(5) …… 144
表6　出土遺物計測表(6) …… 145
表7　出土遺物計測表(7) …… 146
表8　出土遺物計測表(8) …… 147
表9　出土遺物計測表(9) …… 148
表10　出土遺物計測表(10) …… 149
表11　出土瀬戸生産地編年 …… 151

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地は雪ノ下一丁目273番イに位置する。ここは鎌倉の市街を南北に走る主要幹線道路、若宮大路の北端付近西側にあたり、「北条時房・顕時邸跡」とされる範囲内に所在する。この邸跡は北を横大路、東を若宮大路に接する東西約110m、南北約220mの長方形の区画が想定されており、「若宮幕府跡」あるいは「北条泰時・時頼邸跡」などのある、道路を挟んだ東側の一帯とともに、中世時代においては、枢要な区域であったことが考えられる。

若宮大路は、源頼朝が治承４年（1180年）10月に鎌倉入りした後に造られた道路で、このとき頼朝は、まず鶴岡八幡宮を由比郷から小林郷（現在地）へ移し、その東に自らの屋敷の建築を始めている。寿永元年（1182年）３月に、妻である政子の安産祈願のために段葛の造営を行った旨が『吾妻鏡』に記されており、若宮大路もこの頃には完成していたものと思われる。大路の名は京都石清水八幡宮の霊を勧請した若宮の社殿にちなみ、造営の際には頼朝自身が監督し、北条時政以下の諸将が土石を運んだという。こののち文治３年（1187年）３月には梶原景時に、翌年５月には八田知家に命じて、これに東西方向に交差する横大路、大町大路や、東側に小町大路、西側に今大路など、鎌倉中の道路を作らせた、とされる。室町時代には参詣道としての機能から、七度小路・千度小路などとも称された。

本遺跡である邸跡の主と考えられる北条時房・顕時について以下に概略する。

北条時房は安元元年（1175年）に、時政の子として生まれた。兄に執権義時をもつ。前名は時連といい、建仁２年（1202年）に名を改めた。はじめ頼家の側近として仕え、その死後は実朝、義時にも仕えた。文治５年（1189年）の奥州征伐、元久２年（1205年）の畠山重忠追討、建保元年（1213年）の和田合戦などに従軍しており、承久の乱（1221年）に際しては、東海道軍の将として上洛、後に南六波羅探題となった。甥の執権泰時のもとで連署・相模の守とを任じ、仁治元年（1240年）に66歳で死没した。『吾妻鏡』には大中風（脳溢血）であろうかとの記述がある。

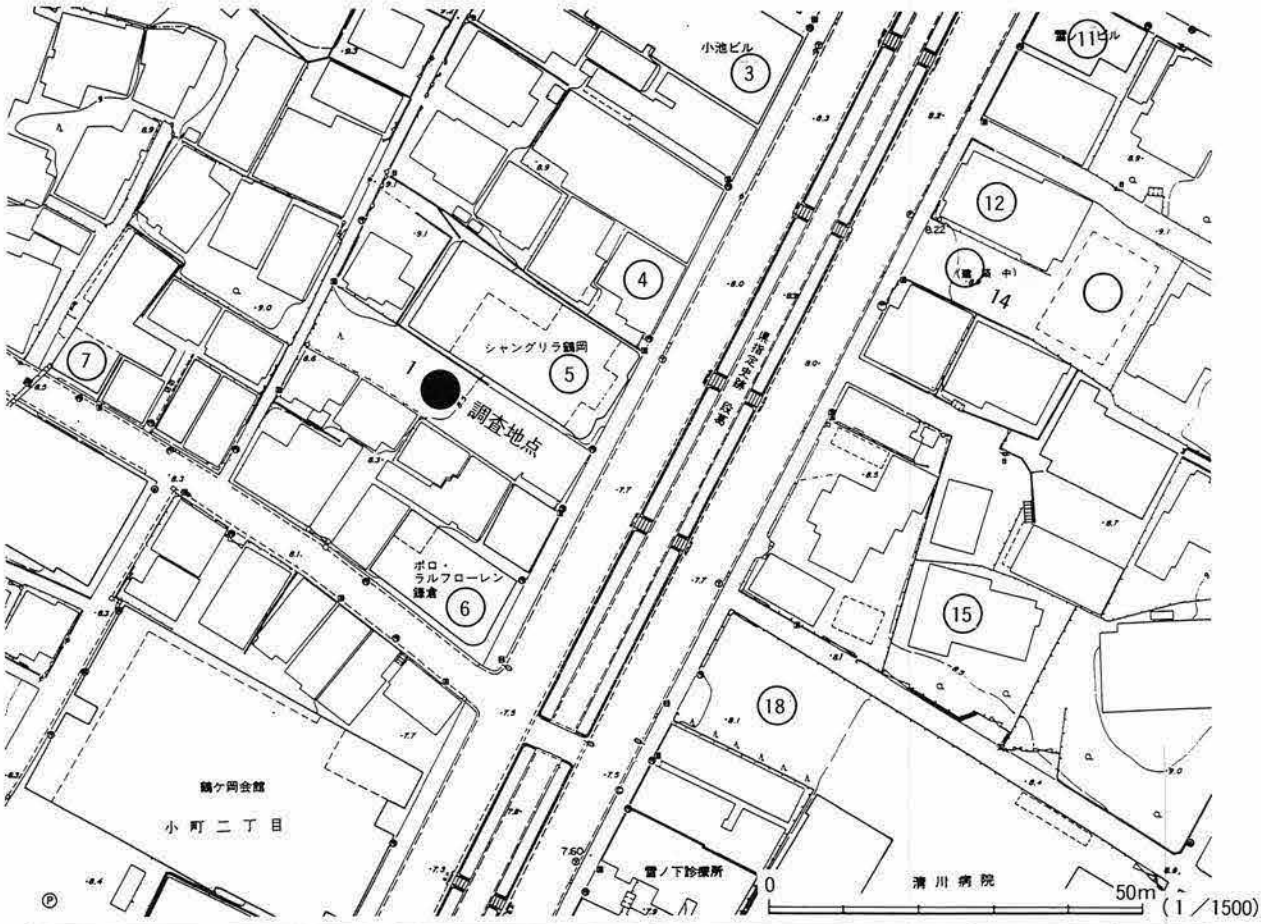
北条顕時は宝治２年（1248年）に生まれた。父は、時房の兄義時の孫にあたり、金沢氏を名乗った実時である。顕時は引付衆・評定衆などの要職を歴任したが、弘安８年（1285年）の霜月騒動では安達泰盛を岳父とするために縁座として、下総の埴生庄に配流された。その後出家して父の開いた武蔵国六浦荘金沢郷の称名寺を整備し、下総へ去る際には多くの領地を同寺へ寄進した。学問を好み、これも父の創設したものである、金沢文庫の内容を充実させることにも力を尽くしている。正安３年（1301年）死去。

考古的な資料として、この「北条時房・顕時邸跡」の範囲内では、これまで６ヵ所の地点において発掘調査が行われている。それぞれの地点について、以下に説明を加える。

本調査地点のすぐ北隣に位置するNo.５地点（図１、２）では、木組みの南北溝を検出している。この溝は若宮大路の側溝と推定され、『北野天神縁起』の菅原是善邸前の溝や、『蒙古襲来絵詞』の安達泰盛邸の溝などに出てくる木組溝と似た構造を持っている。他に、囲炉裏や井戸状遺構、多数の柱穴群等も検出している。

No.５地点の北隣にはNo.４地点（図１、２）があり、ここでも木組の南北溝を検出している。位置関係や走行方位、木組の構造などから、No.５地点で検出された若宮大路側溝と同じものと思われる。さらにこの遺跡では、側溝に伴う橋脚や、側溝より西に、塀であろう柱穴列と、塀に囲まれた居住域を表す建物跡、井戸、便所等を検出している。

図1　鎌倉市全図と調査位置



No	調査地点	報告書	発行
1	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 273番イ地点）	本調査地点	
2	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 265番３地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』	1990年
3	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 271番１地点）	『北条時房・顕時邸跡』	1989年
4	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 272番地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』	1998年
5	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 273番ロ地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』	1988年
6	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 274番２地点）	『北条時房・顕時邸跡』	1988年
7	北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 233番９地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書３』	1987年
8	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 377番７地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』	1996年
9	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 374番２地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書２』	1986年
10	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 371番１地点）	『北条泰時・時頼邸跡』	1985年
11	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 372番７地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書１』	1985年
12	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 370番１地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』	1998年
13	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 369番他地点）		
14	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 369番地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』	1991年
15	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 419番３地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書３』	1987年
16	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 395番地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』	1989年
17	北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 432番２地点）	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』	1989年
18	若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目 366番１他地点）	『第１回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』	1991年

図２　調査地点位置図

そのさらに北側に位置するNo.3地点（図1、2）では、若宮大路に直交方向の東西溝や、大路と基軸のほぼ同じ掘立柱建物跡を検出しており、遺跡の年代は13世紀末～14世紀前葉に位置付けられる。ここは若宮大路より西に30m程入った部分のみの調査であったため、大路の側溝と思われるような溝は検出されていない。

本調査地点から1軒おいて南にNo.6地点（図1、2）が位置する。若宮大路側溝と、それに平行する南北溝、その西側に、数時期にわたって建て替えの行われている掘立柱建物跡などが検出されている。若宮大路に直交方向の東西溝も検出されているが、大路側溝を横断し、時期的にこちらの溝の方が古い。

「北条時房・顕時邸跡」では、遺跡範囲の南半分の発掘調査事例が多く、北半分については今のところNo.2地点（図1）しかない。No.2地点では若宮大路の側溝と思われる木組の南北溝を検出しており、さらに、溝の西肩外に、溝内の木組が内側へ倒壊するのを防ぐための、控えがとられていた。控材には線刻で、北条氏の家紋である三鱗文や、焼印の梅花文、花菱文などが認められている。

本調査地点から南西に位置するNo.7（図1、2）地点は、「北条時房・顕時邸跡」域の南西端付近にあたる。ここでは井戸、囲炉裏、建物跡と思われる木組などの生活遺構の他、若宮大路とほぼ平行する木組の南北溝や、東西方向に走る木組溝を検出している。遺跡の年代は13世紀中葉～14世紀中葉に位置付けられる。

このように、「北条時房・顕時邸跡」を始めとして、周辺の発掘調査事例が増え、資料も蓄積されてきている。これらの成果から、いくつか明らかになっている事柄があるので、以下に概略する。

まず、若宮大路側溝から復元した若宮大路の幅員は、東西側溝間の内法で33.6m（11.2丈）を測る。現在の若宮大路の幅員は約26mであるので、中世時代にはもっと広かったようである。これに付随する側溝幅は約3m（1丈）、深さは束材の高さから約150cm（5尺）である。

また、No.7、17地点（図1）の調査でも若宮大路側溝と類似した構造を有する溝を検出している。No.17地点検出の溝は現在の小町大路にほぼ平行にあり、この溝から若宮大路までの間で、南北の区画溝はこれまで検出されておらず、この溝は北条泰時・時頼邸と小町大路を区画する側溝と推定される。これらの成果から各大路の様相が明らかにされてきており、付随する側溝が街割を示す役割を担っていたものと考えられる。さらに、No.7地点検出の南北溝東肩から若宮大路側溝東肩までの距離は67.3m（22.4丈強）を測り、これは多少の誤差を考慮に入れて、若宮大路推定幅員のおよそ倍の長さに相当する。

若宮大路にほぼ等しい基軸を示す遺構群は、13世紀～14世紀中頃の間に営まれており、嘉禄元年（1225年）に始められた丈尺制と、町割との関連が推測されるが、それ以前の「北条時房・顕時邸」に関しては、軸方位を異にする南北溝がNo.4地点で検出されているのみで、頼朝の鎌倉入り以来、これらの遺構群が出現するまでの間について殆ど明らかでないなど、問題点も数多い。

参考文献
- 『鎌倉市史　総説編』高柳光寿編　吉川弘文館1959
- 『鎌倉事典』白井永二編　東京堂出版1986

第２章　調査の経過と堆積土層

第１節　調査の経過

本遺跡調査は北条時房・顕時邸跡に所在する神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目273番イ地点における店舗併用住宅建設に伴う事前調査として実施された。本地点におけるビル建築対象面積は200.55m²であるが、そのうち105.73m²が営業用テナント入居相当面積、94.82m²が個人住宅分である。このため鎌倉市教育委員会文化財課は前者を原因者負担埋蔵文化財調査とし、後者を国庫補助事業埋蔵文化財調査として、斉木秀雄に北条時房・顕時邸跡国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査の担当を依頼した。

調査は平成９年３月12日から６月19日にかけて実施された。排土処理の関係から調査対象範囲を東西に分割し、西部の調査終了後、若宮大路に面する東部の調査を行なった。現在の地表面の海抜は18.5m前後を測り、以下、60cm前後は近・現代の遺物を含む客土層である。調査はこの客土層を重機により除去し、以下は人力により掘削、及び遺構・遺物の検出・確認作業を行なった。作業手順の関係から便宜上、現地表に近い遺構確認面である堆積土上面から順に第１面～第６面の呼称を使用している。

検出された遺構は主に中世の溝、井戸、土壙、ピット、及び窪地であるが、これらの営まれる以前の時期の溝が第６面において確認されている。遺物としては中世の国内諸窯の製品、貿易陶磁器、土器、石製品、金属製品、木製品等が多量に出土しているが、弥生式土器、土師器、須恵器、及び近世の国内諸窯の製品も小片ではあるが含まれている。

報告にあたり、調査対象範囲から発見された資料を国庫補助事業相当分と原因者負担事業相当分とに平面的に分割することは、遺跡の理解を損なう恐れもあり、本報告書では国庫補助事業相当分として第１面・第２面・第３面の調査成果を掲載していく。尚、第４面・第５面・第６面の成果は原因者負担事業相当分として別に報告する予定であるが、必要に応じては成果の一部を本報に含めている。

調査にあたり、測量用に任意の基準点（Ｃ－２）を設け、調査敷地内に４ｍの方眼を設定した（図３）。東西軸には北から南へアルファベット（Ａ～Ｄ）を、南北軸には西から東へアラビア数字（１～10）を付し、それぞれの方眼区画の呼称には北西角の軸線交点を充てた。さらに、この方眼基準点と国土座標系との関係を、平面直角座標系ＡＥＡＲ９に属する鎌倉市四級基準点であるＴ０２６（Ｘ＝－75552.958、Ｙ＝－25105.859）、及びＴ０３１（Ｘ＝－75568.613、Ｙ＝－25079.151）を使用し、測量・算出したところ、遺跡地内の基準点であるＣ－２の国土座標はＸ＝－75514.879、Ｙ＝－25150.327、Ｃ－10はＸ＝－75532.792、Ｙ＝－25123.810の数値を得た。尚、南北軸は真北に対して33°47′41″、磁北に対

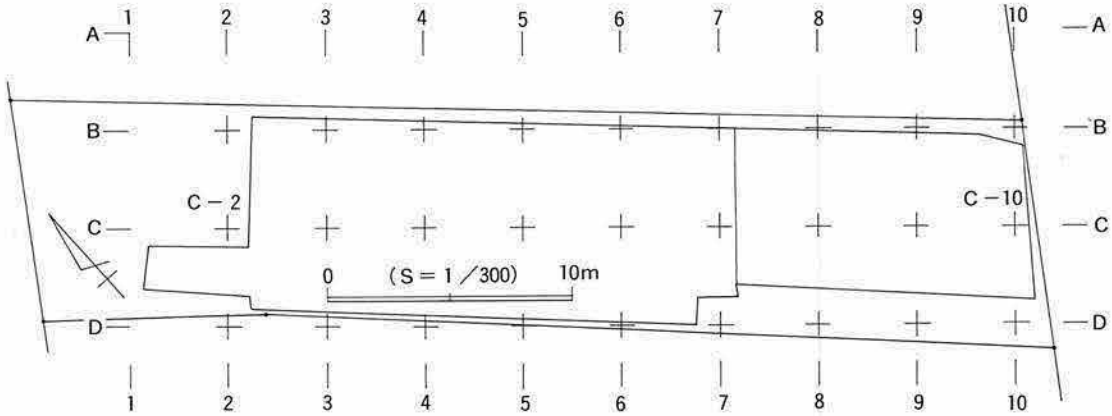


図３　グリット割付図

して42°56′04″東に傾いている。

標高の記載については、鎌倉市三級基準点であるNo.53207（10.903m）よりレベル移動を行ない、海抜レベルを使用している。

また、現地調査時には、検出された遺構を区別なく「イコウ」という名称を使用し連続番号を付し、その後、整理作業の段階で各イコウを溝、井戸、土壙等に分類している。文章中では例えば「溝」の項目に「イコウ93」が挙げられ、図版中では〈93〉と記載している。

第2節　堆積土層

調査着手以前の地表面の海抜は8.5m前後であり、隣接する敷地と比べると西から東へ、北から南へ緩やかに傾斜している。現在の若宮大路の海抜は調査地東側で段葛が8.0m程、その両側の車道面が7.7mを測り、本調査地と若宮大路をはさんで対峙する大路東側の敷地は8.5m前後である。

本調査区は北、南に隣接する建造物と至近距離にあり、壁崩落の危険性が極めて高いと判断し、掘り下げ直後にH杭に矢板をいれる作業を行なった。このため調査区内壁における土層観察、及び記録は写真撮影にとどめている。本節ではB－4、C－6、及びC－7グリットから検出された現代攪乱壙の内壁において確認された堆積土をつかい、本遺跡の土層堆積状況について説明を加えていきたい。

1層は褐色粘質土、大型土丹塊を主体とした現代客土であり、若干の中・近世遺物がみられるが、近・現代の焼き物類、バラス、砂利等を含んでいる。13層、21層も同様であり、調査区西部では60cm前後、調査区東部では80cm前後の厚さで堆積している。また、調査区中央部では井戸等の規模の大きな現代攪乱壙が集中して検出されている。

2層は褐色粘質土であり、褐色シルト、褐色砂を混入している。14層が同質であるが、6ラインから東では現代客土である1層により失われている。本層は15～20cmの厚さで堆積しており、この上面を第1面としている。調査区西端では海抜8.2mを測るが、全体的に7.9m前後であり、東に向かい緩やか

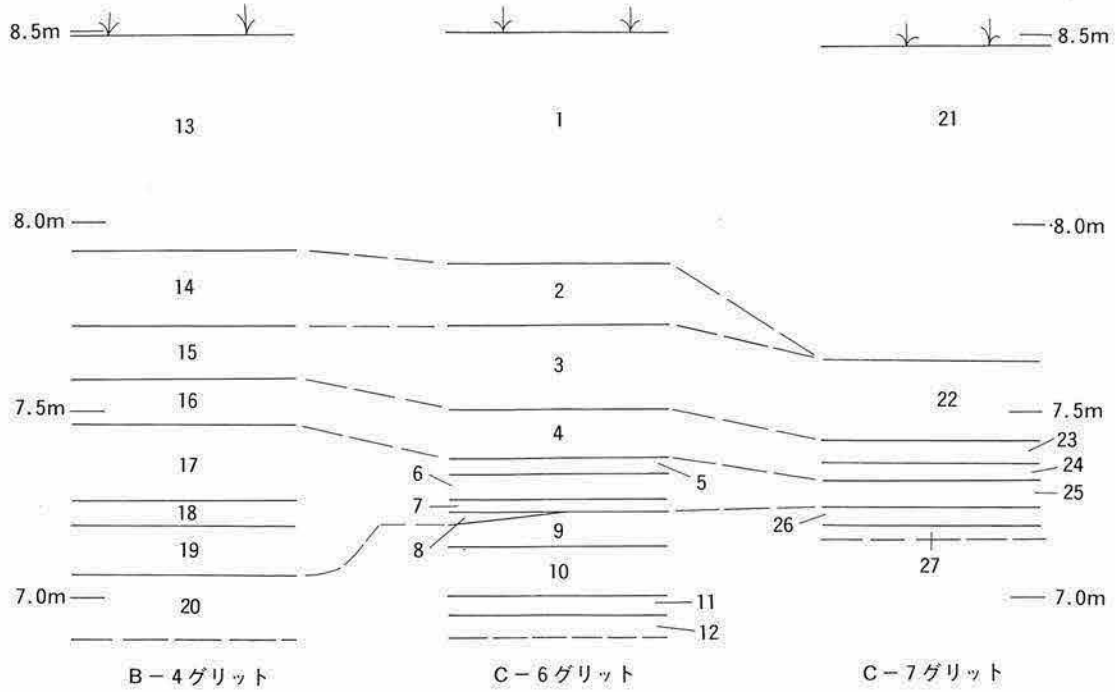


図4　堆積土層模式図

に傾斜している。

3層は褐色粘質土を混入した土丹地業層であり、締まりは良好である。15層・22層が同質であり、15～20cmの厚さで堆積している。本層の上面を第2面としている。海抜は7.7m前後を測り、東に向かい緩やかに傾斜している。

4層は土丹粒、土器片、炭粒を含む褐色粘質土である。16層では凝灰岩粒子、23層・24層では貝殻粒子の混入がみられ、23層・24層は一連の版築地業と考えられる。本層は10～15cmの厚さで堆積し、この上面を第3面としている。海抜は7.5m前後を測り、東に向かい緩やかに傾斜している。

5層は炭層であり、灰青緑色砂を混入している。以下、6層は灰青緑色砂層、7層は灰青緑色砂を含む暗褐色粘質土層、8層は少量の土器片を含む黒褐色粘質土層である。これら5層～8層に対応するのは17層～19層、25層であり、5層・17層・25層の上面を第4面としている。しかし、少量の貝殻粒子を含む暗褐色粘質土である25層以外は遺構覆土であり、17層は明褐色有機物腐食土、18層は木片を多量に含む暗褐色有機物腐食土、19層は貝殻粒子・土器片を含む黒褐色粘質土である。第4面の確認レベルは海抜7.4m前後を測る。

9層は白色粒子を含む暗褐色粘質土で26層と同質である。以下、10層は白色粒子を含む黒褐色粘質土で27層と同質、11層は灰褐色粘質土、12層は黒褐色粘質土で20層と同質と考えられ、いずれも自然堆積層であり、遺物は出土していない。9層・26層は中世遺構の地山であり、この上面を第5面としている。第5面の確認レベルは海抜7.3m前後を測る。また、9層・26層堆積以前の遺構と考えられる溝が確認されており、10層・27層の上面を第6面としている。第6面の確認レベルは海抜7.2m前後を測る。

第３章　検出された遺構と出土した遺物

第１節　第１面

現地表から60～80cmは近・現代の遺物を含む大型土丹塊を主体とした客土であり、これを除去すると海抜7.9m前後で褐色シルト、褐色砂を混入する褐色粘質土層が検出される。本層の上面を第１面として調査を行なった。全体的に現代攪乱壙が多く、特に調査区中央部には大型のものが集中して検出されている。検出された遺構としてはピット：32口、土壙：16基、溝：１条であり、調査区東部では現代客土に係る削平により消失している。各遺構は時期差を有するものと考えられるが、遺構配置としては調査区西端部で土丹版築の一部が確認され、この東側では南北方向の溝、さらに東ではピット、土壙が検出されている。建物として全体の規模等を確認できたものはないが、掘立柱建物、或は塀等と想定されるピット群が検出されている。

出土遺物では近世の瀬戸・美濃窯、肥前窯、信楽窯、及び瓦、中世の貿易陶磁器、瀬戸窯、常滑窯等の製品、かわらけ、火鉢、木製品等が出土している。

ａ．ピット群（図６）

建物１はＡ～Ｃ－２～３グリットから検出されている。東西３口、南北３口のピットが確認され、東西の柱間距離は西から1.8m、2.6m、南北が北から1.6m、3.5mを測る。ピットの平面形態は円形、或は楕円形状を呈し、確認面からの深さは15～20cmである。覆土は灰褐色粘質土で、土丹粒、炭粒を含む。南北の軸方位はＮ－43°－Ｅを測る。いずれのピットからも遺物は出土していない。

建物２はＢ～Ｃ－２～３グリットから検出されている。東西３口、南北３口のピットが確認され、東西の柱間距離は西から1.2m、0.7m、南北が北から1.8m、1.1mを測る。ピットの平面形態は円形、或は楕円形状を呈し、確認面からの深さは10～15cmである。覆土は暗褐色粘質土で、土丹粒、炭粒を含む。南北の軸方位はＮ－５°－Ｗを測る。いずれのピットからも遺物は出土していない。

ｂ．溝（図６）

イコウ93はＢ～Ｃ－２グリットから検出されている。南北方向の溝で、北、南は調査区外へ延びる。イコウ６と重複し、本址のほうが古い。南北7.2mにわたり検出され、軸方位はＮ－15°－Ｅである。上幅70～80cm、下幅15～55cm、確認面からの深さは30cm前後を測り、底面の海抜は7.6m前後であり、検出範囲ではほぼ水平である。覆土は上層が暗灰色粘土を混入した暗灰色砂質土、下層が土丹粒を含む暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

ｃ．ピット（図６、７）

イコウ30はＢ－４グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西40cm、南北50cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。覆土は少量の炭粒を含む灰褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図７－４に示した常滑窯甕口縁部である。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、粘性強く、長石を含む。口縁部はＮ字を呈し、縁帯の幅は2.5cmを測る。他に常滑窯甕の胴部片が２点、ロクロ成形の白かわらけの底部が１点出土しているが小片のために図示不可能である。

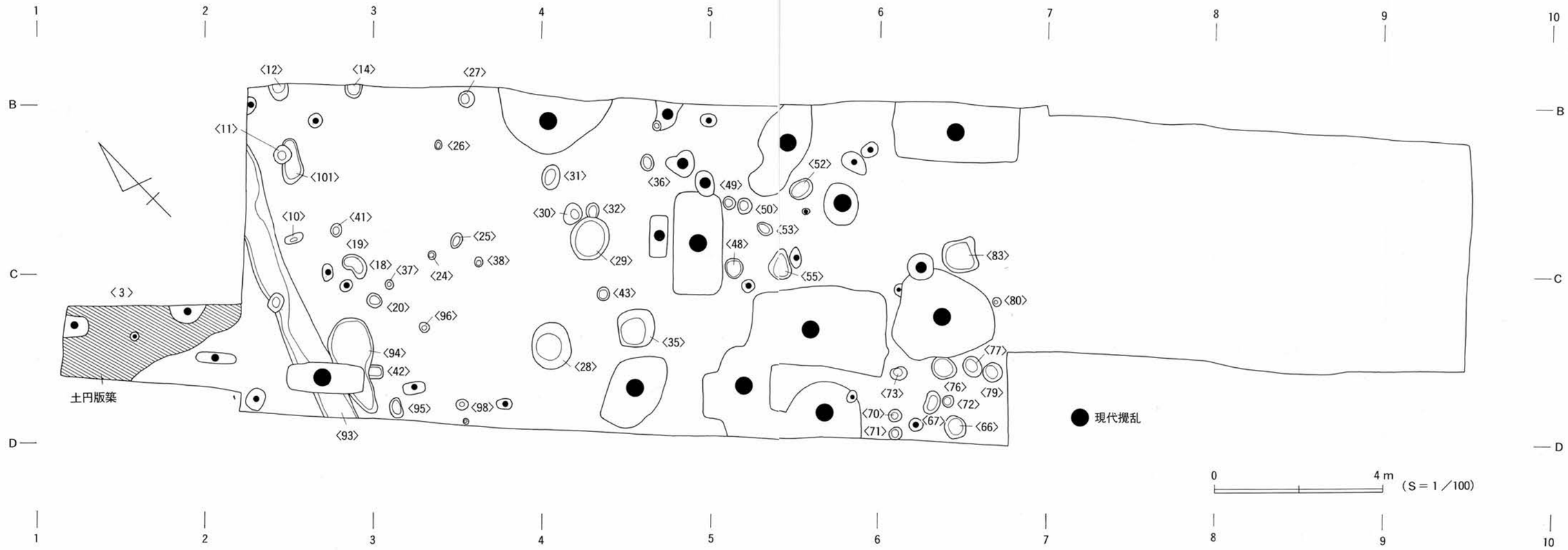

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
B
C
D
〈12〉
〈14〉
〈27〉
〈11〉
〈101〉
〈26〉
〈31〉
〈36〉
〈49〉
〈52〉
〈50〉
〈53〉
〈30〉
〈32〉
〈10〉
〈41〉
〈19〉
〈25〉
〈18〉
〈37〉
〈24〉
〈38〉
〈29〉
〈48〉
〈55〉
〈83〉
〈80〉
〈3〉
〈43〉
〈20〉
〈96〉
〈35〉
〈94〉
〈42〉
〈28〉
〈77〉
〈73〉
〈76〉
〈79〉
〈72〉
〈95〉
〈98〉
〈70〉
〈67〉
〈66〉
〈71〉
〈93〉
土円版築
現代攪乱
0
4 m
(S＝1／100)

図5　第1面全体図

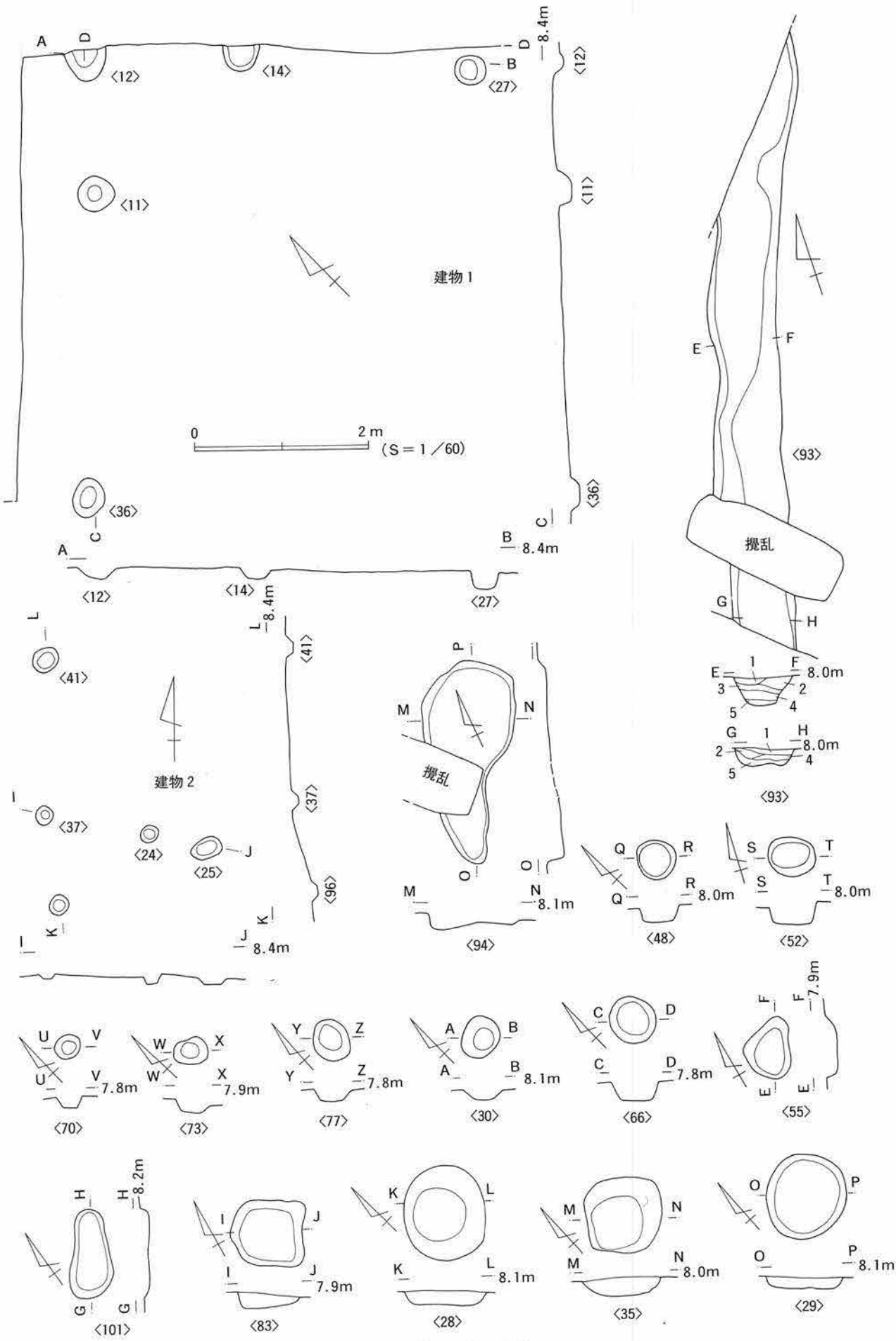


図6　第1面検出遺構

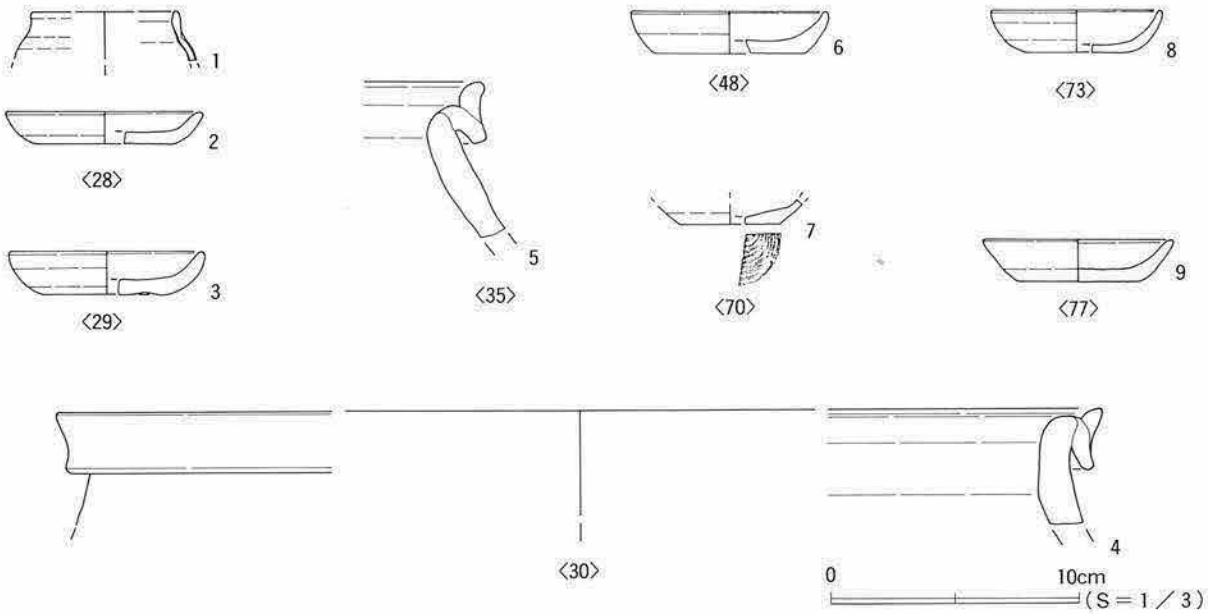


図７　第１面出土遺物（１）遺構出土遺物

イコウ66はＣ－６グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西50cm、南北55cm、確認面からの深さは20cm前後を測る。覆土は少量の土丹粒を含む暗褐色粘質土である。出土遺物はない。

イコウ70はＣ－６グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西30cm、南北25cm、確認面からの深さ15cm前後を測る。覆土は少量の炭・土丹粒を含む暗褐色粘質土である。出土遺物は図７－７に示した瀬戸窯入子１点のみで、胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含む。外底面は回転糸切り。

イコウ73はＣ－６グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西40cm、南北35cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。覆土は少量の炭・土丹粒を含む暗褐色粘質土である。出土遺物は図７－８に示したロクロ成形のかわらけ小皿１点のみである。

ｄ．土壙（図６、７）

イコウ28はＣ－３～４グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西95cm、南北110cm、確認面からの深さ15cm前後を測る。覆土は灰褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図７に示した。図７－１は中国産青白磁壺の口縁部。釉は淡青色透明で、口縁端部の内面は釉剝ぎである。胎土は灰白色を呈する。図７－２はロクロ成形のかわらけ小皿である。他に常滑窯の甕胴部片が９点出土しているがいずれも小片である。

イコウ29はＢ－４グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西90cm、南北100cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。覆土は少量の炭粒を含む灰褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図７－３に示したロクロ成形のかわらけ小皿である。他に常滑窯甕の胴部片が１点出土している。

イコウ35はＣ－４グリットから検出されている。平面は隅丸方形を呈し、東西90cm、南北90cm、確認面からの深さは20cm前後を測る。覆土は灰褐色粘質土である。出土遺物は図７－５に示した常滑窯甕の口縁部である。器表は暗褐色、胎土は灰橙色を呈し、粘性強く、長石を含む。口縁部はＮ字を呈し、縁帯の幅は2.5cmを測る。

イコウ48はＢ～Ｃ－５グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西45cm、南北45cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。覆土は土丹を含む暗褐色粘質土である。出土遺物は図７－６に示したロクロ成形のかわらけ小皿である。

イコウ52はＢ－５グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西55cm、南北45cm、確認面からの深さは25cm前後を測る。覆土は土丹粒を多量に含む暗褐色粘質土である。遺物は瀬戸窯灰釉壺の胴部片が１点、常滑窯甕の胴部片が１点出土しているが図示不可能である。

イコウ55はＢ～Ｃ－５グリットから検出されている。平面は不定形で、東西55cm、南北70cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。覆土は土丹粒を多量に含む暗褐色粘質土である。出土遺物はない。

イコウ77はＣ－６グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西40cm、南北50cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。覆土は土丹粒、炭粒を含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図７－９に示したロクロ成形のかわらけ小皿である。他に常滑窯甕の胴部片が１点出土している。

イコウ94はＣ－２～３グリットから検出されている。平面は不定形で、東西110cm、南北235cm、確認面からの深さは20cm前後を測る。覆土は砂粒を含む暗灰色粘質土である。遺物は瀬戸窯灰釉折縁深皿の体部片が１点、常滑窯甕の胴部片が２点出土している。

イコウ101はＢ－２グリットから検出されている。平面は楕円形状で、東西50cm、南北105cm、確認面からの深さは10cm前後を測る。覆土は砂粒を多量に含む暗灰色粘質土である。遺物は常滑窯甕の胴部片が２点出土している。

ｅ．土丹版築（図５・21）

Ｃ－１～２グリットで検出された土丹地業面である。上面は現代客土により削平されているが、確認された最上位の海抜レベルは8.2mを測る。本址を掘り込む現代攪乱壙の内側壁の土層観察等から、以下10～15cm程の堆積を確認するが、あまり堅固な地業とはいえない。建物等の痕跡については検出範囲が非常に狭く不明であり、土丹地業構成土からの出土遺物はない。尚、本址の下からは土丹版築が検出されており、詳細については第２面を参照されたい。

ｆ．第１面出土遺物（図８・９）

表土掘削から第１面の遺構確認までに出土した遺物をここに集め、現代攪乱壙から出土したものも含めている。遺物番号10～67のうち22、25、39以外は全て攪乱からの出土である。尚、近世以降の遺物については諸般の都合から基本的に図示していない。

10～13は貿易陶磁。10～12は龍泉窯系青磁である。10は劃花文碗口縁部で釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。11は鎬蓮弁文碗口縁部で釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。12は無文鉢の口縁部で釉は暗灰緑色、胎土は灰白色を呈する。13は中国産の青白磁梅瓶口縁部。釉は水青色、胎土は灰白色を呈す。

14は美濃窯の鉄釉灯明皿で、胎土は淡灰色を呈する。この他の美濃窯製品としては19世紀初頭～中葉の灰釉徳利４点、灰釉壺蓋２点、灰釉片口鉢１点、鉄釉灯明皿５点が出土している。

15は信楽窯灰釉灯明皿で、胎土は灰白色を呈する。他に秉燭が３点、灯明皿４点が出土している。

16・17は瀬戸窯の製品である。16は灰釉卸皿。胎土は淡灰橙色を呈し、外底面は回転糸切り。17は入子。胎土は灰白色を呈し、外底面はヘラケズリ。この他の瀬戸窯製品としては18世紀後葉～19世紀中葉の鉄釉土瓶１点、灰釉有耳壺１点、灰釉蓋１点、灰釉片口鉢３点、灰釉鉢１点、灰釉大皿１点、灰釉鉄絵皿（馬の目皿）１点、磁器染付端反碗５点が出土している。尚、肥前系の磁器染付では17世紀後半～19世紀代の碗蓋４点、碗10点、皿６点、徳利１点、水滴１点が出土している。

18～25は常滑窯の製品であり、18～20は甕である。18の器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、長石を含む。口縁部の形態はＮ字状を呈し、縁帯幅2.5cmを測る。19の器表は暗褐色、胎土は暗灰色を呈し、長

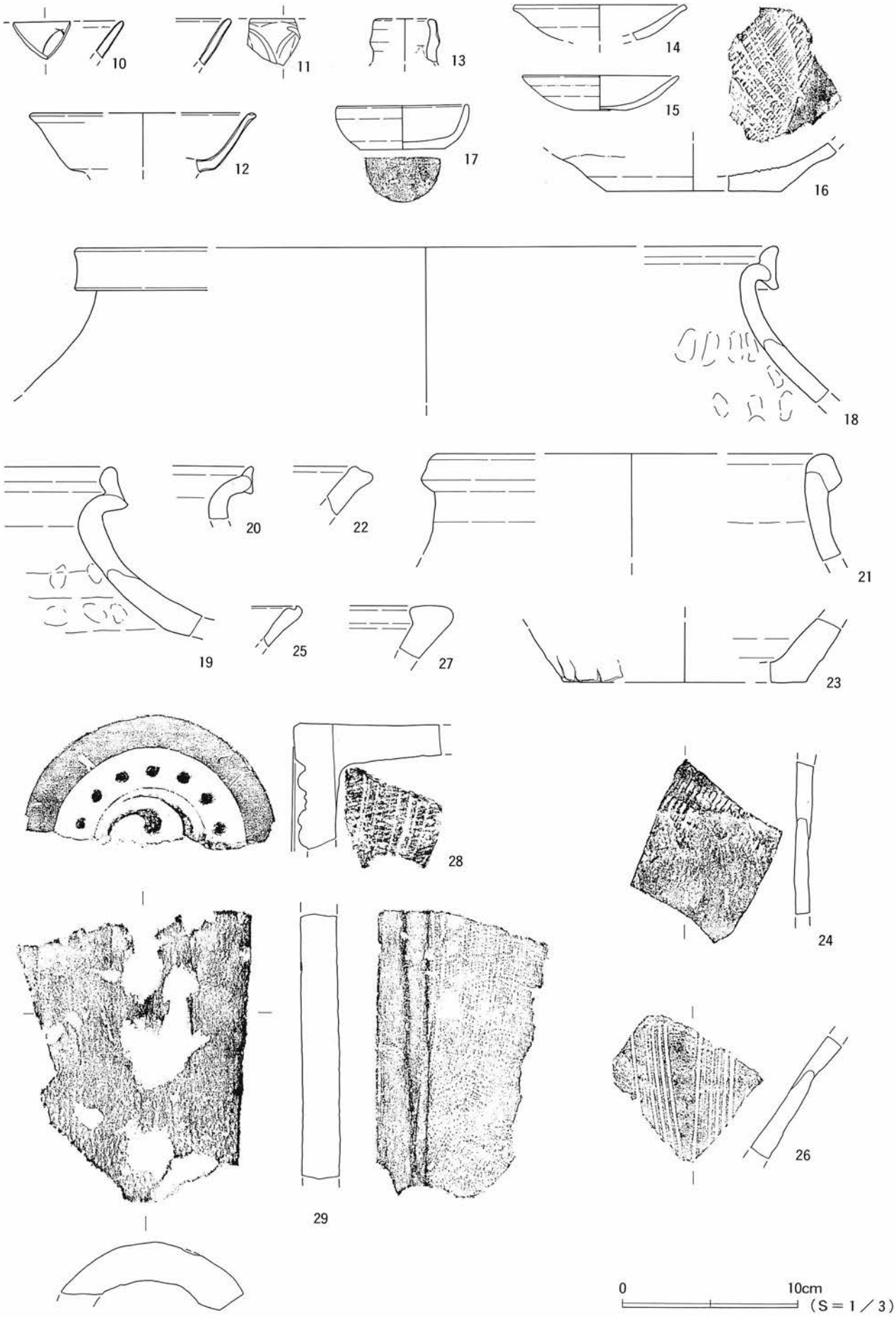


図8　第1面出土遺物（2）面出土遺物

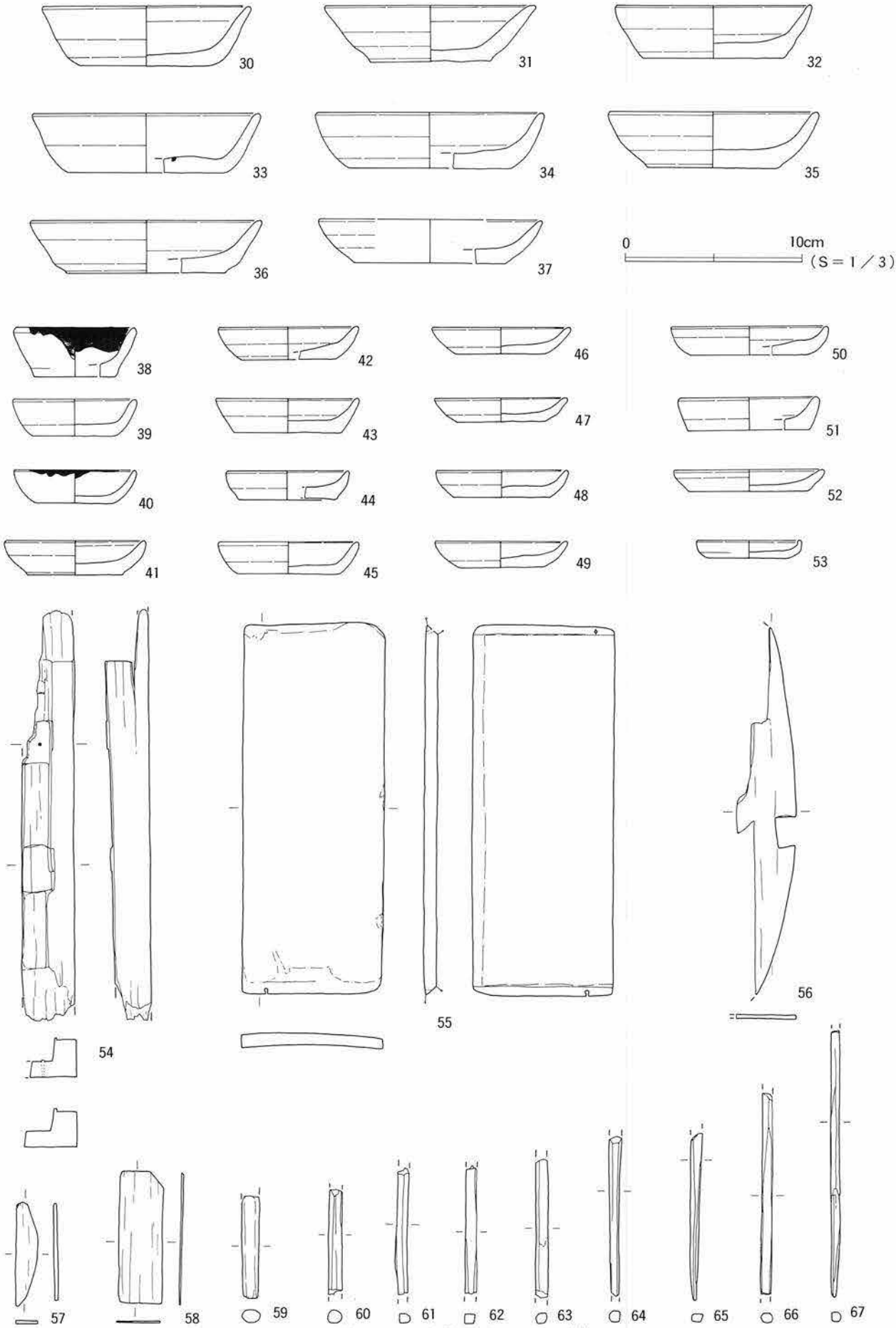


図９　第１面出土遺物（３）面出土遺物

石を多量に含む。口縁部の形態はＬ字状を呈し、縁帯幅2.5cmを測る。20の器表は黒褐色、胎土は灰色を呈し、長石を多量に含む。口縁部はＬ字状を呈し、縁帯幅1.6cmを測る。21は壺。口縁部が玉縁状を呈する大型品である。器表は褐色、胎土は灰白色を呈し、長石・雲母を含む。22・23は片口鉢II類である。22の口縁端部は角形に仕上げ、沈線状の凹みを有する。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、多量の長石を含む。23は底部片である。外面は縦方向のヘラケズリ、外底面は砂底であり、内面は摩滅している。器表は橙色、胎土は灰色を呈し、長石を多量に含む。24は甕の胴部片である。器表には格子状の押印を有する。25は片口鉢Ｉ類である。口縁部は肥厚し、端部に沈線状の凹みを有する。胎土は灰色を呈し、長石・雲母に富む。

26は備前窯擂鉢の体部片である。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、長石・小石を含む。卸目の条線は６本で一単位となっている。

27は土器質の火鉢口縁部。端部は釘頭状で、胎土は灰橙色を呈し、長石・雲母を多量に含む。

28・29は瓦である。28は近世以降の軒丸瓦である。瓦頭面には三ツ巴の周りに宝珠を巡らせている。器表は黒灰色、胎芯は灰色を呈し白色粒子・長石・雲母を含む。丸瓦部凹面には糸切り痕を有する。29は丸瓦である。凸面は縄目叩き、凹面は網目を有し、側面はヘラ切りである。器表は灰黒色、胎芯は灰色を呈し、砂粒を多く含む。

30～53はかわらけである。いずれもロクロ成形で外底面に回転糸切り痕を有する。30～37が大皿、38～52が小皿で、53が内折れ小皿である。39・40が所謂、薄手丸深タイプ。30・31・38は粉質胎土で、体部が直線的、或は外反気味に立ち上がる。38・40は灯明皿として使用されたものである。

54～67は木製品である。54はホゾを２箇所に有する角材で、１箇所に鉄釘が遺存する。格子の部材と考えられる。55は方形を呈する蓋で、内・外面に赤色漆が施されている。２箇所に対となる直径２mmの穿孔を有し、側面は斜めに切られている。56は草履芯の板材。57は板材で形代となろうか。58は折敷の材質であるが用途不明。59～67は箸であるがいずれも欠損している。59は菜箸となろうか。

他に貝類ではハマグリ２点、ダンベイキサゴ２点、メガイアワビ１点、アカニシ２点、ボウシュウボラ１点、魚類ではマグロの椎骨１点が出土している。

第２節　第２面（図10～27）

第１面を構成する褐色粘質土を主体とした土層は15～20cm程の厚さで堆積をしている。これを除去すると褐色粘質土を混入した締まり良好な土丹地業層が検出される。本層の上面において第２面の調査を行なった。現地表から80cm前後、海抜は7.7m前後を測り、東に向かい緩やかに傾斜している。検出された遺構としてはピット：32口、土壙：13基、溝：６条、及び土丹版築である。各遺構は時期差を有するものと考えられるが、遺構配置としては調査区西端部では土丹版築、その東側では比較的規模の大きな南北方向の溝が確認されている。溝の東側である調査区中央部ではピット、土壙が検出されているが、大型の現代攪乱壙等により建物を復元するには困難を伴い、ピット列を１棟だけ確認した。調査区東側では現代客土に係る削平により遺構は消失している。

出土遺物では中世の貿易陶磁、瀬戸窯・常滑窯等の国内諸窯の製品、かわらけ、火鉢、金属製品、石製品、木製品等がみられる。

ａ．溝（図11～20）

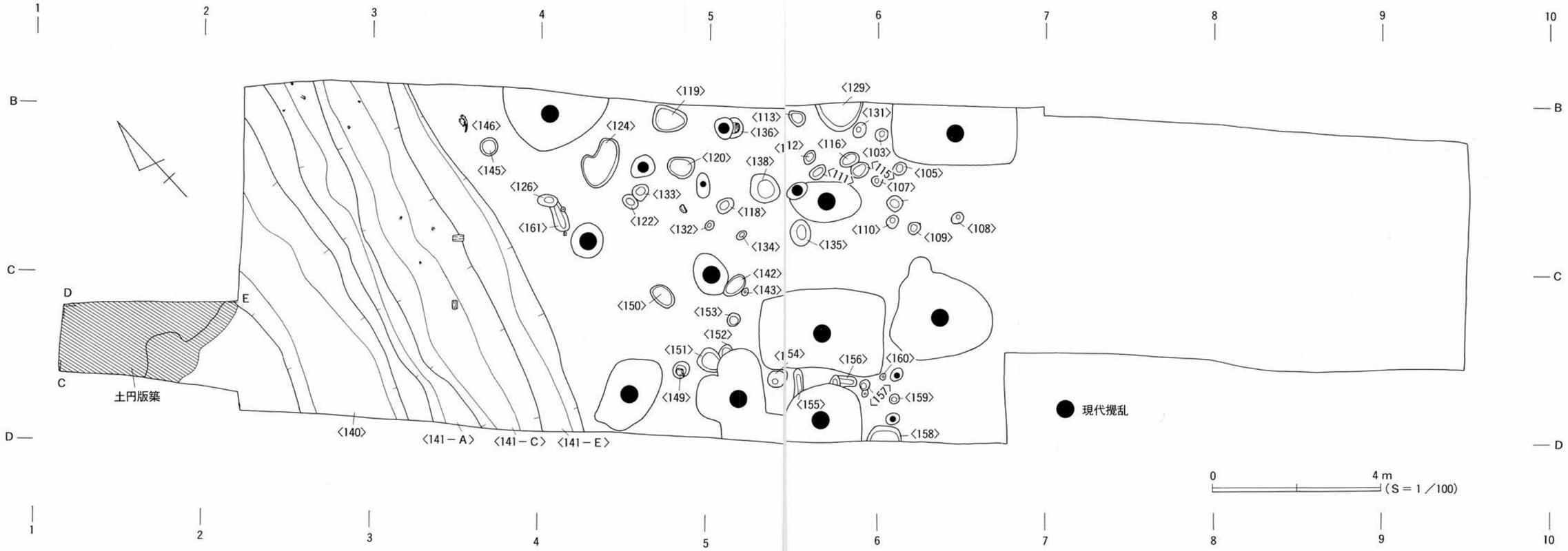
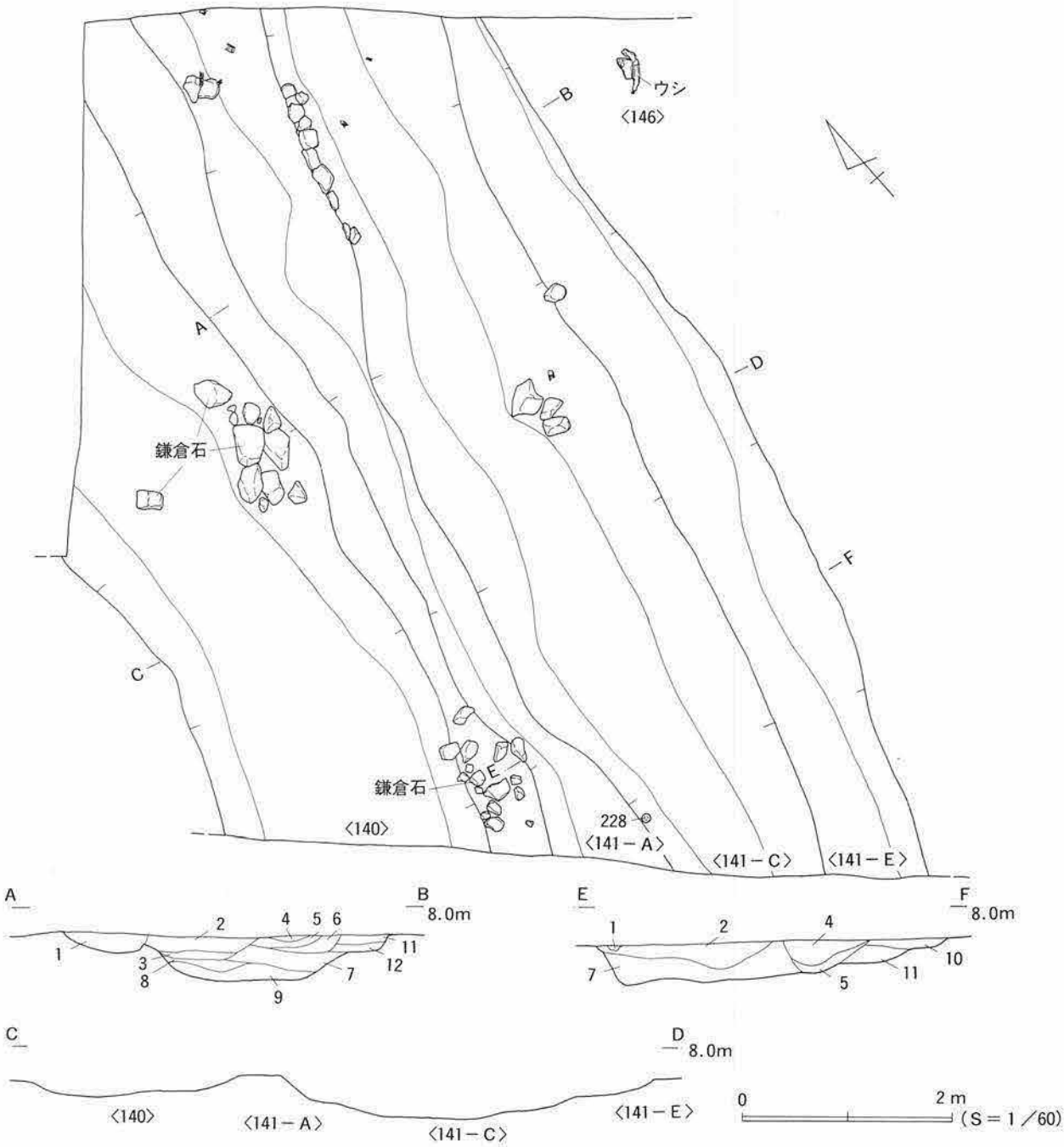

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
B
C
D
E
〈119〉
〈129〉
〈146〉
〈124〉
〈113〉
〈136〉
〈131〉
〈145〉
〈120〉
〈138〉
〈112〉
〈116〉
〈103〉
〈105〉
〈111〉
〈115〉
〈107〉
〈126〉
〈133〉
〈118〉
〈122〉
〈132〉
〈161〉
〈110〉
〈109〉
〈108〉
〈134〉
〈135〉
〈142〉
〈143〉
〈150〉
〈153〉
〈152〉
〈151〉
〈154〉
〈156〉
〈160〉
〈149〉
〈157〉
〈159〉
〈155〉
〈158〉
土円版築
〈140〉
〈141－A〉
〈141－C〉
〈141－E〉
現代攪乱
0
4 m
(S＝1／100)

図10　第2面全体図



〈141－B〉{ 1．明褐色土。1～5cm大の土丹を含む。遺物は磨滅している。
〈141－A〉{ 2．褐色粘質土。砂質土、炭粒、0.5～2cm大の土丹を含む。
3．暗褐色粘質土。炭粒の混入は少ない。締まりなし。
〈141－D〉{ 4．褐色粘質土。炭粒、土丹粒を含む。締まりなし。
5．明褐色粘質土。締まりなし。
6．褐色粘質土。炭粒を少量含む。締まりなし。
〈141－C〉{ 7．土丹層。明褐色砂質土混入。
8．土丹層。明褐色砂質土混入。木片を含む。
9．土丹層。暗青灰色砂質土混入。
〈141－E〉{ 10．暗灰色粘質土。少量の炭粒含む。
11．明褐色弱粘質土。玉石、木片、砂質土含む。締まりあり。
12．暗褐色弱粘質土。1～5cm大の土丹を含む。締まりなし。

図11　第2面検出遺構（1）〈140・141〉

溝として確認されたのは南北方向に主軸を有するイコウ140、141A、141B、141C、141D、141Eの6条であり、A～C－2～4グリットから検出されている。イコウ141は溝の浚渫、或は改修等の可能性を有するため、A～Eの5条に分けている。基本的にはイコウ140～141間は道路、或は通路として機能していた可能性が高いといえる。

イコウ140は検出された溝のうち最も西側から検出された。第1面で確認されたイコウ93と規模は異なるが、ほぼ同じ位置での検出であり、本址がイコウ93に先行するものと考えられる。南北8.0mにわ

たり検出され、さらに北、南へと延びる。軸方位はN－16°－Eを測り、上幅200～250cm、下幅110～170cm、確認面からの深さは10～20cmである。底面の海抜は7.5m前後で、検出範囲ではほぼ水平であるが、断面はやや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。覆土上層は締まりの弱い褐色粘質土、下層は土丹粒を多く含んだ褐色粘質土である。本址の東側立ち上がり付近からは拳大～人頭大サイズの土丹・鎌倉石の出土が目立つ。図示可能な遺物は図12・13に示した。尚、図13は下層出土である。

68～71は貿易陶磁。68・69は白磁口兀皿で68が口縁部、69が底部である。ともに釉は淡灰色、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子・気泡に富む。70・71は龍泉窯系青磁である。70は鎬蓮弁文碗の口縁部で、釉は緑灰色、胎土は灰色を呈する。71は鎬蓮弁文鉢の口縁部。所謂、折れ縁鉢で釉は淡緑色、胎土は灰白色を呈する。

72～76は瀬戸窯の製品で、胎土は灰白色～灰橙色を呈し、白色粒子を含む。72は灰釉縁釉小皿の口縁部。73は灰釉平碗の口縁部。74は灰釉卸皿の口縁部。75は鉄釉天目茶碗の底部で、高台は浅く削りだされる。76は鉄釉擂鉢の底部で、外底面には回転糸切り痕を有する。

77・78は山茶碗の口縁部である。77は尾張型で、やや粗い胎土で白色粒子・長石を含み、灰色を呈する。78は渥美・湖西型であろうか。輪花状を呈するもので、胎土は黒褐色を呈し、石英・白色粒子・砂粒に富む。

79は備前窯擂鉢の体部である。器表は暗褐色を呈し、胎土は長石・白色粒子を含み、粘性に富む。卸目の条線は６本を１単位とする。

80～88は常滑窯の製品である。80は甕の口縁部で断面はN字状を呈し、縁帯の幅は2.7cmを測る。器表は黒褐色、胎土は長石を含み灰色を呈する。81～84は片口鉢II類の口縁部であり、器表は橙色～褐色、胎土は灰色～灰黒色を呈し、長石を多量に含む。81の体部は下位が横位の回転ヘラケズリ、中位が縦位のヘラケズリ、或はヘラナデ、上位はヨコナデであり、口縁端部は丸く舌状を呈する。82の口縁端部は内・外に小さく突出する。83・84の口縁部は角形を呈する。85～88は片口鉢Ｉ類で所謂、山茶碗窯系捏鉢であり、胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子・砂粒等を含んでいる。85～87は口縁部で端部が肥厚する。88は底部で外面下位は横位のヘラケズリされ、外底面には高台を貼り付けている。

89は瓦質火鉢の口縁部である。土風炉であろうか。器表は黒灰色、胎土は灰白色を呈し、砂粒を含む。口縁部外面には２条の沈線区画内にスタンプで桜花文を配している。

90は平瓦。凸・凹面ともに離れ砂が付着し、側面・端面はヘラケズリである。器表は灰黒色、胎芯は灰色を呈し、砂粒・小石を含む。

91は須恵器甕の胴部片。外面は格子叩き目、内面には同心円状の当て具痕を有する。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。

92～103はロクロ成形のかわらけで、外底に回転糸切り痕を有す。92～101が小皿、102・103が中皿、もしくは大皿。92～97、102・103は粉質胎土で、体部が直線的、或は、外反気味に立ち上がる。

104・105は石製品。104は硯で丹波鳴滝山系の製品である。上面には文様の他、割り付け痕がみられ、内側は四葉状を呈する。105は砥石で鳴滝産の仕上砥である。

図13の106～126はイコウ140の下層から出土した遺物である。

106は瀬戸窯灰釉平碗の口縁部である。胎土は淡く橙色を帯びた灰白色を呈する。

107は東濃型山茶碗の口縁部である。器壁は薄く、胎土は非常に精良で灰白色を呈する。

108～115は常滑窯の製品である。108～110は片口鉢Ｉ類の口縁部で、いずれも口縁端部は肥厚する。胎土は灰色を呈し長石・白色粒子を含む。111～113は甕でN字状の口縁形態を有する。111は縁帯幅

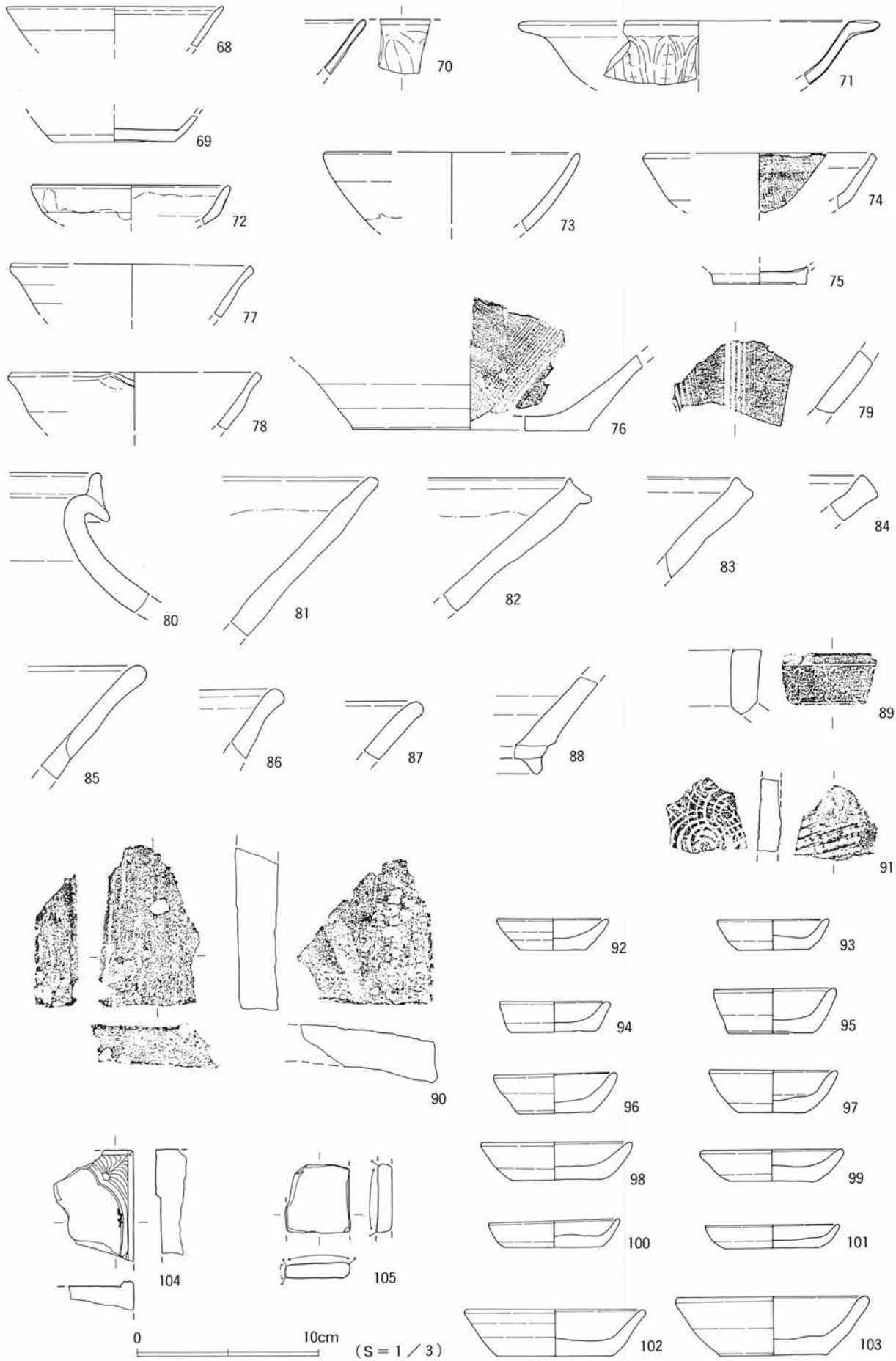


図12　第２面出土遺物（１）〈140〉

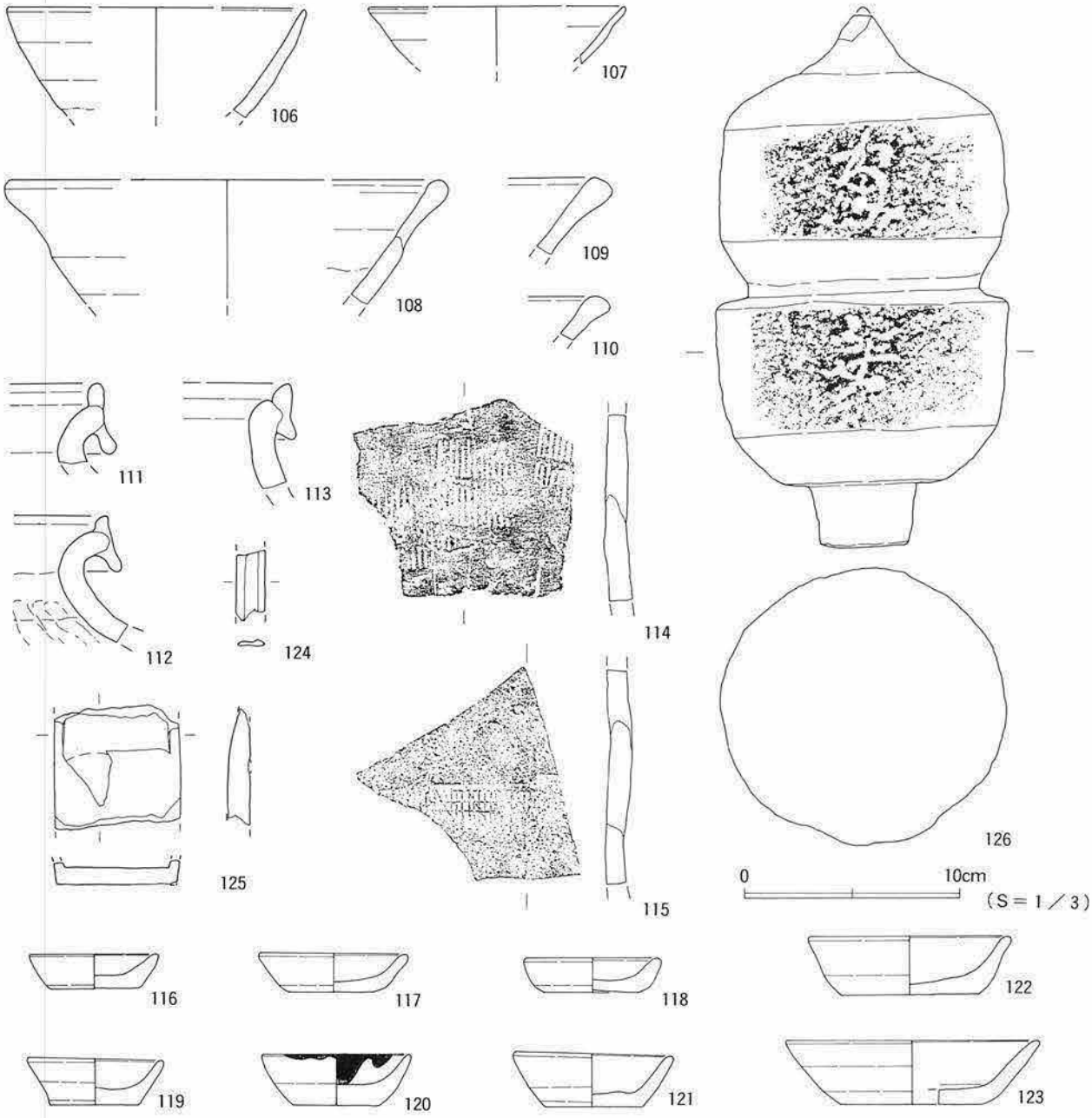


図13　第２面出土遺物（２）〈140下層〉

3.4cm、112は2.8cm、113は2.6cmを測る。胎土は白色粒子・長石を含む。114・115は甕胴部片の押印文である。ともに格子に斜線を組み合わせている。胎土は白色粒子・長石に富む。

116～123はロクロ成形のかわらけで、外底に回転糸切り痕を有す。116～121は小皿、122、123は中皿、もしくは大皿で、胎土は粉質、体部は直線的、或は外反気味に立ち上がる。120は灯明皿。

124は骨角製の笄。両面に溝状の窪みを有している。両端は欠損しており詳細は不明である。

125・126石製品である。125は硯。産地は特定できないが粘板岩系の石材である。126は五輪塔の空風輪であり、四面に梵字を刻むが、風化が激しく判読不可能である。

尚、哺乳類ではイヌの下顎骨１点、ウマの中手・足骨１点を出土している。

イコウ141は覆土堆積の観察から５条の溝に分け、イコウ141A～141Bと呼称している。切り合い関係から新旧を判断すると、古いものから順に141C→141E→141D→141A→141Bと掘り直された可能性が高く、浚渫、或は改修が行なわれたものと考えられる。いずれも南北9.0m前後を検出し、さらに北、

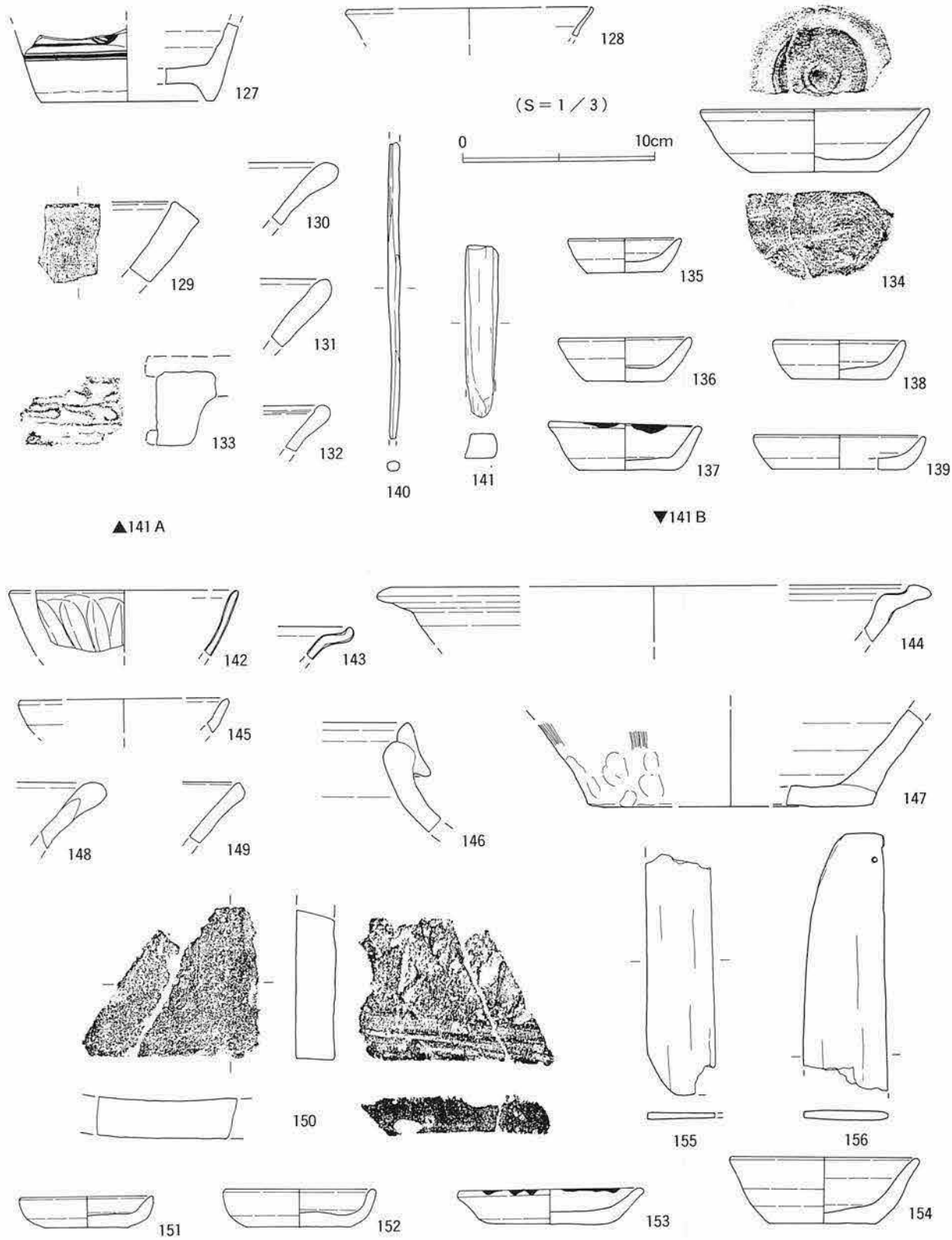


図14　第２面出土遺物（３）〈141A・B〉

南へと延びるものである。以下、溝別に説明を加えていく。

イコウ141Aの詳細は不明であるが、土層観察から上幅180cm程、確認面からの深さ20cm程の規模を有していたと考えられる。底面の海抜は北部で7.5m、南部で7.4mを測るが、底面のところどころに凹凸を有し、断面形態は安定していない。底面からの立ち上がりは緩やかである。覆土は上層が褐色粘質

土、下層が暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図14に示した。

127は中国産の青白磁梅瓶底部。釉は青緑色透明、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。

128は東濃型の山茶碗口縁部。器壁は非常に薄く、胎土は精緻で灰白色を呈する。

129は備前窯擂鉢の口縁部。口縁端部は角形を呈し、上面には重ね焼きの痕跡がみられる。器表は暗褐色、、胎土は灰色を呈し、長石・雲母を多量に含んでいる。

130～132は常滑窯片口鉢Ⅰ類の口縁部。いずれも端部の丸いタイプであるが、131の膨らみは他と比べ小さいものである。胎土は灰白色を呈し、長石・雲母を含む。

133は軒平瓦。平瓦部との接合は顎貼付け式で、瓦当面には唐草文を有し、離れ砂が顕著に残る。器表は黒灰色、胎芯は灰色を呈し、長石・砂粒・小石を多量に含む。

134～139はロクロ成形のかわらけであり、いずれも外底面に回転糸切り痕を有する。134が大皿、もしくは中皿、135～139が小皿であり、134～137は粉質胎土で体部が直線的、或は外反気味に立ち上がる。134の見込みにはナデが認められない。また、137は灯明皿として使用されたものである。

140・141は木製品。140は箸。141は断面が台形状を呈する角材であるが用途不明。

尚、哺乳類ではウシの右中手骨１点、中手・足骨１点、ウマの中手骨１点、左中足骨１点、イヌの右橈骨１点、左尺骨１点、下顎骨１点が出土している。

イコウ141Bは切り合い関係から最も新しい溝と考えられる。詳細は不明であるが、土層観察から上幅90cm前後、確認面からの深さ10～20cm程の規模を有していたと考えられる。底面の海抜は7.6m前後を測り、確認範囲ではほぼ水平といえる。覆土は１～５cm大の土丹を含む明褐色土であり、出土遺物は摩滅している。図示可能な出土遺物は図14に示した。

142・143は貿易陶磁で、龍泉窯系青磁である。142は鎬蓮弁文碗、143は折縁鉢の口縁部で釉は淡青緑色、胎土は灰白色を呈する。

144・145は瀬戸窯の製品。144は灰釉折縁深皿の口縁部で、胎土は灰白色を呈する。145は鉄釉天目茶碗の口縁部小片で、胎土は黒色粒子を含み灰白色を呈する。

146～149は常滑窯の製品。146・147は甕で器表は褐色、胎土は灰色～黒褐色を呈し、長石・雲母を含む。146は口縁部でN字状の縁帯を有し、縁帯幅は3.0cmを測る。147は甕底部で、胴部外面下位には指頭痕を有し、外底面は砂底である。148・149は片口鉢Ⅰ類の口縁部で、器表・胎土は灰色を呈し、長石を含む。148の肥厚は大きく、149は角形状を呈し、端部には沈線状の窪みを有する。

150は平瓦。凸面は格子目の叩き、凹面は離れ砂がみられ、側面はヘラケズリである。器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子を多量に含み、雲母・長石・砂粒を含む。

151～154はロクロ成形のかわらけで、外底面に回転糸切り痕を有する。151～153は小皿、154は中皿、もしくは大皿。153・154は体部が直線的、或は外反気味に立ち上がる。153は灯明皿。

155・156は木製品。いずれも草履の芯材で、長さの復元は不可能である。

イコウ141Cは切り合い関係から最も古い溝である。土層観察から上幅180cm前後、下幅140cm前後、確認面からの深さ40cm程の規模を有していたと考えられる。底面の海抜は7.3m前後を測り、確認範囲ではほぼ水平といえる。底面からの立ち上がりは逆ハ字状を呈している。覆土は土丹が主体で、混入する砂質土等により３つに分層され、下層ほど固く締まっている。遺物は多量に出土しており、図示可能なものは図15～17に示した。

157～169は貿易陶磁。157～161は龍泉窯系青磁で、釉は灰緑色～淡青緑色、胎土は灰白色を呈する。157・158は鎬蓮弁文碗の口縁部。159は鎬蓮弁文碗の底部である。内底面には文字が篦彫りされ、高台

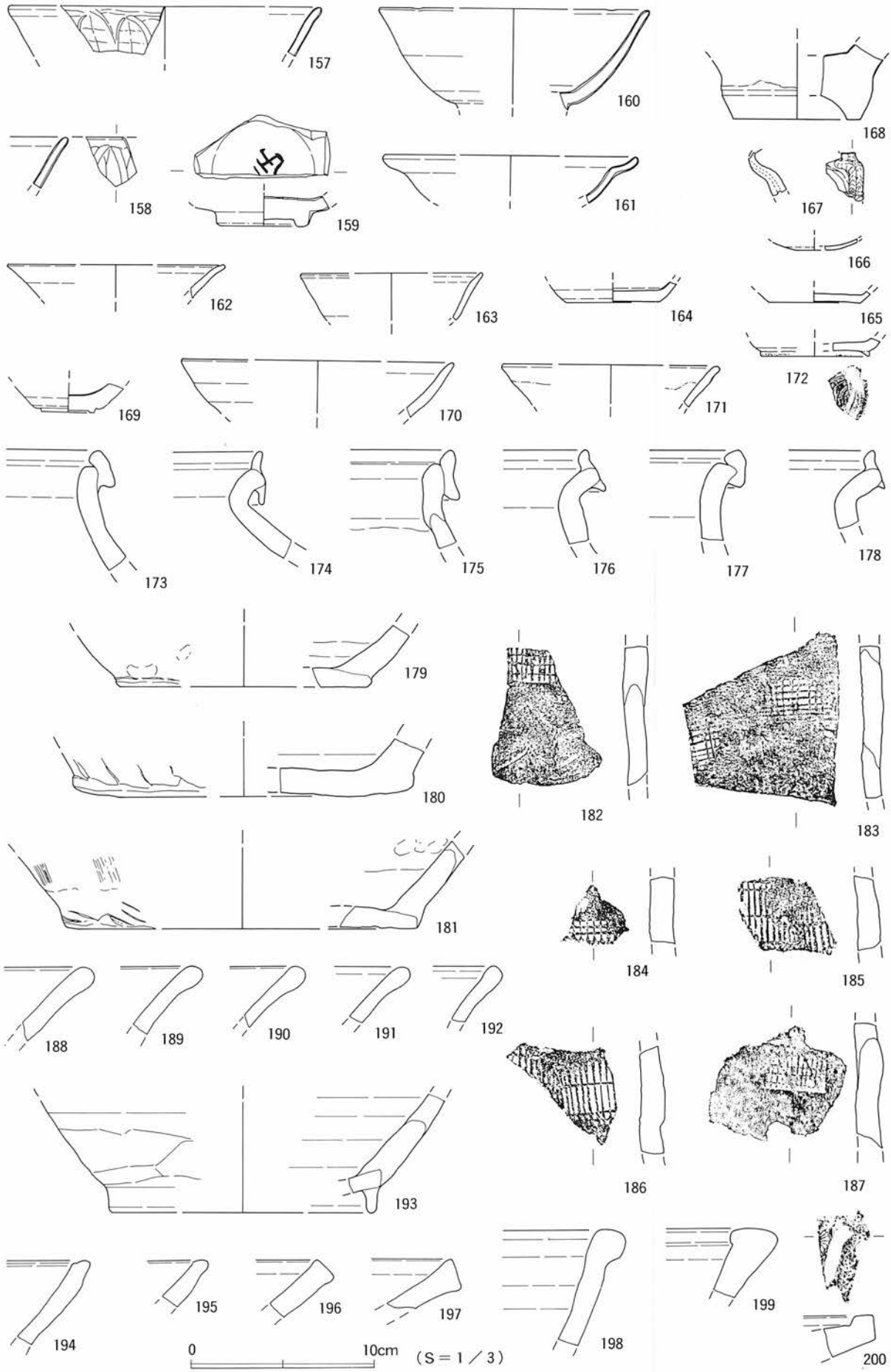


図15　第２面出土遺物（４）〈141C〉

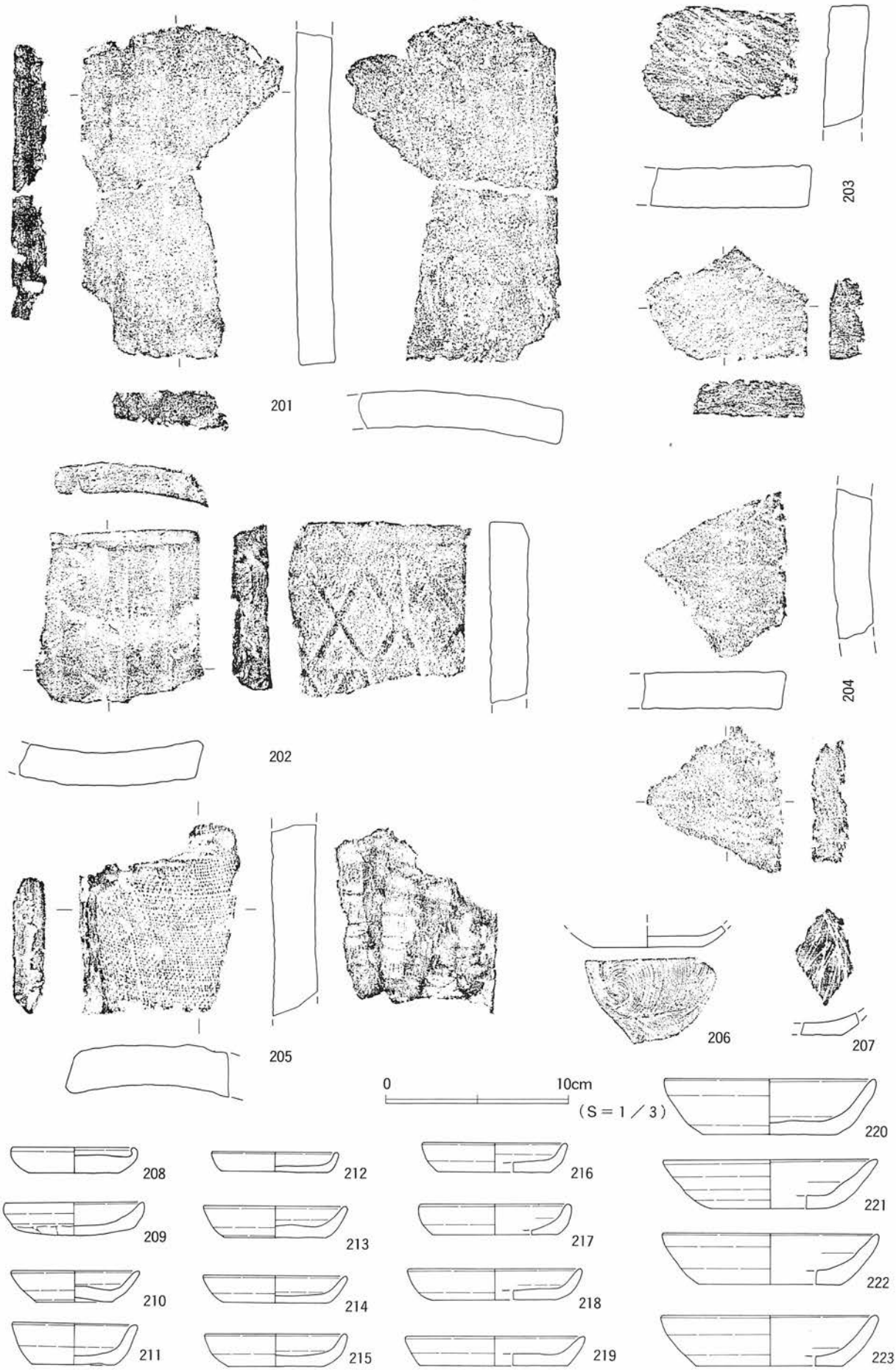


図16　第２面出土遺物（５）〈141C〉

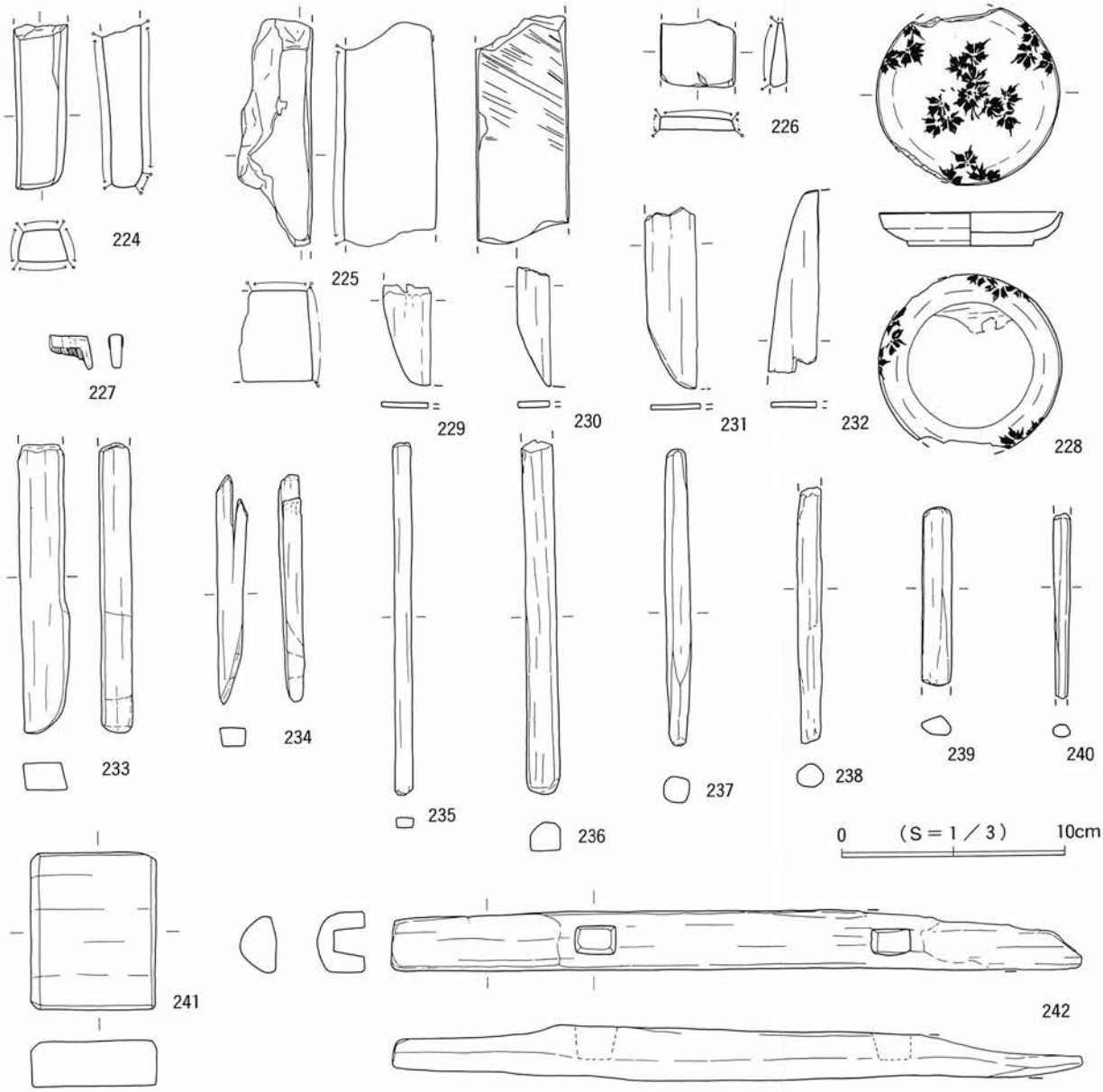


図17　第２面出土遺物（６）〈141C〉

畳付から高台内は無釉である。160は輪花碗。161は折縁鉢の口縁部。162～167は白磁であり、釉は灰白色、胎土は灰色～灰白色を呈し、黒色粒子を含む。162～165は口兀皿であり、162・163は口縁部、164・165は底部である。166は小皿であり、体部外面下位から外底面は無釉となる。167は壺等の飾りであろう。168は四耳壺の底部。169は鉄釉天目茶碗の底部。器表は灰橙色、胎土は粘性強く、黒灰色を呈し、白色粒子を含む。

170・171は瀬戸窯の製品で、胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。170は灰釉平碗の口縁部。171は灰釉縁釉小皿の口縁部。

172は東濃型の山茶碗底部である。胎土は非常に精良で灰白色を呈する。

173～198は常滑窯の製品。173～178は甕口縁部でいずれもＮ字状を呈している。縁帯幅は173が2.2cm、174が2.9cm、175が2.8cm、176が2.6cm、177が2.1cm、178が2.3cmを測る。いずれも器表は褐色～暗褐色、胎土は灰色～暗灰色を呈し長石・白色粒子に富む。179～181は甕底部。外面下位の調整は179がナデ、180・181が縦位のヘラナデ、もしくはヘラケズリで、内面はいずれもナデである。器表

は褐色～暗褐色、胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。182～187は甕胴部の押印文。いずれも格子文であり、187には斜線を組み合わせている。器表は灰橙色～暗褐色、胎土は橙色～灰色を呈し、長石・白色粒子を含む。188～193は片口鉢Ⅰ類で、188～192が口縁部、193が底部である。口縁部の形態はいずれも肥厚するタイプで、胎土は灰色～灰白色を呈し、白色粒子・長石を含む。193の体部外面下位には二段の回転ヘラケズリを行なっている。194～197は片口鉢Ⅱ類の口縁部。口縁端部の形態は194・195がやや舌状を、196・197が角形を呈するものである。いずれも器表・胎土は褐色～暗褐色を呈し、白色粒子・長石に富む。

198～200は火鉢。198はかわらけ質で口縁部は角状、199は土器質で口縁端部は釘頭状を呈する。200は瓦器質で輪花状を呈する鍔部の小片であろう。菊花と六弁花のスタンプが捺されている。

201～205は瓦で、いずれも平瓦である。201は凹・凸両面に離れ砂が付着し、側面はヘラケズリである。器表・胎土は暗灰色を呈し、白色粒子・砂粒に富む。202は凸面は格子目叩き、凹面には模骨痕を有する。器表は黒灰色、胎芯は灰色を呈し、白色粒子・雲母・長石・砂粒を含む。203は凸面がヘラケズリ、凹面には離れ砂が付着し、側面・端面はヘラケズリである。器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子・砂粒・長石を含む。204は凹・凸両面に離れ砂が付着し、側面はヘラケズリである。器表は黒灰色、胎土は下位白色を呈し、白色粒子・砂粒・小石を含む。205は凸面が格子目状叩き、凹面が布目痕を有し、側面はヘラケズリである。器表、胎土は精良で灰白色を呈し、雲母・白色粒子を含む。

206は白かわらけ。ロクロ成形で外底面には回転糸切り痕を有する。

207はロクロ成形のかわらけ大皿の底部片である。内面には刃物等による線刻がみられる。

208～223はかわらけ。208・212はロクロ成形の内折れタイプ、209は手づくね成形の小皿、210・211・213～219はロクロ成形の小皿、220～223はロクロ成形の大皿である。210・211・221は粉質胎土で体部は直線的、或は外反気味に立ち上がる。

224～226は砥石。224・225は天草産の石材で中砥、226は鳴滝産で仕上砥である。

227～242は木製品。227は横櫛の小片で、黒色漆塗りである。228は黒色漆塗りの皿。底部は板高台、或は総高台であり、内・外面には赤色漆により楓文を描いている。229～232は草履の芯材。233・234は棒状を呈する角材で、片端を曲面状に仕上げている。用途不明。235～240は棒状を呈するものであり、240は箸の可能性があるが、他はちゅう木であろうか。用途不明。241は長方形を呈する材で、上面の縁辺を面取りしている。用途不明。242は糸巻きの部材である。

尚、貝類ではアカニシ１点、ダイベイキサゴ１点、サザエ２点、ツメタガイ１点、哺乳類ではウマの歯骨３点、右中手骨１点、ウシの右肩甲骨１点、右中手骨１点、歯骨２点、イヌの下顎骨１点、右橈骨１点、左上腕骨１点、ガン・カモ類では脛骨１点、橈骨１点が出土し、ヒトの寛骨１点、橈骨１点を含んでいる。

イコウ141Dの詳細は不明であるが、土層観察から上幅90cm以上、確認面からの深さ20～30cm程の規模を有していたと考えられる。底面の海抜は北部で7.6m、南部で7.4mを測るが、断面形態は安定していない。覆土は上層が褐色粘質土、中層が明褐色粘質土、下層が褐色粘質土であり、いずれも締まりは弱い。図示可能な出土遺物は図18に示した。

243・244は貿易陶磁。243は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の口縁部である。釉は淡灰緑色、胎土は灰色を呈する。244は白磁口兀皿底部である。釉は灰白色透明、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。

245は瀬戸窯の灰釉卸皿。胎土は灰白色を呈し、外底面には回転糸切り痕を有する。

246は常滑窯の甕口縁部。縁帯部は頸部に接し、縁帯の幅は2.2cmを測る。器表は暗褐色、胎土は灰橙色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。

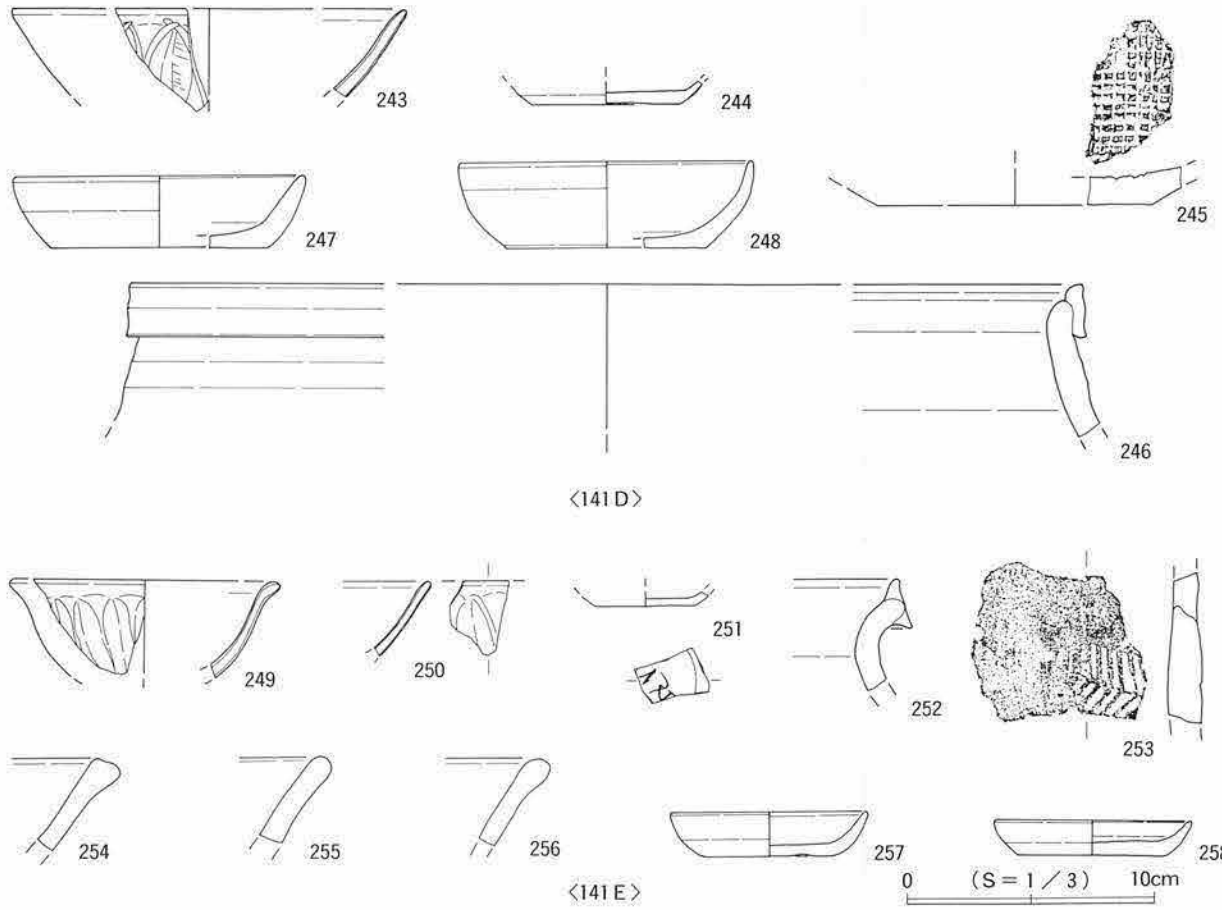


図18　第２面出土遺物（７）〈141D・E〉

247・248はかわらけ。いずれもロクロ成形の大皿で、外底面には回転糸切り痕を有する。

尚、哺乳類ではウシの歯骨が２点出土している。

イコウ141Eは最も東側から検出されている。土層観察から上幅80cn以上、確認からの深さ10～15cmの規模を有している。底面の海抜は7.6m前後を測り、底部からの立ち上がりは逆ハ字状を呈する。覆土は上層が少量の炭粒を含む暗灰色粘質土、中層が玉石・木片等を含む締まりの強い明褐色弱粘質土、下層が１～５cm大の土丹を含む暗褐色弱粘質土である。図示可能な出土遺物は図18に示した。

249・250は貿易陶磁で、龍泉窯系の青磁である。249は鎬蓮弁文鉢、250は鎬蓮弁文碗である。いずれも釉は淡灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

251は瀬戸窯の入子。外底面はヘラケズリされ、墨書が認められるが判読は不可能である。器壁は非常に薄く、胎土は精良で淡橙色を呈する。

252～256は常滑窯の製品。252は甕口縁部の小片であり、断面はＮ字状を呈し、縁帯の幅は2.1cmを測る。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。253は甕の胴部であり、外面には矢羽状の押印文が捺されている。器表は褐色、胎土は暗灰色を呈し、長石・白色粒子を含む。254～256は片口鉢Ｉ類の口縁部である。いずれも端部は肥厚し、254には沈線状の窪みがみられる。胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子・雲母を含む。

257・258はかわらけ。いずれもロクロ成形の小皿で、外底面に回転糸切り痕を有する。

尚、哺乳類ではウシ・ウマの上腕骨１点、ウマの歯骨１点が出土している。

イコウ141の平面プラン確認時に出土した図示可能な遺物を図19・20に示した。

259～264は貿易陶磁である。259～260は龍泉窯系青磁劃花文碗で、259は体部、260は口縁部である。

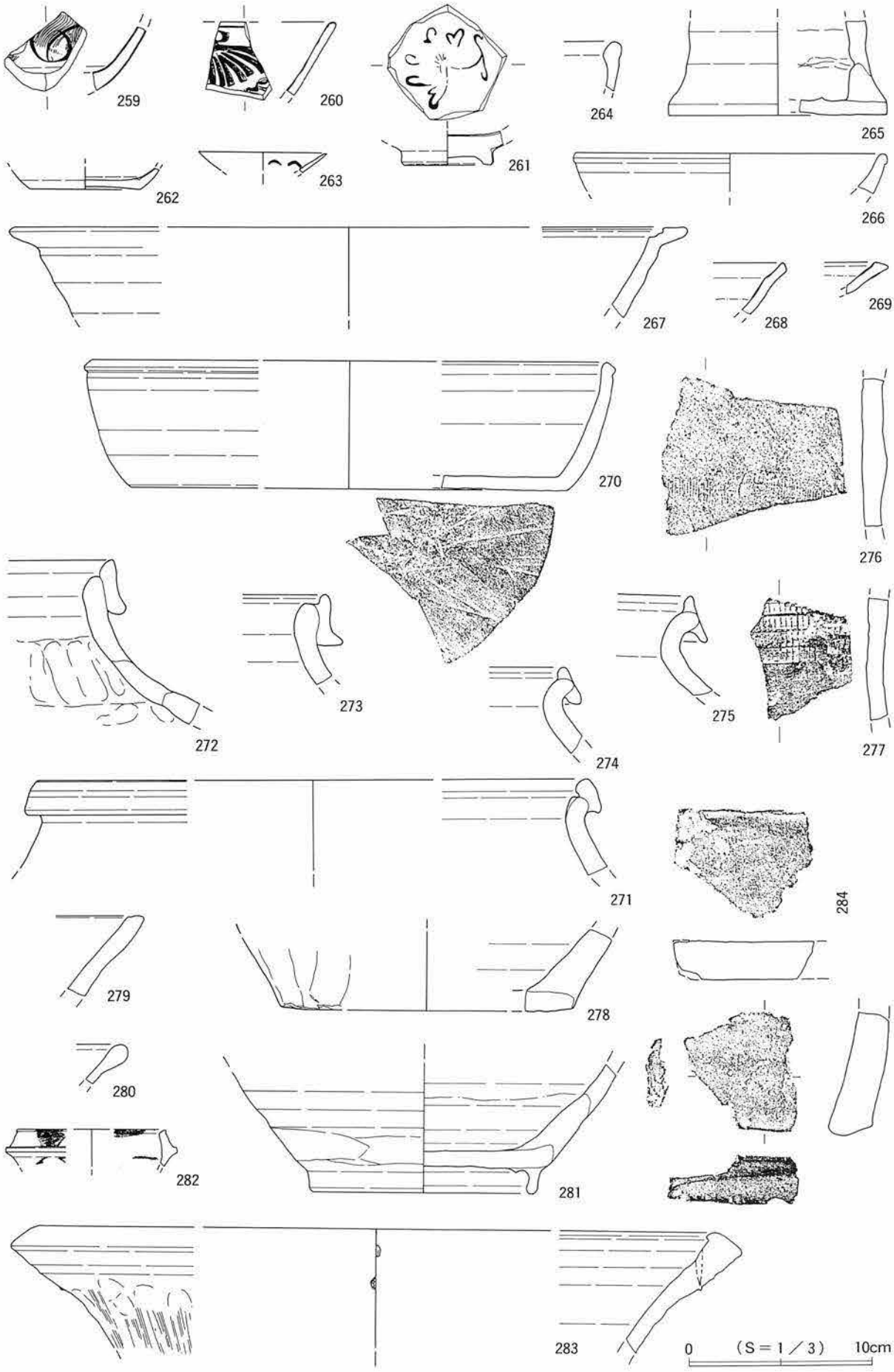


図19　第２面出土遺物（８）〈141A～E〉

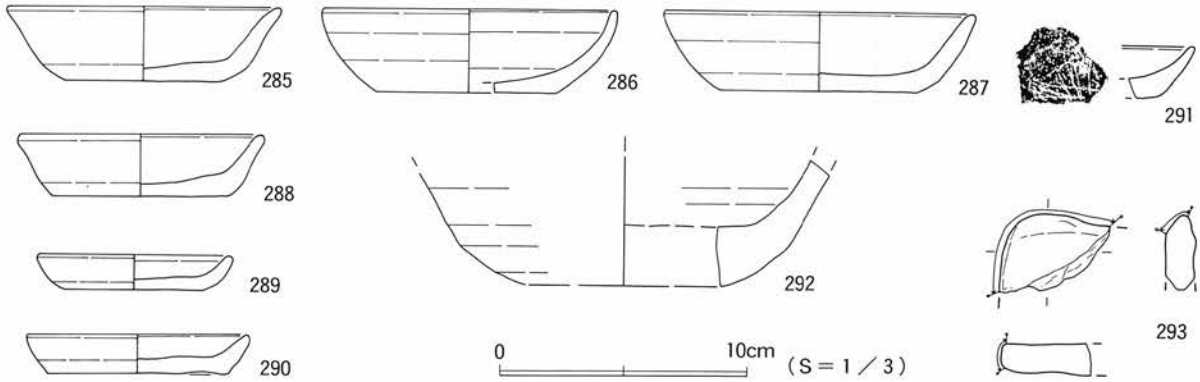


図20　第２面出土遺物（９）〈141A～E〉

釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。261は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の底部で、内底面に印花文を有する。釉は灰青緑色、胎土は灰色を呈する。262は白磁口兀皿。釉は淡青白色、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。263は青白磁皿で、内面に蓮弁文を有する。釉は淡青白色、胎土は白色を呈する。264は泉州窯系緑釉陶器盤の口縁部。胎土は灰色を呈し、砂粒・小石等を含む。

265～270は瀬戸窯製品で、胎土は灰色～灰白色を呈し、白色粒子を含む。265は瓶子Ⅰ類底部。266は卸皿口縁部で、端部は玉縁状を呈する。267は灰釉折縁深皿の口縁部。268は灰釉折縁中皿の口縁部。269は灰釉卸皿の口縁部。270は洗で口縁端部は玉縁状を呈し、外底面はヘラケズリである。

271～281は常滑窯の製品で、271～279の器表は灰橙色～暗褐色、胎土は灰色～灰橙色を呈し、長石・白色粒子・雲母を含む。271～275は甕口縁部でいずれもN字状の断面を有するものと考えられる。縁帯の幅は271が2.0cm、272が3.1cm、273が2.8cm、274が2.2cm、275が2.7cmを測る。276・277は甕胴部片。胴部外面に格子状の押印文を有する。278は甕底部。胴部外面下位は縦位のヘラナデ、或はヘラケズリで、外底面は砂底である。279は片口鉢Ⅱ類口縁部で、端部は角形状を呈する。280・281は片口鉢Ⅰ類で、280が口縁部、281が底部。口縁端部は肥厚し、体部外面下位はヘラケズリされ、砂底の外底には高台を貼り付ける。器表・胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子を含む。

282は鍔釜のミニチュア。胎土は精良で、淡橙白色を呈し、長石・雲母を含む。内・外面はナデ調整で、部分的に煤が付着している。

283は土器質の火鉢口縁部。内面、及び口縁部はナデ、外面は縦位のハケ調整で、口縁端部は釘頭状を呈する。器表は黒灰色、胎土は灰白色を呈し、長石・砂粒・小石を含む。口縁端部付近には直径３mm程の孔が上下方向に穿たれているが、外面に貫通してはいない。

284は平瓦。凹・凸両面ともにナデ、側面はヘラケズリ後ナデ調整である。器表は暗灰色、胎芯は灰色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。

285～291はロクロ成形のかわらけで、いずれも外底面には回転糸切り痕を有する。285～288は大皿、もしくは中皿、289～291は小皿である。286は薄手丸深タイプ。285・288・291は粉質胎土で体部は直線的、或は外反気味に立ち上がる。291の内面には刃物等による線刻を有している。

292はかわらけ質の鉢状を呈する製品であろう。内・外面はヨコナデ調整で、外底面はヘラケズリであろうか。小片のため詳細は不明である。

293は常滑窯甕の胴部片であり、割れ口に研磨痕を有する所謂、擦り常滑である。

尚、哺乳類ではウマの左脛骨１点、右橈骨１点、歯骨１点、イヌの左上腕骨１点、下顎骨２点、鳥類の上腕骨１点が出土している。

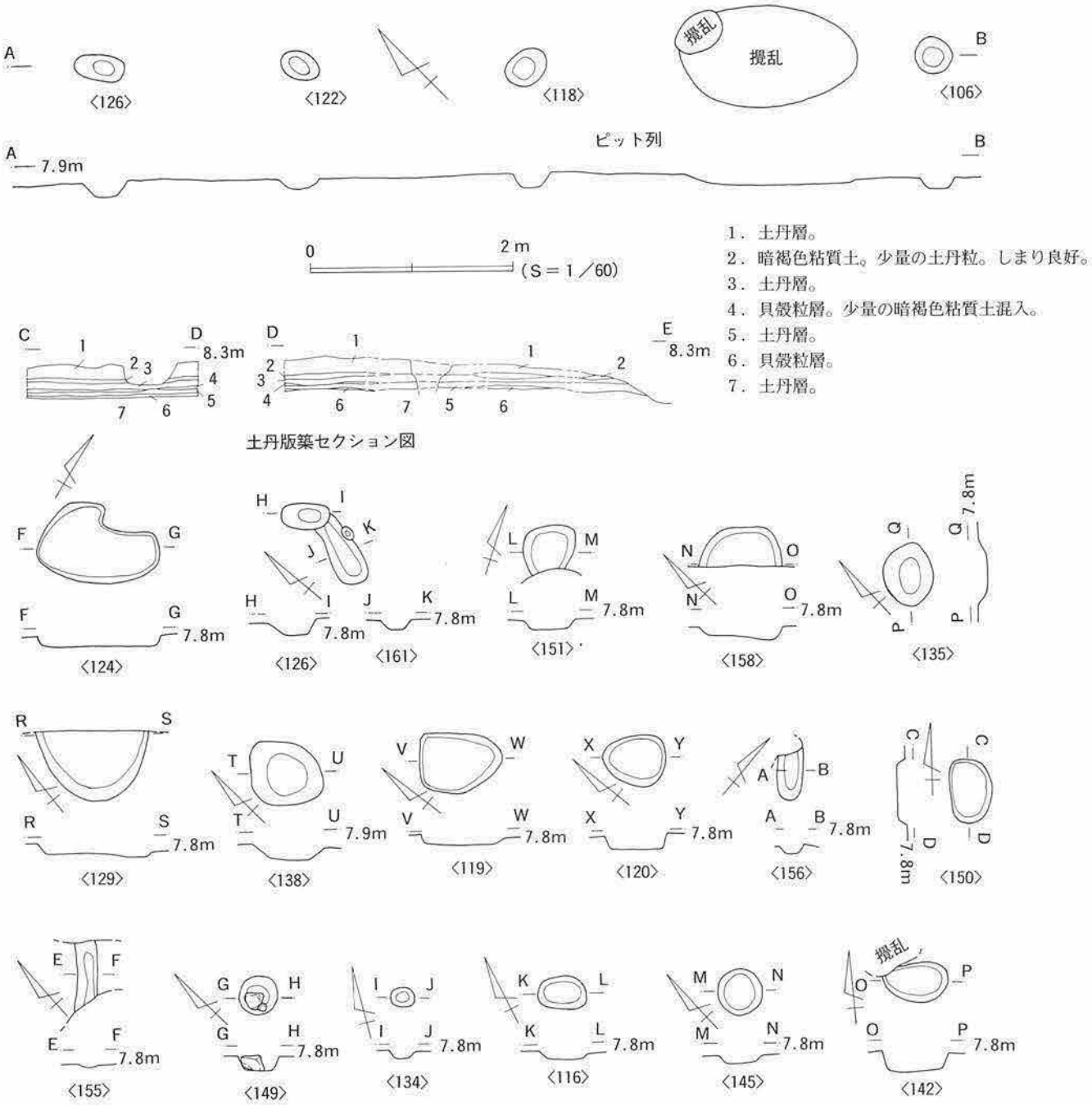


図21　第２面検出遺構（２）〈126〉etc.

b．土丹版築（図10・21）

C－1～2グリットの第１面土丹版築の下から検出されている。本址は第２面上より土丹層、貝殻粒層、土丹層、貝殻粒層、土丹層、土丹を混入する暗褐色粘質土層の順に各５cm前後の厚さで堆積している。版築上面の海抜は8.0m程を測り、ほぼ水平である。非常に狭い範囲からの検出であり、不明な点が多いが、東側の一部がイコウ140と重複関係にあり、本址の方が先行するようである。非常に堅固な版築地業であり、基壇状を呈する可能性が高い。版築上面では遺構は確認されず、また、版築構成土からの出土遺物はない。第１面の土丹版築とは土丹の締まり等により別遺構としている。

c．ピット列（図21・22）

B－4～6グリットから検出されたイコウ106、118、122、126の４口のピットである。東側の一部を現

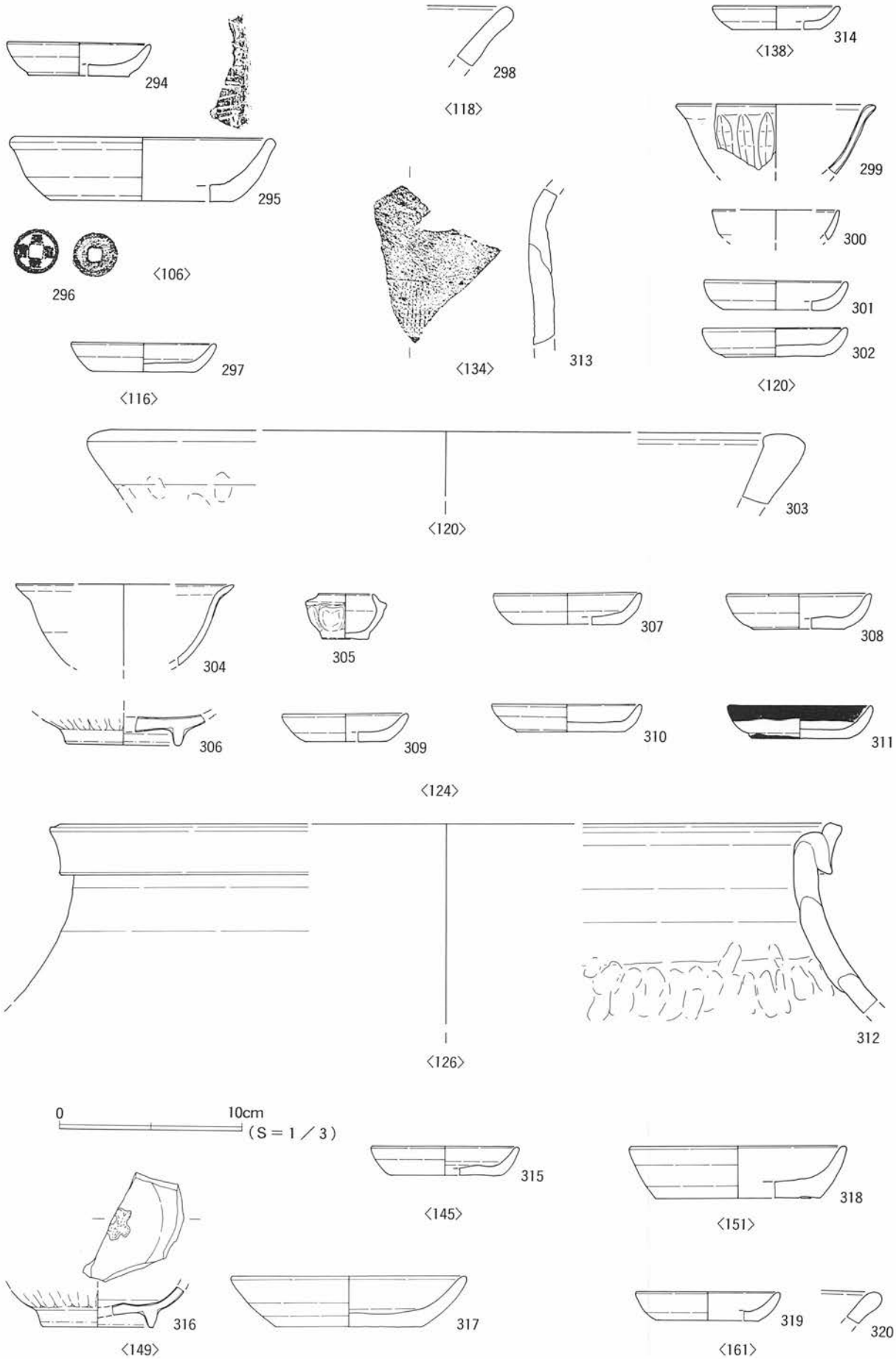


図22　第２面出土遺物（10）遺構出土遺物

代攪乱壙により失うが、東西４間のピット列の可能性がある。検出された柱間距離は西から2.0m、2.2m、4.0m、軸方位はN－45°－Eを測る。各ピットの平面は楕円形状を呈し、確認面からの深さ10～15cm程、覆土は締まりの弱い暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22に示した。

294～296はイコウ106からの出土である。294はロクロ成形のかわらけ小皿。295は瀬戸窯灰釉卸皿であり、口縁端部は玉縁状を呈し、外底面は回転糸切りである。胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含む。296は銅銭。北宋銭で掾書の「天聖元寳」である。初鋳1023年。

298はイコウ118から出土した常滑窯片口鉢Ⅰ類の口縁部である。端部は丸く肥厚し、胎土は白色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。

312はイコウ126から出土した常滑窯甕の口縁部である。口縁断面はN字状を呈し、縁帯幅は2.8cmを測る。器表は暗褐色、胎土は灰橙色を呈し、白色粒子・長石・石英を含む。

d．ピット（図21・22）

イコウ116はB－５グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西50cm、南北30cm、確認面からの深さ10cm程を測り、覆土は締まりの弱い黒褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22－297のロクロ成形のかわらけ小皿である。外底面には回転糸切り痕を有する。

イコウ134はB－５グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西25cm、南北20cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は土丹粒子を含む暗褐色粘質土である。図示可能な遺物は図22－313の常滑窯甕の胴部片である。外面に格子状の押印文を有する。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。

イコウ145はB－３グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西45cm、南北45cm、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒子を多く含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22－315のロクロ成形のかわらけ小皿である。外底面には回転糸切り痕を有する。

イコウ149はC－４グリットから検出されている。平面は円形状を呈し、東西40cm、南北40cm、確認面からの深さ15cm前後を測り、覆土は土丹粒子、炭粒を含む暗褐色粘質土である。底面からは約20cm大の上面を平らに削った土丹が出土している。図示可能な出土遺物は図22－316・317である。

316は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文鉢。見込みに双魚文を有し、釉は淡灰緑色、胎土は灰白色を呈する。高台畳付は無釉である。

317はロクロ成形のかわらけ大皿。外底面には回転糸切り痕を有する。

e．土壙（図21・22）

イコウ119はA・B－４グリット検出である。平面は不定形で、東西80cm、南北60cm、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒子を多く含む黄褐色砂質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ120はB－４グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西65cm、南北50cm、確認面からの深さ15cm前後を測り、覆土は黄褐色砂質土である。図示可能な出土遺物は図22に示した。

299は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の口縁部。釉は青緑色、胎土は灰色を呈する。

300は瀬戸窯入子の口縁部。胎土は精良で灰白色を呈し、白色粒子を含む。

301・302はロクロ成形のかわらけ小皿。外底面には回転糸切り痕を有する。

303は土器質火鉢の口縁部。端部は釘頭状、胎土は灰色を呈し、小石・白色粒子を含む。

イコウ124はB－４グリットから検出されている。平面は不定形で、東西120cm、南北80cm、確認面

からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒、炭粒を含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22に示した。

304～306は貿易陶磁。304は白磁口兀皿。釉は淡灰白色、胎土は白色を呈し、黒色粒子を含む。305は青白磁合子の身。体部は輪花状を呈し、釉は淡青白色、胎土は白色を呈し、黒色粒子を含む。蓋受け部と高台状を呈する底部は無釉である。306は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文鉢の底部。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈し、高台畳付は無釉である。

307～311はロクロ成形のかわらけ小皿で、外底に回転糸切り痕を有する。311は灯明皿。

イコウ129はＢ－５グリットから検出されている。部分的な検出ではあるが平面は楕円形状を呈するものと考えられる。東西115cm前後、南北70cm以上、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ135はＢ－５グリット検出である。平面は楕円形状を呈し、東西50cm、南北65cm、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒子を含む明褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ138はＢ－５グリットから検出されている。平面は隅丸方形状を呈し、東西70cm、南北65cm、確認面からの深さ15cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22に示した。

314はロクロ成形のかわらけ小皿で、外底面に回転糸切り痕を有する。

イコウ142はＢ・Ｃ－５グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西65cm、南北40cm、確認面からの深さ20cm前後を測り、覆土は土丹粒子を含む締まりの弱い暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ150はＣ－４グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西40cm、南北65cm、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒子を多く含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ151はＣ－５グリットから検出されている。平面は隅丸方形状を呈し、東西50cm、南北50cm以上、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒子、炭粒を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22－318のロクロ成形のかわらけ小皿で、外底面には回転糸切り痕を有する。

イコウ155はＣ－５グリットから検出されている。平面形は南北に長い小規模の溝状を呈し、南北70cm以上、幅20cm前後、確認面からの深さ５cm前後を測り、覆土は土丹粒子、炭粒を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ156はＣ－５グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し東西25cm前後、南北55cm前後、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は土丹粒子を多く含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ158はＣ－５・６グリットから検出されている。部分的な検出であるが平面は円形状を呈するものと考えられ、東西80cm前後、南北40cm以上、確認面からの深さ15cm前後を測り、覆土は土丹粒子、炭粒を含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ161はＢ－４グリットから検出されている。イコウ126と重複し、本址の方が古い。平面は楕円形状を呈し、東西35cm前後、南北80cm前後、確認面からの深さ10cm前後を測り、覆土は灰褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図22－319・320で、319はロクロ成形のかわらけ小皿で、外底面に回転糸切り痕を有する。320は常滑窯片口鉢Ｉ類の口縁部である。端部は丸く肥厚している。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子・白色粒子を含む。

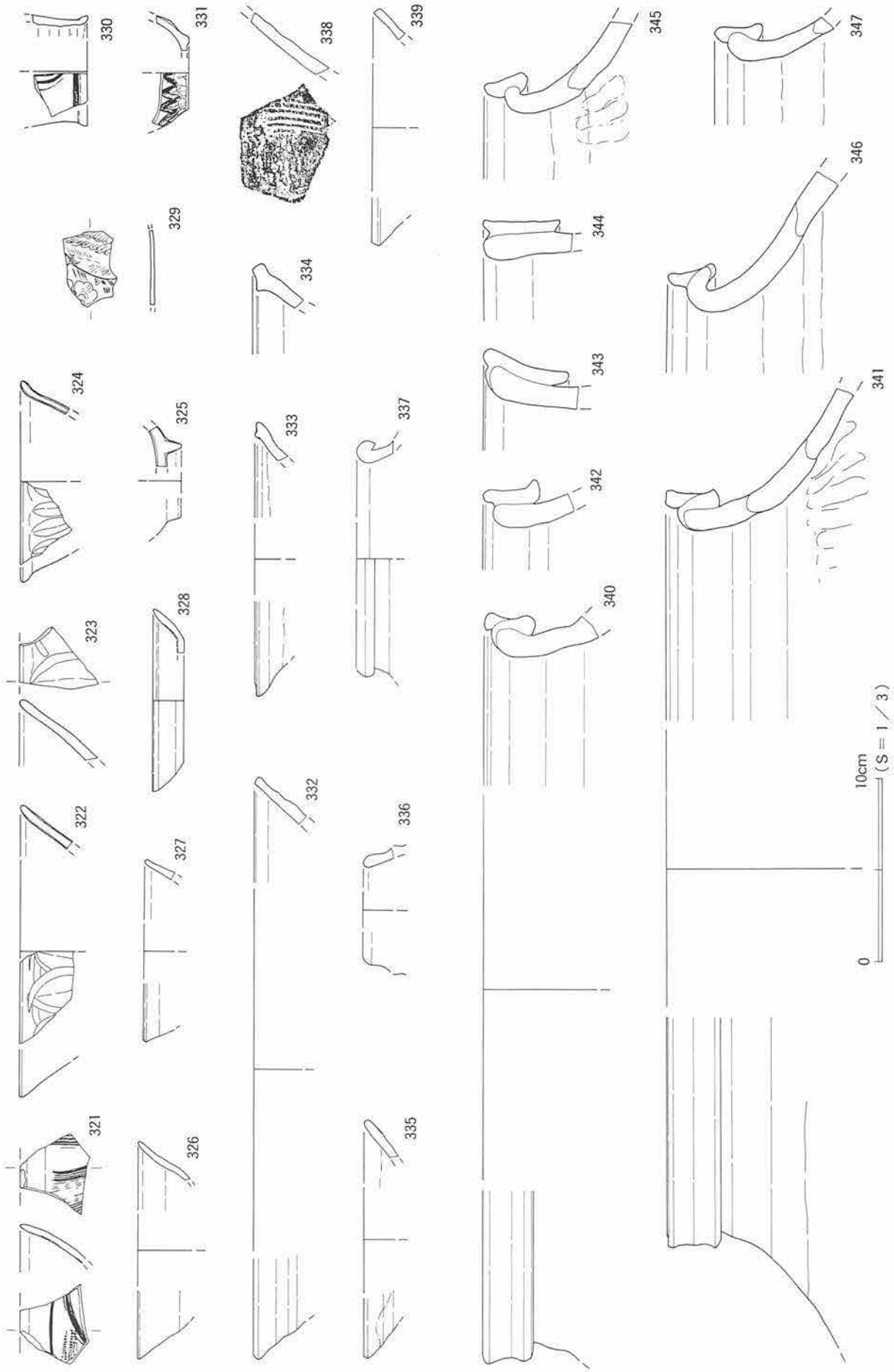


図23　第２面出土遺物（11）面出土遺物

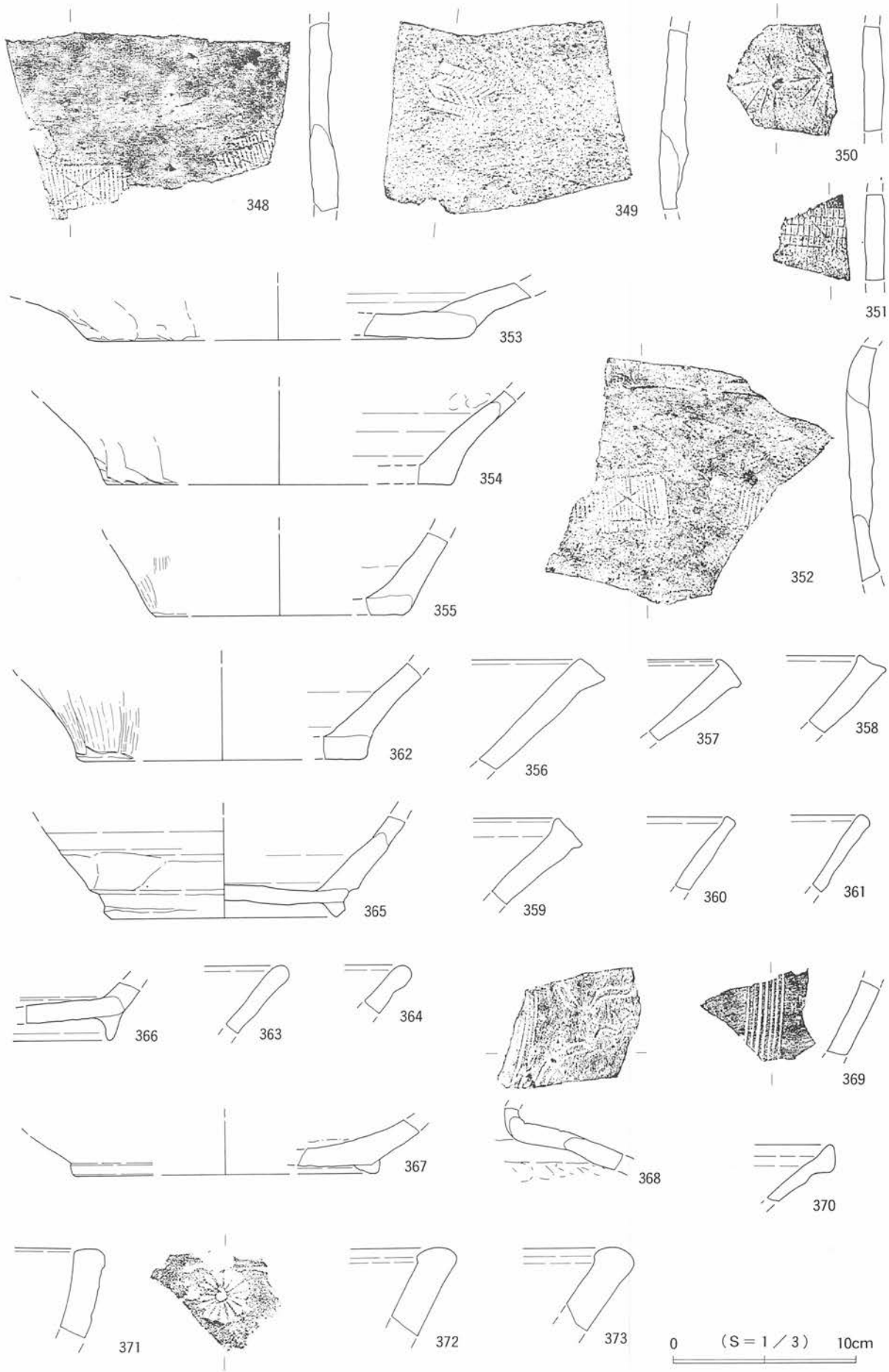


図24　第２面出土遺物（12）面出土遺物

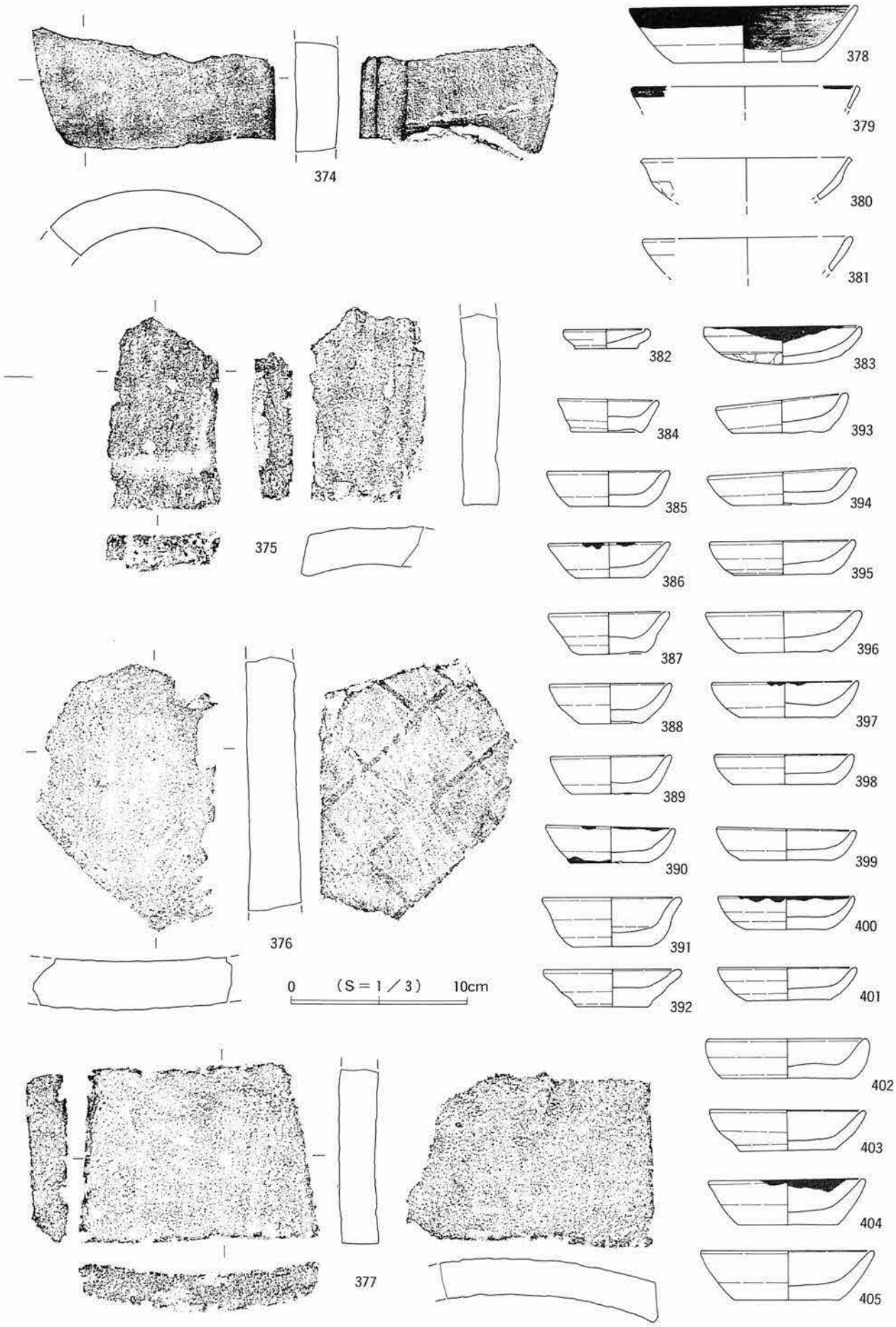


図25　第２面出土遺物（13）面出土遺物

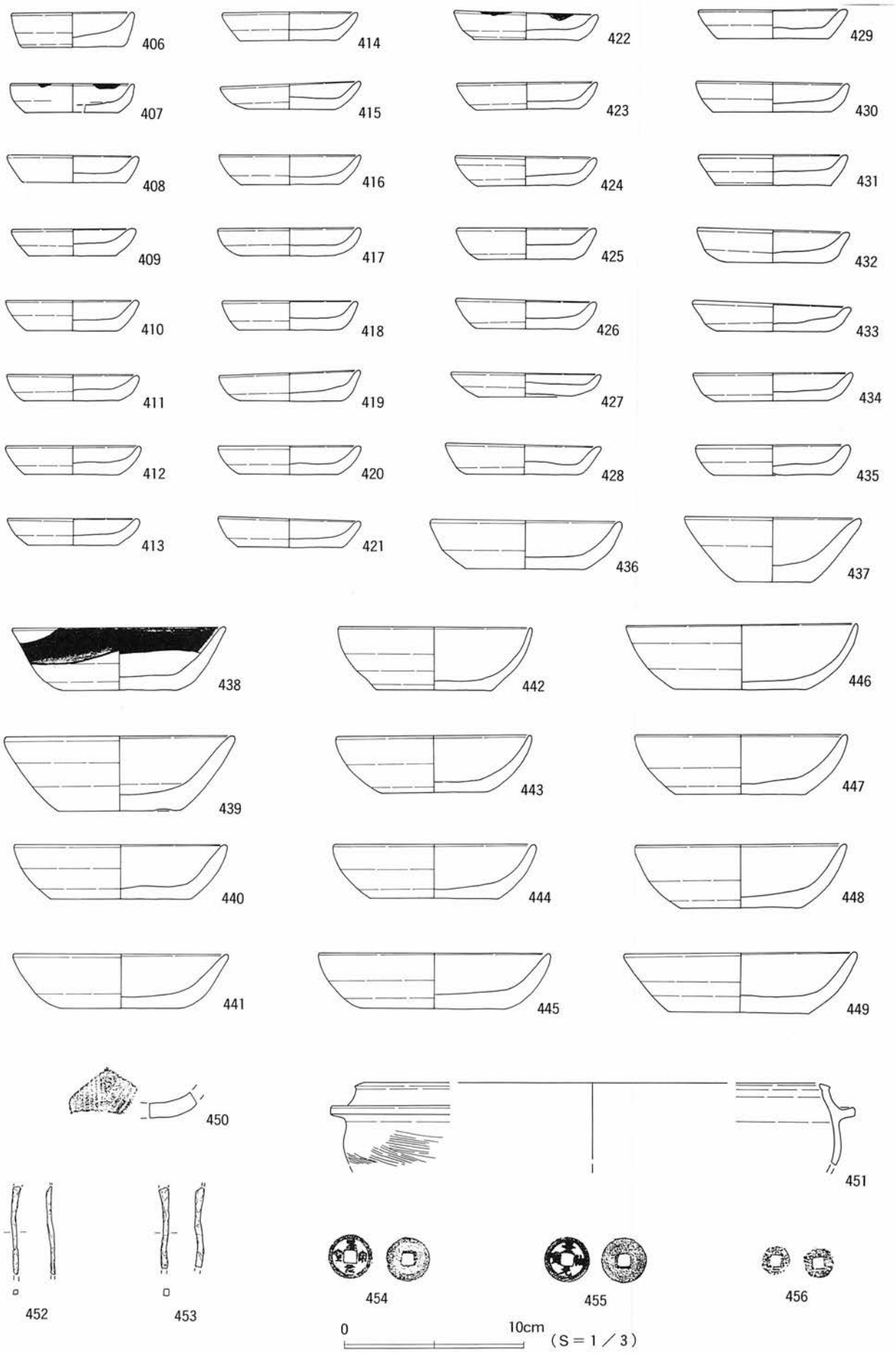


図26　第２面出土遺物（14）面出土遺物

f．面出土遺物（図23～27）

第１面から第２面の遺構確認までの掘り下げ時に出土した遺物をここに集めた。

321～331は貿易陶磁。321は同安窯系青磁櫛描文碗の口縁部で、釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。322～325は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗で、322～324は口縁部、325は底部である。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈し、高台畳付は無釉である。323は焼成不良のため橙色を帯びている。326～328は白磁口兀皿で、釉は灰白色、胎土は白色を呈し、黒色粒子を含む。329～331は青白磁。329は皿で内面に草花文を配している。釉は青白色、胎土は白色を呈し、黒色粒子を含む。330は梅瓶の蓋である。外面に渦文を有し、口縁端部は無釉。釉は青灰色、胎土は白色を呈する。331は合子の身。胴部外面下位には蓮弁を配し、釉はその中位まで掛けられる。釉は青灰色、胎土は灰白色を呈する。

332～338は瀬戸窯の製品で胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含む。332は灰釉直縁大皿の口縁部。333は灰釉卸皿の口縁部で、口縁部付近のみ施釉される。334は灰釉卸目付大皿の口縁部。335は灰釉縁釉小皿の口縁部。336は灰釉梅瓶の口縁部。337は鉄釉茶壺の口縁部。338は鉄釉擂鉢の体部で、内面の擦り目は６条を１単位としている。胎土は粘性弱く、淡灰橙色を呈し、白色粒子を含む。

339は尾張型の山茶碗の口縁部。胎土は粗く、灰色を呈し、白色粒子・黒色粒子を含む。

340～366は常滑窯の製品で、340～362の器表は褐色～暗褐色、胎土は灰色～暗灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。340～347は甕口縁部。343・344は縁帯が頸部に接着し、縁帯幅はそれぞれ4.8cm、4.2cmを測る。340～342・345～347は断面Ｎ字状を呈し、縁帯幅は340が2.8cm、341が3.0cm、342が3.1cm、345が2.4cm、346が2.7cm、347が2.6cmを測る。348～352は甕胴部で、348・351・352は格子に斜線の組み合わせ、349は格子に矢羽根、350は花文状の押印文を有する。353・354は甕底部で、外面下位は縦位のヘラナデ、外底は砂底である。355は壺底部で、外面は縦位のヘラナデ、外底は砂底である。356～360は片口鉢Ⅱ類の口縁部である。356の口縁端部の平端面は外方に、357～359は内・外方に小さく引き出され、360は角形状で端部に沈線状の窪みを有する。362は片口鉢Ⅱ類の底部で、外面は縦位のヘラナデ、外底は砂底を呈す。361・363・364は片口鉢Ⅰ類の口縁部。端部は肥厚し、丸くなるタイプで、器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。365・366は片口鉢Ⅰ類の底部。外面下位は回転ヘラケズリされ、外底には高台を貼り付けている。胎土は灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。

367・368は渥美窯の製品。367は片口鉢底部で、器表は暗灰色、胎土は砂質で灰色を呈し、白色粒子を含む。割れ口はザラリとしている。368は壺肩部で外面にヘラ描き文様を有する所謂、刻画文壺である。胎土は灰色を呈し、砂質で、白色粒子を含む。

369は備前窯擂鉢の体部。内面の卸目は７条を１単位としている。器表は暗褐色、胎土は淡灰褐色を呈し、白色粒子・長石・雲母を多量に含む。

370は東播系魚住窯の片口鉢口縁部。器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子・長石・砂粒に富む。口縁端部の器表は黒灰色を呈している。

371～373は火鉢の口縁部。371は瓦質で、外面に菊花のスタンプを有している。器表・胎土は灰白色を呈し、白色粒子・砂粒・小石を含み、気泡に富む。372・373は土器質で口縁端部は釘頭状を呈する。器表・胎土は灰白色を呈し、気泡多く、白色粒子・砂粒・雲母を含む。

374～377は瓦で、374は丸瓦、375～377は平瓦である。374の凸面はナデ、凹面は布目、側面はヘラケズリされ、器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子・雲母・砂粒を含む。375は凹・凸面ともにナデ、側面・端面はヘラケズリされ、器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子・長石・砂粒に富む。376は凸面が格子目叩き、凹面がナデ調整で糸切り痕を有し、離れ砂が付着する。器表は灰色、胎芯は灰白色を呈し、砂粒・

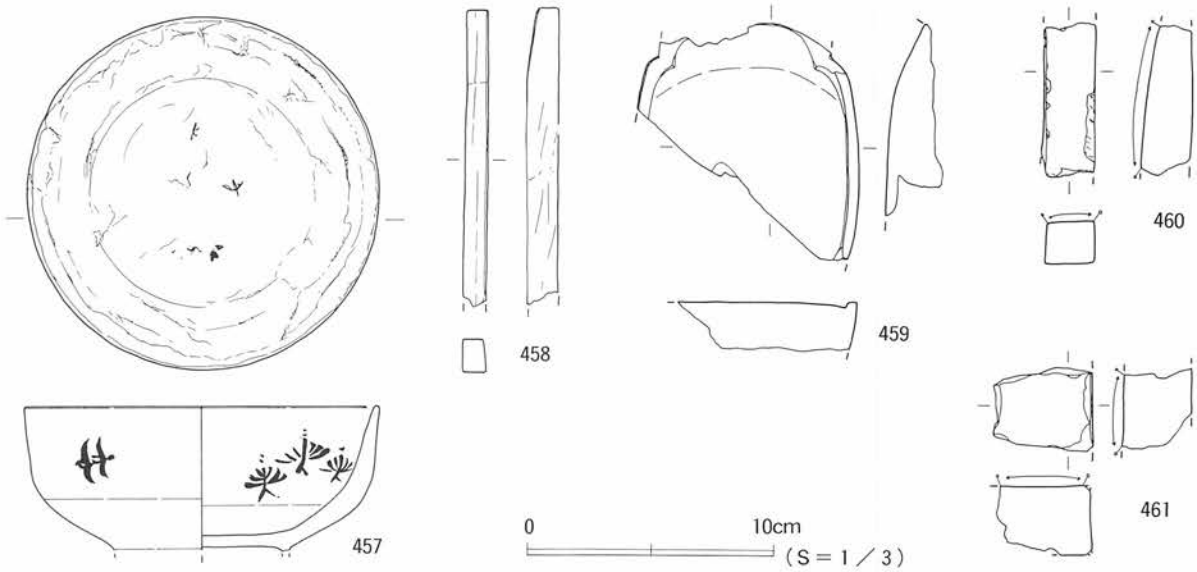


図27　第２面出土遺物（15）面出土遺物

小石を含む。377は凹・凸面ともにナデ調整で離れ砂が付着する。側面・端面はヘラケズリで、器表・胎土は灰色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。

378・379は瓦質黒縁皿の口縁部。378は内面全体が黒色を呈し、外底には回転糸切り痕を有する。379は口縁部が肥厚するもので口縁の内・外のみ黒色を呈する。

380は所謂、吉備系土師質土器の口縁部。体部外面中位に屈曲を有し、以下は指頭痕がみられる。胎土は淡橙色を帯びた白色で、長石・石英・砂粒を含む。

381は白かわらけの口縁部。ロクロ成形と考えられるが詳細は不明。胎土は白色粒子を含む。

382～450はかわらけ。382がロクロ成形の内折れタイプ、383が手づくね成形の小皿、384～435がロクロ成形の小皿、436～450がロクロ成形の大皿であり、436・437・442～444は中皿としたほうが妥当かもしれない。384～392・404・405・437～441は粉質で体部は直線的、或は外反気味に立ち上がるもの、442～444・446～448は典型的な薄手丸深タイプである。383・386・390・397・400・404・407・422・438は灯明皿であり、450の内面には板状工具による線刻がみられる。

451は鍔釜。内面～口縁～鍔部はナデ、外面はハケ調整で、鍔はほぼ水平方向に付けられている。胎土は淡灰白色を呈し、長石・雲母・石英を含む。

452・453は鉄製の釘。両端部は欠損しており長さは不明である。断面は角形を呈する。

454～456は銅銭でいずれも北宋銭。454は掾書の「聖宋元寳」で初鋳1011年。455は楷書の「景祐元寳」で初鋳1034年。456は周縁を擦ったものであるが、楷書の「熙寧元寳」で初鋳1068年。

457・458は木製品。458は黒色漆塗り漆器椀で、輪高台を有し、内・外面に赤色漆で鳥と木を描く。内面には漆紙？が付着している。458は棒状の製品で、端部は斜めに削られている。用途不明。

459～461は石製品で、459は硯、460・461は砥石である。459は赤間産の材質で、四葉型を呈する。460は上野産、461は天草産の中砥石で、460の割れ口には漆による補修痕がみられる。

尚、哺乳類ではイヌの左脛骨１点、肋骨１点、ネコの右脛骨１点、軸椎１点、ウシの歯骨１点、ウマの中手骨１点、イノシシの下顎骨１点、クジラの椎骨３点、魚類ではメジロザメの椎骨１点、タイの主上顎骨１点、鳥類ではガン・カモ類の大腿骨１点、脛骨１点が出土している。

第３節　第３面（図28～51）

第２面を構成する褐色粘質土を混入した土丹地業層は15～20cmの厚さで堆積している。これを除去すると、主に土丹粒子、炭粒、及び凝灰岩粒子等を含む褐色粘質土が検出され、部分的ではあるがＣ－７グリットでは貝殻粒子を混入した版築地業が確認されている。本層の上面において第３面の調査を行なった。現地表から1.0m前後、海抜は7.5m前後を測り、東に向かい緩やかに傾斜している。検出された遺構としてはかわらけ集中出土地点（所謂、かわらけ溜り）：４箇所、井戸：１基、ピット：80口、土壙：12基であり、第１・２面の遺構検出状況と比較すると杭、柱、礎板等の遺存状況が良好といえる。各遺構は多少の時期差を有するものと考えられるが、遺構配置としては東西方向のＣラインあたりを境に北、南で様相が異なっている。北側ではピット、土壙、井戸が検出され、柵列、或は掘立柱建物（建物１）が想定される。また、Ｂ－６～７グリットでは東西方向の横板とその南北からは数枚の礎板が検出されており、何らかの建物址（建物３）を想定している。Ｃライン南側では４箇所でかわらけ集中出土地点が検出され、調査区西端では部分的ではあるがピット列（建物２）が確認されている。７ライン以東では現代客土による削平が深く、明確な遺構は確認されていないが、堆積土層の観察から第３面における若宮大路西側の南北溝はほぼ９ライン上に西側の立ち上がりを有し、底面の立ち上がりは緩やかで、覆土は土丹粒子、凝灰岩粒子等を含む暗灰色粘質土である。尚、若宮大路西側の南北溝に関しては原因者負担事業相当分に詳述する予定であり、本報では上記の概略に止どめる。

ａ．かわらけ集中出土地点（図29～36）

イコウ102（図29）は第２面から第３面への掘り下げ途中にＣ－４～５グリットから検出された。東西3.0m、南北3.2mの範囲を確認しているが、南部は現代攪乱壙、及び調査区外となり全体規模は不明である。かわらけは全てロクロ成形であり、完形品がひび割れたものの他に、破砕した小片が全体にみられる。出土状況からは正位、覆位を意識したものとは考えられず、他の遺物としては龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の口縁部：１点、鉄釘：１点、銅銭：２点が出土している。確認レベルは全体的にほぼ平らで海抜7.8m前後を測るが、北東部では浅い窪地状を呈し7.7mを測る。図示可能な出土遺物は図29に示した。尚、整理作業の手違いで図48に示した809・810・811の銅銭・鉄釘も本址からの出土である。

462は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の口縁部。釉は淡灰青色、胎土は灰色を呈し、気泡に富む。

463～468はロクロ成形のかわらけで、463は内折れタイプ、464～465は小皿、466～468は大皿である。466は灯明皿で、466・467は典型的な薄手丸深タイプである。

809・810は銅銭でいずれも北宋銭である。809は楷書の「聖宋元寳」で初鋳1011年。810は楷書の「祥符元寳」で初鋳1008年。

811は鉄釘。断面は方形を呈するものであり、両端は欠損している。

イコウ229（図30）はＣ－６グリットから検出されている。東西1.4m、南北1.3mの範囲を確認しているが、北部は現代攪乱壙となり全体規模は不明である。かわらけは手づくね成形の小皿を１点含むが、他は全てロクロ成形で、ほぼ８割が完形品である。出土個体数は大皿25点、小皿33点であり、大小不詳が４点出土している。出土状況は正位が33点、覆位が21点であり、他の８点はどちらともいえない。確認レベルは7.4m前後でほぼ平らであり、かわらけ取り上げ後は深さ５cm程の浅い窪みとなり、平面は不定形状を呈する。本址の周囲は調査区外、或は大形の現代攪乱壙が集中しており、建物址との関係については不詳である。図示可能な出土遺物は図31に示した。

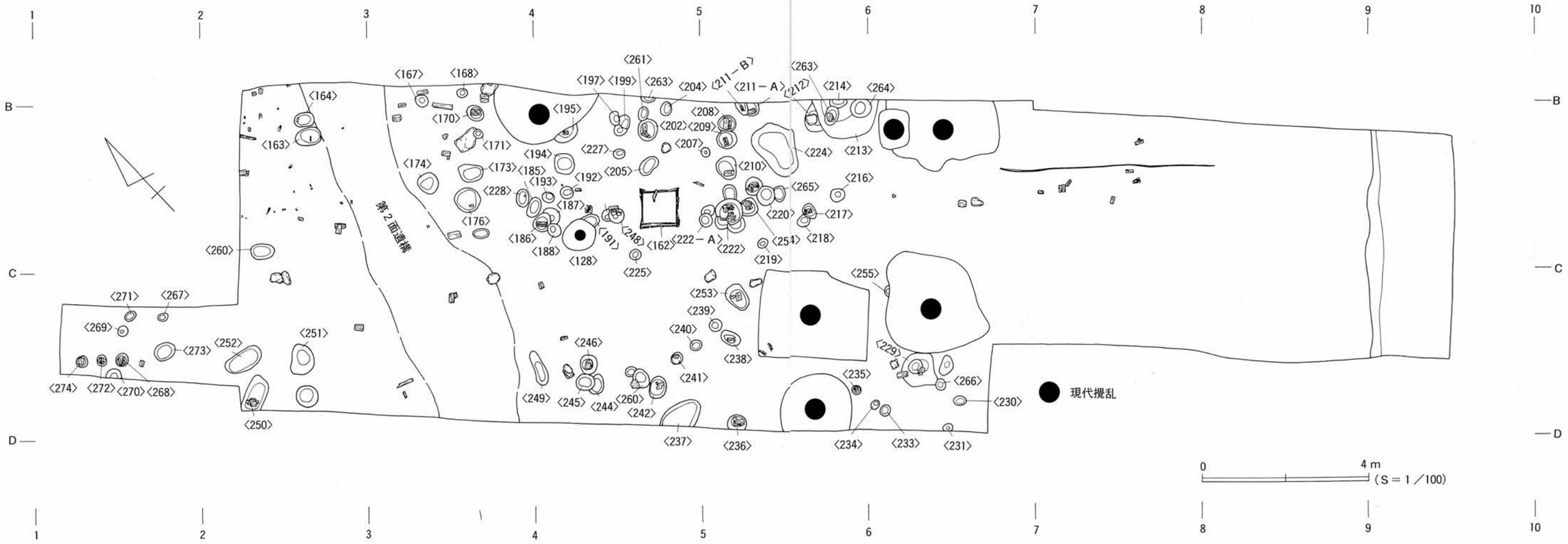


図28　第3面全体図

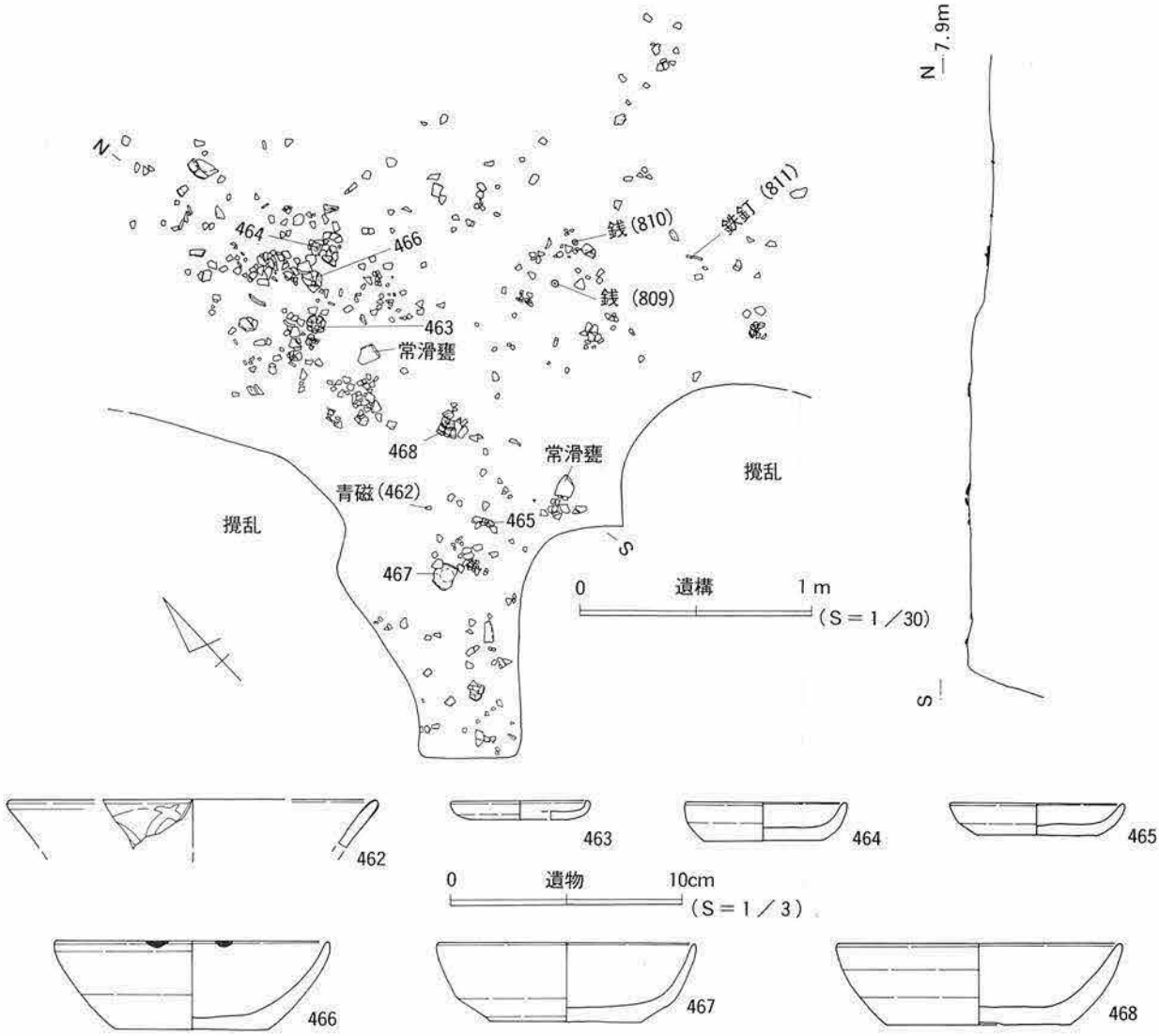


図29　第３面検出遺構（１）〈102〉

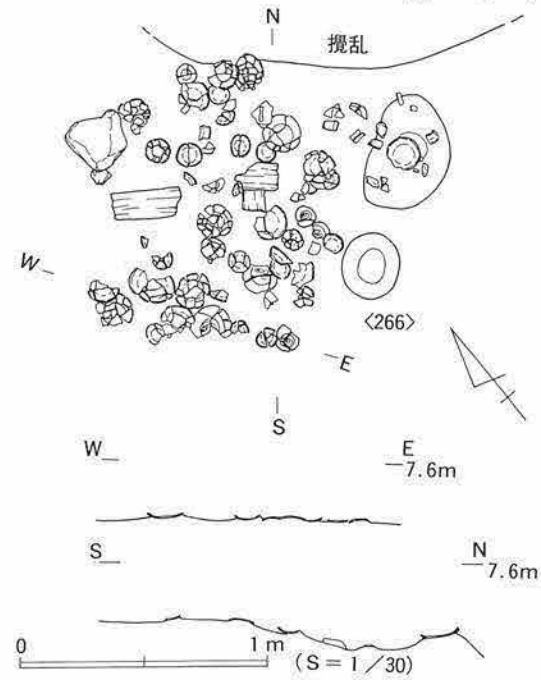


図30　第３面検出遺構（２）〈229〉

469～516はかわらけ。469～492はロクロ成形の大皿、493は手づくね成形の小皿、494～515はロクロ成形の小皿、516は内折れタイプである。470・475・476・486・492は典型的な薄手丸深タイプで、492は口径12.5cmを測る特大品である。509は灯明皿である。

517は石。平面は楕円形状で扁平であり、碁石として使われたものであろうか。

他に鳥類の上腕骨１点、魚類ではカツオの椎骨１点、タイの主上顎骨１点が出土している。

イコウ275（図32）はＣ－４グリットから検出されている。東西3.8m、南北1.8mの範囲を確認しているが、西側は第２面イコウ141により失い、南は調査区外となり全体規模は不明である。かわらけは全てロクロ成形で、ほぼ８割が完形品である。出土

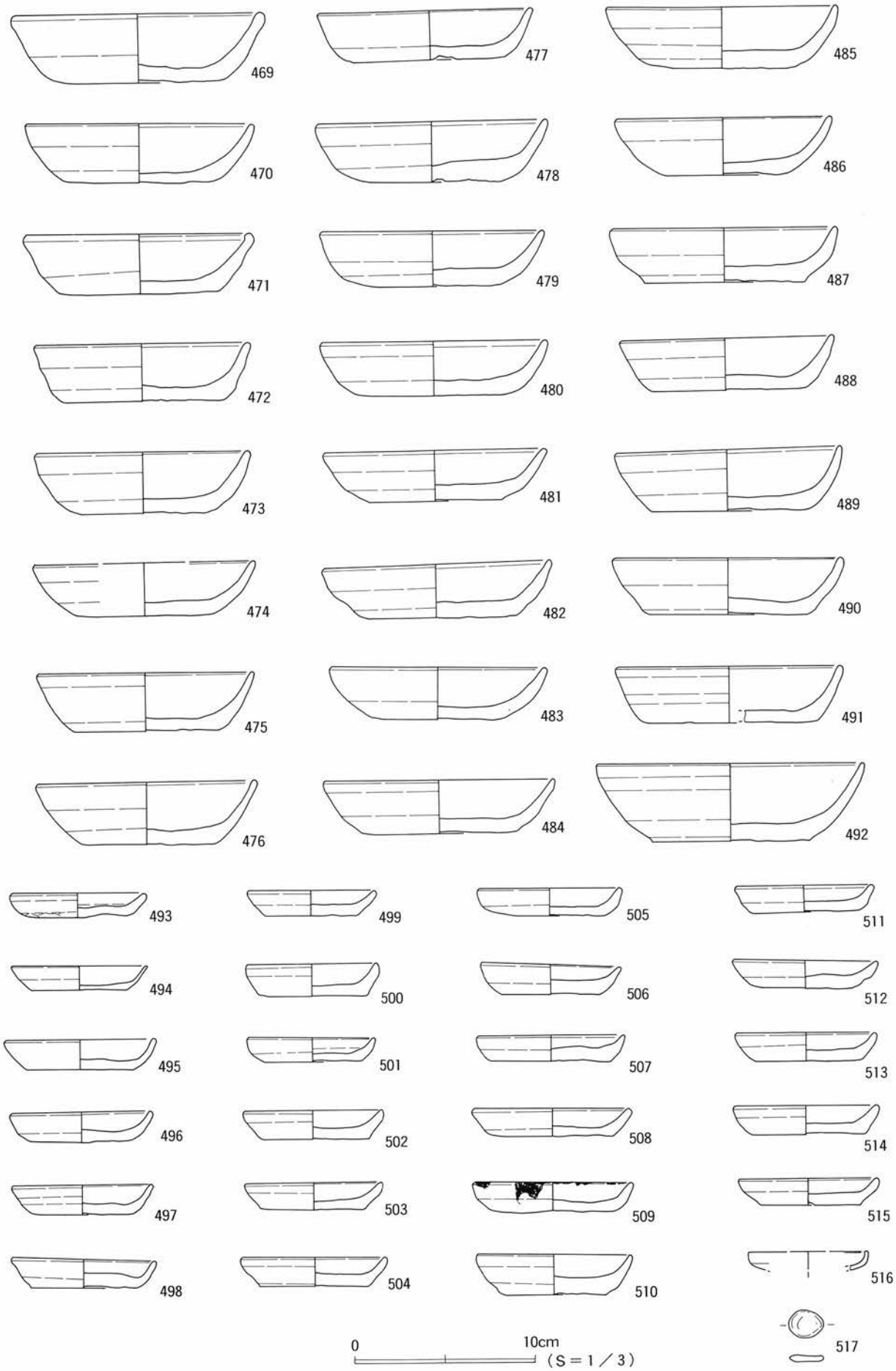


図31　第３面出土遺物（１）〈229〉

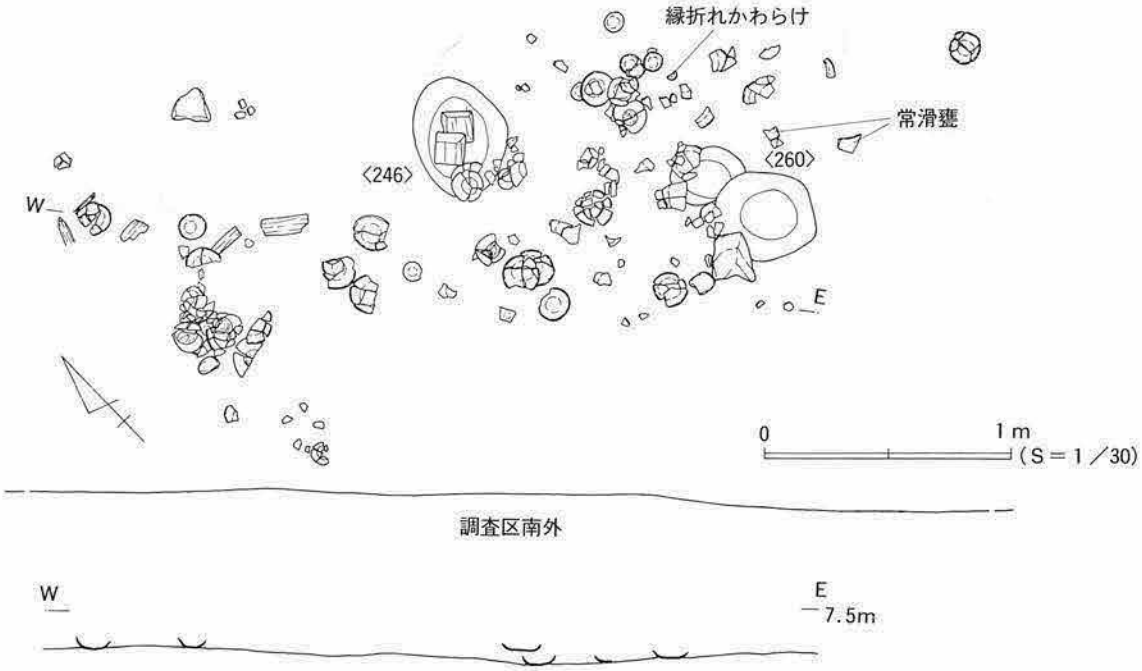


図32　第３面検出遺構（３）〈275〉

個体数は大皿40点、小皿17点であり、大小不詳が９点出土している。出土状況は正位が46点、覆位が17点であり、他の３点はどちらともいえない。確認レベルは7.3m前後でほぼ平らである。イコウ244・245・246・249・260と重複関係にあり本址の方が新しい。上記のかわらけ以外では縁折れかわらけ５点、底部穿孔かわらけ小皿１点、常滑窯甕胴部片７点、及び若干の木製品が出土している。図示可能な出土遺物は図33～34に示した。

518～566はロクロ成形のかわらけ。518～550は大皿、551～553は内折れタイプ、554～566は小皿である。518～521は中皿としたほうが妥当かもしれない。529・530・561～566を除けば他のものは薄手丸深タイプの範疇であろう。518・519・525・557は灯明皿であり、566は焼成後にあけられた２穴の穿孔を底部に有している。

567～569は木製品。567は円板状を呈するが、作りが非常に雑で、断面が歪んでいる。568は箸と考えられるが、端部の削りから篦として使用された可能性もある。569は板状を呈する杭。

イコウ276（図35）はＣ－２グリットから検出されている。東西1.8m、南北1.2mの範囲を確認しているが、南は調査区外となり全体規模は不明である。かわらけは若干の手づくね成形を含むが主体はロクロ成形であり、ほぼ５割が完形品である。出土個体数は大皿16点、小皿27であり、大小不詳が９点出土している。出土状況は正位が19点、覆位が12点であり、他の12点はどちらともいえない。確認レベルは7.3～7.4mで東側がやや低い。イコウ250・251・252と重複関係にあり本址の方が新しい。上記のかわらけ以外では縁折れかわらけ６点、白磁口兀皿口縁部片１点、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗体部片１点、常滑窯甕胴部片２点、及び若干の木製品が出土している。図示可能な出土遺物は図36・37に示した。

570～602はかわらけ。570は手づくね成形の大皿、571はロクロ成形の中皿、572～584はロクロ成形の大皿、585～598はロクロ成形の小皿、599～602は内折れタイプである。典型的な薄手丸深タイプは571～577であろう。602は内折れタイプとしては大形品と考えられる。578・579・593は灯明皿である。

603は中国製の白磁口兀皿。釉は淡青灰色、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。

604～619は木製品。604は黒色漆塗りの椀である。内・外面には赤色漆による撫子文をスタンプにより配し、外底には輪高台を有する。605・606は草履の芯材。607は折敷。608は円板状を呈し、片面は窪

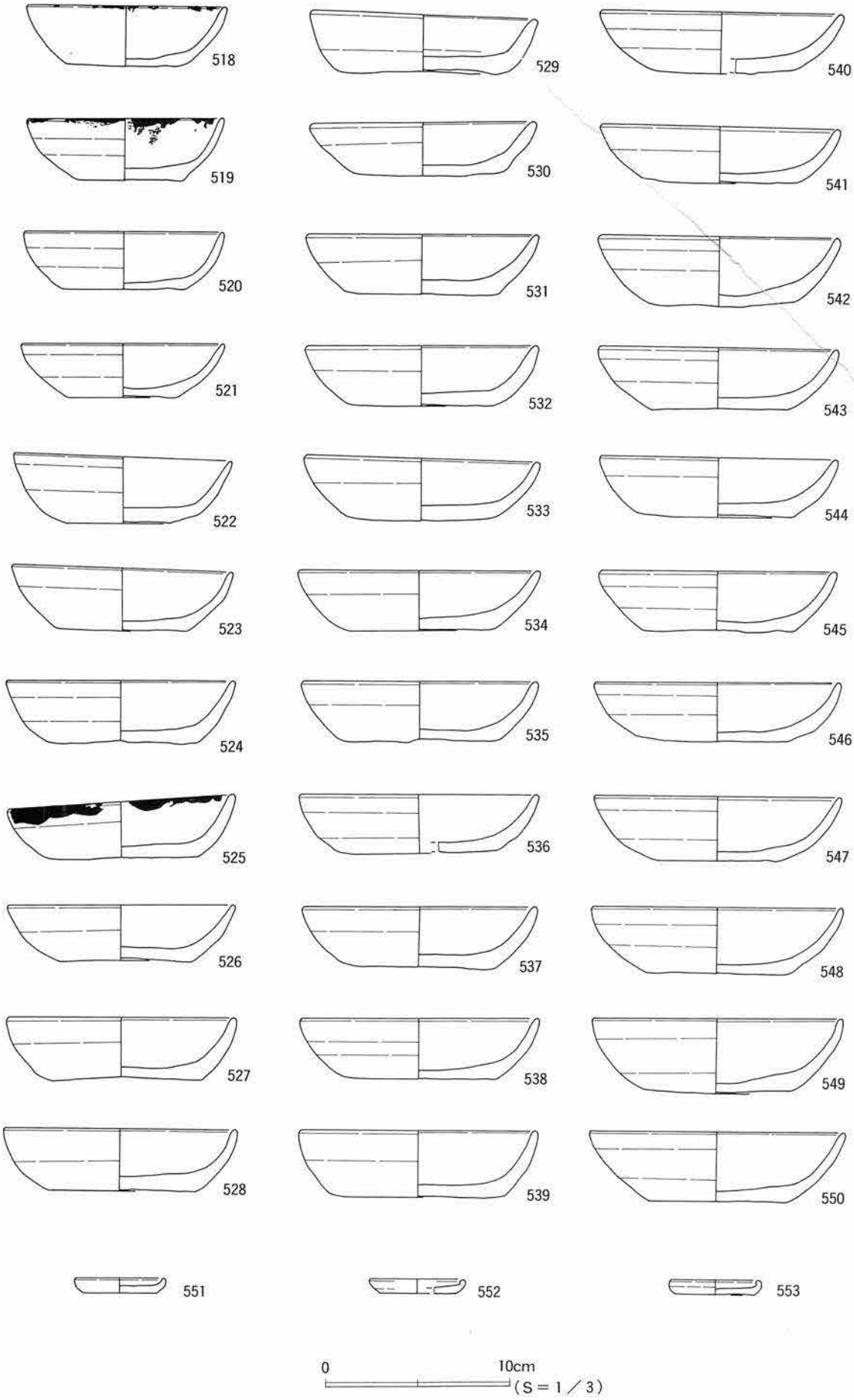


図33　第３面出土遺物（２）〈275〉

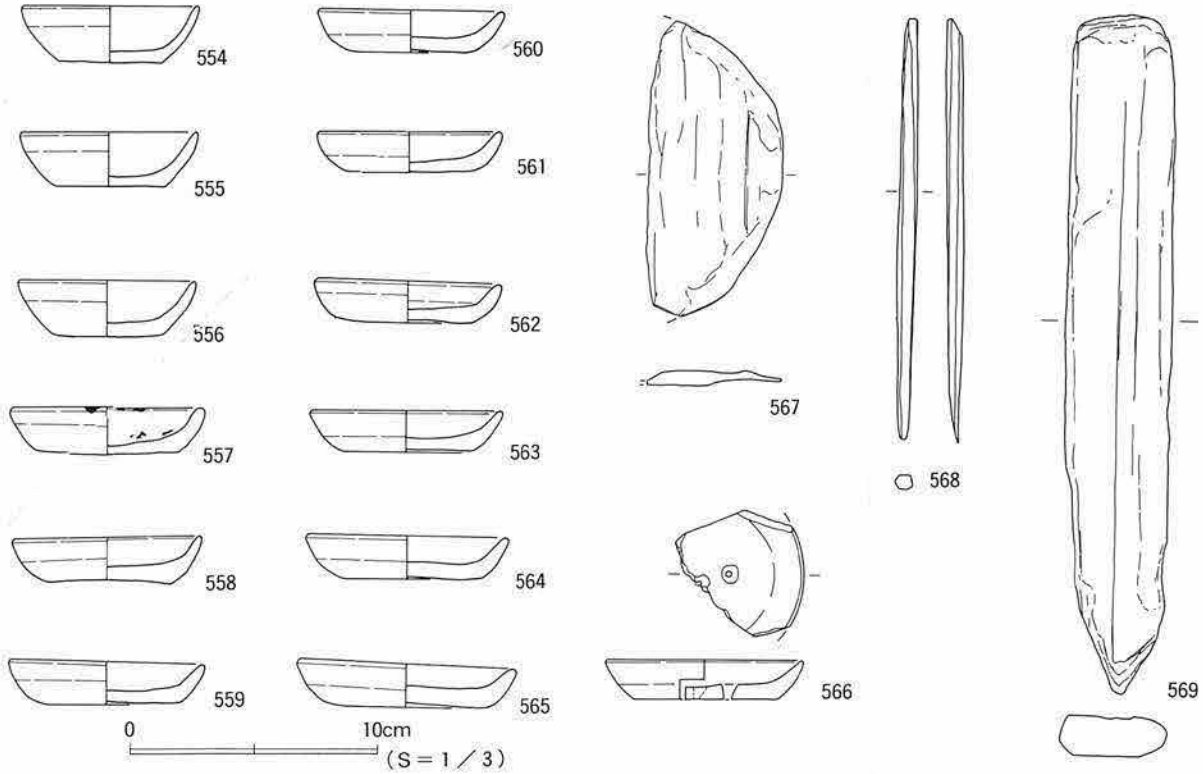


図34　第３面出土遺物（３）〈275〉

められ、直径上に２穴一対の穿孔を有する。孔の直径は４～６mmを測る。609・610は円板であり、中央に穿孔を有する。孔の直径は609が４mm前後、610が９mmを測る。611～613は箸。614～617は篦状を呈するもの。618は断面楕円形状を呈する棒状の製品で、菜箸であろうか。619は格子材の可能性を有する角材であり、断面は正方形を呈する。

他に貝類ではダンベイキサゴ１点、魚類ではタイの歯骨１点が出土している。

b．井戸（図38・39）

Ｂ－４グリットから検出されたイコウ162であり、所謂「方形横桟支柱型」と呼ばれる木組みを有する井戸である。確認レベルは海抜7.4m、底面レベルは5.5m、南北の軸方位はＮ－45°－Ｅを測る。支柱は５cm角程の角材を使用し、長さ55cm前後を測る。横桟は幅９cm前後、厚さ６～９cm、長さ92～94cmを測り、両端部は相互に組み合わせる「相欠き継ぎ」である。支柱、横桟ともに転用材を使用し、横桟の端部では高さを調節するために上面を削っているものもみられる。側板には幅16～30cm、厚さ１～２cmの縦板を使用し、最も長く遺存するものは192cmを測る。縦板外側の継ぎ目には幅９cm、厚さ５mm程の縦板をあてている。掘り方の平面は1.2m前後の隅丸方形を呈し、最下段の横桟下面から井戸底にかけては青灰色砂を詰めている。後述する建物１と重複関係にあり、本址の方が新しい。覆土は土丹塊、土丹粒を含む褐色粘質土であり、最上層からはウシの下顎骨が検出されている。図示可能な出土遺物は全て覆土中層～下層から出土しており、図39に示した。

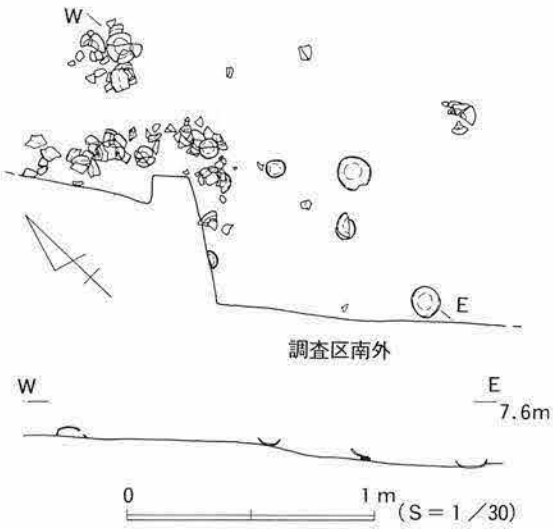


図35　第３面検出遺構（４）〈276〉

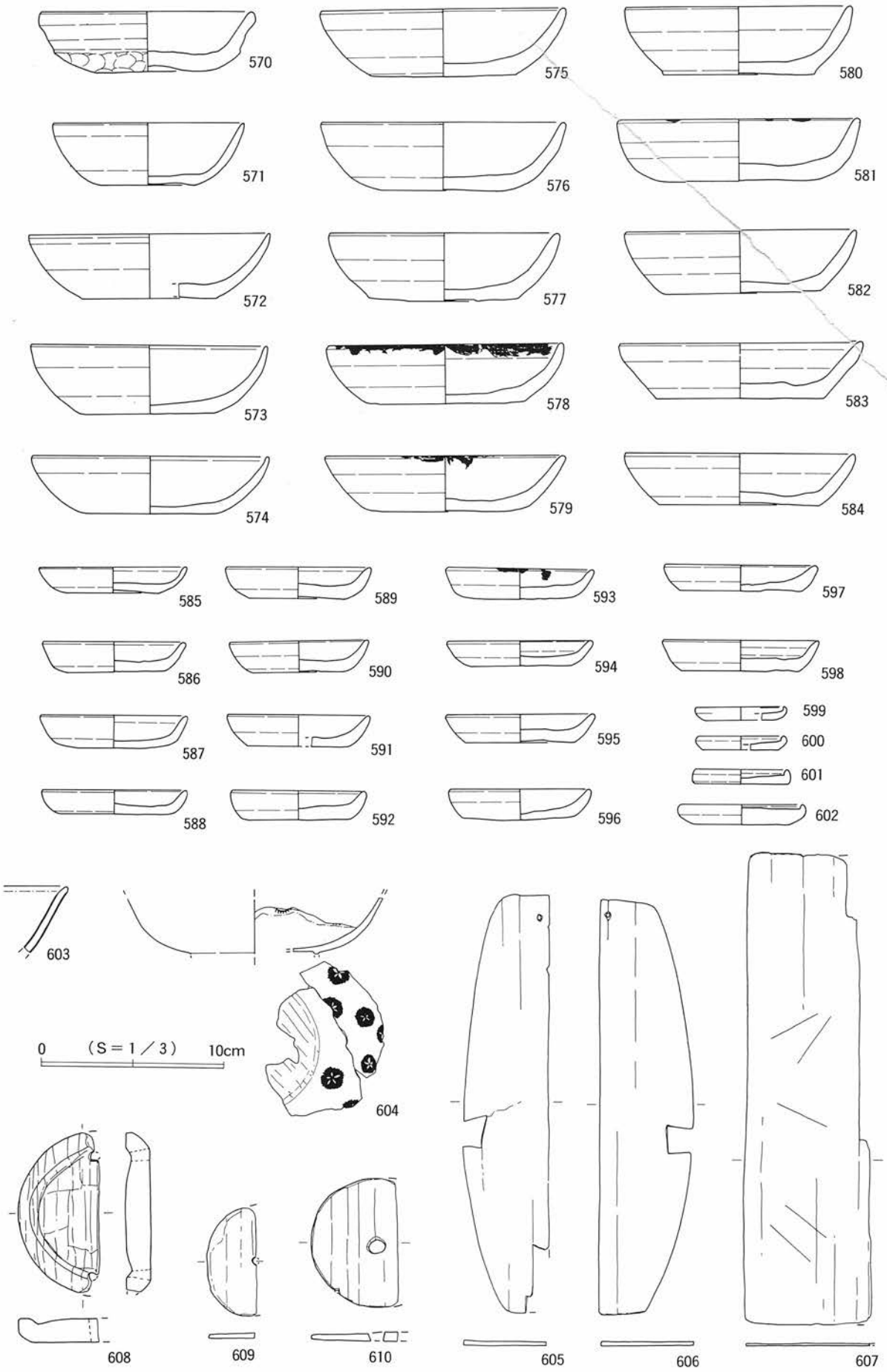


図36　第３面出土遺物（４）〈276〉

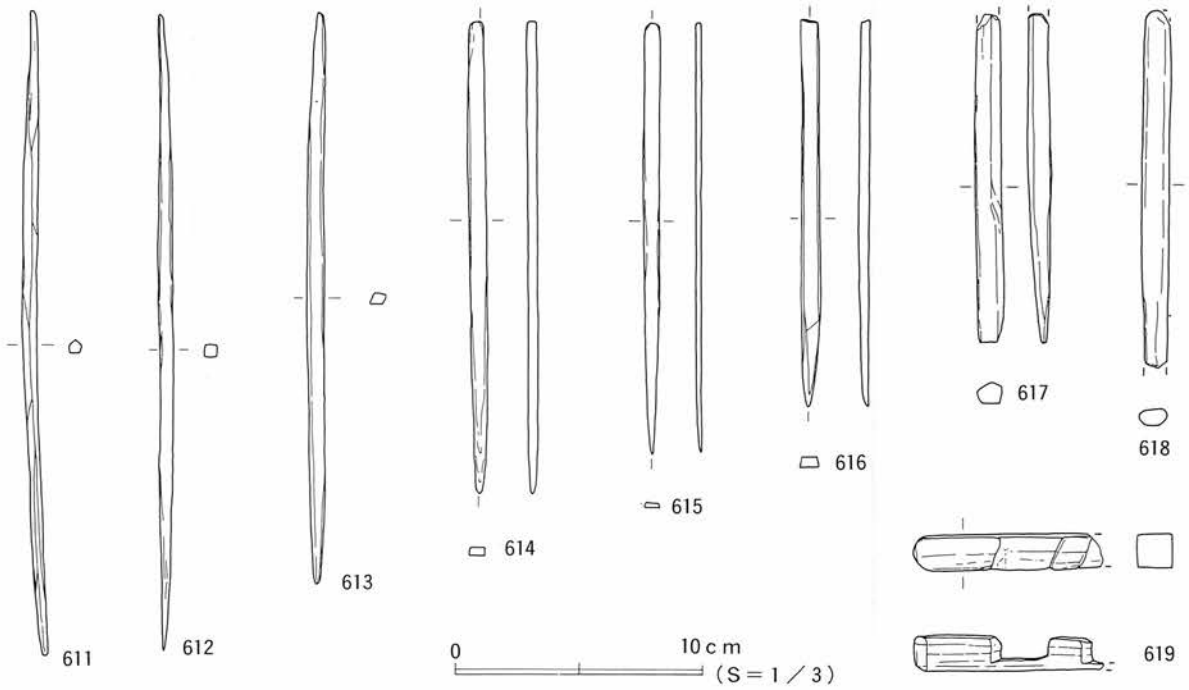


図37　第３面出土遺物（５）〈276〉

620は瀬戸窯の灰釉柄付片口。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。

621はロクロ成形のかわらけ小皿。外底には回転糸切り痕を有する。

622は瓦質の火鉢で鍔を有するタイプである。鍔部上面・側面、及び鍔部下の体部外面には巴文・菊花文等がスタンプにより連続施文され、口縁部内面は丁寧に磨かれている。鍔部には２穴一対の穿孔を有するが、貫通はしない。器表は黒灰色、胎土は灰色を呈し、白色粒子・砂粒等を多量に含む。

623～632は木製品。623・624は黒色漆塗りの皿で、623は高台をもたず、内面には赤色漆が塗られている。624は浅い高台部を削りだし、内面に赤色漆による手描きの文様を有するが、詳細は不明である。625は曲物で、側板と底板との接合に木釘は使用していない。626・627は円板で、626は625の底面に貼り付いた状況で出土している。周縁部を斜めに削り、４箇所に刻みを有しており、625の蓋として使われたものであろう。628は串、629は篦であろう。630・631は箸、632は草履の芯材である。

他に貝類ではハマグリ１点、サザエ１点、アワビ１点、アカニシ１点、ウチムラサキガイ１点、鳥類ではガン・カモ類の中手骨１点、哺乳類では牛の軸椎１点、左右下顎骨１点、右大腿骨１点、肋骨２点、イヌの下顎骨１点、肋骨２点、小形のクジラ類の椎骨３点が出土し、ヒトの上腕骨１点を含む。

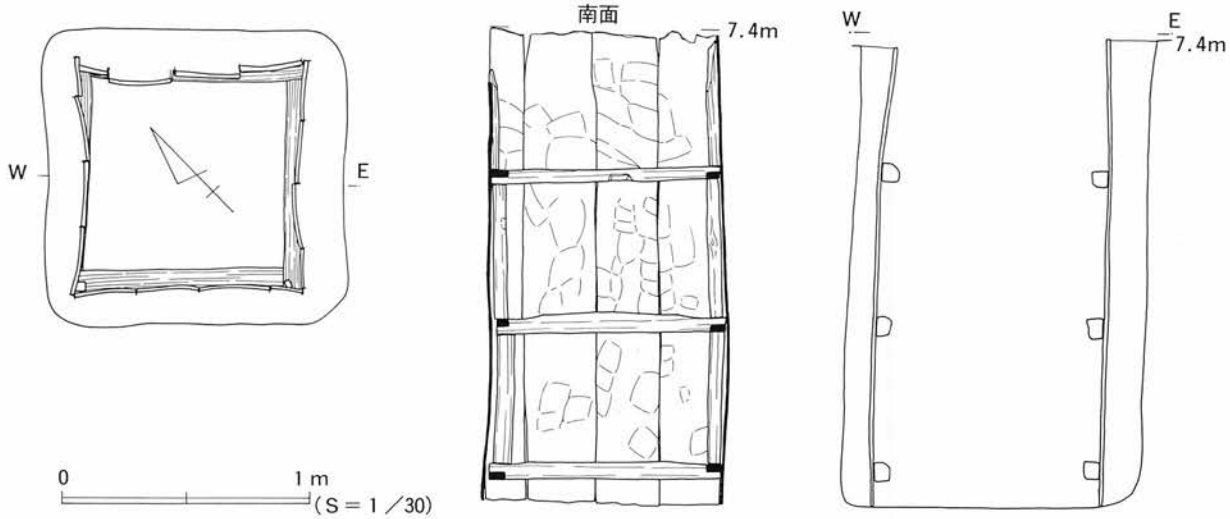


図38　第３面検出遺構（５）〈162〉

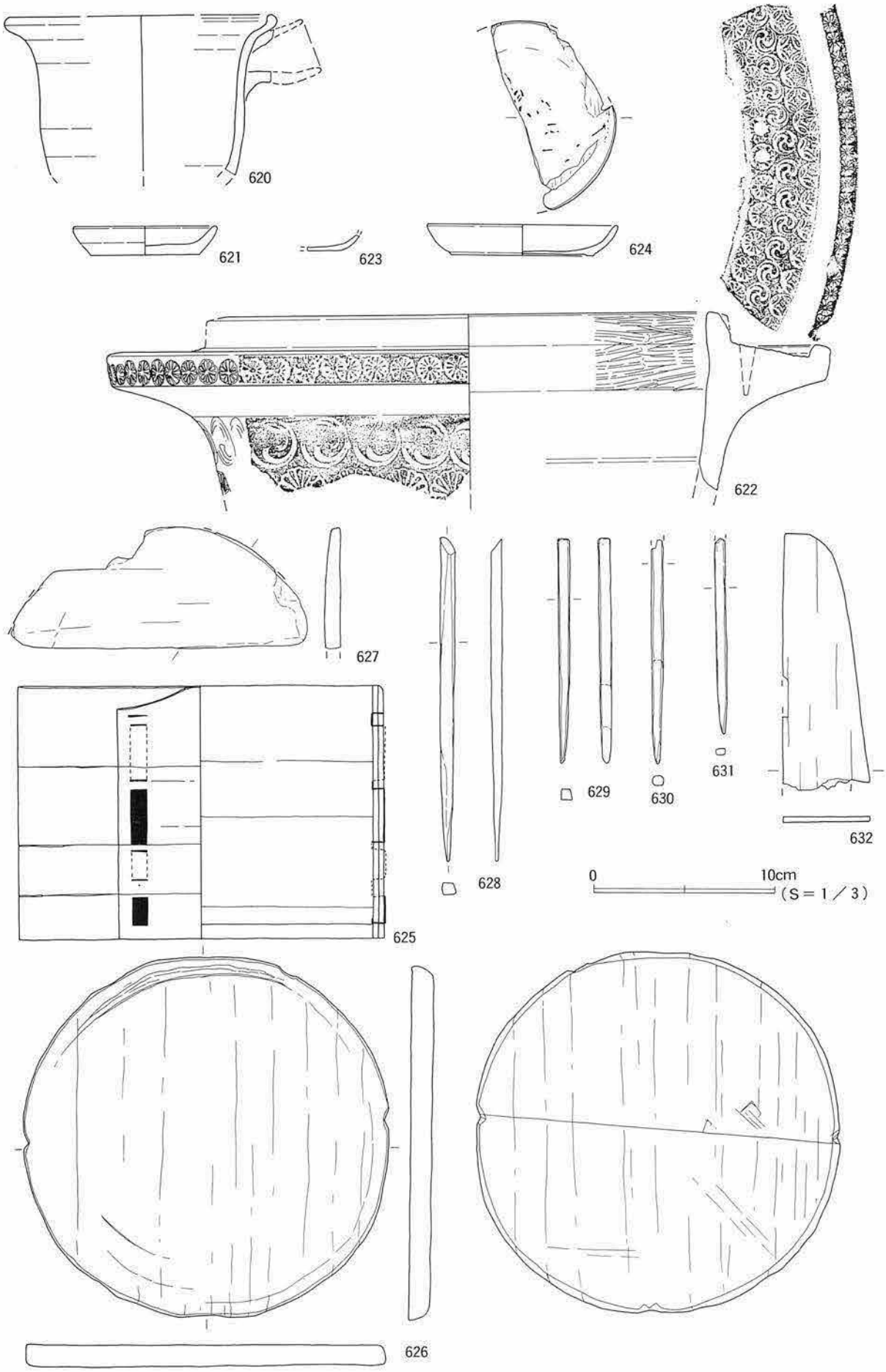


図39　第３面出土遺物（６）〈162〉

c．建物（図40～42）

建物1はA～B－4～5グリットから検出されたイコウ172・194・195・202・208・209・210・223で構成される掘立柱建物である。東西2間、南北1間を検出しているが、南辺中央部はイコウ162により失い、北側は調査区外へ続く可能性がある。柱間距離は東西が2.0m、或は4.0mを測り、南北は75cmである。ピットの平面形態は多様であり、確認面からの深さは10～20cmを測る。南北の軸方位はN－47°－Eである。本址の南側には東西方向の並びを示すピット（イコウ186・187・188・191・200・217・218・222A・222B・248・254）、柱、杭による列を検出している。イコウ141・162により部分的に削平され不明な点が多いが、掘立柱建物の南では最低2時期の建て替えが考えられ、敷地を区画する柵や塀のような構造物を推定している。図示可能な出土遺物は図42に示した。

640はイコウ210から出土した中国製の白磁口兀皿口縁部である。釉は淡青灰色、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。

647～650はイコウ222から出土している。647～649はロクロ成形のかわらけで、647は内折れタイプ、648は小皿、649は大皿であり、いずれも外底面に回転糸切り痕を有する。650は円板状を呈する木製品である。小形の曲物の底板となろうか。

681はイコウ254から出土したロクロ成形のかわらけ小皿である。外底は回転糸切り。

建物2はC－1グリットから検出された東西方向のピット列（イコウ268・272・274）である。ピットの平面は円形状を呈し、確認面からの深さは5～10cm、柱間距離は50cmである。軸方位はN－44°－Eを測る。調査区西端部に位置しているために規模等の詳細は不明である。図示できる遺物はない。

建物3はB－6～7グリットから検出された土丹地業を画する東西方向の横板である。幅10cm前後、厚さ1cm程の板を二枚並べているが、杭等で支えていた痕跡はみられない。板の長さは西のものが202cm、東のものが250cm、南北の主軸方位はN－42°－Eを測る。板北側の土丹地業は調査区外へ広がるため規模等は不明である。また、板の底面レベルまで周囲を掘り下げると数枚の礎板が検出されており、土丹地業と同時に南側に建物を構築した可能性も考えている。出土遺物はない。

d．ピット（図41・42）

イコウ193はB－4グリット検出である。平面は円形状を呈し東西30cm、南北25cm、確認面からの深さ10cm程を測り、覆土は土丹粒子を含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42－638のロクロ成形のかわらけ大皿で、薄手丸深タイプである。外底面には回転糸切り痕を有する。

イコウ198はB－4グリットから検出されている。平面は円形状を呈し東西25cm、南北30cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は炭粒を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42－639のロクロ成形のかわらけ小皿である。外底面には回転糸切り痕を有する。

イコウ199はB－4グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し東西40cm、南北30cm、確認面からの深さ5cmを測り、覆土は土丹粒子を多量に含む褐色粘質土である。イコウ198と重複するが新旧は明確にし得なかった。図示可能な出土遺物はない。

イコウ211はB－5グリットから検出されている。2口が重複しており東を211A、西を211Bと呼称している。北半部は調査区外であり詳細は不明であるが、確認面からの深さは前者が5cm、後者が10cmを測り、覆土はともに褐色粘質土であり、211Aが新しい。図示可能な出土遺物は図42に示した。

641・642はロクロ成形のかわらけ小皿で、外底に回転糸切り痕を有する。641は灯明皿である。

イコウ220はB－5グリットから検出されている。平面は隅丸方形状を呈し東西45cm、南北40cm、

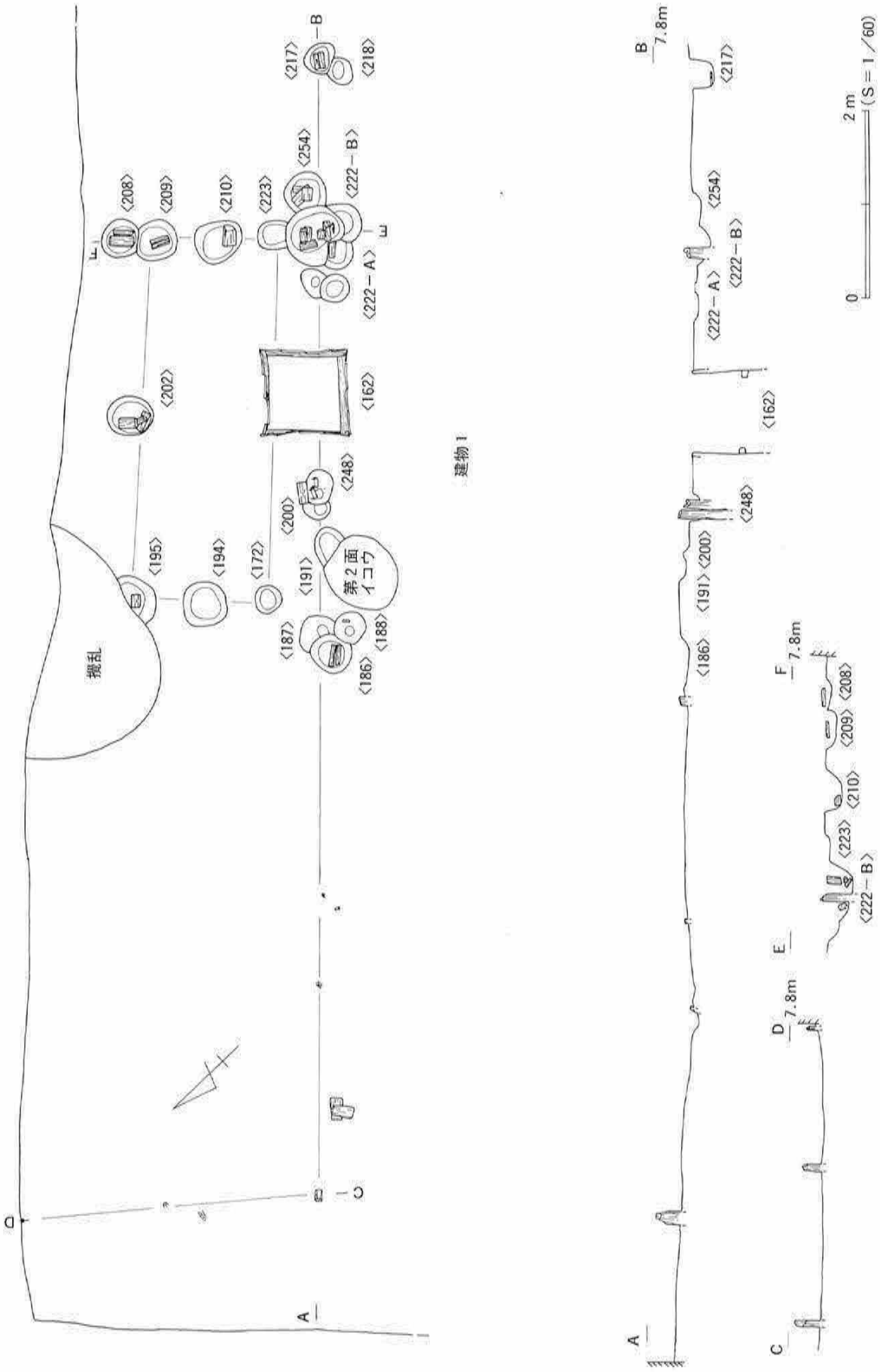


図40　第3面検出遺構（6）〈222〉etc.

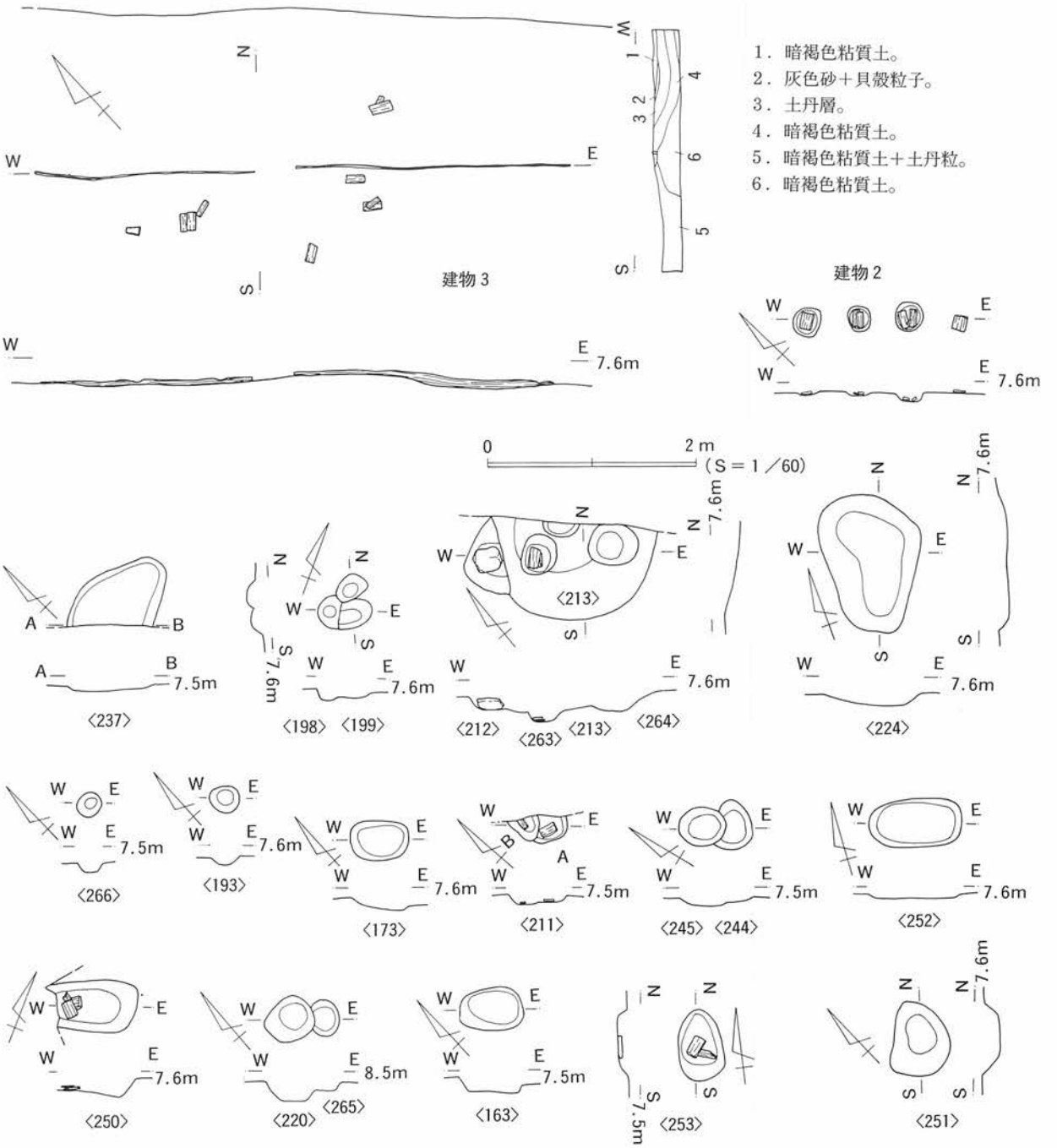


図41　第3面検出遺構（7）〈213〉etc.

確認面からの深さ20cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。イコウ265と重複し、本址の方が新しい。図示可能な出土遺物は図42に示した。

644はロクロ成形のかわらけ小皿であり、外底面には回転糸切り痕を有する。

645・646は木製品である。645は黒色漆塗りの皿で、内底面には赤色漆で植物文が描かれている。高台はない。646は陽物、或は人形等の形代の類であろうか。

イコウ244はC－4グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し東西40cm、南北50cm、確認面からの深さ5cmを測り、覆土は炭粒を多量に含む暗褐色粘質土である。イコウ245と重複し、本址の方が古い。図示可能な出土遺物は図42－656のロクロ成形のかわらけ小皿である。

イコウ245はC－4グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し東西45cm、南北35cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は土丹粒子を多量に含む暗褐色粘質土である。イコウ244と重複し、

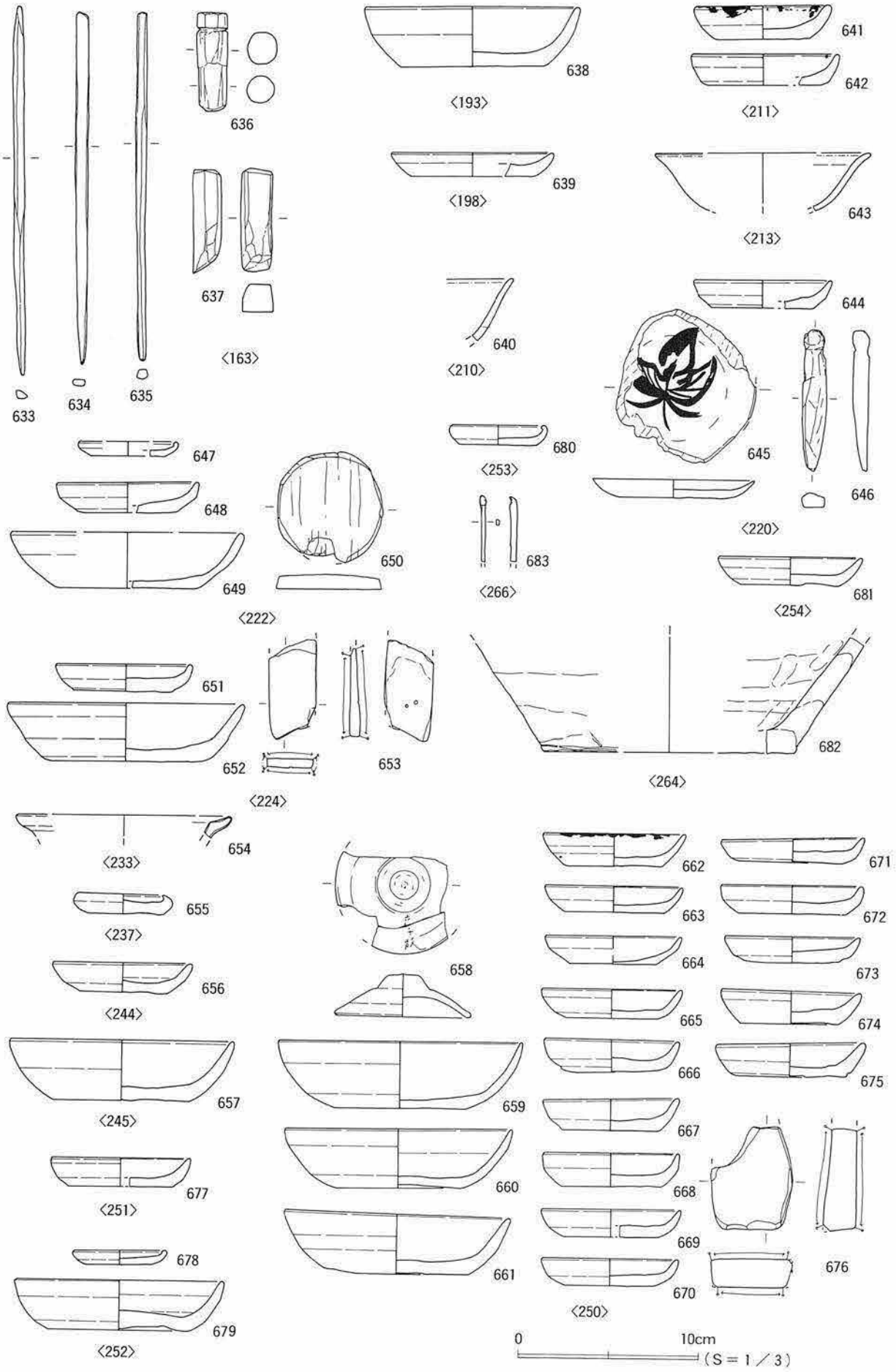


図42　第３面出土遺物（７）遺構出土遺物

本址の方が新しい。図示可能な出土遺物は図42－657のロクロ成形のかわらけ小皿である。

イコウ263はＢ－５グリットから検出されている。平面は隅丸方形状状を呈し東西30cm、南北40cm、確認面からの深さ20cmを測り、覆土は土丹粒子を含む暗褐色粘質土である。イコウ213と重複し、本址の方が古い。図示可能な出土遺物はない。

イコウ264はＢ－６グリットから検出されている。平面は隅丸方形状状を呈し東西45cm、南北40cm、確認面からの深さ20cmを測り、覆土は黒褐色粘質土である。イコウ213と重複し、本址の方が古い。図示可能な出土遺物は図42－682の常滑窯甕の底部である。器表は灰褐色、胎土は灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。外底面は砂底である。

イコウ265はＢ－５グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し東西30cm、南北35cm、確認面からの深さ５cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。イコウ220と重複し、本址の方が古い。図示可能な出土遺物はない。

イコウ266はＣ－６グリット検出である。平面は円形状を呈し東西25cm、南北20cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。図示可能な遺物は図42－683の鉄釘で断面方形を呈す。

ｅ．土壙（図41・42）

イコウ163はＢ－２グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し東西60cm、南北40cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42に示した。

633～637は木製品である。633～635は箸。636は栓。637は用途不明の角材で端部の一方を斜めに、他方を直線的に加工している。

イコウ173はＢ－３グリット検出である。平面は楕円形状を呈し東西55cm、南北40cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は土丹粒子を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ212はＢ－５グリットから検出されている。イコウ213により大半を失っているため詳細は不明である。確認面からの深さは10cmを測り、底面には土丹が据えられている。覆土は土丹粒子を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

イコウ213はＢ－５～６グリットから検出されている。イコウ212・214・263・264と重複関係にあり本址が新しい。北部は調査区外となるため全体規模は不詳だが、東西160cm、確認面からの深さは30cmを測る。覆土は土丹粒子を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42に示した。

643は中国製の白磁口兀皿口縁部である。釉は淡灰白色、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。

イコウ224はＢ－５グリット検出である。平面は不定形で東西100cm、南北130cm、確認面からの深さ10cmを測り、覆土は炭粒を多量に含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42に示した。

651・652はロクロ成形のかわらけで、651が大皿、652が小皿である。

653は砥石で仕上砥である。鳴滝産の石材を使用している。

イコウ237はＣ－４グリットから検出されている。南部は調査区外となるため全体規模は不詳だが、平面は不定形で南北80cm、確認面からの深さ５cmを測り、覆土は炭粒を多く含む黄褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42－655のロクロ成形内折れかわらけである。

イコウ250はイコウ276のほぼ真下、Ｃ－２グリットから検出されている。西部は調査区外となるため全体規模は不詳だが、平面は長方形状で東西90cm以上、南北50cm、確認面からの深さは20cmを測る。覆土は土丹を含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42に示した。

658は白かわらけ質の蓋。外面には「□□散」と墨書される。薬壺の蓋であろうか。

659～675はロクロ成形のかわらけで、外底面に回転糸切り痕を有する。659～661が大皿、662～675が小皿で、大皿は典型的な薄手丸深タイプといえる。662は灯明皿である。

676は砥石である。中砥で伊予産の石材を使用している。

イコウ251はC－2グリットから検出されている。平面は不定形で東西55cm、南北70cm、確認面からの深さ15cmを測る。覆土は土丹粒子、炭粒を含む黒褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42－677のロクロ成形のかわらけ小皿である。

イコウ252はC－2グリットから検出されている。平面は長方形状を呈し、東西90cm、南北45cm、確認面からの深さは5cmを測る。覆土は炭粒を多く含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42－678・679のロクロ成形のかわらけで、678は内折れタイプ、679は大皿である。

イコウ253はC－5グリットから検出されている。平面は楕円形状を呈し、東西45cm、南北70cm、確認面からの深さ10cmを測る。覆土は土丹粒子を多く含む暗褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図42－680のロクロ成形の内折れかわらけである。

f．第3面出土遺物（図43～51）

第2面から第3面の遺構確認までの掘り下げ時に出土した遺物をここに集めた。

684～716は貿易陶磁で、684～704は青磁、705～711は白磁、712～716は青白磁である。684・685は同安窯系の櫛描文碗で、684は口縁部、685は底部である。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。686～704は龍泉窯系で、釉は灰緑色～青緑色、胎土は灰色を呈する。686～688は劃花文碗で、686・687は口縁部、688は底部である。689～696は鎬蓮弁文碗の口縁部。697は無文の碗で、高台畳付～高台内は無釉である。698～704は鉢で折縁の口縁部を有する。698・700・は口縁部、699・701～704は底部で高台畳付は無釉である。699・703・704の体部外面には鎬蓮弁文を有し、701の内底面には紅白の双魚文を有する。705～709は白磁口兀皿で、705～707が口縁部、708・709が底部である。釉・胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。710・711は白磁端反碗の口縁部で釉・胎土は白色～灰白色を呈し、黒色粒子を含む。712は青白磁の口兀皿で釉は淡灰青色、胎土は白色を呈し、黒色粒子を含む。713～716は青白磁梅瓶で、713・714が口縁部、715・716が底部である。釉は淡灰青色、胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。高台畳付～高台内は無釉である。

717～721は瀬戸窯の製品であり、胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。717は灰釉四耳壺の口縁部。718は灰釉水注の口縁部。719は灰釉瓶子の口縁部。720は鉄釉片口小鉢で外底に回転糸切り痕を有し、胎土は淡橙色を帯びる。721は灰釉卸皿の底部で、外底に回転糸切り痕を有する。

722は渥美窯の甕口縁部。器表は暗灰色、胎土は灰色を呈し、白色粒子・砂粒を含む。

723～785は常滑窯の製品。723～726は片口鉢II類で、器表は褐色～暗褐色、胎土は灰褐色～灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。口縁部の断面は角形を呈し、端部に沈線状の窪みを有するもので、725の窪みは深い。体部外面下半は縦位のヘラナデ、後ナデ調整で、723の体部内面下半は斜位のヘラナデである。727～753は片口鉢I類で、器表・胎土は灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。727～747は口縁部、748～753は底部である。口縁部は肥厚し、端部は丸く、沈線状の窪みを有するものもある。体部外面下位はヘラケズリされ、砂底の外底面には高台を貼り付けている。754～785は甕・壺で、器表は褐色～暗褐色、胎土は灰色～暗灰色を呈し、白色粒子・長石を含む。754～773は甕の口縁部で758・761・772は受け口状の断面を有し、他はN字状を呈する。以下、縁帯の幅を記す。754は2.9cm、755は2.4cm、756は2.6cm、757は2.5cm、758は1.7cm、759は2.7cm、760は2.4cm、761は1.3cm、762は2.4cm、763

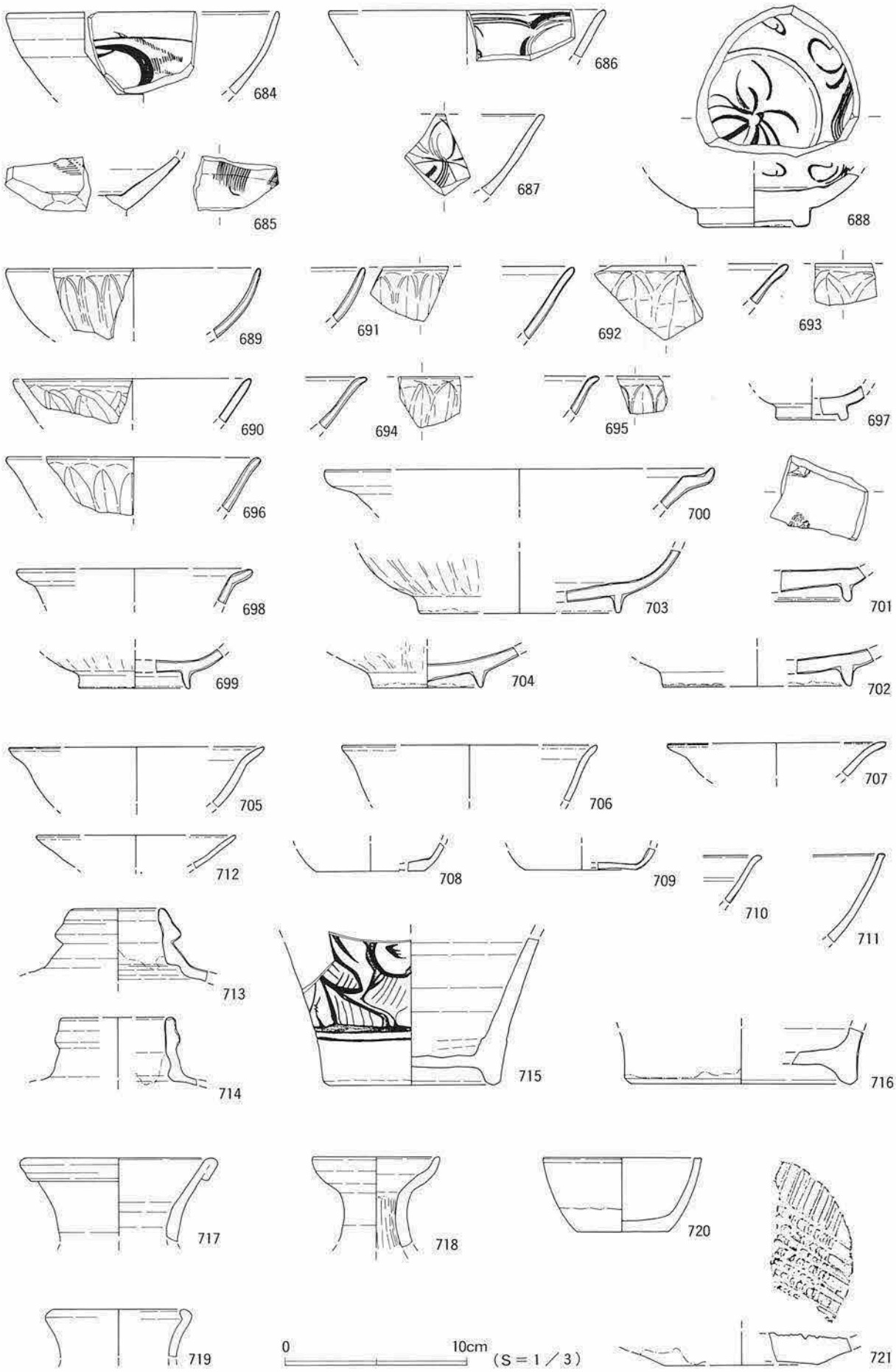


図43　第３面出土遺物（８）面出土遺物

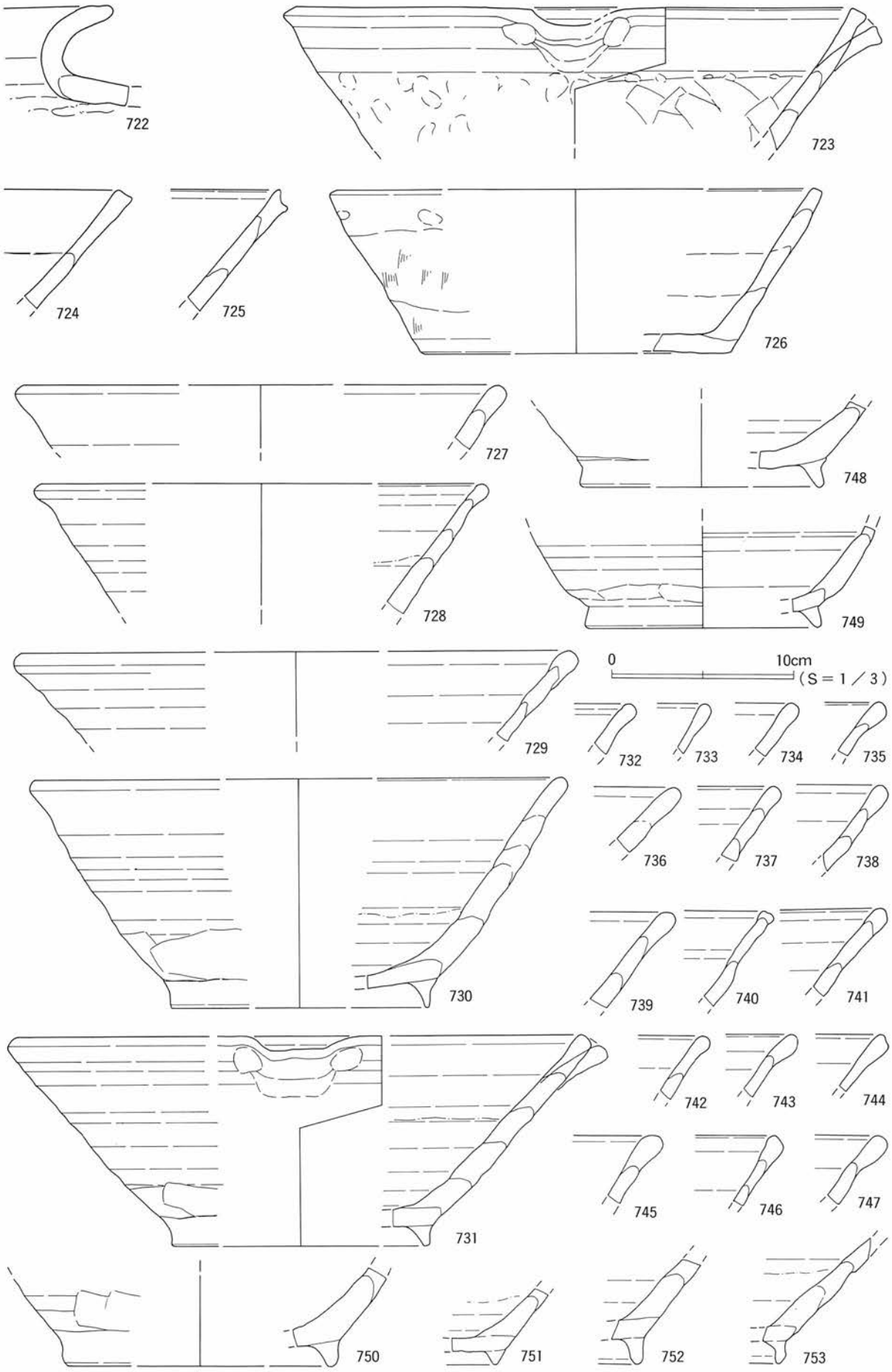


図44　第３面出土遺物（９）面出土遺物

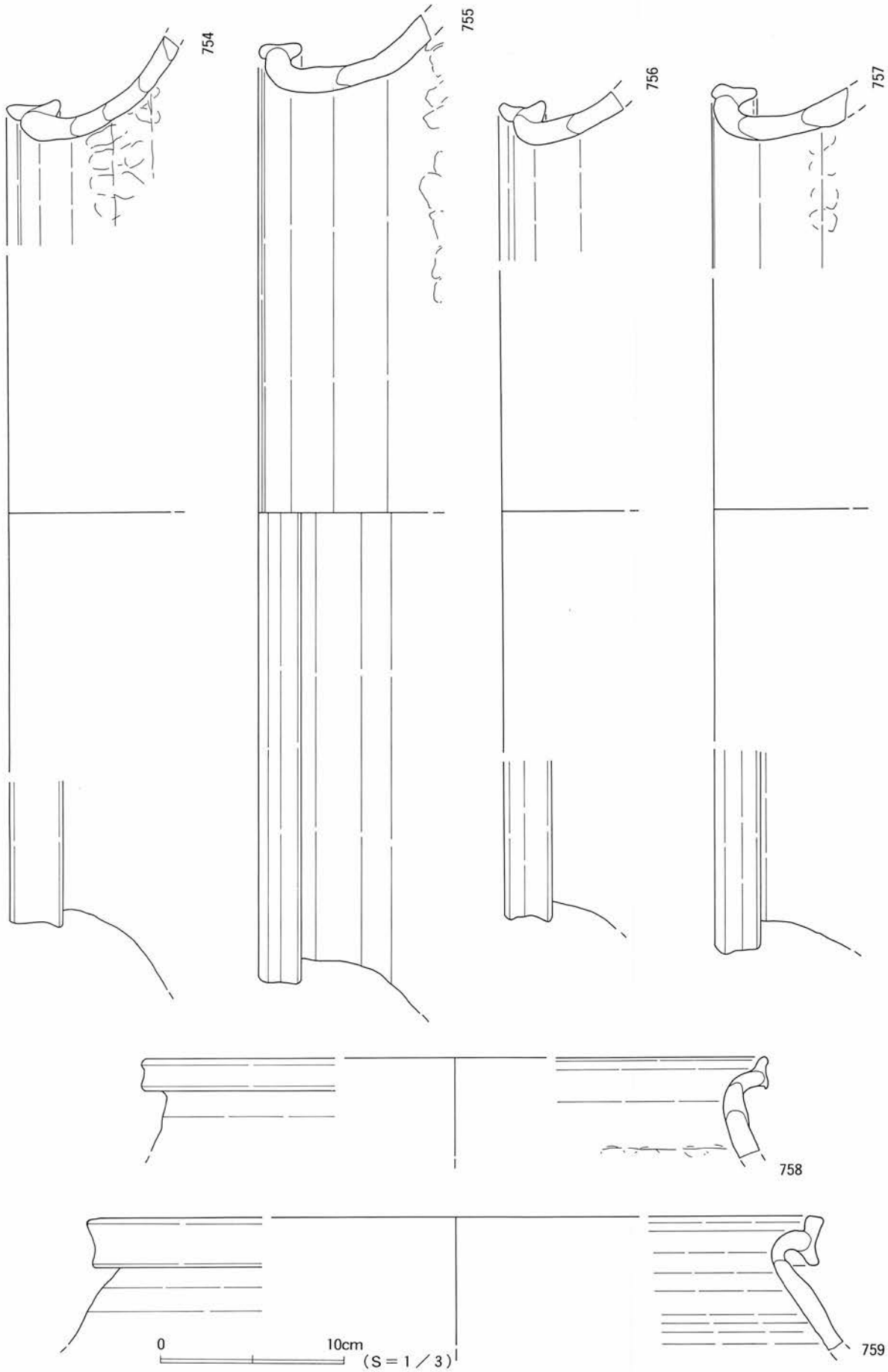


図45　第３面出土遺物（10）面出土遺物

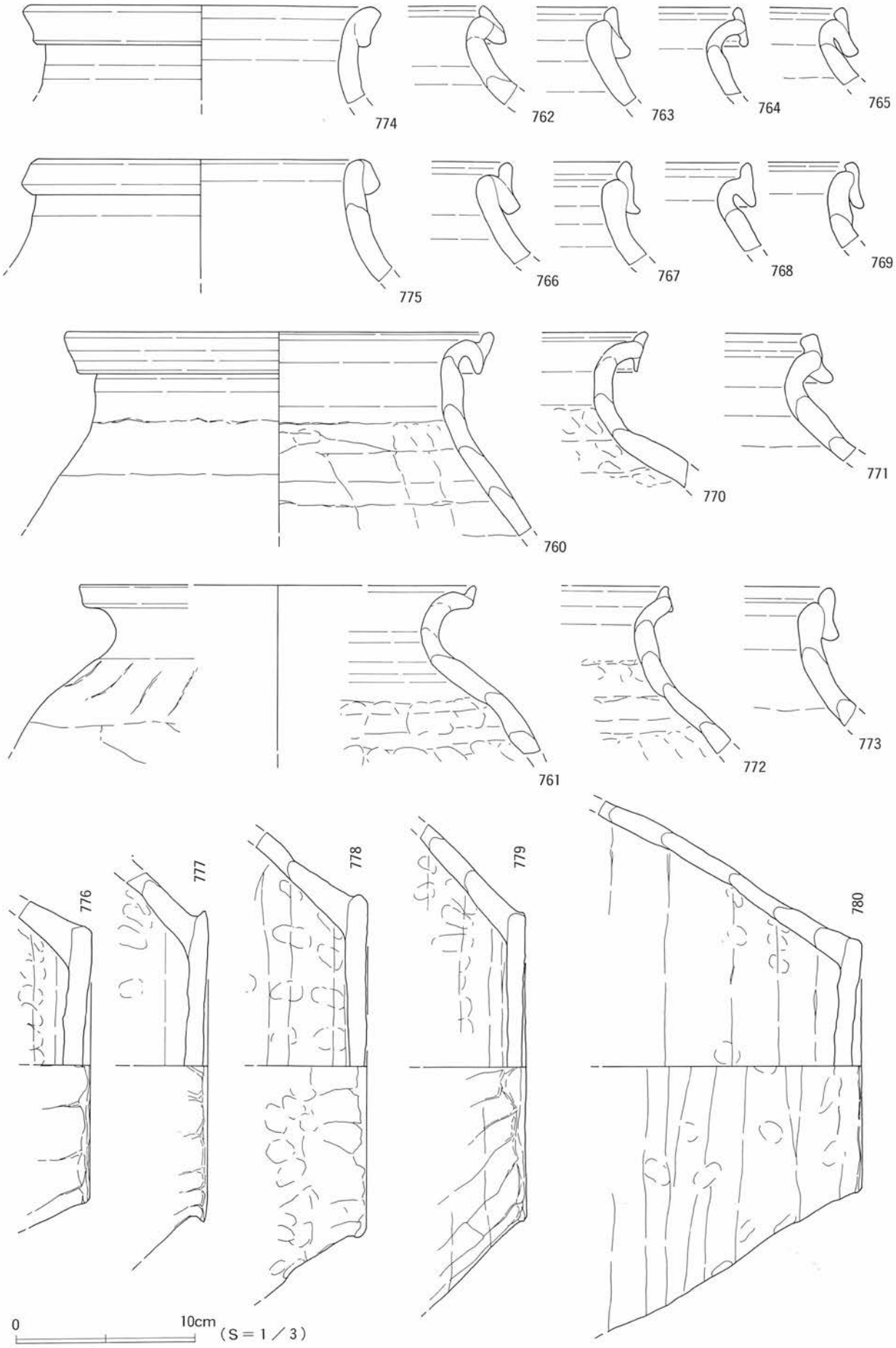


図46　第3面出土遺物（11）面出土遺物

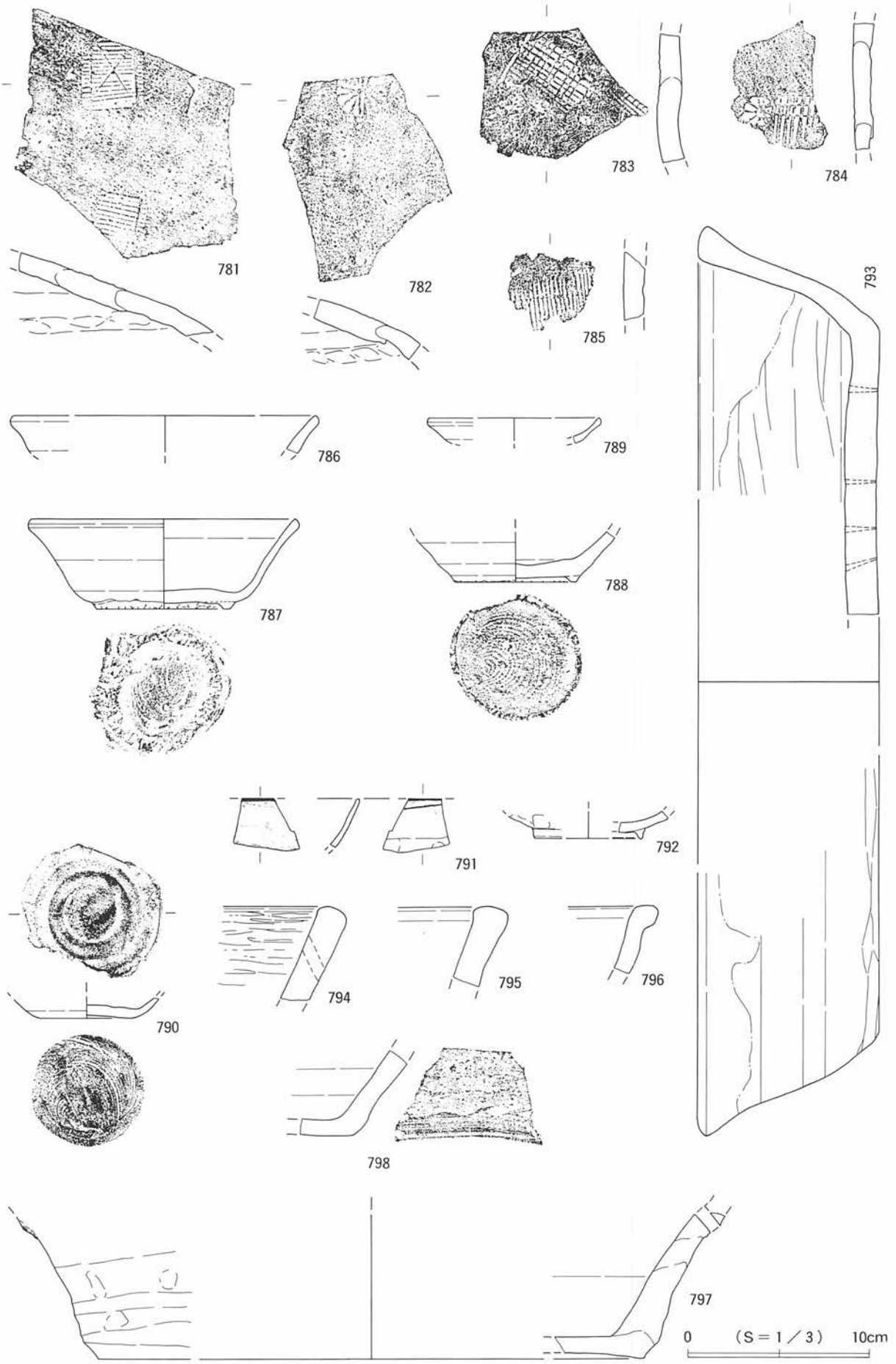


図47　第３面出土遺物（12）面出土遺物

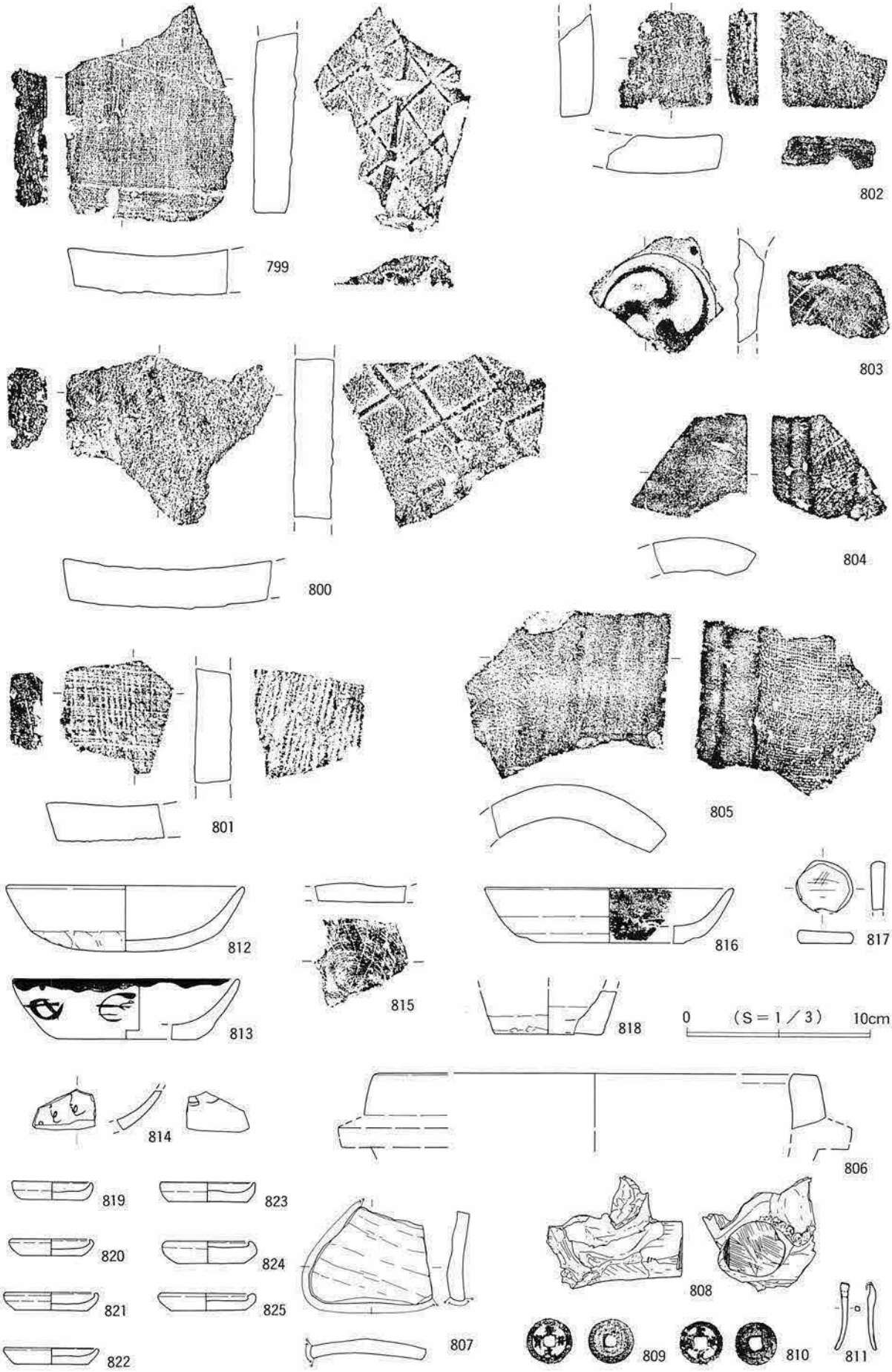


図48　第３面出土遺物（13）面出土遺物

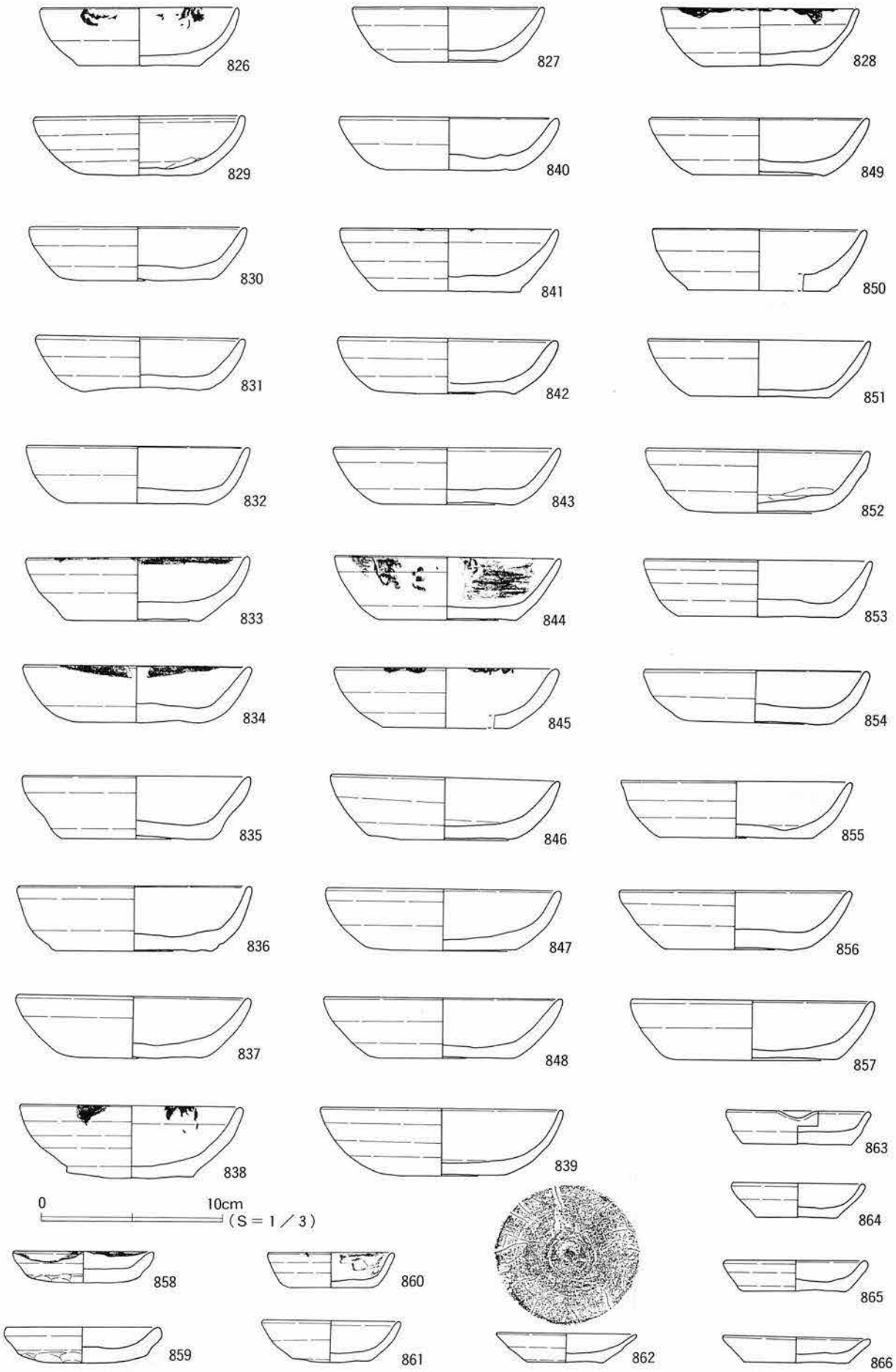


図49　第３面出土遺物（14）面出土遺物

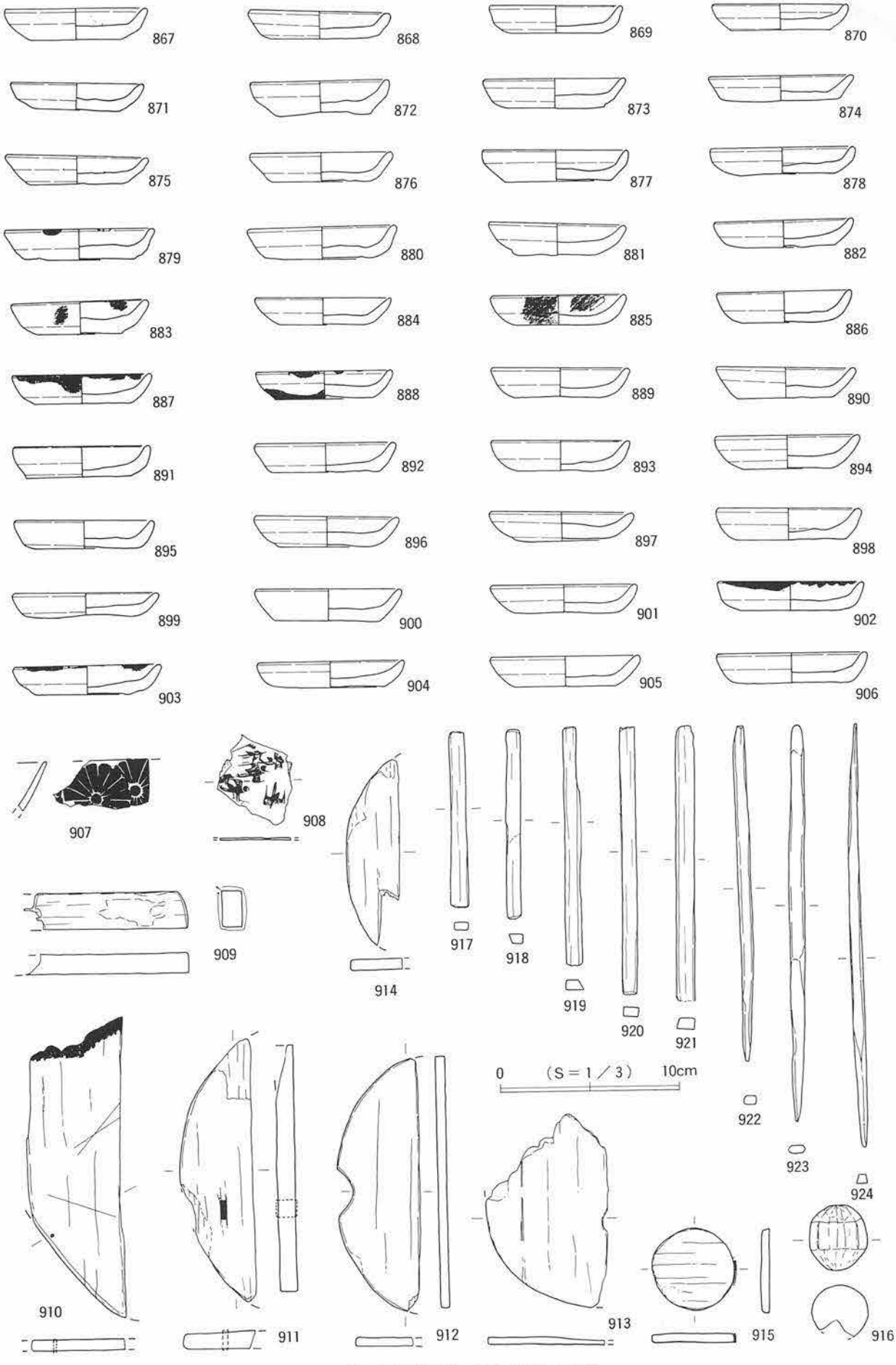


図50　第３面出土遺物（15）面出土遺物

は2.9cm、764は2.2cm、765は2.4cm、766は2.9cm、767は3.0cm、768は2.6cm、769は2.6cm、770は2.3cm、771は2.9cm、772は1.5cm、773は2.9cm。774・775は口縁部が玉縁状を呈する大形の壺口縁部。776～780は甕・壺類の底部で、外底面は砂底である。780の体部外面下位はヨコナデ調整で、他は縦位のヘラナデ、或はヘラケズリである。781～785は甕胴部の器表に押印文を有する。781は格子目＋×、782は菊花、783は格子目、784は格子目＋菊花、785は格子目である。

786～789は山茶碗・山皿である。786～788は尾張型の山茶碗で、胎土は粗く灰色を呈し長石・白色粒子を含む。回転糸切り痕を有する外底には高台を貼り付けている。789は東濃型の山皿で、胎土は精良で灰白色を呈する。

790・791は瓦器質黒縁皿。胎土は灰色～灰白色を呈し、白色粒子を含む。外底面には回転糸切り痕、及び板状圧痕を有する。

792は吉備系土師質土器、所謂、早島式土器の底部である。器表・胎土は淡灰橙色を帯びた白色を呈し、白色粒子・雲母・長石を含む。外底面には高台を貼り付けている。

793～798は火鉢。796はかわらけ質で、口縁端部は四角く外方に突出する。器表は灰橙色、胎土は灰色を呈し、雲母・砂粒等を多量に含む。793～795・797・798は土器質で、口縁端部は釘頭状を呈する。体部内・外面はナデ調整で、外底の調整は793が回転糸切り、797が砂底、798がナデである。793の底部には直径3mm程の穿孔を多数有し、797の口縁部には直径7mm程の穿孔を有する。胎土は淡橙色～灰橙色を呈し、白色粒子・長石・雲母・砂粒等を含む。

799～805は瓦。799～802が平瓦、803軒丸瓦、804・805は丸瓦である。799は凸面が格子目、凹面が布目、側面・端面がヘラケズリで、器表は灰黒色、胎土は灰色を呈し長石・砂粒を含む。800は凸面が格子目、凹面が離れ砂、側面がヘラケズリで、器表・胎土は灰黒色を呈し、長石・白色粒子を多量に含む。801は凸面が縄目、凹面が糸切り痕を有し布目、側面がヘラケズリで、器表が灰黒色、胎土が灰白色を呈し、白色粒子・雲母を含む。802は凹・凸面ともにナデで離れ砂付着、側面・端面はヘラケズリで、器表は灰黒色、胎土は灰橙色を呈し、長石・白色粒子・砂粒を含む。803は瓦当面に巴文・珠文を有し、器表は暗橙色、胎土は灰橙色を呈し、白色粒子・砂粒を含む。804は凸面がナデ、凹面が布目、側面・側縁がヘラケズリで、器表・胎土は淡灰白色を呈し、白色粒子・雲母・砂粒を含む。805は凸面がナデ、凹面が布目、側面・側縁がヘラケズリで、器表が黒灰色、胎土が灰色を呈し、白色粒子・長石・雲母・砂粒を含む。

806は滑石製石鍋の口縁部である。

807は常滑窯片口鉢Ⅰ類の体部片で、割れ口周縁に研磨痕を有している。

808はシカの頭骨部で、鹿角部を切断した痕跡を有する。

809～811はかわらけ集中出土地点のイコウ102出土であり、前述している。

812は手づくね成形の白かわらけ。胎土は粉質で淡橙白色を呈し、橙色粒子を多量に含む。

813～818は特殊な痕跡を有するかわらけである。813～816はロクロ成形の大皿で、813は口縁部に煤が付着し、体部外面に墨書を有する。814は体部片で、内・外面に墨書を有する。815は底部外面に刃物等による線刻を有する。816は体部内面にヘラ等による線刻を有する。817はかわらけの底部片の周縁を研磨して円板状にしたもの。818はかわらけ質の壺底部で、外底は回転糸切りである。

819～906はかわらけ。819～825は内折れタイプ、826～857は大皿、858～906は小皿である。858・859の2点のみが手づくね成形で他は全てロクロ成形である。826～833・838・839・849・851・860・861・864は典型的な薄手丸深タイプといえる。826・828・833・834・838・841・844・845・858・860・879・

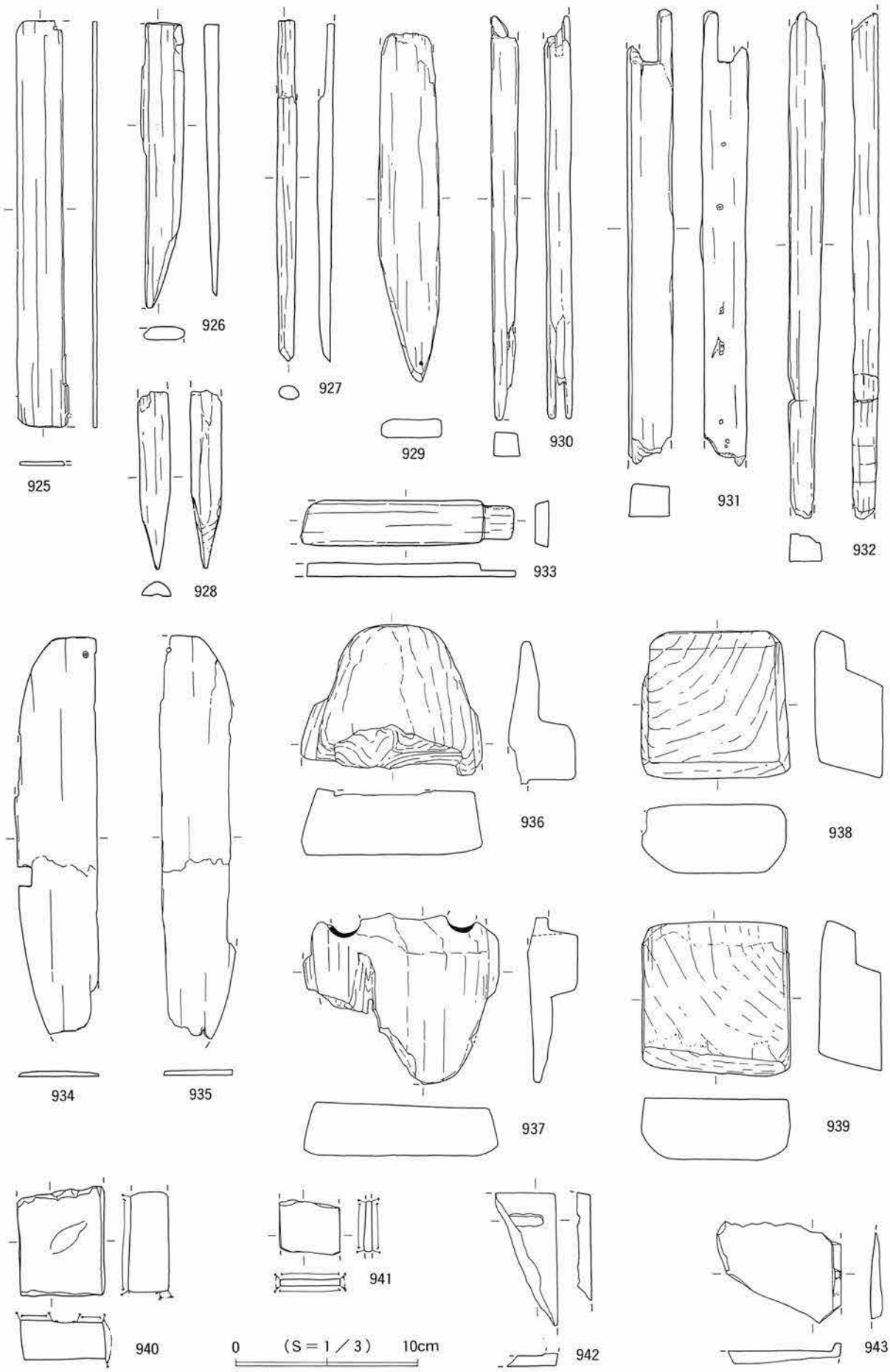


図51　第３面出土遺物（16）面出土遺物

883・885・887・888・902・903は灯明皿である。尚、862内底の見込みナデは認められない。

907～939は木製品。907は黒色漆塗りの椀口縁部で、外面に赤色漆による手描きの菊花文を有する。908は黒色漆塗りの皿底部片で、内面に赤色漆によるスタンプの千鳥文を有する。909は断面長方形を呈する角材であり、部分的に黒色漆が残る。調度品の部材であろう。910～915は円板で、910・911は桜皮、912は周縁に刻み、913は中央穿孔、915には側板の痕跡がみられる。いずれも曲物の部材であろう。916は木球。917～921はちゅう木で、断面方形状を呈する。922～924は箸。925は折敷。926は刀形を呈する板材で用途不明。927は片端を斜めに削った棒状の製品。用途不明。928・929は端部を尖らせる杭。930・931は柄穴を有する格子部材。932は角材で、一側面に刻みを有する。用途不明。933は格子の材で片端に柄を有する。934・935は草履の芯材。936・937は連歯下駄。938・939は下駄の差し歯であろう。加工途中と考えられる。

940・941は砥石。940は中砥で天草産、941は仕上砥で鳴滝産の石材を使用している。

942・943は硯。942は丹波鳴滝山系、943は赤間産の石材を使用している。

他に貝類ではダンベイキサゴ6点、アワビ1点、ハマグリ6点、サザエ1点、ツメタガイ1点、鳥類ではガン・カモ類の上腕骨1点、魚類ではサメの上顎骨1点、左下顎骨1点、タイの前頭骨2点、上顎骨1点、哺乳類ではウマの寛骨1点、大腿骨1点、左中手骨1点、軸椎1点、椎骨6点、肋骨5点、ウシの歯骨1点、イヌの上腕骨1点、脛骨1点、イノシシの切歯骨1点が出土し、ヒトの左上腕骨1点、肩甲骨1点、脛骨1点を含んでいる。

面 イコウ	遺物 No.	種別	計測値						( )=復元数値 [ ]=残存数値
28	1	中国 青白磁壺	口径	(5.8) cm					
	2	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.3 cm	
29	3	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.0 cm	器高	1.7 cm	
30	4	常滑 甕	口径	(42.0) cm					
35	5	常滑 甕							
48	6	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	6.0 cm	器高	1.7 cm	
70	7	瀬戸 入子			底径	4.0 cm			
73	8	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.0 cm	器高	1.7 cm	
77	9	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.0 cm	器高	1.7 cm	
1メン	10	龍泉窯系 青磁劃花文碗							
	11	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗							
	12	龍泉窯系 青磁無文鉢	口径	(12.5) cm					
	13	中国 青白磁梅瓶	口径	(3.0) cm					
	14	美濃 鉄釉灯明皿	口径	9.7 cm					
	15	信楽 灰釉灯明皿	口径	8.9 cm	底径	3.0 cm	器高	2.0 cm	
	16	瀬戸 灰釉卸皿			底径	10.0 cm			
	17	瀬戸 入子	口径	7.4 cm	底径	4.8 cm	器高	2.5 cm	
	18	常滑 甕	口径	(40.0) cm					
	19	常滑 甕							
	20	常滑 甕							
	21	常滑 壺	口径	(22.0) cm					
	22	常滑 片口鉢II類							
	23	常滑 片口鉢II類			底径	(14.0) cm			
	24	常滑 甕							
	25	常滑 片口鉢I類							
	26	備前 擂鉢							
	27	土器質 火鉢							
	28	瓦 軒丸瓦	長さ	[8.4] cm	幅	[14.2] cm	厚さ	2.0 cm	
	29	瓦 丸瓦	長さ	[16.5] cm	幅	[11.0] cm	厚さ	2.1 cm	
	30	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	7.6 cm	器高	3.3 cm	
	31	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	6.8 cm	器高	3.2 cm	
	32	土器 かわらけ	口径	11.0 cm	底径	8.0 cm	器高	3.0 cm	
	33	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	9.0 cm	器高	3.4 cm	
	34	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	9.2 cm	器高	3.2 cm	
	35	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	7.4 cm	器高	3.2 cm	
	36	土器 かわらけ	口径	13.0 cm	底径	9.0 cm	器高	3.0 cm	
	37	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	8.6 cm	器高	2.5 cm	
	38	土器 かわらけ	口径	6.6 cm	底径	4.6 cm	器高	2.8 cm	
	39	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.8 cm	器高	2.1 cm	
	40	土器 かわらけ	口径	6.6 cm	底径	4.6 cm	器高	1.9 cm	
	41	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.4 cm	器高	2.0 cm	
	42	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.4 cm	器高	1.9 cm	
	43	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.2 cm	器高	2.0 cm	
	44	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm	
	45	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.8 cm	
	46	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.0 cm	器高	1.5 cm	
	47	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.0 cm	器高	1.4 cm	
1メン	48	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.5 cm	器高	1.5 cm	
	49	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	4.8 cm	器高	1.5 cm	
	50	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	(6.8) cm	器高	1.6 cm	
	51	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	(7.0) cm	器高	1.9 cm	
	52	土器 かわらけ	口径	8.4 cm	底径	6.8 cm	器高	1.2 cm	
	53	土器 かわらけ	口径	5.8 cm	底径	4.6 cm	器高	1.0 cm	
	54	木製品 格子材	長さ	[23.1] cm	幅	2.9 cm	厚さ	2.2 cm	
	55	木製品 蓋	長さ	20.9 cm	幅	[8.0] cm	厚さ	0.8 cm	
	56	木製品 草履芯	長さ	[20.1] cm	幅	[3.3] cm	厚さ	0.2 cm	
	57	木製品 用途不明	長さ	[5.9] cm	幅	1.2 cm	厚さ	0.2 cm	
	58	木製品 用途不明	長さ	7.5 cm	幅	2.5 cm	厚さ	1.0 cm	
	59	木製品 箸	長さ	[5.8] cm	幅	1.0 cm	厚さ	0.7 cm	
	60	木製品 箸	長さ	[5.9] cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.7 cm	
	61	木製品 箸	長さ	[7.2] cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.5 cm	
	62	木製品 箸	長さ	[7.3] cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.5 cm	
	63	木製品 箸	長さ	[5.9] cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.6 cm	
	64	木製品 箸	長さ	[9.1] cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.6 cm	
	65	木製品 箸	長さ	[9.5] cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.5 cm	
	66	木製品 箸	長さ	[11.3] cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.5 cm	
	67	木製品 箸	長さ	[15.1] cm	幅	0.5 cm	厚さ	0.5 cm	
140	68	中国 白磁口兀皿	口径	12.0 cm					
	69	中国 白磁口兀皿			底径	6.7 cm			
	70	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗							
	71	龍泉窯系 青磁蓮弁文鉢	口径	(18.0) cm					
	72	瀬戸 緑釉小皿	口径	10.8 cm					
	73	瀬戸 灰釉平碗	口径	(14.0) cm					
	74	瀬戸 灰釉卸皿	口径	(12.4) cm					
	75	瀬戸 天目茶碗			底径	5.0 cm			
	76	瀬戸 鉄釉擂鉢			底径	13.0 cm			
	77	尾張型 山茶碗	口径	(13.1) cm					
	78	渥美型 山茶碗	口径	(13.6) cm					
	79	備前 擂鉢							
	80	常滑 甕							
	81	常滑 片口鉢II類							
	82	常滑 片口鉢II類							
	83	常滑 片口鉢II類							
	84	常滑 片口鉢II類							
	85	常滑 片口鉢I類							
	86	常滑 片口鉢I類							
	87	常滑 片口鉢I類							
	88	常滑 片口鉢I類							
	89	瓦器質 火鉢							
	90	瓦 平瓦	長さ	[9.0] cm	幅	[5.3] cm	厚さ	[2.0] cm	
	91	須恵器 甕							
	92	土器 かわらけ	口径	6.0 cm	底径	3.6 cm	器高	1.7 cm	
	93	土器 かわらけ	口径	6.0 cm	底径	4.0 cm	器高	1.7 cm	
	94	土器 かわらけ	口径	6.0 cm	底径	4.8 cm	器高	1.7 cm	
	95	土器 かわらけ	口径	6.5 cm	底径	5.0 cm	器高	2.5 cm	

表1　出土遺物計測表（1）

140	96	土器 かわらけ	口径	6.6 cm	底径	4.0 cm	器高	2.2 cm
	97	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	3.8 cm	器高	2.3 cm
	98	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	4.8 cm	器高	2.1 cm
	99	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.8 cm	器高	1.7 cm
	100	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	5.4 cm	器高	1.4 cm
	101	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	5.2 cm	器高	1.3 cm
	102	土器 かわらけ	口径	9.8 cm	底径	6.4 cm	器高	2.6 cm
	103	土器 かわらけ	口径	10.3 cm	底径	6.0 cm	器高	3.2 cm
	104	石製品 丹波鳴滝山系硯	長さ	[6.2] cm	幅	[4.5] cm	厚さ	[1.2] cm
	105	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ	[3.8] cm	幅	[3.6] cm	厚さ	[0.8] cm
140下層	106	瀬戸 灰釉平碗	口径	(13.8) cm				
	107	東濃型 山茶碗	口径	(11.8) cm				
	108	常滑 片口鉢Ⅰ類	口径	(20.0) cm				
	109	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	110	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	111	常滑 甕						
	112	常滑 甕						
	113	常滑 甕						
	114	常滑 甕						
	115	常滑 甕						
	116	土器 かわらけ	口径	5.8 cm	底径	4.0 cm	器高	1.6 cm
	117	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.0 cm	器高	1.8 cm
	118	土器 かわらけ	口径	6.2 cm	底径	4.4 cm	器高	1.6 cm
	119	土器 かわらけ	口径	6.2 cm	底径	4.2 cm	器高	2.2 cm
	120	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.0 cm	器高	2.4 cm
	121	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	4.4 cm	器高	2.5 cm
	122	土器 かわらけ	口径	9.2 cm	底径	6.4 cm	器高	2.7 cm
	123	土器 かわらけ	口径	10.6 cm	底径	6.8 cm	器高	3.0 cm
	124	骨角製品 笄	長さ	[2.8] cm	幅	1.3 cm	厚さ	03 cm
	125	石製品 粘板岩系硯	長さ	[5.8] cm	幅	[5.8] cm	厚さ	[1.1] cm
	126	石製品 五輪塔空風輪	高さ	[24.7] cm	径	13.5 cm	径	13.0 cm
141－A	127	中国 青白磁梅瓶			底径	9.0 cm		
	128	東濃型 山茶碗	口径	(12.7) cm				
	129	備前 擂鉢						
	130	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	131	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	132	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	133	瓦 軒平瓦	長さ	[3.1] cm	幅	[5.4] cm	厚さ	[3.9] cm
	134	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	6.8 cm	器高	3.3 cm
	135	土器 かわらけ	口径	5.8 cm	底径	4.0 cm	器高	1.8 cm
	136	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.0 cm	器高	2.3 cm
	137	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	5.0 cm	器高	2.4 cm
	138	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	5.0 cm	器高	2.0 cm
	139	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	7.0 cm	器高	1.8 cm
	140	木製品 箸	長さ	[15.8] cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.5 cm
	141	木製品 用途不明	長さ	[8.9] cm	幅	1.7 cm	厚さ	1.3 cm
141－B	142	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(11.7) cm				
	143	龍泉窯系 青磁折縁鉢						
141－B	144	瀬戸 灰釉折縁深皿	口径	(27.4) cm				
	145	中国 天目茶碗	口径	(10.8) cm				
	146	常滑 甕						
	147	常滑 甕			底径	(14.9) cm		
	148	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	149	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	150	瓦 平瓦	長さ	[7.7] cm	幅	[9.1] cm	厚さ	1.9 cm
	151	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.4 cm	器高	1.6 cm
	152	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.6 cm	器高	2.0 cm
	153	土器 かわらけ	口径	9.5 cm	底径	6.0 cm	器高	1.8 cm
	154	土器 かわらけ	口径	9.6 cm	底径	5.6 cm	器高	3.5 cm
	155	木製品 草履芯	長さ	[12.5] cm	幅	[3.5] cm	厚さ	0.3 cm
	156	木製品 草履芯	長さ	[13.3] cm	幅	4.4 cm	厚さ	0.5 cm
141－C	157	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(17.0) cm				
	158	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	159	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗			底径	4.6 cm		
	160	龍泉窯系 青磁輪花碗	口径	(14.6) cm				
	161	龍泉窯系 青磁折縁鉢	口径	(13.7) cm				
	162	中国 白磁口兀皿	口径	(11.8) cm				
	163	中国 白磁口兀皿	口径	(9.8) cm				
	164	中国 白磁口兀皿			底径	5.1 cm		
	165	中国 白磁口兀皿			底径	5.0 cm		
	166	中国 白磁小皿			底径	2.2 cm		
	167	中国 白磁壺						
	168	中国 白磁四耳壺			底径	7.0 cm		
	169	中国 天目茶碗			底径	2.9 cm		
	170	瀬戸 灰釉平碗	口径	(14.8) cm				
	171	瀬戸 緑釉小皿	口径	(11.7) cm				
	172	東濃型 山茶碗			底径	5.8 cm		
	173	常滑 甕						
	174	常滑 甕						
	175	常滑 甕						
	176	常滑 甕						
	177	常滑 甕						
	178	常滑 甕						
	179	常滑 甕			底径	(13.4) cm		
	180	常滑 甕			底径	(18.7) cm		
	181	常滑 甕			底径	(19.1) cm		
	182	常滑 甕						
	183	常滑 甕						
	184	常滑 甕						
	185	常滑 甕						
	186	常滑 甕						
	187	常滑 甕						
	188	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	189	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	190	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	191	常滑 片口鉢Ⅰ類						

表２　出土遺物計測表（２）

141−C	192	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	193	常滑 片口鉢Ⅰ類	底径	(14.2) cm				
	194	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	195	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	196	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	197	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	198	かわらけ質 火鉢						
	199	土器質 火鉢						
	200	瓦器質 火鉢						
	201	瓦 平瓦	長さ	[18.3] cm	幅	[11.3] cm	厚さ	1.9 cm
	202	瓦 平瓦	長さ	[10.0] cm	幅	[10.2] cm	厚さ	2.0 cm
	203	瓦 平瓦	長さ	[8.7] cm	幅	[6.3] cm	厚さ	2.1 cm
	204	瓦 平瓦	長さ	[7.9] cm	幅	[8.5] cm	厚さ	2.0 cm
	205	瓦 平瓦	長さ	[10.5] cm	幅	[9.0] cm	厚さ	2.3 cm
	206	土器 白かわらけ	底径	6.0 cm				
	207	土器 線刻かわらけ						
	208	土器 かわらけ	口径	6.6 cm	底径	5.0 cm	器高	1.4 cm
	209	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	3.2 cm	器高	1.8 cm
	210	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	4.2 cm	器高	1.7 cm
	211	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.6 cm	器高	2.3 cm
	212	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.1 cm
	213	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.8 cm
	214	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.5 cm
	215	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.2 cm	器高	1.8 cm
	216	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	6.2 cm	器高	1.6 cm
	217	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	6.8 cm	器高	1.7 cm
	218	土器 かわらけ	口径	9.4 cm	底径	7.0 cm	器高	1.7 cm
	219	土器 かわらけ	口径	9.8 cm	底径	8.2 cm	器高	1.6 cm
	220	土器 かわらけ	口径	11.4 cm	底径	7.2 cm	器高	3.1 cm
	221	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	6.4 cm	器高	2.7 cm
	222	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	7.8 cm	器高	2.8 cm
	223	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	8.0 cm	器高	2.8 cm
	224	石製品 天草産中砥	長さ	[7.4] cm	幅	2.4 cm	厚さ	1.7 cm
	225	石製品 天草産中砥	長さ	[10.2] cm	幅	3.3 cm	厚さ	4.2 cm
	226	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ	[3.1] cm	幅	3.4 cm	厚さ	0.7 cm
	227	漆製品 櫛	長さ	[1.9] cm	幅	0.7 cm	厚さ	[1.6] cm
	228	漆器 皿	口径	8.2 cm	底径	5.6 cm	器高	1.5 cm
	229	木製品 草履芯	長さ	[4.5] cm	幅	[2.1] cm	厚さ	0.2 cm
	230	木製品 草履芯	長さ	[5.3] cm	幅	[1.4] cm	厚さ	0.2 cm
	231	木製品 草履芯	長さ	[8.0] cm	幅	[2.2] cm	厚さ	0.2 cm
	232	木製品 草履芯	長さ	[8.1] cm	幅	[2.0] cm	厚さ	0.2 cm
	233	木製品 用途不明	長さ	[13.0] cm	幅	1.9 cm	厚さ	1.2 cm
	234	木製品 用途不明	長さ	10.2 cm	幅	1.2 cm	厚さ	0.8 cm
	235	木製品 ちゅう木	長さ	15.8 cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.5 cm
	236	木製品 用途不明	長さ	[15.9] cm	幅	1.2 cm	厚さ	1.3 cm
	237	木製品 用途不明	長さ	13.3 cm	幅	1.1 cm	厚さ	1.1 cm
	238	木製品 用途不明	長さ	[11.5] cm	幅	1.1 cm	厚さ	1.0 cm
	239	木製品 用途不明	長さ	[8.0] cm	幅	1.3 cm	厚さ	0.8 cm
141−C	240	木製品 箸	長さ	[8.3] cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.5 cm
	241	木製品 用途不明	長さ	7.0 cm	幅	5.6 cm	厚さ	2.0 cm
	242	木製品 糸巻き	長さ	[30.8] cm	幅	2.7 cm	厚さ	2.1 cm
141−D	243	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(16.0) cm				
	244	中国 白磁口兀皿			底径	6.0 cm		
	245	瀬戸 灰釉卸皿			底径	(11.0) cm		
	246	常滑 甕	口径	(38.5) cm				
	247	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	8.8 cm	器高	2.9 cm
	248	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	8.0 cm	器高	3.5 cm
141−E	249	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(10.5) cm				
	250	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	251	瀬戸 入子			底径	4.0 cm		
	252	常滑 甕						
	253	常滑 甕						
	254	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	255	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	256	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	257	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.2 cm	器高	1.8 cm
	258	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	6.0 cm	器高	1.4 cm
141	259	龍泉窯系 青磁劃花文碗						
	260	龍泉窯系 青磁劃花文碗						
	261	龍泉窯系 青磁連弁文碗			底径	4.7 cm		
	262	中国 白磁口兀皿			底径	6.0 cm		
	263	中国 青白磁皿	口径	7.0 cm				
	264	泉州窯系 緑釉陶器盤						
	265	瀬戸 灰釉瓶子			底径	11.9 cm		
	266	瀬戸 灰釉卸皿	口径	17.0 cm				
	267	瀬戸 灰釉折縁深皿	口径	(36.4) cm				
	268	瀬戸 灰釉折縁中皿						
	269	瀬戸 灰釉卸皿						
	270	瀬戸 灰釉洗	口径	(28.0) cm	底径	(23.8) cm	器高	7.0 cm
	271	常滑 甕	口径	(30.0) cm				
	272	常滑 甕						
	273	常滑 甕						
	274	常滑 甕						
	275	常滑 甕						
	276	常滑 甕						
	277	常滑 甕						
	278	常滑 甕			底径	(18.0) cm		
	279	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	280	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	281	常滑 片口鉢Ⅰ類			底径	12.0 cm		
	282	土器 ミニチュア土鍋	口径	(8.1) cm				
	283	土器質 火鉢	口径	(36.9) cm				
	284	瓦 平瓦	長さ	[7.7] cm	幅	[6.8] cm	厚さ	2.0 cm
	285	土器 かわらけ	口径	11.0 cm	底径	6.2 cm	器高	3.0 cm
	286	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	7.2 cm	器高	3.4 cm
	287	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	8.0 cm	器高	3.2 cm

表３　出土遺物計測表（３）

141	288	土器 かわらけ	口径	9.8 cm	底径	7.2 cm	器高	2.5 cm
	289	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.4 cm
	290	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	7.2 cm	器高	1.6 cm
	291	土器 線刻かわらけ						
	292	土器 かわらけ質鉢			底径	(8.6) cm		
	293	擦り常滑	長さ	[3.2] cm	幅	[4.5] cm	厚さ	1.3 cm
106	294	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.8 cm
	295	瀬戸 灰釉卸皿	口径	14.1 cm	底径	10.0 cm	器高	3.5 cm
	296	銅銭 天聖元寶	径	2.4 cm	厚さ	0.1 cm	初鋳年	1023年
116	297	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
118	298	常滑 片口鉢Ⅰ類						
120	299	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(10.7) cm				
	300	瀬戸 入子	口径	(6.9) cm				
	301	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	302	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
	303	土器質 火鉢	口径	(36.7) cm				
124	304	中国 白磁口兀碗	口径	(11.9) cm				
	305	中国 青白磁合子身	口径	3.0 cm	底径	2.5 cm	器高	2.6 cm
	306	龍泉窯系 青磁蓮弁文鉢			底径	6.2 cm		
	307	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.0 cm	器高	1.7 cm
	308	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.0 cm	器高	1.9 cm
	309	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.4 cm	器高	1.5 cm
	310	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	6.0 cm	器高	1.5 cm
	311	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.4 cm	器高	1.9 cm
126	312	常滑 甕	口径	(42.2) cm				
134	313	常滑 甕						
138	314	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.8 cm	器高	1.3 cm
145	315	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.2 cm	器高	1.6 cm
149	316	龍泉窯系 青磁蓮弁文鉢			底径	6.2 cm		
	317	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	8.0 cm	器高	2.8 cm
151	318	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	9.0 cm	器高	2.9 cm
161	319	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
	320	常滑 片口鉢Ⅰ類						
2メン	321	同安窯系 青磁梅描文碗						
	322	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(15.8) cm				
	323	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	324	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(10.5) cm				
	325	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	326	中国 白磁口兀皿	口径	(11.9) cm				
	327	中国 白磁口兀皿	口径	(9.8) cm				
	328	中国 白磁口兀皿	口径	9.8 cm	底径	6.2 cm	器高	1.7 cm
	329	中国 青白磁皿						
	330	中国 青白磁梅瓶蓋	口径	(6.0) cm				
	331	中国 青白磁合子身			底径	4.0 cm		
	332	瀬戸 灰釉直縁大皿	口径	(31.4) cm				
	333	瀬戸 灰釉卸皿	口径	(13.5) cm				
	334	瀬戸 灰釉卸目付大皿						
	335	瀬戸 緑釉小皿	口径	(13.0) cm				
2メン	336	瀬戸 灰釉瓶子	口径	(5.0) cm				
	337	瀬戸 鉄釉壺	口径	(12.0) cm				
	338	瀬戸 鉄釉擂鉢						
	339	尾張型 山茶碗	口径	(12.5) cm				
	340	常滑 甕	口径	(39.8) cm				
	341	常滑 甕	口径	(40.0) cm				
	342	常滑 甕						
	343	常滑 甕						
	344	常滑 甕						
	345	常滑 甕						
	346	常滑 甕						
	347	常滑 甕						
	348	常滑 甕						
	349	常滑 甕						
	350	常滑 甕						
	351	常滑 甕						
	352	常滑 甕						
	353	常滑 甕			底径	(20.8) cm		
	354	常滑 甕			底径	(19.0) cm		
	355	常滑 壺			底径	(13.6) cm		
	356	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	357	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	358	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	359	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	360	常滑 片口鉢Ⅱ類						
	361	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	362	常滑 片口鉢Ⅱ類			底径	(15.0) cm		
	363	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	364	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	365	常滑 片口鉢Ⅰ類			底径	12.3 cm		
	366	常滑 片口鉢Ⅰ類						
	367	渥美 片口鉢			底径	(16.6) cm		
	368	渥美 刻画文壺						
	369	備前 擂鉢						
	370	東播系魚住 片口鉢						
	371	瓦器質 火鉢						
	372	土器質 火鉢						
	373	土器質 火鉢						
	374	瓦 丸瓦	長さ	[7.0] cm	幅	[12.0] cm	厚さ	2.5 cm
	375	瓦 丸瓦	長さ	[10.7] cm	幅	[7.2] cm	厚さ	2.0 cm
	376	瓦 丸瓦	長さ	[14.3] cm	幅	[11.5] cm	厚さ	2.7 cm
	377	瓦 丸瓦	長さ	[9.9] cm	幅	[14.0] cm	厚さ	2.1 cm
	378	土器 瓦器質黒縁皿	口径	12.8 cm	底径	8.0 cm	器高	3.1 cm
	379	土器 瓦器質黒縁皿	口径	(12.7) cm				
	380	吉備系 土師質土器	口径	(11.7) cm				
	381	土器 白かわらけ	口径	(11.8) cm				
	382	土器 かわらけ	口径	4.8 cm	底径	3.6 cm	器高	1.1 cm
	383	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	3.6 cm	器高	2.2 cm

表4　出土遺物計測表（4）

2メン	384	土器 かわらけ	口径	5.6 cm	底径	4.0 cm	器高	1.9 cm
	385	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.4 cm	器高	2.0 cm
	386	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	3.8 cm	器高	2.0 cm
	387	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	3.8 cm	器高	2.4 cm
	388	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	3.6 cm	器高	2.3 cm
	389	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	4.4 cm	器高	2.2 cm
	390	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	4.6 cm	器高	2.1 cm
	391	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	4.6 cm	器高	2.8 cm
	392	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.2 cm	器高	2.2 cm
	393	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.8 cm	器高	1.9 cm
	394	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	5.8 cm	器高	1.9 cm
	395	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	5.6 cm	器高	1.9 cm
	396	土器 かわらけ	口径	8.6 cm	底径	5.5 cm	器高	2.3 cm
	397	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	5.2 cm	器高	2.0 cm
	398	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.7 cm
	399	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.2 cm	器高	1.8 cm
	400	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.6 cm	器高	1.9 cm
	401	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	4.8 cm	器高	1.9 cm
	402	土器 かわらけ	口径	9.0 cm	底径	7.6 cm	器高	2.2 cm
	403	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	5.4 cm	器高	2.3 cm
	404	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	5.6 cm	器高	2.6 cm
	405	土器 かわらけ	口径	9.8 cm	底径	6.0 cm	器高	2.8 cm
	406	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	5.6 cm	器高	2.0 cm
	407	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	5.2 cm	器高	1.6 cm
	408	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
	409	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.0 cm	器高	1.5 cm
	410	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.0 cm	器高	1.7 cm
	411	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.4 cm	器高	1.5 cm
	412	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.4 cm	器高	1.6 cm
	413	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.0 cm	器高	1.5 cm
	414	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.4 cm	器高	1.6 cm
	415	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.0 cm	器高	1.4 cm
	416	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.7 cm
	417	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.4 cm	器高	1.6 cm
	418	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.2 cm	器高	1.6 cm
	419	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	420	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
	421	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	422	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.5 cm
	423	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	424	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.4 cm	器高	1.5 cm
	425	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.4 cm	器高	1.7 cm
	426	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	427	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	5.4 cm	器高	1.4 cm
	428	土器 かわらけ	口径	8.6 cm	底径	6.4 cm	器高	1.7 cm
	429	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.2 cm	器高	1.6 cm
	430	土器 かわらけ	口径	8.4 cm	底径	6.6 cm	器高	1.7 cm
	431	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	6.4 cm	器高	1.7 cm
2メン	432	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	5.8 cm	器高	1.9 cm
	433	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	6.2 cm	器高	1.6 cm
	434	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	6.4 cm	器高	1.6 cm
	435	土器 かわらけ	口径	8.4 cm	底径	6.6 cm	器高	1.7 cm
	436	土器 かわらけ	口径	10.4 cm	底径	6.8 cm	器高	2.7 cm
	437	土器 かわらけ	口径	9.8 cm	底径	4.2 cm	器高	3.6 cm
	438	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	7.8 cm	器高	3.0 cm
	439	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	6.8 cm	器高	3.0 cm
	440	土器 かわらけ	口径	10.8 cm	底径	6.6 cm	器高	3.5 cm
	441	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	6.8 cm	器高	3.0 cm
	442	土器 かわらけ	口径	10.5 cm	底径	6.8 cm	器高	3.0 cm
	443	土器 かわらけ	口径	10.8 cm	底径	6.0 cm	器高	3.5 cm
	444	土器 かわらけ	口径	11.2 cm	底径	7.2 cm	器高	3.0 cm
	445	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	8.0 cm	器高	3.1 cm
	446	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	7.4 cm	器高	3.7 cm
	447	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	7.4 cm	器高	3.3 cm
	448	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	6.8 cm	器高	3.5 cm
	449	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	8.0 cm	器高	3.3 cm
	450	土器 線刻かわらけ						
	451	土器 鍔釜	口径	(26.5) cm				
	452	鉄製品 釘	長さ	[4.9] cm	幅	0.3 cm	厚さ	0.2 cm
	453	鉄製品 釘	長さ	[4.4] cm	幅	0.4 cm	厚さ	0.3 cm
	454	銅銭 聖宋元寶	径	2.4 cm	厚さ	0.1 cm	初鋳年	1101年
	455	銅銭 景祐元寶	径	2.5 cm	厚さ	0.1 cm	初鋳年	1034年
	456	銅銭 熙寧元寶	径	1.6 cm	厚さ	0.1 cm	初鋳年	1068年
	457	木製品 漆器椀	口径	14.2 cm	底径	(7.0) cm	器高	(5.7) cm
	458	木製品 用途不明	長さ	[11.9] cm	幅	0.9 cm	厚さ	1.3 cm
	459	石製品 赤間産硯	長さ	[9.6] cm	幅	[8.4] cm	厚さ	[2.3] cm
	460	石製品 上野産中砥	長さ	[6.2] cm	幅	[2.2] cm	厚さ	[2.0] cm
	461	石製品 天草産中砥	長さ	[3.4] cm	幅	[4.0] cm	厚さ	[2.7] cm
102	462	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(15.8) cm				
	463	土器 かわらけ	口径	5.8 cm	底径	(4.2) cm	器高	0.8 cm
	464	土器 かわらけ	口径	6.8 cm	底径	5.2 cm	器高	1.7 cm
	465	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.2 cm	器高	1.4 cm
	466	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	6.6 cm	器高	3.3 cm
	467	土器 かわらけ	口径	11.0 cm	底径	6.6 cm	器高	3.5 cm
	468	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	8.0 cm	器高	3.5 cm
229	469	土器 かわらけ	口径	13.4 cm	底径	9.3 cm	器高	3.8 cm
	470	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	8.1 cm	器高	3.2 cm
	471	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	8.9 cm	器高	3.3 cm
	472	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	9.0 cm	器高	3.2 cm
	473	土器 かわらけ	口径	11.5 cm	底径	7.6 cm	器高	3.4 cm
	474	土器 かわらけ	口径	(12.0) cm	底径	7.5 cm	器高	2.9 cm
	475	土器 かわらけ	口径	11.7 cm	底径	8.2 cm	器高	3.2 cm
	476	土器 かわらけ	口径	11.9 cm	底径	7.2 cm	器高	3.4 cm
	477	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	8.6 cm	器高	2.7 cm
	478	土器 かわらけ	口径	12.5 cm	底径	7.8 cm	器高	3.3 cm
	479	土器 かわらけ	口径	12.1 cm	底径	7.8 cm	器高	3.0 cm

表5　出土遺物計測表（5）

229	480	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	8.6 cm	器高	3.0 cm
	481	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.5 cm	器高	2.8 cm
	482	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	8.7 cm	器高	2.9 cm
	483	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	6.0 cm	器高	2.9 cm
	484	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	8.5 cm	器高	3.0 cm
	485	土器 かわらけ	口径	12.5 cm	底径	7.7 cm	器高	3.3 cm
	486	土器 かわらけ	口径	11.7 cm	底径	6.8 cm	器高	3.1 cm
	487	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	8.8 cm	器高	3.0 cm
	488	土器 かわらけ	口径	11.5 cm	底径	8.7 cm	器高	2.9 cm
	489	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	8.7 cm	器高	3.4 cm
	490	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	9.6 cm	器高	3.1 cm
	491	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	9.6 cm	器高	3.1 cm
	492	土器 かわらけ	口径	14.5 cm	底径	8.6 cm	器高	4.3 cm
	493	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.2 cm	器高	1.4 cm
	494	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.3 cm	器高	1.3 cm
	495	土器 かわらけ	口径	8.1 cm	底径	5.9 cm	器高	1.7 cm
	496	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.7 cm	器高	1.7 cm
	497	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.5 cm	器高	1.6 cm
	498	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	5.9 cm	器高	1.6 cm
	499	土器 かわらけ	口径	6.9 cm	底径	5.0 cm	器高	1.4 cm
	500	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	5.9 cm	器高	1.8 cm
	501	土器 かわらけ	口径	6.9 cm	底径	5.4 cm	器高	1.3 cm
	502	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	6.1 cm	器高	1.6 cm
	503	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.8 cm	器高	1.5 cm
	504	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	6.0 cm	器高	1.6 cm
	505	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	6.2 cm	器高	1.5 cm
	506	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.4 cm	器高	1.7 cm
	507	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.8 cm	器高	1.5 cm
	508	土器 かわらけ	口径	8.6 cm	底径	6.7 cm	器高	1.6 cm
	509	土器 かわらけ	口径	8.6 cm	底径	6.6 cm	器高	1.7 cm
	510	土器 かわらけ	口径	8.4 cm	底径	5.7 cm	器高	2.2 cm
	511	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	6.2 cm	器高	1.4 cm
	512	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	5.9 cm	器高	1.5 cm
	513	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	514	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	6.4 cm	器高	1.6 cm
	515	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.5 cm	器高	1.5 cm
	516	土器 かわらけ	口径	(6.4) cm				
	517	石製品 碁石	長さ	1.5 cm	幅	1.9 cm	厚さ	0.4 cm
275	518	土器 かわらけ	口径	11.0 cm	底径	5.8 cm	器高	3.2 cm
	519	土器 かわらけ	口径	10.8 cm	底径	5.7 cm	器高	3.3 cm
	520	土器 かわらけ	口径	10.6 cm	底径	3.2 cm	器高	3.6 cm
	521	土器 かわらけ	口径	10.8 cm	底径	5.7 cm	器高	2.9 cm
	522	土器 かわらけ	口径	13.7 cm	底径	5.9 cm	器高	3.6 cm
	523	土器 かわらけ	口径	13.8 cm	底径	7.1 cm	器高	3.4 cm
	524	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	8.0 cm	器高	3.4 cm
	525	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	8.0 cm	器高	3.1 cm
	526	土器 かわらけ	口径	12.1 cm	底径	6.9 cm	器高	3.1 cm
	527	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	7.6 cm	器高	3.4 cm
275	528	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	7.9 cm	器高	3.3 cm
	529	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.8 cm	器高	3.2 cm
	530	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.5 cm	器高	2.9 cm
	531	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	8.2 cm	器高	3.2 cm
	532	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	7.6 cm	器高	3.3 cm
	533	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	7.8 cm	器高	3.4. cm
	534	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	7.9 cm	器高	3.3 cm
	535	土器 かわらけ	口径	12.5 cm	底径	8.0 cm	器高	3.3 cm
	536	土器 かわらけ	口径	12.7 cm	底径	8.3 cm	器高	3.2 cm
	537	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	7.7 cm	器高	3.3 cm
	538	土器 かわらけ	口径	12.7 cm	底径	8.0 cm	器高	3.3 cm
	539	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	9.5 cm	器高	3.6 cm
	540	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	8.0 cm	器高	3.3 cm
	541	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	8.5 cm	器高	3.1 cm
	542	土器 かわらけ	口径	12.7 cm	底径	7.7 cm	器高	3.8 cm
	543	土器 かわらけ	口径	12.7 cm	底径	7.4 cm	器高	3.4 cm
	544	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	8.1 cm	器高	3.2 cm
	545	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	8.0 cm	器高	3.4 cm
	546	土器 かわらけ	口径	13.1 cm	底径	7.7 cm	器高	3.2 cm
	547	土器 かわらけ	口径	13.2 cm	底径	7.0 cm	器高	3.5 cm
	548	土器 かわらけ	口径	13.3 cm	底径	8.0 cm	器高	3.6 cm
	549	土器 かわらけ	口径	13.3 cm	底径	8.0 cm	器高	3.6 cm
	550	土器 かわらけ	口径	13.7 cm	底径	7.5 cm	器高	3.8 cm
	551	土器 かわらけ	口径	4.8 cm	底径	4.0 cm	器高	0.8 cm
	552	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	4.0 cm	器高	0.8 cm
	553	土器 かわらけ	口径	4.8 cm	底径	4.3 cm	器高	0.8 cm
	554	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	4.2 cm	器高	2.3 cm
	555	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	4.4 cm	器高	2.2 cm
	556	土器 かわらけ	口径	7.0 cm	底径	4.4 cm	器高	2.3 cm
	557	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.2 cm	器高	1.9 cm
	558	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.0 cm	器高	1.8 cm
	559	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.5 cm	器高	1.7 cm
	560	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	5.2 cm	器高	1.7 cm
	561	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.0 cm	器高	1.6 cm
	562	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	5.5 cm	器高	1.7 cm
	563	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.3 cm	器高	1.7 cm
	564	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.4 cm	器高	1.8 cm
	565	土器 かわらけ	口径	8.6 cm	底径	6.2 cm	器高	1.8 cm
	566	土器 穿孔かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	567	木製品 円板	径	(13.0) cm			厚さ	0.6 cm
	568	木製品 箸 or ヘラ	長さ	16.9 cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.6 cm
	569	木製品 杭	長さ	27.3 cm	幅	4.3 cm	厚さ	1.6 cm
276	570	土器 かわらけ	口径	11.5 cm	底径	6.0 cm	器高	3.2 cm
	571	土器 かわらけ	口径	10.4 cm	底径	5.0 cm	器高	3.4 cm
	572	土器 かわらけ	口径	13.2 cm	底径	7.4 cm	器高	3.5 cm
	573	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	7.3 cm	器高	3.7 cm
	574	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	7.2 cm	器高	3.1 cm
	575	土器 かわらけ	口径	13.3 cm	底径	8.0 cm	器高	3.6 cm

表6　出土遺物計測表（6）

276	576	土器 かわらけ	口径	13.2 cm	底径	7.3 cm	器高	3.7 cm		
	577	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	8.2 cm	器高	3.7 cm		
	578	土器 かわらけ	口径	13.0 cm	底径	7.8 cm	器高	3.2 cm		
	579	土器 かわらけ	口径	13.0 cm	底径	7.5 cm	器高	3.0 cm		
	580	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	8.3 cm	器高	3.6 cm		
	581	土器 かわらけ	口径	13.0 cm	底径	8.4 cm	器高	3.4 cm		
	582	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	8.4 cm	器高	3.4 cm		
	583	土器 かわらけ	口径	13.1 cm	底径	9.2 cm	器高	3.0 cm		
	584	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	8.8 cm	器高	2.8 cm		
	585	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	5.0 cm	器高	1.4 cm		
	586	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	5.5 cm	器高	1.7 cm		
	587	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	5.9 cm	器高	1.8 cm		
	588	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	6.0 cm	器高	1.3 cm		
	589	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.2 cm	器高	1.7 cm		
	590	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.0 cm	器高	1.7 cm		
	591	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	5.6 cm	器高	1.7 cm		
	592	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.9 cm	器高	1.6 cm		
	593	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.6 cm	器高	1.7 cm		
	594	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.4 cm	器高	1.4 cm		
	595	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.0 cm	器高	1.5 cm		
	596	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	6.0 cm	器高	1.2 cm		
	597	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	6.7 cm	器高	1.4 cm		
	598	土器 かわらけ	口径	8.4 cm	底径	6.4 cm	器高	1.7 cm		
	599	土器 かわらけ	口径	4.8 cm	底径	3.7 cm	器高	0.7 cm		
	600	土器 かわらけ	口径	4.7 cm	底径	5.0 cm	器高	0.7 cm		
	601	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	5.0 cm	器高	0.8 cm		
	602	土器 かわらけ	口径	6.6 cm	底径	5.2 cm	器高	1.1 cm		
	603	中国 白磁口兀皿								
	604	漆製品 椀			底径	(7.0) cm				
	605	木製品 草履芯	長さ	22.7 cm	幅	4.5 cm	厚さ	0.2 cm		
	606	木製品 草履芯	長さ	22.5 cm	幅	5.1 cm	厚さ	0.2 cm		
	607	木製品 折敷	長さ	25.7 cm	幅	[6.8] cm	厚さ	0.1 cm		
	608	木製品 円板	径	(9.0) cm			厚さ	1.3 cm		
	609	木製品 円板	径	(6.0) cm			厚さ	0.3 cm		
	610	木製品 円板	径	(7.0) cm			厚さ	0.5 cm		
	611	木製品 箸	長さ	26.0 cm	幅	0.5 cm	厚さ	0.5 cm		
	612	木製品 箸	長さ	25.5 cm	幅	05 cm	厚さ	0.5 cm		
	613	木製品 箸	長さ	22.9 cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.4 cm		
	614	木製品 篦	長さ	19.0 cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.3 cm		
	615	木製品 篦	長さ	17.3 cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.2 cm		
	616	木製品 篦	長さ	15.7 cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.4 cm		
	617	木製品 篦	長さ	[13.1] cm	幅	1.0 cm	厚さ	0.8 cm		
	618	木製品 用途不明	長さ	[14.3] cm	幅	1.2 cm	厚さ	0.7 cm		
	619	木製品 用途不明	長さ	[7.7] cm	幅	1.4 cm	厚さ	1.4 cm		
162	620	瀬戸 灰釉柄付片口	口径	(14.4) cm						
	621	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	1.6 cm	器高	6.0 cm		
	622	瓦器質 火鉢	口径	26.6 cm						
	623	木製品 漆器皿								
162	624	木製品 漆器皿	口径	10.4 cm	底径	8.0 cm	器高	1.7 cm		
	625	木製品 曲物	径	20.0 cm			厚さ	13.9 cm		
	626	木製品 曲物蓋	径	20.0 cm			厚さ	1.2 cm		
	627	木製品 円板	径	(17.0) cm			厚さ	0.9 cm		
	628	木製品 串	長さ	17.7 cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.6 cm		
	629	木製品 篦	長さ	12.3 cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.6 cm		
	630	木製品 箸	長さ	[12.3] cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.5 cm		
	631	木製品 箸	長さ	[10.7] cm	幅	0.5 cm	厚さ	0.3 cm		
	632	木製品 草履芯	長さ	[14.0] cm	幅	4.7 cm	厚さ	0.3 cm		
163	633	木製品 箸	長さ	20.3 cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.4 cm		
	634	木製品 箸	長さ	19.4 cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.3 cm		
	635	木製品 箸	長さ	19.2 cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.5 cm		
	636	木製品 栓	長さ	5.4 cm	幅	1.7 cm	厚さ	1.7 cm		
	637	木製品 用途不明	長さ	1.7 cm	幅	5.7 cm	厚さ	1.5 cm		
193	638	土器 かわらけ	口径	11.6 cm	底径	7.8 cm	器高	3.3 cm		
198	639	土器 かわらけ	口径	8.8 cm	底径	6.6 cm	器高	1.3 cm		
210	640	中国 白磁口兀皿								
211	641	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	5.1 cm	器高	1.9 cm		
	642	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.3 cm	器高	1.7 cm		
213	643	中国 白磁口兀皿	口径	(11.8) cm						
220	644	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.6 cm	器高	1.5 cm		
	645	木製品 漆器皿	口径	9.0 cm	底径	6.0 cm	器高	1.0 cm		
	646	木製品 形代	長さ	7.8 cm	幅	1.3 cm	厚さ	0.8 cm		
222	647	土器 かわらけ	口径	(5.4) cm	底径	(4.0) cm	器高	0.8 cm		
	648	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	5.4 cm	器高	1.7 cm		
	649	土器 かわらけ	口径	(12.7) cm	底径	8.0 cm	器高	3.1 cm		
	650	木製品 円板	径	6.2 cm			厚さ	0.8 cm		
224	651	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.5 cm	器高	1.5 cm		
	652	土器 かわらけ	口径	12.9 cm	底径	8.3 cm	器高	3.2 cm		
	653	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ	[4.3] cm	幅	2.6 cm	厚さ	[0.5] cm		
233	654	龍泉窯系 青磁折縁鉢	口径	(11.1) cm						
237	655	土器 かわらけ	口径	4.7 cm	底径	4.2 cm	器高	1.1 cm		
244	656	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.7 cm	器高	1.7 cm		
245	657	土器 かわらけ	口径	12.3 cm	底径	7.5 cm	器高	3.3 cm		
250	658	土器 白かわらけ蓋	径	7.4 cm			器高	2.4 cm		
	659	土器 かわらけ	口径	13.4 cm	底径	7.2 cm	器高	3.7 cm		
	660	土器 かわらけ	口径	12.5 cm	底径	6.8 cm	器高	3.3 cm		
	661	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	7.9 cm	器高	3.4 cm		
	662	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	5.0 cm	器高	1.8 cm		
	663	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.5 cm	器高	1.5 cm		
	664	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	4.8 cm	器高	1.5 cm		
	665	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.0 cm	器高	1.6 cm		
	666	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	5.3 cm	器高	1.7 cm		
	667	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.5 cm	器高	1.8 cm		
	668	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.4 cm	器高	1.9 cm		
	669	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.2 cm	器高	1.6 cm		
	670	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.0 cm	器高	1.5 cm		
	671	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.7 cm	器高	1.3 cm		

表7　出土遺物計測表（7）

250	672	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.9 cm	器高	1.6 cm
	673	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.3 cm	器高	1.5 cm
	674	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.4 cm	器高	1.8 cm
	675	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.1 cm	器高	1.3 cm
	676	石製品 伊予産中砥	長さ	[5.7] cm	幅	[4.6] cm	厚さ	[1.7] cm
251	677	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
252	678	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	3.6 cm	器高	0.8 cm
	679	土器 かわらけ	口径	11.3 cm	底径	7.9 cm	器高	2.8 cm
253	680	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	4.4 cm	器高	1.1 cm
254	681	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.4 cm	器高	1.6 cm
264	682	常滑 甕			底径	(14.0) cm		
266	683	鉄製品 釘	長さ	[3.6] cm	幅	0.2 cm	厚さ	0.4 cm
3メン	684	同安窯系 青磁櫛描文碗	口径	(14.8) cm				
	685	同安窯系 青磁櫛描文碗						
	686	龍泉窯系 青磁劃花文碗	口径	(15.0) cm				
	687	龍泉窯系 青磁劃花文碗						
	688	龍泉窯系 青磁劃花文碗			底径	6.1 cm		
	689	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(13.8) cm				
	690	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(12.7) cm				
	691	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	692	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	693	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	694	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	695	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗						
	696	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口径	(13.6) cm				
	697	龍泉窯系 青磁無文碗			底径	4.0 cm		
	698	龍泉窯系 青磁鉢			底径	(12.6) cm		
	699	龍泉窯系 青磁蓮弁文鉢			底径	6.0 cm		
	700	龍泉窯系 青磁鉢	口径	(21.2) cm				
	701	龍泉窯系 青磁双魚文鉢						
	702	龍泉窯系 青磁鉢			底径	(10.4) cm		
	703	龍泉窯系 青磁蓮弁文鉢			底径	(11.0) cm		
	704	龍泉窯系 青磁蓮弁文鉢			底径	6.0 cm		
	705	中国 白磁口兀皿	口径	(13.9) cm				
	706	中国 白磁口兀皿	口径	(13.9) cm				
	707	中国 白磁口兀皿	口径	(12.0) cm				
	708	中国 白磁口兀皿			底径	6.0 cm		
	709	中国 白磁口兀皿			底径	6.0 cm		
	710	中国 白磁端反碗						
	711	中国 白磁端反碗						
	712	中国 青白磁口兀皿	口径	(10.9) cm				
	713	中国 青白磁梅瓶	口径	(4.7) cm				
	714	中国 青白磁梅瓶	口径	(5.8) cm				
	715	中国 青白磁梅瓶			底径	9.0 cm		
	716	中国 青白磁梅瓶			底径	12.0 cm		
	717	瀬戸 灰釉四耳壺	口径	10.2 cm				
	718	瀬戸 灰釉水注	口径	6.9 cm				
	719	瀬戸 灰釉瓶子	口径	(7.1) cm				
3メン	720	瀬戸 鉄釉片口小鉢	口径	8.7 cm	底径	5.0 cm	器高	4.1 cm
	721	瀬戸 灰釉卸皿			底径	(8.2) cm		
	722	渥美 甕						
	723	常滑 片口鉢II類	口径	30.6 cm				
	724	常滑 片口鉢II類						
	725	常滑 片口鉢II類						
	726	常滑 片口鉢II類	口径	(26.2) cm	底径	(17.0) cm	器高	9.0 cm
	727	常滑 片口鉢I類	口径	(26.2) cm				
	728	常滑 片口鉢I類	口径	(24.2) cm				
	729	常滑 片口鉢I類	口径	(30.1) cm				
	730	常滑 片口鉢I類	口径	(29.0) cm	底径	(14.2) cm	器高	12.5 cm
	731	常滑 片口鉢I類	口径	(31.0) cm	底径	(14.2) cm	器高	11.5 cm
	732	常滑 片口鉢I類						
	733	常滑 片口鉢I類						
	734	常滑 片口鉢I類						
	735	常滑 片口鉢I類						
	736	常滑 片口鉢I類						
	737	常滑 片口鉢I類						
	738	常滑 片口鉢I類						
	739	常滑 片口鉢I類						
	740	常滑 片口鉢I類						
	741	常滑 片口鉢I類						
	742	常滑 片口鉢I類						
	743	常滑 片口鉢I類						
	744	常滑 片口鉢I類						
	745	常滑 片口鉢I類						
	746	常滑 片口鉢I類						
	747	常滑 片口鉢I類						
	748	常滑 片口鉢I類			底径	(13.0) cm		
	749	常滑 片口鉢I類			底径	(12.5) cm		
	750	常滑 片口鉢I類			底径	(14.6) cm		
	751	常滑 片口鉢I類						
	752	常滑 片口鉢I類						
	753	常滑 片口鉢I類						
	754	常滑 甕	口径	(43.9) cm				
	755	常滑 甕	口径	50.0 cm				
	756	常滑 甕	口径	(43.5) cm				
	757	常滑 甕	口径	(46.0) cm				
	758	常滑 甕	口径	(33.5) cm				
	759	常滑 甕	口径	(38.4) cm				
	760	常滑 甕	口径	23.6 cm				
	761	常滑 甕	口径	22.0 cm				
	762	常滑 甕						
	763	常滑 甕						
	764	常滑 甕						
	765	常滑 甕						
	766	常滑 甕						
	767	常滑 甕						

表8　出土遺物計測表（8）

3メン	768	常滑 甕						
	769	常滑 甕						
	770	常滑 甕						
	771	常滑 甕						
	772	常滑 甕						
	773	常滑 甕						
	774	常滑 壺	口径	19.0 cm				
	775	常滑 壺	口径	18.2 cm				
	776	常滑 甕			底径	15.0 cm		
	777	常滑 甕			底径	17.4 cm		
	778	常滑 甕			底径	18.0 cm		
	779	常滑 甕			底径	17.2 cm		
	780	常滑 甕			底径	13.6 cm		
	781	常滑 甕						
	782	常滑 甕						
	783	常滑 甕						
	784	常滑 甕						
	785	常滑 甕						
	786	尾張型? 山茶碗	口径	(16.6) cm				
	787	尾張型 山茶碗	口径	14.6 cm	底径	7.4 cm	器高	5.0 cm
	788	尾張型 山茶碗			底径	6.8 cm		
	789	東濃型 山皿	口径	(9.4) cm				
	790	瓦器質 黒縁皿			底径	5.0 cm		
	791	瓦器質 黒縁皿						
	792	吉備系 土師質土器			底径	(5.9) cm		
	793	土器質 火鉢	口径	(47.0) cm	底径	(38.4) cm	器高	10.0 cm
	794	土器質 火鉢						
	795	土器質 火鉢						
	796	かわらけ質 火鉢						
	797	土器質 火鉢			底径	(30.0) cm		
	798	土器質 火鉢						
	799	瓦 平瓦	長さ	[11.5] cm	幅	[9.2] cm	厚さ	2.2 cm
	800	瓦 平瓦	長さ	[9.1] cm	幅	[11.3] cm	厚さ	2.0 cm
	801	瓦 平瓦	長さ	[6.2] cm	幅	[6.3] cm	厚さ	1.9 cm
	802	瓦 平瓦	長さ	[5.6] cm	幅	[6.3] cm	厚さ	2.0 cm
	803	瓦 軒丸瓦	長さ	[6.3] cm	幅	[7.4] cm	厚さ	1.7 cm
	804	瓦 丸瓦	長さ	[5.4] cm	幅	[6.0] cm	厚さ	1.8 cm
	805	瓦 丸瓦	長さ	[9.1] cm	幅	[11.0] cm	厚さ	1.9 cm
	806	滑石製品 石鍋	口径	21.6 cm				
	807	常滑片口鉢 擦り常滑	長さ	[5.2] cm	幅	6.6 cm	厚さ	0.8 cm
	808	骨角製品 加工骨						
102	809	銅銭 祥符元寶	径	2.5 cm	厚さ	0.1 cm	初鋳年	1008年
	810	銅銭 聖宋元寳	径	2.3 cm	厚さ	0.1 cm	初鋳年	1101年
	811	鉄製品 釘	長さ	3.7 cm	幅	0.3 cm	厚さ	0.3 cm
3メン	812	土器 白かわらけ	口径	12.4 cm	底径	5.0 cm	器高	3.6 cm
	813	土器 墨書かわらけ	口径	12.2 cm	底径	7.6 cm	器高	3.3 cm
	814	土器 墨書かわらけ						
	815	土器 線刻かわらけ						

3メン	816	土器 線刻かわらけ	口径	13.4 cm	底径	8.0 cm	器高	3.0 cm
	817	土器 かわらけ円板	径	3.1 cm			厚さ	0.7 cm
	818	土器 かわらけ質壺			底径	5.9 cm		
	819	土器 かわらけ	口径	4.3 cm	底径	3.3 cm	器高	1.0 cm
	820	土器 かわらけ	口径	4.2 cm	底径	3.2 cm	器高	0.9 cm
	821	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	4.0 cm	器高	1.0 cm
	822	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	4.0 cm	器高	0.9 cm
	823	土器 かわらけ	口径	5.1 cm	底径	4.4 cm	器高	1.1 cm
	824	土器 かわらけ	口径	4.5 cm	底径	3.6 cm	器高	1.2 cm
	825	土器 かわらけ	口径	5.0 cm	底径	4.0 cm	器高	1.0 cm
	826	土器 かわらけ	口径	11.0 cm	底径	6.6 cm	器高	3.2 cm
	827	土器 かわらけ	口径	10.4 cm	底径	5.9 cm	器高	3.0 cm
	828	土器 かわらけ	口径	10.8 cm	底径	6.6 cm	器高	3.1 cm
	829	土器 かわらけ	口径	11.4 cm	底径	6.6 cm	器高	3.3 cm
	830	土器 かわらけ	口径	11.7 cm	底径	8.0 cm	器高	3.0 cm
	831	土器 かわらけ	口径	11.3 cm	底径	6.7 cm	器高	3.0 cm
	832	土器 かわらけ	口径	12.1 cm	底径	7.8 cm	器高	3.1 cm
	833	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.4 cm	器高	3.5 cm
	834	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	6.7 cm	器高	3.1 cm
	835	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	8.4 cm	器高	3.5 cm
	836	土器 かわらけ	口径	12.8 cm	底径	9.1 cm	器高	3.6 cm
	837	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	7.5 cm	器高	3.4 cm
	838	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.0 cm	器高	4.0 cm
	839	土器 かわらけ	口径	13.2 cm	底径	6.5 cm	器高	3.7 cm
	840	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.1 cm	器高	2.9 cm
	841	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.9 cm	器高	3.4 cm
	842	土器 かわらけ	口径	11.8 cm	底径	7.5 cm	器高	3.0 cm
	843	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	7.2 cm	器高	3.1 cm
	844	土器 かわらけ	口径	13.0 cm	底径	7.7 cm	器高	3.5 cm
	845	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.0 cm	器高	3.3 cm
	846	土器 かわらけ	口径	12.4 cm	底径	7.7 cm	器高	3.4 cm
	847	土器 かわらけ	口径	12.7 cm	底径	8.0 cm	器高	3.4 cm
	848	土器 かわらけ	口径	12.9 cm	底径	8.2 cm	器高	3.3 cm
	849	土器 かわらけ	口径	12.0 cm	底径	7.4 cm	器高	3.1 cm
	850	土器 かわらけ	口径	11.7 cm	底径	7.8 cm	器高	3.4 cm
	851	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	7.6 cm	器高	3.1 cm
	852	土器 かわらけ	口径	12.1 cm	底径	7.4 cm	器高	3.5 cm
	853	土器 かわらけ	口径	12.5 cm	底径	8.8 cm	器高	3.1 cm
	854	土器 かわらけ	口径	12.2 cm	底径	8.0 cm	器高	2.9 cm
	855	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	8.3 cm	器高	3.1 cm
	856	土器 かわらけ	口径	12.6 cm	底径	7.1 cm	器高	3.3 cm
	857	土器 かわらけ	口径	13.1 cm	底径	9.6 cm	器高	3.3 cm
	858	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	3.2 cm	器高	1.7 cm
	859	土器 かわらけ	口径	8.4 cm	底径	3.4 cm	器高	1.9 cm
	860	土器 かわらけ	口径	6.9 cm	底径	4.4 cm	器高	1.9 cm
	861	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	4.1 cm	器高	2.3 cm
	862	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.0 cm	器高	1.6 cm
	863	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	6.0 cm	器高	1.9 cm

表9　出土遺物計測表（9）

3メン	864	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	4.4 cm	器高	1.9 cm
	865	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.6 cm	器高	1.7 cm
	866	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	5.2 cm	器高	1.4 cm
	867	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.0 cm	器高	1.7 cm
	868	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.4 cm	器高	1.5 cm
	869	土器 かわらけ	口径	7.2 cm	底径	4.8 cm	器高	1.5 cm
	870	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.6 cm	器高	1.5 cm
	871	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	4.7 cm	器高	1.5 cm
	872	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.2 cm	器高	1.9 cm
	873	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.8 cm	器高	1.6 cm
	874	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	6.3 cm	器高	1.5 cm
	875	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.1 cm	器高	1.5 cm
	876	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.4 cm	器高	1.6 cm
	877	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.0 cm	器高	1.7 cm
	878	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.4 cm	器高	1.5 cm
	879	土器 かわらけ	口径	8.3 cm	底径	6.2 cm	器高	1.7 cm
	880	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.2 cm	器高	1.8 cm
	881	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	4.3 cm	器高	1.8 cm
	882	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	6.0 cm	器高	1.5 cm
	883	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	4.8 cm	器高	1.8 cm
	884	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.7 cm	器高	1.5 cm
	885	土器 かわらけ	口径	7.3 cm	底径	4.9 cm	器高	1.7 cm
	886	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.3 cm	器高	1.7 cm
	887	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.3 cm	器高	1.6 cm
	888	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.4 cm	器高	1.5 cm
	889	土器 かわらけ	口径	7.5 cm	底径	5.0 cm	器高	1.7 cm
	890	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	5.2 cm	器高	1.6 cm
	891	土器 かわらけ	口径	7.4 cm	底径	5.9 cm	器高	1.7 cm
	892	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	6.0 cm	器高	1.6 cm
	893	土器 かわらけ	口径	7.6 cm	底径	4.8 cm	器高	1.7 cm
	894	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	4.9 cm	器高	1.8 cm
	895	土器 かわらけ	口径	7.7 cm	底径	6.5 cm	器高	1.6 cm
	896	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.3 cm	器高	1.7 cm
	897	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	5.0 cm	器高	1.6 cm
	898	土器 かわらけ	口径	7.8 cm	底径	6.2 cm	器高	1.8 cm
	899	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.2 cm	器高	1.4 cm
	900	土器 かわらけ	口径	8.1 cm	底径	5.8 cm	器高	1.8 cm
	901	土器 かわらけ	口径	7.9 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
	902	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	5.6 cm	器高	1.6 cm
	903	土器 かわらけ	口径	8.1 cm	底径	5.2 cm	器高	1.6 cm
3メン	904	土器 かわらけ	口径	8.0 cm	底径	6.2 cm	器高	1.5 cm
	905	土器 かわらけ	口径	8.2 cm	底径	5.6 cm	器高	1.7 cm
	906	土器 かわらけ	口径	8.1 cm	底径	6.2 cm	器高	1.7 cm
	907	木製品 漆器椀						
	908	木製品 漆器皿						
	909	漆製品 漆塗り部材	長さ	[9.1] cm	幅	2.0 cm	厚さ	1.1 cm
	910	木製品 曲物						
	911	木製品 曲物	径	(19.0) cm			厚さ	1.0 cm
	912	木製品 曲物	径	(17.0) cm			厚さ	0.5 cm
	913	木製品 曲物	径	(12.0) cm			厚さ	0.4 cm
	914	木製品 曲物	径	(15.0) cm			厚さ	0.6 cm
	915	木製品 曲物底板	径	4.5 cm			厚さ	0.5 cm
	916	木製品 木球	径	3.6 cm			厚さ	3.2 cm
	917	木製品 ちゅう木	長さ	9.7 cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.4 cm
	918	木製品 ちゅう木	長さ	10.5 cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.6 cm
	919	木製品 ちゅう木	長さ	13.1 cm	幅	1.0 cm	厚さ	0.5 cm
	920	木製品 ちゅう木	長さ	14.8 cm	幅	0.8 cm	厚さ	0.5 cm
	921	木製品 ちゅう木	長さ	15.3 cm	幅	1.0 cm	厚さ	0.6 cm
	922	木製品 箸	長さ	18.6 cm	幅	0.7 cm	厚さ	0.5 cm
	923	木製品 箸	長さ	22.0 cm	幅	0.9 cm	厚さ	0.5 cm
	924	木製品 箸	長さ	23.5 cm	幅	0.6 cm	厚さ	0.5 cm
	925	木製品 折敷	長さ	22.2 cm	幅	[2.5] cm	厚さ	0.2 cm
	926	木製品 用途不明	長さ	15.5 cm	幅	[2.2] cm	厚さ	0.7 cm
	927	木製品 用途不明	長さ	[18.5] cm	幅	1.1 cm	厚さ	0.7 cm
	928	木製品 杭	長さ	[9.7] cm	幅	1.7 cm	厚さ	0.7 cm
	929	木製品 杭	長さ	[19.0] cm	幅	3.3 cm	厚さ	1.0 cm
	930	木製品 格子	長さ	[22.0] cm	幅	1.4 cm	厚さ	1.3 cm
	931	木製品 格子	長さ	[25.0] cm	幅	2.5 cm	厚さ	1.8 cm
	932	木製品 用途不明	長さ	[27.0] cm	幅	1.8 cm	厚さ	1.5 cm
	933	木製品 格子	長さ	[11.7] cm	幅	2.6 cm	厚さ	0.7 cm
	934	木製品 草履芯	長さ	[21.6] cm	幅	4.4 cm	厚さ	0.3 cm
	935	木製品 草履芯	長さ	[21.8] cm	幅	3.8 cm	厚さ	0.3 cm
	936	木製品 連歯下駄	長さ	[8.3] cm	幅	9.9 cm	厚さ	3.5 cm
	937	木製品 連歯下駄	長さ	[9.0] cm	幅	10.7 cm	厚さ	2.8 cm
	938	木製品 下駄差歯	長さ	8.5 cm	幅	8.0 cm	厚さ	3.3 cm
	939	木製品 下駄差歯	長さ	8.0 cm	幅	7.8 cm	厚さ	3.7 cm
	940	石製品 天草産中砥	長さ	[6.0] cm	幅	4.8 cm	厚さ	2.2 cm
	941	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ	[3.0] cm	幅	3.3 cm	厚さ	0.5 cm
	942	石製品 丹波鳴滝山系硯	長さ	[7.4] cm	幅	[3.3] cm	厚さ	[0.7] cm
	943	石製品 赤間産硯	長さ	[5.6] cm	幅	[6.8] cm	厚さ	[0.7] cm

表10　出土遺物計測表（10）

第4章　まとめ

本報では国庫補助事業相当分とした第１面・第２面・第３面の調査成果を掲載してきた。しかし、遺跡の変遷等の総括的な考察は原因者負担相当分である第４面・第５面・第６面の成果を含め別に報告する予定であり、ここでは第１面～第３面の遺構変遷概念図（図52）を使い簡単なまとめをしておく。

第１面では調査区西端部で土丹版築の一部が、この東側では南北方向の溝であるイコウ93が、さらに東ではピット、土壙が検出され、建物としては建物１・建物２を確認している。いずれの遺構からも出土遺物はなく年代については確証はないが、建物１の軸方位はＮ－43°－Ｅを測り、現在の町割り（若宮大路の軸）への関わりを示唆し、イコウ93、建物２のそれ（Ｎ－15°－Ｅ、Ｎ－５°－Ｗ）とは大きく異なっている。重複関係からは建物１がイコウ93を切ることが確認されており、若宮大路の軸とは異なる区画が存在していたことがわかる。第１面出土遺物として提示したもののほとんどは現代攪乱壙からのものであり、新旧（鎌倉時代～近世・近代）の遺物が混入している。年代については第２面との関連から16世紀後半以降と考えている。

第２面では調査区西端部で土丹、貝殻粒等による版築が検出され基壇状を呈する可能性を有する。その東側では比較的規模の大きな南北方向の溝であるイコウ140・141A～Eが検出され、140～141間は道路、或は通路の可能性が高いといえる。イコウ140は第１面のイコウ93と規模は異なるが、ほぼ同じ位置からの検出で、軸方位はＮ－16°－Ｅを測り本址がイコウ93に先行するものと考えられる。出土遺物

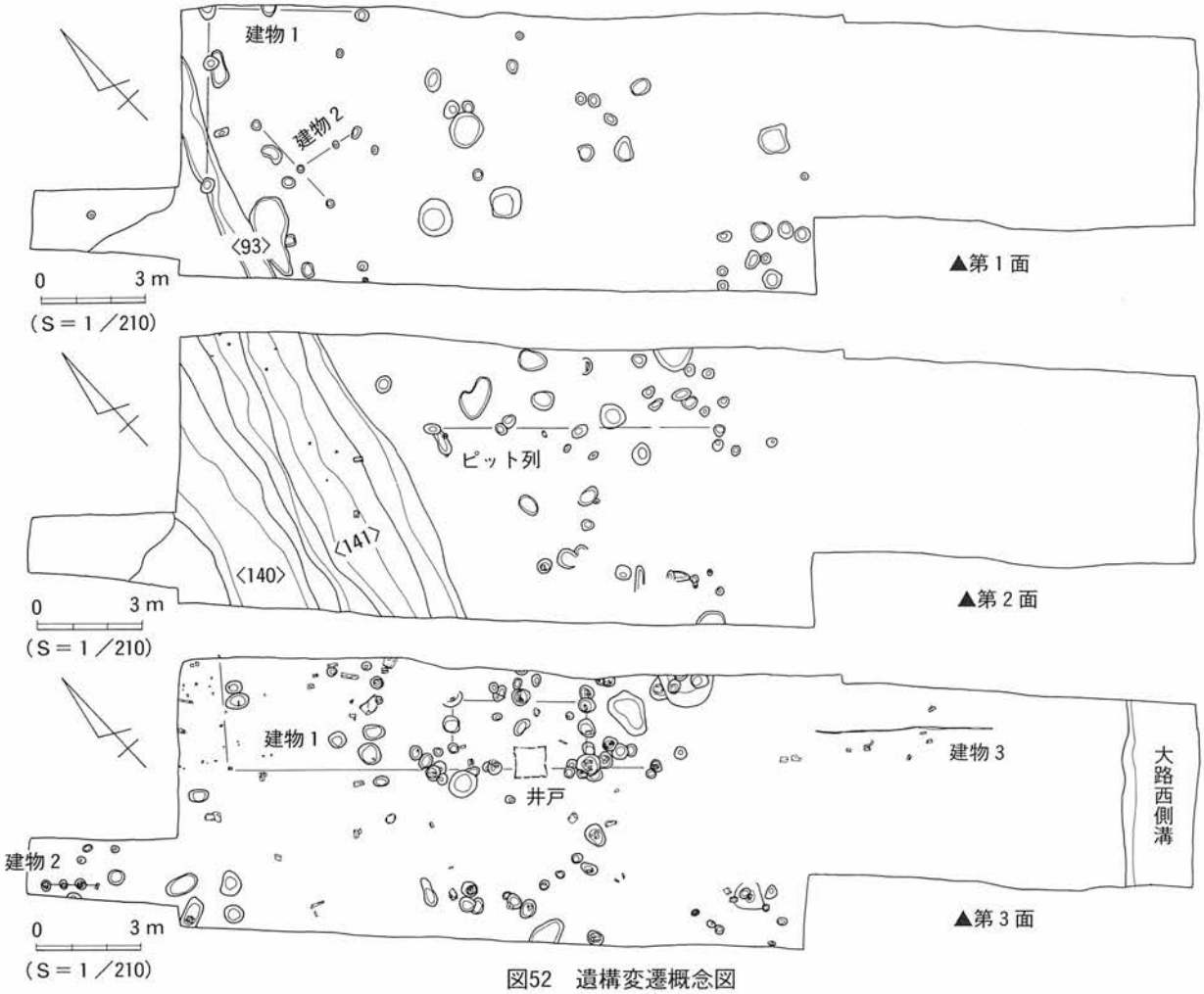


図52　遺構変遷概念図

瀬戸　生産地編年			106	瀬戸 灰釉平碗	後期II	268	瀬戸 灰釉折縁中皿	後期II	336	瀬戸 灰釉瓶子	中期II
007	瀬戸 入子	前期III～中期II	144	瀬戸 灰釉折縁深皿	中期IV	269	瀬戸 灰釉卸皿	後期II	337	瀬戸 鉄釉壺	後期
016	瀬戸 灰釉卸皿	後期I or II	170	瀬戸 灰釉平碗	後期III	270	瀬戸 灰釉洗	前期Ib	338	瀬戸 鉄釉擂鉢	後期IV
017	瀬戸 入子	前期III～中期II	171	瀬戸 緑釉小皿	後期II	295	瀬戸 灰釉卸皿	前期II	620	瀬戸 灰釉、柄付片口	中期II
072	瀬戸 緑釉小皿	後期II	245	瀬戸 灰釉卸皿	中期	300	瀬戸 入子	前期III～中期II	717	瀬戸 灰釉四耳壺	前期Ib
073	瀬戸 灰釉平碗	後期I	251	瀬戸 入子	前期III～中期II	332	瀬戸 灰釉直縁大皿	後期III	718	瀬戸 灰釉水注	前期Ib
074	瀬戸 灰釉卸皿	中期I	265	瀬戸 灰釉瓶子	中期I	333	瀬戸 灰釉卸皿	後期III	719	瀬戸 灰釉瓶子	前期Ib
075	瀬戸 天目茶碗	後期I	266	瀬戸 灰釉卸皿	前期II	334	瀬戸 灰釉卸目付大皿	後期III	720	瀬戸 鉄釉片口小鉢	中期II
076	瀬戸 鉄釉擂鉢	大窯I or II	267	瀬戸 灰釉折縁深皿	後期I	335	瀬戸 緑釉小皿	後期II	721	瀬戸 灰釉卸皿	前期III～IV

表11　出土瀬戸生産地編年

の最新のものは76の瀬戸窯鉄釉擂鉢で大窯I or IIの製品であり、16世紀前葉～中葉頃の年代を充てることができる。従ってイコウ93はそれ以降のものと考えられよう。イコウ140下層出土で最新のものは106の瀬戸窯灰釉平碗で古瀬戸後期IIの製品であり14世紀末～15世紀初頭の年代を充てることができる。出土かわらけのほとんどは粉質胎土で、体部は直線的、或は外反気味に立ち上がるものである。イコウ141は覆土堆積の観察から5条の溝に分け、切り合い関係から新旧を判断すると、古いものから順に141C→141E→141D→141A→141Bと掘り直された可能性が高く、浚渫、或は改修が行なわれたものと考えられる。軸方向はN－15°－E前後で、イコウ140とほぼ同様といえる。出土遺物の最新のものは141A出土の170であり、この瀬戸窯灰釉平碗は古瀬戸後期IIIの製品で15世紀前半の年代が充てられる。出土かわらけでは141C・E・Dはやや古めの薄手丸深タイプを含むが、141A・Bには確実に粉質胎土で体部が直線的、或は外反気味に立ち上がるタイプを含んでいる。調査区中央部では東西4間のピット列が1棟確認された。軸方位はN－45°－Eで、イコウ140・141とは異なり、若宮大路を意識したものと考えられ、出土遺物の様相もイコウ140・141に先行するようである。尚、溝以外の遺構出土遺物には粉質胎土で体部が直線的、或は外反気味に立ち上がるタイプのかわらけはみられない。第2面出土遺物の最新のものは338の瀬戸窯鉄釉擂鉢で古瀬戸後期IV、343の常滑窯甕で9型式のものであり、第2面には15世紀前葉～中葉を中心とした年代を考えている。

第3面の遺構配置としては東西方向のCラインあたりを境に北、南で様相が異なるようだ。建物1・2・3、及び井戸の南北軸方位はN－42°－E～N－47°－Eを測り、各遺構には若干の時期差があるにしろ若宮大路を意識した町割りの規制に基づき構築されたものと考えられる。井戸であるイコウ162は建物1に先行し、出土遺物の最新のものである620の瀬戸窯灰釉柄付片口は古瀬戸中期IIの製品で、14世紀前葉の年代が充てられ、622の瓦器質火鉢は14世紀後葉を中心に盛行するものと考えられている。かわらけ集中出土地点は4箇所確認され、Cライン以北に広がるものはない。なかでもイコウ276出土のかわらけはやや古めの様相を呈するが、粉質胎土で体部が直線的、或は外反気味に立ち上がるタイプは含まず、薄手丸深タイプを一定量含む。土壙としたイコウ250はイコウ276の直下から検出され、出土かわらけの様相もほぼ同様といえる。7ライン以東では現代客土による削平が深く、明確な遺構は確認されていないが、堆積土層の観察から第3面における若宮大路西側の南北溝はほぼ9ライン上に西側の立ち上がりを有することが確認された。第3面出土遺物で最新のものは720の瀬戸窯鉄釉片口小鉢で古瀬戸中期IIの製品であり、14世紀前葉の年代が求められ、かわらけではごく少量の手づくね成形を含むが、主体はロクロ成形の薄手丸深タイプと考えられる。イコウ162出土遺物の年代と考え合わせると、第3面の年代は幅広く14世紀代と考えておきたい。

報告書抄録

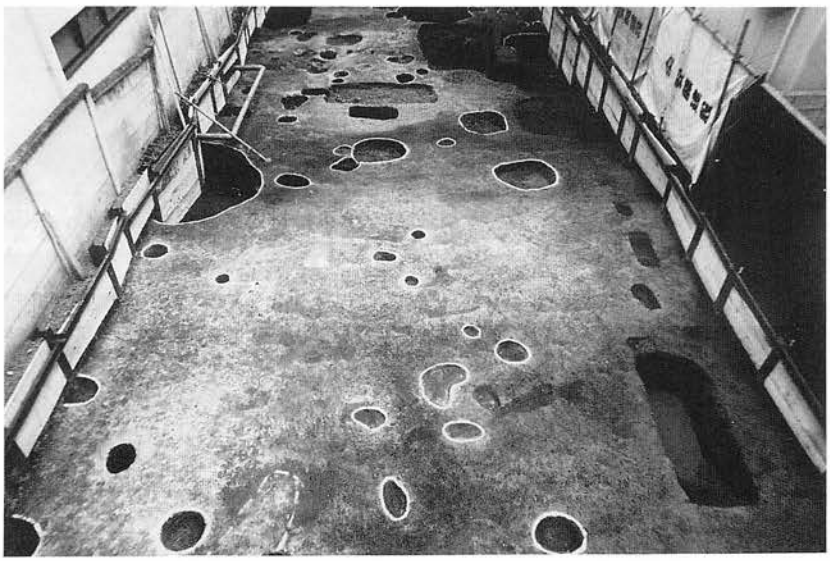
ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	瀬田哲夫・熊谷満
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	かながわけんかまくらしゆきのしたいっちょうめ 神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目273番イ	204	№278			1997.3.12 ～ 1997.6.19	98.82m²	店舗併用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条時房・顕時邸跡	居館・都市	古代 中世 近世	溝 土壙 ピット 掘立柱建物 井戸 凹地	かわらけ、常滑、渥美、瀬戸、備前、青磁、白磁、青白磁、瓦、火鉢、土製品、石製品、骨角製品、金属製品等	●若宮大路の南北軸とは異なる方向を有する15世紀代、及び古代の溝を検出。 ●池と考えられる凹地の検出。

写　真　図　版

◀１．調査地点近景
（東から）

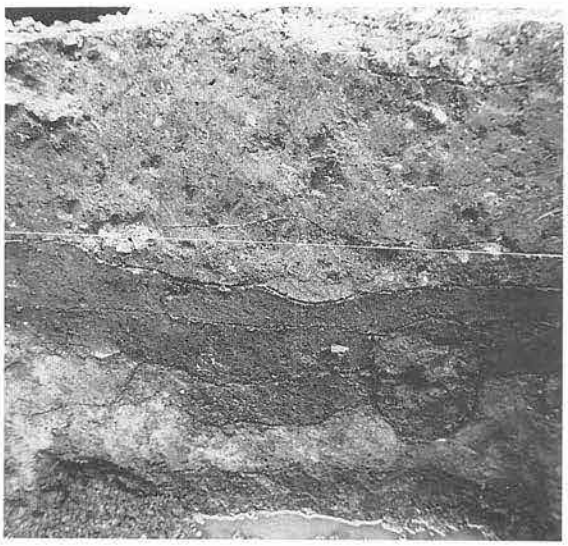


◀２．第１面（西から）

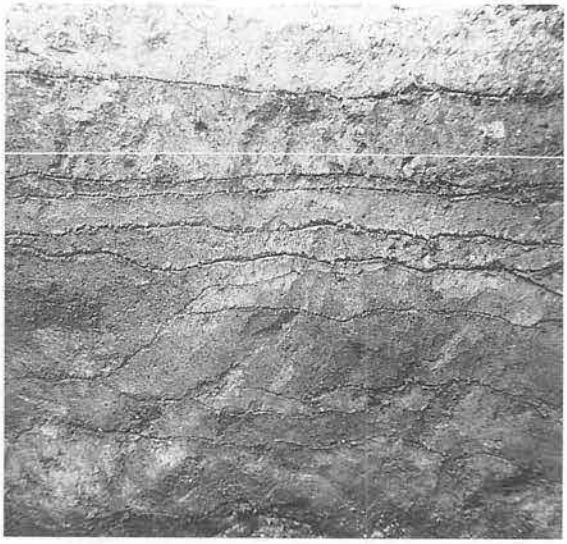
◀３．第１面（東から）

▲１．第１面　イコウ93（南から）

▲２．第２面（西から）

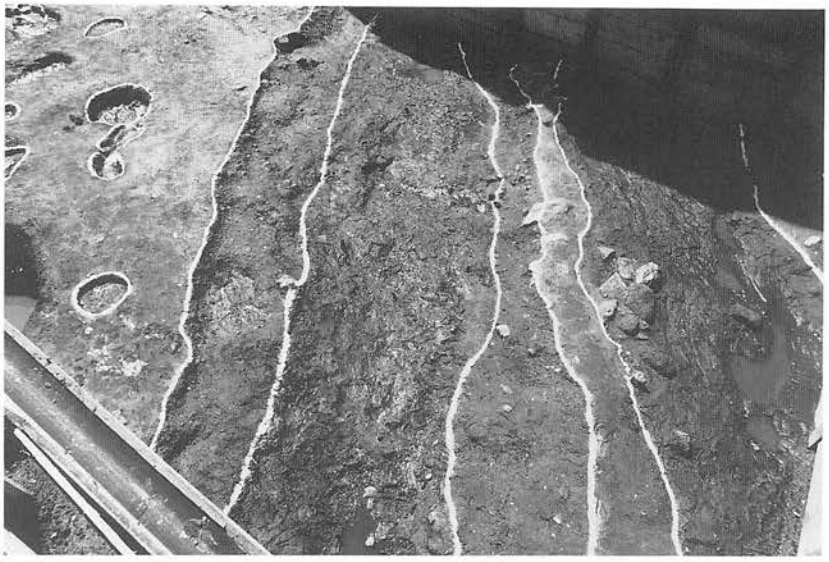


▲３．Ｃ－７グリット　土層堆積
（北から）

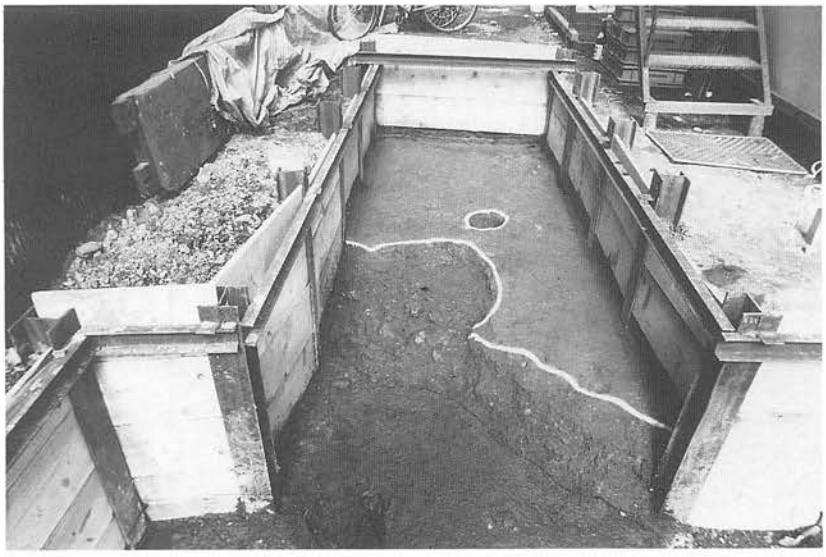


▲４．Ｃ－６グリット　土層堆積
（西から）

◀１．第２面（西から）



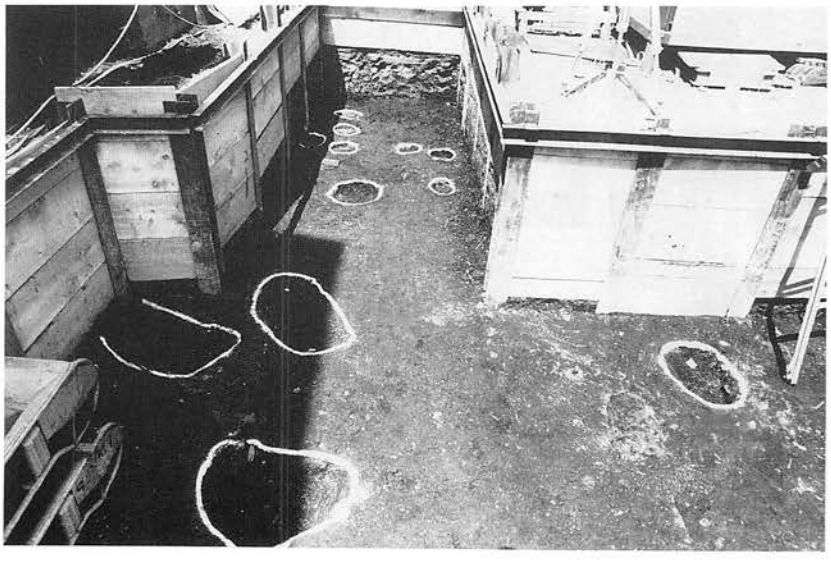
◀２．イコウ140，141
（北から）



◀３．土丹版築
（東から）

◀１．第３面（西から）

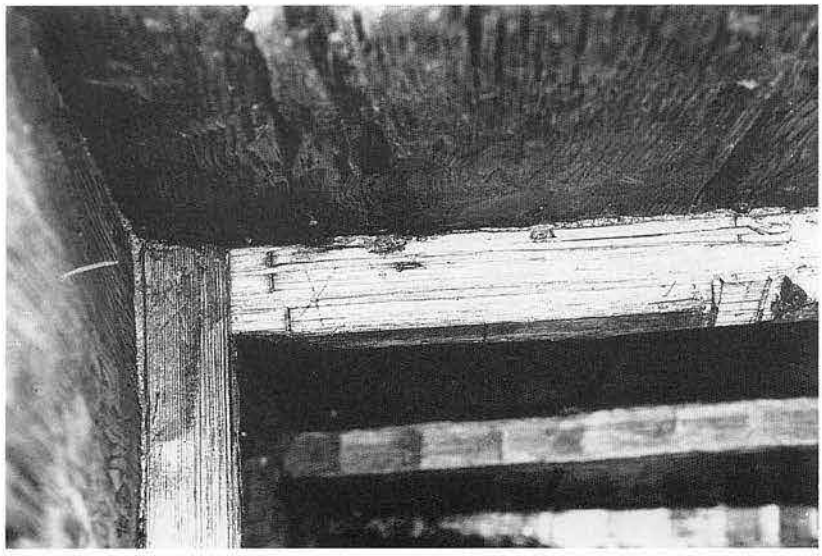
◀２．掘立柱建物
（西から）



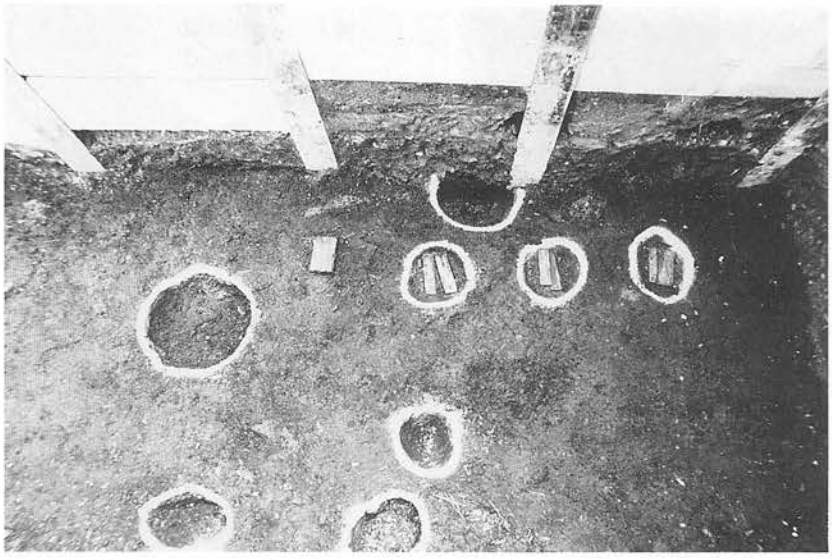
◀３．調査区西部
（東から）

◀１．イコウ162
（北から）

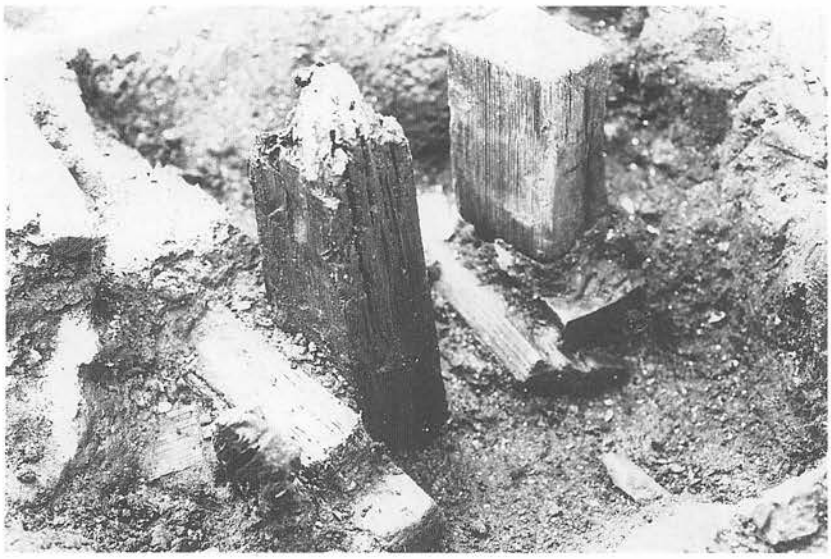
◀２．イコウ162
（北から）



◀３．イコウ162　木組み状況
（南から）



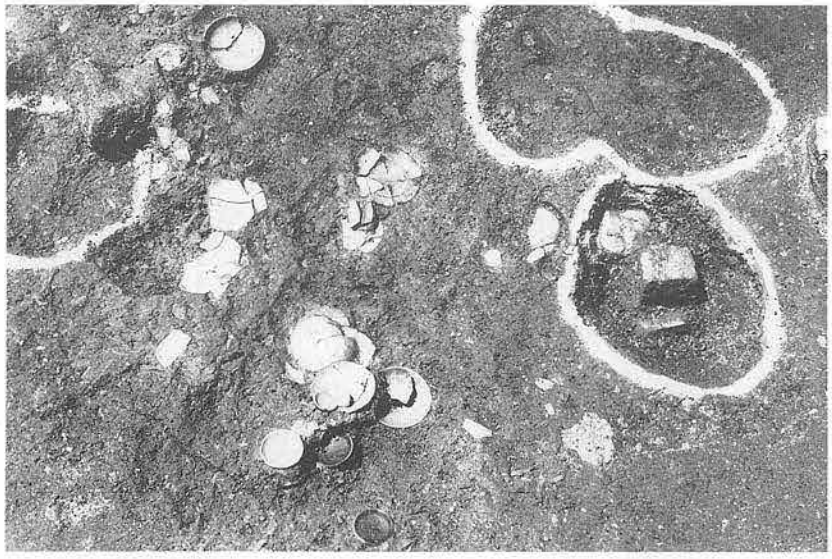
◀１．調査区西部
（北から）



◀２．イコウ222Ｂ　柱検出状況
（東から）

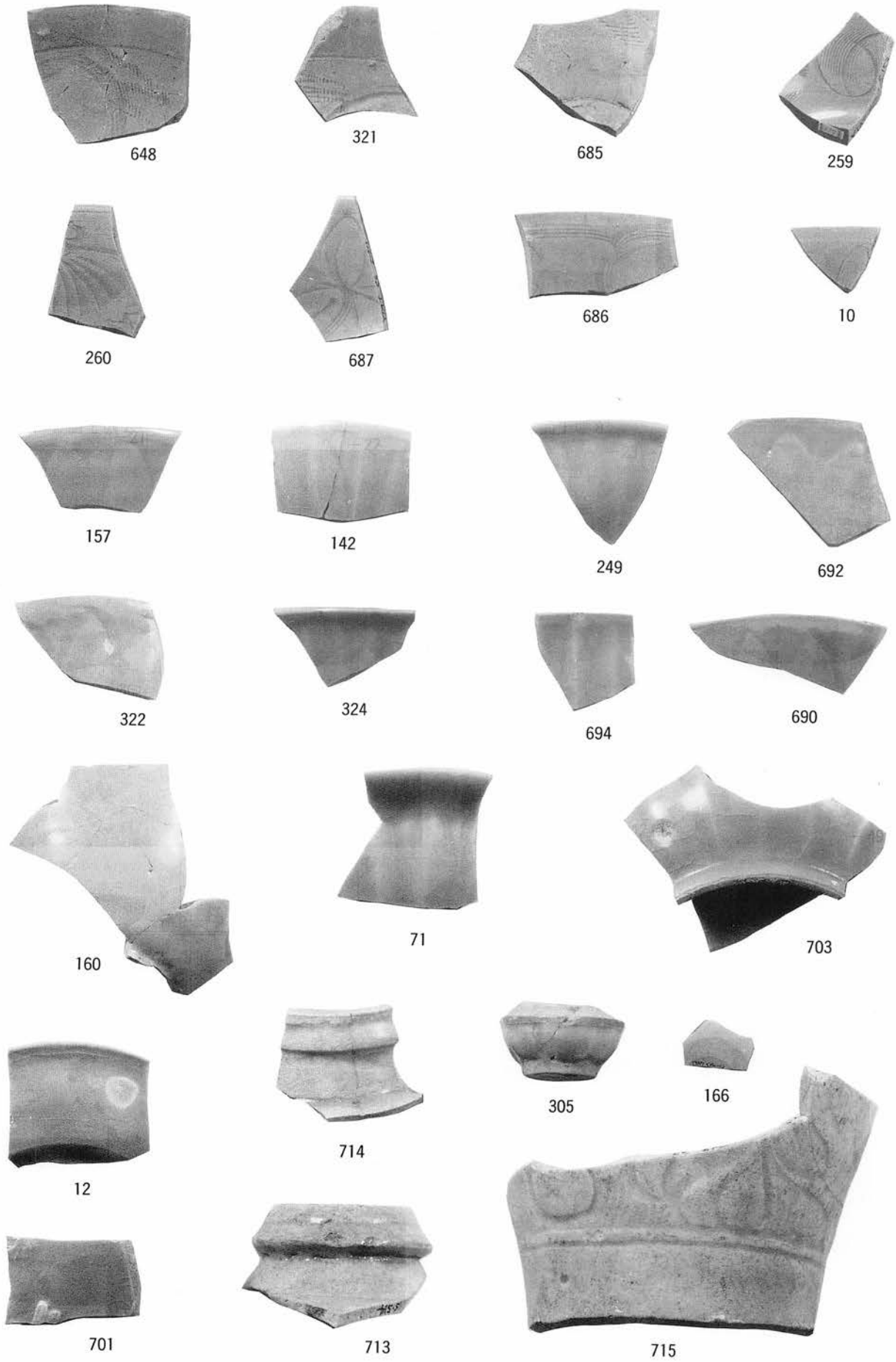
◀３．イコウ229
（西から）

◀1．イコウ275
（北から）

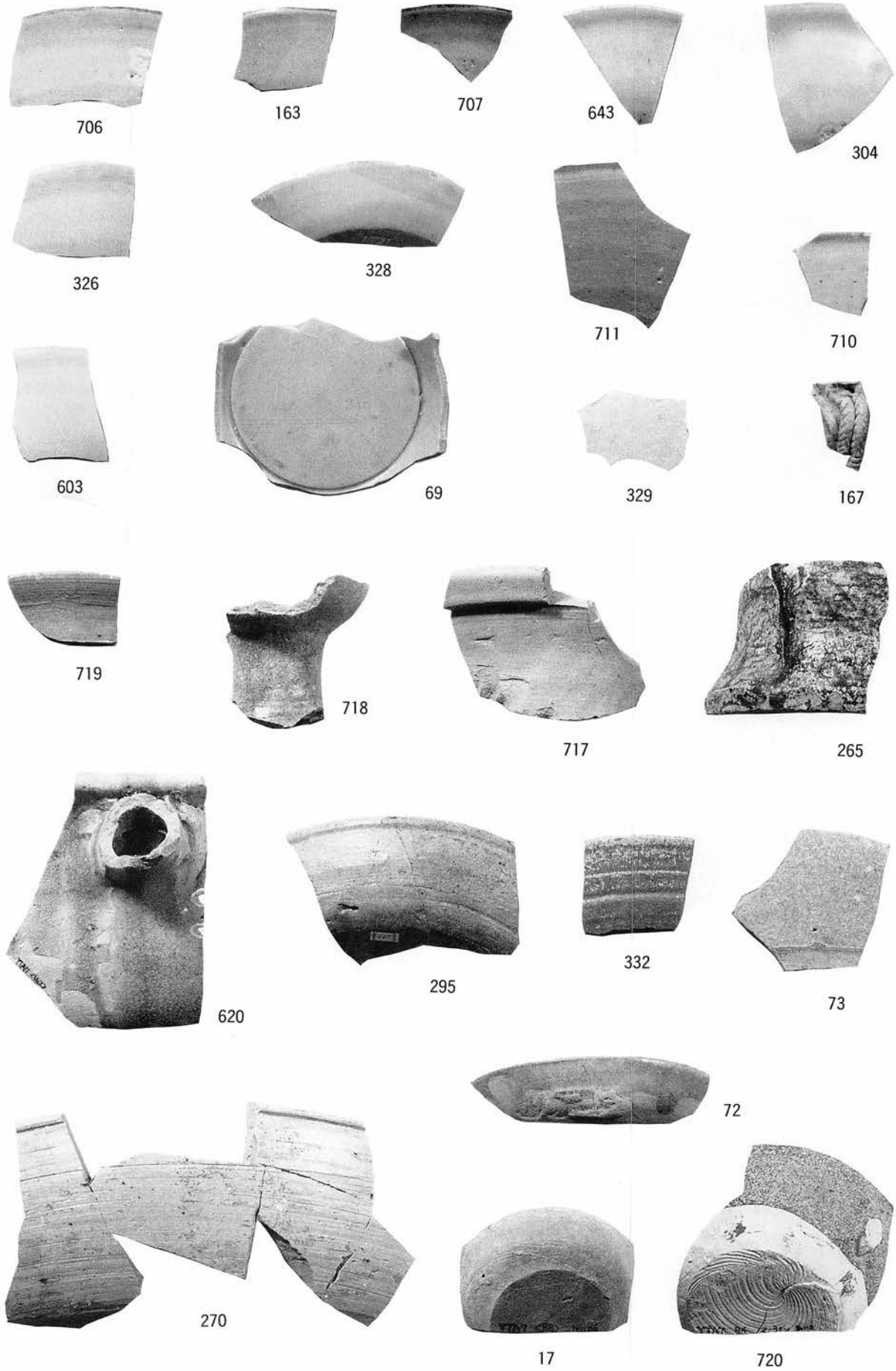


◀2．イコウ275
（北から）

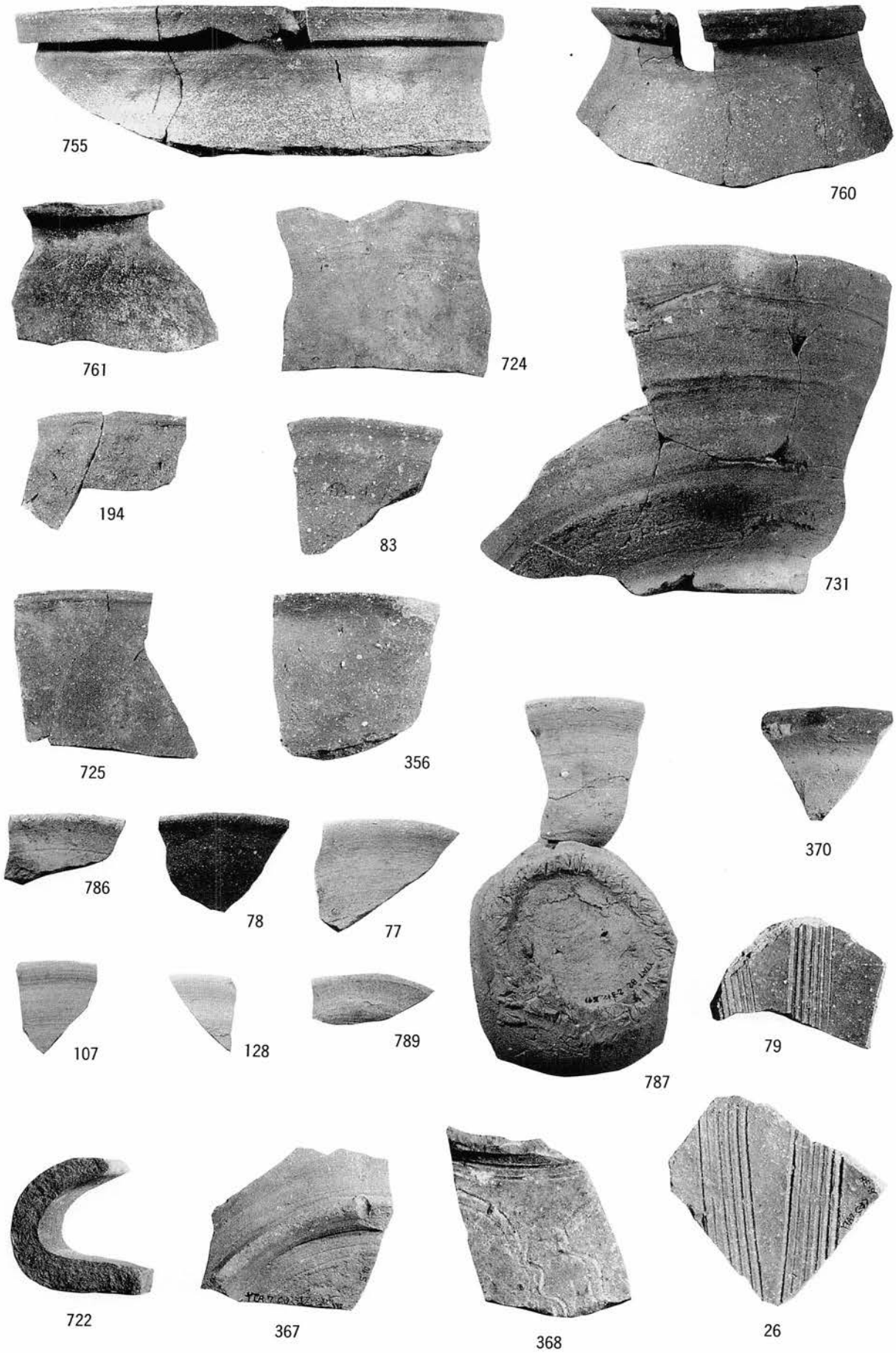
◀3．イコウ276
（北から）


648
321
685
259
260
687
686
10
157
142
249
692
322
324
694
690
160
71
703
12
714
305
166
701
713
715

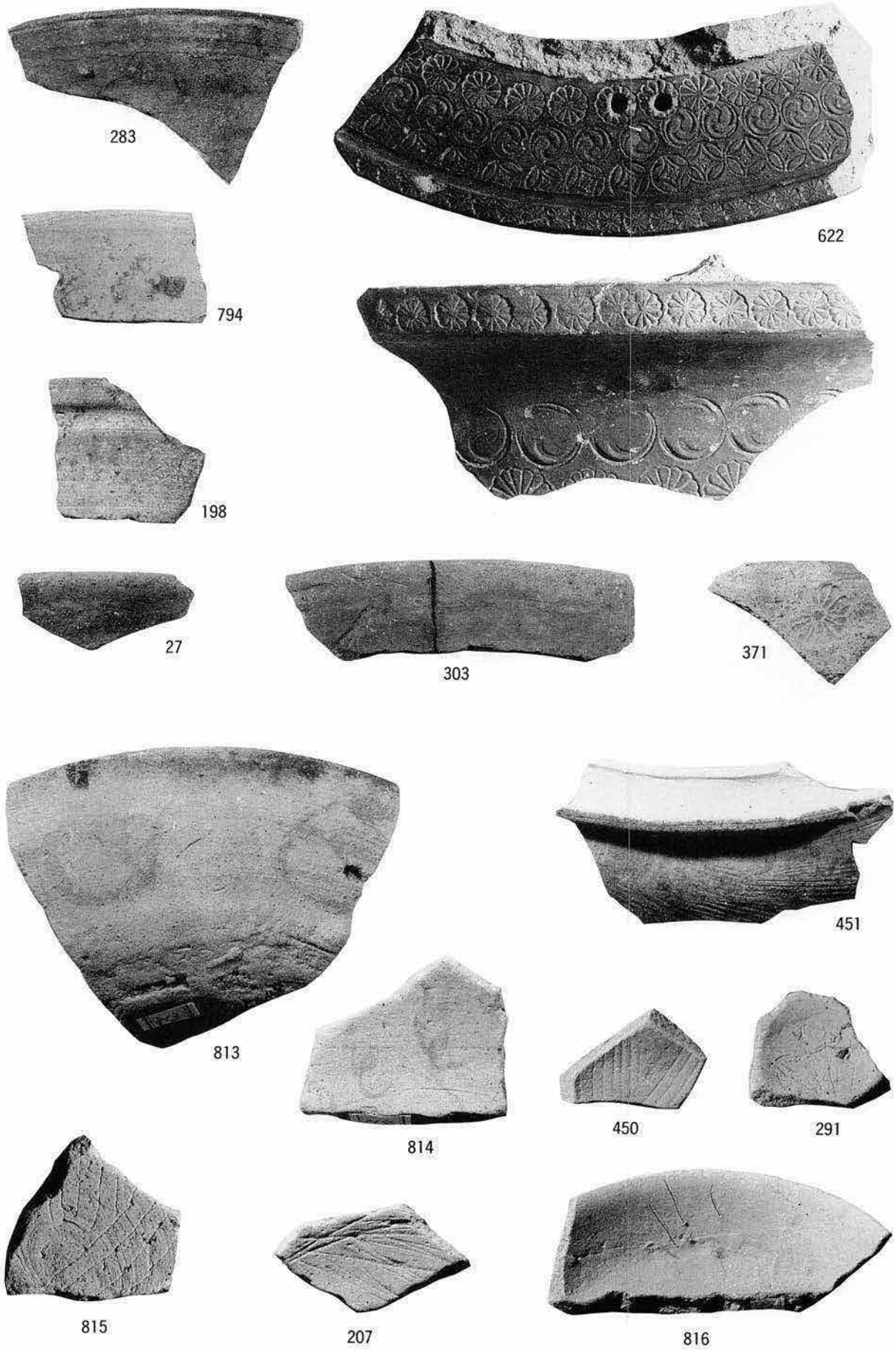
▲出土遺物（１）


706
163
707
643
304
326
328
711
710
603
69
329
167
719
718
717
265
620
295
332
73
72
270
17
720

▲出土遺物（2）


755
760
761
724
194
83
731
725
356
370
786
78
77
107
128
789
79
787
722
367
368
26

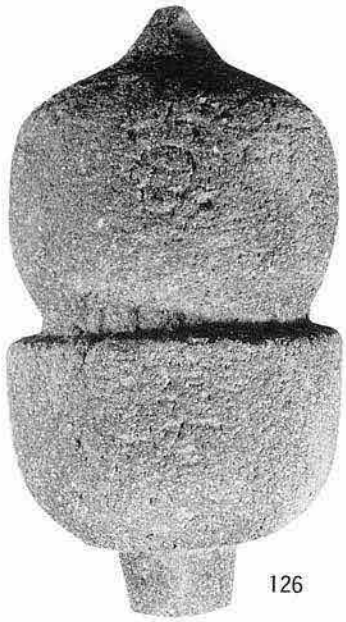
▲出土遺物（3）

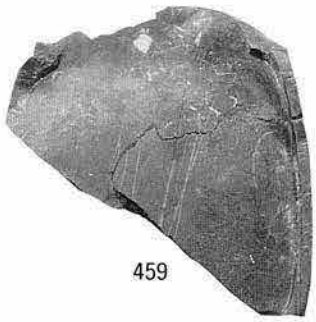


▲出土遺物（4）

P L 12

658


126


459

943

125

104

942

941

226

653

460

940

105

676

225

808

▲出土遺物（5）

宝蓮寺跡（No.374）

佐助二丁目897番11地点

例　　言

1．本書は宝蓮寺跡内の神奈川県鎌倉市佐助二丁目897番11における個人専用住宅建設に伴う国庫補助事業発掘調査の調査報告である。

2．発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成９年３月17日より同年５月21日にかけて実施した。調査対象面積は63.20m²である。

3．調査にあたっては以下の体制を編成して行った。

調査担当　田代郁夫

調　査　員　根本志保

浜野洋一

調査補助員　牛迫こまち、浜田美智子、岩崎卓治、沢野麻美、犬塚知孝、田中克己

調査協力者　岸親男、田口豊、星富蔵、出川清次、渡辺輝彦、宮崎明（以上、鎌倉市シルバー人材センター）

4．本書作成に当たっては、遺構・遺物実測、トレースを宗臺秀明、宗臺富貴子、小野和代、馬瀬直子、笠原さやかが行った。また、若松美智子、片山健介、沢野麻美の協力を得た。本文は遺物関係を宗臺富貴子が、遺構関係を根本志保が執筆し、まとめは調査関係者討議の上、根本志保が責任執筆した。編集は根本志保が行った。また、自然科学分析は㈱パレオ・ラボに委託した。

5．出土遺物の詳細については本編後段の遺物観察表を参照されたい。

6．本書に使用した遺構の写真は根本志保が、遺物の写真は馬瀬直子が撮影した。

7．本書の遺構、遺物の縮尺は次の通りである。

遺構全測図：１／120　個別遺構実測図：１／60　遺物実測図１／３。なお、各挿図にスケールを表示している。

8．本発掘調査によって出土した遺物、および調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

9．発掘調査および本書作成に際し、鎌倉考古学研究所の方々にご協力、御教示賜った。記して深く感謝の意を表したい。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 171
第２章　調査の経過と概要 …… 174
　第１節　調査の経過 …… 174
　第２節　遺跡の層序と調査成果の概要 …… 174
第３章　検出した遺構と出土遺物 …… 175
　第１節　第３面の遺構と遺物 …… 176
　第２節　第２面の遺構と遺物 …… 176
　第３節　第１面の遺構と遺物 …… 184
第４章　調査成果とまとめ …… 198
　第１節　遺構の変遷 …… 198
　第２節　出土遺物の概要 …… 198
　第３節　まとめ …… 199
附編　宝蓮寺跡の花粉化石 …… 200

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図 …… 173
図２　調査地と測量方眼設定図 …… 173
図３　第３面全測図 …… 175
図４　第３面直上出土遺物 …… 176
図５　第２面全測図 …… 176
図６　第２面建物１ …… 177
図７　第２面建物１ピット60
　出土遺物 …… 178
図８　第２面溝55 …… 178
図９　第２面土壙54 …… 179
図10　第２面土壙54出土遺物 …… 179
図11　第２面土壙109 …… 179
図12　第２面ピット17出土遺物 …… 179
図13　第２面下出土遺物 …… 180
図14　第２面上第４層中出土遺物（１）…… 181
図15　第２面上第４層中出土遺物（２）…… 182
図16　第２面上第４層中出土遺物（３）…… 183
図17　第１面全測図 …… 184
図18　第１面土壙110 …… 185
図19　第１面土壙120 …… 185
図20　第１面土壙120出土遺物 …… 185
図21　第１面下出土遺物（１）…… 186
図22　第１面下出土遺物（２）…… 187
図23　第１面上出土遺物（１）…… 188
図24　第１面上出土遺物（２）…… 189

表　目　次

表１　遺物観察表（１）～（８）……190～197

図 版 目 次

図版１　a．調査区壁土層堆積状況 …… 207
b．第３面北側
c．第２面北側
図版２　a．第２面溝55 …… 208
b．同左近景
c．第１面南側
d．第１面土壙210断面
図版３　遺物 …… 209

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

鎌倉駅から西へ300m程の所に位置する源氏山から南に延びる丘陵を西に越えると、南北に長い佐助ヶ谷と呼ばれる谷戸がある。この佐助ヶ谷は開口部幅400m、奥行き900mほどの主谷と多くの小支谷で構成され谷の中央を佐助川が流れる。佐助川は谷戸の開口部付近から東流して、鎌倉の沖積地と砂丘帯が接する下馬の辺りで滑川に合流している。

遺跡はこうした佐助ヶ谷の開口部から750m谷奥へ入った、西に向かって開口する小支谷に位置する。この小支谷の最深部は平場になっており、小支谷の中央にはそれにつづく細い坂路がある。調査地点はその坂路の麓の南側に位置し、22.9mの海抜高である。

「佐助ヶ谷」の地名の由来は判然としないが、『吾妻鏡』（文献１）には「佐介」と書かれて寛元四年（1246）六月二十七日条に初めて現れる。「入道大納言家渡御干入道越後守時盛佐介第。」また、寛元五年（1247）正月三十日条に「越後入道勝圓佐介亭後山光物飛行。」とあり、北条時盛の屋敷がここ佐助にあったことを窺わせる。続いてこの地に居を構えた人物の史料をあたると、『鎌倉大草子』（文献２）の「上杉禅秀の乱」の件に応永二十三年（1416）十月二日足利持氏が大倉御所を遁れ出て「塔辻は敵籌を焼て警固しける間。岩戸のうへの山路をめぐり。十二所にかゝり小坪を打いで。前はまを佐介へいらせ給ふ。」とあり、15世紀初頭に上杉憲基の屋敷があったことが知れる。有力な武家の屋敷が占地するこのような背景から、今は佐助地域の小字名や文献史料の中でその名を留める廃寺が小支谷内に多く存在していたことも容易に想像できる。宝蓮寺もそうした廃寺の一つである。『新編相模国風土記稿』（文献３）には「法蓮寺蹟　佐介谷にあり」とある。遺跡名の宝蓮寺跡はこの廃寺に由来する。現在、佐助谷には、銭洗弁財天と今回の調査地点に西対する小支谷の最奥部山腹に鎮座する佐助稲荷神社がある。佐助稲荷神社は社伝によれば、建久年間（1190～99年）に頼朝が畠山重忠に再建させたと伝える（文献４）。このような歴史的背景をもつ佐助ヶ谷内における発掘調査の事例は少なく、その多くは「やぐら」の調査である。

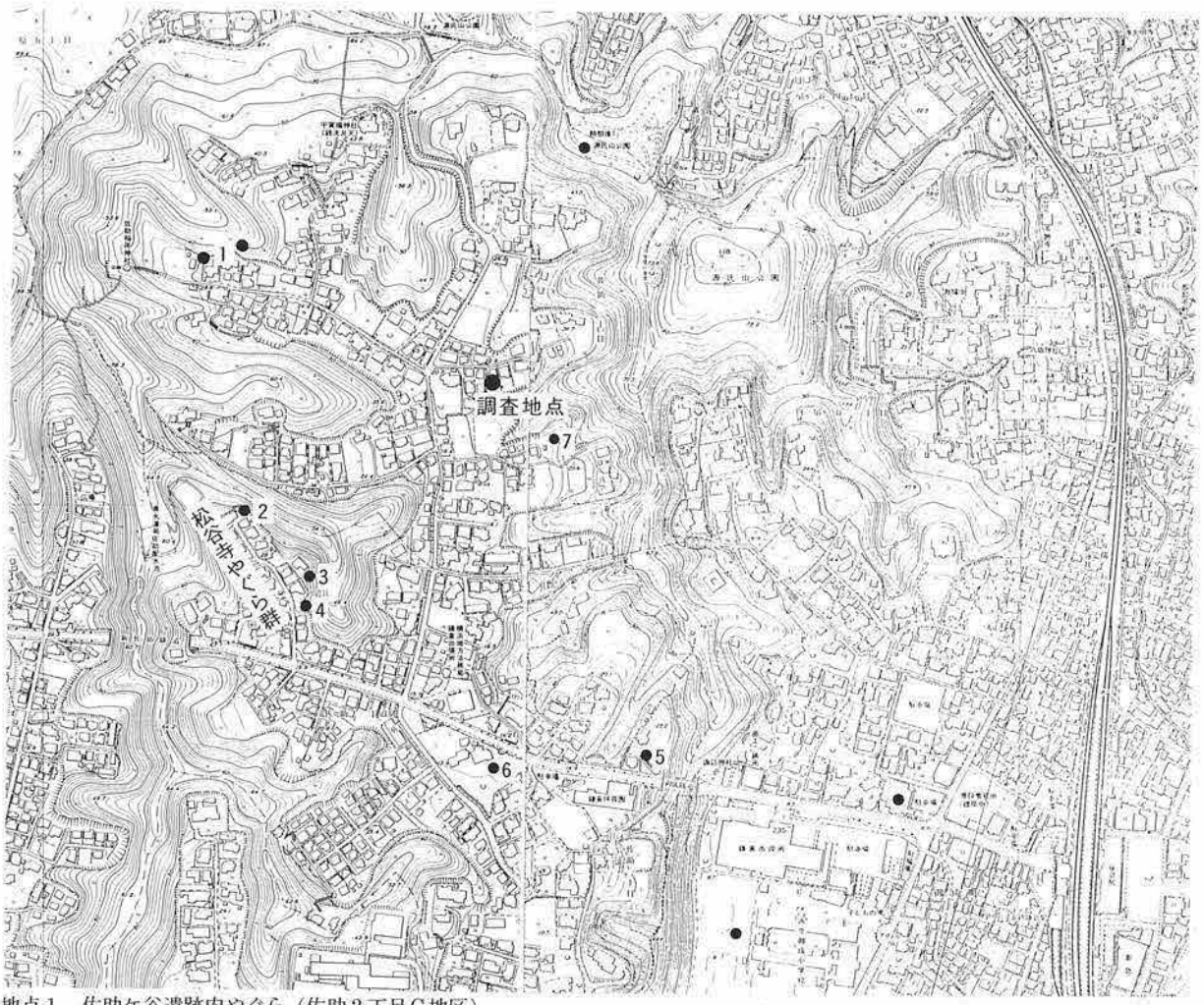
佐助稲荷神社の位置する佐助谷の北側の山裾（地点１）では、平成８年２月から３月にかけて14世紀末葉から15世紀前葉ころに廃絶したとみられる２基のやぐらが調査され（文献６）、また平成５年と９年には、佐助ヶ谷の開口部側の小支谷（地点２・３・４）に13世紀後半から14世紀前半ころのものとみられる「やぐら」が合計17基発見された。後者の「やぐら」の発見された一帯は「松ヶ谷」と称され、かつて松谷寺のあった地と推定されている（文献８）。

この他の居住地遺跡としては、佐助ヶ谷開口部から300mほど谷奥へ入った東側支谷内（地点５）において、昭和61～62年にかけて行われた約400m²の調査の結果、鎌倉時代後半から南北朝時代に及ぶ７枚の生活面が確認され、土壙、柱穴、礎石、溝、据甕址のほか粘土採掘坑が検出されている（文献４）。次いで、平成２年度の鎌倉税務署建設に伴う約900m²の発掘（地点６）では溝、池、井戸、門、建物など、13世紀中頃から16世紀にわたる９期にも及ぶ遺構群を検出し、大別して５時期（Ⅰ～Ⅴ期）の遺跡の変遷が想定されている。この遺跡の性格について、その立地や形代などの特徴的な出土遺物から見て、Ⅴ期（16世紀・水田？）を除いてほぼ一貫して寺院の一角を占めていたと推定されている（文献７）。また、この調査では多数の「板壁掘立柱」構造の建物が良好に検出されたほか、漆製品や木製品などの大量の有機質遺物が出土し、中世鎌倉における建物遺構及び出土遺物の研究に一つの画期をもたらした。その後、平成７年に今回の調査地点に隣接する佐助二丁目879番地点において、住宅建設に伴う60m²の

調査が行われ（地点７）、中世に帰属する井戸１基、溝２条、柱穴５口、土壙３基などが検出されている（文献９）。この様に調査件数は少ないながら、佐助ヶ谷には濃密に中世の遺跡が残されており、それらの多くが寺院との関連を示していることが注意される。

引用および参考文献

1　『新訂増補國史大系　吾妻鏡』第三巻　362頁、373頁　吉川弘文館。
2　『鎌倉大草子』　塙保己一編『群書類従・第二十輯　合戦部』669頁　續群書類従完成會。
3　『新編相模国風土記稿』巻之八十九　村里部　鎌倉郡巻之二十一　『大日本地誌大系』第四巻　341頁　雄山閣。
4　鎌倉市史編纂委員会　1964　『鎌倉市史　社寺編』　141―142頁　鎌倉市。
5　手塚直樹他　1989　『佐助ヶ谷遺跡―佐助一丁目620番地点―』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団編。
6　宮田真・滝沢晶子他　1997『佐助ヶ谷遺跡内やぐら―平成７年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書―』　佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団。
7　斉木秀雄他　1993　『佐助ヶ谷遺跡』　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団。
8　宗臺秀明・宗臺富貴子　1998「松谷寺跡内やぐら　平成５年度」『中世石窟遺構の調査「―鎌倉・六浦所在の『やぐら』群―』　東国歴史考古学研究所。
宗臺富貴子　1998「松谷寺やぐら　平成９年度」『中世石窟遺構の調査「―鎌倉・六浦所在の『やぐら』群―』　東国歴史考古学研究所。
田代郁夫・宗臺富貴子　1998「松谷寺跡内やぐら　平成９年度」『中世石窟遺構の調査「―鎌倉・六浦所在の『やぐら』群―』　東国歴史考古学研究所。
9　「鎌倉市№74・佐助ヶ谷遺跡（№374）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告39』　24頁　神奈川県教育委員会。



地点1．佐助ケ谷遺跡内やぐら（佐助2丁目C地区）
地点2．松谷寺跡内やぐら（佐助1丁目C地区）
地点3．松谷寺やぐら（佐助1丁目19－4）
地点4．松谷寺跡内やぐら（佐助1丁目）
地点5．佐助ケ谷遺跡（佐助1丁目620番地点）
地点6．佐助ケ谷遺跡（税務署用地）
地点7．佐助ケ谷遺跡（佐助2丁目879番地点）

図1　調査地点位置図

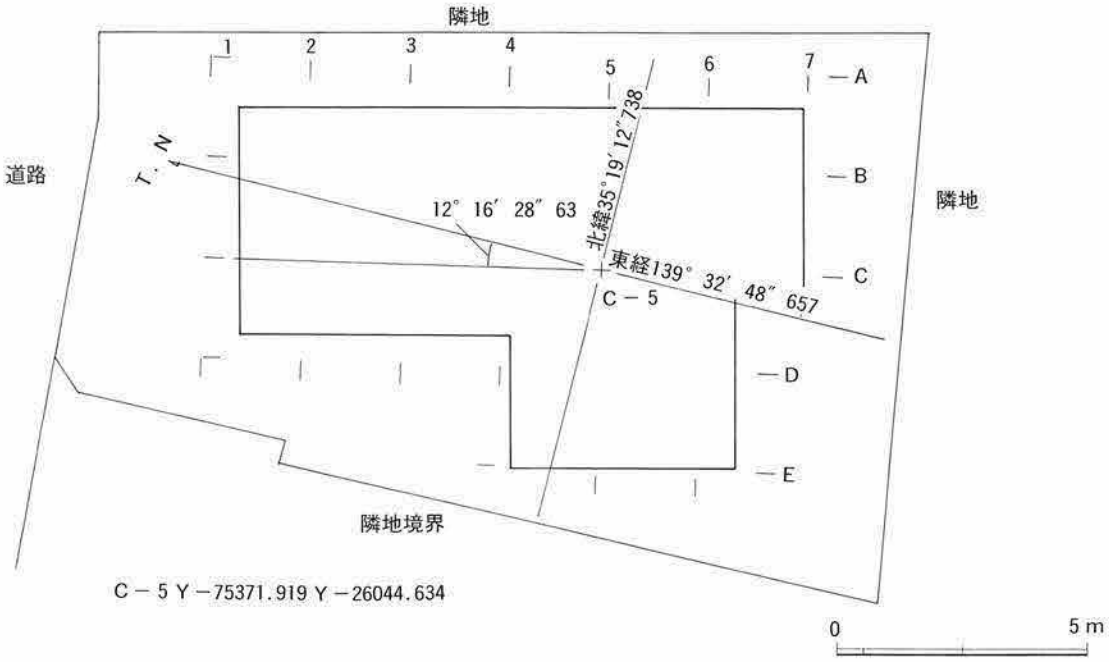


図2　調査地と測量方眼設定図

第２章　調査の経過と概要

第１節　調査の経過

今回の調査地点は鎌倉市佐助二丁目897番11に所在し、個人住宅建設に伴う国庫補助事業として発掘が行われた。住宅建設に関わる63.20m²が調査範囲である。調査にあたっては、廃土処理の関係上、調査区を南北二区にわけ、南側を１区、北側を２区として、１区より調査を開始し、１区調査終了後に２区の調査を行った。

調査における測量基準線は、調査区の東軸に合わせ任意に南北軸を設定し、調査区内は２ｍ方眼に区割し、南北方向に北から算用数字を、東西方向に東からアルファベットを付した。各方眼の名称には北東隅の交点を与えた。なお、Ｃライン北向き方向線は真北より、12°16′28″西偏する。

Ｃ－5グリットの北緯、東経、国家座標値などの地理的データーは図２を参照されたい。

発掘調査は平成９年の３月17日より始め、同年５月21日まで行なった。調査はまず、事前に行われた試掘調査の資料に基づいて、現地表下0.7m内外まで堆積する近現代の攪乱と客土層及び近世耕作土を重機により除去し、以後、人力による発掘を開始した。

第２節　遺跡の層序と調査成果の概要

調査区内の土層堆積は、場所によって厚薄の差はあるが、概ね均等であった。

海抜高22.9mの現地表面は厚さ30～40cm程の瓦礫を含む表土で構成され、その下に近世耕作土と考えられる厚さ20～30cmの明灰褐色土（第１層）が堆積する。第１層の中程には、部分的に宝永スコリアが堆積する。

第２層は厚さ20cm程の暗褐色土で中世遺物を包含する。調査にあたっては、この遺物包含層を人力により掘り下げて第３層上面の第１面を検出した。

第１面は土丹（シルト岩）を主として敷き詰めた層（第３層）と黒褐色の粘質土（第４層）の地業層とで構成されるが、第３層面上は凹凸が大きく空隙が多く粗であることなどから、この土層上面そのものが生活面であったとは考えにくく、後世に広範に削平されたものと考えられる。削平された地業面の海抜高は21.9mである。この削平がどれほどの規模で行われたのかは不明であるが、今回の調査地の向かいの宅地や西側の宅地は、小支谷の中央を通る道路面より低いため、調査地点と同様の削平と造成が付近にまで広がっているものと考えられる。検出した遺構は土壙２基、ピット26口、Ｌ字型を呈すると思われる柵列１条である。

第２面は粘土、砂、細土丹を築き固めた版築層（第５層）で構成される。厚さは0.30～1.20mと厚く、面上の海抜高は21.5mである。また、版築面上の第４層は第２面の整地層で、多くの遺物と炭化物を含有し水気に富み厚さは10～15cmある。第２面で検出した遺構は、鎌倉石を配列した溝状遺構１条、土壙２基、確認規模４×２間の掘立柱建物１棟（建物１）、柵列１条、ピット49口である。

第３面は黒色粘質土に細かな土丹が微量混ざる中世基盤層、すなわち、第７層の上面であり、東から西へわずかに下る。海抜高は20.5m～20.8mである。

第３面で検出した遺構はピット20口、溝状遺構１条、土壙１基である。

第３章　検出した遺構と出土遺物

今回の調査で検出された、第１～第３面の生活面とそこに検出した遺構と遺物を古い方から（下層から上層へ）順次説明していく。

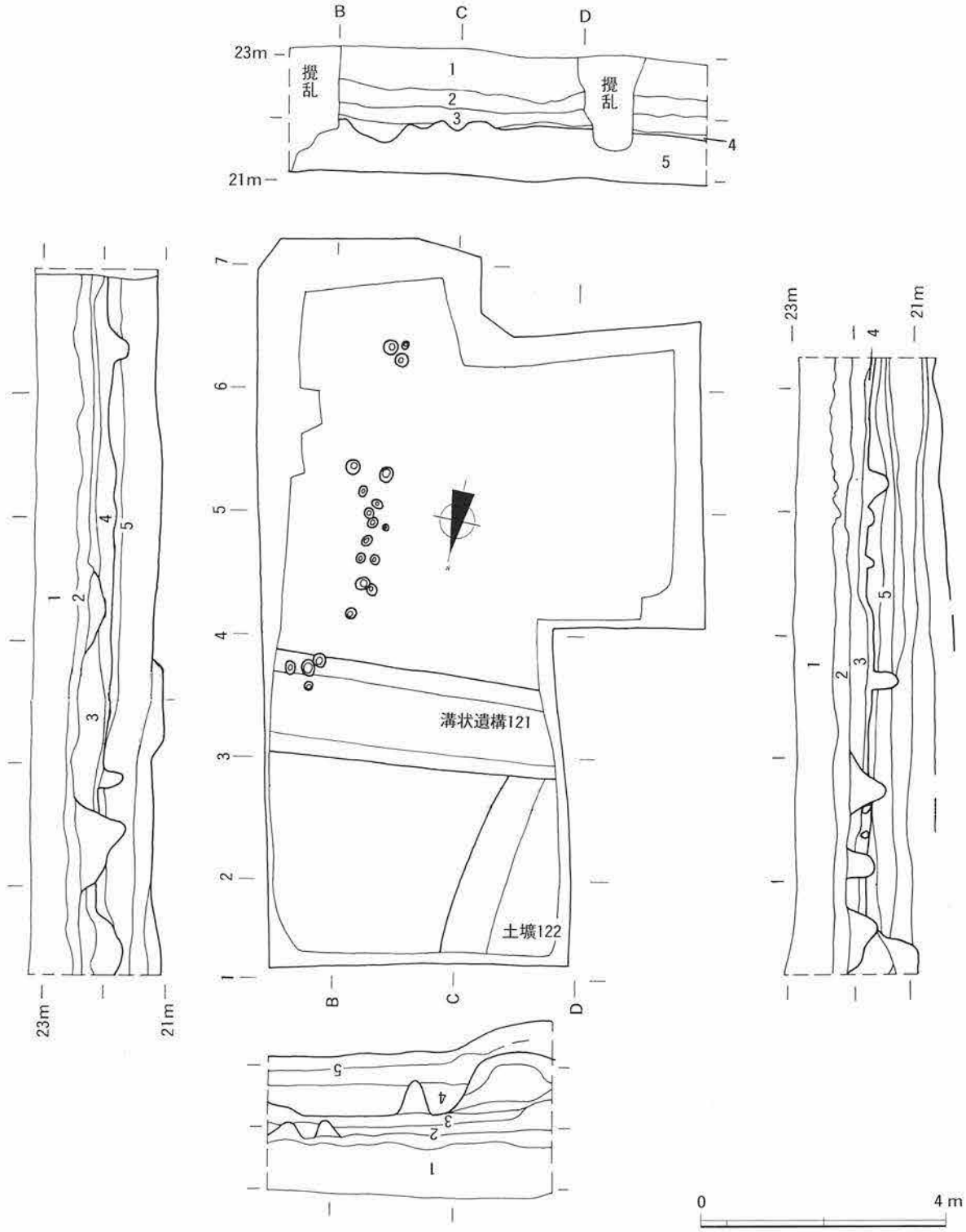


図３　第３面全測図

第１節　第３面の遺構と遺物（図３）

図４　第３面直上出土遺物

第３面は中世の地山上面を生活面とし、調査地点における最古の生活面である。検出された遺構は、溝状遺構１条、土壙１基、ピット16口である。生活面はほぼ平坦で、東から西へと緩やかに下がる傾斜面をなし、海抜高20.5m程である。遺物の出土量は少ない。

溝状遺構121（図３）

調査区の中央やや北側に東西方向に位置する。最大幅は２ｍ。深さは30cm。確認できた全長は５ｍ90cm。西側では土壙122を切る。

土壙122（図３）

調査区の北西端、Ｃ－１・２グリッドに発見した。調査区の隅であり、そのほとんどをが調査区外に展開するため、全貌は明らかではなく、遺構の規模、形態は不明である。覆土は土丹を混在する黒色粘質土。土壙の壁の立ち上がりは緩やかである。

ピット群

ピットは合計16口を数えるが、いずれも直径が10～20.5cm、深さは深いものでも10cm程度の浅いものばかりである。柵列の杭痕とも考えられるが、その性格は確定しづらい。覆土は暗青灰色砂。ここからの出土遺物はなかった。

直上出土遺物（図４）

図４－１は３面直上より出土した暗淡茶色粉質胎土のかわらけ。器壁はつまみ上げたように薄くなっている。

第２節　２面の遺構と遺物（図５）

第２面を構成する地業層は、下層から細土丹、砂、細土丹、粘土、細土丹、砂、粘土の順に堆積して築き固めた版築層である。各版築の厚さはそれぞれ10～20cm内外で、こうした版築層が調査区全体的に広がることが確認でき、かなり大がかりな地業であったことが考えられる。面上の海抜高は21.5mで

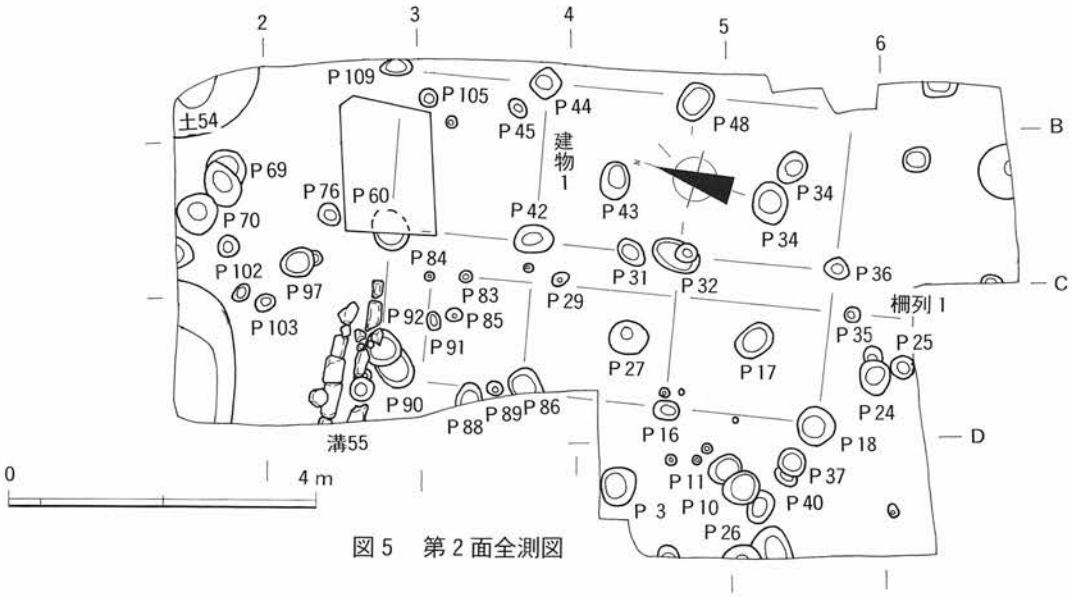


図５　第２面全測図

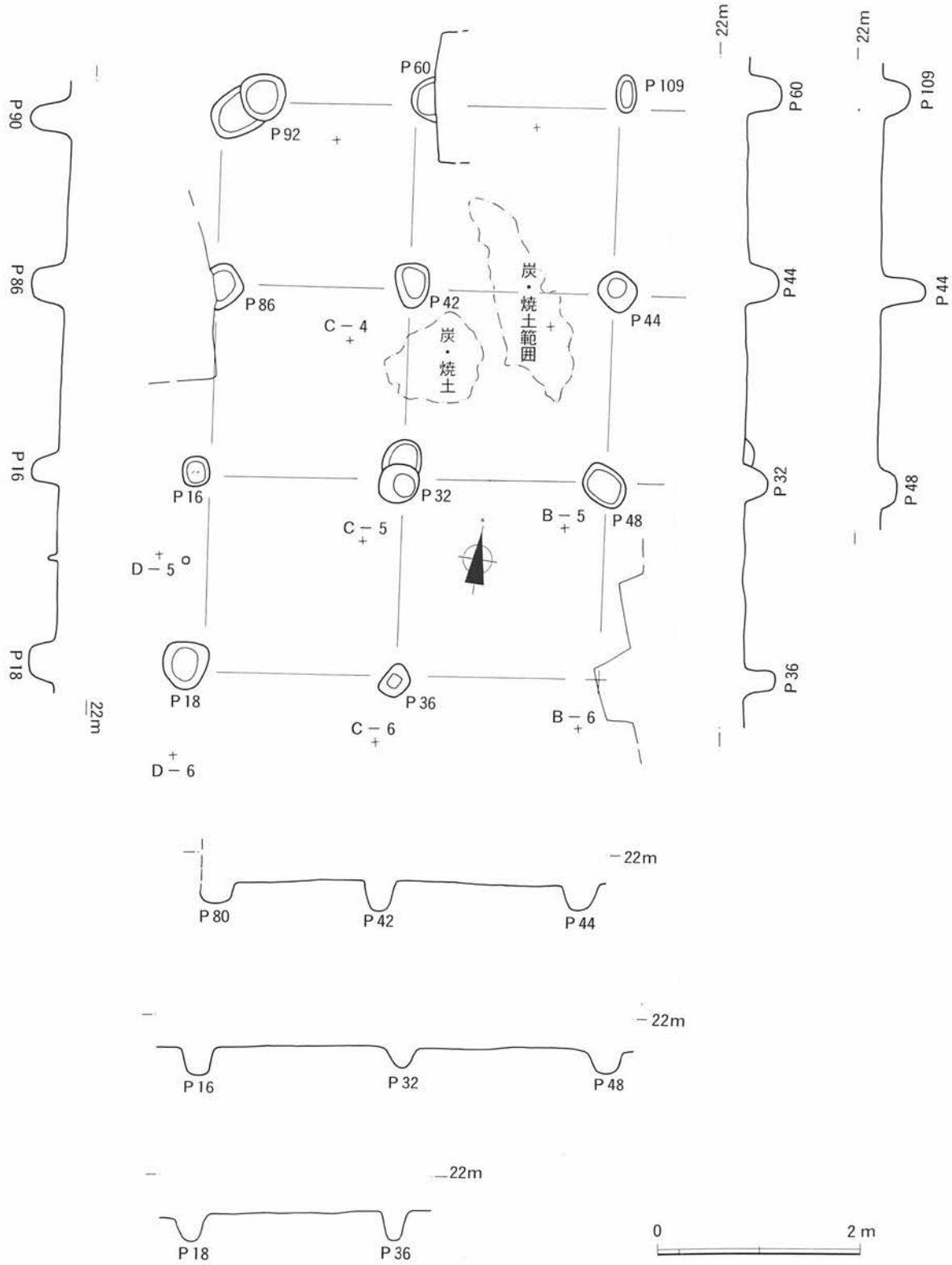

P 60
P 109
P 92
P 86
P 42
P 44
炭・焼土
炭・焼土範囲
C－4
P 16
P 32
P 48
C－5
B－5
D－5
P 18
P 36
C－6
B－6
D－6
P 90
22m
P 80
0
2 m

図6　第2面建物1

ある。

第２面で検出した遺構は、鎌倉石を配列した溝状遺構１条、土壙２基。掘立柱建物１棟（建物１）、柵列１条、ピット49口である。溝状遺構、掘立柱建物、柵列は混在し、微妙に時期差があるが、帰属する遺物が極少なく具体的には明らかにならない。

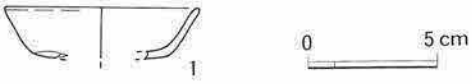


図７　第２面建物１ピット60出土遺物

建物１（図６）

調査区の中央に検出された。確認された限りの規模は、桁行４間、梁間２間の南北棟である。柱穴の中から礎板などは出土していない。柱間は、平均芯々距離値1.9m。

なお、建物１の範囲内で厚さ５cmの焼土の広がりを確認した。焼土の範囲は図に示したとおり不整形であるが、建物１が火災により焼失した可能性を示唆している。

建物１ピット60出土遺物（図７）

図７―１は建物１に帰属する柱穴60より出土した瀬戸碗型入子である。体部は横方向のナデで丁寧に調整され、外底部はヘラ切りもしくはヘラ削りで調整されている。摩滅痕は見られない。

溝状遺構55（図８）

調査区の北西、Ｃ－２グリッドで検出した。調査区西壁から東方向に延びるが、途中で切れる。俗に「鎌倉石」と呼ばれる砂質凝灰岩を両岸に配して護岸としている。溝の構造部は幅20cm、確認された長さ1.5m。深さ15cm。溝の作りは粗雑である。鎌倉石は遺存状態の良好なもので幅が20cm、長さは40cm、厚みは15cmである。柱穴90・92を切って検出したため、建物１の廃絶後に設けられた遺構と考えられる。また、溝と同時期の建物遺構や溝が調査区内に確認できなかったため、本溝の性格を判別しがたいが、その設置方向が建物１と同様であることから、調査区内の敷地利用法に変化のなかった事を確認できる。

土壙54（図９）

調査区北東隅、Ａ－１グリッドに位置する。調査時には平面的に検出できず、セクション図から復元し図示した。覆土は暗褐色土でやや青みがかり、土丹を多く混入する砂質。確認された最大幅は1.8m、深さ43cmである。覆土から建物１の廃絶後の第２面整地時に埋め戻されたと考えられる。

土壙54出土遺物（図10）

図10―１は亀山の甕胴部片と思われる。胎土は黒色微砂、白色砂を混じえる灰白色瓦質土。器表はやや黒色がかる。

土壙109（図11）

調査区の北西隅、Ｂ・Ｃ－１グリッドに位置する。遺構はその殆どが調査区外に展開するため、その形態は不明であるが、やや方形を呈するものと思われる。深さは90cmである。

柵列１（図５）

柵列と想定できる小さなピットの並びは調査区中央西側でＬ字型を呈している。確認された規模は南北に４穴、南端で西方に曲がり、１穴を数えて構成

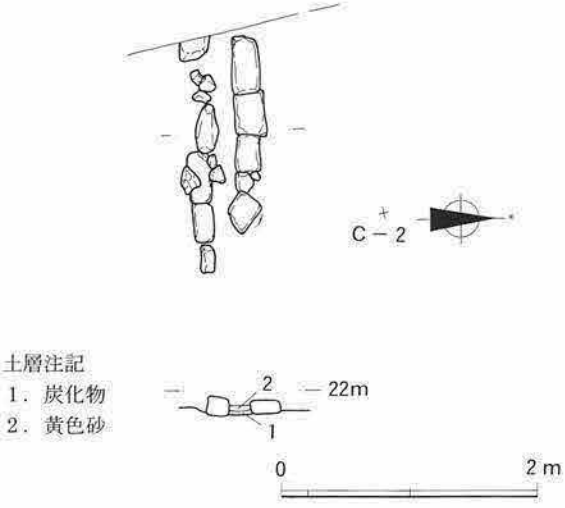
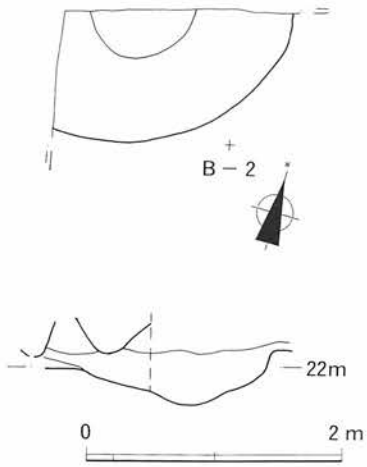


図８　第２面溝55



土層注記
1．炭化物多く混じえる黒褐色粘質土

図9　第2面土壙54

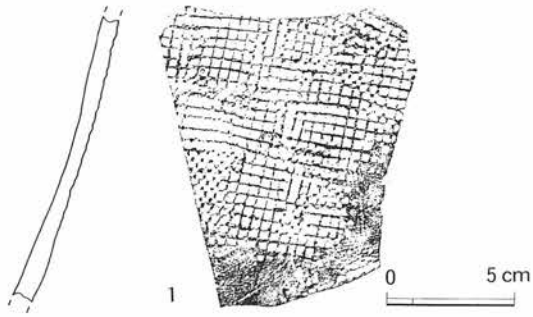
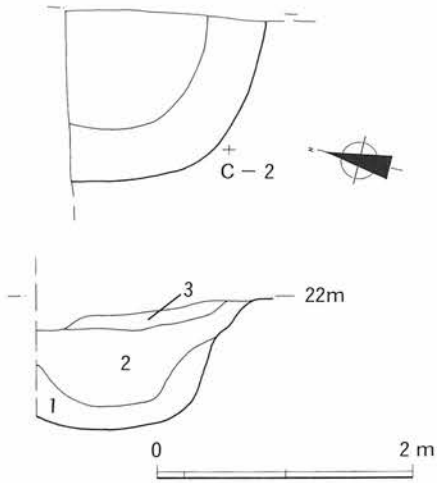


図10　第2面土壙54出土遺物



土層注記
1．暗灰褐色弱粘質土
2．暗褐色土。泥岩塊を多量に混じえる。
3．暗褐色土。泥岩粒を多く混じえる。

図11　第2面土壙109

図12　第2面ピット17出土遺物

される。各ピットの直径、深さとも10cm内外である。

ピット17出土遺物（図12）

図12―1は1023年初鋳の「天聖元寳」である。

2面下出土遺物（図13）

図13―1～40はかわらけ。図示できなかったものの中にも手づくねかわらけは混じらない。

1～24の小型かわらけは、胎土に黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を多めに混じえる淡茶～淡橙色弱砂質～砂質土。背低気味で、器壁が厚く、直立気味に立ち上がるものとゆっくり開きながら立ち上がるものが多い。また、23、24は背高だが、器壁は薄く、内弯気味に立ち上がる。とくに24は肌色粉質精良胎土で、いわゆる「薄手丸深」型に近いものといえよう。25は口径10.2cmを測る中型かわらけ。黒色微砂を多く混じえる橙色砂質胎土。背高で側面観碗型を呈している。26～40は大型かわらけ。背低で器壁がゆっくり開きながら立ち上がるものもわずかに混じるが、おおむね黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質胎土で、背高、側面観碗型に近いものが多く、39、40のように混入物の少ない橙色粉質胎土の「薄手丸深」型も見られる。

41は土器質浅鉢型火鉢の底部片。体部外面中位から下方は木口状工具によるナデで、また、体部内面は指頭によるナデ調整がおこなわれる。外底部は砂底。

42は13世紀中頃の常滑の壺口縁部片。

43は白磁口兀皿、44は青磁蓮弁文碗。

45は淡紅味黄色を呈する泥岩製の鳴滝産仕上砥。裏面は破損、あるいは剝離後にノミ状工具で調整し、再使用している。46は黒色粘板岩製の硯。「陸」は「海」との区別ができないほどに著しく摩滅し、淵周辺は墨が付着している。また、淵に施された文様が一部途切れていることから破損後に再成形した可能性がある。47は火打ち石。

48は1023年初鋳の「天聖元寳」。49～50は釘。

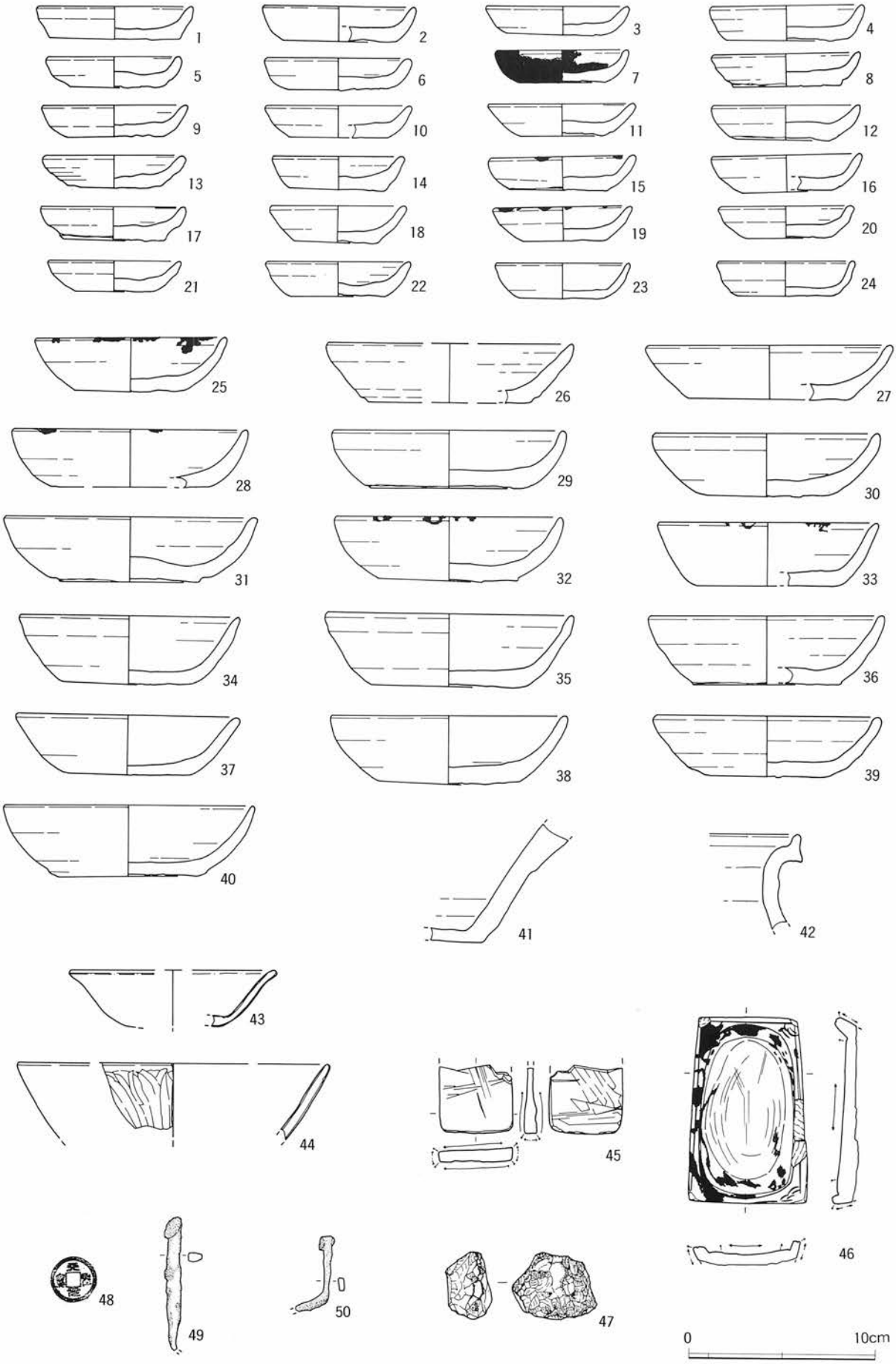

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
10cm

図13　2面下出土遺物

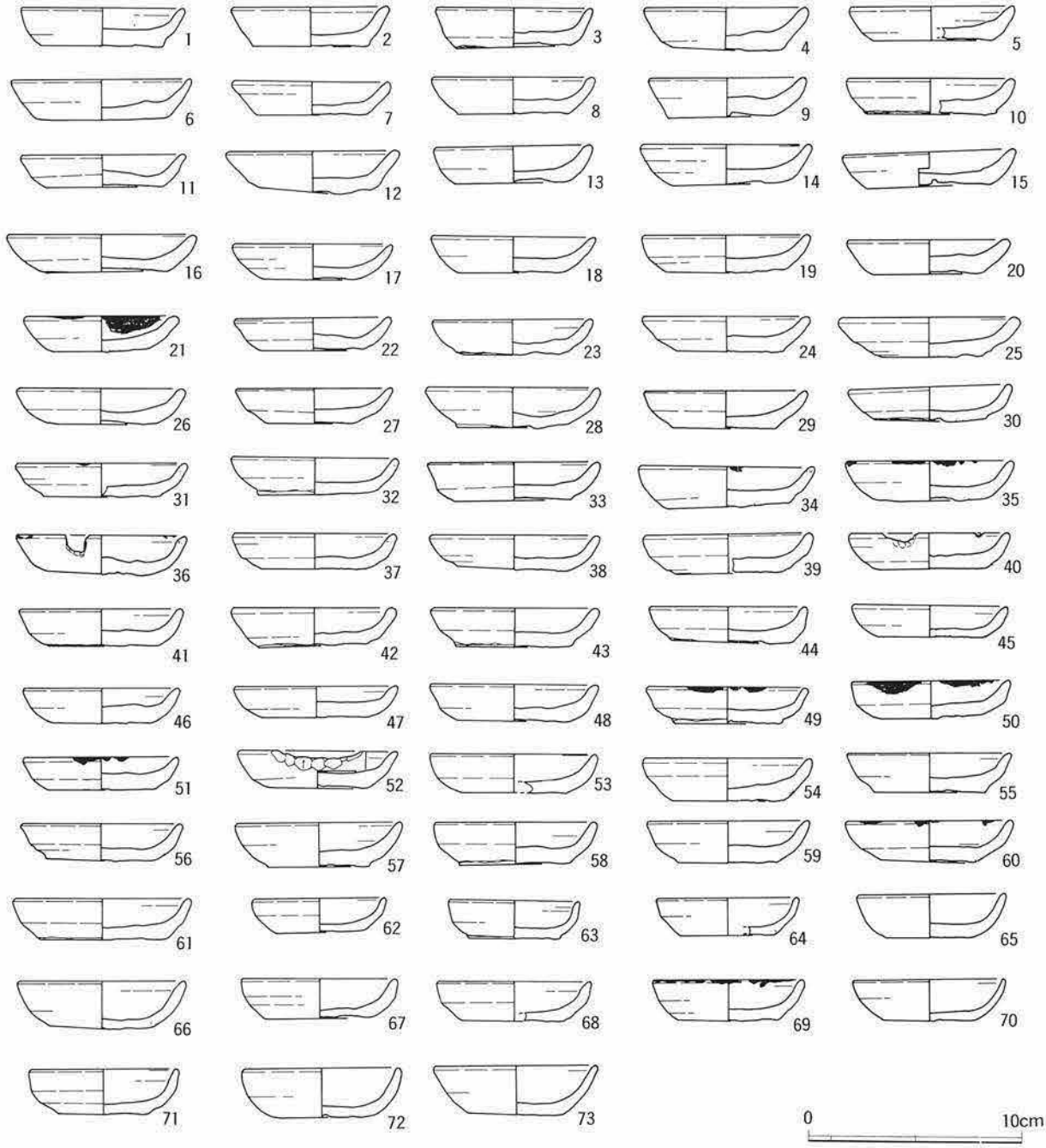


図14　2面上第4層中出土遺物（1）

2面第4層中出土遺物（図14～16）

図14は小型かわらけ。胎土はおおむね黒色微砂、白針、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質～砂質土。背低で器壁が厚く、ゆっくり開きながら立ち上がるものと内弯気味に立ち上がるものが多く見られる。一方、淡橙～橙色弱砂質胎土の背高で、器壁が薄い側面観碗型を呈するもの、あるいは橙色粉質精良胎土の「薄手丸深」型も見られる。これらの中には口径が6.0cm前半のもの見られ、小型化している様相が窺える。また、この炭化物中より出土した小型かわらけは口縁部周辺をわずかに打ち砕いているものが数点見られ、大型かわらけには見られない。これらがどのような目的で為されたものなのかは不明である。図15―1～4は口径10cm前半台の中型かわらけ。淡橙色弱砂質胎土で側面観碗型を呈するものと混入物が少ない淡橙色粉質胎土の「薄手丸深」型が見られる。5～32は大型かわらけ。胎土はおおむ

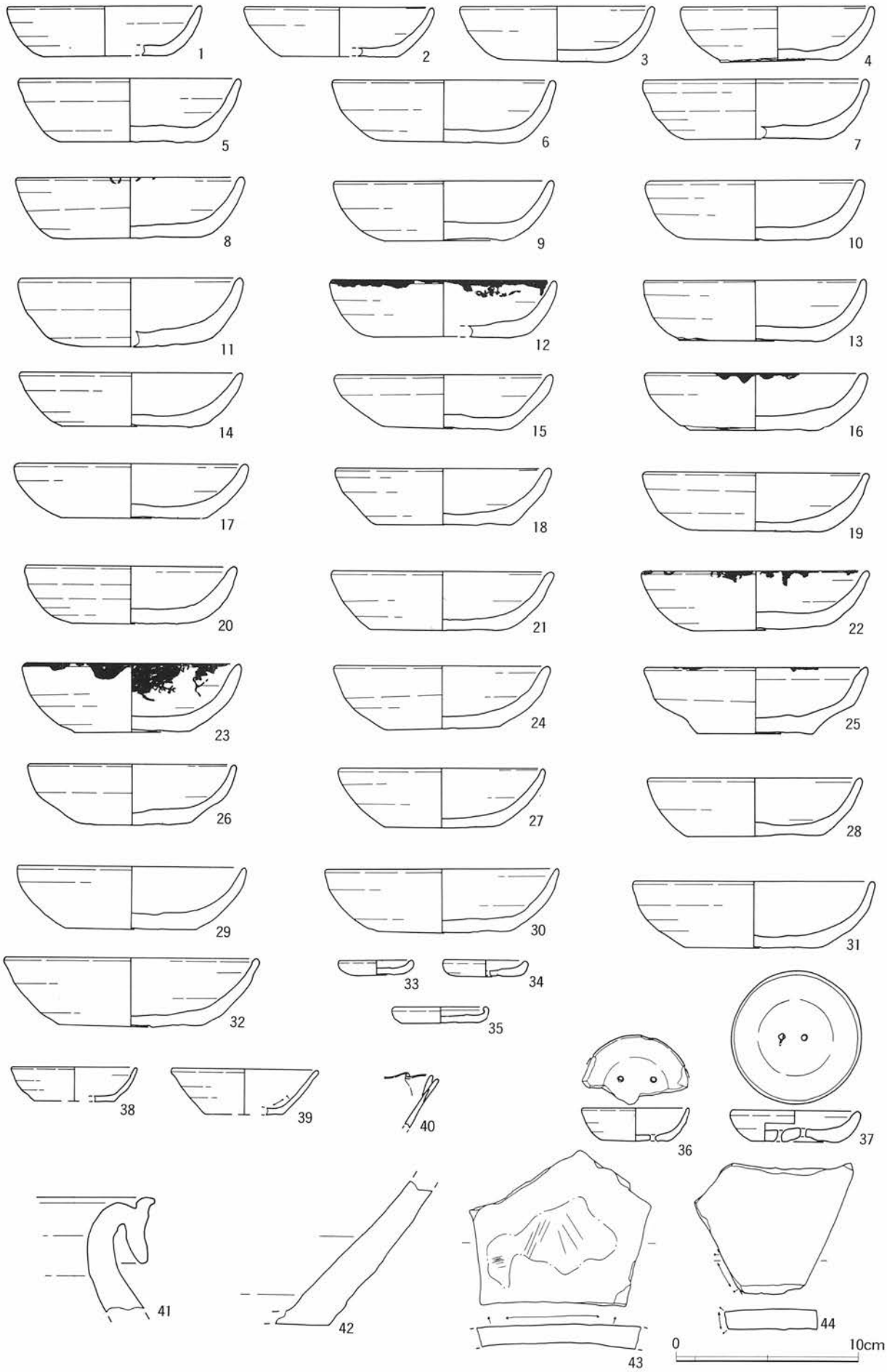


図15　2面上第4層中出土遺物（2）

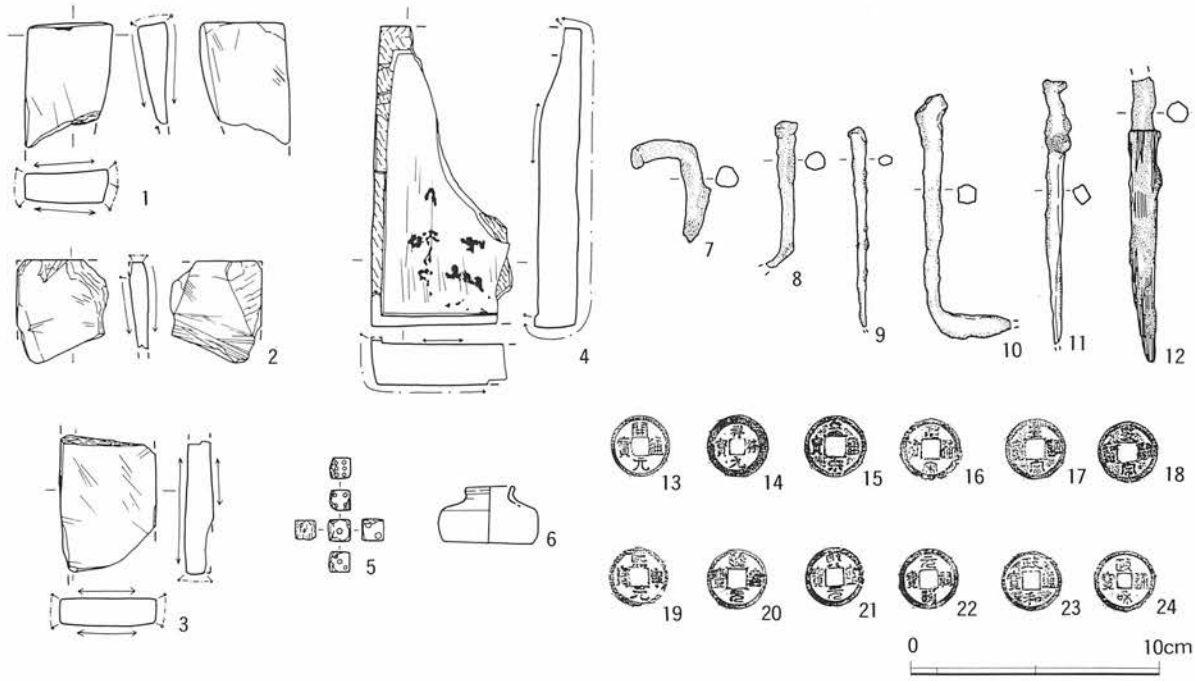


図16　2面上第4層中出土遺物（3）

ね黒色微砂を多めに混じえる淡橙色弱砂質土。器壁は薄めでゆっくり開きながら立ち上がるものが多い。また、淡橙～橙色弱砂質胎土の背高で、器壁が薄い側面観碗型を呈するもの、橙色粉質精良胎土の「薄手丸深」型も見られる。これらの中には口径が11cm台のものが混じり、小型かわらけ同様、口径の小型化が窺える。33～35は極小かわらけ。胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色～橙色弱砂質土。器壁は内弯気味に立ち上がるものと口唇部が折れ込んだものが見られる。36～37は穿孔かわらけ。

38～40は瀬戸入子。38～39は碗型、40は輪花型入子である。38は器壁が薄く、丁寧に成形され、外底部はヘラ切り、もしくはヘラ調整される。内底部に摩滅痕は見られない。また、わずかに片口状のへこみが遺存している。39は器壁はゆっくり開く側面観逆三角形を呈し、外底部は糸切り痕が残る。内底面はわずかに摩滅痕が残る。41～44は常滑。41は14世紀中頃くらいの甕の口縁部片。42は鉢底部片。体部外面中位付近は指頭による押さえ、底部上はヘラ状工具による調整、外底部はヘラ状工具によるていねな調整がおこなわれる。体部内面に使用による摩滅痕は残らないが、中位付近は一部煤が付着する。43～44はすり常滑。43は側面に摩滅痕はなく、表面中央部にのみ著しい摩滅痕が残る。

図16―1～3は鳴滝産の砥石。1と2は黄土色泥岩製の仕上砥。3は淡黄味灰色泥岩製の仕上砥である。4は黒色粘板岩製の硯。

5は骨製サイコロ。

6は銅製水滴。体部と底部のつなぎ目はみられないことから「打ち出し」による成形と考えられる。体部外面に施文はおこなわれていない。7～12は釘。12は中位から先端部にかけて木片が遺存している。13～24は銭。13は621年初鋳の「開元通寶」、14は1009年初鋳の「祥符元寶」、15～18は1038年初鋳の「皇宋通寶」、19～21は1068年初鋳の「熙寧元寶」、22は1086年初鋳の「元祐通寶」、23～24は1111年初鋳の「政和通寶」である。

第３節　第１面の遺構と遺物（図12）

最上層の第１面は、土丹を築き固めた第３層と第４層の黒褐色粘質土の地業層で構成されるが、第３層は凹凸が著しく、空隙が多く粗であることから生活面そのものは後世に削平されたと考えられ、地業層の第３層上面を遺構確認面とした。

検出した遺構は土壙２基、柵列２条、ピット25口である。

土壙110（図18）

調査区のＡ―３～４グリッドの東壁にかかる位置で検出した。遺構本体の大部分は調査区外に展開し、確認できた最大幅は1.75m。深さは30cm。

土壙120（図19）

調査区のＡ―２グリッド、東壁にかかって検出された。土壙の規模と遺物の出土状態から、据え甕遺構と考えられる。甕は常滑産で底部片が土壙の底部に残る。が、遺存状態悪く実測は調査当時のものに限る。甕の内壁に残留物は認められなかった。確認された土壙の規模は直径1.5m、深さ0.85m。覆土は暗灰褐色土である。

土壙120出土遺物（図20）

図20―１～８はかわらけ。１～４は小型かわらけ。１～２は黒色微砂を多く混じえる淡茶色弱砂質胎土。背低で、器壁は開きながら立ち上がる。４は淡橙色砂質胎土。背高で器壁は薄く、側面観碗型を呈する。５～８は大型かわらけ。口径は11cm～12cm前半台で中型からけに分類できるものもみられる。胎土はおおむね黒色微砂、白針、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土。背高で、器壁は薄めの側面観碗型を呈する。

柵列２（図14）

確認した柵列の規模は、東西３穴、南北２穴から成り、各北東部で交わると推定される。他の遺構は調査区の北側に多く発見され、柵列の内側には少ない。東西の柵列を境とした空間の使い分けが考えられる。

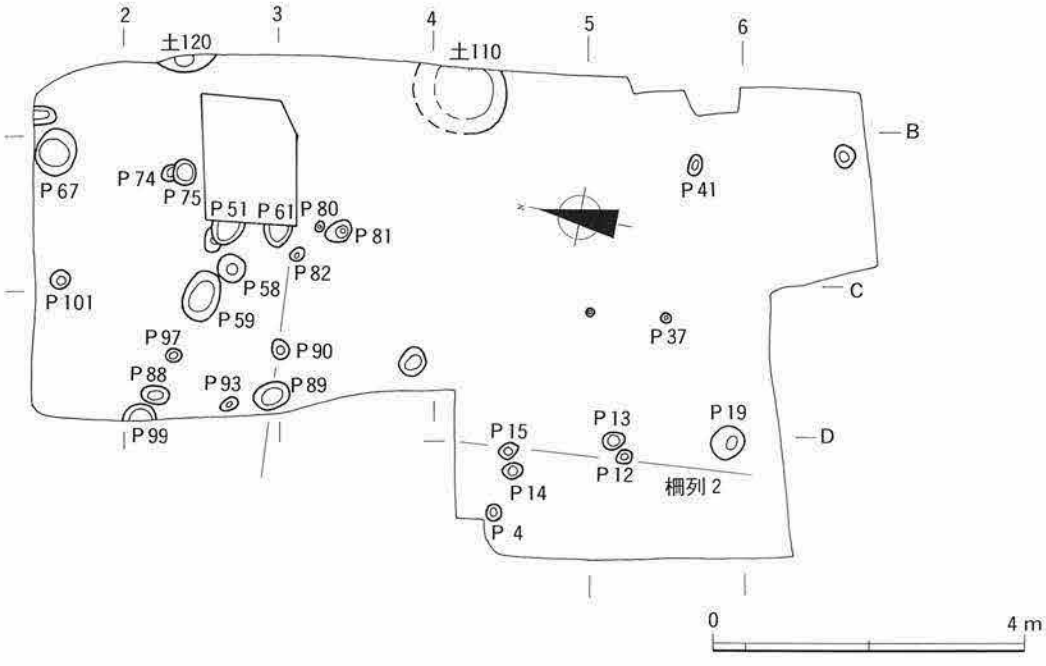


図17　第１面全測図

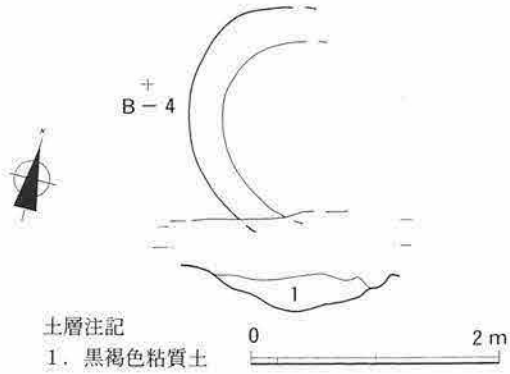


図18　第１面土壙110

１面下出土遺物（図21～22）

図21―１～37は小型かわらけ。背低、もしくは背低気味で、器壁はゆっくり外反する黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱砂質土のものと背高で、側面観碗型を呈する混入物の少ない橙色弱砂質～粉質土のもが見られる。38～40は口径が11cm前半台の中型かわらけ。いずれも背高気味で、器壁は薄く、側面観碗型を呈する橙色弱砂質～粉質胎土である。41～55は大型かわらけ。黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱砂質胎土の背低気味で、器壁が直立気味に立ち上がるものと背高で側面観碗型を呈するもの、橙色粉質精良胎土の「薄手丸深」型が見られる。

56は白かわらけの口縁部片。黒色微砂をわずかに混じえる淡紅味白色粉質胎土。体部外面中位から体部内面にかけては指頭によるナデ調整、体部外面中位から下方は指頭による押さえ痕が明瞭に残る。

57は土器質浅鉢型火鉢。体部内面から体部外面下位にかけては回しナデ、体部外面下位はヘラ状工具による調整がおこなわれる。体部内面上位から体部外面にかけて強い二次焼成によりハゼている。

図22―１は常滑の小型こね鉢。内外面ともに指頭による雑なナデで調整される。外底面は砂底。体部内面下位から内底面にかけては使用による著しい摩滅痕が残る。また、外底面外周部にもわずかな摩滅痕が残る。２は山茶碗窯系こね鉢。器壁は厚く、遺存部は指頭による横方向の雑なナデ調整がおこなわれる。また、体部外面下位に回転ヘラ調整は見られない。体部内面上位から内底面にかけて使用による著しい摩滅痕が残る。３は常滑の甕を転用したと思われるこね鉢底部片。体部外面下位は木口状工具によるかきあげ、体部内面下位は指頭による押さえで調整される。外底部は砂底。体部内面下位から内底面にかけては使用による軽い摩滅痕が残る。

４は瀬戸の碗型入子。外底部は糸切り痕が残る。体部内面下位から体部外面中位にかけて厚い降灰釉がかかるが、強い二次焼成によって口唇部周辺は剝落している。内底面は使用による軽い摩滅痕が残る。５は瀬戸の14世紀前後の底卸目皿と思われる。外面は強い二次焼成により釉が剝落している。

11は舶載磁器。６は青磁櫛掻文皿片。７は青磁鎬蓮弁文碗片。８は青磁折縁鉢。厚く施釉され、外面

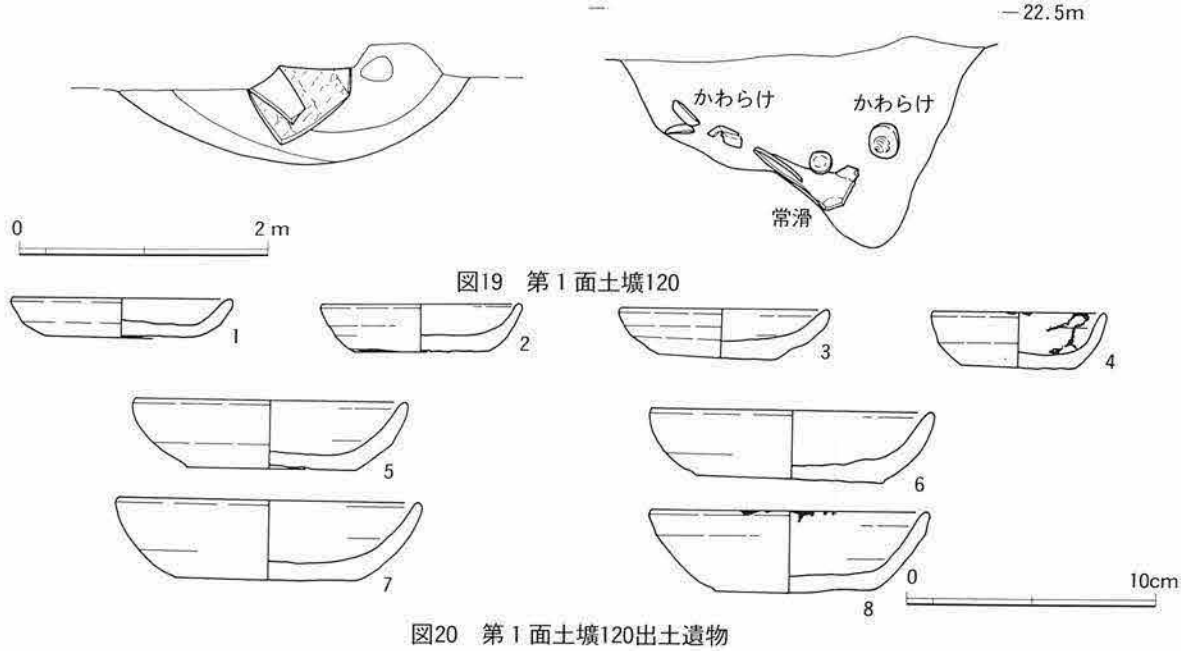


図19　第１面土壙120

図20　第１面土壙120出土遺物

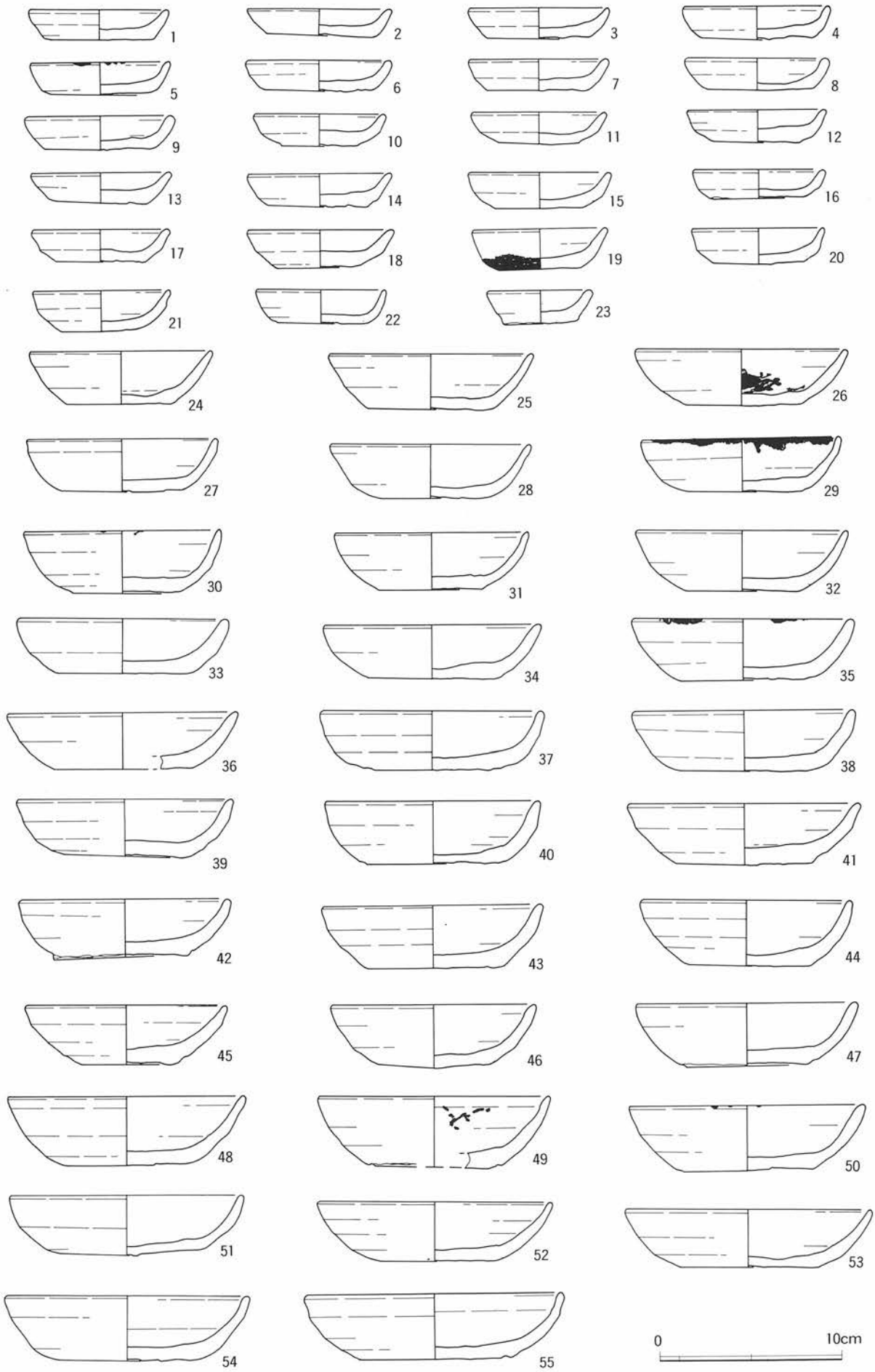


図21　1面下出土遺物（1）

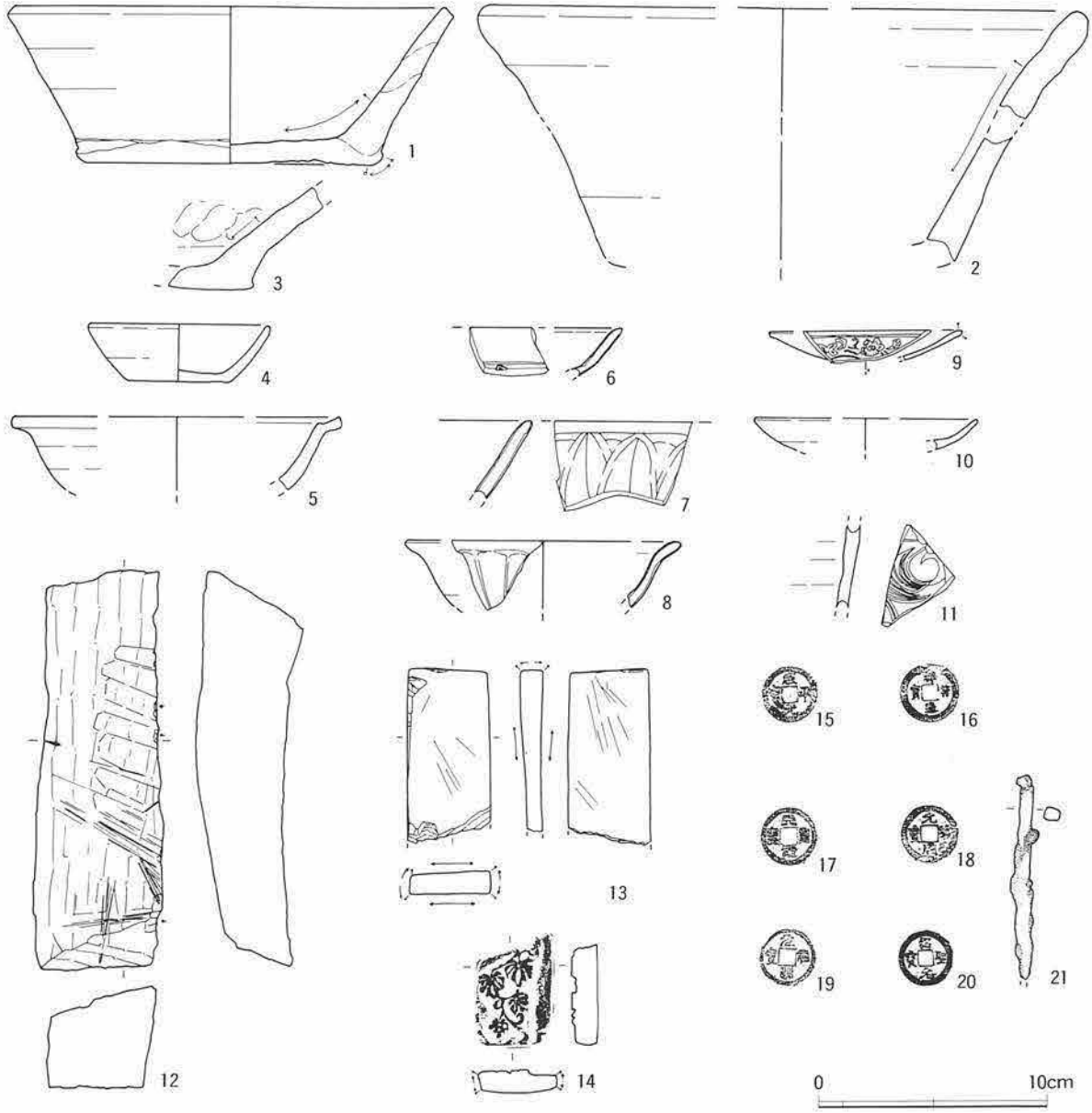


図22　1面下出土遺物（2）

に施された蓮弁風の文様は不明瞭である。9は白磁型作りの口兀小皿。釉は乳白色を呈し、とても薄く施釉される。10は青白磁の小皿。内外面ともに強い二次焼成を受け、釉が泡立っている。11は青白磁梅瓶の胴部片。

12は赤間石の硯石。表面にはノミ状工具、鏨状工具痕が多く残る。13は黄土色を呈する泥岩製の鳴滝産仕上砥。表裏面ともに砥面として使用しているが、表面には工具痕がわずかに残っている。14は滑石鍋転用のスタンプ。表面には蔓状の草文が陽刻される。

15～20は銭。15は998年初鋳の「咸平元寶」、16は1009年初鋳の「祥符通寶」、17は1023年初鋳の「天聖元寶」、18～19は1086年初鋳の「元祐通寶」、20は1094年初鋳の「紹聖元寶」である。21は釘。

1面上出土遺物（図23～24）

図23―1～23は小型かわらけ。黒色微砂を多めに混じえる淡橙～橙色弱砂質～砂質胎土の背低で器壁が直立気味に立ち上がるもの、背低で器壁がゆっくり開きながら立ち上がるもの、背高で側面観碗型を

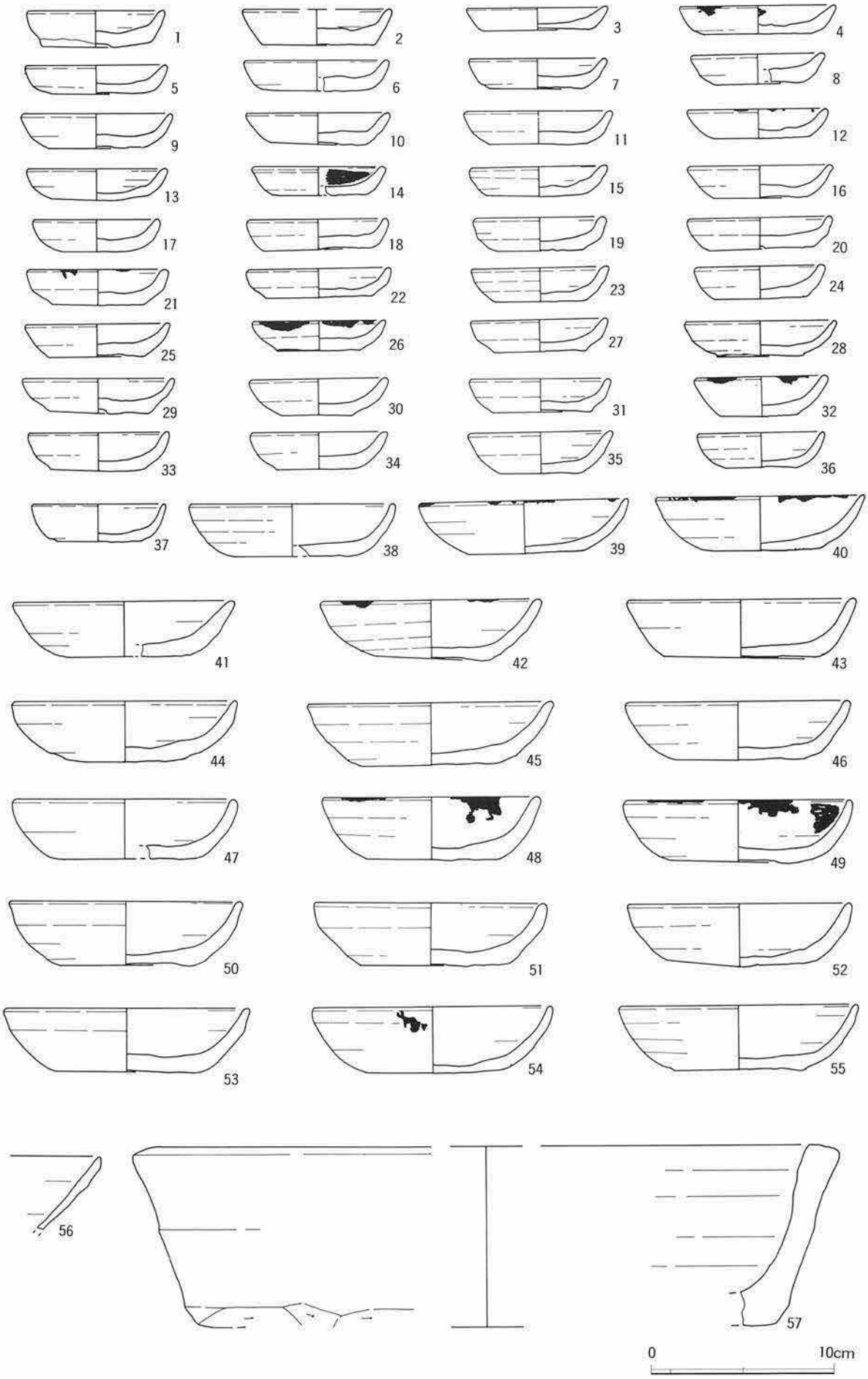


図23　1面上出土遺物（1）

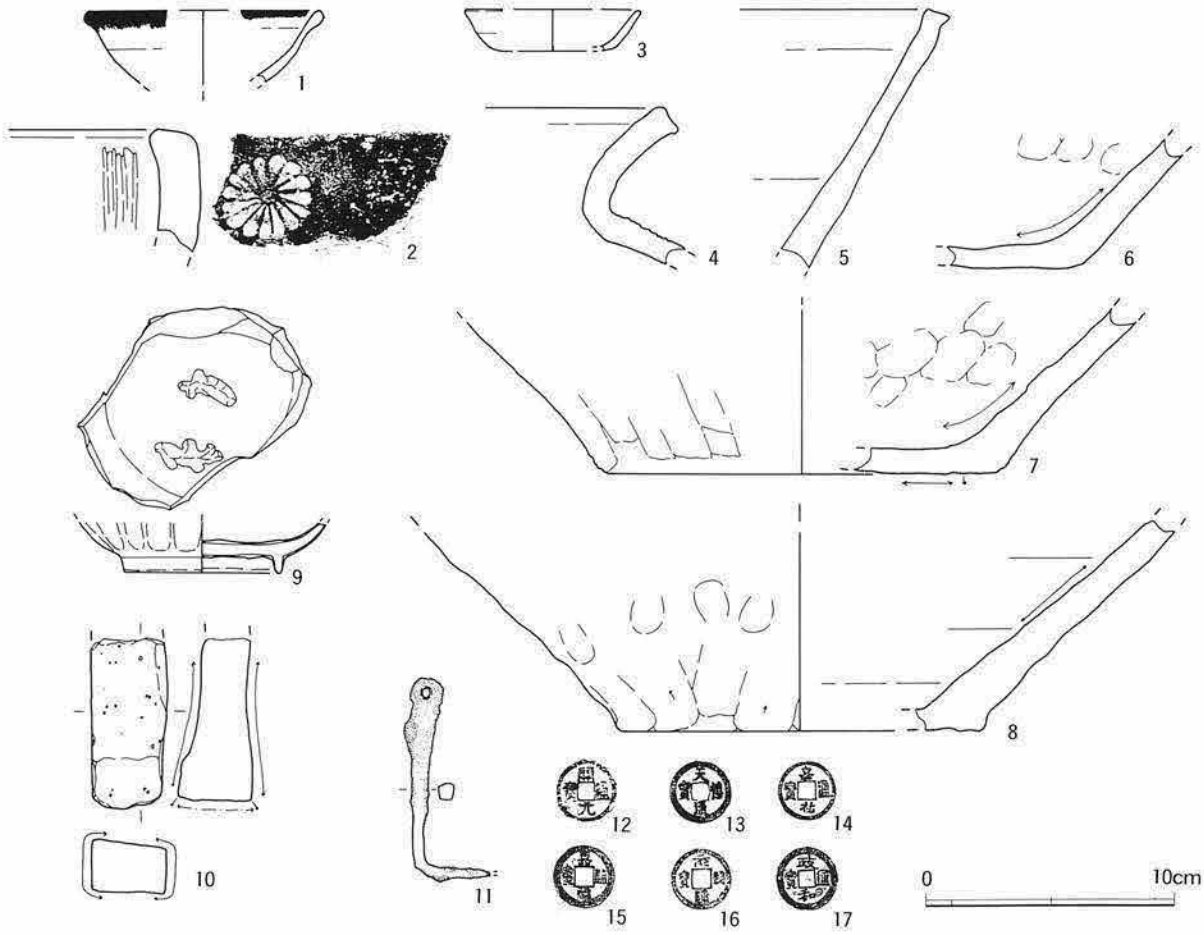


図24　1面上出土遺物（2）

呈するもの、橙色粉質精良胎土の「薄手丸深」型、口径が小さく、器壁が厚手のものなどがみられる。24～31は口径が10cm台の中型かわらけ。背高気味で、器壁は薄くゆっくり開きながら立ち上がるものと「薄手丸深」型が見られる。32～55は大型かわらけ。口径が11cm台の小振りなものが目立ってきている。また、背低で、器壁がゆっくり開きながら立ち上がるものよりも背高で側面観碗型、あるいは「薄手丸深」型が数量的に凌駕している。

図24―1は黒縁碗。遺存部は指頭による横方向のナデで丁寧に調整されている。2は瓦器質輪花型火鉢の口縁部片。体部内面周辺はヘラミガキされるが、部分的で不明瞭である。外面は菊花文が押印される。

3は瀬戸の碗型と思われる入子。器高は低く、器壁は開きながら立ち上がる。外底部はヘラ調整もしくはヘラ切りされる。使用による摩滅痕は見られない。4は亀山の壺口縁部片。5～8は常滑のこね鉢。8は甕の転用品の可能性がある。5には使用による摩滅痕はみられないが、6～8は著しい摩滅痕が残る。

9は青磁紅白双魚文鉢。厚い施釉のため双魚文は不明瞭である。

10は赤縞の入る黄味灰白色凝灰岩製の上野産中砥か荒砥。

11は掛け金具。12～17は銭。12は621年初鋳の「開元通寶」、13は1017年初鋳の「天禧通寶」、14～15は1056年初鋳の「嘉祐通寶」、16は1086年初鋳の「元祐通寶」、17は1111年初鋳の「政和通寶」である。

表１　遺物観察表（１）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
３面直上	4-1	かわらけ	7.8	4.8	1.9	黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗淡茶色弱粉質土
２面建物１ ピット60	7-1	瀬戸碗型入子	7.6			黒色微砂をわずかに混じえる灰色弱粘質土
２面土壙54	10-1	亀山甕？				黒色微砂、白色砂を混じえる灰白色瓦質土
２面 ピット17	12-1	銭				天聖元寶
２面下	13-1	かわらけ	8.2	7.0	1.7	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	2	かわらけ	8.0	6.0	1.8	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色砂質土
２面下	3	かわらけ	7.9	5.2	1.5	黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
２面下	4	かわらけ	8.0	6.5	1.8	泥岩粒、雲母をわずかに混じえる淡茶色弱粉質土
２面下	5	かわらけ	7.6	5.0	1.7	黒色微砂、白針を混じえる、橙色弱粉質土
２面下	6	かわらけ	7.6	5.4	1.7	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	7	かわらけ	7.0	4.7	1.8	白針をわずかに混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
２面下	8	かわらけ	7.8	5.8	2.3	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	9	かわらけ	7.8	5.2	1.7	雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
２面下	10	かわらけ	7.8	5.4	2.05	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
２面下	11	かわらけ	7.8	4.4	1.8	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
２面下	12	かわらけ	7.8	5.0	1.9	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	13	かわらけ	7.4	5.1	1.7	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる橙色弱粉質土
２面下	14	かわらけ	7.0	5.1	1.8	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	15	かわらけ	7.7	5.2	1.8	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
２面下	16	かわらけ	8.0	4.7	1.95	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を多く混じえる淡赤褐色弱砂質土
２面下	17	かわらけ	7.6	5.5	1.8	多めの黒色微砂、泥岩粒、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	18	かわらけ	7.2	4.5	2.0	白色微砂、白針を混じえる赤褐色砂質土
２面下	19	かわらけ	7.4	4.4	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
２面下	20	かわらけ	7.0	4.8	1.7	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
２面下	21	かわらけ	7.0	4.1	1.7	白黒微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
２面下	22	かわらけ	7.8	5.0	1.8	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱砂質土
２面下	23	かわらけ	7.2	4.6	1.9	多めの黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
２面下	24	かわらけ	7.2	5.1	1.9	混入物の少ない肌色弱粉質土
２面下	25	かわらけ	10.2	6.0	2.9	とても多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
２面下	26	かわらけ	13.2	8.8	3.1	多めの黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱粉質土
２面下	27	かわらけ	13.0	8.8	2.9	多めの黒色微砂、雲母を混じえる暗淡橙色弱砂質土
２面下	28	かわらけ	12.5	8.6	3.1	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	29	かわらけ	12.4	8.3	3.1	白黒微砂、雲母、泥岩粒を混じえる明淡橙色弱砂質土
２面下	30	かわらけ	12.0	7.0	3.3	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	31	かわらけ	13.4	7.5	3.5	黒色微砂、泥岩粒、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	32	かわらけ	12.0	7.5	2.5	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土　煤付着
２面下	33	かわらけ	11.8	7.6	3.4	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
２面下	34	かわらけ	11.8	7.0	3.6	とても多めの黒色微砂、雲母を混じえる橙色砂質土
２面下	35	かわらけ	13.4	6.4	3.9	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
２面下	36	かわらけ	12.4	8.0	3.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
２面下	37	かわらけ	11.8	7.1	3.2	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
２面下	38	かわらけ	12.6	7.6	3.7	多めの黒色微砂、白針、雲母を混じえる橙～淡橙色弱砂質土
２面下	39	かわらけ	12.0	6.8	3.2	混入物の少ない橙色弱砂質土
２面下	40	かわらけ	13.4	7.5	3.8	混入物の少ない明橙色弱粉質土
２面下	41	土器質浅鉢型火鉢				黒色微砂、雲母を多めに混じえる暗灰色弱粘質土
２面下	42	常滑壺				白色砂、小石を混じえる暗茶色土
２面下	43	白磁口兀皿	11.2			素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は青味乳白色
２面下	44	青磁鎬蓮弁文碗				素地は白黒色微砂をわずかに混じえる灰白色粘質緻密土 釉は淡青緑色

表1　遺物観察表（2）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
2面下	45	鳴滝仕上砥	3.6×4.0×0.7			淡紅味黄色泥岩
2面下	46	硯	10.0×6.4×1.0			黒色粘板岩
2面下	47	火打ち石				
2面下	48	銭				天聖元寶
2面下	49	釘	遺存長7.2径0.5			
2面下	50	釘	遺存長5.5径0.7			
2面上炭化物層	14-1	かわらけ	7.5	5.7	1.8	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	2	かわらけ	7.2	5.5	1.8	黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土　煤付着
2面第4層中	3	かわらけ	7.2	5.4	1.8	多めの雲母に黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	4	かわらけ	7.6	5.2	2.0	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶～肌色弱砂質土
2面第4層中	5	かわらけ	7.6	5.6	1.6	多めの黒色微砂、泥岩粒、白針、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	6	かわらけ	8.3	6.2	1.9	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	7	かわらけ	7.1	5.1	1.6	多めの雲母、黒色微砂、白針を混じえる弱粉質土
2面第4層中	8	かわらけ	7.8	5.2	1.7	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土
2面第4層中	9	かわらけ	7.2	5.0	1.9	やや多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
2面第4層中	10	かわらけ	7.7	6.0	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	11	かわらけ	7.6	5.5	1.5	雲母、黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	12	かわらけ	7.9	5.2	1.9	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
2面第4層中	13	かわらけ	7.3	5.4	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	14	かわらけ	7.8	5.1	1.9	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	15	かわらけ	8.0	5.9	1.6	黒色微砂、白針、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	16	かわらけ	8.7	5.6	1.7	黒色微砂、雲母、大きめの泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	17	かわらけ	8.4	4.6	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	18	かわらけ	7.6	5.0	1.7	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	19	かわらけ	7.8	5.6	1.8	非常に多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	20	かわらけ	7.6	5.0	1.6	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	21	かわらけ	6.9	4.5	1.7	多めの雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	22	かわらけ	7.2	5.0	1.5	黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	23	かわらけ	7.4	4.5	1.6	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土
2面第4層中	24	かわらけ	7.7	5.5	1.65	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色砂質土
2面第4層中	25	かわらけ	8.1	5.2	1.85	やや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	26	かわらけ	7.5	5.2	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	27	かわらけ	7.2	4.3	1.75	多めの雲母、黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	28	かわらけ	8.0	5.3	2.0	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	29	かわらけ	7.6	4.9	1.75	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	30	かわらけ	7.5	5.2	1.6	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	31	かわらけ	7.8	5.5	1.6	黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	32	かわらけ	7.7	5.6	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	33	かわらけ	8.0	5.5	1.8	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	34	かわらけ	8.2	5.8	1.9	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	35	かわらけ	7.5	5.2	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土　煤付着
2面第4層中	36	かわらけ	7.8	4.8	1.8	多めの泥岩粒、黒色微砂、白針を混じえる淡赤褐色弱粉質土
2面第4層中	37	かわらけ	7.5	5.0	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	38	かわらけ	7.7	5.45	1.65	黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土
2面第4層中	39	かわらけ	7.7	5.4	1.85	やや多めの白針、雲母を混じえる弱砂質橙色土
2面第4層中	40	かわらけ	7.4	5.4	1.7	多めの雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	41	かわらけ	7.6	4.9	1.7	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	42	かわらけ	7.6	5.1	1.8	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
2面第4層中	43	かわらけ	7.7	5.4	1.8	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	44	かわらけ	7.3	5.5	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土

表1　遺物観察表（3）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
2面第4層中	45	かわらけ	7.2	5.0	1.5	混入物の少ない淡橙色弱砂質土
2面第4層中	46	かわらけ	7.2	4.7	1.7	多めの黒色微砂、白針、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	47	かわらけ	7.6	5.0	1.5	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	48	かわらけ	7.8	5.7	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	49	かわらけ	7.4	4.95	1.7	黒色微砂、白針雲母を混じえる赤褐色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	50	かわらけ	7.4	4.8	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	51	かわらけ	7.2	5.1	1.55	多めの黒色微砂、雲母を混じえる暗淡橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	52	かわらけ	7.4	4.5	1.7	雲母、黒白色微砂、白針を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	53	かわらけ	7.7	4.9	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	54	かわらけ	7.7	5.1	2.0	黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	55	かわらけ	7.6	5.3	1.8	黒色微砂、白針、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	56	かわらけ	7.2	5.2	1.7	雲母、白針、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	57	かわらけ	7.2	4.8	2.1	多めの黒色微砂、白色粒子、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	58	かわらけ	7.5	5.2	2.0	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	59	かわらけ	7.6	4.9	2.0	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土
2面第4層中	60	かわらけ	7.8	4.6	1.9	雲母、黒色微砂、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	61	かわらけ	8.1	5.8	1.9	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	62	かわらけ	6.1	4.2	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	63	かわらけ	6.1	4.3	1.8	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	64	かわらけ	6.5	4.5	1.8	混入物の少ない橙色弱粉質土
2面第4層中	65	かわらけ	7.3	4.4	2.0	黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	66	かわらけ	7.7	5.0	2.3	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	67	かわらけ	7.1	5.05	1.85	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
2面第4層中	68	かわらけ	7.2	4.8	1.8	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
2面第4層中	69	かわらけ	7.0	4.7	1.9	黒色微砂、雲母を多めに混じえる橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	70	かわらけ	7.0	4.3	2.0	混入物の少ない橙色弱粉質土
2面第4層中	71	かわらけ	6.8	4.2	2.1	白黒色微砂、白針、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	72	かわらけ	7.2	4.9	2.3	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
2面第4層中	73	かわらけ	7.6	4.5	2.3	混入物の少ない橙色粉質土
2面第4層中	15-1	かわらけ	10.5	6.9	2.7	多めの雲母、黒色微砂を混じえる赤褐色弱粉質土
2面第4層中	2	かわらけ	10.4	6.4	2.7	混入物の少ない淡橙色弱砂質土
2面第4層中	3	かわらけ	10.4	5.7	3.0	混入物の少ない淡橙色弱砂質土
2面第4層中	4	かわらけ	10.5	6.4	3.0	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	5	かわらけ	12.1	7.8	3.45	多めの泥岩粒、黒色微砂を混じえる赤褐色～橙色弱砂質土
2面第4層中	6	かわらけ	12.0	7.9	3.4	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	7	かわらけ	12.2	8.0	3.25	多めの黒色微砂、白針、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	8	かわらけ	12.4	8.25	3.35	黒色微砂、白針、雲母を混じえる赤褐色弱砂質土
2面第4層中	9	かわらけ	12.0	6.5	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	10	かわらけ	11.7	8.4	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	11	かわらけ	12.2	8.4	3.8	多めの白針、黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	12	かわらけ	12.2	8.2	3.1	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	13	かわらけ	12.0	8.1	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	14	かわらけ	12.2	7.6	2.95	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙～橙色弱粉質土
2面第4層中	15	かわらけ	11.8	6.9	2.95	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	16	かわらけ	12.0	7.3	3.2	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	17	かわらけ	12.5	8.0	3.0	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色～赤褐色弱砂質土
2面第4層中	18	かわらけ	11.6	7.2	3.1	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	19	かわらけ	12.3	7.9	3.2	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙～橙色弱砂質土
2面第4層中	20	かわらけ	11.5	6.6	3.15	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	21	かわらけ	12.0	7.4	3.3	黒色微砂、雲母混じえる淡橙色弱砂質土

表1　遺物観察表（4）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
2面第4層中	22	かわらけ	12.2	7.6	3.4	白針、白色砂を混じえる橙色～赤褐色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	23	かわらけ	12.2	6.4	3.8	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土　煤付着
2面第4層中	24	かわらけ	11.7	6.3	3.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
2面第4層中	25	かわらけ	12.0	6.4	3.6	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
2面第4層中	26	かわらけ	11.7	6.1	3.3	混入物の少ない淡橙色弱砂質土
2面第4層中	27	かわらけ	11.2	6.3	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	28	かわらけ	11.6	7.5	3.6	混入物の少ない橙色弱砂質土
2面第4層中	29	かわらけ	12.5	7.3	3.55	多めの黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	30	かわらけ	12.8	7.2	3.5	混入物の少ない橙色弱砂質土
2面第4層中	31	かわらけ	13.1	7.6	3.65	混入物の少ない橙色弱粉質土
2面第4層中	32	かわらけ	13.9	8.0	4.0	混入物やや少なめの橙色弱砂質土
2面第4層中	33	極小かわらけ	4.0	3.1	0.8	黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
2面第4層中	34	極小かわらけ	4.4	3.9	0.9	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色砂質土
2面第4層中	35	極小かわらけ	5.0	4.4	0.9	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	36	穿孔かわらけ	5.8	3.8	1.8	雲母、黒色微砂をわずかに混じえる橙色弱粉質土
2面第4層中	37	穿孔かわらけ	7.0	5.0	1.7	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
2面第4層中	38	瀬戸碗型入子	6.8	4.4	1.9	黒色微砂をわずかに混じえる灰色弱粘質土
2面第4層中	39	瀬戸碗型入子	8.0	4.2	2.5	黒色微砂をわずかに混じえる灰色弱粘質土
2面第4層中	40	瀬戸輪花型入子				黒色微砂をわずかに混じえる乳白色弱粘質土
2面第4層中	41	常滑甕				白色粒、雲母、黒色微砂を多めに混じえる灰～暗灰色弱粘質土
2面第4層中	42	常滑鉢				黒色微砂、雲母を混じえる淡茶～肌色弱粉質土
2面第4層中	43	すり常滑	8.4×10×1.2			
2面第4層中	44	すり常滑	7.1×8.0×1.3			
2面第4層中	16-1	鳴滝仕上げ砥	4.8×3.5×1.2			淡黄色泥岩
2面第4層中	2	鳴滝仕上げ砥	4.1×3.7×0.7			黄土色泥岩
2面第4層中	3	鳴滝仕上げ砥	5.5×3.9×1.1			黄土色泥岩
2面第4層中	4	硯	12.0×5.5×1.6			黒色粘板岩
2面第4層中	5	サイコロ	0.8×0.8×0.8			骨製品
2面第4層中	6	銅製水滴	2.0	3.6	2.25	
2面第4層中	7	釘	遺存長6.3径0.8			
2面第4層中	8	釘	遺存長6.8径0.7			
2面第4層中	9	釘	遺存長8.0径0.5			
2面第4層中	10	釘	遺存長12.3径0.8			
2面第4層中	11	釘	遺存長10.8径0.8			
2面第4層中	12	釘	遺存長11.4径0.8			
2面第4層中	13	銭				開元通寶
2面第4層中	14	銭				祥符元寶
2面第4層中	15	銭				皇宋通寶
2面第4層中	16	銭				皇宋通寶
2面第4層中	17	銭				皇宋通寶
2面第4層中	18	銭				皇宋通寶
2面第4層中	19	銭				熙寧元寶
2面第4層中	20	銭				熙寧元寶
2面第4層中	21	銭				熙寧元寶
2面第4層中	22	銭				元祐通寶
2面第4層中	23	銭				政和通寶
2面第4層中	24	銭				政和通寶
1面 土壙120	20-1	かわらけ	8.8	6.0	1.6	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡茶色弱粉質土
1面 土壙120	2	かわらけ	8.0	5.5	2.0	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱砂質土

表1　遺物観察表（5）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
1面 土壙120	3	かわらけ	8.3	4.7	2.0	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
1面 土壙120	4	かわらけ	7.0	4.6	3.3	混入物の少ない淡橙色砂質土　煤付着
1面 土壙120	5	かわらけ	11.0	6.9	2.8	黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面 土壙120	6	かわらけ	11.4	7.6	2.8	白黒色微砂、白針を混じえる暗淡橙色砂質土
1面 土壙120	7	かわらけ	12.3	7.4	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面 土壙120	8	かわらけ	11.2	6.6	3.8	白針を多めに混じえる淡橙色弱粉質土　煤付着
1面下	21-1	かわらけ	7.4	6.0	2.0	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	2	かわらけ	8.0	6.2	1.9	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	3	かわらけ	7.6	5.9	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	4	かわらけ	8.4	5.9	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土　煤付着
1面下	5	かわらけ	7.6	5.0	1.6	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	6	かわらけ	7.6	5.4	1.7	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	7	かわらけ	7.4	5.1	1.7	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
1面下	8	かわらけ	7.1	5.0	1.7	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
1面下	9	かわらけ	8.0	5.5	1.9	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	10	かわらけ	7.8	5.2	1.7	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
1面下	11	かわらけ	8.0	5.4	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	12	かわらけ	7.4	5.4	1.6	多めの雲母を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
1面下	13	かわらけ	7.5	5.2	1.7	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土
1面下	14	かわらけ	7.1	5.2	1.6	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
1面下	15	かわらけ	7.2	5.3	1.6	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	16	かわらけ	8.0	5.1	1.8	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	17	かわらけ	6.6	3.8	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	18	かわらけ	7.5	5.8	1.2	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	19	かわらけ	7.0	4.7	1.8	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	20	かわらけ	7.7	5.7	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	21	かわらけ	7.4	5.0	2.0	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡茶色弱粉質土　煤付着
1面下	22	かわらけ	7.7	5.8	1.6	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
1面下	23	かわらけ	7.4	4.9	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	24	かわらけ	6.8	5.0	1.8	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	25	かわらけ	7.8	5.2	1.8	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	26	かわらけ	7.2	4.5	1.6	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土　煤付着
1面下	27	かわらけ	7.3	5.0	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	28	かわらけ	8.2	4.8	1.9	混入物の少ない橙色弱砂質土
1面下	29	かわらけ	8.2	5.4	1.9	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	30	かわらけ	7.4	3.8	2.0	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	31	かわらけ	7.4	5.3	1.9	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	32	かわらけ	7.0	4.2	2.2	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
1面下	33	かわらけ	7.5	5.2	2.1	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
1面下	34	かわらけ	7.2	4.4	2.0	黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	35	かわらけ	7.6	4.5	2.3	やや多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
1面下	36	かわらけ	6.8	3.9	1.9	混入物の少ない橙色弱粉質土
1面下	37	かわらけ	7.1	4.7	2.0	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
1面下	38	かわらけ	11.1	7.1	2.9	混入物の少ない橙色弱粉質土
1面下	39	かわらけ	11.3	6.3	2.9	黒色微砂、雲母を混じえる橙色砂質土
1面下	40	かわらけ	11.4	6.3	2.9	やや多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土

表1　遺物観察表（6）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
1面下	41	かわらけ	11.8	7.2	3.0	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
1面下	42	かわらけ	11.8	6.5	3.2	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土
1面下	43	かわらけ	12.3	8.4	3.2	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	44	かわらけ	12.1	6.6	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	45	かわらけ	13.2	7.4	3.4	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる橙色弱砂質土
1面下	46	かわらけ	12.0	7.2	3.1	黒色微砂、雲母、大きめの泥岩粒を混じえる橙色砂質土
1面下	47	かわらけ	12.0	8.2	3.3	多めの黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
1面下	48	かわらけ	11.7	7.2	3.4	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
1面下	49	かわらけ	12.2	7.6	3.4	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
1面下	50	かわらけ	12.4	7.2	3.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	51	かわらけ	12.5	8.1	3.4	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
1面下	52	かわらけ	11.4	7.3	3.2	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
1面下	53	かわらけ	13.2	7.8	3.4	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
1面下	54	かわらけ	12.9	7.6	3.6	黒色微砂、雲母をわずかに混じえる橙色砂質土　煤付着
1面下	55	かわらけ	12.9	7.0	3.4	混入物の少ない橙色弱砂質土
1面下	56	白かわらけ				黒色微砂をわずかに混じえる淡紅味白色
1面下	57	土器質浅鉢型火鉢	38.8	31.8	9.8	黒色微砂、雲母、小石を混じえる淡橙～橙色弱粘質土
1面下	22-1	常滑小型こね鉢	18.9	12.7	6.85	白色小石～微粒を多く混じえる暗灰色土
1面下	2	山茶碗窯系こね鉢	25.8			白色小石、黒色微砂を多く混じえる紅味灰白色弱粘質土 口径値不安
1面下	3	常滑甕転用？ こね鉢				白色細石～白色微砂を混じえる灰色土
1面下	4	瀬戸碗型入子	7.8	4.4	2.5	黒色微砂をわずかに混じえる灰色弱粘質土
1面下	5	瀬戸灰釉底卸目皿	14.6			白黒砂をわずかに混じえる灰色弱粘質緻密土
1面下	6	青磁櫛掻文皿				素地は黒色微砂を混じえる白灰色粘質土　釉はオリーブ色
1面下	7	青磁鎬蓮弁文碗				素地は灰色粘質土　釉は濃オリーブ色
1面下	8	青磁折縁鉢	12.2			素地は黒色微砂をわずかに混じえる白灰色粘質土
1面下	9	白磁口兀 型作り小皿	8.6			素地は黒色微砂をわずかに混じえる弱粘質土　釉は乳白色
1面下	10	青白磁小皿	9.8			素地は黒色微砂をやや多めに混じえる白色粘質土　釉は淡水色
1面下	11	青白磁梅瓶				素地は黒色微砂をわずかに混じえる白灰色　釉は淡水色
1面下	12	硯石	17.3×4.5×4.3			赤間石
1面下	13	鳴滝仕上砥	7.6×3.2×1.0			黄土色泥岩
1面下	14	滑石鍋 転用スタンプ	4.9×3.4×1.1			
1面下	15	銭				咸平元寶
1面下	16	銭				祥符通寶
1面下	17	銭				天聖元寶
1面下	18	銭				元祐通寶
1面下	19	銭				元祐通寶
1面下	20	銭				紹聖元寶
1面下	21	釘	遺存長10.8径0.8			
1面上	23-1	かわらけ	7.4	6.0	1.7	多めの黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
1面上	2	かわらけ	7.8	5.9	1.5	雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土
1面上	3	かわらけ	7.8	5.5	1.7	黒色微砂、泥岩粒を混じえる淡赤褐色弱砂質土
1面上	4	かわらけ	8.0	6.2	1.8	白黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
1面上	5	かわらけ	7.6	5.5	1.8	非常に多い雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色砂質土
1面上	6	かわらけ	7.8	5.9	1.7	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
1面上	7	かわらけ	7.5	5.5	1.7	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡茶色弱粉質土
1面上	8	かわらけ	7.6	5.7	1.7	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
1面上	9	かわらけ	7.8	5.9	1.9	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土

表１　遺物観察表（７）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
１面上	10	かわらけ	7.1	4.0	1.7	やや多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	11	かわらけ	7.2	4.4	1.7	多めの白黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
１面上	12	かわらけ	7.6	4.6	1.8	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色砂質土
１面上	13	かわらけ	7.6	5.0	1.7	黒色微砂、白針を混じえる橙色弱粉質土
１面上	14	かわらけ	7.8	5.5	1.8	非常に多い黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
１面上	15	かわらけ	7.7	4.8	2.0	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
１面上	16	かわらけ	7.2	5.0	1.6	多めの黒色微砂、雲母を混じえる肌色弱砂質土
１面上	17	かわらけ	7.4	5.0	1.8	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
１面上	18	かわらけ	7.9	4.2	2.1	黒色微砂、雲母が多めに混じる橙色弱砂質土
１面上	19	かわらけ	7.3	4.5	2.2	多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
１面上	20	かわらけ	7.2	5.0	2.0	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	21	かわらけ	7.4	4.3	2.2	黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
１面上	22	かわらけ	7.0	5.0	1.95	混入物の少ない橙色弱砂質土
１面上	23	かわらけ	5.4	3.9	1.8	混入物の少ない橙色弱粉質土
１面上	24	かわらけ	10.0	5.7	2.9	黒色微砂、雲母が多めに混じる淡橙色弱粉質土
１面上	25	かわらけ	11.2	7.0	2.4	多めの泥岩粒、黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	26	かわらけ	11.5	6.2	3.1	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
１面上	27	かわらけ	10.3	6.7	2.9	雲母、黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土
１面上	28	かわらけ	10.8	6.4	3.0	混入物の少ない淡橙色弱砂質土
１面上	29	かわらけ	10.8	6.9	2.95	多めの泥岩粒、黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土　煤付着
１面上	30	かわらけ	10.8	5.5	3.4	混入物の少ない橙色弱粉質土
１面上	31	かわらけ	10.6	5.6	3.1	混入物の少ない橙色弱粉質土
１面上	32	かわらけ	11.6	6.4	3.3	混入物の少ない橙色弱砂質土
１面上	33	かわらけ	11.2	4.6	3.0	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	34	かわらけ	11.8	7.0	3.0	黒色微砂、雲母をとても多く混じえる淡橙色砂質土
１面上	35	かわらけ	12.0	7.2	3.4	多めの黒色微砂、雲母を混じえる橙色砂質土　煤付着
１面上	36	かわらけ	12.6	7.7	3.1	黒色微砂、雲母を混じえる暗淡橙色砂質土
１面上	37	かわらけ	12.0	7.7	3.2	多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土
１面上	38	かわらけ	12.0	7.3	3.3	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土
１面上	39	かわらけ	11.8	6.6	3.2	雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	40	かわらけ	11.8	7.2	3.5	雲母、黒色微砂、白針、泥岩粒を多めに混じえる橙色砂質土
１面上	41	かわらけ	12.7	7.6	3.4	雲母、黒色微砂、白針、泥岩粒を多めに混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	42	かわらけ	11.4	7.3	3.2	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
１面上	43	かわらけ	11.9	7.7	3.45	黒色微砂、雲母を多めに混じえる橙色砂質土
１面上	44	かわらけ	11.8	6.7	3.6	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	45	かわらけ	11.0	5.6	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる橙色弱砂質土
１面上	46	かわらけ	11.0	6.2	3.45	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
１面上	47	かわらけ	12.0	6.7	3.4	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
１面上	48	かわらけ	13.0	6.3	3.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡茶色弱砂質土
１面上	49	かわらけ	12.6	6.6	3.9	白色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土　煤付着
１面上	50	かわらけ	12.8	7.2	3.6	黒色微砂、雲母を多めに混じえる淡橙色砂質土　煤付着
１面上	51	かわらけ	12.7	8.0	3.3	黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗橙色弱粉質土
１面上	52	かわらけ	12.7	7.0	3.3	混入物の少ない橙色弱砂質土
１面上	53	かわらけ	13.4	7.8	3.2	混入物の少ない淡橙色弱粉質土
１面上	54	かわらけ	13.2	8.3	3.6	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる橙色弱粉質土
１面上	55	かわらけ	13.9	8.4	3.6	混入物の少ない淡橙色弱砂質土
１面上	24-1	黒縁碗	9.4			灰白色粉質緻密土
１面上	2	輪花型火鉢				多めの黒色微砂、白色小石を混じえる紅味灰白色弱粘質緻密土
１面上	3	瀬戸碗型？入子	7.0	5.2	1.7	淡黄味灰色弱粘質緻密土
１面上	4	亀山壺				白色微砂～小石を多く混じえる灰白色瓦質土

表1　遺物観察表（8）

出土地点	挿図番号	種別	口径	底径	器高	備考
1面上	5	常滑こね鉢				黒白色微砂～小石を多く混じえる暗灰～橙茶色弱粘質緻密土
1面上	6	常滑こね鉢				白色微砂～小石を多く混じえる灰色～暗灰色土
1面上	7	常滑こね鉢				白色微砂～小石を多く混じえる灰色～暗灰色土
1面上	8	常滑甕転用こね鉢				白色微砂～小石を多く混じえる橙～赤褐色土
1面上	9	青磁紅白双魚文鉢		6.4		素地は黒色微砂をわずかに混じえる灰色弱粘質緻密土 釉は暗オリーブ色
1面上	10	上野中砥か砥石	6.8×3.1×2.1			赤縞の入る黄味を帯びた灰白色凝灰岩
1面上	11	掛け金具	遺存長10.5径0.6			
1面上	12	銭				開元通寶
1面上	13	銭				天禧通寶
1面上	14	銭				嘉祐通寶
1面上	15	銭				嘉祐通寶
1面上	16	銭				元祐通寶
1面上	17	銭				政和通寶

第４章　調査成果とまとめ

佐助ヶ谷内における「やぐら」を除く発掘調査例は数少ない。そのため、谷内に残る小字名や文献史料から数多くの寺院の存在が示唆されるものの、具体的にその位置や存在を推定させる資料はいまだ少ないのが現状である。その意味で、今回の調査は狭小でありながらも、佐助ヶ谷の歴史を考える上で、貴重な資料を加えることができた。

宝蓮寺跡とされる遺跡内に所在する今回の調査地点は、63.20m²と限られた範囲が対象であったが、試掘結果に基づく当初の予測を上回る３面４時期におよぶ生活面を検出した。第１面と第２面の様子からは、２度にわたる大規模な地業の行われたことが確認でき、第２面ではその地業に伴う建物の存在が明らかになった。調査区周辺の岩盤崖裾には「やぐら」群が展開していることも考え合わせれば、本地点がこの時期、寺院境内であったと推定することも可能である。しかし、宝蓮寺自体の寺史については第１章でも触れたように不明な点が多く残されている。

第１節　遺構の変遷

今回の調査で確認された最古の生活面は、中世基盤層である黒褐色粘質土上の第３面である。第３面では、調査区の北側に土壙と溝状遺構、南側の東寄りに小ピット群を発見した。この様子から見て、この時期の調査地は支谷内における主体的な建物が建つ空間ではなかったように思われる。

次いで第２面では、第３面遺構の廃絶後に計７層にも及ぶ版築による整地がなされ、掘立柱建物が建築される。確認された建物規模は４間×２間であるが、建物自体は調査区外に展開するため、より規模の大きなものであったと考えられる。建物廃絶後、鎌倉石の切石を護岸に用いた溝状遺構が、東西方向に掘られる。この溝状遺構に供う遺構は明らかではないが、その軸方向は前代の建物と同一であり、整地・空間利用に変化のなかったことが確認できた。

最上層の第１面では、地業による整地が再度行われたようであるが、地業層は近世に再度造成が行われた際に削平を受けている。発見された遺構は、東西に延びる柵を境に北側に集中しているため、なんらかの空間的使い分けが意識されていたと考えられる。なお、第２面から第１面にいたる遺構の軸方向が概ね踏襲され続けること、両面ともしっかりした地業が施されていることなどからみて、この間の当支谷の土地利用は、地形的な制約を受けつつも大きな変化はなかったと考えられる。

第２節　出土遺物の概要

本遺跡地では遺構より出土した遺物がたいへん少なく、これが各面の年代決定を困難にさせている。しかし、補助的に各面の構成土中より出土したかわらけの様相から判断するならば、第１～３面構成土中より出土したかわらけのいずれにも大きな年代差を見いだせない。かわらけは口径値によって大・中・小の３つに分化し、さらに大型だけでなく、小型かわらけにも「薄手丸深」型が出現していることなどから、生活面の存続期間は14世紀前後を中心としたそう長くないものと判断したい。

小型かわらけは黒色微砂を多めに混じえる淡橙色～橙色を呈する弱砂質～砂質胎土。口径は６cm後半～８cm以内、器高は1.5cm～２cm前半、底径口径比は1.3～1.8以内に収まるものが多い。器形は背低、あるいは背低気味で、器壁が直立気味に立ち上がるもの、ゆっくり開きながら立ち上がるもの、や

や内弯気味に立ち上がるもの、側面観碗型を呈するものの他に、数量的にはわずかだが、橙色精良粉質胎土の「薄手丸深」型とに分類できよう。

中型かわらけの胎土は小型の胎土と同様ではあるものの、器形は背低気味で器壁が開くものよりも側面観碗型、あるいは粉質精良胎土の「薄手丸深」型が多い。口径は10cm前半台、器高は2cm後半、底径口径比は1.6前後に集中している。

大型かわらけも小・中かわらけ同様の胎土で、器壁がゆっくり開くものも出土しているが、一方、「薄手丸深」型の占める割合がかなり増えていることに留意したい。口径は11cm台～13cm台、器高は3cm前半台、底径口径比は1.6～1.8に集中している。また、2面第4層より出土した小型かわらけの器壁の一部を打ち欠いた痕が多く見られたことも興味深い。

一方、かわらけ以外の遺物では青磁紅白双魚文鉢、銅製水滴などの町屋地域では頻繁には出土しないものが出土する様相は、本遺跡地が寺域、もしくは屋敷地の一画であった可能性も十分に考えられよう。

第3節　まとめ

今回の調査地点に検出した遺構群には、3面4時期の変遷を考えることができる。上述のようにそれぞれの時期を出土遺物から細分することは難しく、遺構の存続時期は大きく14世紀前後と捉えられる。佐助ヶ谷内の数少ない調査事例のうち、比較的大規模な調査が行われた鎌倉税務署用地地点における遺構の存続時期は、概ね13世紀末～16世紀とされている。同地点は谷開口部に比較的近い位置にあり、直線距離にして約450mを隔てた谷頭に近い本調査の成果との直接的比較は避けなければならないものの、鎌倉税務署用地地点の第7期（13世紀第4四半期ころ）以降に行われた多量の土丹を利用した版築地業と同様な地業が今回調査の第2面にも観察されており、谷内の開発が比較的時間差を置かずに進行した可能性が示唆されている。しかし、本地点の存続期間は限定的であり、同じ佐助ヶ谷内にあっても、谷筋中央に近い場所と、そこからややはずれた支谷内の一画とでは、自ずと差異が生じ、支谷の開発は遅れて行われたと考えられる。

そうした谷地形地域の開発の具体像は不明だが、第一章にて触れた通り、調査区を挟むようにして支谷の崖面の裾から支谷奥へと「やぐら」群が展開している。「やぐら」群は本来寺院に包摂される一定の宗教的空間に位置していたと考えられており、（田代1990、1993、1996など）。本地点に関しても、「やぐら」群の残る支谷内奥の上段には「やぐら」を包摂する主体的建物の存在を予想することもできるであろう。

田代郁夫　1990　「総括―中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義―」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』　笹目遺跡内やぐら発掘調査団他

同　1993　「鎌倉の「やぐら」―中世葬送・墓制史上に於ける位置づけ―」『中世社会と墳墓』　名著出版

同　1996　「鎌倉のやぐら」『シンポジウム・やぐら～中世人の浄土～発表資鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所

附編　宝蓮寺跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

佐助二丁目に所在する宝蓮寺跡において行われた発掘調査で、掘立柱建物跡や土坑、多数のかわらけなどが検出された。また、14世紀前後を中心とした生活面３枚が認められている。以下に示す花粉分析はこうした時期における遺跡周辺の植生を検討する目的で行われた。加えて、上位層においては耕作土の様相が認められ、花粉およびプラント・オパール分析からこれについて検討した。

１．試料

図１に試料を採取した付近の土層断面（調査区北壁）を、図２に試料を採取した地点の地質柱状図と試料採取層準を示した。以下に各土層の簡単な記載を示す。

Ⅰ層は小レキを多く含む暗灰褐色のシルト質砂（表土）、Ⅱ層は小レキが散在する暗灰褐色の粘土質砂～砂質粘土である。Ⅲ層は暗灰褐色砂質粘土質シルトで、レキが散在し、炭片が点在し、かわらけ片も認められる。また、別地点では本層最上部において宝永テフラがレンズ状に観察されている。Ⅳ層は暗灰褐色の砂質粘土で、大型の土丹（泥岩）が散在し、炭片が点在している（1面構成土）。Ⅴ層およびⅥ層（２面構成土）は粘性の高い暗灰褐色砂質粘土で、土丹が多く含まれ、炭片が点在し、１３世紀後半～14世紀初の遺物が出土している。Ⅶ層は褐灰色（酸化？）の細粒砂、Ⅷ層・Ⅸ層・Ⅹ層は褐灰色の土丹層で、基質は褐灰色の砂質粘土である。ⅩⅠ層の上部は黒褐色砂質粘土、下部は黒～黒褐色の砂質粘土でかたくしまっており、粘土化した黄色や青灰色の土丹が散在している。ⅩⅡ層・ⅩⅢ層は黒色の

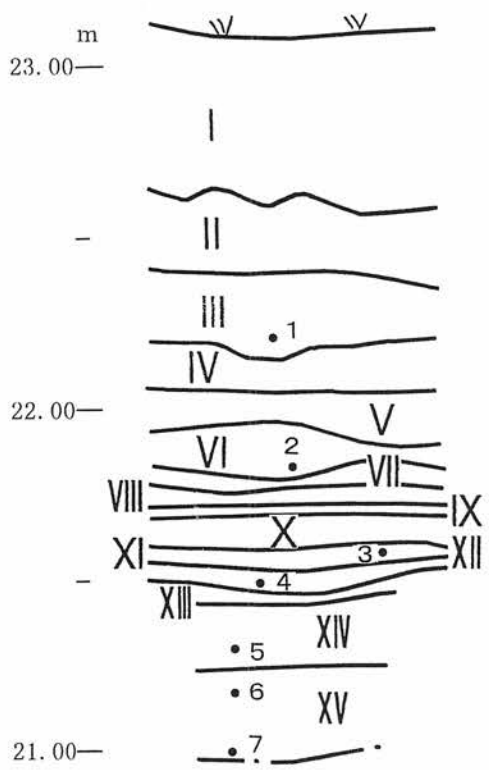


図１　試料採取地点付近の土層断面図（調査区北壁）

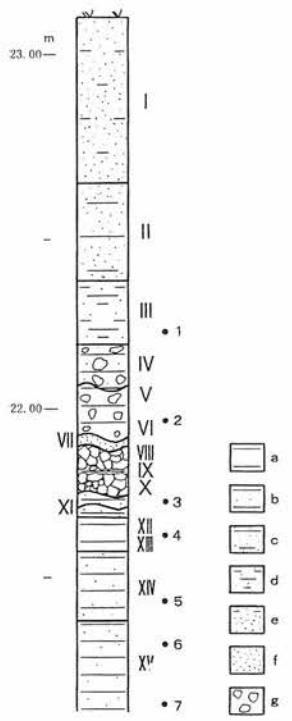


図２　試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準

a：粘土　b：砂質粘土　c：砂質粘土～粘土質砂
d：砂質粘土質シルト　e：シルト質砂　f：砂　g：レキ・土丹

粘土で、ボソボソとした団粒状を呈している。XⅣ層は黒灰色砂質粘土で、青灰色砂岩が点在しており、一部風化して層が青味を帯びている。また、ロームの小粒子も散在している。XⅤ層はややかたくしまった黒色砂質粘土で、やはりロームの小粒子が散在している（3面構成土）。

2．分析方法

上記した土層より採取した7試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約4～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

表1　宝蓮寺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7
樹木								
マキ属	*Podocarpus*	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	1	-	-	-	-	-	1
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	1	-	-	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	5	2	-	2	-	-	4
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	2	-	-	-	-	-	1
ヤマモモ属	*Myrica*	1	-	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	1	2	-	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	1	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	5	-	1	-	-	2
ブナ属	*Fagus*	-	3	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	3	-	2	-	-	2
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	7	1	2	-	-	8
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	-	-	1
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	-	3	-	-	-	-	3
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	3	-	1	-	-	2
フウ属	*Liquidambar*	-	4	-	-	-	-	-
ツタ属	*Parthenocissus*	-	-	-	-	-	-	1
草本								
ガマ属	*Typha*	-	1	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	7	22	7	10	1	1	58
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	1	-	-	-	-	1
クワ科	Moraceae	-	1	-	-	-	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	3	-	1	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	2	-	-	-	-	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	-	1
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	1	-	1	1	-	2
アブラナ科	Cruciferae	-	4	-	-	-	-	1
マメ科	Leguminosae	1	-	-	2	-	-	2
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	1	-	-	2
ヨモギ属	*Artemisia*	5	18	10	7	-	1	53
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	2	1	1	-	-	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	4	1	-	-	-	21
シダ植物								
単条型胞子	Monolete spore	13	10	8	14	11	-	37
三条型胞子	Trilete spore	-	1	1	-	-	-	4
樹木花粉	Arboreal pollen	12	33	2	8	1	0	25
草本花粉	Nonarboreal pollen	17	59	19	23	2	2	147
シダ植物胞子	Spores	13	11	9	14	11	0	41
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	42	103	30	45	14	2	213
不明花粉	Unknown pollen	10	20	4	6	1	2	33

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

3．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉17、草本花粉14、形態分類で示したシダ植物胞子２の総計33である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、花粉・シダ植物胞子の分布を図３に示したが、検出できた花粉化石数は各試料とも非常に少なく、多くは分布図としては示せなかった。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示した。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、全花粉・胞子総数が100を越えたのは試料２と７の２試料のみであり、これらのみ分布図を示した。得られた花粉化石のうち、樹木類ではスギやコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）がこれら２試料において１％を越える出現率を示している。その他、クマシデ属－アサダ属，ハンノキ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属，フウ属が試料２において1%を越えて検出されている。草本類ではイネ科，ヨモギ属，タンポポ亜科が多く検出されており、イネ科，ヨモギ属は20％前後の出現率を示している。その他、試料２ではギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，アブラナ科，ヨモギ属を除く他のキク亜科が1%を越えて得られている。

4．遺跡周辺の古植生

1）花粉化石について

花粉の外膜は物理・化学的に強く、水中など還元環境下では良好な状態で保存される。しかしながら、

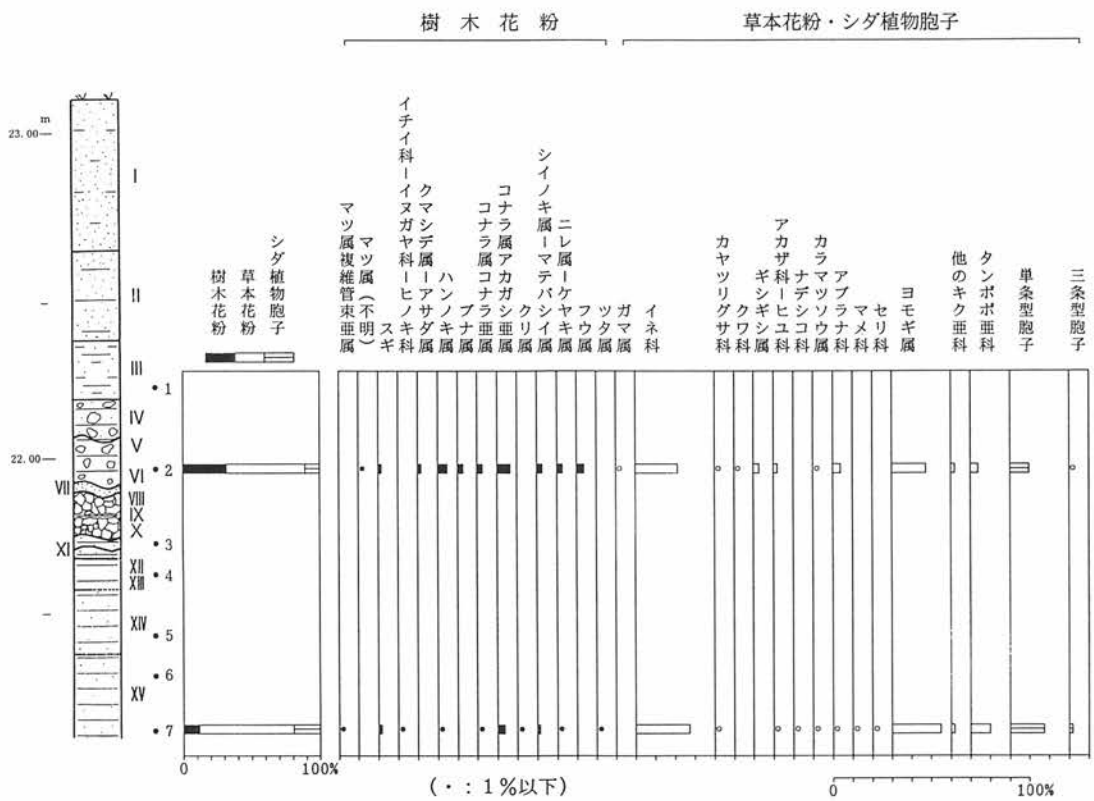


図３　宝蓮寺跡の花粉化石分布図
（出現立は全花粉・胞子総数を基数として百分率で産出した）

陸域に落下した花粉は紫外線や土壌バクテリアなどにより容易に分解されてしまう。本遺跡試料の分析残渣には植物片は多く認められるものの花粉化石は少ない結果であった。これは試料採取地点がその当時陸上の乾いた環境であり、多くの花粉化石は分解消失してしまっている可能性が高いことを示していると思われる。

2）遺跡周辺の古環境

かわらけなどの出土遺物から検出された生活面の存続期間は14世紀前後を中心とした時期と推測されており、これは分析試料の１～５に当たる。また、これらの下位の試料６，７（ＸＶ層）は中世地山である。

花粉分析の結果、得られた花粉化石は少なく、上記したように試料採取地点付近は乾いた環境であったと推測される。本調査地点は宝蓮寺跡と推定されている支谷内中程のところに位置しており、ある時期に寺院境内であったことが推測されている。このように14世紀前後の試料採取地点付近は寺院境内などの陸域と予想され、イネ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などの雑草類が一部に生育していたと思われる。また、中世以前もほぼ同様の環境であったと推測され、同様の雑草類が多く生育していたものと予想される。

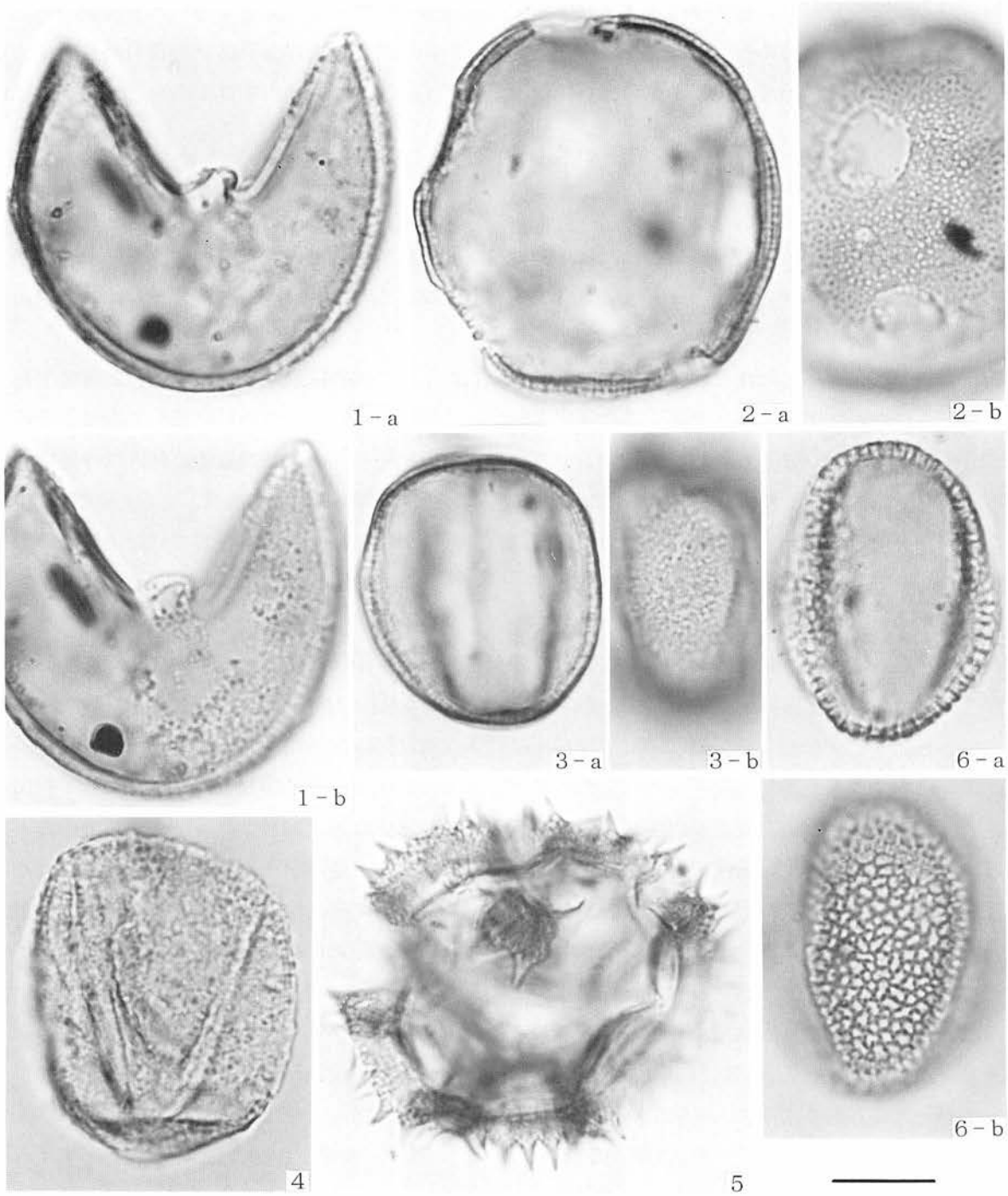
樹木類については得られた花粉化石数はさらに少なく、そのなかではスギ，アカガシ亜属，シイ類などがやや目立って検出されいる。本遺跡に近い佐助ヶ谷遺跡では中世初までスギ林やアカガシ亜属・シイ類を中心とした照葉樹林が優勢であり、その後の13世紀後半から14世紀かかる頃以降森林破壊が進み、アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類(マツ属複維管束亜属)が目立つ存在となっている（鈴木　1993)。宝蓮寺跡においても花粉化石数が少ないもののスギ，アカガシ亜属，シイ類などがやや目立って検出され、スギ林や照葉樹林の存在が予想される結果が示されている。なお、試料２～５は各生活面構成土である。また、時代は14世紀前後を中心とした時期であり、佐助ヶ谷遺跡からみると法蓮寺跡におけるニヨウマツ類は少ないように思われる。このことは生活面構成土はニヨウマツ類が増加する以前の土壌が使われていることを示していることが一つに考えられる。また、花粉化石が分類群により残りやすい残り難いといった違いによることも考えられよう。

なお、Ⅲ層（試料１）は耕作土である可能性が考えられていたが、花粉分析からは検討できる結果が得られなかった。よって、同試料を用いてプラント・オパール分析を試みた。その結果、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当たり約22,000個と非常に多く検出された。一般には試料１ｇ当たり5,000個以上がそこで稲作が行われていたと判断される指標となっている(藤原　1984)。このことからすると約22,000個が検出された試料１、すなわちⅢ層において稲作が行われていたと検出個数からは判断され、先にも記したがかなり乾いた環境での稲作（乾田？）と推測される。しかしながら、他の作物を栽培する際に肥料などに稲藁が利用され、それによってイネのプラント・オパールが供給されたことも考えられる。こうしたことからここでは「稲作が行われていた可能性が考えられる」に止めたい。

引用文献

藤原　宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル，227，　p.2－7.

鈴木　　茂（1993）鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の花粉化石．　佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書　－第１分冊－．　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団，　p.407－430.



図版　宝蓮寺跡の花粉化石（scalebar：10 μm）

1：スギ　PLC.SS2410No.1

2：フウ属　PLC.SS　2413No.2

3：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS　2411　No.2

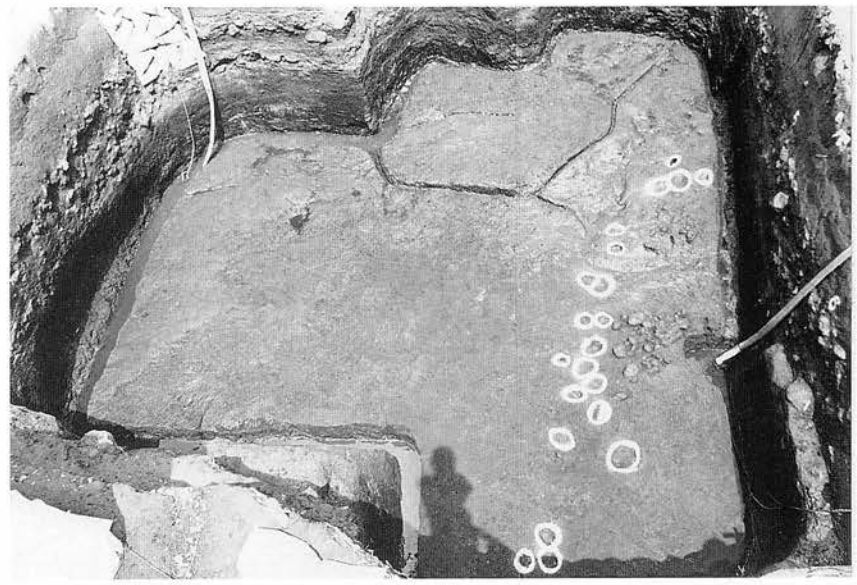
4：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS2412No.2

5：タンポポ亜科　PLC.SS2417No.3

6：アブラナ科　PLC.SS2414No.2

写　真　図　版

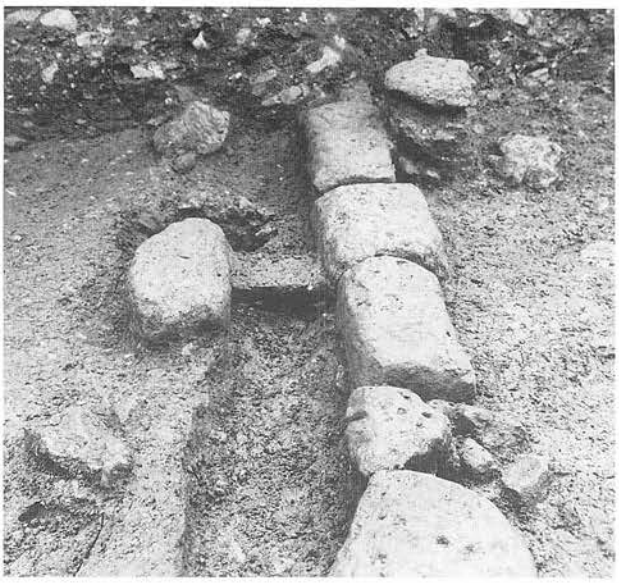
a. 調査区壁土層堆積状況



b. 第3面北側

c. 第2面北側

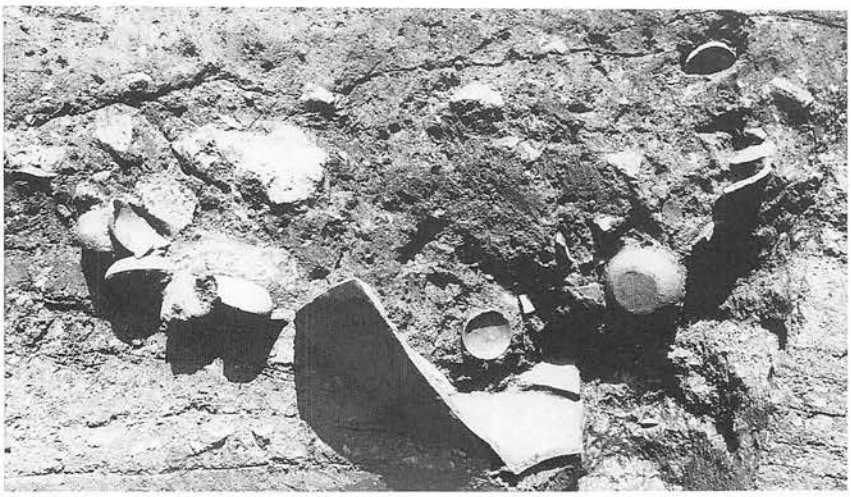
図版 2



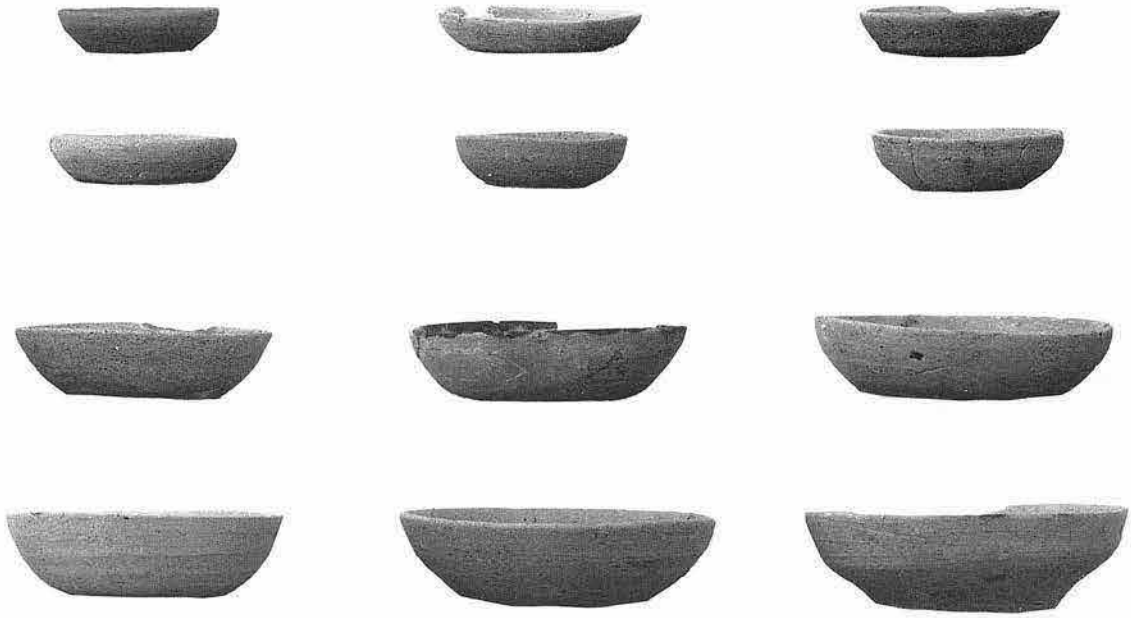
b．同左近景

a．第 2 面溝55

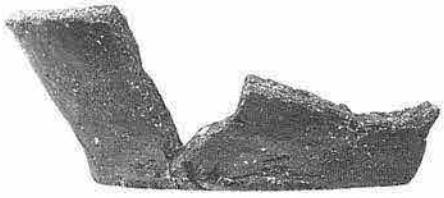
c．第1面南側



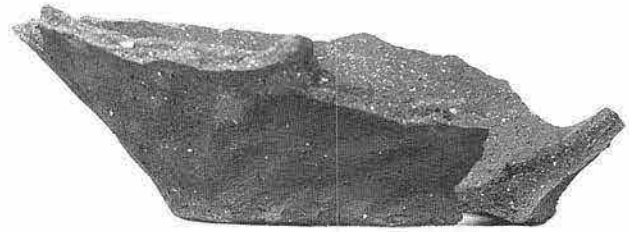
d．第1面土壙210断面



かわらけ

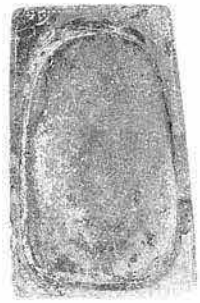


常滑小型こね鉢

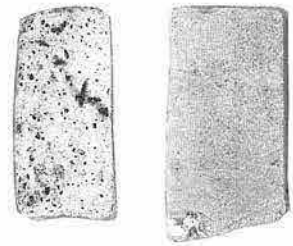


常滑甕転用こね鉢

青磁紅白双魚文碗



硯



砥石

硯石

銅製水滴

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	根本志保
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ほうれんじあと 宝蓮寺跡	かながわけん かまくらしさすけ 神奈川県 鎌倉市佐助二丁目 897番11	204	374			19970317 ～ 19970521	63.20m²	個人専用住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宝蓮寺跡	社寺	中世	土壙　溝 建物址　柵列	かわらけ　常滑 国内産陶器 舶載陶磁器 骨製品、銭 天箱24箱	

わかみやおお じしゅうへん い せきぐん
若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目５番８地点

例　　言

1．本書は鎌倉市小町二丁目５番８地点に所在する、店舗併用住宅の建設に先だち行われた若宮大路周辺遺跡群（県遺跡台帳№242）の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は平成９年５月６日から同年７月15日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

3．本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は、第１章・第２章を菊川　泉が、第３章第１節・第３節を福田　誠が、第２節・第３節を菊川・神山晶子が、第４章を福田が担当し、各文末に執筆者名を記した。編集は福田が行った。

4．本書に使用した写真のうち個別遺構は、福田・菊川・岩野裕巳が、遺物撮影は福田が行った。全景写真は木村美代治がポール式高所撮影装置を用いて撮影した。

5．発掘調査の体制は以下の通りである。

主任調査員　福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託）

調　査　員　木村美代治　菊川泉　神山晶子　岩野裕巳　丹行正　本城裕　福田陽子

作　業　員　㈳鎌倉市シルバー人材センター

柴崎英輔　川原龍雄　田口康雄　照井三喜　本瀬正道

6．附編の土壌中の分析、建築材の樹種同定は㈱パレオ・ラボに委託したものである。

7．発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

本　文　目　次

第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 217
第２章　調査の経過と層序 …… 218
第３章　検出した遺構と遺物 …… 220
　第１節　１面・２面・３面の遺構 …… 220
　第２節　１面・２面・３面の遺物 …… 224
　第３節　４面の遺構 …… 243
第４章まとめ …… 251
附　編　土壌分析・樹種同定 …… 254

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図 …… 216
図２　調査地点と周辺図 …… 216
図３　調査グリッド配置図 …… 219
図４　３面遺構全測図 …… 221～222
図５　３面南北道路・溝１遺構図 …… 223
図６　１面・２面包含層の遺物 …… 225
図７　１面・２面包含層の遺物 …… 226
図８　１面・２面包含層の遺物 …… 227
図９　１面・２面包含層の遺物 …… 229
図10　１面・２面包含層の遺物 …… 230
図11　１面・２面・３面包含層の遺物 …… 231
図12　１面・２面包含層の遺物 …… 233
図13　３面包含層の遺物 …… 235
図14　３面包含層の遺物 …… 236
図15　３面包含層の遺物 …… 238
図16　３面溝１の遺物 …… 239
図17　３面遺構の遺物 …… 240
図18　３面遺構の遺物 …… 242
図19　４面遺構全測図 …… 245～246
図20　４面建物１の検出状況 …… 247
図21　４面建物１の掘方及び根太の状況 …… 248
図22　４面建物１の復元模式図 …… 249
図23　調査区北壁断面と試料採取層準 …… 254

図24　土壙２の花粉化石分布図 …… 257
図25　土壙１の花粉化石分布図 …… 258

表　目　次

表１　１・２面包含層出土のかわらけ法量表 …… 250
表２　１・２面包含層出土のかわらけ法量表 …… 250
表３　３面包含層出土のかわらけ法量表 …… 250
表４　３面包含層出土のかわらけ法量表 …… 250
表５　３面遺構出土のかわらけ法量表(溝１) …… 250
表６　３面遺構出土のかわらけ法量表 …… 251
表７　３面遺構出土のかわらけ法量表 …… 251
表８　若宮大路周辺遺跡群の産出花粉化石一覧表 …… 255
表９　試料１cc中の寄生虫卵個数 …… 256
表10　若宮大路周辺遺跡群出土木製品の樹種同定 …… 260

図　版　目　次

図版１　調査地点の周辺 …… 263
図版２　３面全景 …… 264
図版３　３面東西道路状遺構 …… 265
図版４　３面南北道路状遺構・溝 …… 266
図版５　４面全景 …… 267
図版６　４面検出した遺構 …… 268
図版７　４面建物１－１ …… 269
図版８　４面建物１－２ …… 270
図版９　４面建物１－３ …… 271
図版10　４面建物１－４ …… 272
図版11　４面建物１－５ …… 273
図版12　４面建物１－６ …… 274
図版13　４面建物１－７ …… 275
図版14　１面・２面包含層出土の遺物 …… 276
図版15　１面・２面包含層出土の遺物 …… 277
図版16　１面・２面包含層出土の遺物 …… 278
図版17　１面・２面包含層出土の遺物 …… 279
図版18　１面・２面包含層出土の遺物 …… 280
図版19　１面・２面・３面包含層出土の遺物 …… 281

図版20　1面・2面包含層出土の遺物 …… 282
図版21　3面包含層出土の遺物 …… 283
図版22　3面包含層出土の遺物 …… 284
図版23　3面包含層出土の遺物 …… 285
図版24　3面溝1の遺物 …… 286
図版25　3面遺構の遺物 …… 287
図版26　3面遺構の遺物 …… 288
図版27　若宮大路周辺遺跡群の花粉化石 …… 289
図版28　若宮大路周辺遺跡群の寄生虫卵 …… 290
図版29　若宮大路周辺遺跡群の出土材顕微鏡写真 …… 291

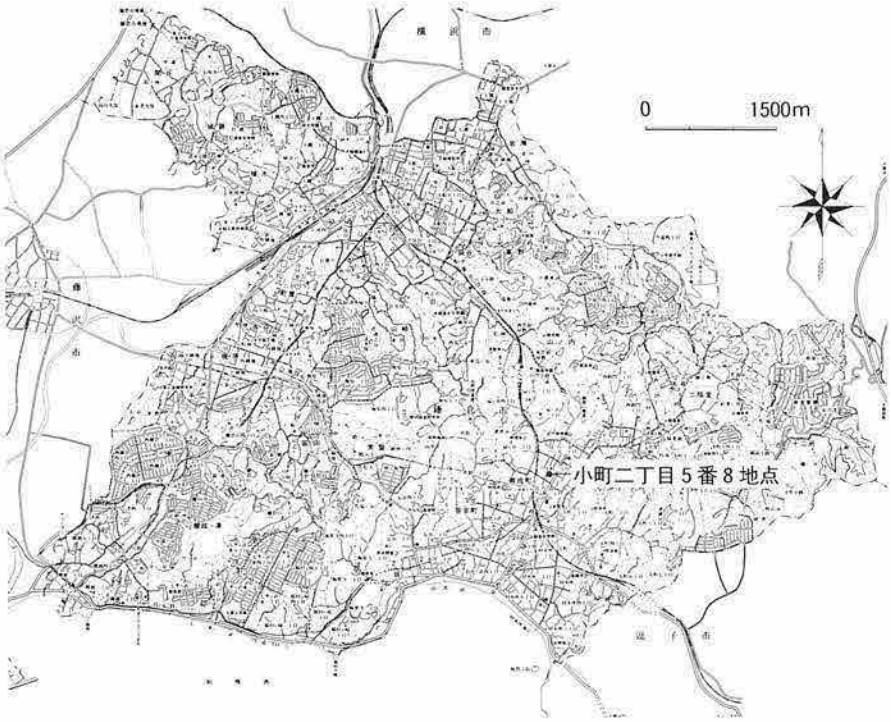


図１　調査地点位置図

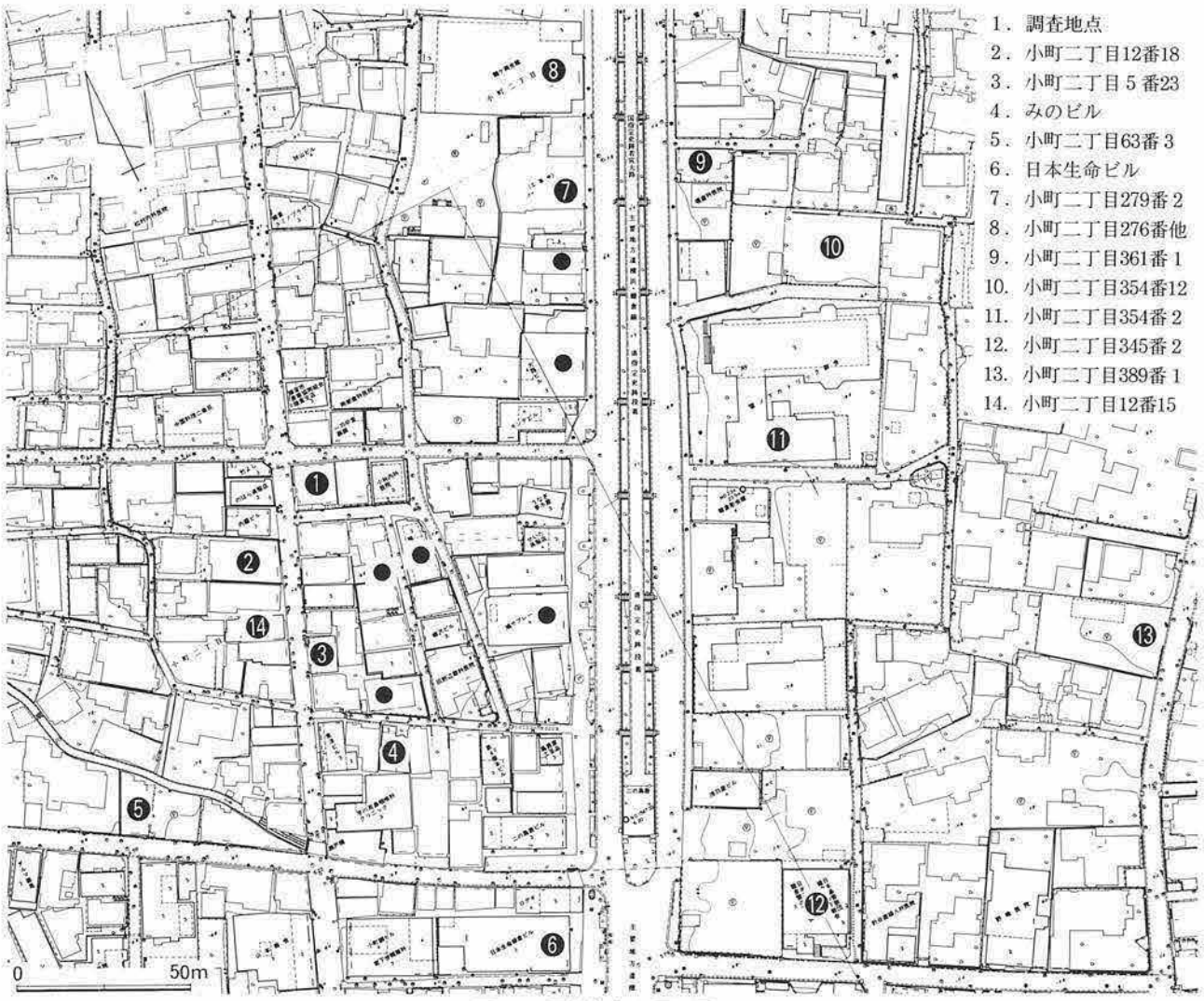


図２　調査地点と周辺図

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

遺跡地の小町二丁目５番８地点は鎌倉を東西に分ける若宮大路の西側に位置し、二の鳥居から北に約86ｍ、西に約85ｍの地点、ＪＲ鎌倉駅から北に延びる現在の小町通りに面している。遺跡名称の「若宮大路周辺遺跡群（県遺跡台帳№242）」は、若宮大路東側に位置する「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）（県遺跡№282）」・「宇津宮辻子幕府跡（県遺跡№239）」、若宮大路西側に位置する「北条時房・顕時邸跡（県遺跡№278）」を除いた、鶴岡八幡宮の社頭より若宮大路を中心に西は今小路、東は滑川、南は大町大路に囲まれた南北約1.1Km、東西約0.5Kmにおよぶ、旧鎌倉市内の中核をなす範囲の総称である。

若宮大路周辺遺跡群が含まれる旧鎌倉市内は、相模湾に面した南側を除き、三方を標高100ｍ前後の丘陵に囲まれた沖積平野である。この沖積平野は、約600万年前の新生代第三紀に形成された凝灰質砂岩と泥岩が、浸食作用で削られ形作られた谷に砂と泥が堆積したものである。

縄文時代前期の海進期（約5000～6000年前）には、海面が今より約10ｍ近く上昇していたと考えられ、入り込んだ海水により鎌倉湾を形成し現在の鶴岡八幡宮付近まで海岸線が迫っていた。縄文時代後期の海退期（約4000年前）よりしだいに平野部分の陸地化が進み、弥生時代（約2000年前）にはさらに乾燥がすすみ、堆積した砂によって砂丘が作られた。砂丘の背後にはラグーン（後背湿地）が形成され、旧市内を流れる最大の河川である滑川をはじめ扇川、佐助川などが流れ込んでいた。砂丘や河川によって作られた自然堤防上に、点々と最初の人々が居住を始めたと考えられている。

奈良時代には鎌倉郡の郡衙（郡役所）が置かれ、鎌倉は重要な位置を占めていたと考えられる。平安期には、源頼義が石清水八幡宮を勧請した元八幡宮、八幡太郎義家の生まれた甘縄の館、亀ヶ谷の義朝の居館等の存在が知られ、頼朝が鎌倉に入る1180年以前から源氏相伝の地として、多くの人が住んでいたと思われる。

調査地は、鎌倉駅と鶴岡八幡宮を結ぶ小町通りの東に面している。小町通りは若宮大路にほぼ平行して西を走る商店街である。現在は鎌倉駅周辺では最もにぎやかな一画である。ただこの小町通りは、近代になってから設けられた道であり、鎌倉期より「小町大路」といわれていたのは、若宮大路を挟んで東に位置する現在の辻説法通りであった。「小町」の名称は、『鎌倉誌』によれば、「若宮小路の東より南へ折て行、夷堂橋までの間を云。」とあり、雪ノ下の南に接し、本覚寺前の夷堂橋をもって、大町と区切られた地域を指していたようである。

現在、調査地点と若宮大路を結んで東西に道がはしるが、この道沿いで若宮大路軸線から東に約80ｍ入った地点には、宇津宮稲荷がある。これは宇津宮辻子幕府跡と伝えられている。

「辻子」というのは、南北にはしる若宮大路・小町大路・今大路に直交して、東西に走る道をさす語として、また、地名をさす語としてしばしば『吾妻鏡』に登場する。

宇津宮辻子幕府は、嘉禄元（1225）年、それまで大倉にあった幕府が移されたところであり、その後嘉禎２（1236）年、若宮大路幕府に移されるまで、ここが将軍藤原頼経の邸となっていたわけである。

室町期には、この地に宇津宮公方の邸があったことが知られている。宇津宮公方とは、六代将軍足利義教が、永享11（1439）年、鎌倉公方足利持氏を亡ぼした後、鎌倉公方とすべく鎌倉に送った子息（名不詳）である。前の関東管領上杉憲実に阻まれ、結局鎌倉公方の座にはつくことはできず、そのまま鎌倉にとどまったが、その邸が宇津宮辻子の将軍邸跡であったといわれている。

ただし、その範囲については定かではなく、これまでに様々な論証が行われてきた。『鎌倉市史－総説編』では、宇津宮稲荷のある路地が宇津宮幕府の南限と考えている。『吾妻鏡』安貞二年八月十五日及び嘉禎六年六月二十九日条に、宇津宮辻子に面して幕府の南門が開いていた記事がある。また嘉禄元年十一月二十日条に、宇津宮幕府の位置を「東二百五十六丈五尺、南北六十一丈」と記述しているのがその根拠となっている。しかし、東西の二百五十六丈五尺というのはここに確保できる長さではなく、市史総説編の筆者の高柳光寿氏は、『吾妻鏡』の「二百五十六丈五尺」は「五十六丈五尺」の誤記であろうと述べている。(註１)その後大三輪達彦氏は、「中世都市鎌倉の地割制試論」の中で、南限を二の鳥居の南から小町大路に抜ける道に想定した。(註２)

中世の鎌倉に於いて道路がどのように整備されていたかは、近年頻繁に議論される問題である。特に若宮大路を中心とした市街地については、鎌倉草創期からの要所であり、整然とした整備が早い段階から行われていたはずの地域といえる。道は、町を区切り、屋敷の限界であるとして注目されているわけである。特に前述した「辻子」については、ここには方格的な地割りが存在し、東の小町大路と西の今大路に挟まれた空間に等間隔で辻子が走り、町を区切っていたと考える説もある。しかし、今日までの周辺の発掘調査からは、これに当てはまる道の遺構はほとんど発見されていなかった。

本調査地点は、宇津宮稲荷と若宮大路が直交するその延長上にあたる。宇津宮稲荷は、現在その位置が定かではない宇津宮辻子の位置を推定させるものとして、今日残る唯一の手掛かりである。

西にはやはり南北に走る今大路(今日の名称は今小路)があり、仮に宇津宮稲荷と若宮大路を結ぶのが宇津宮辻子であったと考えると、この辻子が若宮大路を横断して今大路に至るかという問題を究明する上では、重要なポイントである。いずれにしても若宮大路をはさんで若宮大路幕府、宇津宮幕府の置かれた地点にほど近く、若宮大路からの距離も約86m。この周辺では、これまでにも多くの発掘調査が行われているが、これらの周辺の状況と合わせ鑑みて、ここは、中世においては要所であり、都市の中心地であったことは容易に推測できよう。

(菊川　泉)

註１：高柳光寿『鎌倉市史－総説編』吉川弘文館1959年
　２：大三輪龍彦「中世都市鎌倉の地割制試論」佛教芸術164号1986年1月

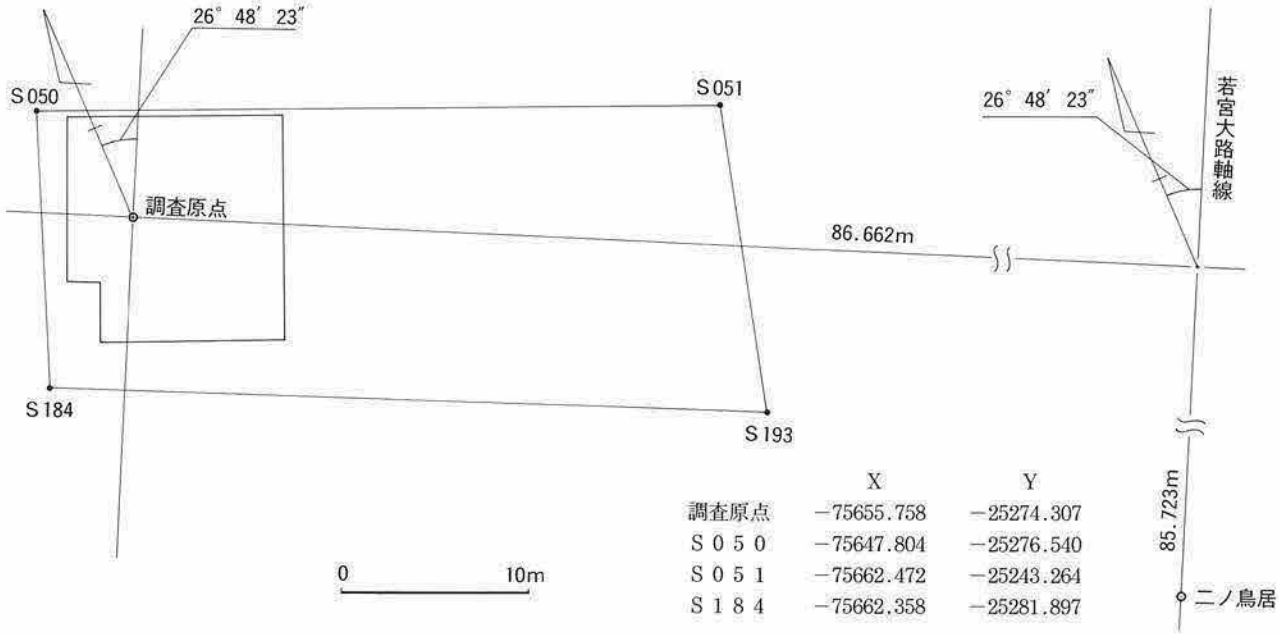
第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成９年４月28日から表土掘削を開始し、同年７月15日まで行った。

まずグリッドを、若宮大路の中軸に平行に南北軸を設けて設定した。グリットの基準とした原点(X＝－75655.758　Y＝－25274.307)は、若宮大路の二の鳥居中央から若宮大路軸線西に直角方向で86.662m、北に85.723mの地点に設定したものである。調査中に使用したレベル原点の海抜は、7.564mである。

排土の処理等の便を図るため、調査面積の南半分をまず行い、終了後に北半分を行うこととした。

南半分の調査区(第１区)については、まず、表土を剝いで現地表から約70cm付近まで重機で掘削した。表土は東に向かって厚く堆積しており、したがって検出した面は緩やかな傾斜を持って東側が下る。調査区の東端では、表土から約130cmの深さとなることを確認した。その後、撹乱の壁面を利用して土



	X	Y
調査原点	−75655.758	−25274.307
S 0 5 0	−75647.804	−25276.540
S 0 5 1	−75662.472	−25243.264
S 1 8 4	−75662.358	−25281.897

図３　調査グリッド配置図

層の堆積状況を観察した。この結果、中世地山とおぼしき黒色粘質砂層までの間に、この遺構面も含めて４期にわたるの地業面を確認した。この結果を踏まえて、１面から４面(中世地山面)までの調査を行う方針を定めた。

１面では、地業が弱く、遺構の密度が比較的低かった。この地点がどのような様相を呈していたかは、この成果からは推測できない。出土した遺物から、この地業面の年代は概ね14世紀の前葉と考えられる。

２面は、１面と同様、やはり地業が弱く、明瞭な遺構が検出できなかった。１面と比較して、有機質の遺物がかなり遺存しており、調査区の東では、網代壁の残片とおぼしき遺構を検出した。

３面では、調査区の東際で南北に延びる道路状の遺構を検出した。これは、人頭大の土丹塊を隙間なく敷き詰めたものである。また、この道路遺構の西に礎石と考えられる伊豆石が複数据えられているのを確認した。

その後、道路状遺構の一部を残して４面まで掘り下げた。また、道路状遺構の一部を断ち割るかたちでトレンチを設け、この下に方形竪穴建築址と思われる遺構があることを確認した。

第１区の調査を終えた後、これを埋め戻して、残る北半分の調査区(第２区)を重機掘削し、６月13日より遺構面の検出作業に移った。ここでも第１区で検出した面の広がりを追うというかたちで、４面までの遺構面の調査を行った。

第２区では第１区よりさらに地業が弱く、残存状態も良好でなかったため、１・２面相当の精査を省略した。３面で、第１区で検出した道路状遺構の続きを追い、加えてこれに直交する東西に延びる土丹敷きの道路状遺構を検出した。また４面では、第１区の調査中南北道路状遺構に設けたトレンチで確認した方形竪穴建築祉を細部にわたって調査した。調査は途中梅雨の悪天候にかなり悩まされたが、その後、７月15日に器材等の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構の詳細は次章に譲る。

なお、本書に収録したものは、主に１面から３面までの詳細と、事業者負担分の４面調査で確認した遺構と遺物についての概説である。事業者負担分の４面の調査成果の詳細は、『若宮大路周辺遺跡群発

掘調査報告書　鎌倉市小町二丁目５番８地点』(1998年　３月若宮大路周辺遺跡群発掘調査団編)に収録されている。

（菊川　泉）

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　１面・２面・３面の遺構

ａ．１面の遺構

１面は、現地表から調査区の西端で70cm程度の深度に検出したが、表土は東に向かって厚くなり、検出した地業面は調査区の東端では地表から130cm程の深度となっていた。この面は、土丹粒を含む砂質土で構成されるが、締まりが比較的悪く、ところどころ後世の撹乱を受けているのが目立った。生活面であると明確に断言できるものではなく、むしろ包含層の一部ととらえるべきものであろう。

遺構もはっきりとしたものは認められなかった。わずかに、数ヶ所の柱穴があるのみである。精査中に出土した遺物から考えて、この層位の年代は概ね14世紀の前葉と思われる。

ｂ．２面の遺構

１面の約20cm下にある地業面を検出した。この面を構成しているのはしまりのやや弱い砂質土である。１面と同様、しっかりとした構築面といえるものではなく、３面の上に盛られた包含層の一部といえる。これも東に向かって緩く傾斜していた。遺構の密度は低く、若干の柱穴・土壙・溝等を検出したが図示出来るものではない。上層で築かれた遺構が、後世に削平や撹乱を受けたものである可能性が高い。

調査区東側では、南北にのびる土丹による堅緻な地業が認められたが、これは２面を構成している土層が薄くなり、下層３面の地業面が顔をのぞかせているものと判断した。

ｃ．３面の遺構

２面を構成している砂質土を20cmほど掘り下げると、土丹粒や炭化物粒を多く含むやや粘性のある茶褐色土の面となる。１面及び２面と比較して明瞭な構築面であり、整然とした遺構も検出された。以下にその個々を述べる。

南北道路状遺構・溝１

２面調査中に、調査区の東端で一部が見つかっていた遺構である。土丹による地業が行なわれ、東西に幅約2.5m、南北に長さ約11mの範囲で、舗装のために人頭大の泥岩(土丹)をマウンド状に隙間なく敷き詰めたものである。若宮大路に平行して南北方向にのびる道路と思われる遺構である。

この南北道路状遺構の東側に沿う溝１が検出された。幅約40cm、深さ約14cmで、道路に伴う側溝と考えられる。南北道路状遺構は一度拡幅され、この時に打ち込んだ杭で横板を押さえるかたちの溝１が道路の土丹面に沿って造られたと考えられる。

東西道路状遺構

南北道路状遺構に直交するかたちで検出された。南北に幅約３m、東西に長さ約11mの範囲で、表面が平坦な厚さ10cm程の凝灰岩(鎌倉石)をマウンド状に隙間なく敷き詰め舗装したものである。道路面

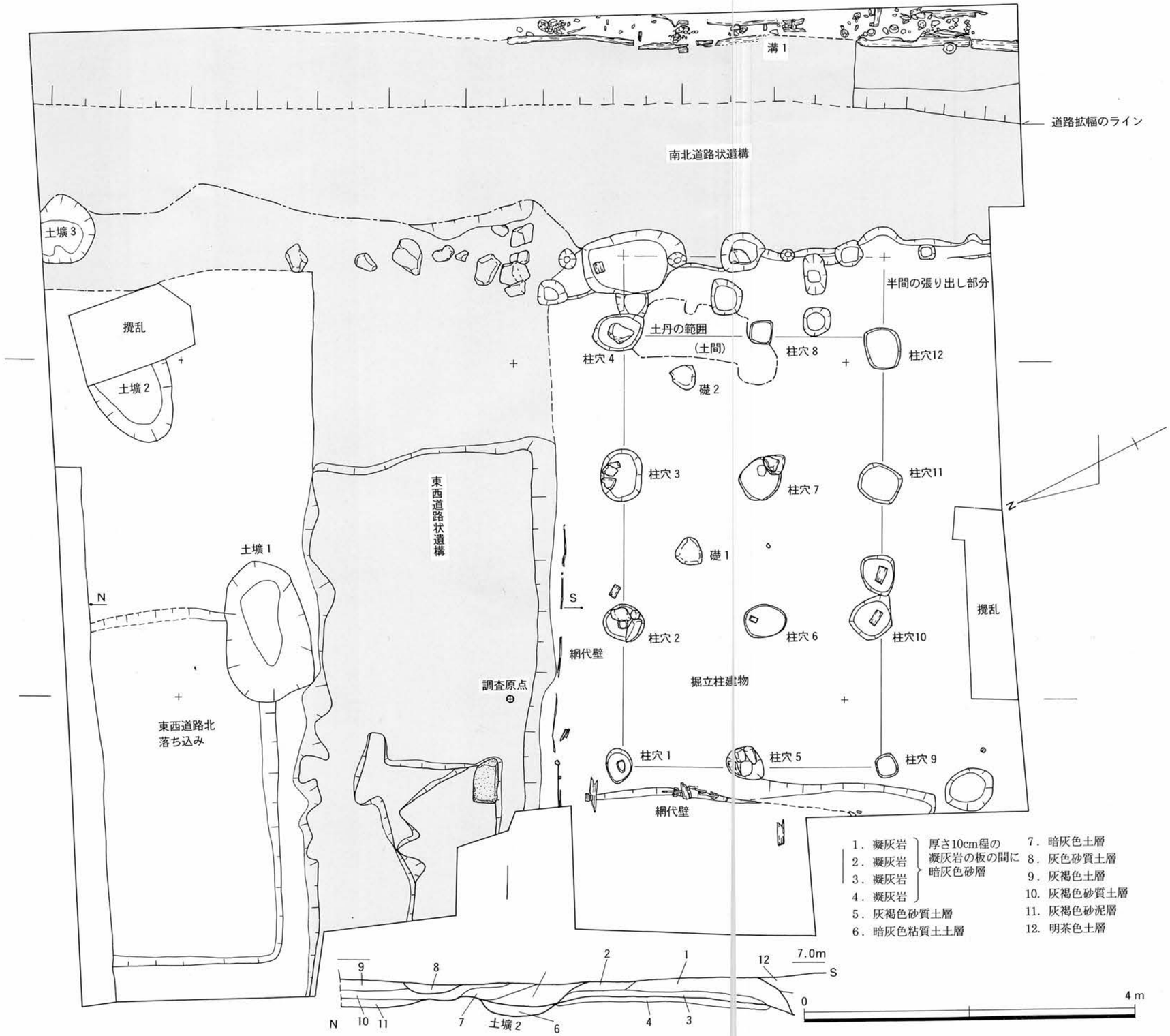

溝1
道路拡幅のライン
南北道路状遺構
土壙3
撹乱
土壙2
半間の張り出し部分
土丹の範囲
(土間)
柱穴4
柱穴8
柱穴12
礎2
柱穴3
柱穴7
柱穴11
東西道路状遺構
土壙1
礎1
N
S
柱穴2
柱穴6
柱穴10
撹乱
網代壁
調査原点
掘立柱建物
東西道路北
落ち込み
柱穴1
柱穴5
柱穴9
網代壁
1．凝灰岩
2．凝灰岩
3．凝灰岩
4．凝灰岩
厚さ10cm程の
凝灰岩の板の間に
暗灰色砂層
5．灰褐色砂質土層
6．暗灰色粘質土土層
7．暗灰色土層
8．灰色砂質土層
9．灰褐色土層
10．灰褐色砂質土層
11．灰褐色砂泥層
12．明茶色土層
7.0m
S
N
土壙2
0
4m

図4　3面遺構全測図

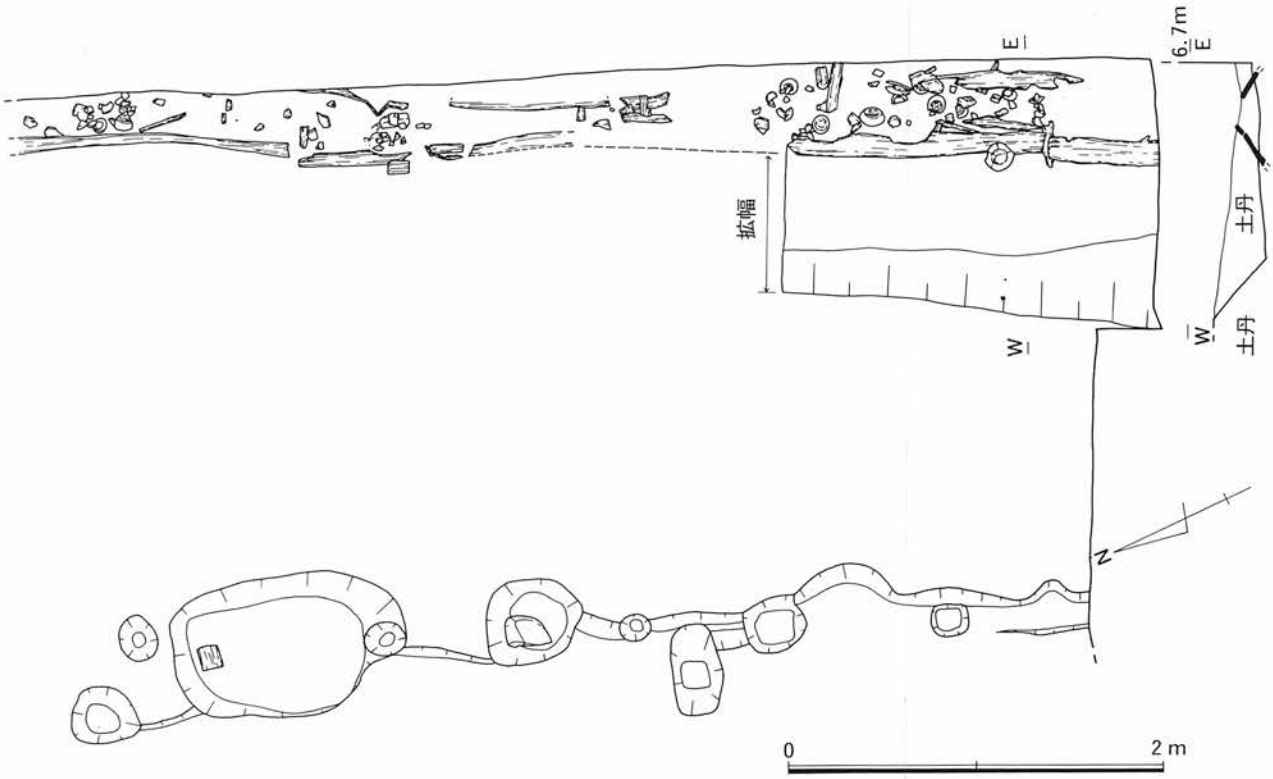


図５　３面南北道路・溝１遺構図

は最低４回の補修が認められ、各間層に暗灰色砂を敷き、この上に凝灰岩を敷き詰めていた。本来は南北道路状遺構に直交していたと思われるが、接する舗装部分が途切れている。これは舗装のために敷き詰められた凝灰岩の一部が後世に剝がされたものである。南北道路と交差して十字路となり、さらに地図上で道路を東に延長すると、直交する若宮大路を越えた延長線上に宇津宮稲荷がある。

掘立柱建物

南北道路状遺構と東西道路状遺構が交差する南西部分で検出した遺構である。北側に東西道路状遺構、東側に南北道路状遺構と接する東西３間(東側に更に半間の差掛け状の張り出しを持つ)、南北２間の掘立柱建物を確認した。(柱穴１～12)

柱間１間の長さは南北方向が約1.6m、東西方向が約1.7mである。東西方向の柱間は、最も西に位置する１間分だけが約10cm長く約1.8mである。建物の向きはそれぞれ東西道路状遺構と南北道路状遺構に接している。建物の西辺で南北にのびる溝状の掘方を検出した。この掘方に沿って中には、直立する網代状に組まれた薄い木材の残片が遺存していた。建物の壁(網代壁)になると考えられる。建物の範囲の中に礎石が２個(礎１・礎２)検出されている。建物の床を支える床束の礎石と考えられる。また、南北道路状遺構に接する柱穴４・柱穴８の間で、面上に土丹を貼った箇所があり、建物の土間部分と推定される。

土壙

土壙１　東西道路状遺構の北に検出した方形の掘り込みである。深さ約20cm。底面はほとんど平らである。建物の跡である可能性もあるが、その性格は不明。東西の一辺の長さ約4.3m。南北の規模は調査区の限界にかかっているため不明であるが、2.1m以上。柱穴は確認されていない。

土壙２　長辺２ｍ、短辺1.2m、深さ40cm程の東西に細長い土壙である。

土壙３　東側半分を攪乱されていた幅約120cm程の土壙である。水晶製の数珠の親玉、蒔絵の施された手箱(塗膜片のみ)が出土している。

土壙４　直径90cm程の円形に近い土壙である。道路面を切っているため道路より若干新しいか。かわらけが出土。

（福田　誠）

第２節　１面・２面・３面の遺物 (図６～図18)

ａ．１・２面包含層の遺物(図６・７)

図６・７は１・２面包含層から出土したかわらけである。全て糸切り成形。図６は口径約７㎝～９㎝の小型のもの。図７には口径約11cmの中型、及び、約12cm～14cmの大型のものを配した。

図６の１・２は極小型のコースター状のかわらけ。底部が広く、口縁が内湾する。これらより、僅かに大きくなるが、８も類似した形状である。

１・２面包含層からは、21・23・31・33に見られる、底部広く、器高の低い、厚さ５mm前後の均一した器肉を持つもの、特にここでは見込みの縁部分が強く撫でられ、外側下体部に一条の稜線の巡る形態のものを13世紀の第２四半期とすると、62・64のような底部がやや厚く、口縁へかけた断面が三角形を呈する13世紀中葉の特徴を備えたもの、また、７・10・12を代表する底部が狭く、器高の高い、薄手で滑らかな造りの14世紀前半に位置する形態のものまで、それぞれの時期の特徴を備えるものが含まれる。

57・58は底部中央に穿孔を有する。

図７も同様に、19に見られる、底部が厚く、外側下体部のなでの強い13世紀第２四半期のものから、18・10・13のような比較的厚さの均一な13世紀後半の特徴を備えたもの、器肉が薄く、滑らかな１・２の中型と25・26・28の大型を併せ持つ、14世紀前葉の様相を呈するものまでを含む。煤の付着したものは燈明皿として使用されたかわらけである。

（神山晶子）

ｂ．１・２面包含層の遺物　(図８)

図８には、常滑のうち壷・鉢を載せた。

１は壺の肩の部分。２本の条線と竹管文が施されている。復元最大径は25.6cm。胎土は比較的細かい長石粒を多く含み、にぶい赤灰色ないし灰色を呈す。やや締まりが弱い。２は壷の底部。復元底径は6.6cm。胎土は精良で緻密、橙ないし灰色を呈す。下体部は上下方向に刷毛なでしたあと弱い横ナデで調整している。

３・４は広口壷。ともに片口の部分。３は復元口径20.6cm。胎土は灰白色を呈し、細かい長石粒を多く含み、緻密。口縁部および内体部には明緑灰色の降灰釉が付着する。胎土・色調は山茶碗窯系捏鉢に類似する。図17－28と同一個体で接合できた。４は胎土は鈍い橙色を呈する。粗い砂粒を多く含みやや締まりが弱い。口縁部外面には斑点状に降灰釉が付着する。３に比べて口縁が玉縁状に丸みをもってつくられている。広口壺の出土例は鎌倉市内の遺跡では比較的少ない。

５は口縁部が失われているが片口鉢と考えられる。にぶい橙色を呈し、砂粒を多く含むやや粗い胎土から成る。締まりはやや弱い。口縁部および内体面に斑点状に降灰釉が付着する。復元口径は24.0cm。

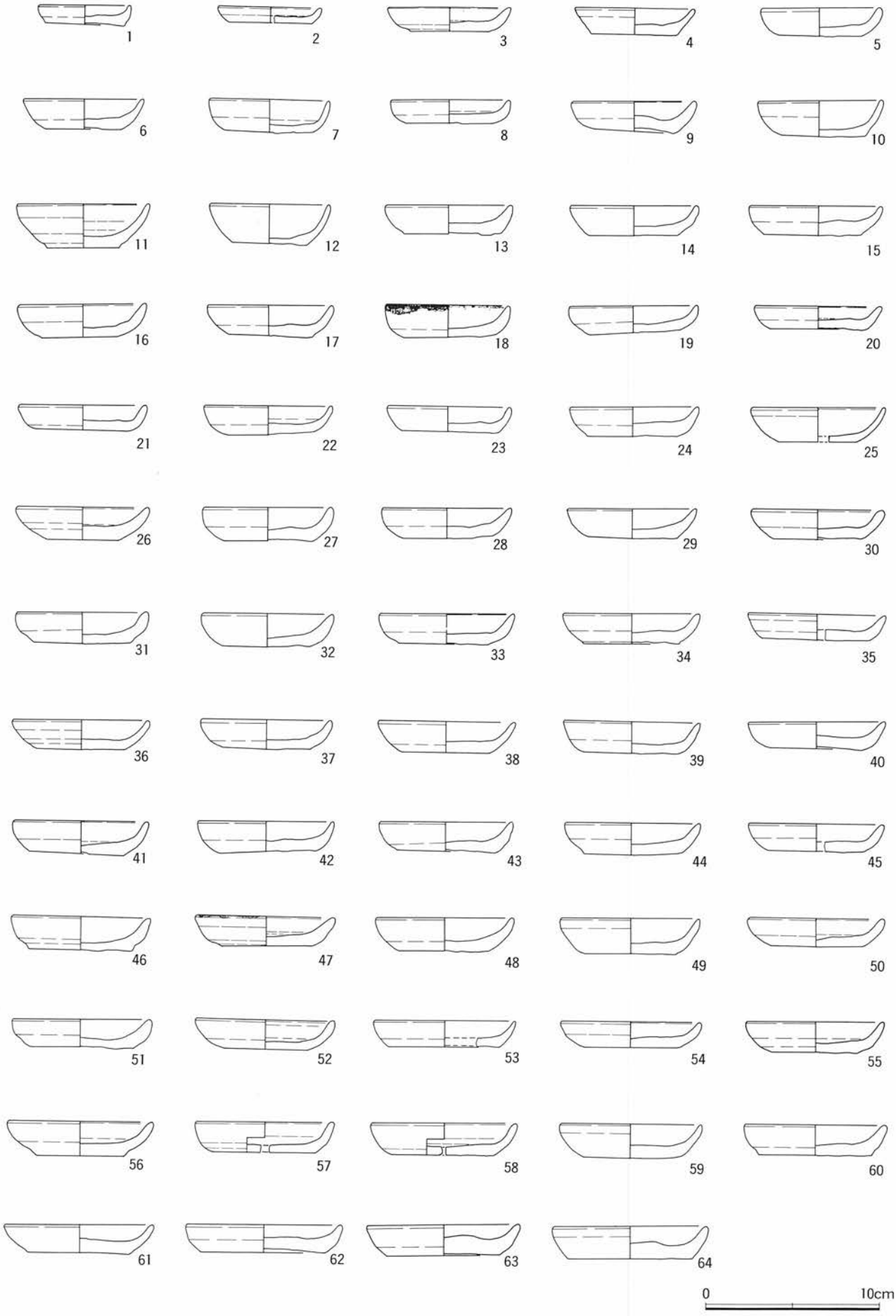


図6　1面・2面包含層の遺物

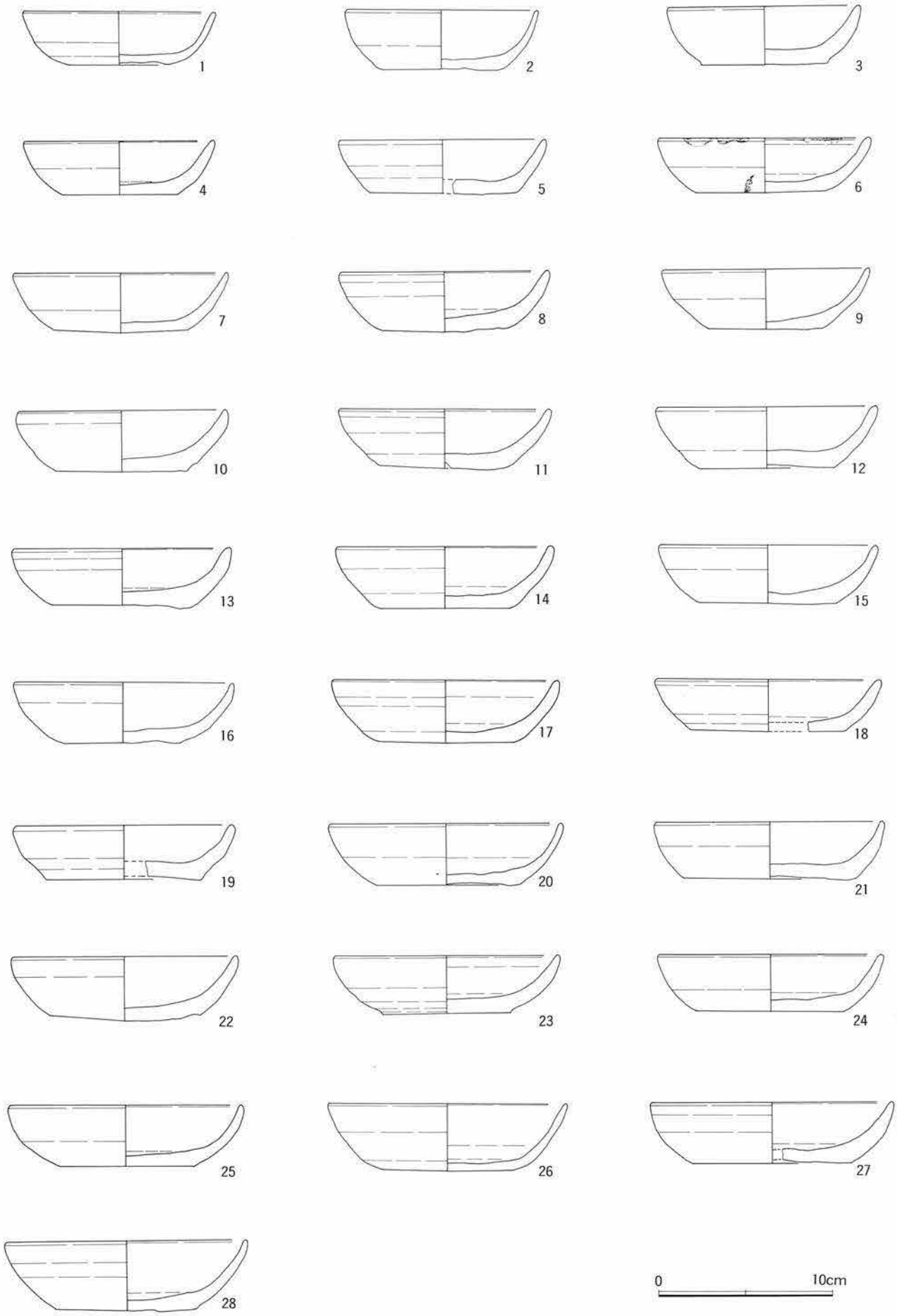


図７　１面・２面包含層の遺物

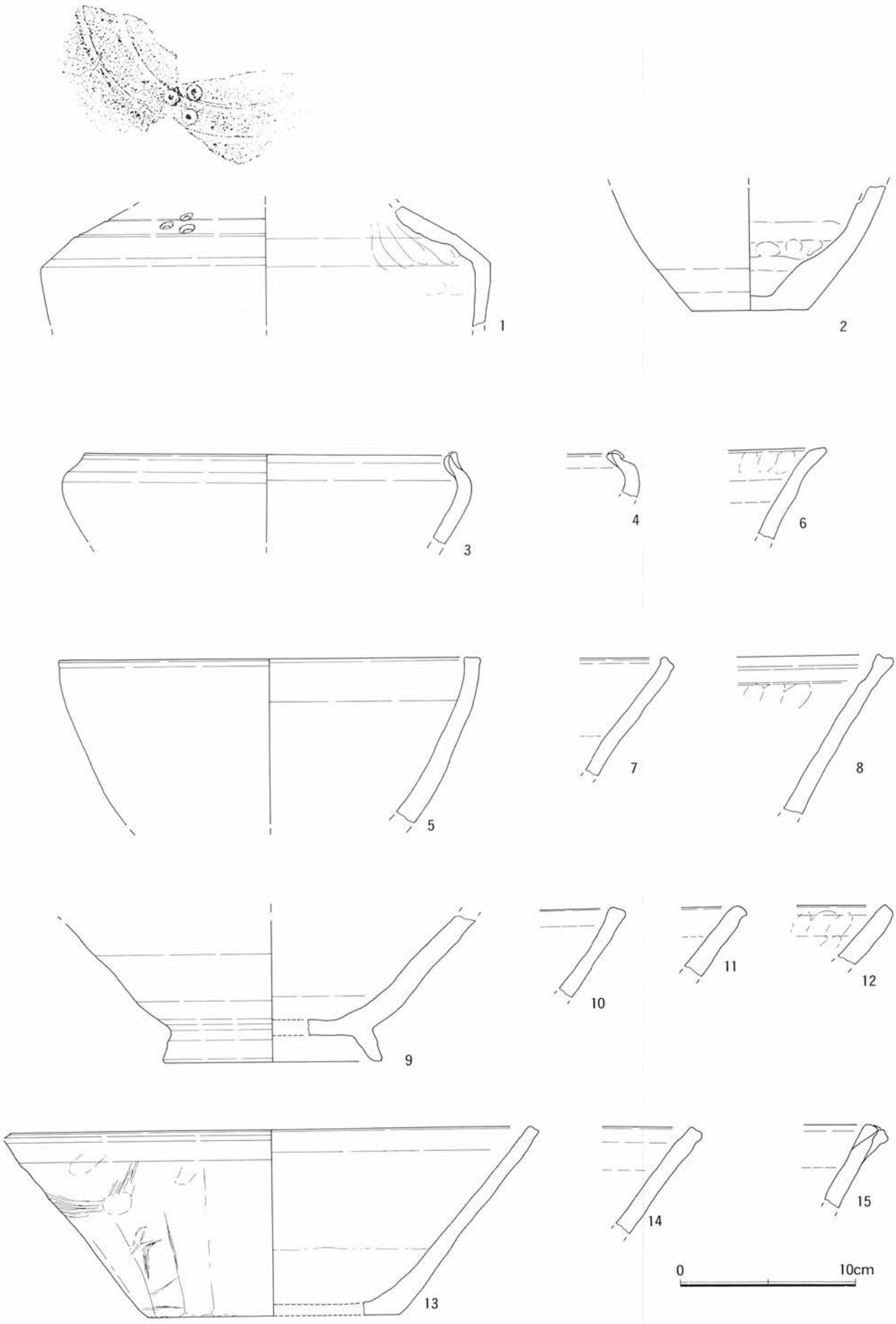


図８　１面・２面包含層の遺物

6～15は捏鉢。9は復元高台径14.4cm。13は復元口径29.5cm、底径14.4cm、器高10.8cm。ここで出土している捏鉢の形態は、口縁部の断面が角のとれた四角形状に作られているもの(10～12)から、角をもたせて端部を強くなで凹形にしたもの(8)まで種々のものが見られる。

(菊川　泉)

c．1・2面包含層の遺物(図9)

山茶碗窯系捏鉢である。

1～5は口縁部片。概ね口縁は外反気味に立ち上がり、丸く肥厚する。1は口径24.2cm、素地精良で緻密。口縁部に自然降灰、内面は磨耗する。2は口径26.0cm、1～3mm大の長石を多く含み、器肉の薄い造りである。3は口径28.3cm、1～2mm大の長石を多く含むが緻密。口縁部に自然降灰、内面は磨耗する。4は口径34.2cm、微細な長石、砂を多く含み、やや粗い。口縁、内面に自然降灰。5は砂を多く含む胎土で粗い。口縁部と僅かに内面に自然降灰。

6～10は貼付高台を有する底部片。6は3mm～1cm大の長石を含み、粗い素地。高台は比較的滑らかに付く。内定面は磨耗著しい。7は高台径11.3cm、高台の貼付部は滑らかだが、接触面は摩滅が顕著である。砂、石粒を多く含み、粗い素地である。内底面は非常に磨耗、褐色に変化し、使用頻度の高さを伺わせる。8は高台径12.6cm、やはり石粒多く混入、内底面の磨耗著しい。9は高台径14.25cm。素地は比較的緻密で、内底面は磨耗する。10は高台径15.8cm、長石粒、石粒非常に多く、粗い。高台の貼付は雑である。内底部は磨耗顕著。

(神山晶子)

d．1・2面包含層の遺物　(図10)

1は用途不明の土製円盤。直径3.2cm、厚さ1.3cm。黄灰色の土に煤けた黒灰色が混入し、かわらけより粗い土質である。

2は特異なかわらけの台部片。底部は直径3.85cm、見込み部までの高さ3.5cm。見込みは撫で調整され、台部も横ナデ、底部は糸切り痕、すのこ痕が明らかである。明赤灰色を呈し、やや砂の多い素地を持つ。

3も用途不明の土製品。直径3.3cm、高さ3.0cm。表面はヘラ状のもので撫でるか、若しくは削った調整痕であり、滑らかで締まりが良い。

4～7は白かわらけ。4は手捏ね調整。口径10.7cm、器高2.9cm。器肉が非常に薄い。5～7は轆轤成形。5は底径5.0cm。6は口径11.9cm、底径6.6cm、器高2.8cm。7は口径14.3cm、底径8.6cm、器高3.4cm。いずれも灰白色で精緻だが、手捏ねに比べ轆轤成形のものは、わずかにざらついた素地であり、底部が厚い。

8は早島式土器。高台を含む底部片である。高台径は4.6cm。二次焼成を受け赤く変色しているが、硬く焼き締まる。

9～11は瓦器。9は口径10.2cm。内面は灰白色の地に銀灰色の暗文。口縁から外面は灰黒色で、ヘラ描き状の筋がつく。11は口径10.4cm。器高3.0cm。手捏ねで下体部が輪花状の成形である。内底面に花文、内壁から口縁部に横位の暗文が施される。いずれも胎土は灰白色で緻密、硬質。

12は瓦器質の黒縁碗。口径11.4cm、底径4.6cm、器高3.7cmで轆轤成形。素地は淡灰色で粉質、極硬質である。

13は瀬戸。輪花の入子。口縁内側にわずかに降灰釉が付着する。二次焼成を受ける。

14は瀬戸美濃の小碗。口径8.15cm、底径3.7cm、器高3.4cm。口縁内側に降灰、外側面は釉がしみ込

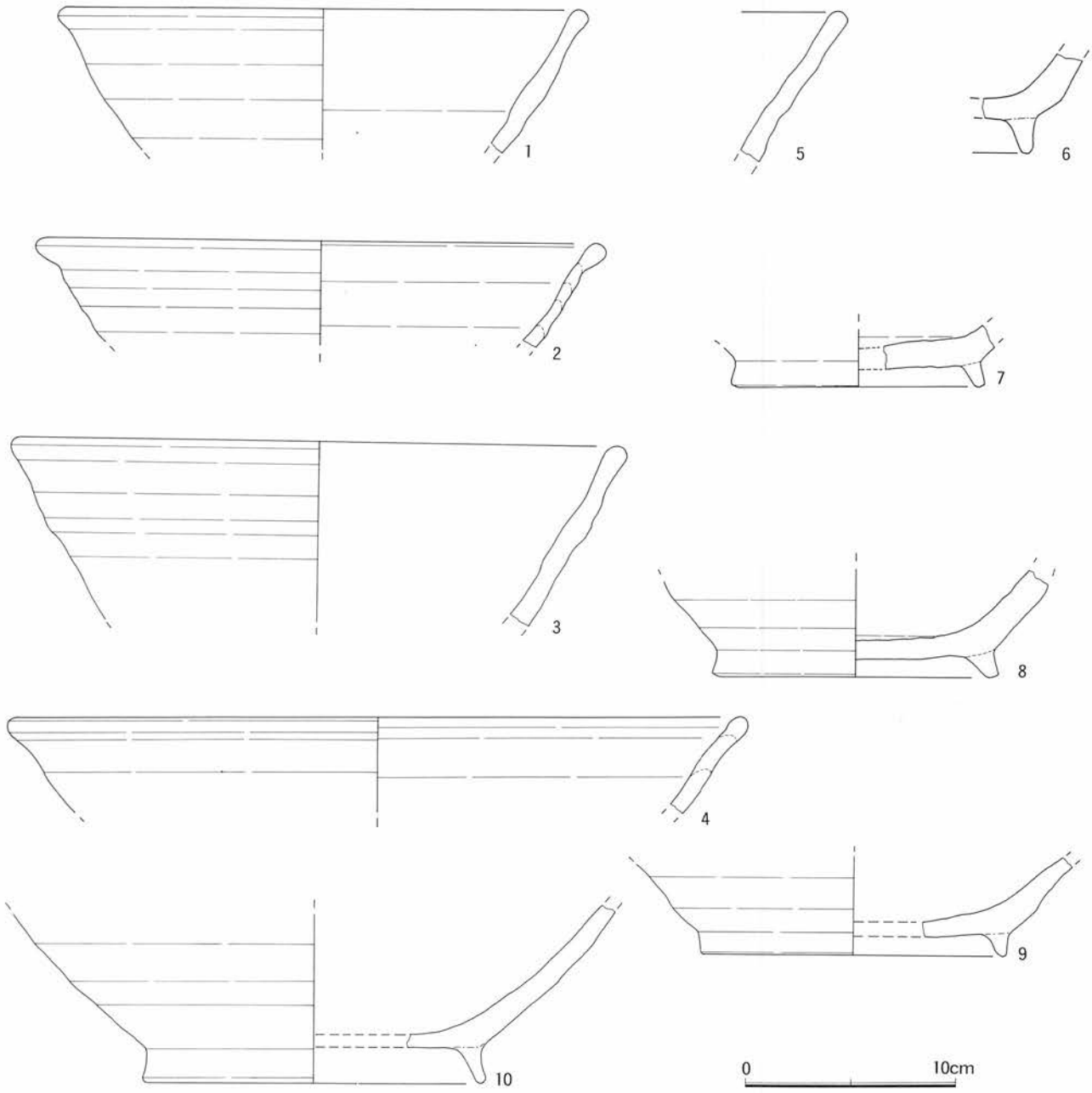


図9　1面・2面包含層の遺物

んだ状態で焼きつけられ、鈍い淡茶の光沢を留める。素地は精良緻密、黄灰色を呈する。

15は瀬戸美濃の皿。口径9.1cm、底径6.0cm、器高2.1cm。底面はヘラ削り、淡黄灰色で精良緻密な素地である。

16は須恵器碗底部。貼付高台を持ち、高台径3.5cm、素地は淡灰色で精良緻密。

17は伊勢系土鍋。口径23.9cm、器肉は薄く、胎土粗く、淡明赤灰色。体部に煤が付着する。

18、19は山茶碗窯系捏鉢。共に籾がら痕の付く貼付高台を持ち、内面は摩滅する。18の高台径は6.1cm、19は高台径7.6cmでやや焼成があまい。

20～22は手焙り。20は口縁が外反し、やや平らになる。素地は非常に粗く、芯は黒灰色、表面はくす

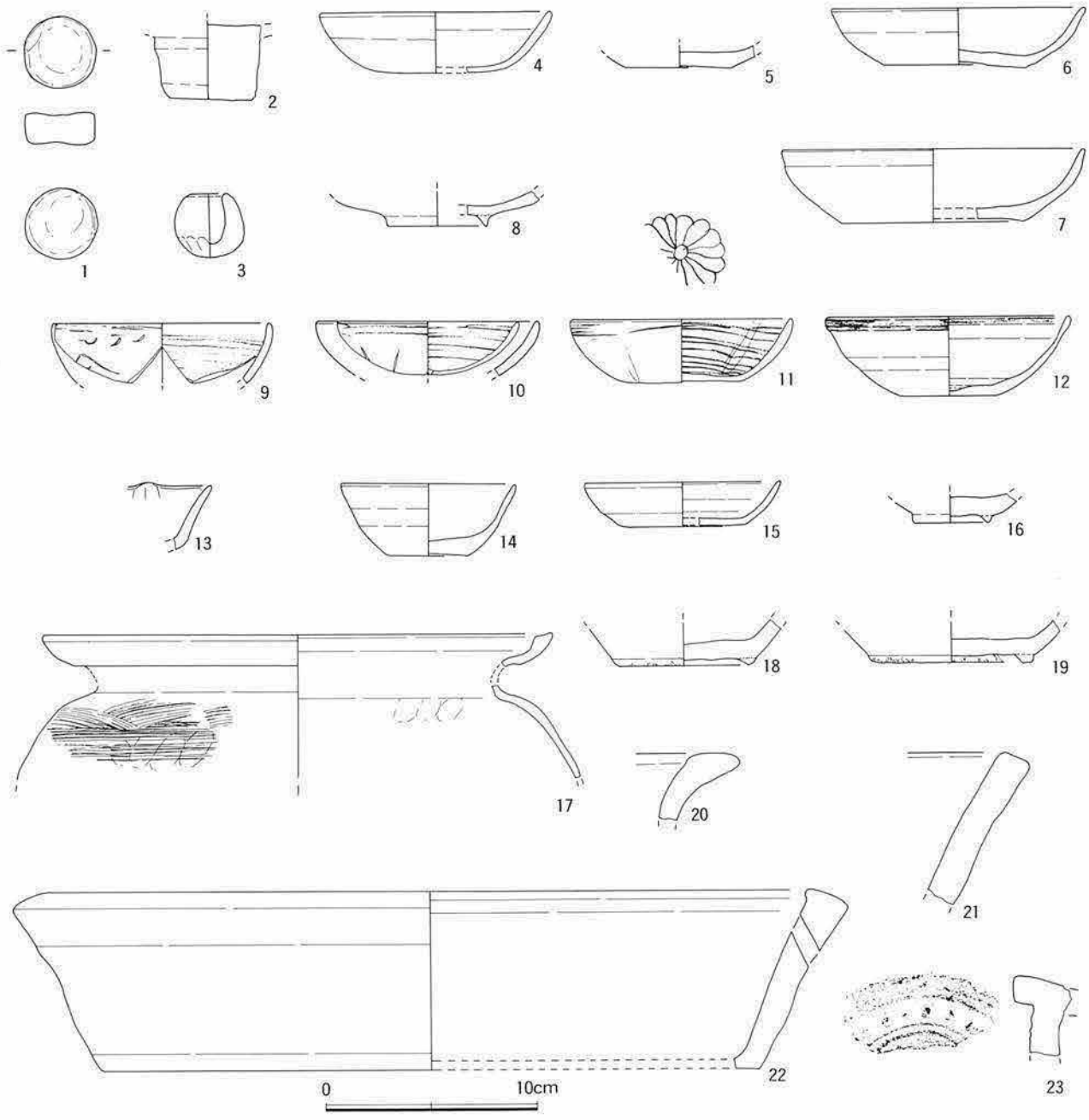


図10　1面・2面包含層の遺物

んだ淡赤灰色。21は赤灰色の粗い素地で表面は灰色である。22は口径35.8cm、底径30.9cm、器高8.8cm。体部に孔が穿たれる。胎土には砂を多く含み、灰色を呈す。

23は鐙瓦の瓦当片。連珠を配した巴文である。硬質で小石粒、長石を含み、二次焼成を受け赤灰色に変色する。

（神山晶子）

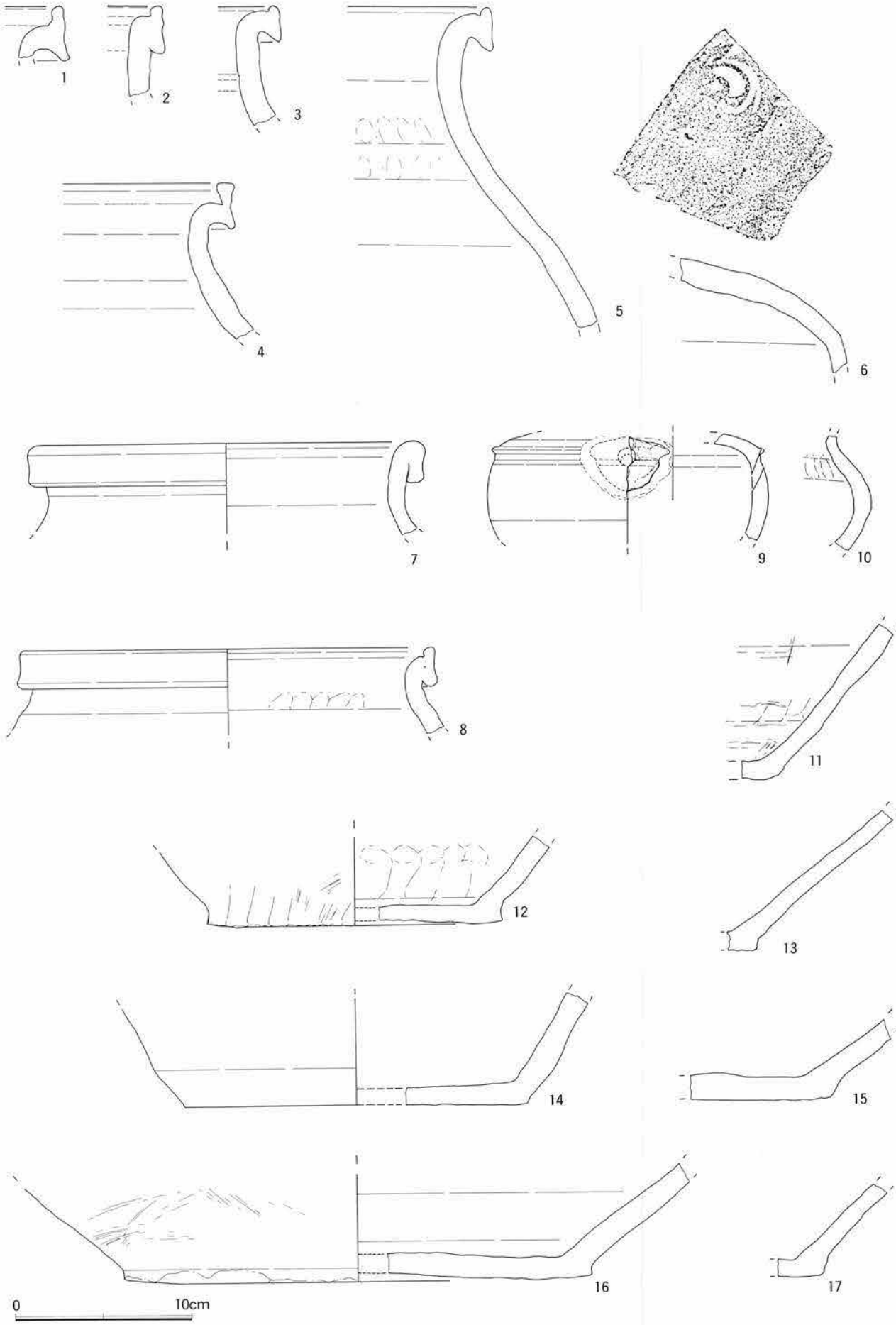


図11　1面・2面・3面包含層の遺物

e．1・2面・3面包含層の遺物　(図11)

ここに示したのは常滑の甕・壺・水注等である。

1～5・7・8は甕の口縁部。6は5と同一個体と見られるものの肩の部分で、この2点は肩に三つ巴文のスタンプが施されている。7は復元口径21.4cm、8は23.0cm。ここで出土した甕の口縁部の形状はN字状に折り曲げられたものが主流になっている。前掲図8の鉢の形状も合わせて、ここで出土している常滑は、中野晴久氏らによる編年（註）では5～6b型式(13世紀半ば～後半)に相当すると思われるが、7のような特異なものが含まれている。これは9型式(15世紀前半)に相当するかと思われるが、この層位から出土したものに比べて極端に時期の下るものであり、包含層が一部後世の削平を受けて混入したことをうかがわせる。なお、常滑の型式分類は、あくまでも生産された年代の目安としてここで用いた。層位の年代を考える場合は、製品が廃棄される時期が生産された年代より相当下る場合があることを考えに含めねばなるまい。

9は水注か。復元最大径16.0cm。肩と体部の境に凸帯をもつ。注ぎ口の部分が欠損しているが、径6mm程の穴が体部を貫通する。砂粒の多い胎土で緻密。

10は壺の体部。肩の部分に1本の条線をもつ。

12～16は甕の底部。復元口径は12が16.8cm、14が19.5cm、16が26.5cm。17は内面が若干摩滅しており、捏鉢の底部と思われる。

註：中野晴久　「常滑焼編年作業と今後の課題」考古学ジャーナル396 1995年11月ほか

（菊川　泉）

f．1・2面包含層の遺物　(図12)

1～15は磁器。

1・2は青磁の折縁鉢。いずれも素地は淡灰色で精良緻密、釉は白濁した青緑色である。

3～7は青磁碗である。3・4は蓮弁文碗。淡灰色の素地に青緑灰色の釉が施される。外側面に蓮弁文。4の口径は12.7cm。5・6は劃花文碗。5は淡灰色の素地でやや軟質。釉は半透明で黄緑灰色。内面の花文の上に一条の沈線がめぐる。6は淡灰色で精良緻密な素地に淡暗緑灰色の透明な釉が施されたもの。やはり内面の花文上に二条の沈線がめぐり、外面は櫛掻状の文様が縦に入る。7は印花文碗。内底部に花の文様が施される。高台径5.15cm。素地は淡灰色で精良緻密。釉は青緑灰色で透明。

8～12は白磁口兀皿。8は口径10.6cm、底径5.2cm、器高3.5cm。9は口径11.0cm。10は底径6.0cm。11は口径9.2cm。12は口径11.4cm。いずれも素地は灰白色で精良緻密。釉は乳白色である。8と12は口縁が外反する器形だが、特に12は反りが大きい。11は二次焼成を受ける。

13～16は青白磁。13、14は合子体部。灰白色の素地に水色の半透明な釉が施されているが、13は二次焼成を受け、ややくすむ。15は香炉蓋部片。灰白色の素地に水色の釉、やはり二次焼成を受けて白濁する。上部の突起には文様が施され、口縁周辺には欠損部より判断すると、窓状の装飾がなされたようである。16は型押しの皿。内面には全体に花文を有する。素地は白色で精良緻密、極淡い透明水色に施釉される。

17は舶載の壺か。底部径は7.0cmで轆轤成形。0.5～1.0mmの長石粒、他石粒を多く含み、胎土は非常に粗く灰色を呈す。無釉。

18はふいごの羽口。非常に軟質。直径は8.1cm、中心の孔の径2.7cm。部分的に火の痕跡が著しい。

19、20は土錘。19は長さ4.4cm、幅1.6cm、孔の径5mm。20は長さ4.7cm、幅2.5cm、孔の径7mm。かわらけ質の素地である。

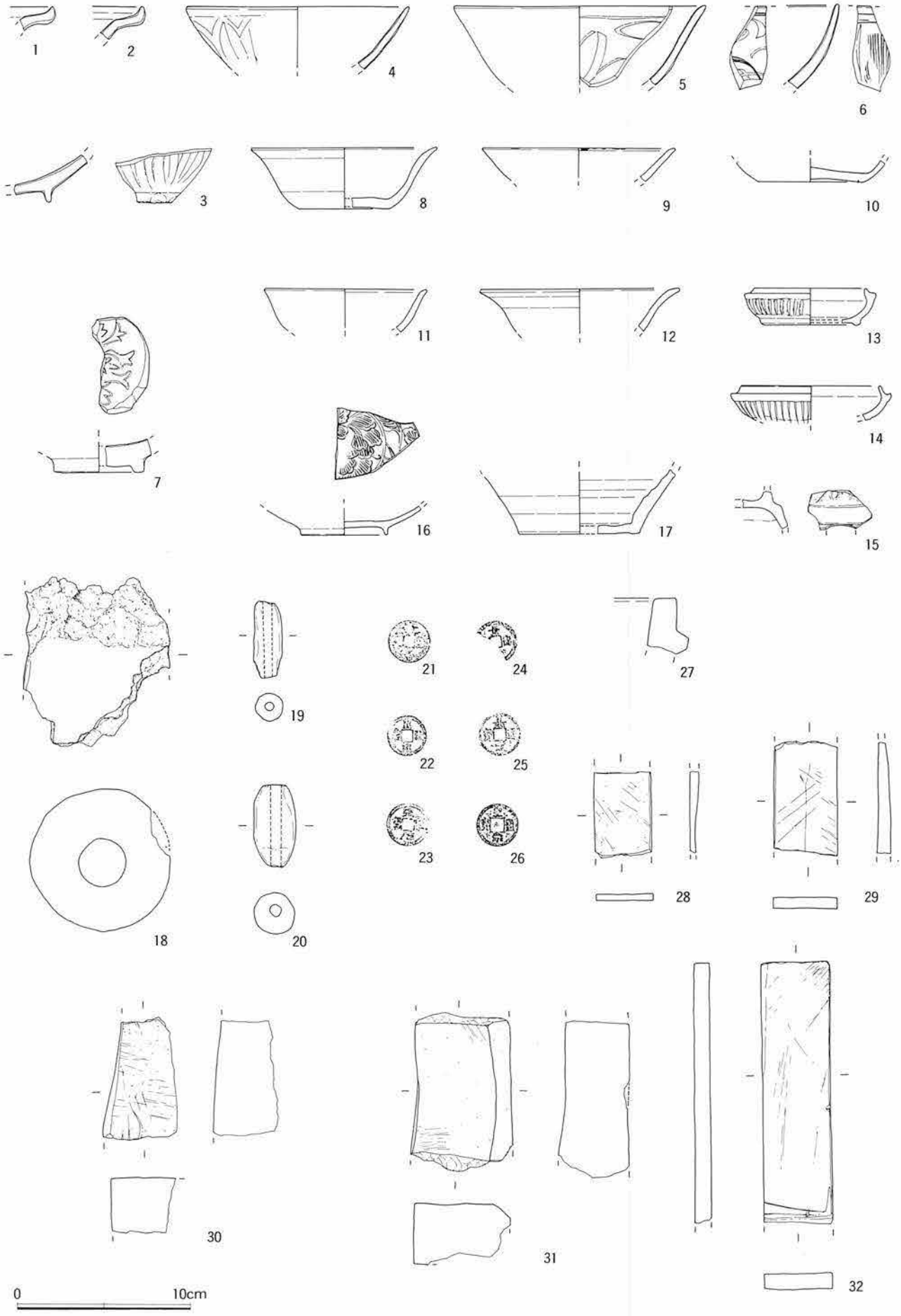


図12　1面・2面包含層の遺物

21～26は古銭。21は判読不可。22は皇宋通宝か。26も同様、皇宋通宝である。初鋳年1039年。23は天聖元宝で初鋳年1023年。24は景徳元宝、1004年初鋳。25は嘉定通宝。初鋳年は1028年で他のものが北宋であるのに対し、これのみ南宋のものである。

27は滑石製の石鍋。全体的には摩滅しているが、口縁外側に僅かに成形時の鑿痕が認められる。

28～32は砥石。28は残存長4.8cm、幅3.3cm、厚さ5mm、29は残存長6.6cm、幅3.7cm、厚さ6mm、30は残存長6.8cm、残存幅4.3cm、残存厚3.2cm、31は残存長9.2cm、幅6.0cm、厚さ3.5cm、32は残存長15cm、幅3.9cm、厚さ9mm。28・29・32は鳴滝砥、流紋岩質細粒凝灰岩の目の細かい仕上げ砥である。扁平な長方形で28、32は幅広な2面を使用する。32は産地での成形痕とは別に、木口に二次加工痕が認められる。30は天草砥、流紋岩質粗粒凝灰岩で中砥として使われたもの。隣り合う2面を使用し、他の面には成形時の鑿痕が残る。31は伊予砥、30同様中砥として使用されほぼ直方体であるが、一角を欠き幅の狭い面を有し、5面になる。いずれも使用痕が認められる。

（神山晶子）

g．3面包含層の遺物　（図13）

1～45はかわらけ。全て轆轤成形である。1・2はコースター状の極小型の皿。1は口縁が内側に折れ曲がる。小型のかわらけは底部広く、浅型の13世紀代のものとともに、7・8・10、20に代表されるような底部の狭い、14世紀前葉の特徴が備わったものが混在する。大型のかわらけも同様に、やや厚みはあるものの、底部が狭くなり器高も高くなりつつあり、形状の変化する過渡期と思われるものが含まれる。4・15・37は燈明皿として使用。

46は白かわらけ。手捏ね成形である。口径12.6cm、素地は精良だが細かな気泡が入る。

47はかわらけ片。器壁に3.5mm大の穿孔を有する。外面に僅かに煤が付着。

48・49は山茶碗窯系捏鉢。48は口径31.7cm。精良な素地で明灰色を呈す。49は高台径9.8cm。48よりやや砂を含んだ粗い素地である。

50・51は山茶碗。ともに口縁がやや角張った形。50は内面に自然釉付着。口径14.5cm。胎土に長石を多く含む。51は無釉、微細な砂を含む。口径14.7cm。

（神山晶子）

h．3面包含層の遺物　（図14）

図14は1区3面包含層より出土の常滑・山茶碗窯系捏鉢・舶載磁器を載せた。

1は常滑の捏鉢。復元口径23.4cm。体部は丁寧な横ナデで成形されている。胎土は褐灰色を呈し精良・緻密。

2・4・5は山茶碗窯系捏鉢。2は復元口径27.1cm。5は貼り付けた高台が剝がれ落ちた状態。いずれも長石粒を多く含む粗い胎土から成る。3は山茶碗。胎土はやや締まりが弱く軟質。

6・7は常滑の捏鉢。6は体部がうすく、口縁部は内側に折り曲げて丸みをもたせてつくられている。胎土は細かい砂を多く含み、やや粗い。7は口の部分で、口縁部は上部を強くなで凹形にくぼませている。胎土は精良で緻密である。

8は常滑の鉢。図8－5とほぼ同じ器形。胎土はごく精良で緻密。口縁部および内体面に降灰釉が付着する。9は常滑の甕。口縁端部を上にやや引き上げた形状。砂粒を多く含む胎土から成り、ごく緻密。

10～25は常滑の甕。口縁部を横に引き出し、上部に折り曲げた形状のものからN字状に折り曲げたもの、さらに縁帯状に作っているものまで様々な形状のものが混然と出土している。23は復元口径24.0cm。26は常滑の鉢。復元口径33.3cm、底径17.2cm、器高9.7cm。残存部分に一箇所口が付く。下

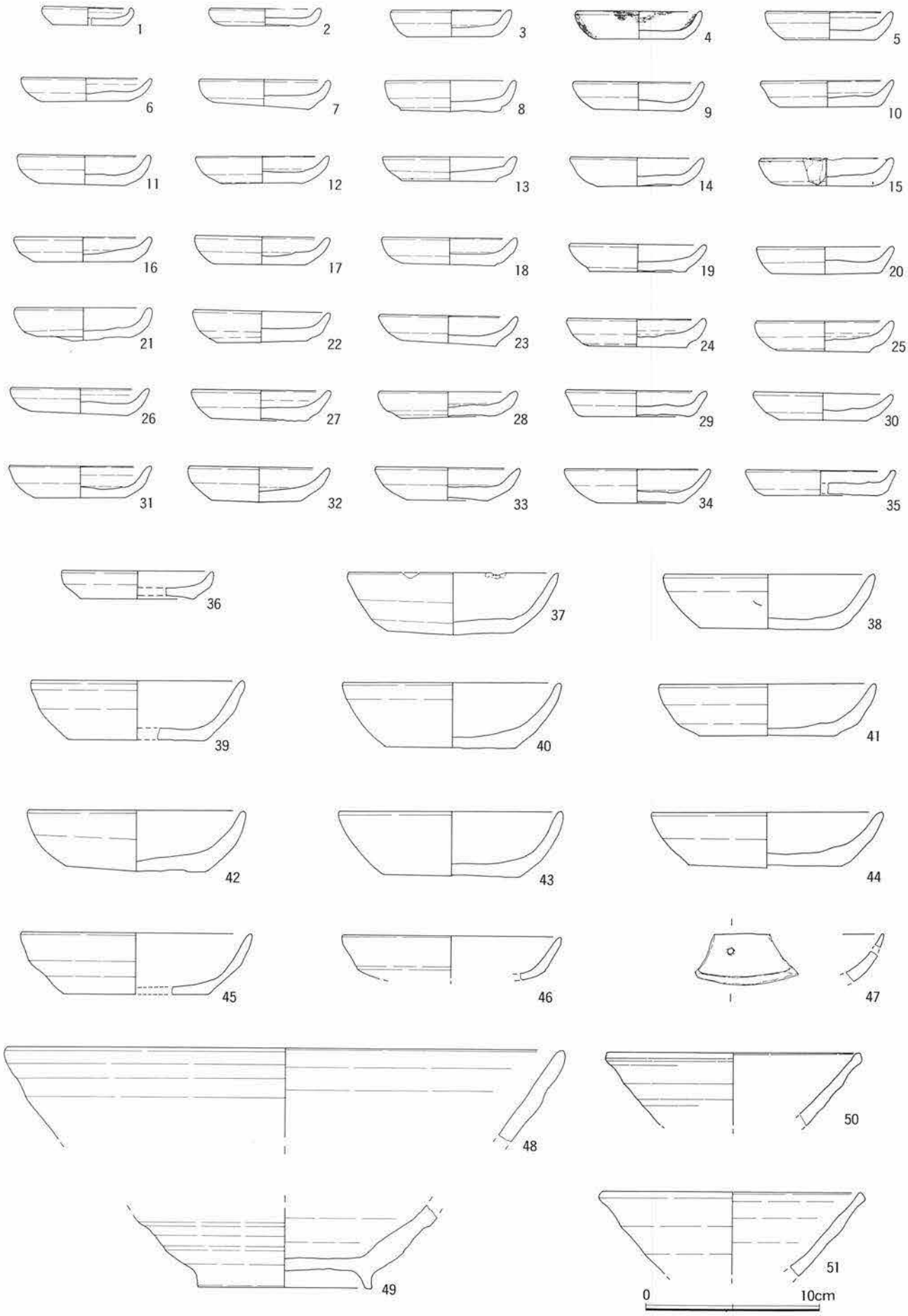


図13　3面包含層の遺物

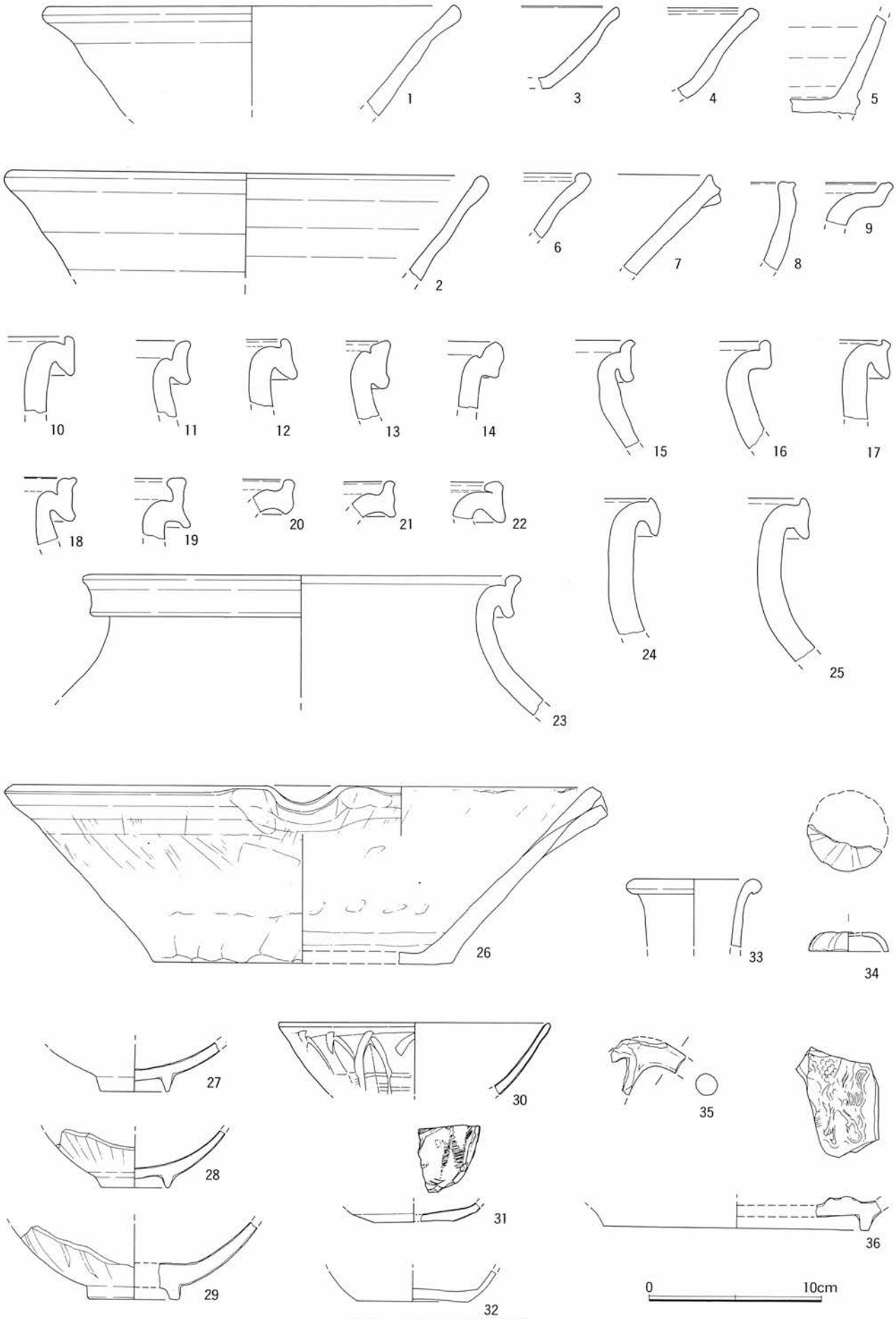


図14　3面包含層の遺物

体部は指頭による調整、体部は上下方向になでを施し、口縁部の下を二段階に横ナデしたあと、口の部分をつくっている。内体面は下三分の一程度に摩滅が認められる。

ここで出土した常滑の形状は前述編年の５～６b型式に相当する。

27～30は青磁蓮弁文碗。27は復元底径3.9cm。28は底径3.7cm。29は復元底径5.1cm。いずれも釉は明緑色半透明。釉層はやや厚く、粗い貫入をもつ。30は復元口径15.4cm。米色の釉で透明。釉層は比較的うすい。

31は青磁櫛描文皿。復元底径4.6cm。釉は明緑灰色透明。32は白磁口兀皿。底径6.3cm。33は白磁壷、四耳壷か。釉は灰白色透明。釉層はごくうすい。34は青白磁合子の蓋。八弁の輪花を呈すると思われる。釉は水青色透明。35は青白磁水注。持手の部分か。釉は不透明な灰白色で、表面に気泡をもつ。二次焼成によるものか。36は青磁龍文皿の底部。釉は明緑色不透明。復元底径は15.3cm。

（菊川　泉）

ｉ．３面包含層の遺物　（図15）

１は平瓦。厚さ1.5cm。表面には斜めの糸切り痕が認められる。両面とも離れ砂が顕著。硬質であり、二次焼成を受け赤灰色を呈する。

２～５は鉄釘。残存長は２が4.3cm、３は6.5cm、４は6.7cm、５は9.6cmである。

６～10は古銭。６・８は政和通宝、初鋳年は1111年。７は天聖元宝．初鋳年は1023年。９・10は元符通宝、初鋳年は1098年、いずれも北宋のものである。

11～14は砥石。11は鳴滝砥、流紋岩質細粒凝灰岩の仕上砥。残存長4.1cm、幅4.0cm、厚さ６mm。12～14は流紋岩質粗粒凝灰岩製で12は天草産、残存長9.0cm、幅5.0cm、厚さ2.2cm。三面に使用痕。13も天草産、残存長7.4cm、幅5.4cm、四面とも使用され、うち一面には出荷時の成形痕が残る。14は伊予産。残存長9.4cm、二面を使用。

15は手焙り口縁部片。やや外反し、口縁は平らに成形される。調整痕が顕著である。

16は土錘。長さ5.4cm、幅2.5cm、孔の径は１cm。かわらけ質。

17は産地不明の陶器片。素地はやや軟質で精良緻密。淡赤灰色を呈す。表面は表裏とも黒色、装飾部は貼付である。

18～24はかわらけ。小型の18～22は底部が広く、器高が低く、器肉に厚みのある成形がなされる。大型の23・24も同様、器肉厚く、横ナデ調整痕が明瞭なものである。

（神山晶子）

ｊ．３面溝１の遺物（図16）

１～37はかわらけ。このうち22は手捏ね成形によるもので、その他は轆轤成形によるもの。小型のかわらけは、器高が低く、底面が大きい浅型のものが大半を占める。これらは底部が厚みをもち、体部から口縁部にかけて器肉が薄くなるもので、口縁部の断面が三角形を呈するのが特徴である。これらは13世紀前葉のものと考えられるが、かわらけのなかにはこれよりも時代の下るものも含まれている。大型のかわらけを見ると、主流になるのは全体に厚手でやはり底面の大きなものであるが、器肉の薄い29のようなものが含まれる。これは13世紀後葉のものと思われる。溝１から出土したかわらけは13世紀前葉のものが点数が多いが、更に時代の下った製品が若干含まれる。溝の埋められた時期は13世紀後葉と考えられるだろう。

38は白かわらけ。復元口径11.8cm、底径7.1cm、器高3.7cm、灰黄色を呈し、雲母の微粒を比較的多く含む精良胎土から成る。

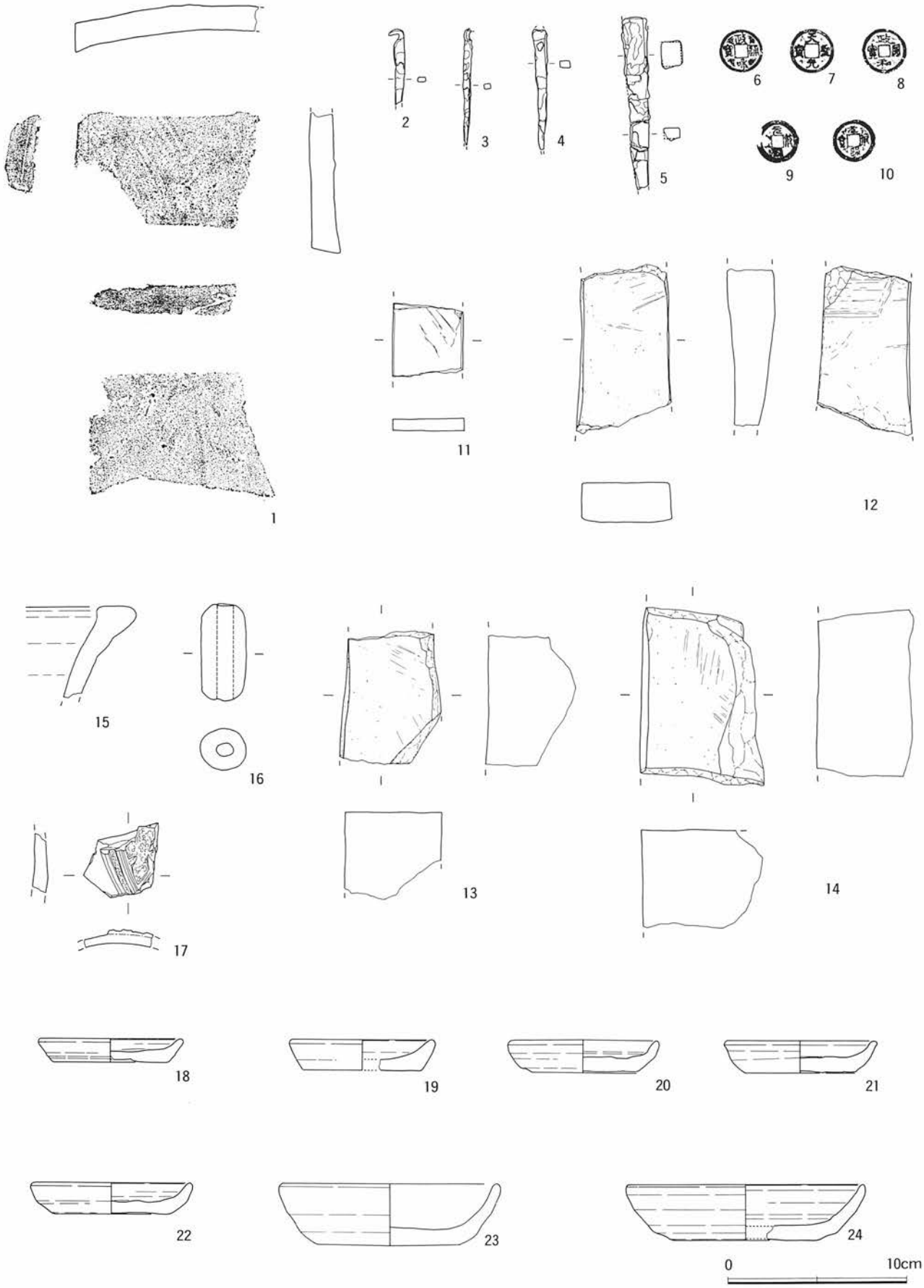


図15　3面包含層の遺物

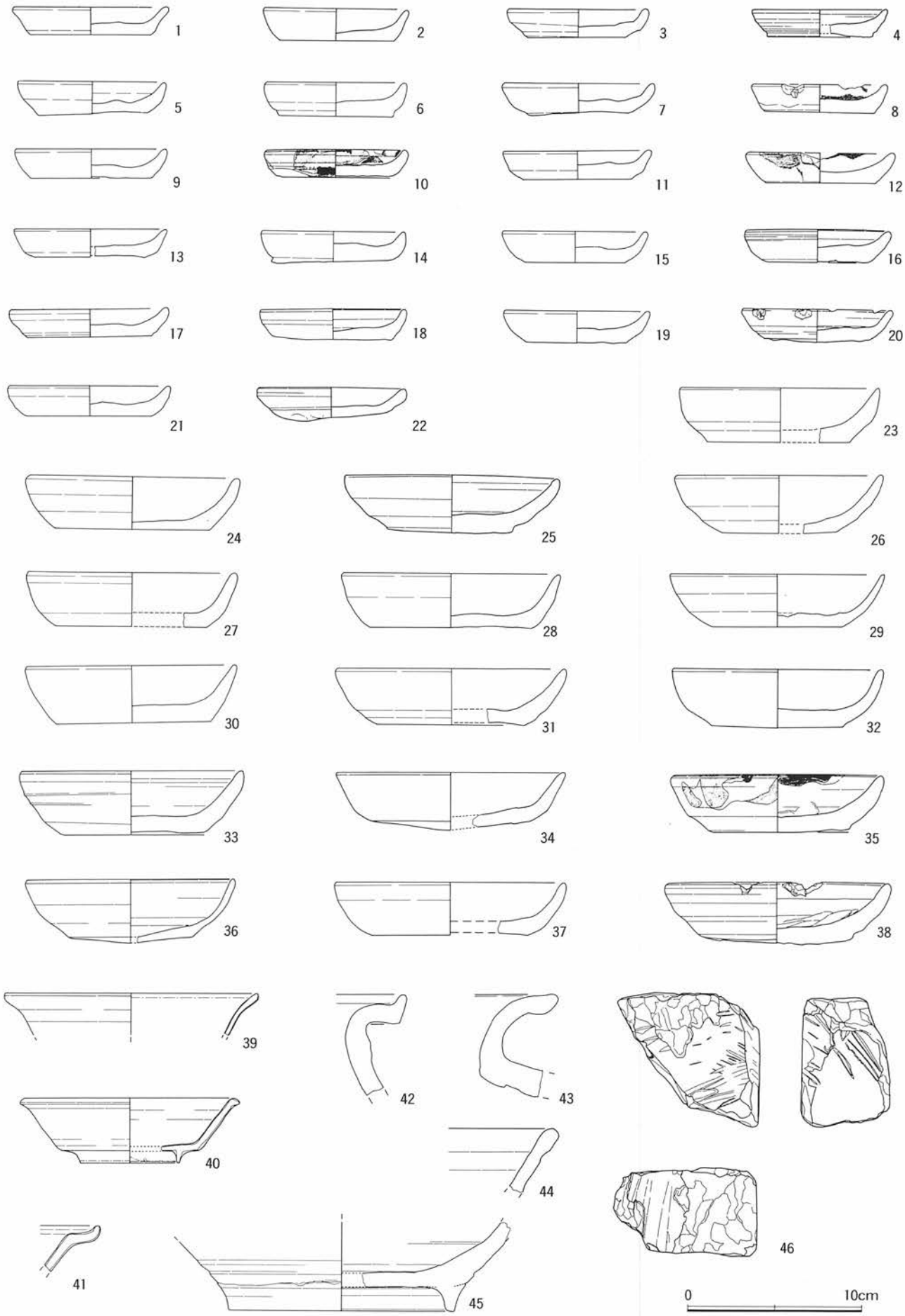

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
10cm

図16　3面溝1の遺物

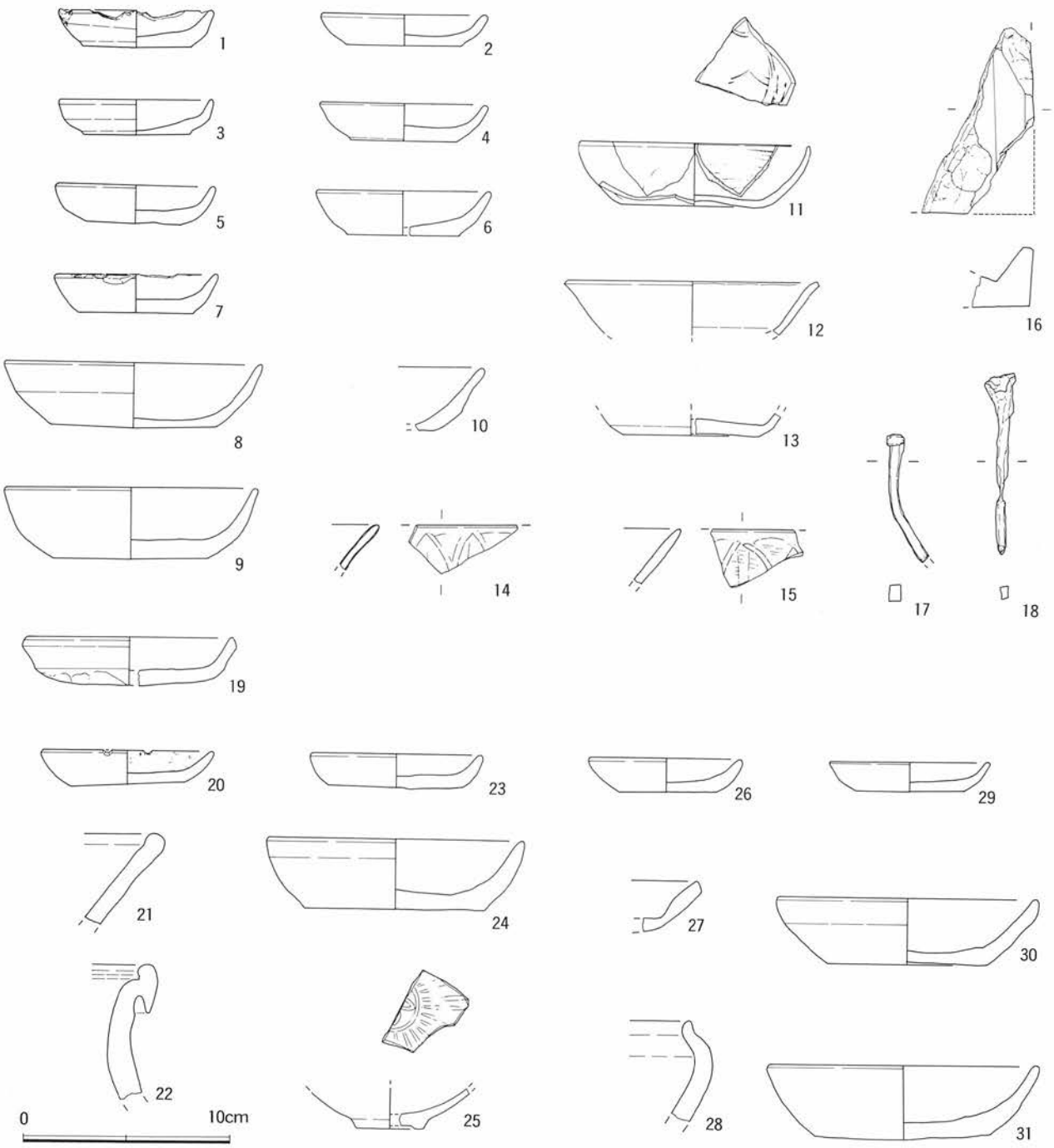


図17　3面遺構の遺物

39は白磁口兀皿。復元口径14.4cm。

40・41は青磁折腰皿。40は復元口径12.0cm、底径5.7cm、器高3.7cm。釉は透明な青緑色を呈し、粗い貫入をもつ。精良な胎土であるがややしまりが弱い。41は小片。釉は透明な明青緑色を呈す。胎土はごく精良で緻密。

42は常滑甕。長石粒を多く含む胎土から成り、緻密。口縁端部を上に引き出した形状。

43は渥美甕。比較的粗い胎土から成る。42・43とも13世紀前葉の製品と思われる。44・45は山茶碗窯系捏鉢。いずれも長石粒を多く含む粗い胎土から成る。45は復元底径12.8cm。使用された痕跡が著しく、内面はかなり摩滅している。

46は砥石。粒紋岩質粗粒凝灰岩製、天草産か。2面使用。

（菊川　泉）

k．３面遺構の遺物　（図17）

１～18は東西道路北土壙１の遺物。１～16はかわらけ。いずれも轆轤成形のもので、器肉の厚さが均一的に薄く、体部がなめらかな曲線を持って立ち上がる。10は白かわらけの小片。手捏ね成形によるもの。砂粒の多いやや粗い胎土から成る。灰白色を呈するが、下部は二次焼成を受けている。11は瓦器。内底面の暗文は菊花ではなく「く」の字状の曲線を描いている。手捏ね成形によるもの。復元口径11.1cm、器高3.0cm。12・13は白磁口兀皿。12は復元口径12.2cm。13は復元底径6.6cm。14・15は青磁蓮弁文碗。14は、釉は透明な緑灰色を呈し粗い貫入をもつ。15は釉は透明な明緑青色、釉層はごく薄い。胎土は灰色を呈し、ごく精良、緻密。蓮弁の幅は14よりもやや広く、鎬が強い。16は硯。粘板岩製。17・18は鉄製の釘。

19は掘立柱建物柱穴４覆土より出土の手捏ねかわらけ。口縁の横ナデは弱いが、やや断面が四角形を呈する形をとどめている。

20～25は土壙４覆土より出土した遺物。23・24は轆轤成形のかわらけ。23は橙色を呈する。砂を多く含むやや粗い胎土から成り、よく焼き締まっている。24は比較的精良な胎土から成る。色調は23よりにぶい橙。器肉が全体的に厚手で、口縁部にむかってやや薄く引き上げられている。25は青白磁碗。型作りで内底に花文が施されている。釉は明緑青色透明。胎土は灰白色でややしまりが悪い。

26～28は土壙３覆土より出土した遺物。26は轆轤成形によるかわらけ。小振りで、底径が小さい浅型。胎土はきめ細かく、灰黄色を呈する。完形。27は瀬戸の卸皿小片。胎土は灰白色を呈し、ごく精良で緻密。内面・外面ともに灰釉が刷毛塗りされている。28は常滑の広口壺。長石粒を多く含む精良な胎土で、緻密。口縁部及び内体部は降灰釉が付着し、明緑灰色を呈する。

29～30は土壙２覆土より出土の遺物で、いずれも轆轤成形のかわらけ。

（菊川　泉）

l．３面遺構の遺物　（図18）

１～14は東西道路面下出土の遺物である。

１～８はかわらけ。１・４～８は轆轤成形、２・３は手捏ね成形である。１～４は轆轤、手捏ねの別なく、口径、底径に差がなく、器高の低い、やや厚みのある器肉が口縁で薄くなる形態を様する。５～８も同様に口縁にむけ薄くなる様相である。１・４・６は燈明皿として使用されたもの。６は底部中央に１cm大の孔が穿たれる。

９・11は常滑捏鉢。口縁は９が丸みを帯びたもの、11はやや角型に張り、口径22.0cmである。

10は常滑甕。口縁が僅かに上方に屈曲する古期の形態を留める。

12は山茶碗窯系捏鉢。胎土は長石粒を多く含む緻密なもの。内面は摩滅する。

13は青磁。同安窯系の皿である。体部が折れ、恐らく内底部に櫛描文が施される型であろう。淡黄灰色の精良な素地、明灰緑色の透明な釉を持つ。

14は青白磁。輪花の合子蓋。素地は精良緻密で灰白色。釉は水色であるが、二次焼成を受けてくすむ。

15～19は土壙１出土のかわらけ。19のみ手捏ね成形。いずれも体部は緩やかに立ち上がり、均一な器肉が口縁にむけて薄くなる様相を呈する。

20は東西溝出土の漆器である。器肉は非常に薄く、総漆塗。黒漆の地に朱漆で亀甲花文が施される。

21・22は土壙３出土の遺物。21は数珠（念珠）の親玉、透明な水晶製でやや歪んだＴ字形の孔が穿たれる。直径1.85cm。

22は蒔絵の施された漆器。地は黒で塗漆され、枝菊の文様が描かれる。図の絵柄で黒の所は金色、白

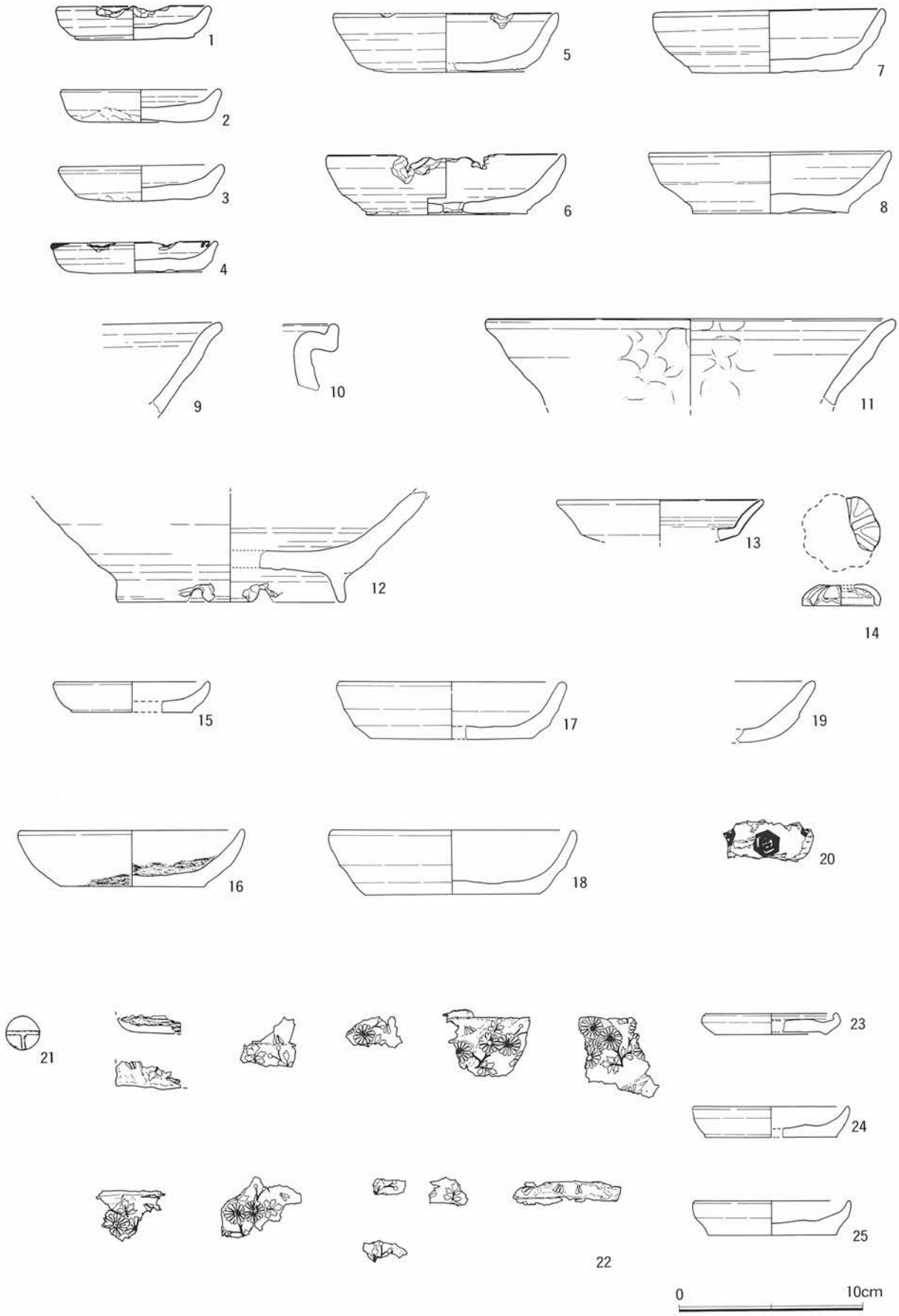


図18　3面遺構の遺物

抜きの所は銀色が使用される。

23～25は土壙４出土のかわらけ。23は小型のコースター状のもの。淡赤灰色で砂を含み、焼成は良好。24、25は底部の大きく、器高の低い形態である。全て轆轤成形。

（神山晶子）

第３節　４面の遺構

ａ．土壙・柱穴列

土壙１　調査区の北側壁に沿って検出した不定形の土壙である。幅約１ｍ、深さ40cm程の規模で、箸を含む木片、漆器椀、青磁劃花文碗、かわらけが出土している。

土壙２　長辺90cm以上、短辺約60cm、深さ20cm程の規模を持つ土壙である。土壌分析の結果多量の寄生虫卵が検出されている。（第４章参照）

土壙３　柱穴列１の西で検出した土壙である。東西に細長い方形で、調査区の壁に一部かかっていたため正確な大きさは知り得ないが、長辺は３ｍ以上、短辺は約1.6ｍ、深さ66cmである。多量の箸、かわらけ等の遺物が出土した。

土壙７　方形竪穴建築址の北に検出した、長辺約1.4ｍ、短辺約１ｍの南北にやや細長い土壙である。向きは方形竪穴建築址とほぼ同じである。壁面が垂直に落ち込むのが特徴で、深さは約60cm。覆土からはかわらけや草履などが出土している。方形の四隅には柱穴がめぐる。柱穴は、土丹を詰めたもの、礎板を据えたもの等がある。ただ礎板の残存状態は良くない。

土壙８　建物址の北で検出した楕円形の土壙で、東西に長い。長径約2.3ｍ、短径1.2ｍ。長方形に近く、その軸は、方形竪穴建築址や柱穴列の向きとも一致している。深さは35cmcm用途は不明である。

柱穴列１　南北に並ぶ比較的径の小さい柱穴の列で、礎板を伴う。間隔はややばらつきがあり、70～90cm。礎板はどれも南北方向に据えられている。７穴（６間）を確認したが、部分的に削平を受けて、壊されたと思われる箇所もある。またこの７穴よりさらに調査区の北にのびると思われる。ただ、見つかった柱穴は１列のみで、建物のかたちを成すということはない。方形竪穴建築址と向きをほぼ同じくする目隠し塀かと思われる。

柱穴列２　調査区のほぼ中央で検出した東西に並ぶ柱穴の列で、礎板を伴う。約２メートル間隔に３穴確認した。礎板は南北方向に据えられている。土壙10・13・15・17を埋め戻した後に掘り込まれたもので、向きは若宮大路と直交している。この柱穴列を境に南側は柱穴が不規則に多く見つかっており、４面の時期の短期間に建物等が幾度か立て直された痕跡が雑然と残った状況である。

この柱穴列に添うような位置で同じ様な柱穴３列があり、やはり礎板を伴うことからも、この状況が裏付けられよう。

建築址　調査区南隅で検出した木材を横たえた溝で区画されたところである。この遺構も調査区の壁にかかっており、大きさを知ることができない。内部は、不整形な土壙や、不規則な柱穴があり、本来的にどのような状態であったかはっきりしない。

（菊川　泉）

ｂ．建物１（方形竪穴建築址）

建物１の検出状況（図20）

調査原点から東に５ｍ（若宮大路軸線より西に約81.6ｍ）の地点で、平面長方形の南北に長い掘方を確認した。この位置は上面（３面）で検出した若宮大路に直交あるいは平行する、鎌倉石、土丹を敷き詰め

て造られた道路遺構の真下にあたる。建物１は廃棄時に一気に埋め戻されたらしく、壁板、柱が建物内側に倒れ込んだ状態で検出された。不明な点が多い方形竪穴建築址の、上屋構造をうかがい知る手がかりを与えてくれた。

また出土した遺物は建物１の廃棄時期を反映していると思われる。想像をたくましくするならば、３面の道路を新しく整備するために、建物１を壊し埋め込み整地したものとも考えられる。

建物１は南北311.0cm以上、東西196.0cmの範囲を地表から約60cm掘り込んだもので、床面積は約６m²である。建物の長軸方位はN－23°－Eで、基準にする若宮大路の南北軸線がN－26°48′23″－Eなので、約３°12′西に振れていることになる。

検出した建物１を基礎構造を中心に分類した分類表(註)に当てはめるならば、分類２中の「土台角材を用いない」、「壁材を掘立柱で支える」＋「壁材を杭で支える」となる。分類２の「土台角材を用いない」「壁材を掘立柱・杭で支える」建物は、床面積が６㎡前後と比較的小さく、また判明している構造も良好な発見例が少なく不明な点が多い。出土した材には削り痕、釘穴等の使用痕があり、また材の規格が不揃いなことから転用した材を使用して建てられたものと思われる。また、使用された材木は根太・柱・壁材の樹種同定の結果、全て杉材であった。

検出した建物１の構造(図21・22)

・基礎及び床の構造

建物１は平面長方形、深さ60cmに掘り窪めた竪穴底面に、長さ169～188cm、幅11.0～13.5cm、厚さ3.5～4.0㎝の角材を約60cm間隔で平行に４本据え、短い杭で固定して根太材として上面に床材を貼っていた。根太材の両端は打ち込まれた建物上屋を支えている柱材で固定されている場合もある。建物内の南側には根太材がなく、直接地面に比較的厚みのある板材が敷き並べられていたことから、この部分は土間であると考えられる。

・下部壁面の構造

建物１の地下部分の北壁・東壁・南壁で確認した構造は、地面を垂直に掘り込んだ壁面に直接横板を張り間柱で押さえ、さらに内側にもう一重横板を張り付け間柱と柱で土圧を支えていた。西壁面の構造は他と異なり、壁面に直接縦板を張り胴縁２本で押さえ、内側に横板を張り間柱と柱で土圧を支えていた。この構造は石組みの方形竪穴建築址に見られる、壁面に鎌倉石を立て内側に縦板を張り２本の胴縁で押さえるものと同じである。西壁の周囲に細い杭が多数打ち込まれていたことから、軟らかい地盤を支えるために構造を変えていたか、西壁側に出入り口があり崩壊を防ぐために構造を変えていたとも考えられる。

・上部壁面の構造

建物１の地上に出る部分の壁構造は、地下部分の横板(縦板)とは別に、直接地表から地面に打ち込んだ２本の柱材の間に、横材を挟み込み釘で打ち付け壁としていた。調査時に北壁で確認できた地上に出る壁の高さは約92㎝である。

・屋根の構造

建物１では屋根を葺いた部材は出土しなかったが、地下部分で横板を支えていた柱の一部が建物本体の構造材として、屋根まで立ち上がるものと考えられる。

屋根は建物に使われた柱のうちで、長軸方向の西壁と東壁の中央に据えられた太い２本を中心に、短軸(東西方向)が棟となる切り妻で、桁行の北壁の高さが約92cmと低い。西側は壁の崩壊を防ぐためか壁面構造が他と異なり、また梁行となるのならばここに出入り口があったものと推察する。

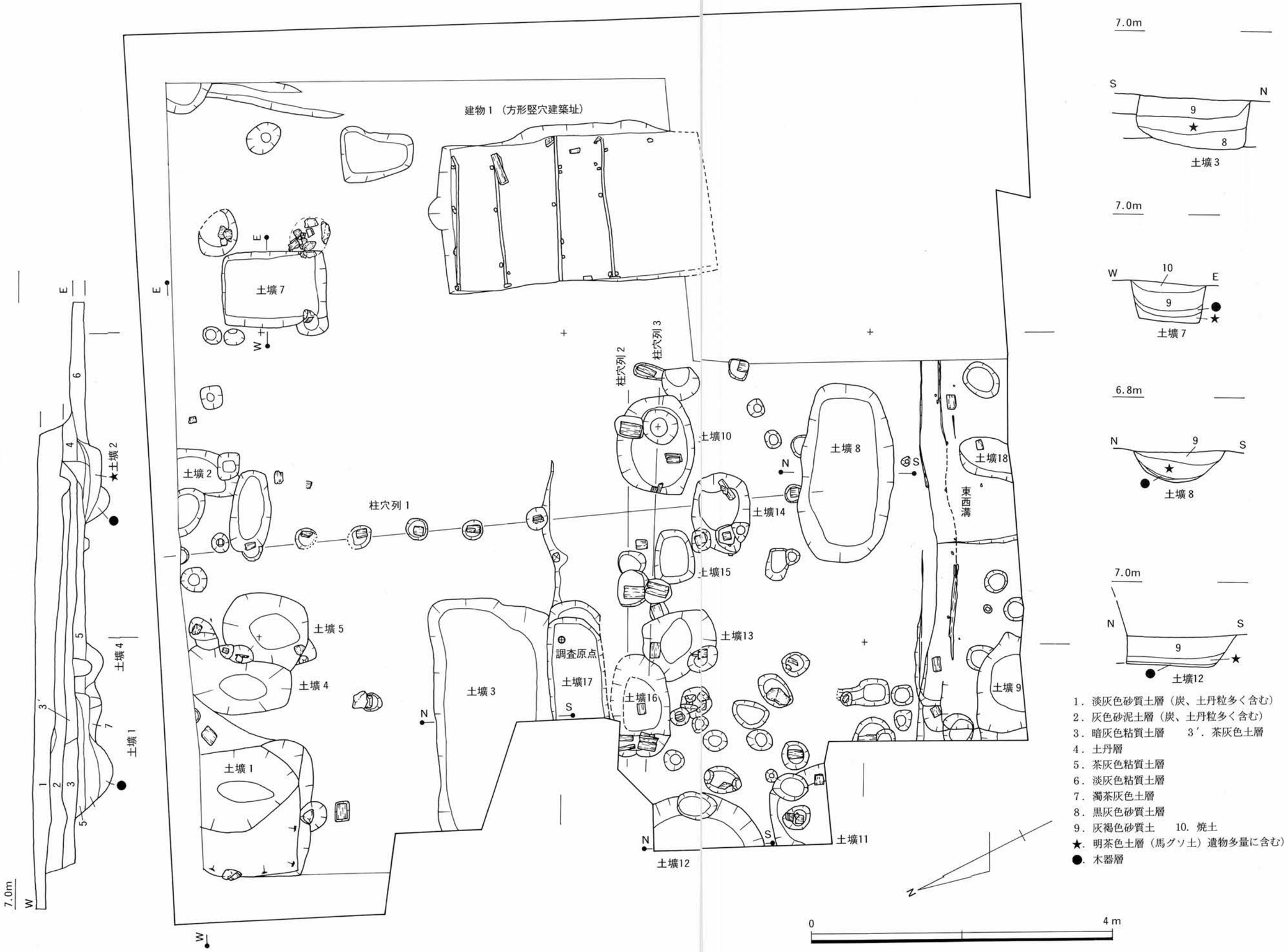

建物１（方形竪穴建築址）
土壙７
土壙２
土壙５
土壙４
土壙１
土壙３
土壙１７
土壙１６
土壙１３
土壙１４
土壙１５
土壙１０
土壙８
土壙１８
土壙９
土壙１１
土壙１２
柱穴列１
柱穴列２
柱穴列３
東西溝
調査原点
土壙２
土壙４
土壙１
7.0m
W
E
6.8m
N
S
9
10
8
1．淡灰色砂質土層（炭、土丹粒多く含む）
2．灰色砂泥土層（炭、土丹粒多く含む）
3．暗灰色粘質土層　3′．茶灰色土層
4．土丹層
5．茶灰色粘質土層
6．淡灰色粘質土層
7．濁茶灰色土層
8．黒灰色砂質土層
9．灰褐色砂質土　10．焼土
★．明茶色土層（馬グソ土）遺物多量に含む）
●．木器層
0
4 m

図19　4面遺構全測図

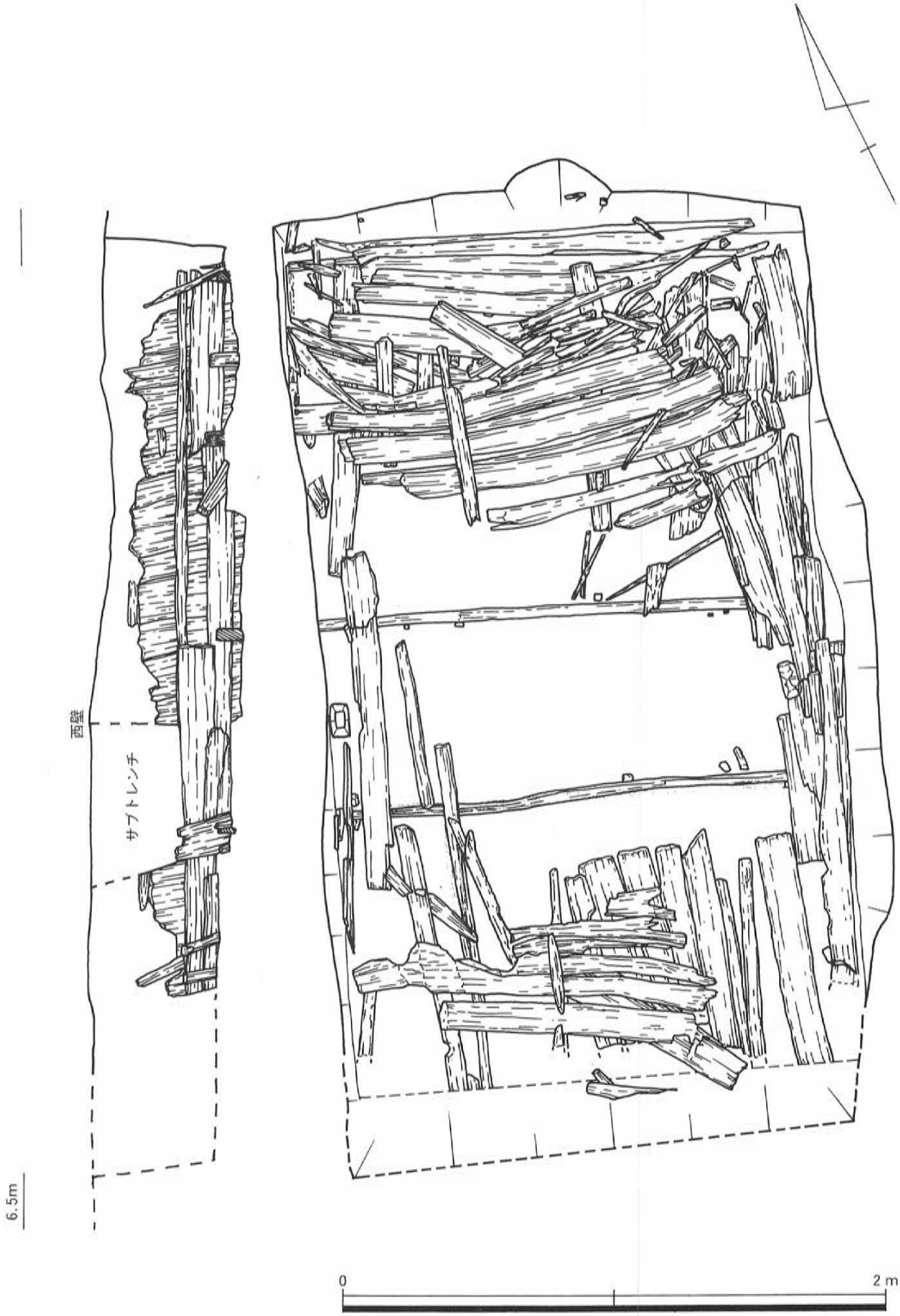


図20　4面建物1の検出状況

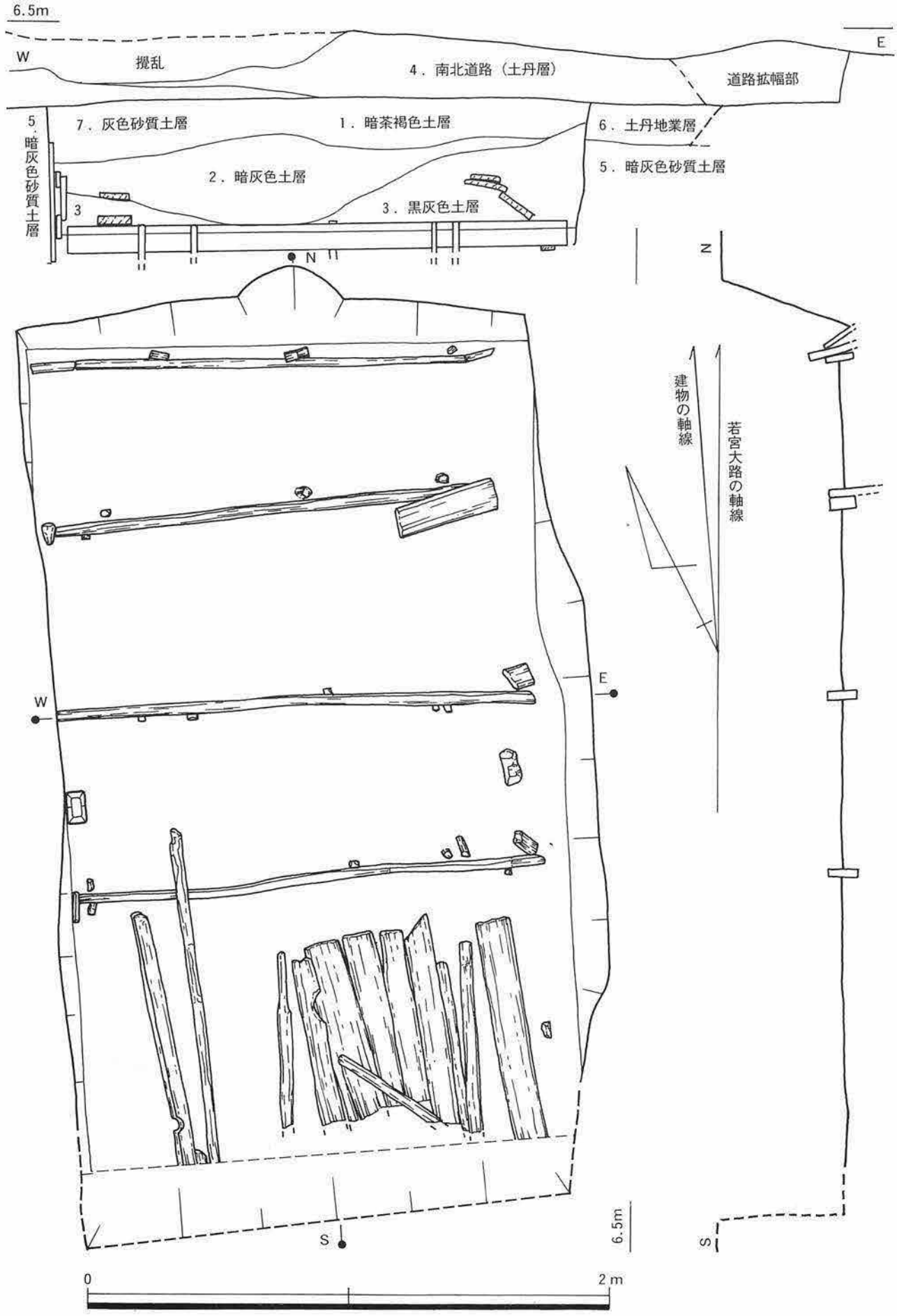


図21　4面建物1の掘方及び根太の状況

従来、土台角材を用いないで壁材を掘立柱・杭で支える小規模な建物は、考えられる構造が簡便なために、上屋が想定しにくいといわれていたものである。

（福田　誠）

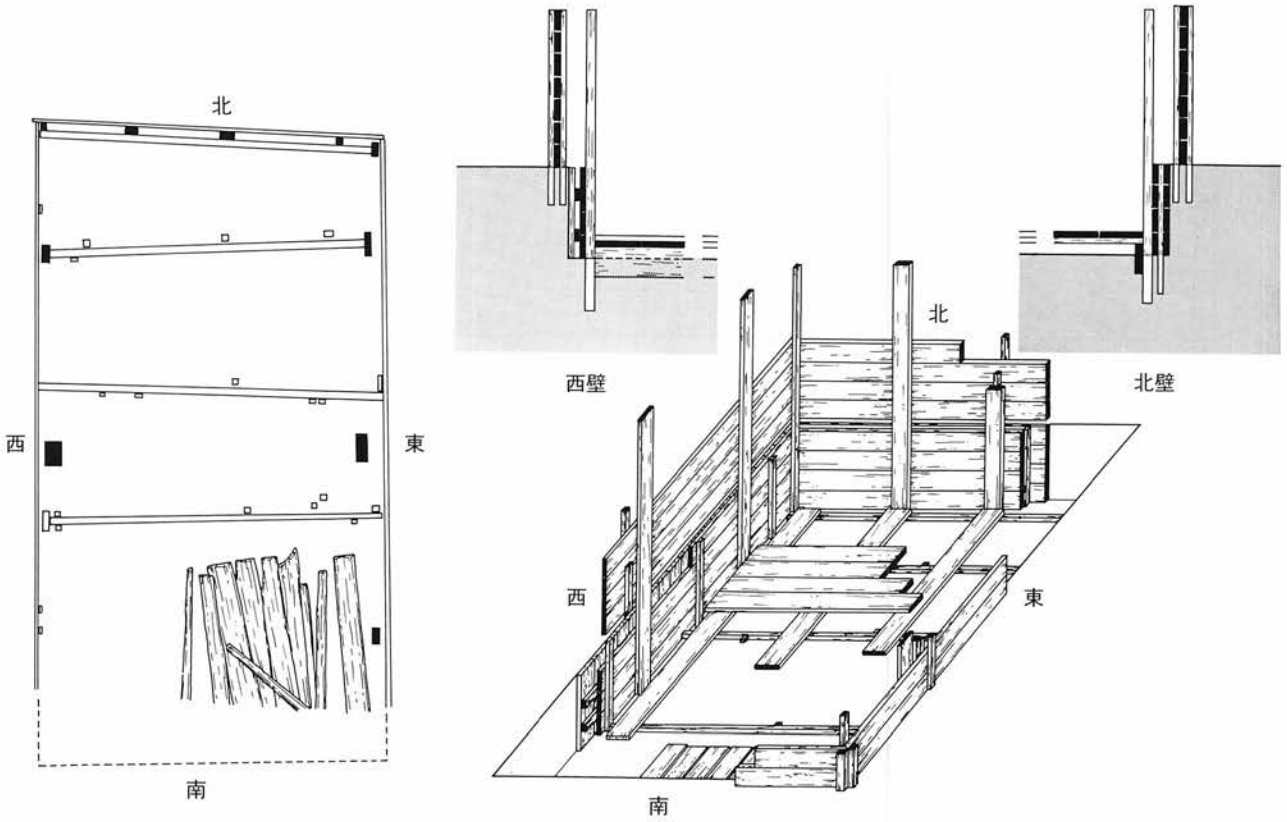


図22　4面建物1の復元模式図

表1　1・2面包含層出土のかわらけ法量表　図6

NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形
1	5.1	4.5	1.1	糸切り	23	6.9	5.5	1.5	糸切り	45	7.6	5.5	1.6	糸切り
2	5.8	4.8	0.9	糸切り	24	7.2	5.2	1.7	糸切り	46	7.7	5.9	1.9	糸切り
3	6.9	4.5	1.4	糸切り	25	7.5	4.4	2.0	糸切り	47	7.7	5.1	1.7	糸切り
4	6.8	4.9	1.6	糸切り	26	7.4	4.1	1.9	糸切り	48	7.7	5.2	1.9	糸切り
5	6.7	4.8	1.6	糸切り	27	7.2	5.0	2.0	糸切り	49	7.9	5.2	2.1	糸切り
6	6.8	4.9	1.8	糸切り	28	7.3	5.1	1.8	糸切り	50	7.6	5.3	1.6	糸切り
7	6.7	5.1	1.9	糸切り	29	7.3	5.1	1.7	糸切り	51	7.8	5.9	1.6	糸切り
8	6.7	4.9	1.4	糸切り	30	7.4	5.0	1.8	糸切り	52	7.8	4.9	1.7	糸切り
9	7.0	4.6	1.7	糸切り	31	7.4	5.6	1.8	糸切り	53	8.0	6.4	1.5	糸切り
10	7.1	4.8	2.1	糸切り	32	7.4	5.1	1.9	糸切り	54	7.9	5.5	1.5	糸切り
11	7.5	4.2	2.5	糸切り	33	7.6	5.2	1.8	糸切り	55	7.8	4.8	1.8	糸切り
12	6.8	4.3	2.3	糸切り	34	7.7	5.5	1.8	糸切り	56	8.2	5.0	2.0	糸切り
13	7.1	5.6	1.7	糸切り	35	7.8	6.1	1.5	糸切り	57	7.8	5.9	1.8	糸切り
14	7.2	5.1	1.7	糸切り	36	7.7	5.1	1.7	糸切り	58	8.2	5.8	1.9	糸切り
15	7.5	5.6	1.7	糸切り	37	7.3	5.1	1.7	糸切り	59	8.0	5.6	2.0	糸切り
16	7.1	4.3	1.9	糸切り	38	7.7	5.0	1.8	糸切り	60	8.0	6.5	1.8	糸切り
17	7.1	4.8	1.8	糸切り	39	7.7	5.4	1.9	糸切り	61	8.4	5.8	1.7	糸切り
18	7.0	5.4	1.9	糸切り	40	7.3	5.3	1.6	糸切り	62	8.8	7.2	1.6	糸切り
19	7.3	5.1	1.6	糸切り	41	7.6	5.4	1.9	糸切り	63	8.7	6.6	1.8	糸切り
20	7.2	5.4	1.3	糸切り	42	7.6	5.5	1.8	糸切り	64	8.8	7.2	1.9	糸切り
21	7.1	5.3	1.4	糸切り	43	7.5	5.6	1.7	糸切り					
22	7.2	4.9	1.7	糸切り	44	7.6	5.7	1.9	糸切り					

単位はcm

表2　1・2面包含層出土のかわらけ法量表　図7

NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形
1	10.9	5.6	3.0	糸切り	11	11.9	7.3	3.4	糸切り	21	12.9	9.9	3.3	糸切り
2	10.9	6.5	3.4	糸切り	12	12.5	7.7	3.5	糸切り	22	12.7	8.6	3.7	糸切り
3	11.0	7.2	3.3	糸切り	13	12.4	7.9	3.5	糸切り	23	12.7	7.3	3.3	糸切り
4	10.8	6.6	3.1	糸切り	14	12.2	7.5	3.5	糸切り	24	12.8	8.5	3.3	糸切り
5	11.3	8.4	3.1	糸切り	15	12.3	7.9	3.4	糸切り	25	13.3	7.7	3.5	糸切り
6	12.1	7.5	3.1	糸切り	16	12.4	6.6	3.5	糸切り	26	13.6	7.6	3.9	糸切り
7	12.2	7.6	3.5	糸切り	17	12.8	7.8	3.6	糸切り	27	13.7	9.0	3.5	糸切り
8	11.8	7.2	3.4	糸切り	18	12.7	8.8	3.0	糸切り	28	13.7	8.1	4.0	糸切り
9	11.2	6.5	3.4	糸切り	19	12.4	9.0	3.1	糸切り					
10	11.8	7.4	3.5	糸切り	20	13.2	8.2	3.5	糸切り					

単位はcm

表3　3面包含層出土のかわらけ法量表　図13

NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形
1	5.0	4.1	1.0	糸切り	16	7.7	5.8	1.4	糸切り	31	8.0	5.2	1.8	糸切り
2	6.3	4.3	1.0	糸切り	17	7.6	5.3	1.6	糸切り	32	8.0	5.1	2.0	糸切り
3	6.8	4.9	1.6	糸切り	18	7.6	5.4	1.6	糸切り	33	8.2	4.6	1.9	糸切り
4	7.2	5.2	1.6	糸切り	19	7.7	5.6	1.6	糸切り	34	8.2	4.6	2.0	糸切り
5	7.2	5.2	1.6	糸切り	20	7.8	6.3	1.6	糸切り	35	8.4	6.5	1.6	糸切り
6	7.4	5.1	1.3	糸切り	21	7.7	5.5	1.9	糸切り	36	8.6	6.6	1.6	糸切り
7	7.4	5.5	1.7	糸切り	22	7.6	5.3	1.9	糸切り	37	12.0	7.3	3.6	糸切り
8	7.5	5.8	1.8	糸切り	23	7.9	5.5	1.7	糸切り	38	12.1	7.8	3.1	糸切り
9	7.4	5.2	1.7	糸切り	24	7.9	5.7	1.6	糸切り	39	12.2	7.9	3.4	糸切り
10	7.5	5.8	1.6	糸切り	25	7.8	5.4	1.8	糸切り	40	12.5	5.5	3.8	糸切り
11	7.5	5.0	1.7	糸切り	26	7.9	5.6	1.5	糸切り	41	12.4	7.9	3.0	糸切り
12	7.5	4.6	1.6	糸切り	27	7.9	5.6	1.7	糸切り	42	12.4	8.1	3.5	糸切り
13	7.6	5.5	1.4	糸切り	28	7.8	5.4	1.5	糸切り	43	12.8	8.0	3.7	糸切り
14	7.6	4.9	1.7	糸切り	29	8.0	6.1	1.5	糸切り	44	13.3	8.9	3.2	糸切り
15	7.6	5.2	1.6	糸切り	30	7.9	5.1	1.6	糸切り	45	13.2	8.4	3.5	糸切り

単位はcm

表4　3面包含層出土のかわらけ法量表　図15

NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形
18	7.9	6.4	1.3	糸切り	21	8.2	6.2	1.8	糸切り	24	13.1	8.0	3.1	糸切り
19	7.7	6.5	1.7	糸切り	22	8.7	6.4	1.8	糸切り					
20	8.0	5.8	1.8	糸切り	23	11.9	7.9	3.5	糸切り					

単位はcm

表5　3面遺構出土のかわらけ法量表（溝1）　図16

NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形	NO	口径	底径	器高	底部形
1	8.8	6.9	1.6	糸切り	14	8.1	6.8	1.9	糸切り	27	11.8	8.7	3.1	糸切り
2	8.2	6.6	1.8	糸切り	15	8.2	5.8	1.8	糸切り	28	12.4	9.4	3.1	糸切り
3	7.9	5.7	1.6	糸切り	16	7.2	5.9	1.9	糸切り	29	12.2	7.5	3.0	糸切り
4	7.7	6.0	1.6	糸切り	17	9.0	7.2	1.6	糸切り	30	11.9	8.9	3.3	糸切り
5	8.4	6.3	2.0	糸切り	18	8.3	6.8	1.8	糸切り	31	13.1	8.5	3.2	糸切り
6	7.9	6.5	2.0	糸切り	19	8.3	5.8	1.8	糸切り	32	11.9	7.6	3.4	糸切り
7	8.5	5.7	1.9	糸切り	20	8.6	6.0	1.9	糸切り	33	12.6	8.2	3.7	糸切り
8	7.6	6.3	1.6	糸切り	21	9.2	7.3	1.8	糸切り	34	13.0	9.1	3.3	糸切り
9	8.6	7.0	1.7	糸切り	22	8.4	—	2.0	手捏ね	35	11.9	7.9	3.3	糸切り
10	8.0	6.4	1.6	糸切り	23	11.3	8.2	3.1	糸切り	36	13.1	9.0	3.0	糸切り
11	8.4	6.2	1.6	糸切り	24	11.9	8.9	3.0	糸切り	37	12.6	8.5	3.5	糸切り
12	8.2	6.3	1.8	糸切り	25	12.2	7.2	3.3	糸切り	38	11.9	7.0	3.7	糸切り
13	8.7	6.3	1.6	糸切り	26	11.7	6.6	3.3	糸切り					

単位はcm

表6　3面遺構出土のかわらけ法量表（落ち込み、柱穴、土壙）　図17

東西道路北、落ち込み				
NO	口径	底径	器高	底部形
1	7.3	5.3	1.7	糸切り
2	7.9	5.6	1.5	糸切り
3	7.3	5.2	1.7	糸切り
4	7.9	5.2	1.8	糸切り
5	7.5	4.6	1.8	糸切り
6	8.3	5.4	2.2	糸切り
7	7.7	5.6	1.8	糸切り
8	12.3	8.0	3.2	糸切り

掘立柱建物				
NO	口径	底径	器高	底部形
9	12.1	7.5	3.5	糸切り
10	—	—	—	手捏ね
11	11.1	—	3.0	手捏ね

土壙1				
NO	口径	底径	器高	底部形
19	9.9	—	2.3	手捏ね
20	8.2	5.5	1.8	糸切り
29	7.7	5.3	1.4	糸切り
30	12.5	7.8	3.2	糸切り
31	12.9	8.4	3.6	糸切り

土壙2				
NO	口径	底径	器高	底部形
26	7.3	4.8	1.6	糸切り

土壙3				
NO	口径	底径	器高	底部形
23	8.2	6.6	1.7	糸切り
24	12.3	8.8	3.4	糸切り

単位はcm

表7　3面溝出土のかわらけ法量表　図18

NO	口径	底径	器高	底部形
1	8.2	6.5	1.9	糸切り
2	8.6	—	1.8	手捏ね
3	8.7	—	1.9	手捏ね
4	8.9	7.5	1.7	糸切り
5	12.0	7.5	3.2	糸切り
6	12.3	8.1	3.3	糸切り
7	12.4	8.6	3.4	糸切り
8	13.0	8.5	3.2	糸切り
15	8.3	6.6	1.2	糸切り
16	12.1	7.8	3.1	糸切り
17	12.2	8.8	3.2	糸切り
18	13.1	9.5	3.5	糸切り
19	—	—	—	手捏ね
23	7.1	6.0	1.1	糸切り
24	8.4	7.2	1.6	糸切り
25	8.4	7.0	1.9	糸切り

単位はcm

第4章　まとめ

当遺跡では、中世の地山である黒褐色粘質土が確認されず、青白色砂の上に暗灰色砂質土の堆積が見られた。かつてこの地が河川の氾濫原か後背湿地のような状況が考えられる。花粉分析の結果を見るとイネ科の花粉が大半を占め、種実でも穎の破片が多く水田耕作を行っていた可能性が指摘される。おそらく12紀末から13世紀前半(鎌倉時代初期)には水田以外の土地利用は行われていなかったらしく、この時期の遺構は検出されなかった。本調査において確認された最も古い遺構は、方形竪穴建築址をはじめとする4面の遺構群であり、この時期から土地が居住を目的に利用されるようになったと考えられる。

方形竪穴建築址について、これまでの研究で土台をどのように造るか・壁をどのように立ち上げるか等の視点から、分類検討の研究が行われてきた。こうした分類に照らすならば、今回確認した建物1は「土台角材を用いない・掘立柱、杭で壁板を支える」に分類されるもので、規模も挙げられている事例とほぼ同じである。また廃棄された年代であるが、13世紀中頃と比定されたことは、方形竪穴建築址の最も古い発見例となる。木組みだけのものは石材を使用するものに先行することの裏付けの一つとなろう。ただし木組み構造に分類される方形竪穴建築址の中で、「土台角材を用いる」ものと「掘立柱や杭」のものが年代差となり得るのかは、今後の事例増加を待たねばならない。

これまで「土台角材を用いない・掘立柱、杭で壁板を支える」に分類される方形竪穴建築址は、遺存状態の悪さから不明な点が多く、上屋等建物としての全体像がわかりにくかったが、今回の良好な出土状態から掘立柱と間柱の関係、地下部分及び地上部分の壁構造が別になること等が明らかになった。そして明らかになった壁構造の中に、他の方形竪穴建築址の上屋構造解明の手がかりも隠されているのかもしれない。

建物1の西側に建物の軸線と同じ軸線を持つ、南北柱穴列があり目隠し塀と考えられる。併せて多くの土壙が検出された。土壙から出土した遺物の多くが、折敷、箸そしてかわらけと若干の漆器であった。4面の土壙1・2・3の土壌を分析した結果、土壙3は若干の寄生虫卵(鞭虫卵・回虫卵)が検出されたが、いわゆるトイレ遺構で検出される寄生虫卵数の基準(1,000個/立方cmを目処とする。)にはおよばなかった。しかし土壙1からは約1,500個/立方cm、規模の小さな土壙2から、トイレ遺構の寄生虫卵

数の基準を大幅に上回る10,000～40,000個/立方cmもの寄生虫卵が検出され、トイレとして使われた可能性が指摘される。このような状況から４面で検出した建物１と土壙そして目隠し塀は、大きな屋敷の裏手に造られた住居あるいは物置とトイレ、ゴミ穴、そして区画のための塀であると推定される。

建物１は、13世紀中頃に短時間で一気に埋め戻される。整地された後、東西方向と南北方向に延びる道路が上に造られる。東西方向の道路は基軸の若宮大路に直交し、南北方向の道路は大路に平行して延びている。幅３ｍの東西方向に延びる道路は、基礎に灰色砂が敷かれ、表面を平らに加工した鎌倉石と土丹を丁寧に敷き詰め舗装されていた。出土した遺物から見ても、建物１の４面と道路の造られた３面との時間差はほとんどないのかもしれない。道路の脇に建てられた掘立柱建物は、東側に半間の差掛け状の庇を持ち、周囲を網代壁で覆った床張り、一部土間の建物であった。

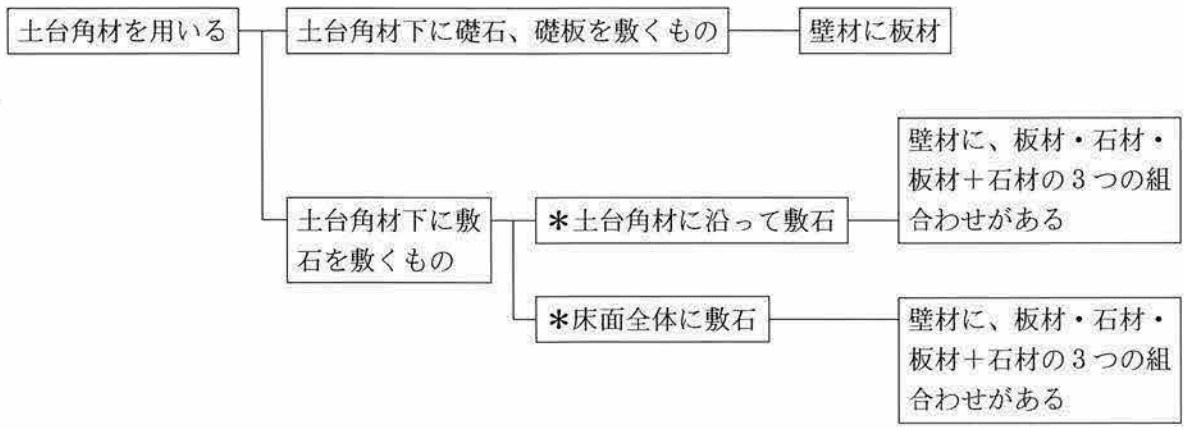
１・２面では基本的には若宮大路を基軸線としの区画が存在したと考えられるが、後世の攪乱が激しく面的に遺構を捕らえきれなかった。しかし、包含層からの豊富な遺物の出土を見ると、盛んな都市活動を彷彿とさせるには余りあるものである。

若宮大路を挟んだ東側一帯は、宇津宮辻子・若宮大路幕府があったと考えられる地点である。東西道路を東に延ばすと、若宮大路から宇津宮稲荷神社に向かう、宇津宮辻子幕府の南限(『鎌倉市史－総説編』)とする路地(宇津宮辻子)がある。今回の調査で確認した東西道路が、辻子として東の若宮大路を越え宇津宮辻子まで、そして西の今小路まで貫くのか興味が尽きない。方形竪穴建築址が廃棄され埋められた13世紀中頃以降、遺跡周辺の地割りが変化したことは明らかで、新たに造られた道路、溝、掘立柱建物等、若宮大路を基軸線として都市整備が進んで行ったと思われる。

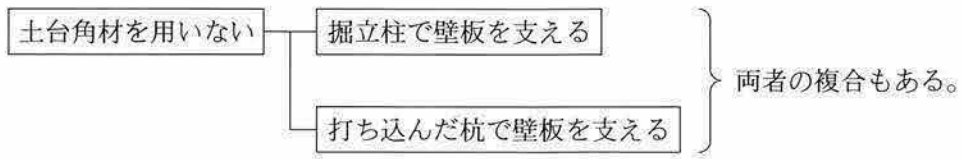
（福田　誠）

註：方形竪穴建築址の分類(基本的な基礎構造を基に分類をしたものである。)

分類１



分類２



方形竪穴建築址の定義

1．平面方形で壁面は垂直、底面は平坦に地面を掘り窪めたもの。

2．垂直に掘り窪めた壁底面から、石材・木材を使い壁を立ち上げたもの。

3．壁材を支えるために内側に大小の間柱を配するもの。

4．壁材を支えた間柱は、壁に沿って掘立柱あるいは杭状に打ち込んだり、地面を方形に掘り窪めた掘方の底面、壁に沿って配した土台角材に枘穴（ほぞあな）を穿ちその上に立てたもの。

5．間柱は、壁板を支えるだけでなく建物の構造材として使用されているものがある。

6．地面を方形に掘り窪めた掘方の底面、壁に沿って配した土台角材に、鎌倉石の切石を地覆石としたり、礎石、礎板が敷かれることがある。

7．鎌倉石の切石は、地覆として土台角材の下の他に、建物の床面総てに敷かれる場合がある。

8．多くの場合底面に根太材が敷かれることから、基本的には床が張られていた。

〈参考文献〉

1）福田誠『若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目５番８地点）』1998.3若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

2）汐見一夫「方形竪穴建築址考」『中世都市研究１号』1991.12　中世都市研究会

3）宗臺秀明「方形竪穴建築址の理解に向けて」『中世都市研究１号』1991.12　中世都市研究会

4）斎木秀雄「鎌倉石を使用した建物について」『鎌倉考古21号』1992.2

5）汐見一夫「方形竪穴建築址再考」『都市内の収納・貯蔵』1993.12　第１回中世都市研究・討論会

6）宗臺秀明「中世鎌倉の方形竪穴建築址とクラ」『都市内の収納・貯蔵』1993.12　第１回中世都市研究・討論会

7）佐藤仁彦「若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目325番イ外地点）」『鎌倉市内埋蔵文化財緊急調査報告書10』1994.3　鎌倉市教育委員会

8）佐藤仁彦　同上

建物28

地表標高：5.7m、平面形：不明、長軸方位：N－56°－W、床面規模：ＮＳ0.3m以上ＥW3.10m以上、　面積：不明、床面深さ：0.35m、床面標高：5.35m。

構造：北壁の羽目板とそれを支持する杭を検出した。崩落の危険性がある調査区壁際ということもあって詳しくは記録できなかったが、２～３枚の横板を表裏両面から小杭で押さえており、西端では直交する西壁羽目板が南調査区外へと延びている。

建物32

地表標高：5.6m、平面形：長方形、長軸方位：N－56°－W、床面規模：ＮＳ1.85mＥW3.25m、面積：6.01m²、床面深さ：0.5m、床面標高：5.1m。

構造：羽目板を杭で押さえる簡素な作りの方形竪穴である。部材は南北壁に比較的良く残っていたが、個別の材は原状を失っているのがほとんどで、正確な計測はできていない。羽目板は、幅30cmほどの横板を２枚以上積み重ね、内側から細い杭で押さえている。南北ともに内側に倒れ込むように検出された。南壁は外側にも杭を打ち込んでおり、両側から押さえ込んでいるが、建物28でも同様の構造が見られる。以上他に部材は検出されておらず、床面・上屋構造は全く不明である。建物32は、本遺跡で検出された方形竪穴の中で、最も小規模なものであり、構造的にも脆弱である。このタイプは「附属舎的性格」の竪穴と考えられているが、上屋が想定しにくく規模が小さい点などから、方形竪穴建築址の範疇から除外すべきとする意見もある。

9）宮田　真『若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目322番地点）』1997.3　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

10）宮田　真　同上

竪穴６

地表標高：約6.9m、平面形：隅丸方形？、長軸方位：N－48°－W、床面規模：ＮＳ3.40mＥW2.40m、面積：8.16m²、床面深さ：0.86m、床面標高：約６.0m。

構造：方形竪穴建築址６は方形竪穴建築址５及び土壙22・36により切られているため壁の輪郭は不詳だが、東・西・北壁の直下３方向に柱穴列が検出していることから、平面形は東西軸240cm、南北軸340cmの隅丸方形ではないかと考えられる。深さは検出面から86cmを測る。床面レベルは海抜約6.0mでほぼ平坦である。柱穴列は東壁及び南壁直下に10口、方形竪穴建築址５との境に４口の計13口が認められた。直径は64～30～16cmを、深さは10～30cmを測る。柱間は東列で、ほぼ48cmを、南列で東から52cm・32cm・24cm・50cm・54cm、西列で南から114cm、100cmを測る。南北軸線方位はN－48°－Eである。

附編　土壌分析・樹種同定

若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目５番８地点）の花粉化石　　鈴木　茂（パレオ・ラボ）

若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目５番８地点）において最も古い発見例となる方形竪穴建築址（廃棄年代13世紀中頃）が出土しており、それとともに同年代の土坑も検出されている。ここではこの土坑を埋積している土壌について、土坑の性質や当時の遺跡周辺の植生を検討する目的で花粉分析を行った。また、作成したプレパラートの観察の際、寄生虫卵が多数認められたことから、あわせて寄生虫卵についても検討した。

１．試料

図23に試料を採取した土坑断面を含む調査区北壁の土層断面と試料採取層準を示した。各土層の記載については別章を参照して頂き、ここでは試料採取層を中心に記す。

土坑２の試料１層は黒灰色の粘土で、大型の土丹(泥岩)やカワラケ片が点在しており、炭片も認められる。その上位は褐色を帯びた黒灰色粘土で、砂レキ（大型土丹・玉じゃり）が多く含まれ、炭片も認められる。試料２層は赤褐色の有機質粘土で、植物遺体が多く含まれている(植物腐植土)。その下位の試料３層は地山層に当たり、粘性の高い黒色粘土である。

土坑１の試料４層は赤褐色の有機質粘土で、ウリ類の種子など植物遺体が多く含まれている（植物腐植土)。その上位は土坑２の試料1層と同様の黒灰色の粘土、さらに上位は褐色を帯びた黒灰色粘土である。試料５層は黄褐色の有機質粘土（植物腐植土）である。その下位は地山層で、黄褐色を帯びた黒灰色粘土（土丹風化土？）で、粘性は高いがボソボソ感がある。

２．分析方法

上記した２土坑より採取した５試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約３～４ｇ）を遠沈管にとり､10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き､傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。なお、試料２，４についてはあらためて体積を測定した試料について上記と同様の方法で寄生虫卵の検出を図った。

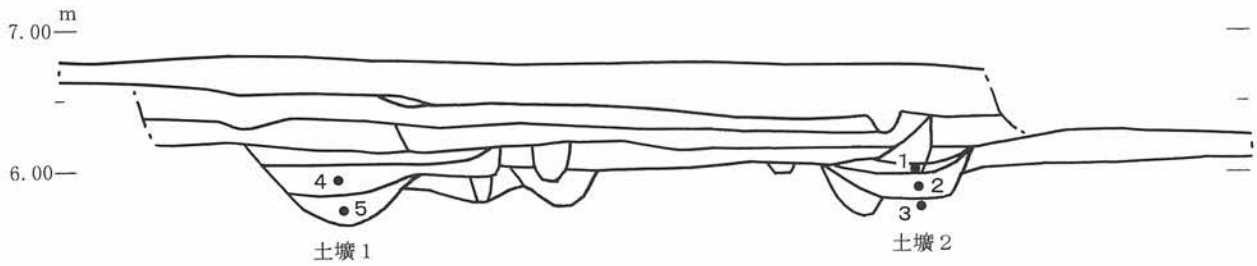


図23　調査区北壁断面と試料採取層準

表8　若宮大路周辺遺跡群の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5
樹木						
ツガ属	*Tsuga*	1	-	-	-	1
トウヒ属	*Picea*	1	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	30	3	4	5	3
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	-	1	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	1	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	7	1	7	4	-
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	T.- C.	-	-	1	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	1	-	-
サワグルミ属ークルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	-	-	-	1
クマシデ属ーアサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	-	1	1
カバノキ属	*Betula*	2	-	-	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	2	-	1	1	-
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	-	-	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	-	3	8	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	9	2	3	4	4
クリ属	*Castanea*	3	-	2	1	1
シイノキ属ーマテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	-	1	-	-
ニレ属ーケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	-	-	1	-
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	1	-	1	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	-	-	1
シラキ属	*Sapium*	-	-	-	1	1
ウルシ属	*Rhus*	-	-	2	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	1	2
イボタノキ属	*Ligustrum*	1	-	-	-	-
ニワトコ属	*Sambucus*	-	-	-	1	-
草本						
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	1	-
イネ科	Gramineae	416	312	83	499	514
カヤツリグサ科	Cyperaceae	17	4	10	10	14
ツユクサ属	*Commelina*	1	-	1	-	-
クワ科	Moraceae	2	2	1	8	4
イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. Bistorta	1	-	-	1	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	1	1	-	-	-
アカザ科ーヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	18	15	22	5	11
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	1	1	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	1	1	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	-	2	1
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	1
アブラナ科	Cruciferae	56	1	21	2	9
ユキノシタ科	Saxifragaceae	1	-	-	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	2	-	5	1
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	1	-
ノアズキ属	*Dunbaria*	-	-	-	1	-
他のマメ科	other Leguminosae	-	1	1	5	6
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	1	-
ミソハギ属	*Lythrum*	1	-	-	-	-
フサモ属	*Myriophyllum*	-	-	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	1	-	-	-	-
リンドウ属	*Gentiana*	-	-	-	-	1
シソ科	Labiatae	1	-	-	6	11
オオバコ属	*Plantago*	1	-	1	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	23	-	-	-	3
ツリガネニンジン属ーホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	58	23	44	207	172
他のキク亜科	other Tubuliflorae	7	1	3	8	9
タンポポ亜科	Liguliflorae	19	-	7	7	5
シダ植物						
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	3	-	1
単条型胞子	Monolete spore	5	-	1	2	1
三条型胞子	Trilete spore	1	-	-	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	58	7	27	29	18
草本花粉	Nonarboreal pollen	627	363	196	773	762
シダ植物胞子	Spores	6	0	4	3	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	691	370	227	805	782
不明花粉	Unknown pollen	23	3	9	4	4

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

3．花粉分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉26、草本花粉30、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計59である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、花粉・シダ植物胞子の分布を図24（土坑２）、図25（土坑１）に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、両土坑とも草本花粉の占める割合が高く、地山試料３を除き90％以上を占めている。そのなかでもイネ科が圧倒的に多く、やはり地山試料を除き60％以上で、試料２では80％を越えている。その他、土坑２（試料１～３）ではカヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科が５％前後とやや目立って検出され、試料１においてシソ科・オオバコ属・オミナエシ属が1%を越える出現率を示している。また、地山試料３においてヨモギ属が20%弱と高い出現率を示している。少ない樹木類ではマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）・スギ・コナラ属アカガシ亜属が試料２を除き１％を越える出現率を示している。

土坑１（試料４，５）ではヨモギ属がいずれも出現率が20％を越え多く検出されている。その他では試料５においてやはりカヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・シソ科が1%を越える出現率を示している。樹木類は出現率１％を越える分類群は無く、ニヨウマツ類・コナラ属コナラ亜属・アカガシ亜属・クリ属・ブドウ属などが両試料より若干得られているのみである。

4．寄生虫卵分析結果

先の花粉分析において試料２および４より多数の寄生虫卵が認められたことから、あらためてこの２試料について２点づつ分析を行い、試料１cc中の寄生虫卵個数を求めた（表９）。

その結果、２，４の両試料において鞭虫卵・回虫卵・肝吸虫卵・横川吸虫卵が観察された。そのうち土坑２の試料２においては１と２でかなり検出個数が異なっている。すなわち、鞭虫卵は１が約30,000個に対し２が約6,000個、回虫卵が約9,000個に対し約2,000個で、全体でも１が約40,000個に対し２は約9,000個と１の方が多く検出されている。反対に肝吸虫卵は１で約160個に対し２が約600個、横川吸虫卵が０個に対し約100個を示し、２の方が多く得られている。

土坑１においては土坑２ほど大きな違いはみられず、また、検出個数も少なく全体で約1,500個ほどである。そのなかで、横川吸虫卵が土坑２より多く検出されている。

表９　資料１cc中の寄生虫卵個数

遺構	試料No.	全寄生虫卵	鞭虫卵	回虫卵	肝吸虫卵	横川吸虫卵
土坑1	No.4-1	1429	1107	214	36	71
	No.4-2	1947	1363	292	97	195
土坑2	No.2-1	39171	29822	9188	161	0
	No.2-2	9048	6310	2024	595	119

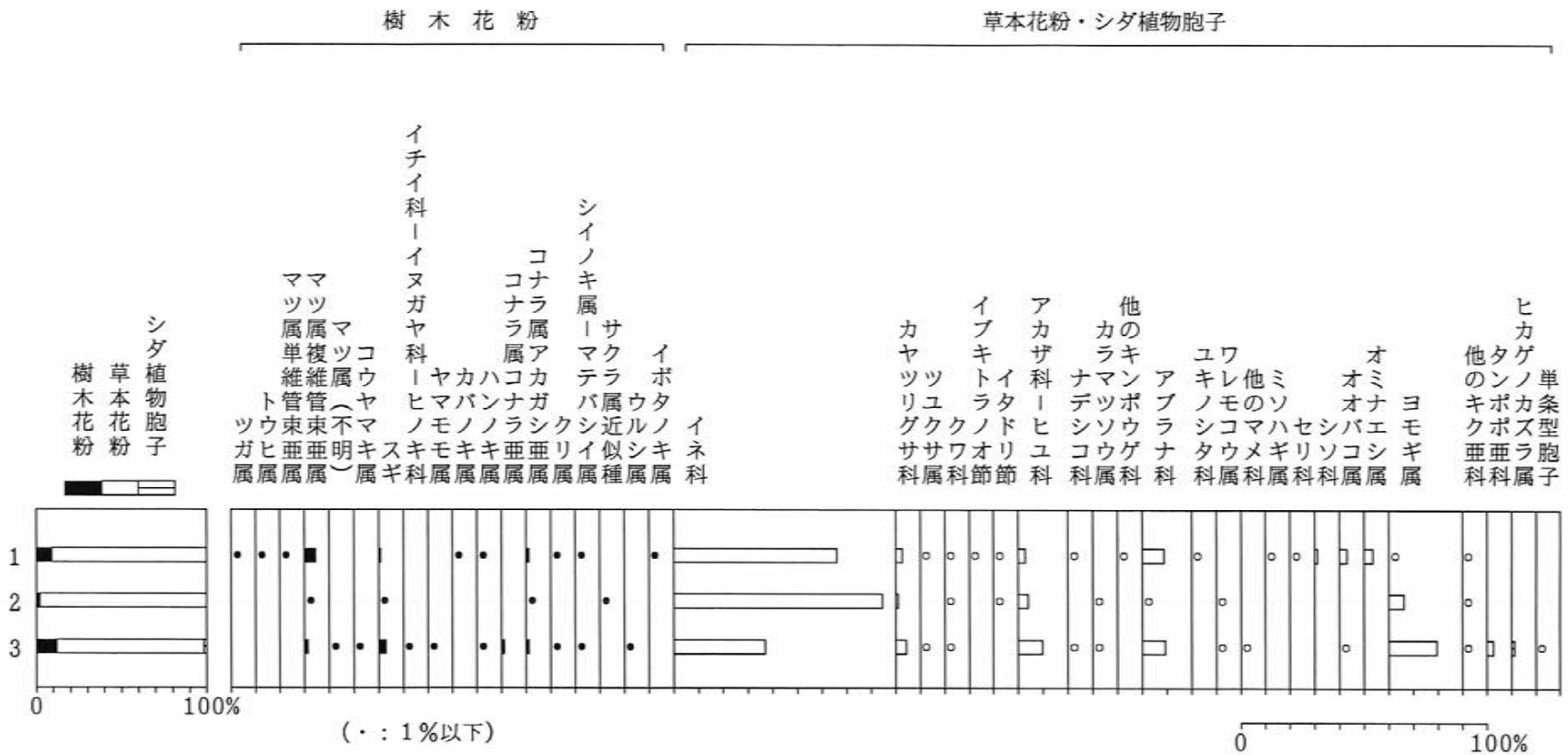


図24　土壙２の花粉化石分布図（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

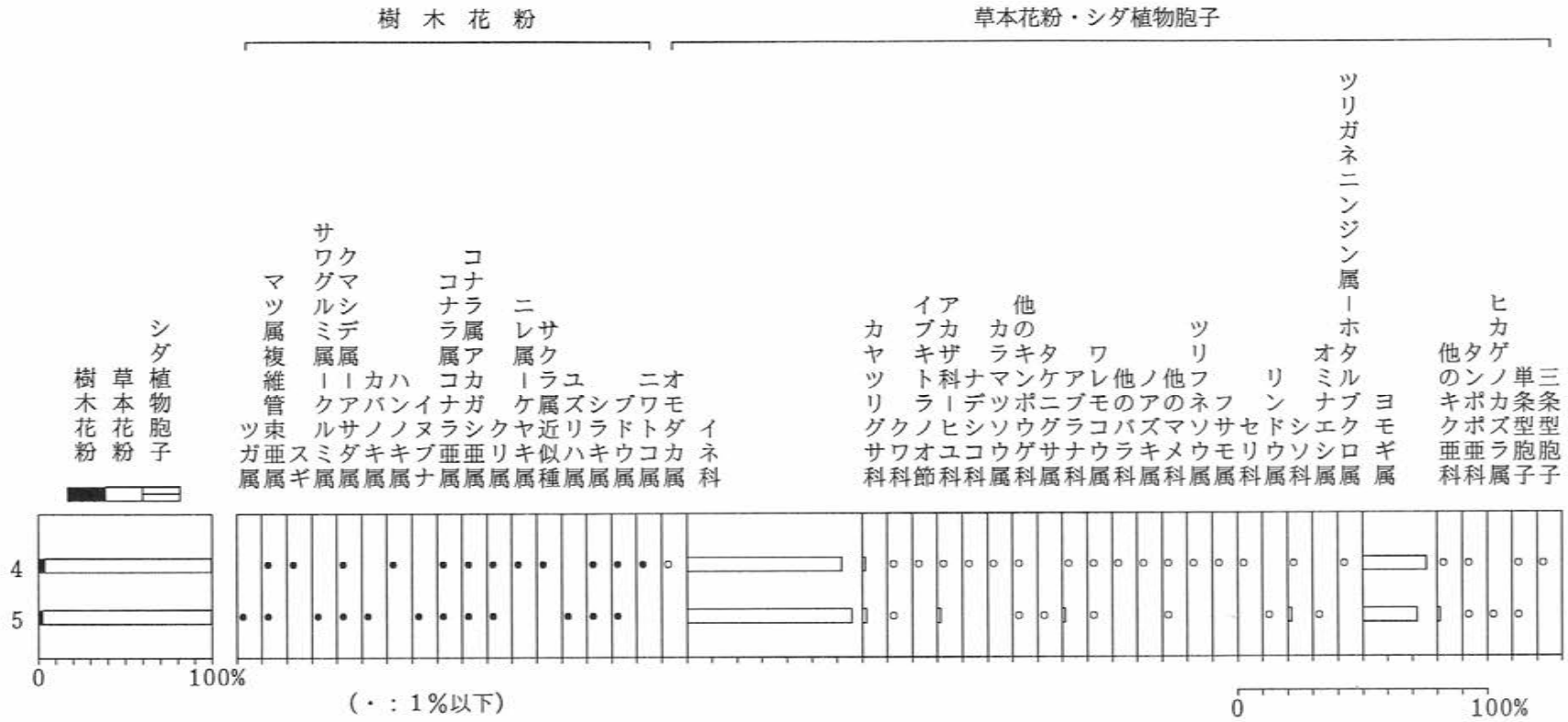


図25　土壙1の花粉化石分布図（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

5．土坑の性格について

両土坑とも多くの寄生虫卵が観察され、土坑１が約1,500個前後、土坑２が約10,000個～約40,000個であった。寄生虫卵個数について、試料１cc中に1,000個以上あれば糞便の可能性があると考えられており(金原　1997)、これによると両土坑試料とも糞便であり、遺構としてはトイレ遺構である可能性が推測される。本遺跡に近い北条時房・顕時邸跡の土坑試料からも寄生虫卵が多く検出され、トイレ遺構の可能性が指摘されている(鈴木　1998)。

また、試料２においては寄生虫卵検出個数に分析を行った２点で大きな違いが認められる。試料は土坑より約30gの塊で採取し、分析はこれより分割（約１cc）したものについて行っている。こうしたことから、約30gの塊であっても場所により含まれる寄生虫卵の全個数および各分類群の個数に大きな差異が認められ、試料はほとんど交じりあわず、供給されたそのままの状況で堆積していると思われる。

次ぎに花粉化石についてみると、両土坑ともイネ科花粉が非常に多く検出されており、表面模様から多くがイネではないかと思われる。また、予察的にプラント・オパール分析を行ったところイネのプラント・オパールが多数観察され、これらのことからイネ科花粉の多くはイネと推測される。このイネのプラント・オパールは葉に形成されるもので、よって、稲藁が土坑内に捨てられることにより供給されたものと思われる。また、イネ花粉もこの稲藁に付着して混入したものと推測される。これは土坑１におけるヨモギ属の多産についても同様で、除草などで刈られたヨモギ属が土坑内に捨てられた結果、多くの花粉が供給されたことが推察される。

以上のように、両土坑ともトイレ遺構である可能性があり、また、稲藁などを捨てるゴミ捨て場的な遺構である可能性も考えられる。これについては、多くの地点における同様な遺構の形態記載や、埋積物の土壌分析などの成果、および文献資料などより明らかになっていくものと思われる。

6．遺跡周辺の古植生

上記したように、分析を行った土坑はトイレあるいはゴミ捨て場的遺構と考えられ、意図的な投棄により速やかに埋積していったものと推測される。こうしたことから樹木花粉については土坑内に供給されにくい環境であったことが予想され、樹木花粉の少ない分析結果として表れていると思われる。そうしたなか、土坑２においてニヨウマツ類・スギ・アカガシ亜属がやや目立って検出されている。土坑の年代は13世紀前半の後半と推察されており、この頃の北条泰時・時頼邸跡周辺においては樹木の少ない景観で、スギ林やアカガシ亜属を中心とした照葉樹林が縮小し、ニヨウマツ類やコナラ亜属が増える傾向にあった(鈴木　1996)と考えられている。今回の分析結果もこれとほぼ同様の森林植生を示していると考えられ、年代的にも矛盾はしていないと考える。

一方、土坑近辺ではカヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・シソ科・オオバコ属・オミナエシ属・ヨモギ属などの雑草類が生育していたのであろう。また、土坑はトイレ遺構の可能性があり、アブラナ科やシソ科はそれらが食された結果、花粉が糞便とともに供給されたことも考えられる。

引用文献

鈴木　茂（1996）花粉分析．　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12平成７年度発掘調査報告（第２分冊），　鎌倉市教育委員会，ｐ.261－270.

鈴木　茂（1998）寄生虫卵からみた土壙34．　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14平成９年度発掘調査報告（第１分冊），　鎌倉市教育委員会，ｐ.233－235.

若宮大路周辺遺跡群出土木製品の樹種同定　　松葉礼子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

鎌倉市若宮大路周辺遺跡群の小町二丁目５番８地点より方形竪穴建築址（建物１）が検出され、この建築材計４点に付いてその樹種を明らかにする。

2．方法と記載

同定には、サンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表１（方形竪穴建築址（建物１）の樹種同定結果）に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、標本番号を付し、㈱パレオ・ラボで保管されている。

表10　方形竪穴建築址（建物１）の樹種同定結果

標本番号	樹　種	製品名	年　代
KAN362	スギ	根太	13世紀
KAN363	スギ	柱	13世紀
KAN364	スギ	板屋材	13世紀
KAN365	スギ	板屋材	13世紀

同定根拠

スギ　Cryptomerica japonica（L.fil.）D.Don TAXODIACEAE　　写真図版29a～1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり２個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯～暖帯、太平洋側に多く存在している。

写　真　図　版

1．調査地点近景

2．小町通り（鎌倉駅方面）

3．小町通り（鶴岡八幡宮方面）

図版 2

1．第 1 区 3 面全景（北から）

2．第 2 区 3 面全景（南から）

1．東西道路状遺構
（東から）

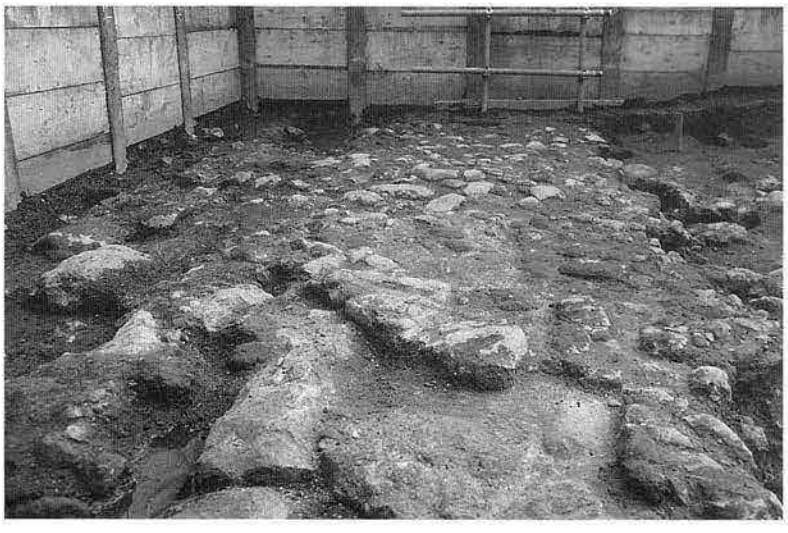
2．東西道路状遺構
（西から）

3．東西道路状遺構
（南西から）

図版 4

1．南北道路道路状遺構と溝 1
（北から）

2．溝 1 かわらけ出土状況



3．南北道路状遺構（北から）

1．第 2 区 4 面の全景写真（南から）

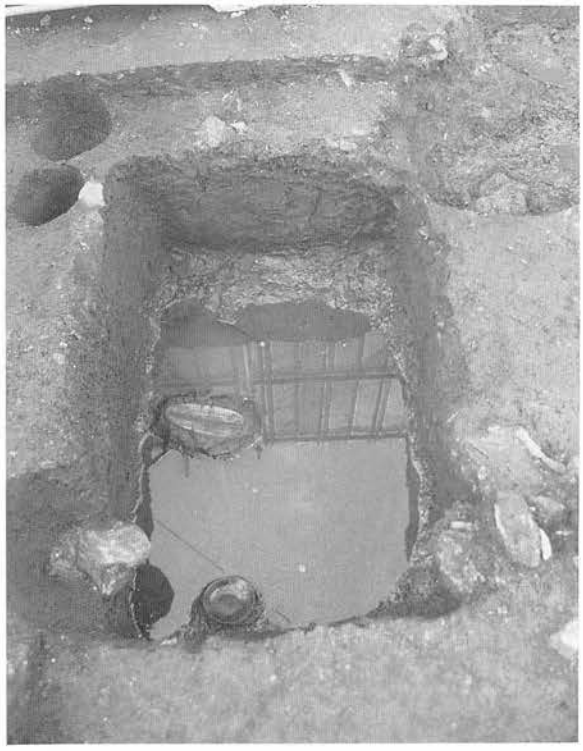
2．第 1 区 4 面の全景写真（北から）

図版 6

1．土壙 2・6（南から）

2．土壙 1（南から）

3．土壙 7（南から）



4．柱穴列 1（南から）

1．検出状況（北から）

2．北壁の検出状況（南から）

図版 8

1．検出状況（南から）

2．北壁の検出状況（東から）

1．北壁、地上部分の壁板を取り取り除いた状況（北から）

2．北壁、地下部分の横板出土状況（東から）

図版10

1．北壁地下部分　倒れ込んだ間柱と横板

2．根太と土間に敷かれた板材（南から）

3．根太の検出状況（北から）

1．根太と土間に敷かれた板材（東から）

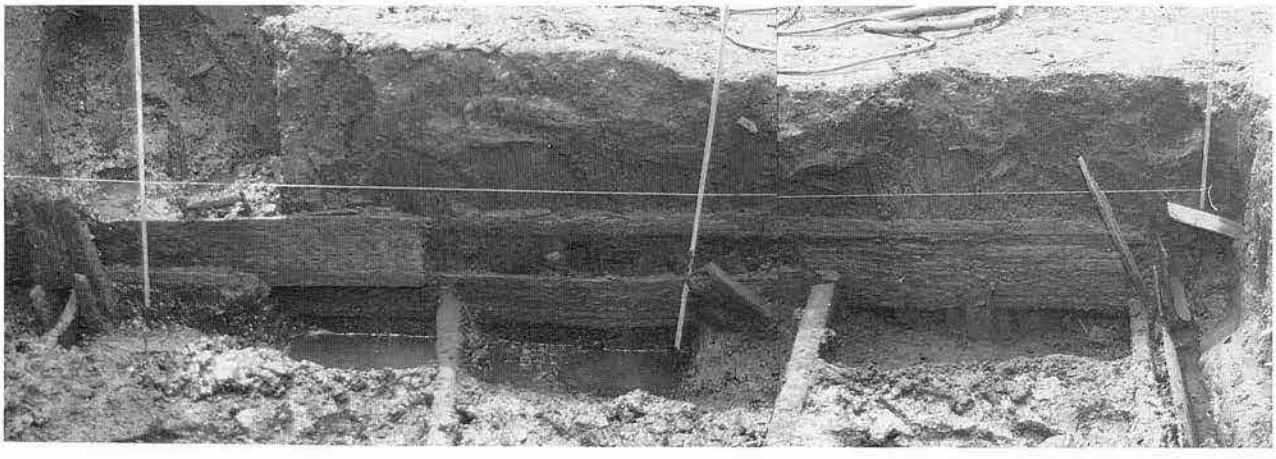
2．土間の敷き板と根太（北から）

図版12

1．根太と固定のために打ち込まれた杭

2．根太と西壁の縦板を支る胴縁と横板

3．西壁の検出状況

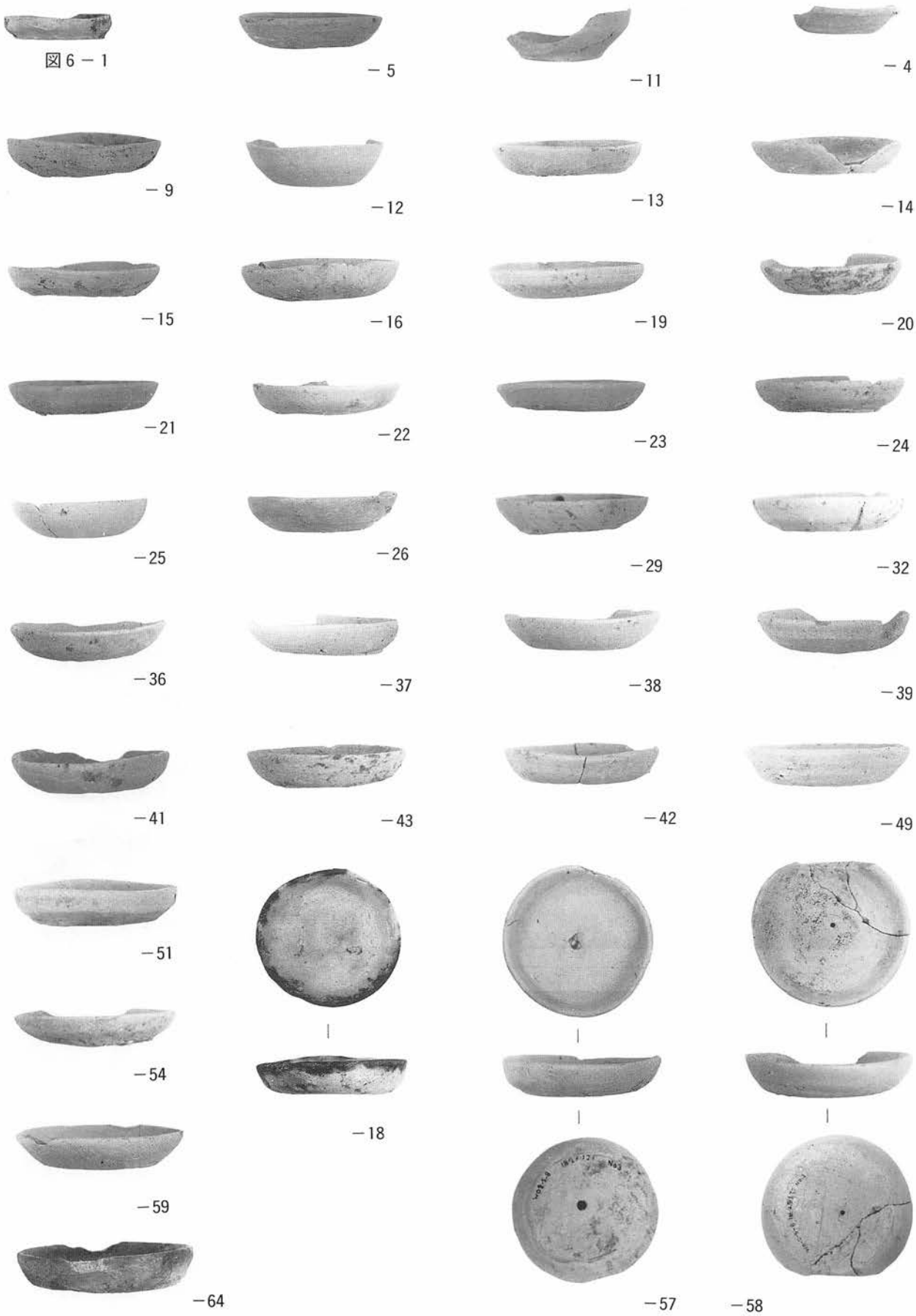


1．倒れ込んだ南壁（東から）

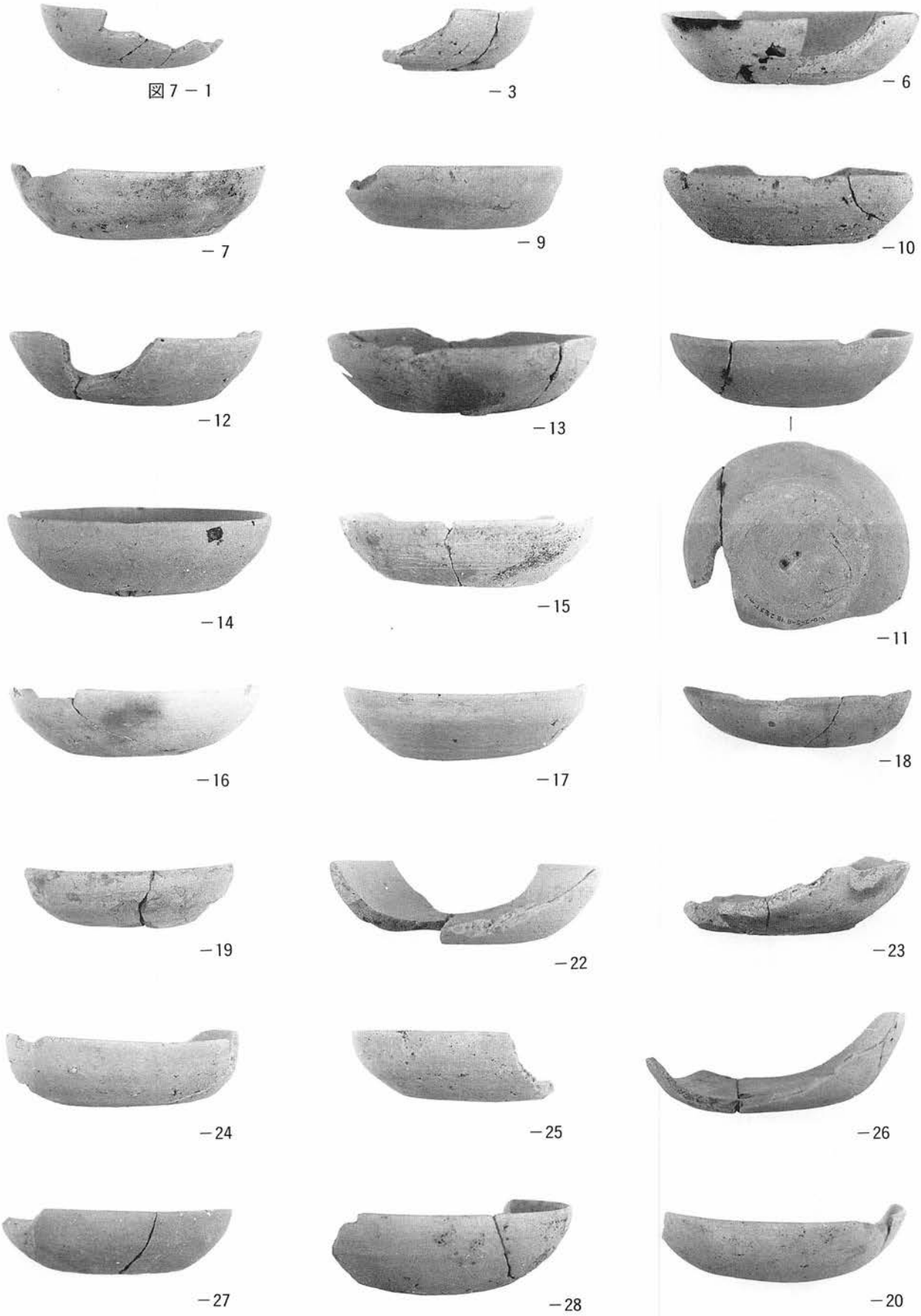
2．東壁の横板（北から）

3．東壁の横板（南から）

図版14

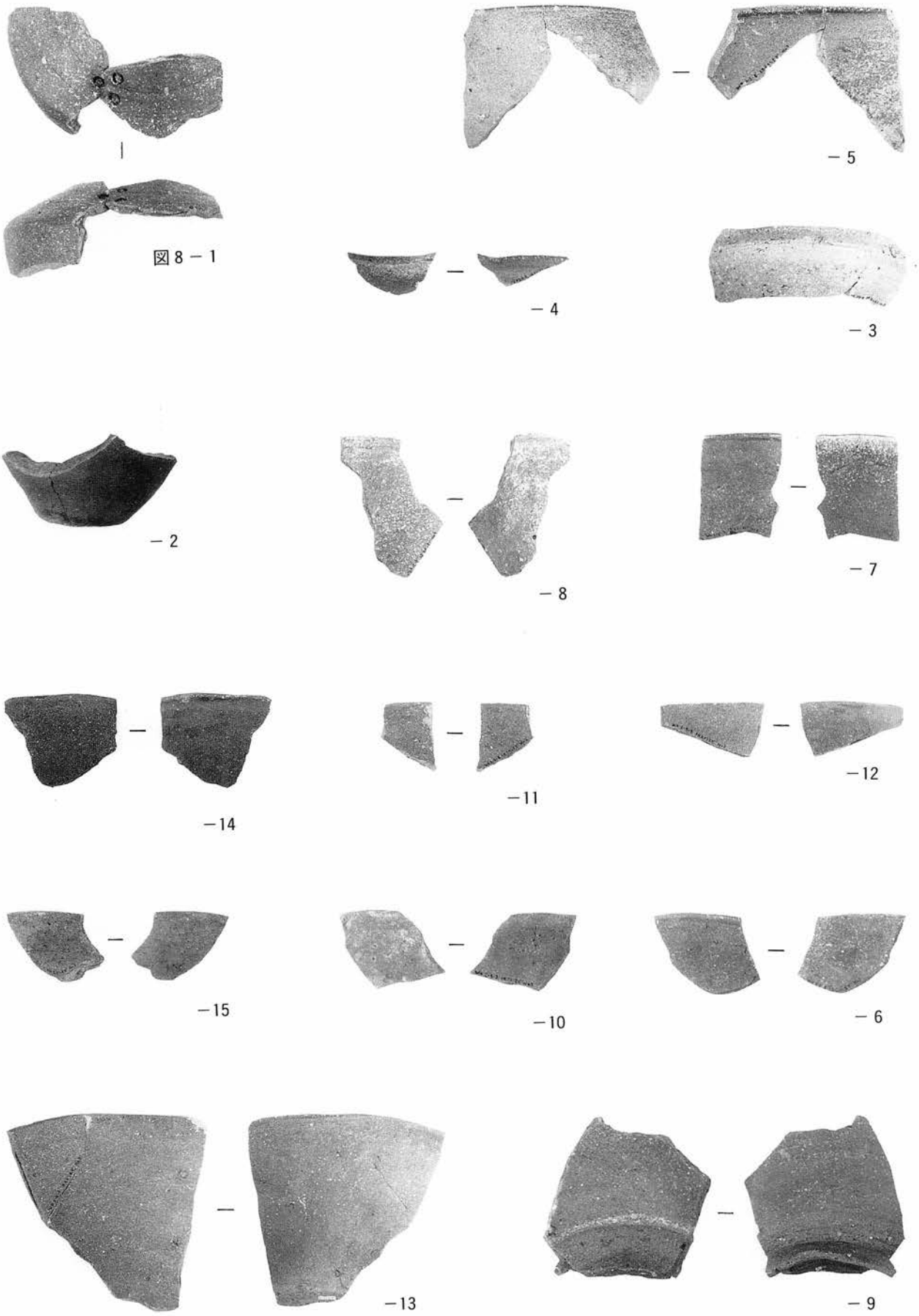


1面・2面包含層出土の遺物



1面・2面包含層出土の遺物

図版16



1面・2面包含層出土の遺物

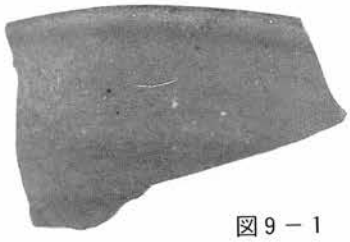
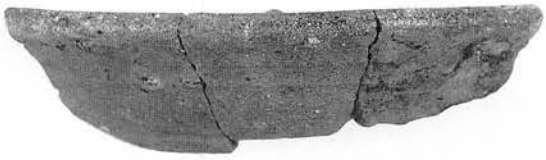


図9－1

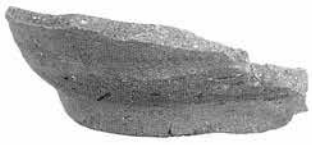
9－2

9－6

9－5



9－4



9－9

9－3

9－10

9－7

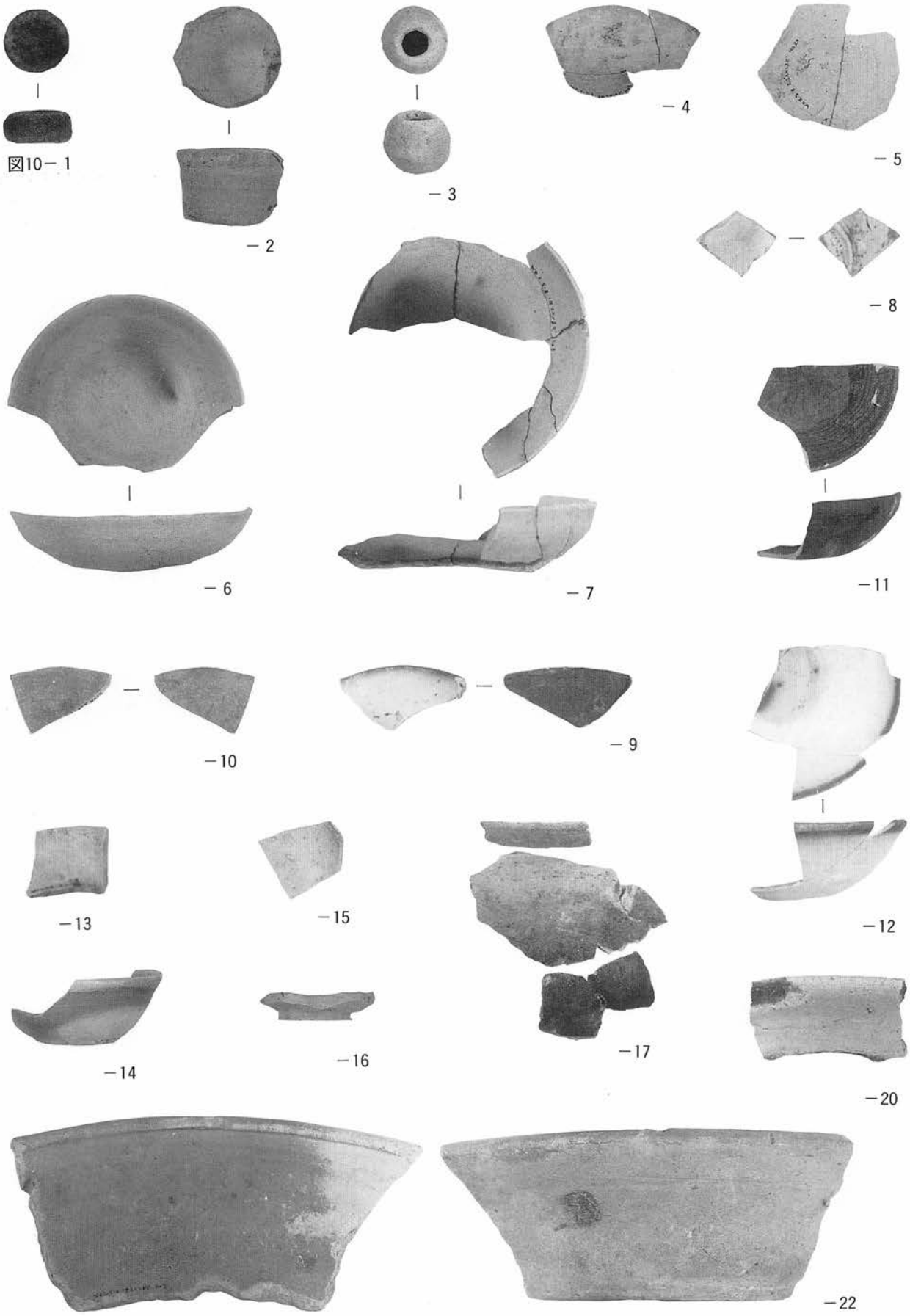
9－8

図10－18

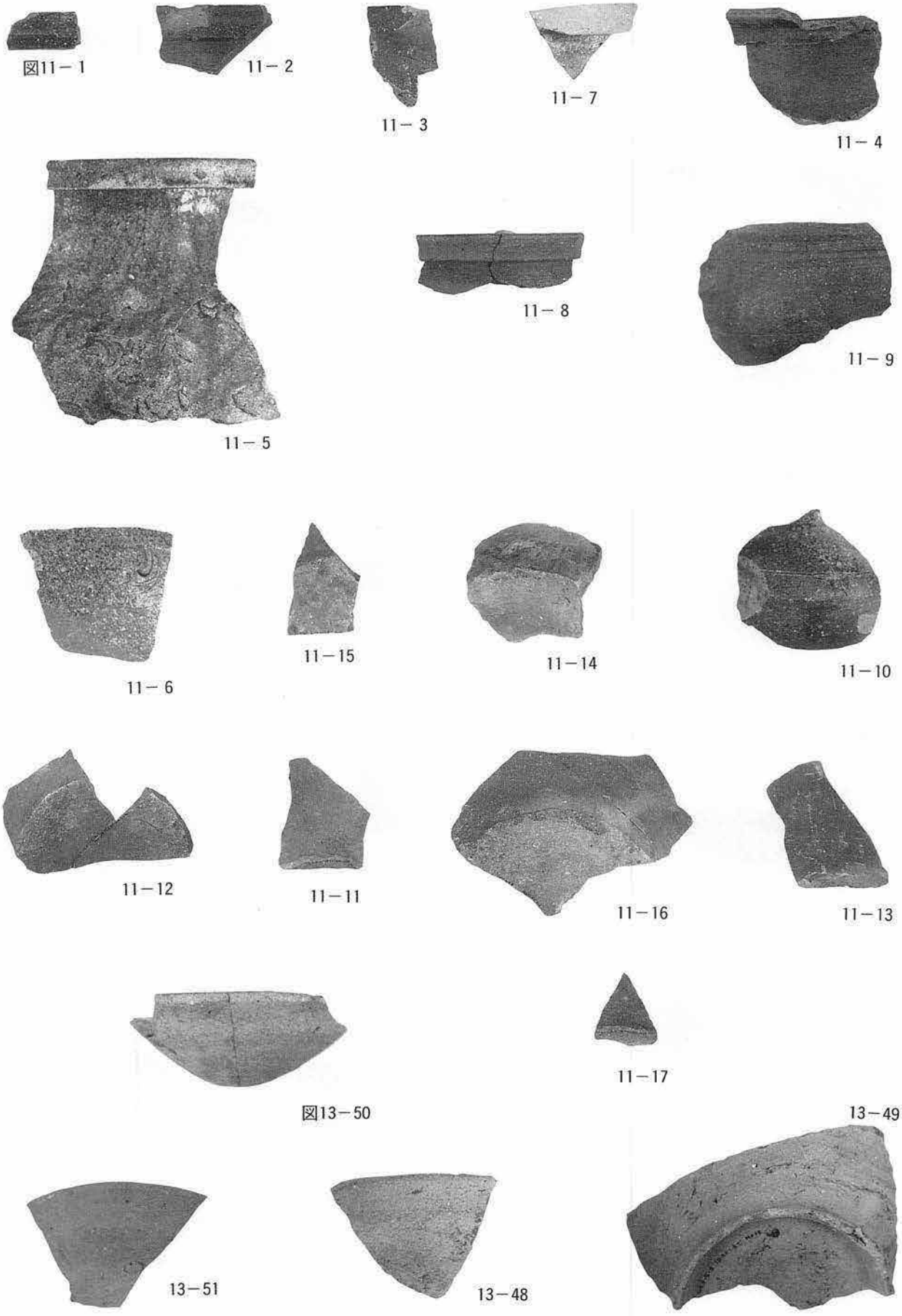
10－19

1面・2面包含層出土の遺物

図版18

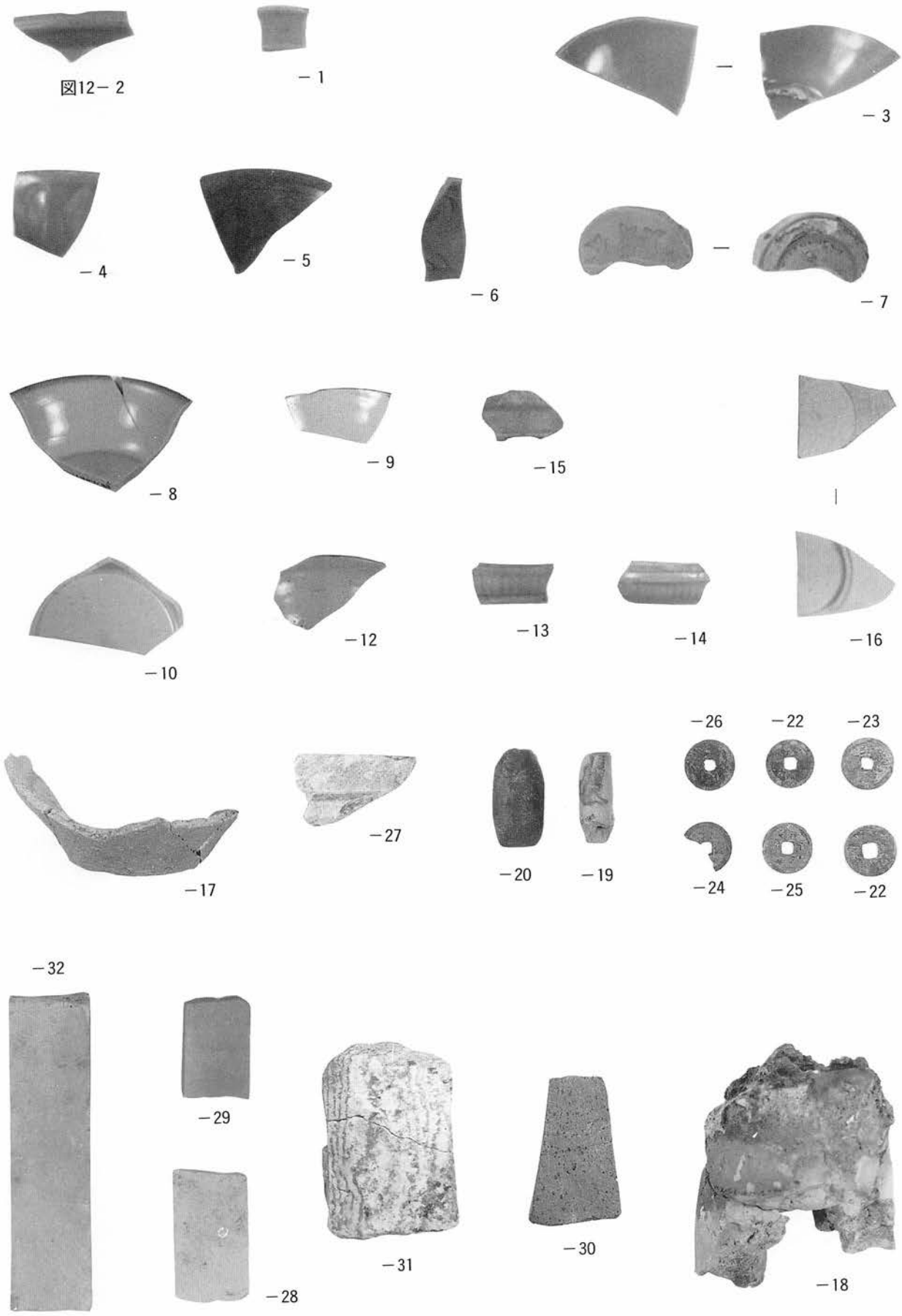


1面・2面包含層出土の遺物



1面・2面・3面包含層出土の遺物

図版20



1面・2面包含層出土の遺物

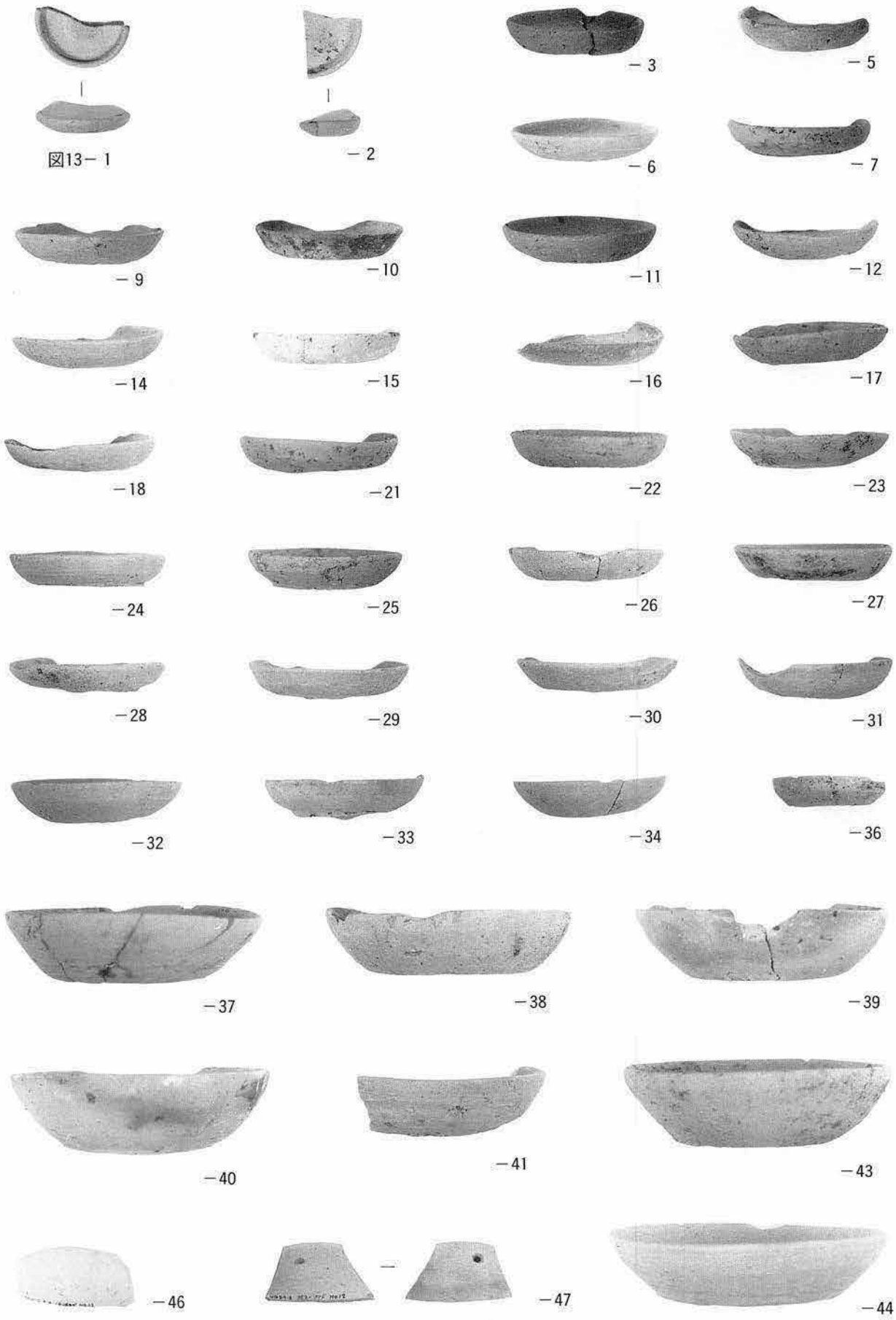
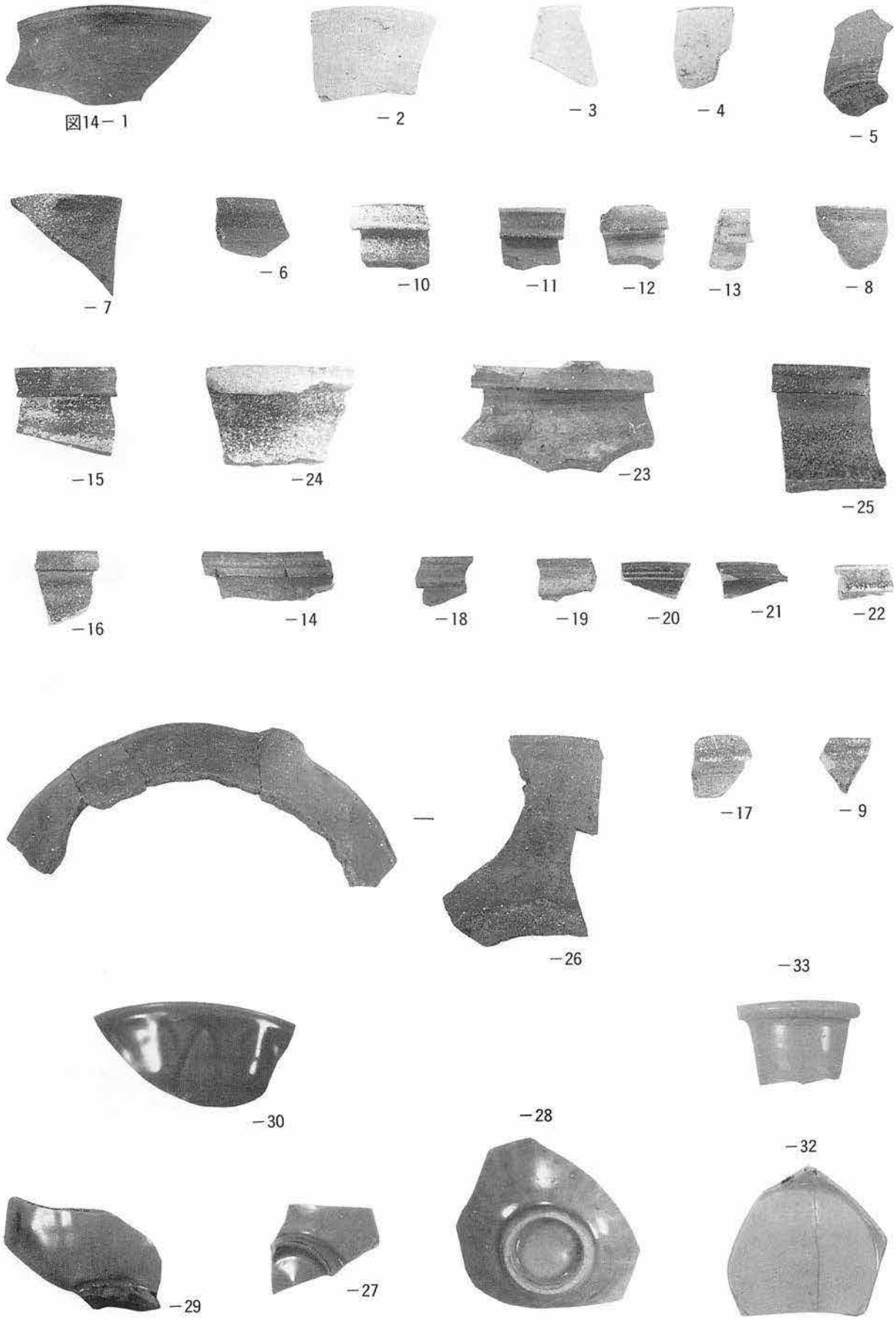


図13－1
－2
－3
－5
－6
－7
－9
－10
－11
－12
－14
－15
－16
－17
－18
－21
－22
－23
－24
－25
－26
－27
－28
－29
－30
－31
－32
－33
－34
－36
－37
－38
－39
－40
－41
－43
－46
－47
－44

3 面包含層出土の遺物

図版22



3面包含層出土の遺物

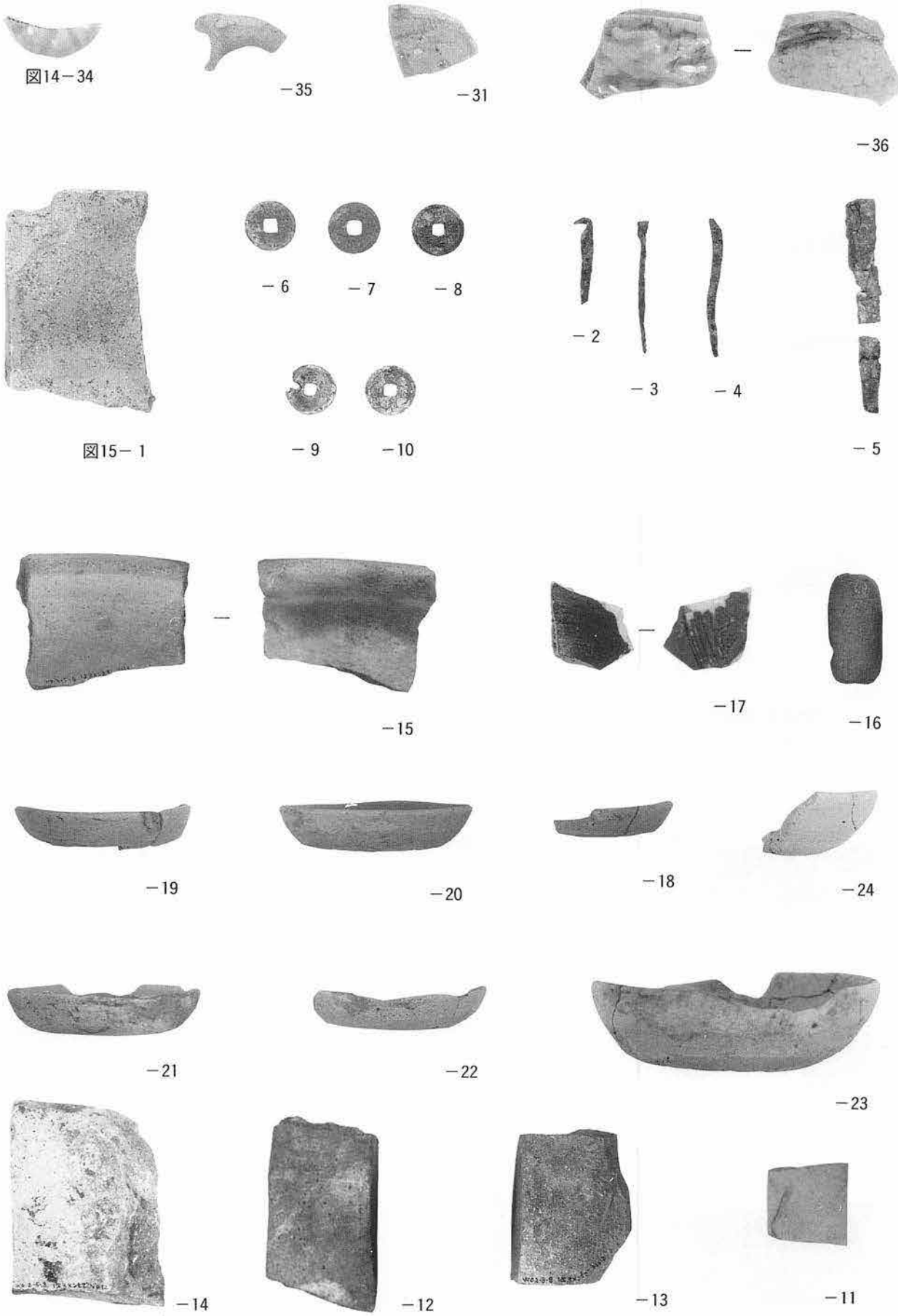
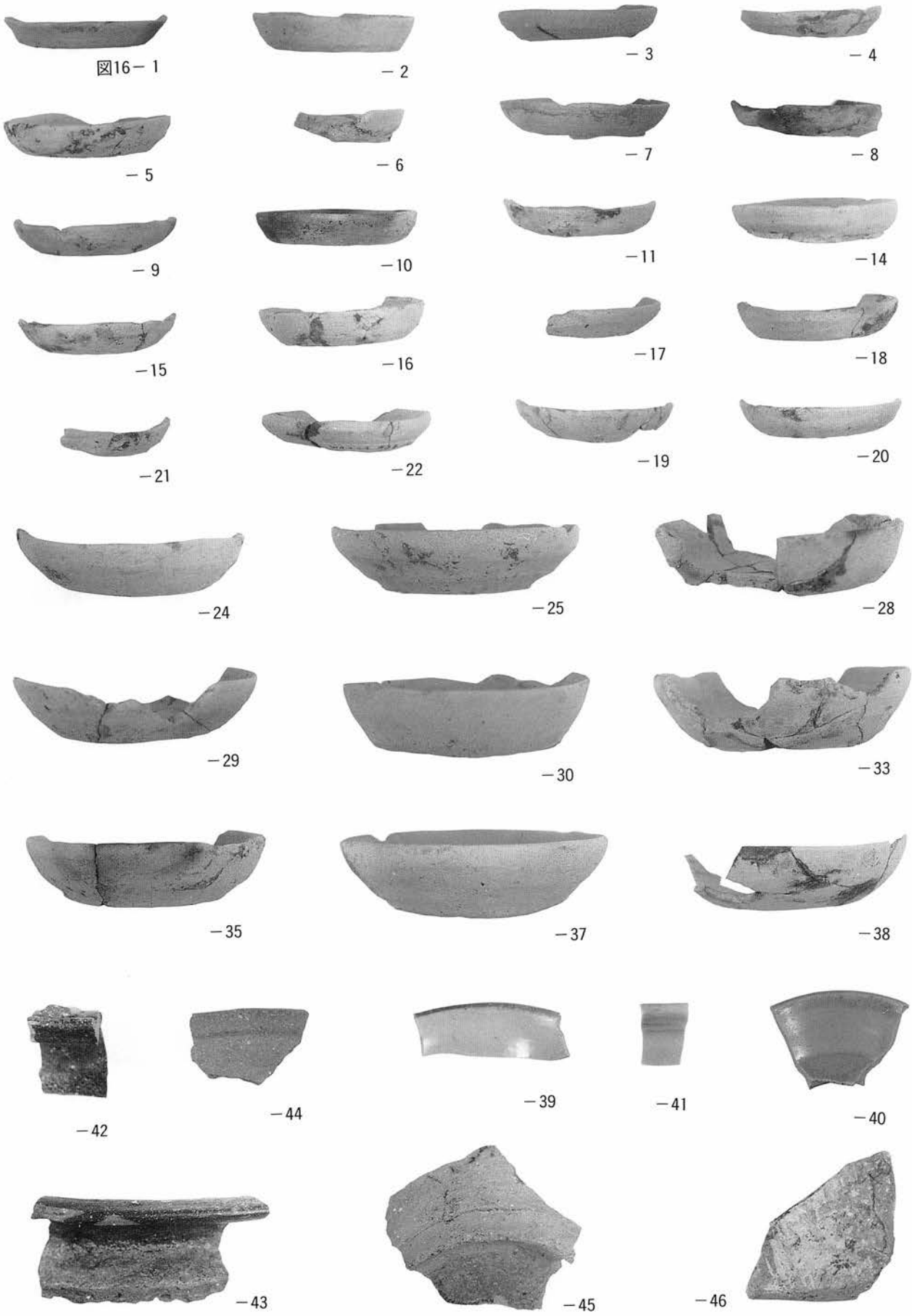


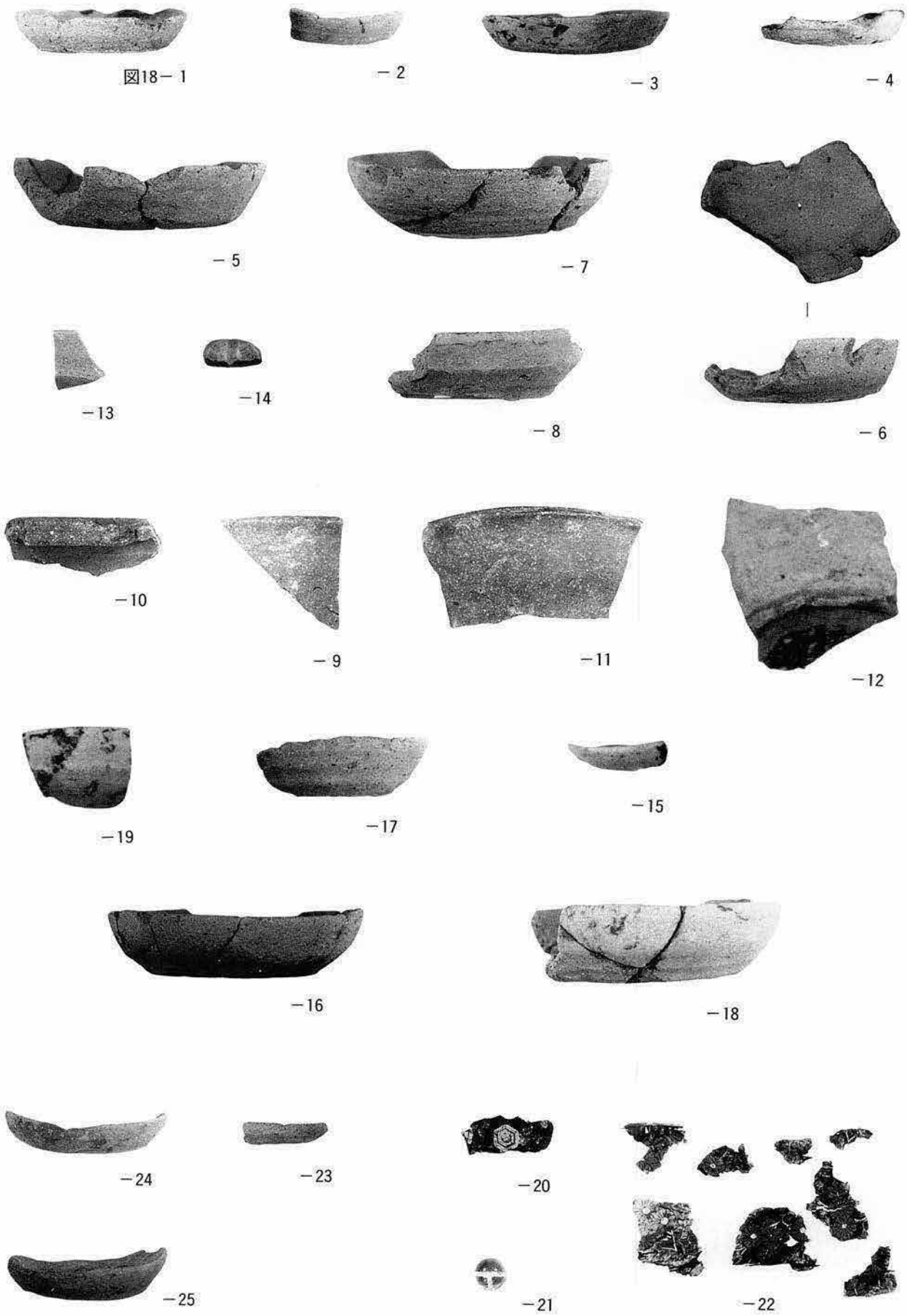
図14－34
－35
－31
－36
－6
－7
－8
－2
－3
－4
図15－1
－9
－10
－5
－15
－17
－16
－19
－20
－18
－24
－21
－22
－23
－14
－12
－13
－11

3面包含層出土の遺物

図版24

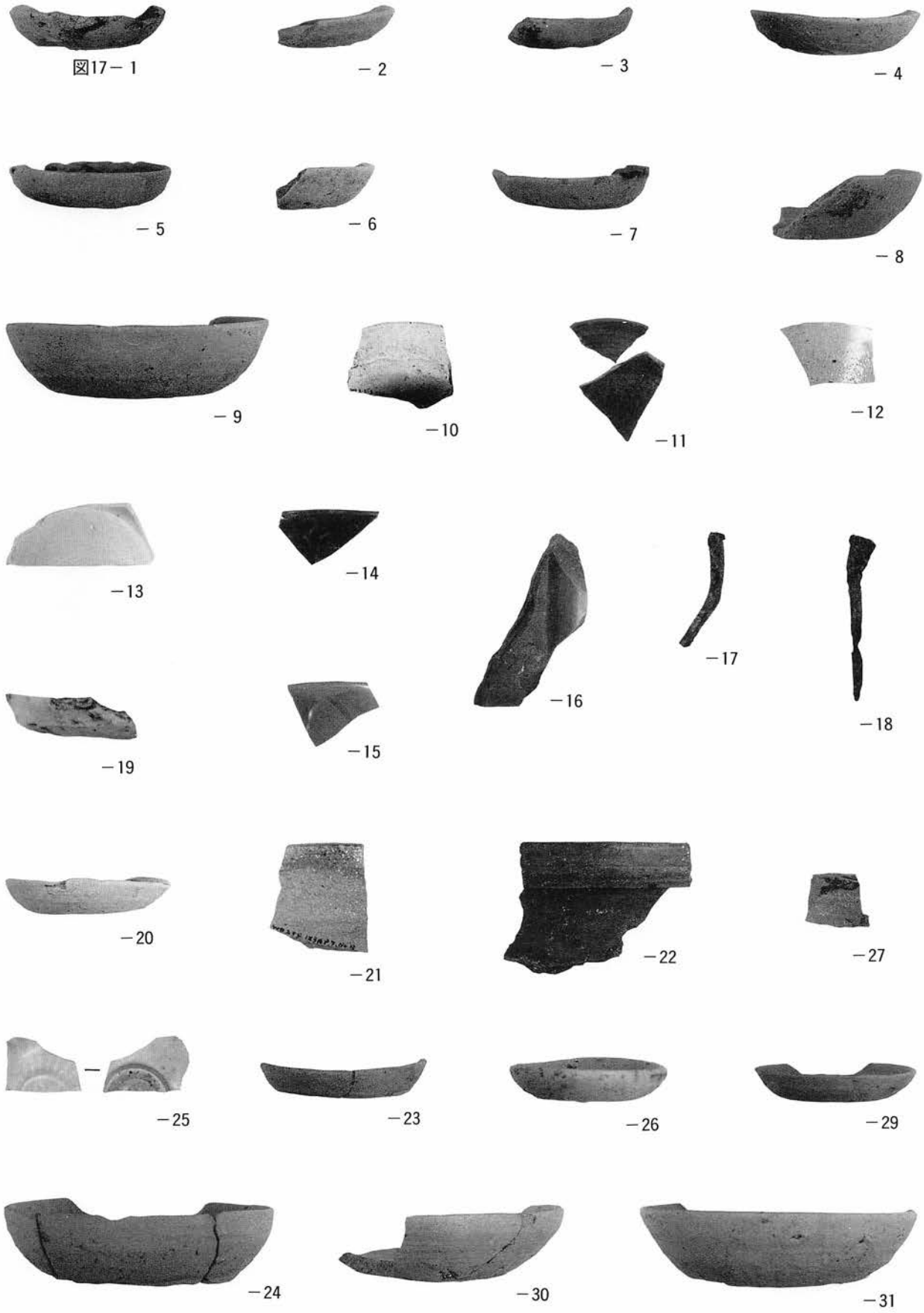


3面溝1の遺物

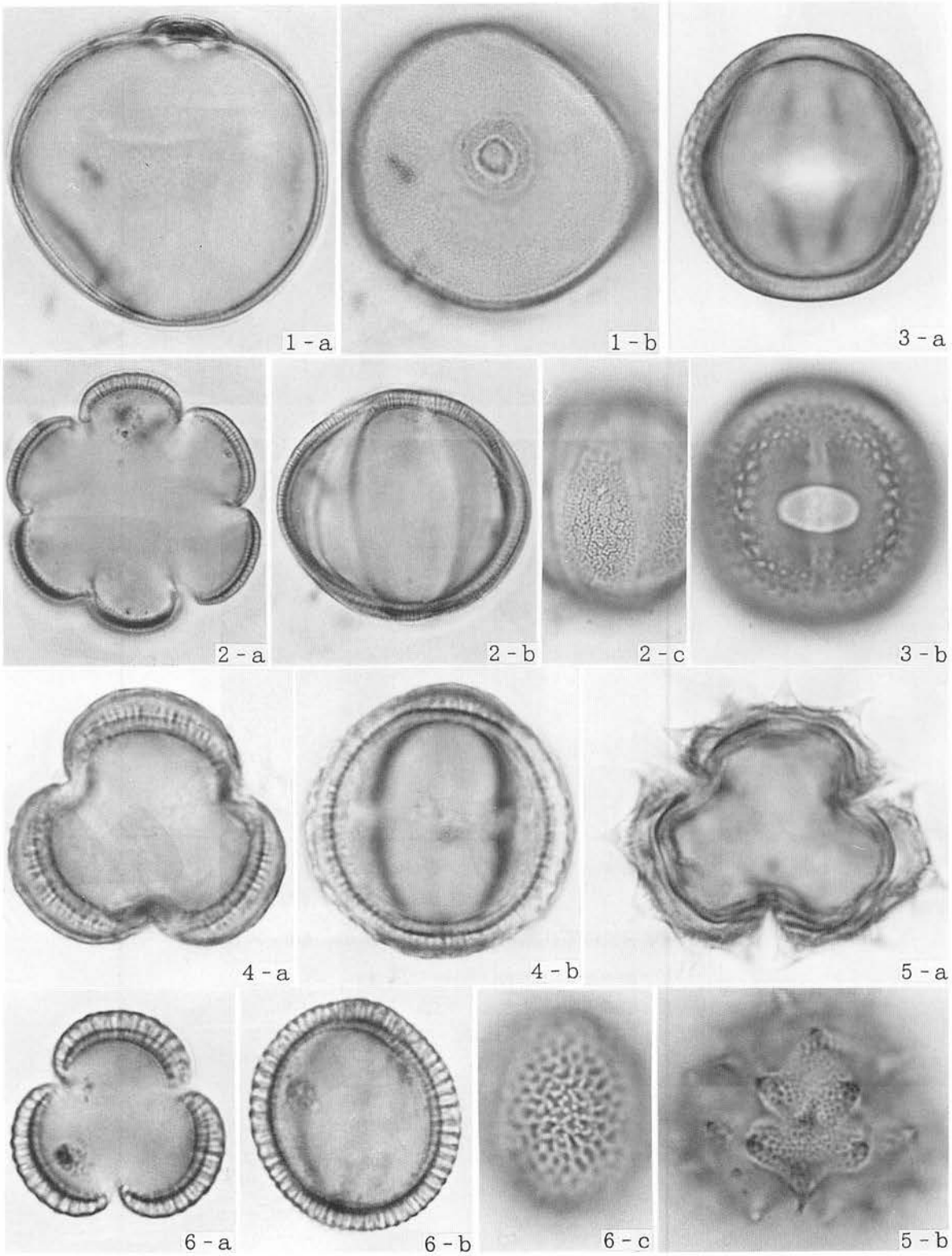


3面遺構の遺物

図版26



3面遺構の遺物

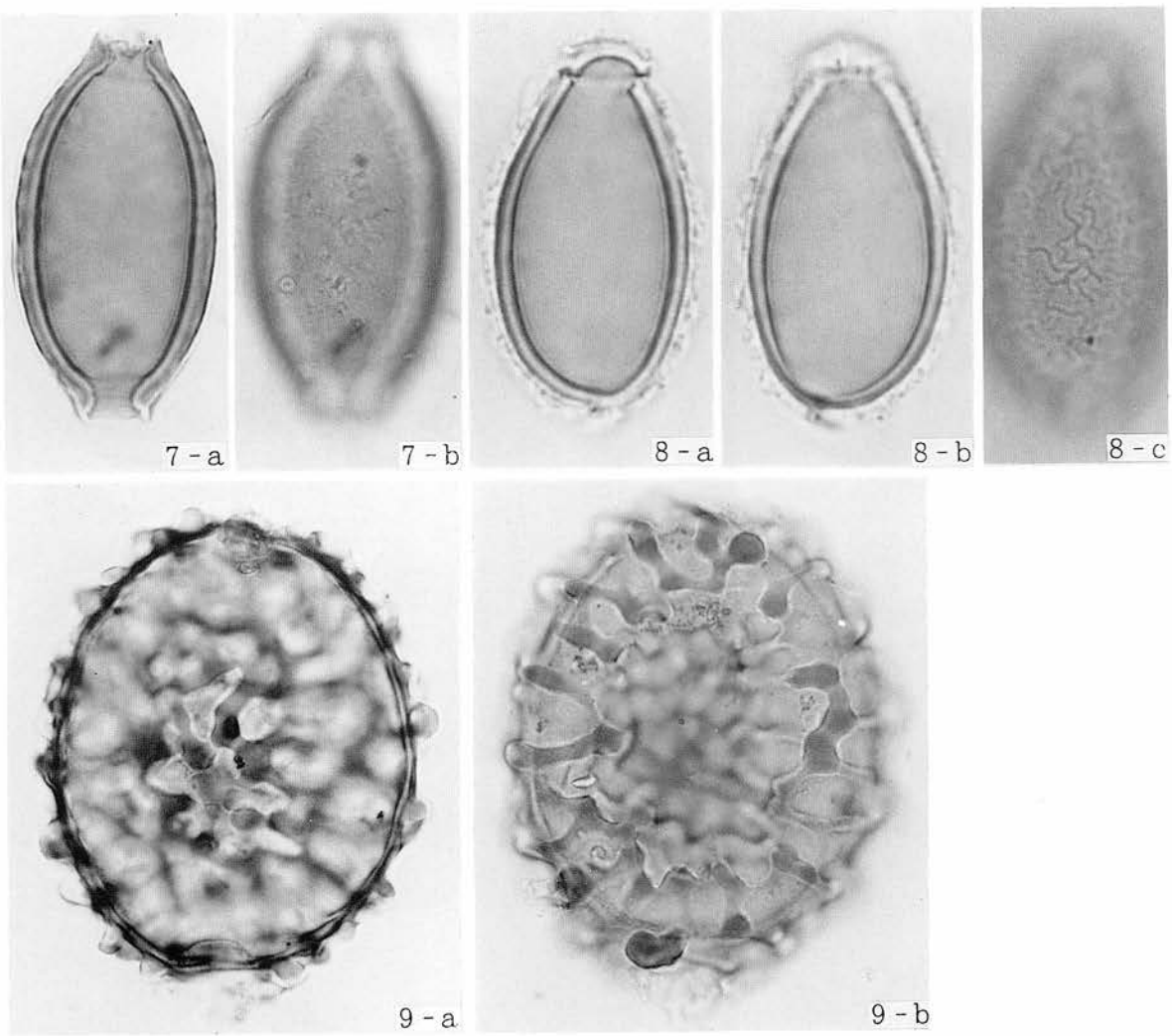


1，2：―――――　　3～6：―――――

図版27　若宮大路周辺遺跡群の花粉化石（scale　bar：20 μm）

1：イネ科　PLC.SS　2351　No. 2
2：シソ科　PLC.SS　2355　No. 4
3：マメ科　PLC.SS　2354　No. 4
4：ヨモギ属　PLC.SS　2350　No. 2
5：他のキク亜科　PLC.SS　2353　No. 4
6：アブラナ科　PLC.SS　2347　No. 1

図版28



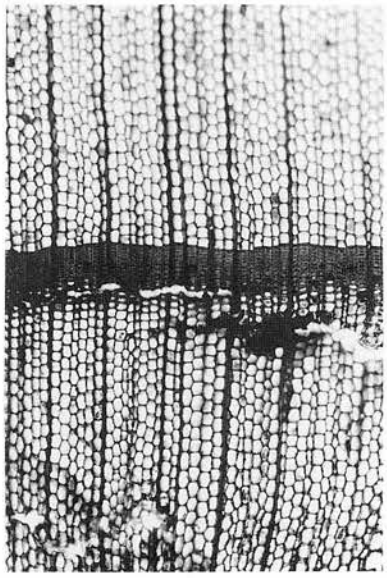
7 : ———　　8 : ———　　9 : ———

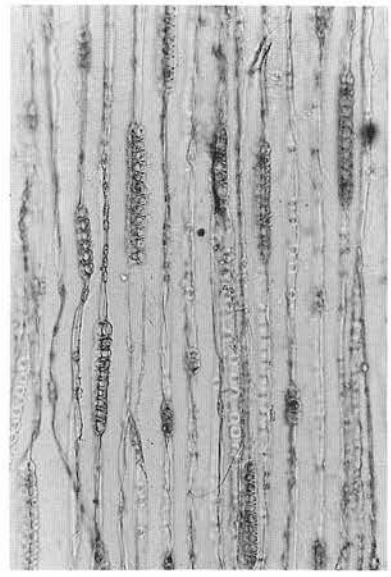
図版28　若宮大路周辺遺跡群の寄生虫卵（scale　bar：20 μm）

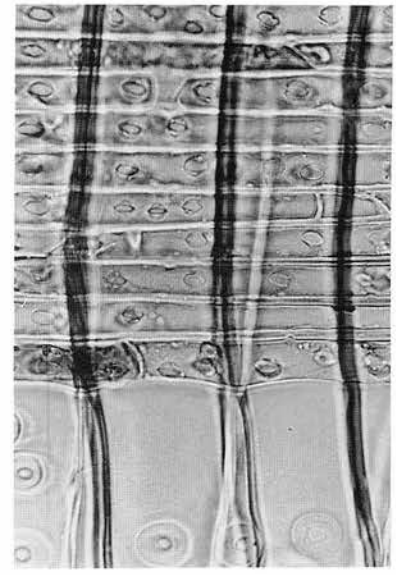
7：鞭虫卵　PLC.SS　2349　No. 2
8：肝吸虫卵　PLC.SS　2348　No. 2
9：回虫卵PLC.SS　2352　No. 2

若宮大路遺跡出土木材顕微鏡写真

Bar：







1 a スギ　bar：1 mm KAN 362　1 b 同 bar：0.4mm　1 c 同 bar：0.1mm

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福田　誠　菊川　泉　神山晶子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
わかみやおおじ しゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	かながわけん かまくらしこまち 神奈川県 鎌倉市小町 二丁目5番8	14204	242	35度 19分 3.7秒	139度 33分 19.6秒	19970428 ～ 19970715	149.36m²	店舗併用住宅 建設に係わる 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路 周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	・掘立柱建物 ・方形竪穴建築址 ・土壙 ・道路 ・塀	・かわらけ ・渥美甕 ・常滑甕 ・木製品 ・漆製品	・道路遺構 ・方形建穴建築址

せきぜんいせき
積善遺跡（No.440）

十二所字積善952番８地点

例　　言

1．本報は、積善遺跡（No.440）の所在する遺跡内の鎌倉市十二所積善952番８地点における緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、個人用住宅に係る車庫造成に先立ち、平成９年５月８日～平成９年６月12日にかけて調査面積29.3m²を対象に実施した。

3．調査体制は、以下の通りである。

調査担当者　原　廣志

調　査　員　須佐直子

調査補助員　秋山哲雄、須佐仁和、早坂伸市

調査協力者　大内宏、山下俊明

協 力 機 関　㈲鎌倉市シルバー人材センター

㈱池田工務店、鎌倉考古学研究所

4．本報の執筆は、第１章を秋山、第２章・第４章を原、第３章を須佐（直）・原がそれぞれ分担し、これを原が編集した。資料整理の作業は執筆者の他、須佐（仁）・早坂があたった。

5．本報掲載の写真は、遺構・遺物ともに須佐仁和が撮影した。

6．す発掘調査における出土遺物、図面・写真等の資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　遺跡位置と歴史的環境 …… 297
第２章　調査の経過と概要 …… 298
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 300
第４章　まとめ …… 318

挿　図　目　次

図１　遺跡周辺図 …… 296
図２　グリット配置図 …… 298
図３　Ⅰ面遺構全図 …… 300
図４　Ⅰ面建物・土壙 …… 301
図５　Ⅰ面上出土遺物 …… 301
図６　Ⅱ面遺構全図 …… 302
図７　Ⅱ面井戸・土壙 …… 303
図８　Ⅱ面上出土遺物 …… 304
図９　Ⅱ面井戸１出土遺物 …… 304
図10　Ⅱ面井戸２出土遺物 …… 304
図11　Ⅱ面土壙・柱穴出土遺物 …… 305
図12　Ⅲ面遺構全図 …… 306
図13　Ⅲ面土壙 …… 307
図14　Ⅲ面遺構・面上出土遺物 …… 307
図15　Ⅳ面遺構全図 …… 309
図16　Ⅳ面土壙・柱穴列 …… 310
図17　Ⅳ面内かわらけ溜り …… 311
図18　Ⅳ面上出土遺物 …… 311
図19　Ⅳ面遺構・トレンチ他出土遺物 …… 312
図20　遺構関係図 …… 318

表　目　次

表１　出土遺物(1) …… 313
表２　出土遺物(2) …… 314
表３　出土遺物(3) …… 315
表４　出土遺物(4) …… 316
表５　出土遺物(5) …… 317

図　版　目　次

図版１ａ．表土掘削風景 …… 321
　　ｂ．Ⅰ面全景
図版２ａ．Ⅱ面全景 …… 322
　　ｂ．Ⅲ面全景
図版３ａ．Ⅳ面全景 …… 323
　　ｂ．調査区東壁土層
図版４ａ．Ⅰ面Ｐ１ …… 324
　　ｂ．Ⅰ面天目茶碗出土状況
図版４ｃ．Ⅱ面土壙２　ｅ．Ⅱ面土壙９
　　ｄ．Ⅱ面土壙８　ｆ．Ⅱ面土壙４
図版５ａ．Ⅲ面石敷遺構　ｂ．Ⅲ面土壙５ … 325
　　ｃ．Ⅳ面土壙２　ｅ．調査区南壁
　　ｄ．Ⅳ面かわらけ溜り
図版６　出土遺物（１） …… 326
図版７　出土遺物（２） …… 327
図版８　出土遺物（３） …… 328

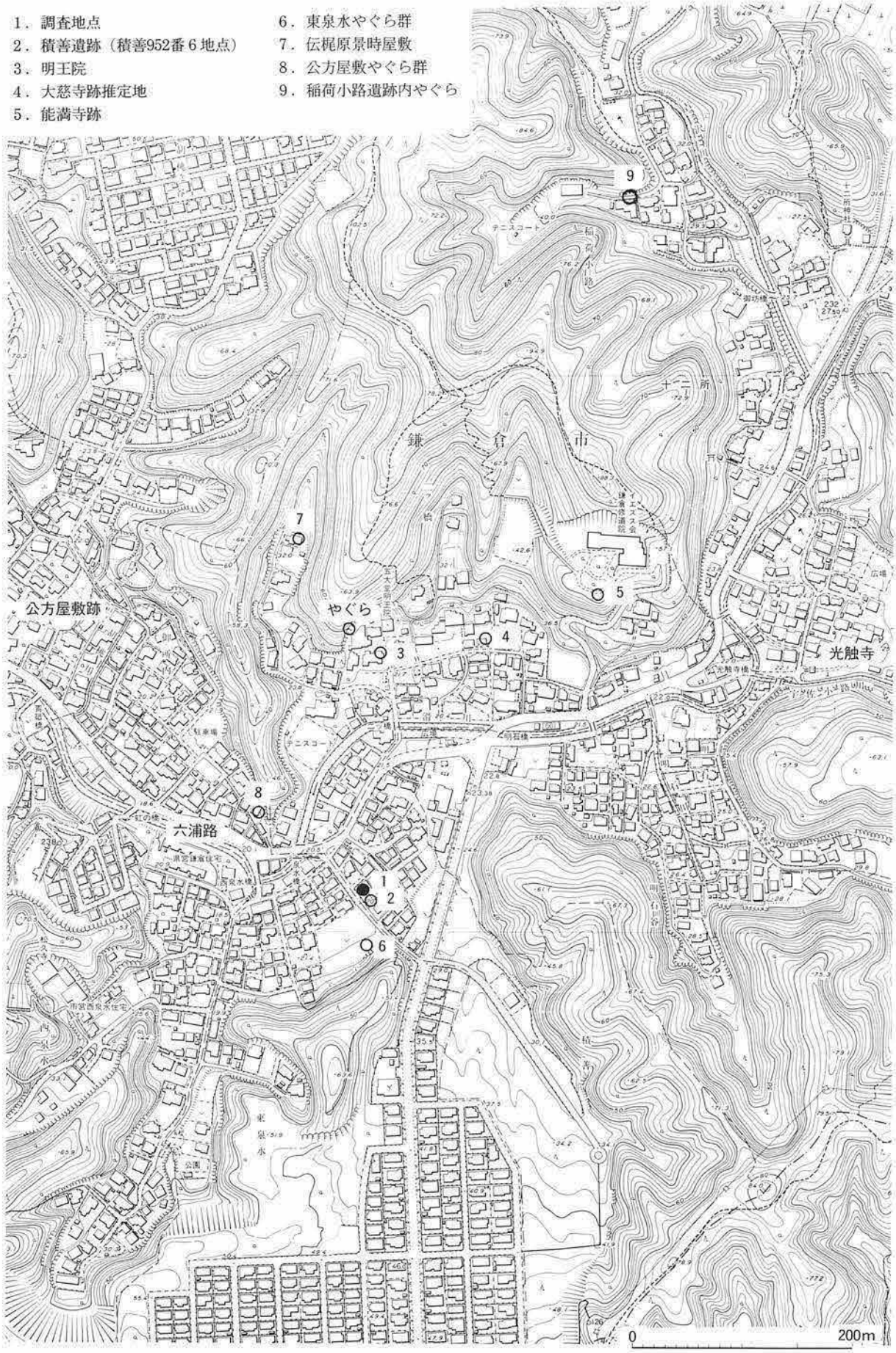

1．調査地点
2．積善遺跡（積善952番６地点）
3．明王院
4．大慈寺跡推定地
5．能満寺跡
6．東泉水やぐら群
7．伝梶原景時屋敷
8．公方屋敷やぐら群
9．稲荷小路遺跡内やぐら
鎌倉市
公方屋敷跡
やぐら
六浦路
光触寺
0
200m

図１　遺跡周辺図

第１章　遺跡位置と歴史的環境

本遺跡は鎌倉市街の東方である十二所地区、滑川中流域の左岸に位置し、ＪＲ鎌倉駅からほぼ真東に約2.2kmの距離にある。滑川は南北の低い丘陵の谷間を西に流れ、調査地点の周辺で何度か六浦道（近世は金沢往還路、現在の県道金沢鎌倉線）と交差して鎌倉市内に流れ込み、由比ケ浜に達する。調査地点は六浦道から約25mほど南に位置し、鎌倉ハイランドの住宅地の入口部の西側にあたり、鎌倉同人会の発行した昭和二年の鎌倉地図には、六浦道から泉水橋を右折して調査地点前を通り、明石山から天台山への尾根道を抜けて逗子の沼間方面に下りる道と、金沢に至る尾根道が描かれている。

六浦道はもじどうり武蔵国六浦へと通じる道であり、六浦津から海路で房総半島にまで到るという東海道の一部であった。ここは頼朝入府以前からの鎌倉における主要道路であり、現在の寿福寺にあったと伝えられる義朝の館は、この六浦道と、武蔵国府へとつながる現今小路との交差点という要地を占めていたと考えられている（馬渕　1994）。荏柄天神社、杉本寺など、頼朝以前からの存在が想定される寺社もこの道沿いであり、その重要性を窺わせる。頼朝が鎌倉に入ると御所をおいた大蔵の地もやはり六浦道沿いであり、御家人達の屋敷も周辺に建てられた。本遺跡周辺にも、梶原景時や大江広元の屋敷跡という伝承の残る地があり、その真偽は措くとしても、御家人クラスの武士が居館を構えていたであろうことは疑いない。三代将軍の源実朝が大慈寺を、四代将軍の頼経が明王院を当遺跡の北東に建立したこともその傍証となろう。東方には当時の鎌倉における西の境界と考えられた光触寺がある。

鎌倉幕府が滅び、南北朝時代となって以降も当遺跡周辺には武士が居館を構えていたようで、泉水橋の北側には「公方屋敷」の字が残り、鎌倉公方の屋敷跡と考えられている。本地点東側の山裾には東泉水やぐら群があり、本遺跡周辺の霧ケ沢や明石ケ谷に大小やぐら群が展開している（吉田他　1990）。

以上のように本遺跡周辺は、頼朝以前からの重要路である六浦道に沿っており、鎌倉の境界域に近接し、鎌倉時代を通じて御家人達の邸宅が建ち並ぶ地域であり、その状況は室町時代にまで続いていたようである。

《参考文献》

高柳光寿　1959『鎌倉市史』総説編　吉川弘文館

赤星直忠　1959『鎌倉市史』考古編　吉川弘文館

貫　達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』　有隣堂

馬渕和雄　1983「鑢ケ谷北遺跡」同遺跡発掘調査団及び1994「武士の都鎌倉－その成立と構想をめぐって－」網野善彦・石井　進『中世の風景を読む－２』　新人物往来社

山田邦明　1992「室町時代の鎌倉」　五味文彦編『都市の中世』吉川弘文館

秋山哲雄　1997「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』106編９号

原　廣志・秋山哲雄・須佐直子　1998「積善遺跡　十二所積善952番６地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14－平成９年度発掘調査報告（第２分冊）－』鎌倉市教育委員会

吉田章一郎・田代郁夫・原　廣志　1990「十二所稲荷小路遺跡内やぐら－平成元年度鎌倉市十二所地区内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書－」　同遺跡発掘調査団

第２章　調査の経過と概要

調査の経過

平成９年、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談をうけ本調査地点が昨年度に発掘調査を実施した地点の北隣地であった。昨年度の調査結果から地表下50cm以下に遺構面が遺存しているため、車庫範囲

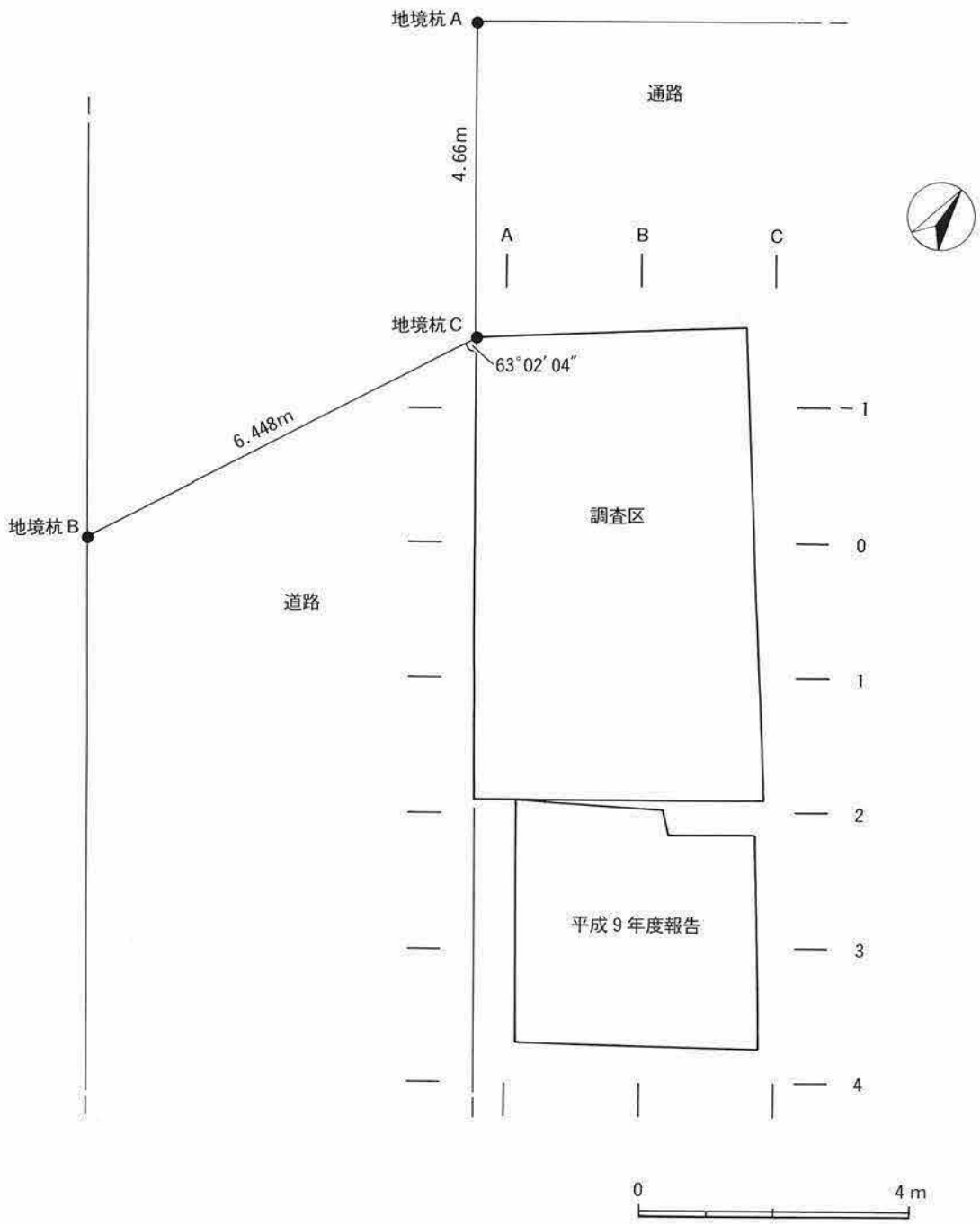


図２　グリット配置図

の工事深度を対象として発掘調査を実施するはこびとなった。

発掘調査は、平成９年５月８日に表土及び耕作土の約60cmを重機で掘削することから開始された。調査地点前は道路が狭いため付近住民への配慮と安全を考慮に入れながら、調査進行に伴う排土を搬出処理することになった。途中、数日の降雨に見舞われたが、規定工事深度まで調査して記録保存を行い、同年６月12日までに現地調査を終了した。

先年、南隣地の車庫部分を調査したので、グリット設定に際しては同一方眼で調査区内を２mに区割りした。従って、南北方向は前回と同じ西からＡ～Ｃの順でアルファベットを付したが、東西方向は前回北から１～４の名称を与えたので、今回の調査では南から１・０・－１の変則的な算用数字を名称とした。各区画の名称は北西隅の交点杭を与えている。

グリット設定は当初、鎌倉市４級基準点を周辺から捜し出し、グリットとの位置関係を明らかにする予定でいた。しかし周辺の４級基準点は道路舗装工事等の影響で誤差がかなり認められ、これを断念した。従って、グリットは調査区西側の道路との境界線に位置した２点の地界杭を結んだ直線と、道路を挟んだ地界杭１点の距離と角度を測り、それを図２に示した。グリット南北軸方位はＮ－36°20′－Ｗである。レベル原点は鎌倉ハイランド入口に近い鎌倉市１級水準点（ＢＭ.36 Ｌ＝23.3825m）を調査区内に移動した。以下、文章中及び図のレベル数値はすべてその海抜高で示している。

調査の概要

調査区内の層序は、六浦路にあたる北側と西側の道路に向かって緩やかに傾斜した地形で地業層や包含層に多少の厚薄が認められたが、概ね平成９年度調査報告の南隣地に近い状況を呈していた。なお、車庫造成に伴う工事掘削の根切底以下については、調査区北東隅にサブトレンチを設定してⅣ面より下層の生活面や包含層の確認を実施した。その結果、現地表下約170cm～195cmで茶褐～茶灰色粘質土の中世基盤層にあたる地山と推定される堆積土が検出された。

今回の調査で発見された遺構は、概ね以下に記したとおりである。

Ⅰ面　現地表下約70cm前後で検出、海抜標高は調査区東壁の南端で20.78m・北端で20.62mを計り、厚さ10～20cmの土丹版築による地業層で構成される。

遺構：掘立柱建物１棟＜建物１＞確認規模は２間分の柱穴列、柱間は196cm。土壙１基・柱穴14口。

Ⅱ面　現地表下約80～90cmで検出、海抜標高は調査区東壁の南端で20.60m・北端で20.45mを計り、厚さ10～20cmの土丹と凝灰岩質砂岩粒による地業層で構成される。

遺構：井戸２基・土壙10基・柱穴７口。

Ⅲ面　現地表下約90cm～100cmで検出、海抜標高は調査区東壁の南端で20.45m・北端で20.35mを計り、厚さ20～35cmのローム状のブロックと土丹粒による厚い地業層で構成される。

遺構：土壙10基・石敷遺構１基・柱穴14口。

Ⅳ面　現地表下130cm前後で検出、海抜標高は調査区東壁の南端で20.15m・北端で20.05mを計り、厚さ10cm前後のかわらけ片や凝灰岩質砂岩粒による地業層で構成される。

遺構：柱穴列１条・土壙４基・かわらけ溜り遺構１ヶ所。

第３章　検出遺構と出土遺物

Ⅰ面検出遺構・出土遺物

建物１（図４）

調査区東壁に沿って検出された掘立柱建物、主体は東側に延びていて規模不明である。柱間は196cmで２間分が確認された。各柱穴は径40～50cmの楕円形で、深さ20～30cm、東端柱穴には土丹塊が据えられていた。出土遺物は建物に伴う良好な資料は出土していない。

土壙１（図４）

調査区北東隅で調査区外に拡がり、Ｐ13に切られる形で検出された。形状は楕円形と推定され、規模

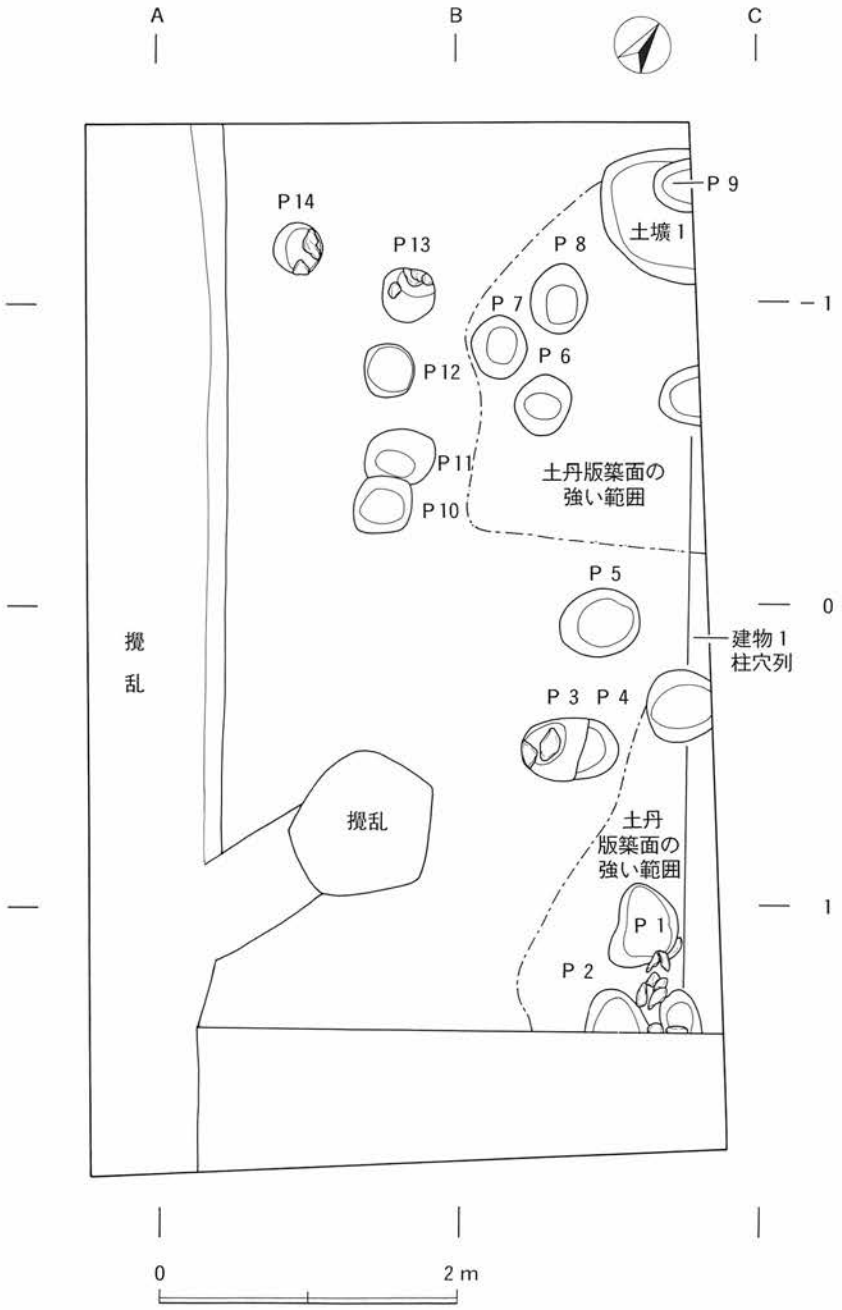


図３　Ⅰ面遺構全図

は長径93cm以上、短径85cm、深さ30cmである。覆土は暗茶褐色砂質土で炭化物ゃ凝灰岩質砂岩粒を多く含んでいる。出土遺物は、かわらけ細片だけで図示できるものはない。

柱穴（図３・５）

柱穴は14口が検出されたが建物を構成するような状況ではなかった。Ｐ１は径40cm×53cm、深さ35cmの楕円形を呈し、暗茶灰色砂質土の締まりのない覆土である。出土遺物はロクロ成形のかわらけ大皿。

Ｉ面上及び包含層からは、かわらけ、青磁、瀬戸天目茶碗、銭などの遺物が出土した。

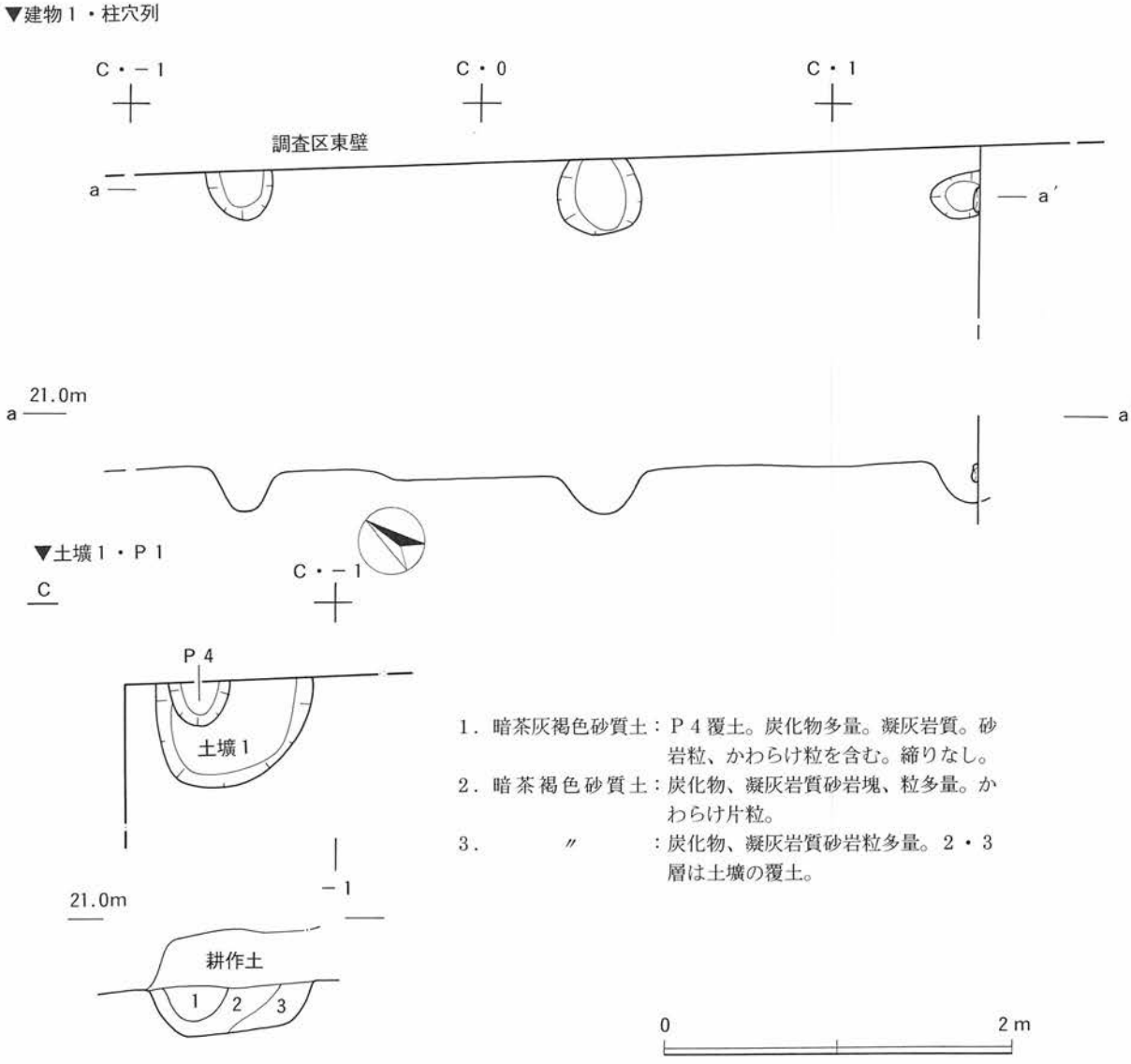


図４　Ｉ面建物・土壙

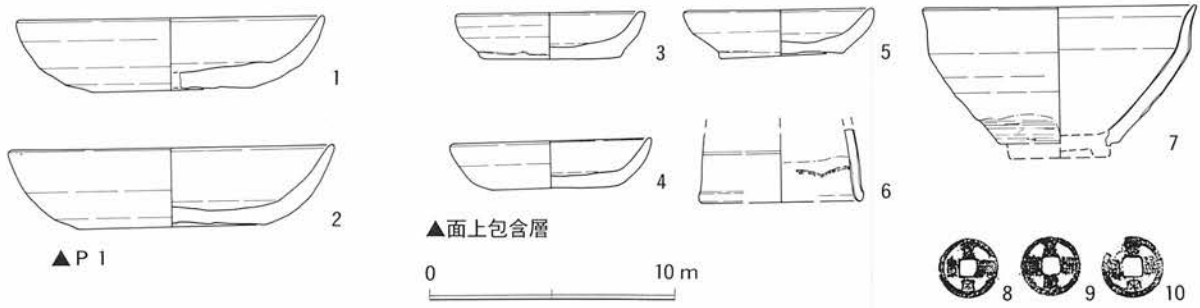


図５　Ｉ面出土遺物

II面検出遺構・出土遺物

土壙２（図７）

Ｂ－０グリットに位置し、Ｐ９の一部を壊す小型土壙である。楕円形を呈し、規模は長径78cm、短径56cm、深さ25cmの浅い皿状、覆土は炭化物の多い暗灰褐色土、低面から常滑甕片が出土した。

土壙４・５（図７）

土壙２北側で重複する土壙２基を検出した。２基とも楕円形を呈し、規模は新しい土壙４が長径65cm、短径53cm、深さ30cm、土壙５が長径65cm、短径45cm以上、深さ27cm程である。出土遺物には土壙４がかわらけ小皿、土壙５がかわらけ大小皿、瓦質手焙りなどである。

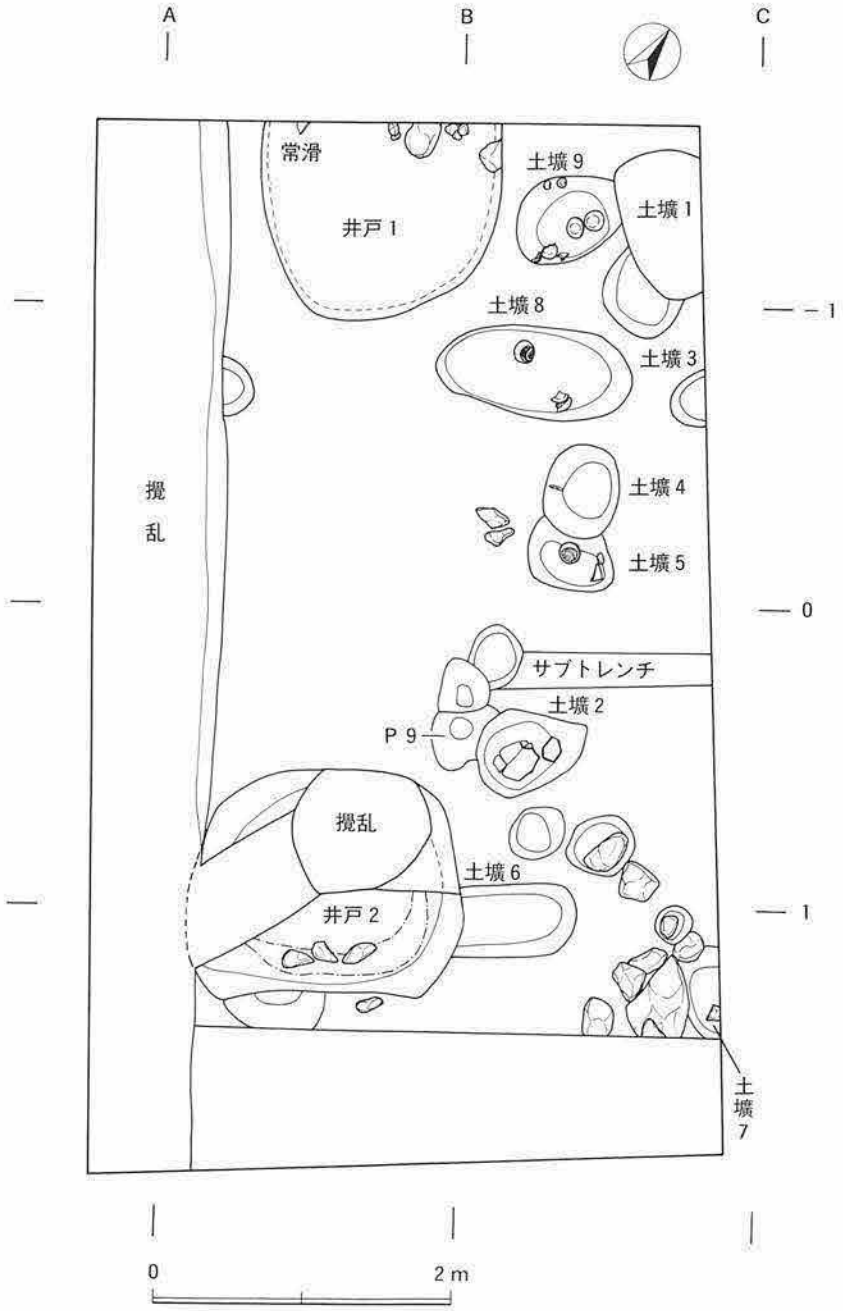


図６　II面遺構全図

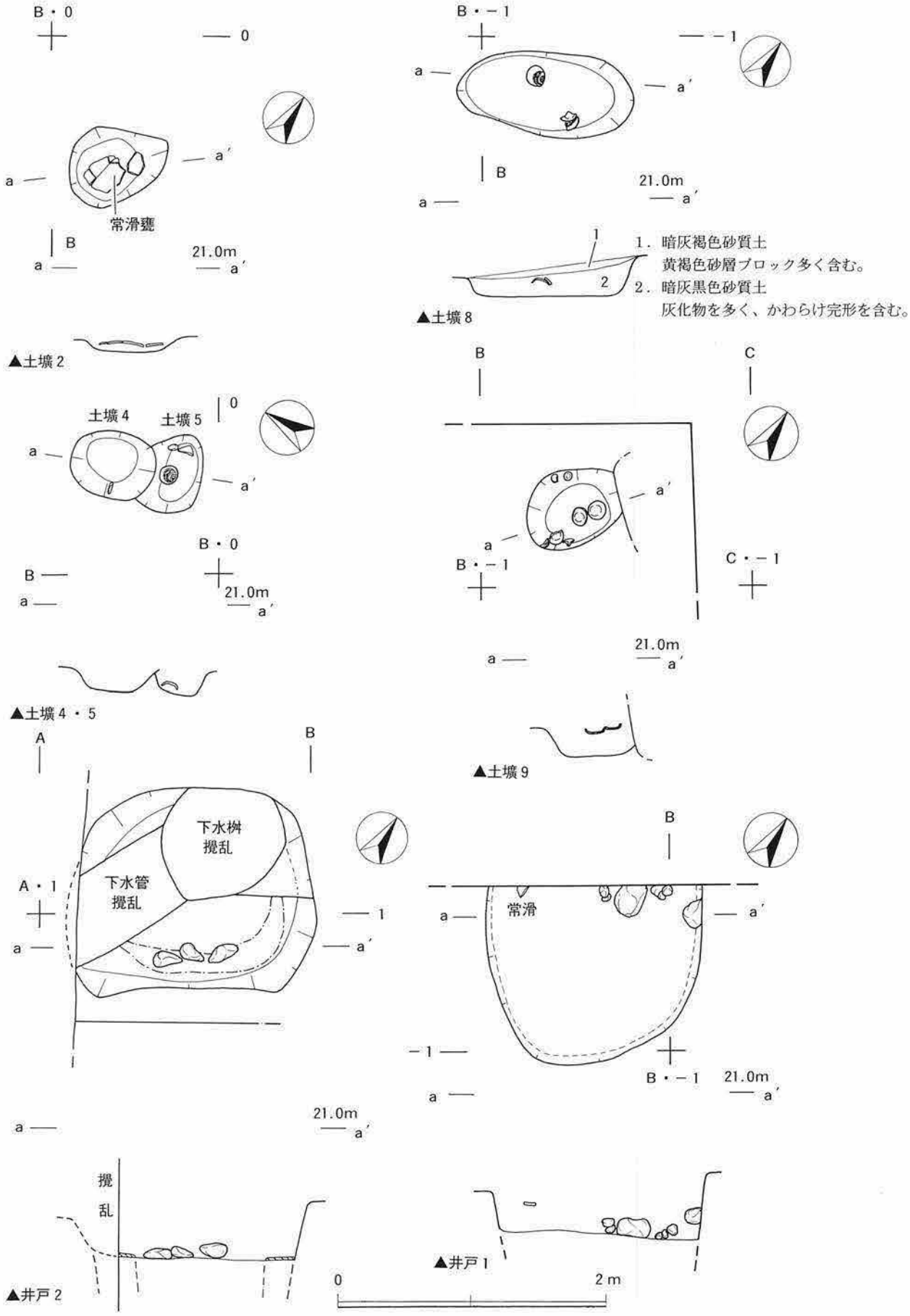

B・0
0
a
a′
常滑甕
B
21.0m
▲土壙2
B・−1
−1
21.0m
1
2
1．暗灰褐色砂質土
黄褐色砂層ブロック多く含む。
2．暗灰黒色砂質土
灰化物を多く、かわらけ完形を含む。
▲土壙8
土壙4
土壙5
▲土壙4・5
C
C・−1
▲土壙9
A
A・1
下水桝
撹乱
下水管
撹乱
常滑
▲井戸2
▲井戸1
0
2m

図7　II面井戸・土壙

土壙８（図７）

Ｃ－－１グリットに位置した楕円形を呈する土壙である。規模は長径135cm、短径63cm、深さ30cmの浅い皿状である。覆土は上層が暗灰褐色土、下層が暗灰黒色砂質土で低面近くから完形品を含めてかわらけの大皿５個体が出土した。

土壙９

Ｃ－－２グリットに位置し、土壙１に一部壊された小型土壙である。楕円形を呈し、規模は長径75cm以上、短径56cm、深さ26cmである。覆土中からかわらけの大小皿や滑石製温石が出土した。

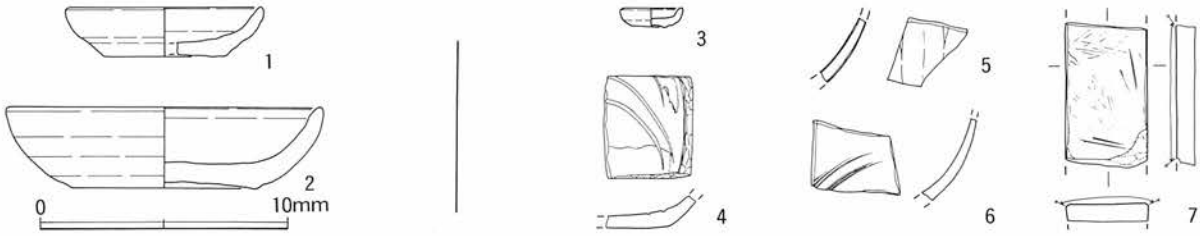


図８　II面上出土遺物

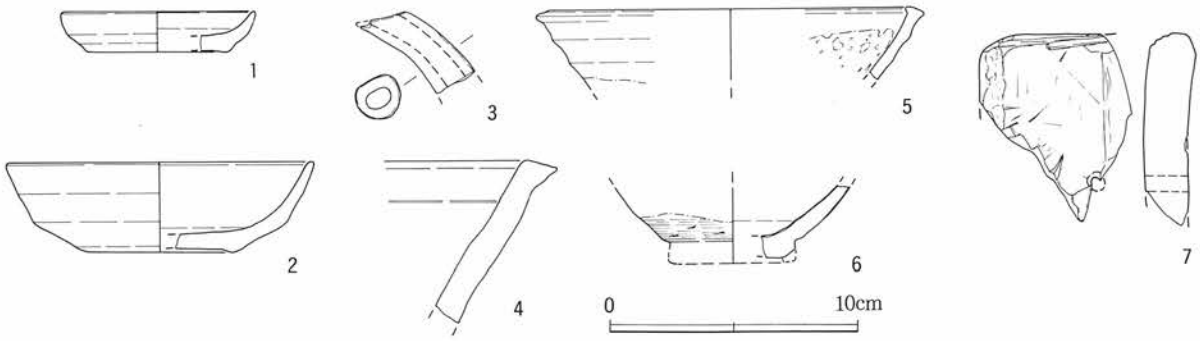


図９　II面井戸１出土遺物

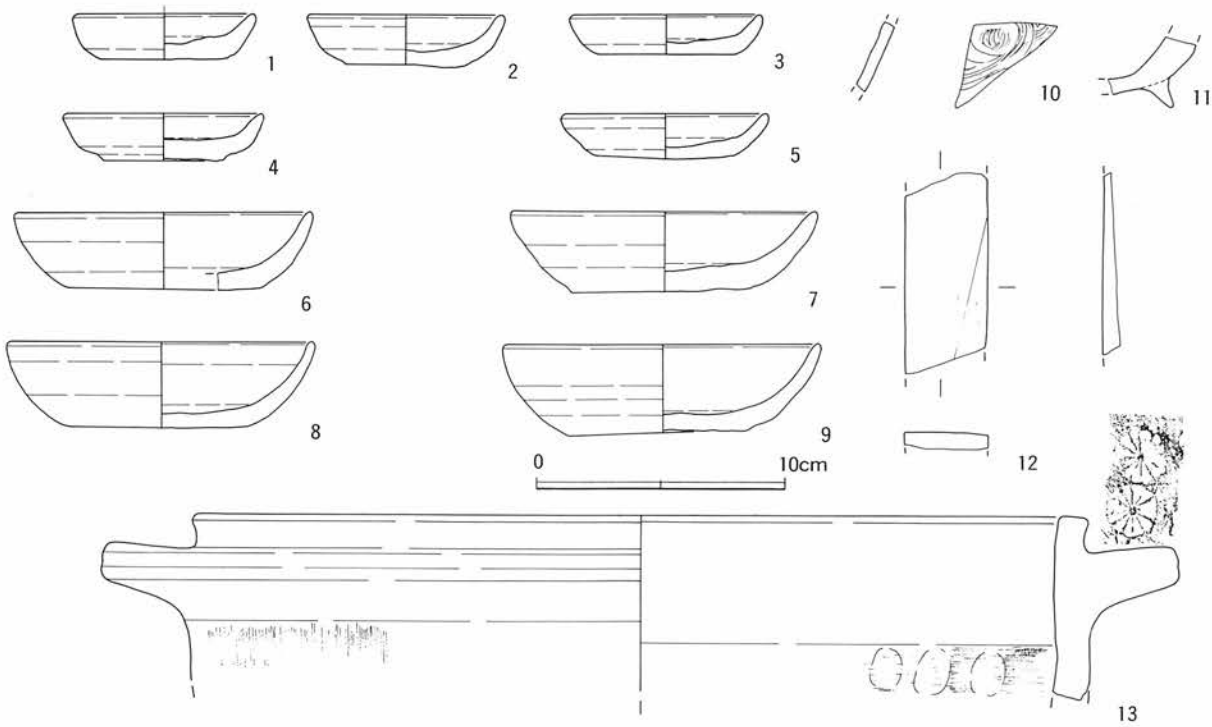


図10　II面井戸２出土遺物

井戸１（図７）

調査区北壁中央の位置で、調査区外に拡がる井戸状の掘り方を持った遺構を検出した。工事掘削深度と安全対策を考慮して完掘していない。確認規模は東西160cm、南北130cm以上、深さ70cm以上を測り、掘り方は隅丸方形を呈する。出土遺物はロクロ成形かわらけ大・小皿、白磁水注、瀬戸天目茶碗・卸皿、常滑捏鉢、滑石製温石などである。

井戸２（図７）

調査区南西隅の位置で検出した。下水槽や下水管による撹乱で大半が破壊されており、下水槽は調査時も使用されていたので安全を考慮して完掘していない。

確認規模は東西180cm以上、南北175cm、深さ1.5m以上を測り、掘り方は隅丸方形を呈する。井戸枠は確認されていないが、一辺１m程の範囲で井戸枠を思わす炭化物やかわらけを多く含んだ覆土が確認された。出土遺物はロクロ成形かわらけ大・小皿、青白磁梅瓶、手焙りなどである。

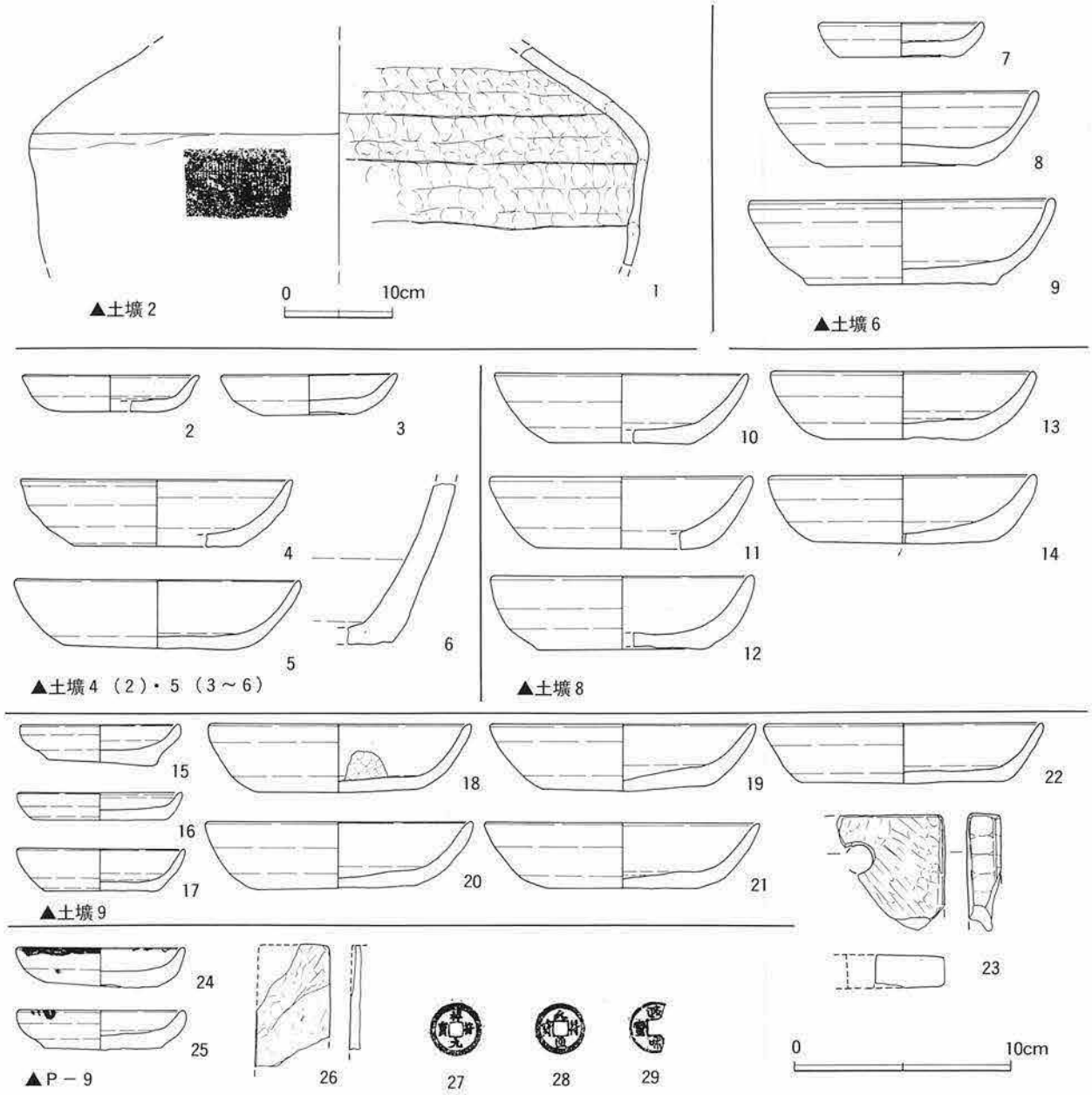


図11　II面土壙・柱穴　出土遺物

Ⅲ面検出遺構・出土遺物

土壙２（図13）

Ｃ－－１グリットに位置し、Ｉ面の土壙１に一部を壊される。規模は長径110cm、短径90cm以上、深さ40cmを計り、楕円形を呈した断面が擂鉢状の土壙である。覆土は炭化物・褐鉄分を多量に含んだ暗茶褐色系で、ロクロ成形のかわらけ大小皿が出土した。

土壙４・５（図13）

Ｂ－０グリット杭の東側に位置し、土壙５は土壙４に一部を壊される。土壙５は、規模が長径90cm以上、短径78cm、深さ36cmを計り、楕円形を呈した断面が擂鉢状の土壙である。覆土は大小土丹塊・炭化物を多量に含んだ暗褐色系で、遺物は鎬蓮弁文青磁碗・銭と、この他に実測不可能なロクロ成形の

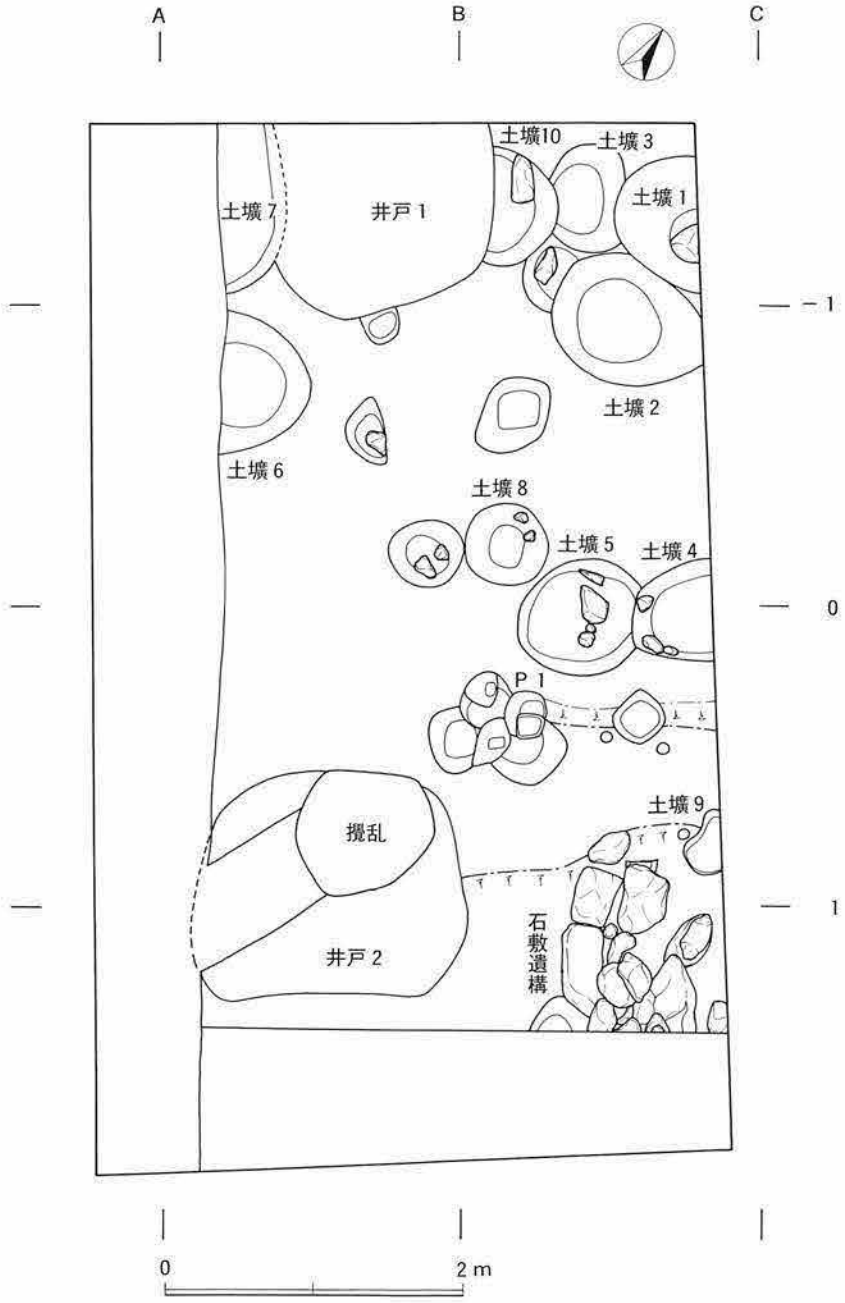


図12　Ⅲ面遺構全図

かわらけ小片多く出土した。

土壙４は東側調査区外に拡がり、規模が長径65cm以上、短径65cm、深さ35cmである。覆土は炭化物・褐鉄分を多く含んだ暗茶褐色土、良好な遺物は出土していない。

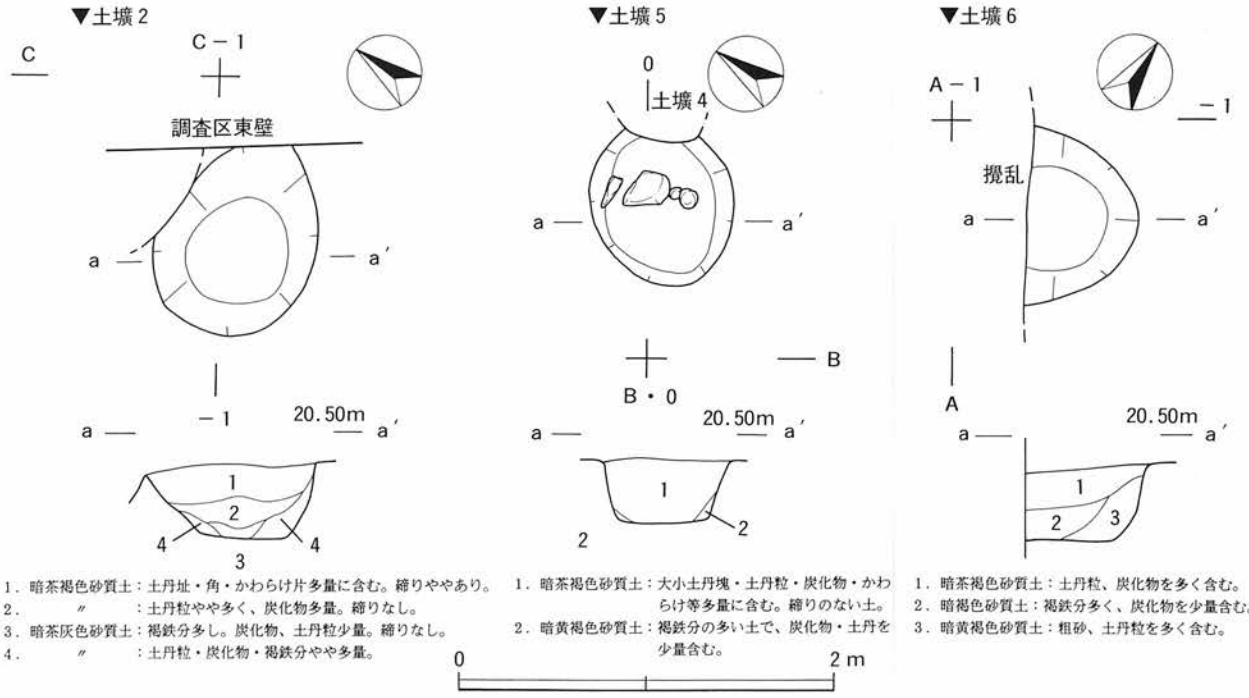


図13　Ⅲ面土壙

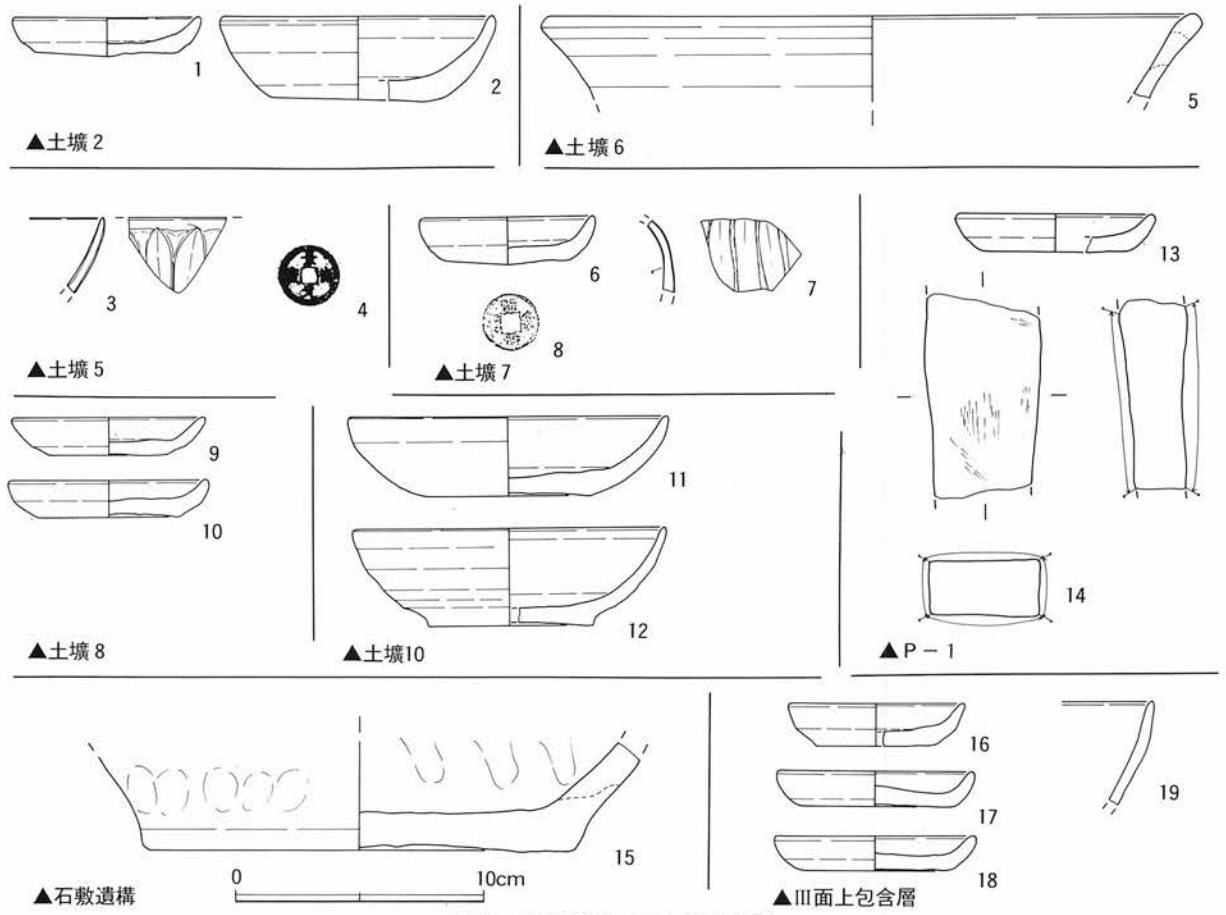


図14　Ⅲ面遺構・面上出土遺物

土壙６（図13）

Ａ－－１グリット杭の東側に位置し、西側調査区外に拡がる。規模は長径90cm、短径60cm以上、深さ42cm、楕円形を呈した土壙である。覆土は褐鉄分・炭化物を多く含み、遺物に山茶碗窯系捏鉢口縁とロクロ成形のかわらけ小片が出土した。

土壙７（図12）

調査区北西隅に位置し、西半分を撹乱に東側一部が井戸１に壊される。規模は長径115cm以上、短径50cm以上、深さ30cm、楕円形を呈した土壙と推定される。良好な遺物は出土していない。

土壙８（図12）

Ｂ－０グリット杭の北側に位置する。規模は径55cm程、深さ45cm、円形を呈した土壙である。覆土は炭化物の多い茶褐色砂質土、良好な遺物は出土していない。

土壙10（図12）

調査区北東隅に位置し、西半分を井戸１に壊される。規模は長径80cm以上、短径45cm以上、深さ30cm、円形と推定される土壙である。良好な遺物は出土していない。

石敷遺構（図12）

調査区南東隅、井戸２東側の位置で鎌倉石と土丹塊による石敷きの遺構を検出した。この石敷きは調査区壁で観察する限り東・南側の調査区外に拡がっている。調査区内での範囲は南北1.3m、東西1.1m程で、南北方向に長軸を合わせた鎌倉石切石や扁平の土丹塊で構成されたものを地業中に据えている。この石敷きを建物の土台といったような建物基礎に係る遺構との関係も想像できるが、確証は得られていない。石の表面は赤変して脆くなり火災を受けた可能性が高い。遺物は石敷きに挟まれる形で常滑甕の低部片が出土している。

Ⅳ面検出遺構・出土遺物

柱穴列（図16）

Ｂラインの東側に沿って南北方向に５間分が検出された。南端は１ライン手前で終わるが北側は調査区外に延びている可能性がある。確実な柱穴の並びが６口しか確認されておらず、柱間は85～95cm前後の間隔で並んでいるが、柱穴が直径30～45cm、深さ30cm内外とややばらつき見られる。規模から考えて、建物に伴う目隠し塀のようなものであろうか。各柱穴からは図示できるような良好な遺物は出土していない。

土壙１（図16）

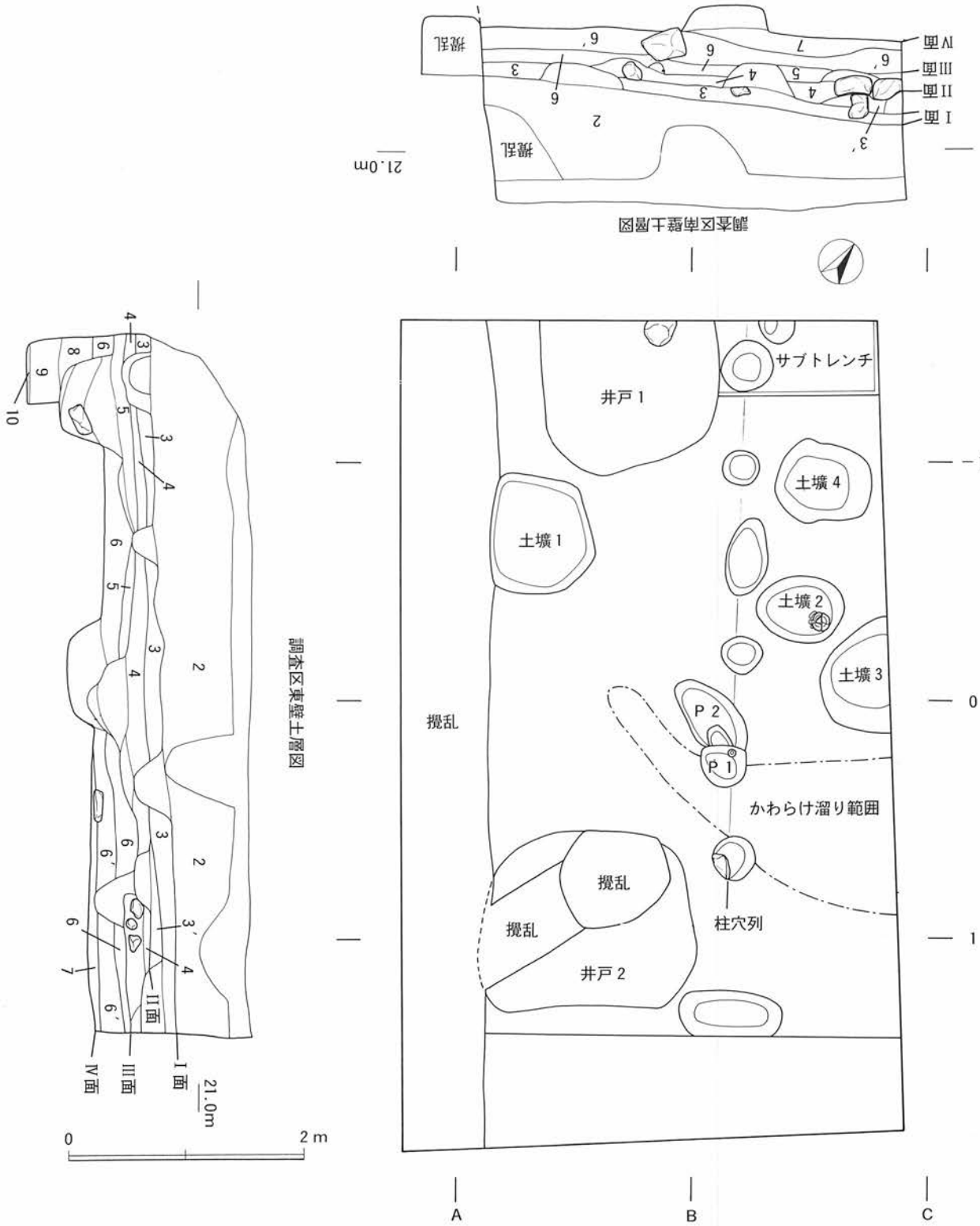
Ａ－１グリット杭の南東側に位置する。規模は長軸100cm、短軸85cm、深さ24cm、不整形で断面が皿状を呈した土壙である。覆土は黄褐色砂質土ブロックを含んだ暗灰褐色土、遺物はロクロ成形のかわらけ小皿が出土した。

土壙２（図16）

Ａ－－１グリット杭の北東側に位置する。規模は長径75cm、短径55cm、深さ30cm、楕円形を呈した小形の土壙である。覆土は炭化物を多く含んだ暗灰褐色砂質土の二層で構成される。遺物は土壙底面近くから単弁の鎬蓮弁文青磁碗とロクロ成形のかわらけ大皿が出土した。

土壙３（図16）

土壙２の東隣した位置で検出した。東半分は調査区外に拡がっており、全体規模は不明である。
大きさは現状で南北径１m、東西径60cm以上、深さ35cmを計り、楕円形を呈した大型の土壙と推定さ



1．表土
2．明茶褐色砂質土：畑耕作土
3．茶褐色砂質土：土丹角・粒、炭化物、かわらけ粒多い・Ⅰ面構築土。
3′．　〃　：3層より土丹角、炭化物多い。
4．暗茶褐色砂質土：土丹角、凝灰岩質砂岩粒多い。締りあり。Ⅱ面構築土。
5．暗緑灰色砂質土：凝灰岩質砂岩の地業層、締りあり。6層・6′層上に部分的に残る。
6．明茶灰色粘質土：ローム状ブロック、土丹角を多く含む。締り強い。
6′．　〃　：6層よりローム状ブロック少ない。締り強い。
Ⅲ面構築土
7．暗茶灰褐色砂質土：かわらけ、かわらけ粒、炭化物、粗砂多い。
8．暗茶灰色砂質土：凝灰岩質砂岩粒多量に含む。褐鉄分多い。Ⅳ面構築土。
9．暗茶褐色粘質土：土丹粒、砂岩粒、下位に炭化物多め。中世地山。
10．暗茶灰色砂質土：山砂、砂岩塊を多量に含む。
8～10層は、サブトレンチにて確認した。

図15　Ⅳ面遺構全図

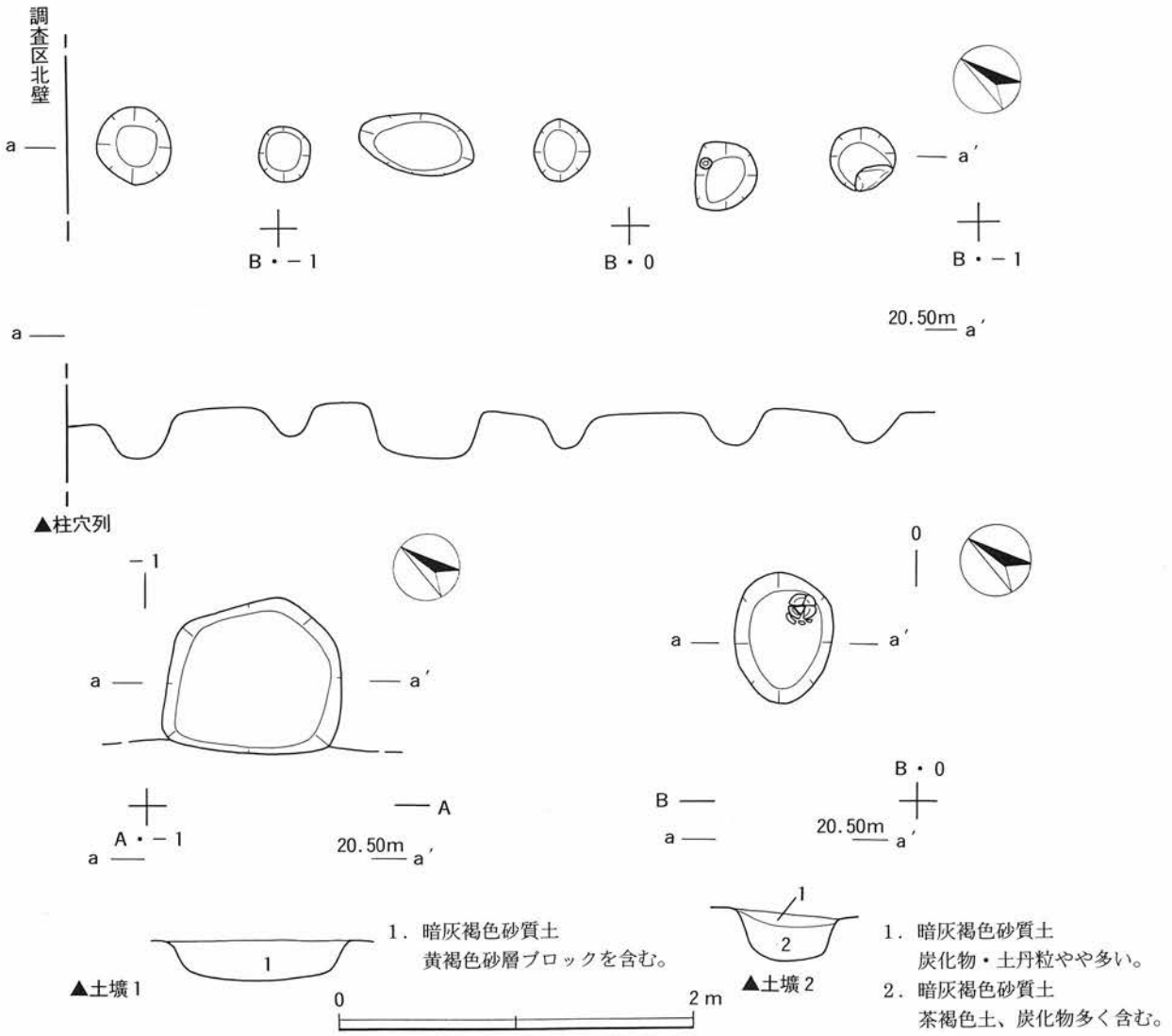


図16　Ⅳ面土壙・柱穴列

れる。覆土はローム状ブロックをやや多く含んだ茶灰色粘質土、遺物はロクロ成形のかわらけ小片が出土したが、図示できる資料はなかった。

土壙4（図15）

調査区北東に位置する。規模は長径80cm、短径70cm、深さ35cm程、不整形を呈した土壙である。覆土はローム状ブロックを含んだ締りのある茶灰色粘質土、図示可能な遺物は出土していない。

かわらけ溜り遺構（図15・17）

A・B－0グリットの位置で検出された。かわらけ溜り遺構は、土壙などの掘り込みをもつ遺構に伴うものではなく、面上に口兀白磁皿・常滑甕の低部片と、かわらけ30個体以上が散在した状況で検出された。なお、かわらけ溜り遺構に伴うかわらけの法量は表4・5に示したとおりであり、また図17にある丸囲い数字番号は、図19－4～33資料の下に記した丸囲い数字番号と一致している。

かわらけはすべて糸切り底のロクロ成形であった。かわらけ法量を概観すると、小皿は口径7.3～8.0cm、底径5.0～6.0cm、器高1.4～2.0cm前後、大皿は口径12.3～13.0cm、底径7.5～8.5cm、器高3.3cm前後である。この他に口径10.8～11.5cm、底径6.5～7.5cm、器高3.0cm前後の大皿よりひと回り小さい規格の中形品が認められた。

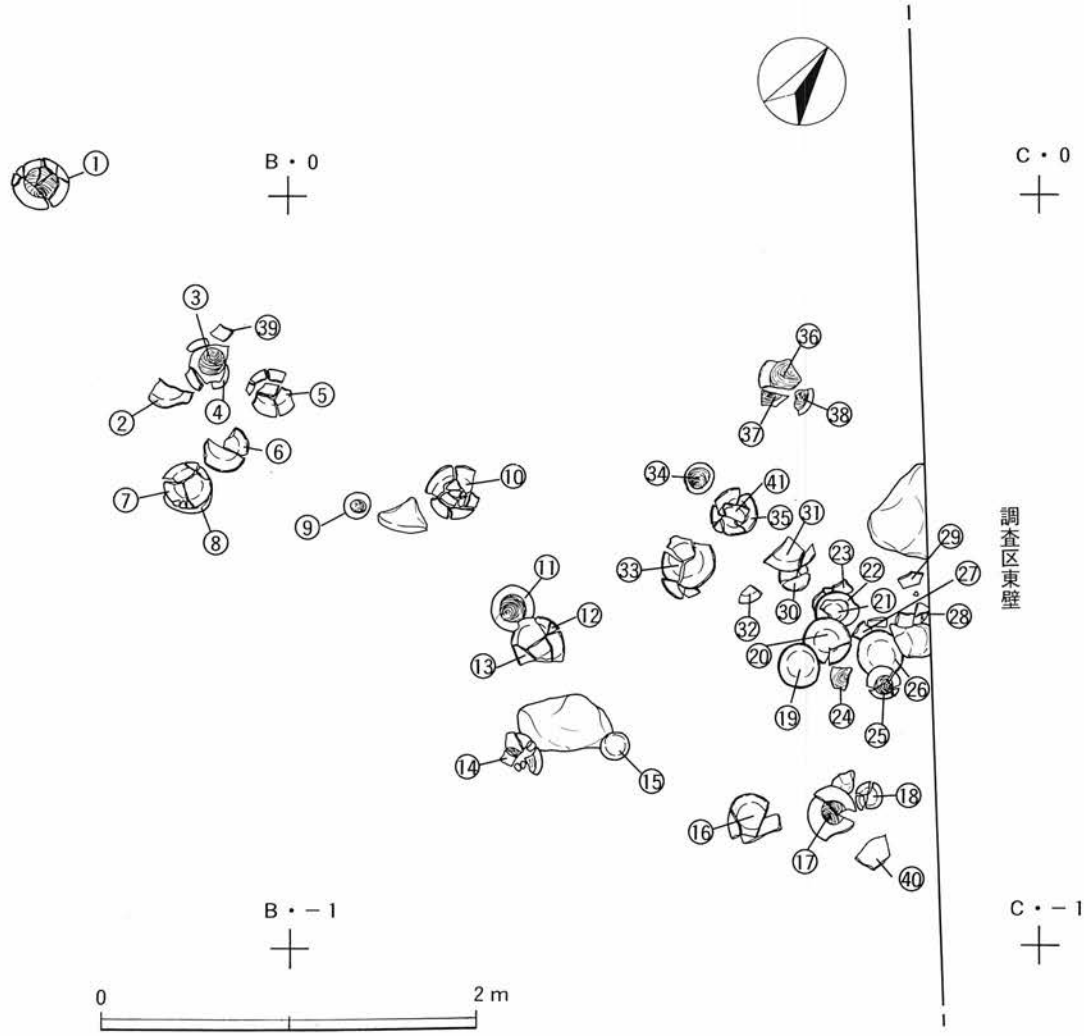


図17　Ⅳ面かわらけ溜り

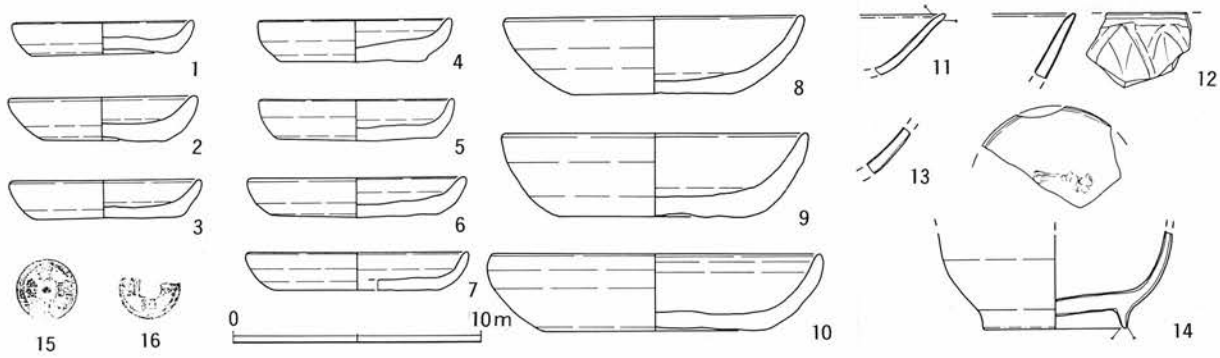


図18　Ⅳ面上出土遺物

サブトレンチ（図15）

Ⅳ面の遺構を調査した後、施主の方の協力を得て調査区北東隅の壁に沿って1.4×0.7m長方形の範囲で深さ約70cmを掘り下げ、Ⅳ面以下の土層堆積の確認を実施した。Ⅳ面は凝灰岩小塊と砂岩粒で整地された厚さ30cmほどの地業層であった。その下は暗茶褐色粘質土の中世地山（上面の標高約19.9m）がみられ、これを除去すると締りのある山砂と砂岩小塊の無遺物層が確認できた。

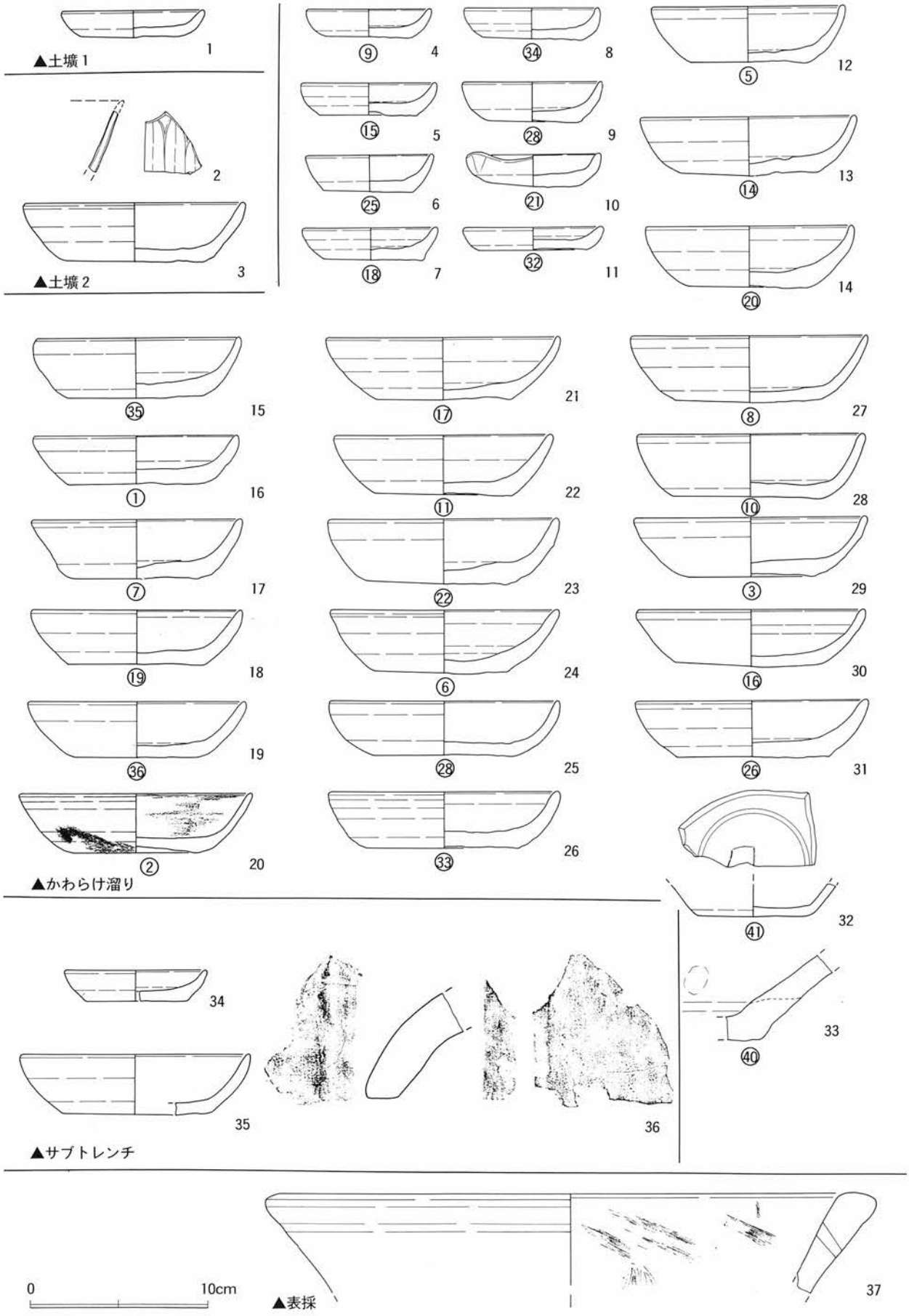


図19　Ⅳ面遺構・トレンチ他出土遺物

図5　I面出土遺物		a．法量　b．成形　c．胎土・素地　d．色調・釉薬　e．備考
1	かわらけ	a．口径12.4cm　底径6.5cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　d．淡橙灰色
2	かわらけ	a．口径12.9cm　底径7.7cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．橙色
3	かわらけ	a．口径7.4cm　底径5.4cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡橙灰色
4	かわらけ	a．口径7.9cm　底径4.8cm　器高2.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡橙色
5	かわらけ	a．口径7.6cm　底径5.0cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡橙灰色
6	青磁　高坏か	a．高台径6.0cm　c．白色　緻密　d．灰緑色　不透明　気泡多く含む　e．龍泉窯系高坏部分か
7	瀬戸天目茶碗	a．口径11.0cm　c．堅緻　c．口縁部茶褐色、体部黒褐色
8	銭	皇宋通宝　篆書　北宋　初鋳1039年
9	銭	皇宋通宝　篆書　北宋　初鋳1039年
10	銭	皇宋通宝　篆書　北宋　初鋳1039年
図8　II面上出土遺物		
1	かわらけ	a．口径7.8cm　底径4.9cm　器高2.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙灰色
2	かわらけ	a．口径12.6cm　底径7.5cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
3	瀬戸　入子	a．口径2.4cm　底径1.7cm　器高0.8cm　c．黄灰白色　緻密
4	三彩　盤	c．灰褐色　砂粒多い粗胎　d．内面のみ黄釉と緑釉を薄く施釉　e．内底弧状の沈線文　外底露胎
5	青磁　碗	c．灰白色　緻密　d．淡青白色　不透明　e．外面鎬蓮弁文　龍泉窯系
6	青磁　碗	c．灰白色　緻密　d．淡黄灰色　透明　e．内面櫛描文　同安窯系
7	砥石	a．残存長5.9cm　残存幅3.3cm　厚0.8cm　d．黄白色　e．細かな擦痕あり
図9　II面井戸1出土遺物		
1	かわらけ	a．口径7.8cm　底径7.7cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡燈色
2	かわらけ	a．口径12.4cm　底径6.0cm　器高3.6cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．明燈色
3	白磁　水注	c．白色　緻密　d．青味白色　不透明
4	常滑　摺鉢	c．暗燈色　砂粒　長石粒　石英粒　d．橙色
5	瀬戸　卸皿	a．口径14.9cm　c．黄灰白色　やや緻密　d．淡灰緑色　透明
6	瀬戸天目茶碗	a．底径(4.3)cm　c．白色　堅緻　d．黒褐色
7	温石	a．残存幅6.2cm　厚1.8cm　b．体部片を小刀で加工　中央に小孔　e．表面細かな擦痕多し
図10　II面井戸2出土遺物		
1	かわらけ	a．口径7.2cm　底径5.0cm　器高1.8cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
2	かわらけ	a．口径7.8cm　底径4.8cm　器高2.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．黄灰色
3	かわらけ	a．口径7.6cm　底径5.5cm　器高1.6cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．黄灰色
4	かわらけ	a．口径8.0cm　底径4.9cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．黄灰色
5	かわらけ	a．口径8.2cm　底径5.6cm　器高1.8cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．黄灰色
6	かわらけ	a．口径12.4cm　底径7.8cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙灰色
7	かわらけ	a．口径12.3cm　底径7.2cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．黄灰色

表1　出土遺物（1）

8	かわらけ	a．口径12.3cm　底径7.0cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤・黒色粒　d．橙灰色
9	かわらけ	a．口径12.6cm　底径7.2cm　器高3.4cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤・黒色粒　d．橙灰色
10	青白磁梅瓶	c．灰白色　堅緻　d．水色　不透明　e．渦巻文を配す
11	山茶碗窯捏鉢	b．貼り付け高台胎土　c．砂粒　石英粒　石英粒　小石　d．灰色
	砥石	a．残存長7.3cm　幅3.4cm　残存厚0.7cm　d．灰緑色
13	瓦質手焙り	b．鍔付　c．砂粒　小石粒　d．暗灰色　e．鍔上面に菊花文スタンプ
図11　II面土壙・柱穴出土遺物		
1	常滑　甕	a．低部径57.8cm　c．黒灰色　砂粒　長石　石英　d．茶灰色　降灰部淡灰緑色　f．外低砂目
2	かわらけ	a．口径8.0cm　底径4.6cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡灰橙色
3	かわらけ	a．口径7.9cm　底径4.2cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤粒　d．淡橙色
4	かわらけ	a．口径13.0cm　底径8.1cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤粒　d．橙灰色
5	かわらけ	a．口径12.4cm　底径7.6cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．黄灰色
6	土器質手焙り	c．淡橙灰色　砂粒　小石　雲母　赤色粒　d．　暗灰色　e．外低砂目
7	かわらけ	a．口径7.4cm　底径5.6cm　器高1.6cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
8	かわらけ	a．口径12.4cm　底径7.0cm　器高3.4cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
9	かわらけ	a．口径14.0cm　底径8.8cm　器高3.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
10	かわらけ	a．口径11.9cm　底径6.6cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
11	かわらけ	a．口径12.2cm　底径7.8cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
12	かわらけ	a．口径12.2cm　底径8.0cm　器高3.4cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
13	かわらけ	a．口径12.2cm　底径7.0cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
14	かわらけ	a．口径12.3cm　底径8.3cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　黒・赤粒　d．橙灰色
15	かわらけ	a．口径7.3cm　底径5.0cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
16	かわらけ	a．口径7.4cm　底径6.1cm　器高1.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色調
17	かわらけ	a．口径7.5cm　底径5.2cm　器高2.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
18	かわらけ	a．口径12.2cm　底径7.7cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
19	かわらけ	a．口径12.3cm　底径7.6cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
20	かわらけ	a．口径12.2cm　底径7.4cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
21	かわらけ	a．口径12.7cm　底径7.1cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．暗橙色
22	かわらけ	a．口径12.8cm　底径9.5cm　器高2.8cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．淡橙色
23	温石	a．残長5.4cm　厚さ1.6cm　孔径1.2cm　b．滑石鍋の低部片を小刀で加工
24	かわらけ	a．口径7.8cm　底径5.2cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．淡橙色
25	かわらけ	a．口径7.7cm　底径5.4cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙褐色　e．灯明皿
26	砥石	a．残長5.8cm　幅3.4cm　b．仕上砥　d．暗桃色　f．片面剥離するため使用痕は上面のみ
27	銭	祥符元宝　北宋　初鋳1008年

表２　出土遺物（２）

28	銭	元符通宝　北宋　初鋳1098年
29	銭	政和通宝　北宋　初鋳1111年
図14　Ⅲ面遺構・面上出土遺物		
1	かわらけ	a．口径7.7cm　底径5.6cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．淡橙色
2	かわらけ	a．口径11.3m　底径6.4cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙灰色
3	青磁　碗	b．外面鎬蓮弁文　c．灰白色　堅緻　d．淡青灰色　薄目施釉
4	銭	景徳元宝　北宋　初鋳1004年
5	山茶碗窯捏鉢	a．口径27.1cm　c．砂粒　長石粒　石英粒　d．灰～暗灰色
6	かわらけ	a．口径7.2cm　底径5.2cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡橙色
7	青白磁　小壺	b．型作り　胴部瓜形文様　c．淡灰白色　緻密　d．淡青灰色　透明
8	銭	熙寧元宝　北宋　初鋳1068年
9	かわらけ	a．口径7.8cm　底径4.8cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
10	かわらけ	a．口径8.1cm　底径5.7cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
11	かわらけ	a．口径13.1cm　底径6.8cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
12	かわらけ	a．口径12.8cm　底径6.7cm　器高3.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙褐色
13	かわらけ	a．口径8.2cm　底径5.8cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
14	砥石	a．残長8.3cm　幅4.7cm　厚2.6cm　d．緑味灰白色　e．各面使用　泥岩質
15	常滑　甕	a．底径17.6cm　c．砂粒　長石粒　石英粒　雲母　d．橙灰色　芯部暗灰色　f．外低砂目
16	かわらけ	a．口径7.1cm　底径4.9cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
17	かわらけ	a．口径7.9cm　底径6.1cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
18	かわらけ	a．口径8.2cm　底径6.1cm　器高1.4cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
19	瀬戸　碗	c．灰白色　堅緻　d．淡灰緑色
図18　Ⅳ面上出土遺物		
1	かわらけ	a．口径7.3cm　底径5.9cm　器高1.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
2	かわらけ	a．口径7.7cm　底径5.1cm　器高1.8cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙色
3	かわらけ	a．口径7.8cm　底径5.9cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙灰色
4	かわらけ	a．口径7.8cm　底径5.2cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．淡橙色
5	かわらけ	a．口径7.8cm　底径6.4cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
6	かわらけ	a．口径8.7cm　底径6.7cm　器高1.6cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．淡灰橙色
7	かわらけ	a．口径8.9cm　底径6.6cm　器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
8	かわらけ	a．口径12.2cm　底径6.6cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
9	かわらけ	a．口径12.4cm　底径7.8cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
10	かわらけ	a．口径13.6cm　底径8.9cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
11	白磁　皿	b．口兀皿　c．灰白色　堅緻　d．青味灰白色　不透明
12	青磁　碗	b．外面鎬蓮弁文　c．灰白色　堅緻　d．灰緑色　不透明　やや厚目施釉　e．龍泉窯系

表３　出土遺物（３）

13	青磁　碗	b．無文　c．灰白色　堅緻　d．暗灰緑色　不透明　やや厚目施釉　e．龍泉窯系
14	青磁　皿	a．高台径5.7cm　b．折腰　c．灰白色　d．暗灰緑色　半透明　畳付露胎　f．見込印花文
図19　Ⅳ面遺構・トレンチ他出土遺物		
1	かわらけ	a．口径8.0cm　底径5.6cm　器高1.6cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙色
2	青磁　碗	b．外面鎬蓮弁文　c．淡灰色　緻密　d．青緑半透明　やや厚目施釉　e．龍泉窯系
3	かわらけ	a．口径12.3cm　底径7.8cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
4	かわらけ	a．口径7.1cm　底径4.8cm　器高1.6cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．明橙色
5	かわらけ	a．口径7.6cm　底径5.4cm　器高1.8cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡褐色
6	かわらけ	a．口径7.2cm　底径5.0cm　器高1.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　赤色粒　d．暗橙色
7	かわらけ	a．口径7.6cm　底径5.6cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
8	かわらけ	a．口径7.8cm　底径5.7cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
9	かわらけ	a．口径8.0cm　底径5.2cm　器高2.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
10	かわらけ	a．口径7.7cm　底径4.9cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
11	かわらけ	a．口径8.0cm　底径6.1cm　器高1.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙灰色
12	かわらけ	a．口径11.0cm　底径6.6cm　器高2.9cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
13	かわらけ	a．口径12.2cm　底径7.8cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．明橙灰色
14	かわらけ	a．口径11.8cm　底径6.8cm　器高3.4cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．淡褐色
15	かわらけ	a．口径11.9cm　底径7.8cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．暗橙色
16	かわらけ	a．口径11.7cm　底径7.7cm　器高2.8cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
17	かわらけ	a．口径11.8cm　底径7.4cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．明橙灰色
18	かわらけ	a．口径11.9cm　底径7.7cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
19	かわらけ	a．口径12.4cm　底径7.0cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
20	かわらけ	a．口径13.0cm　底径7.2cm　器高3.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡褐色
21	かわらけ	a．口径13.1cm　底径7.5cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
22	かわらけ	a．口径12.9cm　底径7.7cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
23	かわらけ	a．口径13.0cm　底径7.9cm　器高3.4cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
24	かわらけ	a．口径13.0cm　底径7.7cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
25	かわらけ	a．口径13.1cm　底径7.8cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
26	かわらけ	a．口径13.0cm　底径7.6cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
27	かわらけ	a．口径13.3cm　底径8.2cm　器高3.5cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙色
28	かわらけ	a．口径12.9cm　底径8.2cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．橙灰色
29	かわらけ	a．口径13.1cm　底径7.4cm　器高3.2cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．明橙灰色
30	かわらけ	a．口径13.0cm　底径8.3cm　器高3.0cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
31	かわらけ	a．口径13.0cm　底径8.3cm　器高3.1cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．淡橙色
31	白磁　皿	a．底径6.2cm　b．口兀皿　c．白色　緻密　d．青味淡灰色半透明

表4　出土遺物（4）

33	常滑　甕	c．砂粒　長石粒　石英粒　d．橙灰色　芯部暗灰色　f．外低砂目
34	かわらけ	a．口径8.0cm　底径5.6cm　器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　赤粒　d．橙灰色
35	かわらけ	a．口径12.9cm　底径8.3cm　器高3.3cm　b．ロクロ　c．微砂　雲母　白針　d．明橙灰色
36	男瓦	a．厚さ2.3cm　b．凸面縄目叩き後、刷消し　凹面細かな布目痕　c．灰褐色　微砂　小石　d．淡黒灰色
37	土器質手焙り	a．口径34.4cm　b．鉢形　内面刷毛目　c．微砂　雲母　d．灰褐～灰黒色

表5　出土遺物（5）

第4章　ま　と　め

今回の調査では、発掘面積の狭少さや調査深度の規則の問題があったにも係らず、鎌倉時代後期から南北朝期にかけての4面以上の生活面が連続して営まれていた様子が窺え、多量の遺物を検出することができた。また昨年度報告の東側に位置した調査地点の調査成果も合わせて以下、調査によって得られた結果をもとに、周辺の歴史的環境も含めいくつか気づいた点を指摘し、まとめにかえたい。

Ⅰ面は西端（現道路境）の近代以降の石垣で中世生活面が破壊され、上面も耕作で削平を受けていたが、破砕した泥岩や凝灰質砂岩で整地された生活面と、それに伴う掘立柱建物・土壙・ピットなどの遺構が検出された。残念ながら、掘立柱建物は全体規模を確認できなかったが、14世紀代に治まる生活面に比定したい。Ⅱ面では井戸2基と土壙・ピットが検出された。これに伴うかわらけ皿は14世紀前半頃の所産と考えられる。Ⅲ面は、ローム状の土と土丹粒をつき固めた堅牢な地業を施す生活面である。土壙・石敷遺構・ピットなどの遺構を検出した。Ⅳ面は柱穴列・土壙・かわらけ溜り遺構を検出した。出土遺物から、この面の時期は概ね13世紀末～14世紀前葉ではないかと思われる。さらに北壁トレンチの調査からⅣ面構築土の以下は無遺物層になる為、中世地山と考えられる。昨年度報告した地点と同様、この地域は途切れなく地業が繰り返されて生活が営まれていた様子が窺えるのである。

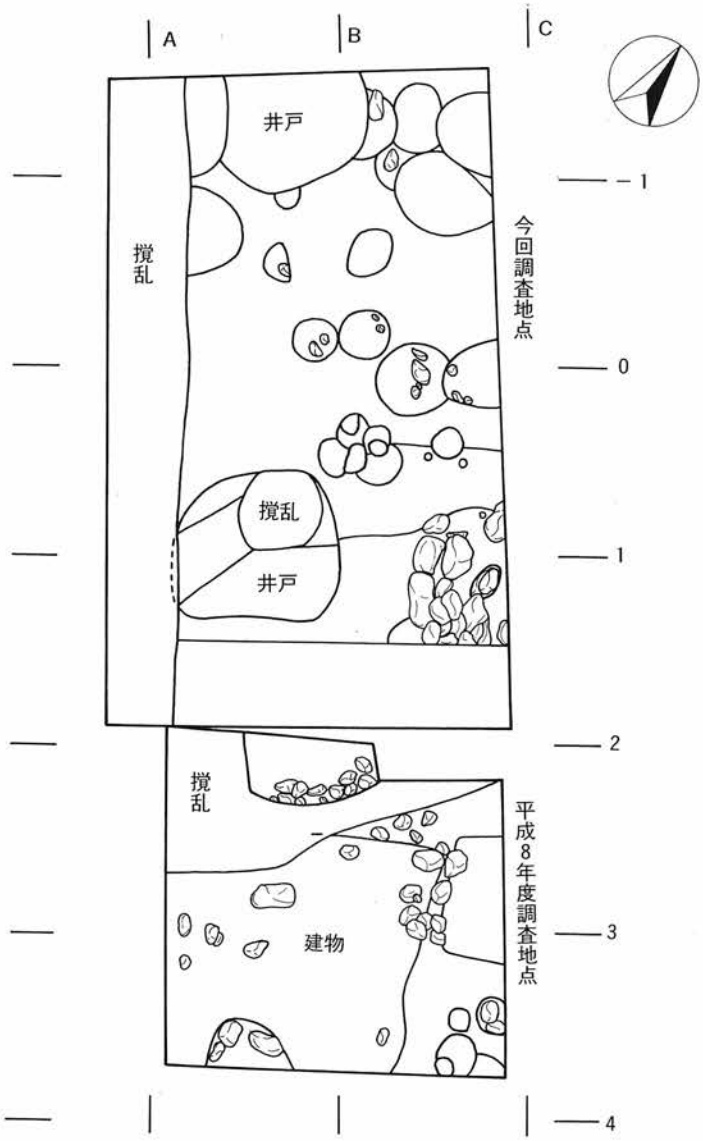
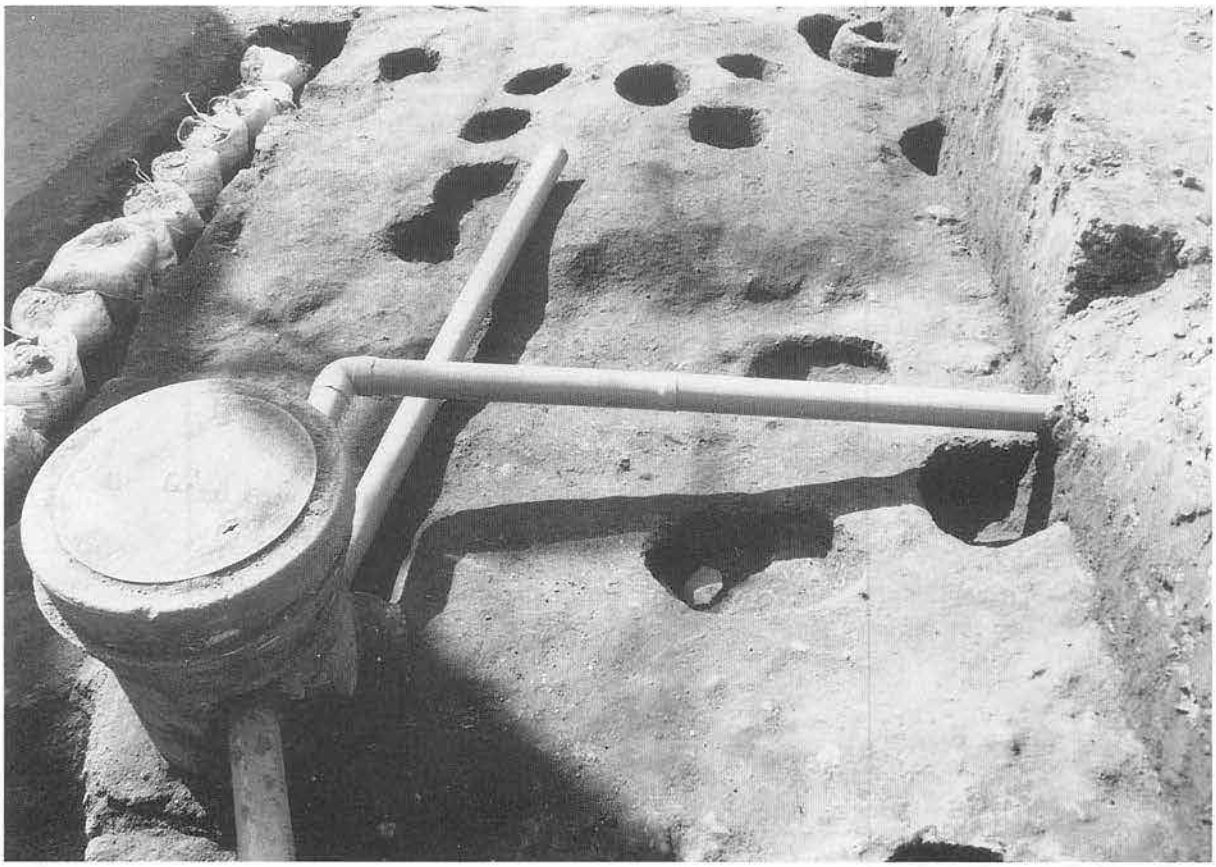


図20　遺構関係図

本調査地点の周辺には、梶原景時や大江広元の屋敷跡という伝承の残る地があり、その真偽は措くとしても、御家人クラスの武士が居館を構えていたであろうことは疑いない。鎌倉幕府滅亡後も周辺には武士が居館を構えていたようで、泉水橋の北側一帯には「公方屋敷」の字が残り、鎌倉公方の屋敷跡と考えられている。当然ながらその周辺には公方に仕える武士達の居館があったことが推定され、本調査地点で発見された繰り返し施された地業面や遺構群は、そうした屋敷の一部を予想させるものといえよう。

写 真 図 版

▲a．表土掘削風景

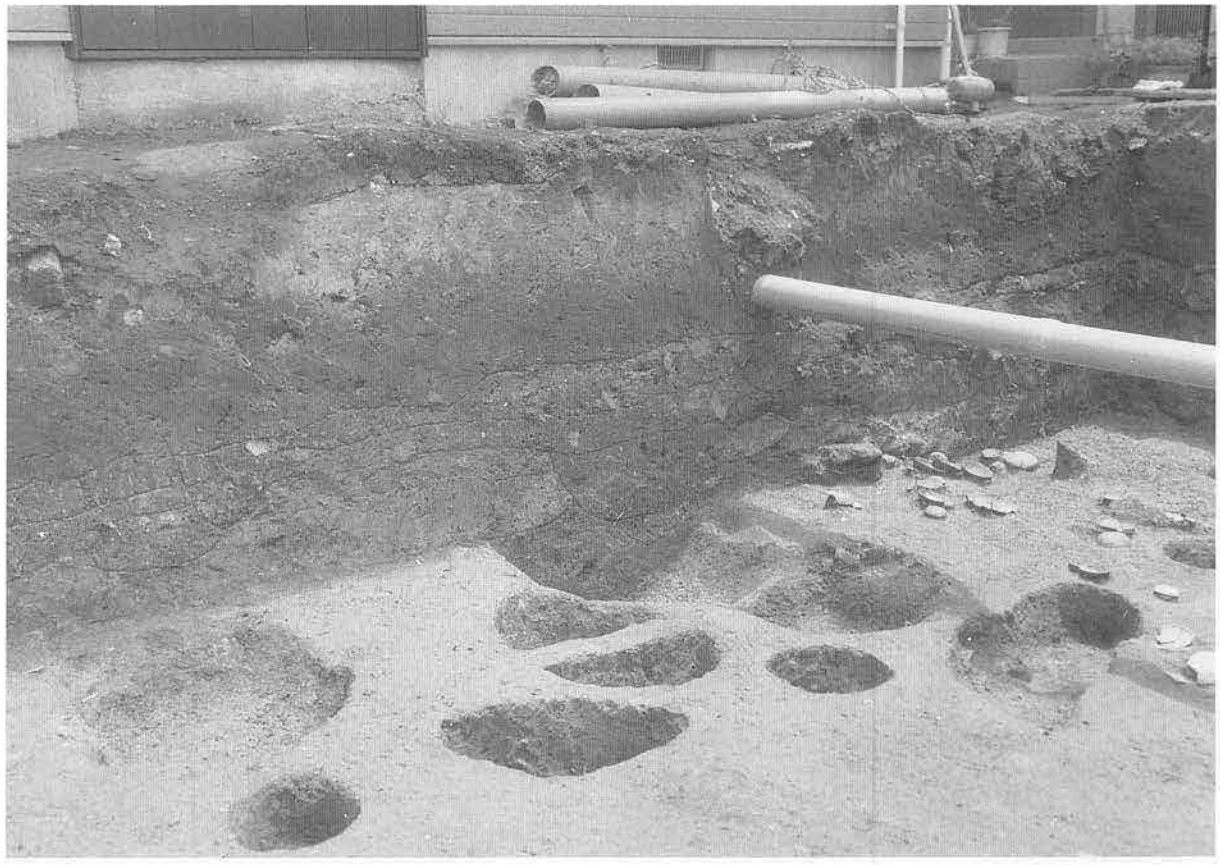


▲b．Ⅰ面全景

図版 2

▲a．II面全景

▲b．III面全景



▲a．Ⅳ面全景

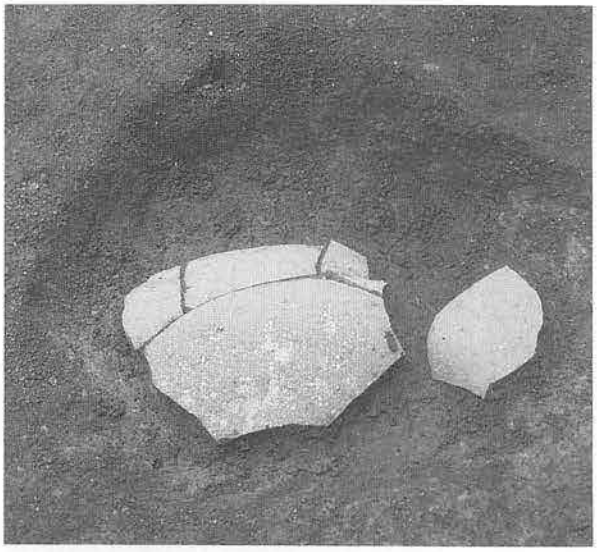
▲b．調査区東壁土層

図版 4

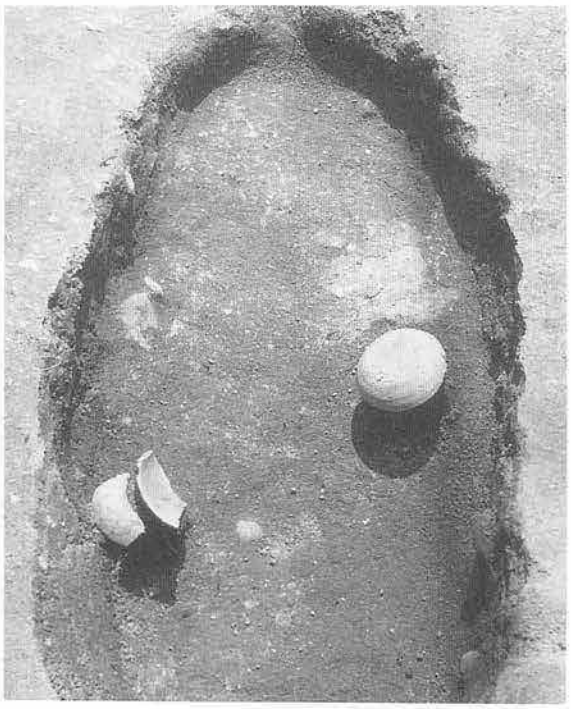
▲a．Ⅰ面P 1

▲b．Ⅰ面天目茶碗出土状況

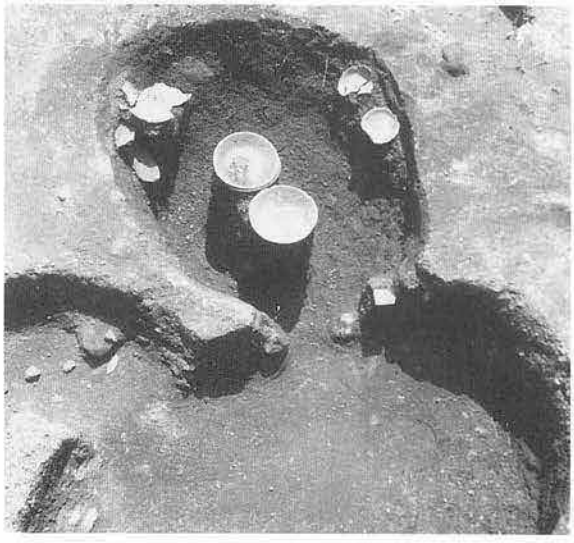
▼c．Ⅱ面土壙 2



▼d．Ⅱ面土壙 8



▼e．Ⅱ面土壙 9

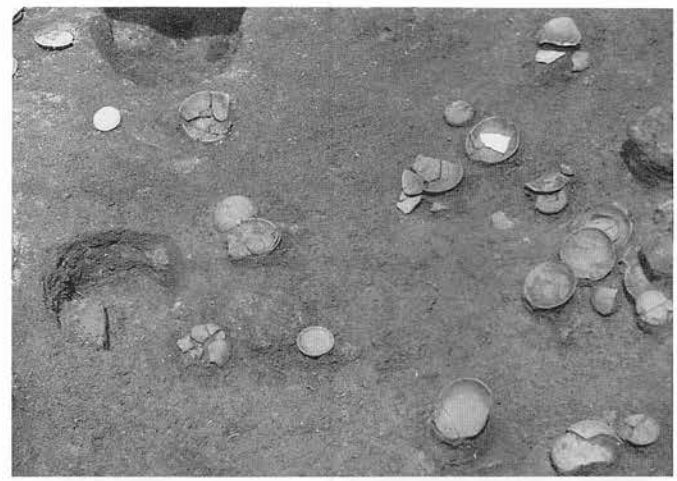


▶f．Ⅱ面土壙 4

▲a．Ⅲ面石敷遺構

▲b．Ⅲ面土壙 5

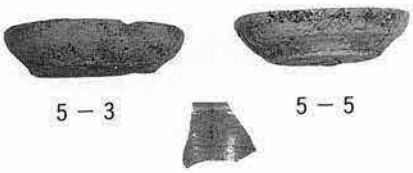
▲c．Ⅳ面土壙 2



▲d．Ⅳ面かわらけ溜り

◀e．調査区南壁

図版 6



5－3　5－5　5－6

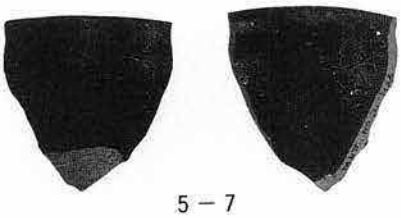
8－3

8－4

8－7

8－5　8－6

▲II面上



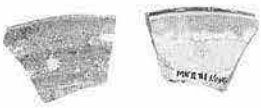
5－7

5－8　5－9　5－10

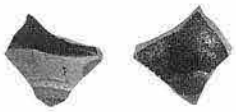
▲I面上

9－3

9－4



9－5



9－6

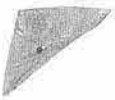
9－7

▲II面井戸1

10－1

10－3

10－4

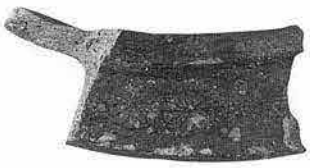


10－10

10－11

10－7

10－12



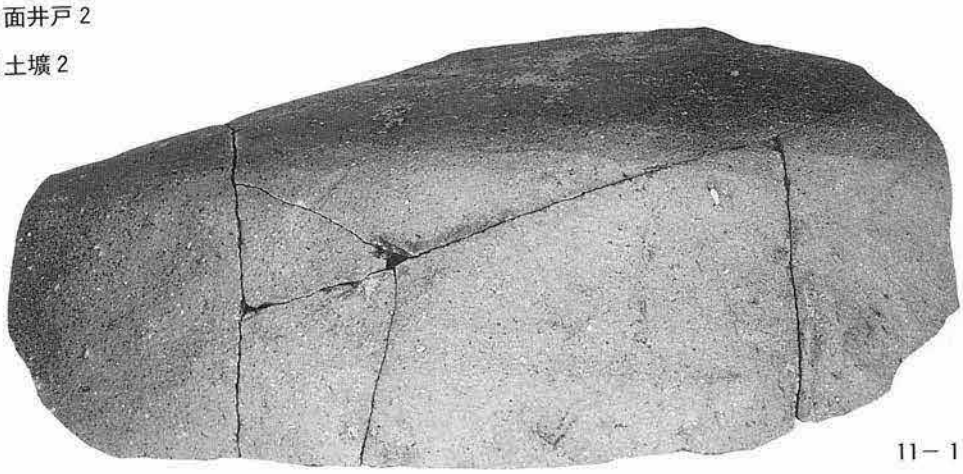
10－13

10－8

10－9

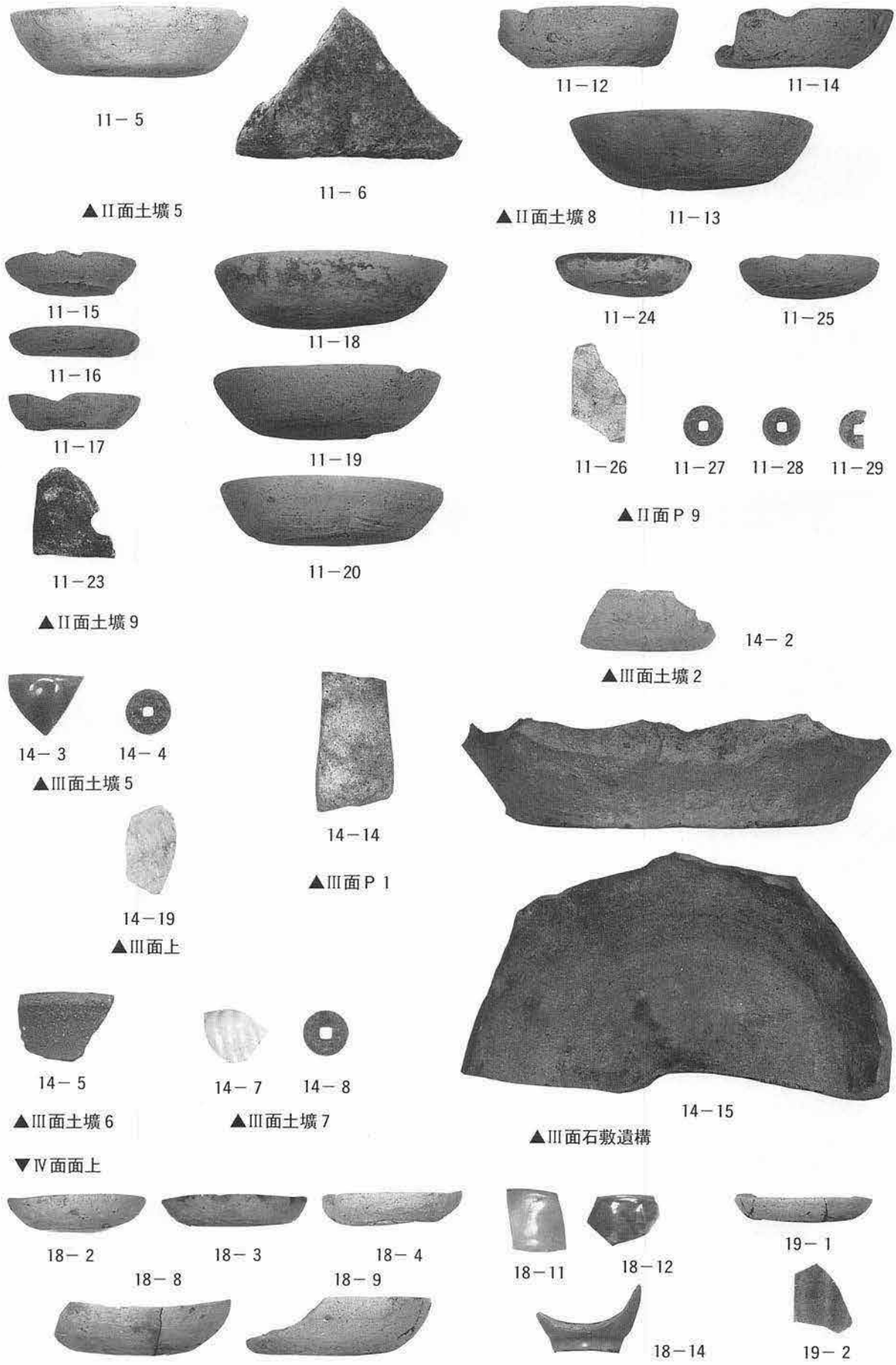
▲II面井戸2

▼II土壙2



11－1

出土遺物（1）


11－5
11－6
▲II面土壙 5
11－12
11－14
11－13
▲II面土壙 8
11－15
11－16
11－17
11－18
11－19
11－20
11－23
▲II面土壙 9
11－24
11－25
11－26
11－27
11－28
11－29
▲II面 P 9
14－2
▲III面土壙 2
14－3
14－4
▲III面土壙 5
14－14
▲III面 P 1
14－19
▲III面上
14－15
▲III面石敷遺構
14－5
▲III面土壙 6
14－7
14－8
▲III面土壙 7
▼IV面面上
18－2
18－3
18－4
18－8
18－9
18－11
18－12
18－14
19－1
19－2

出土遺物（2）

図版8

19－5

19－6

19－7

19－8

19－13

19－15

19－16

19－17

19－18

19－19

19－21

19－23

19－25

19－26

19－28

19－29

19－31

▲Ⅳ面かわらけ溜り

19－33

19－34

19－37

▲Ⅳ面サブトレンチ

19－38

▲表採

出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
せきぜんいせき 積善遺跡 (No.440)	かながわけんかまくらしじゅうにそあざせきぜん 神奈川県鎌倉市十二所字積善952番8地点	204	No.440	35° 18′ 56″	139° 34′ 49″	19970508 ～ 19970612	29.3	個人専用住宅の車庫造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
積善遺跡	中世都市遺跡	鎌倉時代後期 ～南北朝時代	・掘立柱建物 ・土壙 ・井戸 ・柱穴列 ・柱穴 ・かわらけ溜り	・かわらけ ・常滑窯製品 ・瀬戸窯製品 ・青磁 ・白磁 ・土器質製品 ・瓦質製品 ・石製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告　15

平成10年度発掘調査報告（第１分冊）

発　行　日　　平成11年３月

編集・発行　　鎌倉市教育委員会

印　　刷　　（有）湘南グッド